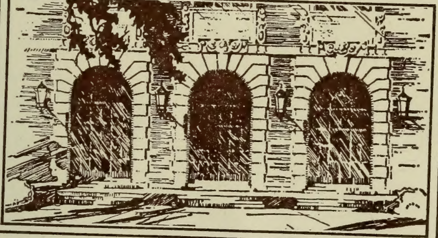
PL
700
.M41
no.16-18

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 071411786

LIBRARY OF THE
UNIVERSITY OF ILLINOIS
AT URBANA-CHAMPAIGN
PL
700
.M41
no.16-18



短篇小説 明治文庫

明治文庫第拾六編

くらぶ山　石橋忍月

百々逸釋義　石橋忍月

久文子　石橋忍月

紅花染　桐生愈庵

但馬行李　宇田川文海

書籍
漢書

PL
700
M41
no.16-18

短篇小説 明治文庫第十六編目次

◉くらぶ山……………………………一
◉百々逸釋義…………………………五五
◉人文子………………………………六二
◉紅花染………………………………九六
◉但馬行李附拾遺……………………一五五

以上

短編小説

明治文庫第十六編

◉くらぶ山

（第一）

石橋忍月

此場所での朝と云ふは世間での正午頃なり彼所の二階にも此方の格子にも下地ッ妓が稽古三味線に持たれて金切聲を振り立て潮來出嶋を温習るものあればわしが國さでを立つものあり其喧しき響きに穩かなる夢を醒されたるは格子戸の外に掛る御神燈に記名の本尊尾花屋小稻其人なり昨夜の無理酒まだ醒めぬにや渴をコップ一杯の冷水に癒し乍ら鼈甲羅宇の長烟管にて朱丹の烟艸盆を引寄せ二三服を喫したる後今迄柳の糸にしたる眼をやう／＼水晶の如く輝かさせたり……此罪障深き眼！其光で幾人を殺したる。下女のお里が挿繪のある點だけ主人に先ちて披閲し都新聞の枕元にあるを手に採りて一面二面にゝ目にも觸れず第三面の挿繪と其下の花柳通信の欄をチョッと覗かんとする折柄、姉さん、八百膳さんへお座敷。と格子戸の外より呼びしは箱屋の善助なり待合のお座敷なら隣近所に痛くない腹を探られ座敷忙がしくとも藝妓の見榮にならず去れば格子戸の内に這入て小聲にて大茂さんへお座敷などゝいふべきを故

意と格子戸の外より聲高く呼ぶも箱屋の氣轉、小稻さんと名を呼ばれずして姉さんと呼ばるゝも盆暮の外に日頃他妓に優りて心附を行渡らする効能なるべし。

ハイ有難う宜しう厶います。とお里に座敷を受させて床を出で房楊枝をつかひ乍らお里に湯を取らせ顏を洗ひ襟首を洗ひ髮を浸して鏡臺に向ひ其間の身仕舞凡そ半時間やがて箱屋の善助迎ひに來れば昨日三月の更衣せし小紋の重ねに繻珍の帶をキリヽッと結めて貰ひ月に時鳥を彫りたる純金のパチンに之を固め左褄を取りて燧のカチ〳〵に送られて表に出で輕く蓮歩を運ぶ風采天晴れ下谷一の小稻、花の中の花なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

餘寒いまだ去らねど梅信既に通ずイザ上野より龜井戸木下川に遠足せんとて瓢箪と折詰とを婆さん持ちにして上野のとある茶店まで來りたる二人の書生、ヲイ中村貴樣は實にひどいぜ三十四五の女に逢うても婆さんと認定して乃公に荷を渡すなどは怪しからん、婆さんといふ者に定義がない以上は廣く解釋するが至當だ强ち腰が曲りて杖をついてゐるの計りを婆さんとは言はぬ。併し君の樣に年增盛りの女までも婆さんに組み入れてはひどい茲所迄は仕方がないが茲から先きは白髮の生てゐるのを以つて婆さんと定むるぞ、夫なら貴樣なぞは所謂若白髮があるから爺さんだ。言ふな〳〵白髮は白髮でも若といふ形容詞がある以上は同日に論ずることは出來ぬ、然らば紛議の因たらしめざる爲め鏡眼を掛けてゐるものを

以て婆さんと定めやう、夫なら貴樣などは眼鏡を掛けてゐるから爺さんだ。馬鹿言へ眼鏡は眼鏡でも近視眼鏡だから是は例外だ同日に論ぜることは出來ぬ。能く鸚鵡返へしを爲る男だと。互ひよくだらぬことを喋りながら惜しくッてもどうせ遣ねばならぬ白銅二枚の茶代を二倍にも使はんとて茶店の女に瓢箪を押付け酌を請求てゐる所に一人の藝妓箱屋に送られて八百膳に行く姿を見て、ヲイ〳〵小林古今無類絕美の梅が歩く。成る程枝ぶりと言ひ咲きぶりと言ひ何とも言へぬ斯んな梅は兎ても龜井戸に行ッても木下川に行ッても見ることは出來ない。ヲイ姉さんアノ梅は何といふ名だ。ホヽ彼は小稻さんでさアね。でさアねの語尾の一句に此名高い藝者を知らぬかとの嘲笑の意は慥に籠れり、ナニ小稻、彼が久河學士の一件で名高い小稻か。

（第　二）

何處か善い穴でもお出來なさいましたと見ねて此頃はきついお見限りですネ。と八百膳の女中お定といへる愛嬌者酌をしながらお客に言へば久河といへる年の頃二十七八の高品なる客一樂の上着に吉野織の下着を重ね濱縮大巾の帶をグル〳〵と卷つけ七子五ッ紋の黑羽織を羽織り故意と無骨を粧うて紺足袋を穿きたるも隱しきれぬ垢ヌケの粹は其裏白と容子能き口に無駄なきとにあらはれたり。善い穴が出來たなどゝまだ善い穴を拵らへる程の腕前はれ定さんから敎はらないつもりだ。何して〳〵妾しなどは山出し其儘で御覽の通り皺は有ッても心は生娘、貴郞に寺入して少し修業しやうと思ッてゐ

る所ですもの。ソレ然ういふ口が承知せぬ幾程山出しだの生娘だのと言ッても能ある鷹は爭はれぬものだ。貴郎のお口にハ妾し一人では兎ても叶ひませんから今直に口掛てやりませう。誰妓を。誰妓をッて……誰妓に致しませうなど丶女中に手數をかけさせる野暮のれ客樣は玆處にはお在ではムいません。と立ち乍ら、ねエ宜いでせう。と顧眄に念を押せば客は笑ひながら何うだかと口でシラを言ひつゝ承知々々何分よろしくとの意味を輕く動がしたる下頤に答へさせたり。

お主婦さん有難う、昨晩も有難う、皆さん有難うとかゝる弱い稼業する身の何方へも氣兼多く帳場の右にも左にも愛素を振り蒔きながら入り來りしは小稻なり、其嬌聲微かに奥座敷に待佗たる人にも聞え、やッと今御來臨の樣子だ、どれ今の內に思ひ入ればくつ、、、いて置かうとチョッと箸に手をつける眞似して女中を笑はせるも流石は茶屋酒を飮みつけた粹なりやがて姉さん何方？、の聲を先だゝせながら廊下を引ずるお召の音サワ〳〵〳〵襖をしとやかに開き入口にて向ふ三ッ指、今日ハ。の一言、此點千兩の價値目も耳も覺るばかり、今迄淋しかりし座敷の光景急に春となれり。

貴郎誠に暫らくお定さん有難う。大變なお待兼ぼッちやんのだゝれを鎮撫るのに困りました。ヲヤ然うでしたか是でも大急ぎで駈附たのですヨ褒めて貰はなくちや割に合ひません。夫ぢや其御褒美に小稻ちやんとやら一杯上ませう。ハイ頂戴ヲヤお定さん憚りさま。銚子が皆な冷た樣ですね。と氣をきかせて女中は出で行けり。

跡は男女對坐女は烟管と煙艸入を帶の間より取出し一服吸ひつけて男に渡し、今日で四日逢ひませんでしたが從順しく宅に居ッたの。無論さ少し調査物が有ッたから。調査物とは何ですか。役所の用事さ。へエ然うですか役所のお調査物をするには米八さんやぽん太さんが手傳なくちやなりませんか。夫れ何の事だ。何の事ですか胸ゝ聞いて御覧なさい調査物にお忙しくッても伊豫紋（料理屋）に行ッたり敷島（待合）に行ッたりなさるお閑暇があれば結構ですネ。と不意に打たれし久河受太刀の摸様なり。
女中が座敷に在る間は他人がましき兩人が對坐になりて急に口調の變るも可笑し。

（第　三）

久河がいまだ學士とならざる以前金鈕に四角の大學帽子を戴きたる時分ハ足掛け二年同朋町松葉屋の抱ゑ米八といへる婀娜物に通ひつめ身分不相當の華美を帳り此土地の箱屋にも數わるお茶屋の女將にも女中にも幾十度となく頭を下げさせ朧夜にも後姿を見られて名を呼ばるゝまでになりぬ。
米八といへるは二十に滿たぬ抱ゑなれども智慧も分別も他に逸れたる久河……大學の講堂にありてはプロフエッソールのスクリバにもベルッにも久河の頭腦はいまだ講述せざるものを善く知るとて驚嘆されし秀才を手の中に丸め思入れ其鼻毛を長くさせけり。
年末にも盆にも請求られ無理の境遇から酷工面して米八を喜ばせたる久河高利貸に半年足らずの内に千圓餘りの借金を拵らゑ國元の親にも在京の朋友にも一方ならぬ迷惑を掛け今迄持ちし信用も品格も俄か

に地に墜しぬされバ今迄華美に遊びし久河も次第々々に光を失ひ即席に包んで投り出すべき祝義も茶屋待合に頼んで紙花をひねらせる樣になり遠出にも觀劇にも自ら進んで連れて行きし者が急に請求られても事に托して迯げねバならぬ仕末となり書いたもの一名愛素づかしとかいふものを持ッてくる茶屋待合の使にも留守をつかはねばならぬ不面目服粧ハ勿論顔色までも艶氣を失ひ昨日までピョコ〳〵叩頭の安賣せし箱屋にまでも途で逢うても顔を反面らるゝ境界とはなりけり。

取り込むだけは充分に取り込みたり畠に山吹色の菜種の花あればこそ蝴蝶も留まるもの花散れば最早玆處に用なしとて何時しか他園に飛び去るものなり。

世間の幾千百人に厭はれてもまさか此米八ばかりは見捨てまじ二度や三度は紙に包んだものをやらずとも又其樓の勘定を立引てゞも逢ひゞきの首尾は爲て呉るゝならんと自惚たる久河の思ひは實際とは表裏の空想なりけり。

或る日久河は米八を松兼（料理屋）に呼びてけふ此頃の心痛を半分分けて貰はんと思ひしに米八は流石に稼業柄の慧眼早くも之を見破り男に言ひ出す機會を與へざらん爲にや、チトお發しなさいョお茶屋で坐禪は夫婦喧嘩と同じく犬も喰ひませぬとか、猪口の溜置きはぼうふらが孵生ます。などゝサモ冷笑する如き口氣で喋べるかと思へば又三味を彈きはじめ久河には面白くもない百々逸を獨り面白さうに歌ひ小一時間もたつか經過ぬ中にお約束がありますゆゑにと斷りて座敷を貰ひ行けり此時の久河の口惜しさ

無念さ、此阿魔奴此間までの我親切モウ忘れたか三年の恩は三日で忘れるものを猫とは聞きしかどされど……されど……是は餘りの現金なり「是と定まりやモウ其外の花に心を寄せぬ蝶」妾しの心意氣はとて歌うて聞かせし此歌エヽツ覺えてゐる程猶は腹が立つ迂奴〳〵。

血相かへて銚子をメチャ〳〵に喇叭呑み足音荒く階子段を踏み鳴らして履物出せ履物を。ヲヤモウお歸りで厶いますか夫では是をお序に何卒。と差出すを見れば、二三度分を〆たる勘定書なり、エヽツ貴樣までが人を馬鹿にする失……失敬な。と女中の横面に五圓札二枚を叩きつけ、是では三圓餘りのおツり。といふを勝手にしあがれと叱り飛ばし表に飛出すや否我宿に歸りて机の前にピタリと座りぬ。

（第　四）

昨晩は誠に有難う厶いましたと受取と剰餘とを持ツて來りたるは松兼の女中お銀なり久河が昨晩心を惡くして大不機嫌にて立歸りしことを知れるものゆゑ種々に容子や世辭を振蒔き、終りに米八さんとお湯で逢ひましたら呉々も昨晩のお詫を申してとのことで厶りました何れ其内謝罪に上るつもりだけれども宜しく申してと申されました米八さんハ昨晩は眞正に何とかの懇親會で松源に七時からのお約束がありましたのを夫を貴郞に顏出し爲たので餘程時間が遲れたとて彼方では叱言言ハれ貴郞には腹を立てられたとてサン〴〵にこぼして居りました。と頼まれもせぬ傳言を屆けて米八を辯護せしも正月に米八から貰ひし護謨櫛への義理なるべし。

昨晩の不機嫌に餘憤今朝までもいまだ去らざりし久河お銀の世辭にツイ乘せられて全く心溶け又も自惚の久河とはなりけり。

自惚は又も其晩久河の足をして下谷に向はしめたり例も行きつけし待合は何方も八方塞がりにて首尾目出度からずとて餘程以前に人に誘はれて一二度行きしことある池之端初音亭に這入ぬ。

七夕さんぢやあるまいし一年に一度とはひどいお見限りですネーの女將の一言に心を落付け二階の奥坐敷に請ぜられて米八を掛けにやりぬ使者の返答甚だ目出度からず、米八さんは遠出で厶いますとの口上にハテ然うした譯ではなかッたがと思へども詮方なければ梅子、豆太といへる半玉を呼びにやり色氣ヌキの遊びにくだらぬ散財をなしぬ。

米八は何處へ行ッたと兩人の半玉に聞けば、米八さんは今日お客と箱根へ湯治に行かれました而かも丸髷に結んで。ナニ箱根に……丸髷で。と急き込む久河の心を知らぬ無心の雛妓、ハイ丸髷で恰度御夫婦の樣で厶いました。お客は誰だ。と問へば、夫は存じませぬ。と知ッてシラをきるは斯る土地の習慣なり、ナニ知らぬことが有るものかと色々に手段をめぐらして問ひ漸々今川橋邊の某金滿家の若主人で……好男子で……米八の情人といふことだけを聞き出したり。

重々の失敗に久河此夜は飮んでも〳〵醉はず御緩くりなされと此家の女將に言はれたれど、膝吉と脛吉が待ッてゐる早く歸ッて早く寢て箱根の夢でも見ませう。と罪なき人にまで八ッ當りを言ひて宿に歸り

ぬ。

宿に歸りて見れば机の上に一封の手紙あり手蹟は一目に夫と覺えの國元の母上より寄せ玉ひしものなり久河は繰返し〳〵幾度となく讀み下し何に感じたやらハラ〳〵と涙を流して手紙を押し戴きぬ。

ア、我誤れりまだ親の脛をかぢり一人前の人間とならざる久河滋二郎藝妓遊びなどとは生意氣なり道理の前には斯程までに馬鹿には非らざりし我も見事米八の仇色に迷うて天下一の愚頓者となりけり借金を拵らひ信用を墜し男の品位を下げしも皆此滋二郎の不明からなり不明の滋二郎、ヨシ明日からとは言はず直只今から眼を覺さんとて一念茲に到れば頓に胸中の俗塵を洗ひし如く心清々として曇りなく窓に入る月一輪今宵に限りて其光一層明かなり。

* * * * * * * *

此日より久河大學一の強勉者となり茶屋遊び夢にも思ひ出さず晝は講堂に入りてプロフエツソールの講義に耳を傾け夜は圖書館に入りて學理考窮に餘念なく其翌年の初めに優等の好成績を以て成業しめで度醫學士の學位を受けぬ。

（第　五）

今迄は個中の遊び頓と打忘れたる久河徒然のあまり上野に散歩した歸り途不斗珍らしくも茶屋酒飲みたくなり或る日伊豫紋に行きぬ一年足らず前までは三日にあげず顔見せしものが久しぶりにて來りしわけ

なれば舊知の女中飛んで出で迎へ珍客樣の御光來道理で昨夜は鳳凰の影がさした夢を見ました。とまだ腰を据えぬ内から先登第一の「嬉しがらせ」を射掛られ早既に積日の鬱を晴らした樣なり同じく正宗でも白鶴でも飲む所で飲ませる人が飲ませなければ飲んだやうに非ずとは强ち通がりやの一家言にあらず。鳳凰の夢を見たから御覽の通り色の黑い鴉客が來た夢反對とはよく言ッたものだ。などゝ卑下を被仰ッても無沙汰の罪はれ許し申すことは出來ません今迄何處へ河岸を替へて誰を側に置て何う云ふ工合に惚れさせて何んな口說が有ッて何んな樂みを被成ッてゐらッしやッたか懺悔は萬の罪を消しますゆゑ此れ芳の前でチャント一々白狀なさい。ハイ〱恐れ乍ら御臺樣お芳の方に包まず有体を申上げまする今迄鎌倉河岸に河岸を替へまして車屋を致し雨の日も雪の夜も梶に手を痛めて家事に奔走致して居りました。ホヽ夫は然うと誰妓かれ跡かられはしよりで淸姫といふ寸方なんですか。何處に二階のお客にか。と故意とトボケて問へば、イヽエ貴郎の處にさ。私の所に……是は亦思ひも寄らぬことおはしよりで跡からお出でハイ參りますなど〻約束する程の馴染があれば久河も他に馬鹿にはされぬけれども。貴郎が人に馬鹿にされるやうな風ですか貴郎に焦がるゝ人はあッても馬鹿にする人は此土地にはないはづ。と言ふ女中のお芳も久河が米八と最早關係を斷ちしことを人の噂にて知れるものゆゑ例もの如く「ネエい〻でせう」の一言で呼びにやることも出來ざれば、貴郎誰妓に致しませう。

久河も散步の歸り晚餐かた〴〵茲に來りしわけなれば誰妓も呼ばずに立歸るつもりなりしも　勢ひ茲に到

れば此儘に歸り難く暫時思案の後、小稻を。と名指すればお芳は、尾花屋の小稻ちやんを……。と言ひながら笑ひつゝソット久河の顔を覗き、貴郎のお目は流石に。ナニ私しの目が大きくッて成田屋に似てゐるといふのか。イヽエ然うでは厶いません仝じ藝者でも幕の内もあれば二段目もあり三段目もありますが相撲の樣に番附がないから一目では分りません流石貴郎はお目が利てゐらッしやるといふのです。ハヽヽヽ夫では明日より藝妓鑑定所の札でも揭げようか。

（第　六）

尾花屋小稻とは如何なる藝妓ぞ久河滋二郎は何故に衆妓中より此妓を見立てゝ玆に招きしぞ語れ聞かん、聞け語らん。

同じ祝義を貰ひ同じ玉の附く藝妓なれども其間に自ら上中下の等位ありて無形の番附は其土地の衆評に記されゐるなり去る好事家の品評ょ

第一、硬骨にして往來藝者達摩藝者ならざること
第二、技藝達者にして坐持ち確かに十人や廿人のお客は一人で切り廻はす位の腕あること
第三、衣服、頭の物、持物等の立派にして怪しきもののなきこと
第四、人徳あること即ち茶屋にも朋輩にも客にも受の善きこと
第五、お座敷の頻繁にしてお茶を挽かざること所謂全盛の流行ッ子たること

第六、自前なること及び容種善きこと

此六條件を備ふる者は上の藝者なり猶此上に容貌と風俗、心と意氣地の四拍子揃へば上の上の申分なき藝者なりといひしは穿てる説なり。

小稻は右の六條件を備へたる上に四拍子揃ひたる此土地の名代藝者全盛拍子中年からの成上りものとハ違ひまだ肩上のある時分よりサン〴〵に喉も腕も氣性も磨き揚たる潔純、チヤキ〴〵の江戸ッ子にもヲイドンの薩摩隼人にも小稻々々と名を知られ七年以來不景氣にも霜枯にも露めげぬ今二十四の女盛りの大立者なり。

我、久河滋二郎、米八如き碌でもなき藝妓に迷ひサン〴〵面目玉を蹈み潰されたり再び此土地に足を入るゝからは誓ッて米八に見劣る女は呼ぶまじ相手にせまじ此土地に三味持ッて象牙の撥をお座敷に振ふもの數寄屋町同朋町の兩町を併せて二百餘人中に就て米八に見優る女ハアレかコレか。

小金は容貌美しけれど腕ハ遙かに米八に及ばず勝次は評判高けれども鑑札外の娼法安賣りなれば嬉しからず小春は風俗もよく意氣地もあるとのことなれども役者狂ひが玉に疵なり政子は愛嬌餘りあれども足も手もなき無藝無神經の土人形にて面白からず小千代は藝も座も面白けれども品格なくして達摩の評が嫌なり、草は數々多けれども摘菜にするはサテも少なし。

只一妓……尾花屋小稻！

我曾て或る懇親會の大一座にて彼を見たることあり八面玲瓏三芳野の櫻の如くありき。

又曾て彼を眞面目の小集宴にて見たることあり清絶秀絶月ヶ瀬の梅の花の如く幽谷の蘭の如くありき。

又彼が「園八」を唄ふを聞けり喬木に囀づる鶯の如くありき衆妓皆な手を拱して傾聽せり。

今日招くべきは彼の外にあるなし又將來招くべきもの彼の外にあるべきなし。

久河は此の如き思ひにて小稲を掛けたり三たび呼んでやうやく一度聘に應ずるい流行ッ子の常なり女中の返答は「お生憎さま」が冒頭に附きたり。

一時間や二時間なら待ッてゐるゆゑ貰ゑるものなら貰ッて來てもらひたし其間淋しきゆゑ誰奴でも繋ぎに……と吩附て再び呼びにつかはしたり。

小冬といへる繋ぎを呼んで之を相手に酌み顔色ホンノリ赤くなりし頃目的の御本尊小稲は此席に入り來れり。

チャン〳〵可愛埒を浮きたつやのお座附濟んで一座の稍崩れかゝる時は是れ多く笑はず多く巧言令色せざる小稲が最も其價値を現はすの時、此時の興味は「デモ藝者」十人呼んだよりも遙かに優れり。

久河は習慣法に定むる祝儀を二倍多く包んで兩妓の前に出せり「藝」はなくッて「者」バかりの小冬も二座敷分のこぼれ幸に預かりしも小稲のれ蔭なり。

面白くおかしく靜かにをとなしく騒ぎたる後久河は、兩妓のお蔭で七十五日生き延びたりイザ花を後に

して歸らん名殘は何時までも盡きずと容子をいゝ乍ら玄關に出で手車に乘れば、小稻は帽子を手渡しながら、眞直にお歸り遊ばせ御家來さん曲れと被仰ッても曲ッては行ませんよ。と久河の脊中に負せたる一言、眞綿の如く輕く亦た黃金の如く重し。

《第　七》

さても其後久河滋二郞は烏が啼く日も啼かぬ日も富士が見える日も見えぬ日も小稻に通ひ詰め「我戀はくらぶの山の櫻花間なく散るとも數はまさらじ」の實意を見せければ流石に用心堅固の小稻も小町ならねば百夜の實意に絆されて遂に離れがたき交情とはなりけり。

是で出來ることなら幾度でも出すべけれど女將賴む是非に小稻をと客が親指と人指で輪を作りたるものを見せなから賴めば其客が如何に身分あり地位ある長者でも大盡でも、小稻さんはとても駄目で厶いますと何處の待合の女將にも頭を振らせし小稻其人を靡かせたる久河は適れの功名、果報目出たき男といふべし。

染み易き色は褪め易し染むに難き色一旦染めば容易に褪むるものに非ず小稻と久河との交情浮氣や商賣を離れて根元より深く結ばりたることなれば尋常の噓から出た誠の戀と比ぶべくもあらぞ

此頃ハアノ小稻さんが久河さんと。然うですッてネ私しも聞いて吃驚しました。と客を待つ間のお茶屋の溜り乃至は湯屋の柘榴口にて寄ると觸ると人々が兩人の噂、手に持ッて居る魚を鳶に攫ハれて知らぬ

程のうッかり者迄も此交情は知らざるものは無き程になりぬ。
引手数多の小稲、従來に黄金を山に積んでも此妓の爲めなら惜くなしとて直接間接に言ひ寄る客に遇ひしことも多かりしに何故に夫れには従はでホヤ〳〵の新學士久河に従がひしぞ。
戀ふるは戀ふるがゆゑに戀ふるなり法律を解釋するが如く算盤珠を彈くが如く理窟ばかりで測度すべきにあらずされど久河が小稲の意中の人となりしは第一は久河が熱心に小稲に實意を表はして他意なかりしこと、第二は久河が名譽ある士にして風采擧動意氣小稲に摸範の投合たること第三は久河が秀才にして且つ無妻の青年たること言葉を替へて云へば小稲は未來に久河の妻となるべき希望ありて年齢も相應しきことの三點にあるべし小稲は太く世の妾若くは圍者を嫌へり如何に榮耀富貴に一生を暮すことを得るも妾となりて安樂を得るは寧ろ本妻となりて貧に安んずるに如かずと思へりされば今迄親切に言ひ寄る人あるも皆な自己より二十三十年の多き人にて其人に従へば一生妾といふ日蔭の身にて生活し廣い世界を肩身狭く渡らねばならず希望もなく見止もなき仇戀は小稲が理想の戀にあらざりしなり。
小稲は久河に従ふまでには愚痴のやうなれど『おらきらむ』も引て見たり久河が水性か火性かも繰て見て而して我性に照し合せても見たり久河が九紫か八白か七赤かを撿べて見たり又夫にも飽き足らで傳通院の卜筮小島にも行き京橋の人相見本國堂にも行きて今戀せんとする男と戀しても善きや否やもしても其戀は末遂げらるゝべきや否やも聞ゝ質したり去れど此等の撿査此等の豫言は七八分は凶の方なりき。

去れど戀しき男は誰が何と言ッても矢張り戀しき男なり前兆は概ね目出たからざれども小稻は何時となく此人可愛と思染めし思ひハ思ひ斷ること出來ず、斯る時には得て勝手の理屈も付くものなり。卜筮や人相見は小供だましのもの信ずるに足らず誰やらが行方知れぬ畝傍艦は一年の後には屹度知れると占ッたが四五年の今の後までも知れぬが論より證據合性の惡いといふも馬鹿げたことあり交情の和合せぬとするとハ互ひの心にあることなり横町の薪屋の源平さんは火性で其女房が水性なれど連れ添うて二十五年家内波風なく三人の子供も皆な無病息才で目片にもあらず跛でもなし今年は銀婚式を行うて親類縁者に赤飯を配るとか言ッてゐる、アヽ斯程に愚痴にはあらざりし此小稻つまらぬ事に暇を潰し心を勞したり。

斯の如くにして小稻と久河は斷ッても斷れぬ仲とはなりけり。

小春治兵衛、夕霧伊左衛門、お染久松乃至は三勝半七といふが鴛鴦の離れぬ唱呼名となりて人口に膾炙するが如く小稻久河の名は此土地にて殆んど一ッの名の如く呼び做され小稻と云へば久河、久河と言へバ小稻、其通用ハ影に形、梅に鶯、紅葉に鹿の如くありき。

《第　八》

斯る土地の湯屋ハあらゆる出來事の通信局なり電信局なり會議所なり秘密の發見所なり能呂氣の交換場なり昨夜は松源で誰々と共に去るやんごとなき馬車のお客樣に呼ばれしこと、大茂にて辯護士の秋山さ

んと代議士の冬野さんに逢ひしこと、何樓で出た誰さんは垢ヌケのして氣が附て粋なれ方、誰さんは色が黒くッて無意氣な風なれども厭味のないお方、誰さんはイヤに氣取ッてゐて香水臭いお方、誰さんは喉は悪いがカッポレと紀伊の國が十八番なること、乃至は勤めにくいれ座敷で無理酒を飲ませられしと、甲屋の誰妓は此頃新色が出來たこと、乙屋の誰妓はとう〳〵弗箱旦那を役者狂ひで失敗たこと、何某さんは誰妓を摘み喰ひして誰妓にちよかついたゆへ、早晩レコに知れたら一悶着起るだらうといふこと、夫から何處の髪結は上手で何處の小間物屋には珍らしいものがあッて明治座の劇場見に昨日行ッて左團次の睨み工合が斯うで米藏の泣く所が如彼であッたといふことまで總て分る至極重寶の所あり若し茶人の速記者あッて日に〳〵一々之を筆記したらば一部の花柳事情史出來るなるべしお客が時々藝妓や女中によもや誰も知るまいと思ふことまでも素拔かれて不意擊さるゝは種の出所は大方は玆所なり

小稲は或る日湯に行きけるに梅ケ枝家の小三――一時は小稲の向ふを張りて全盛を爭ひ猜忌の餘り無いことまでも流言して小稲を讒毀けんとしたるが源因で互ひの仲餘り面白からざる小三、先に在りて何時になく愛素よく桶に幾杯の岡湯を酌んで呉れるゆゑ此方も默ッてハ居られず相當の返しをすれば夫を機會に小三は色々の話しを仕掛はじめたり小稲は平生流石にたしなみ善く斯る場所にては他妓の如く何事も喋べらざる性質なればうるさしと思ひながらも受け應ゑなし居りけるに小三は聲をひそめて、小稲ちやんれ前知ッてゐるの。何を。何をッて久の字と米の字と二三日前伊豫紋や敷島で浮かれてゐることを

サ。と言ひながらソツト小稻の氣色を伺へば此方は心にハツと思へども露驚きたる氣色も見せず火事は川向ふといふ風にて糠袋の白汁を絞りながら、然うですか夫なことチラリと聞かぬでもなけれどアノお方の十八番ですから。と初めて聞きたることをサモ前から知ッてゞもゐるやうに泰然たり

小三の言葉を聞きたる時の小稻の胸の裡は如何ならん言ッて聞かせる人は兼てあまり仲善からざる小三なれば迂濶には信用がたし況してアノお方に限りて此小稻の顏を踏み潰すやうなことをする不實の男にあらず去れど燒木杭には火が附きやすいといふ諺もあればまさか……と思へど若しや……疑がへば暗夜に月も見雪中に時鳥も聞くなり

小三が湯より上りたる後引きちがへて姉さんと頭を下げし藝妓はまだ右左分らぬ時より小稻が引立てやり今では立派の顏となりたる妹分の濱子なり、濱子は我を忘れて湯も酌んでやりシヤボン箱も糠袋も片附てやりながら、姉さん〳〵。と耳に口寄せて又も久河と米八がことをソツト告げ知らせければよもやと思ひしことも今は空頼めとなり小稻の胸の中は口惜しさ遣る方なく、實に秋の空と共に賴み難きは男心なり若しも相手の米八がモウ少し顏も利き腕も利き名も利く藝者ならば隨分向ふを張りて意氣地を比べてもやらんなれど二ッ三ッ年下の「デモ藝者」を相手にして男を爭ふたと謂はれては此小稻の恥なりヨシ〳〵今日にもアノお方に逢ふたらば此小稻が爲すべき仔細あり——

成算既に胸に成れば心の騷ぎも穩かに喜怒少しも色に現れず經驗はまだ淺けれど此道には敏悄と言はる

ゝ濱子も小稻の泰然たる氣色を見て不思議と小首を傾げたり

《第　九》

小稻は湯屋より家に歸りて鏡臺に向ひし時下女のれ里は所謂長屋會議所の井戸端より飛んで歸り姉さん〳〵久河さんは憎らしくッて〳〵……ヱヽッ他人の私しまでが……腹……腹が立つ貴女は口惜しくはありませんか。騷々しいれ里何だよ。

れ里は井戸端にて戸を建てられぬものより聞き取りし一伍一什を今湯から歸り來て粉粧する主人に憤然となりて物語る、ですから久河さんが若し今度お光來なすッたら從令姉さんが何と被仰らうとも此里が格子を閉めてお入れ申すことでは厶りません燒木杭には火が附き易いとは申し乍ら姉さんのやうなれ方を手に入れながら久河さんは何が不足で「者」ばかりのヘボ米八に浮氣なさる屹度今に罸が當ります。と言へば小稻は、米八さんに限らず他のことを「者」ばかりだのヘボだのと苟めにも惡口言はぬもの。とたしなむればお里は、ヘボですからヘボと申しました久河さんは足にでもお目かあるかして優劣がお分りにならないと見ゆる姉さんを抱え藝者の米八と一緒に比較べられて堪るものですか名ばかり米八でも實はアンな藝者は先祖梅暦の面汚しです。お里ッてば然う他のことを難すものでないお前が一量見で言ふことでも世間では然うは思はぬ必らず主人の私しが言ひ聞せるとしか認さぬ私しの爲にお前までが腹を立てゝ呉れるは嬉しいけれど……。ヱヽッ腹を立てますとも眞から腹が立ちます第一、久河さんも

……。モウお止し。でも……。お止しといふに假令アノお方が今日明日にもお光來なすッてもお前くだらぬことを喋べッてはいけないよ此事はまだ誰も知らぬ積りで默ッてお在で。

口ではお里の過言をたしなめても心の裡では自惚ならぬ小稻も爭でか米八を我より優りし藝者と思はん去ど米八も同朋町の見番での札數を見れば屈指の流行ッ子お里が難す程の藝者にあらず。

我小稻、年下の米八に男を取られたりとありては今迄磨き鍜ひし名と腕とに對して申譯なし何時もお座敷では百々逸や甚句でお茶を濁し書生や田舍議員しか喜ばせることを知らぬ晝夜帶藝者に敗を取りたとありては此小稻の名折なり――湯屋で小三に此事を聞きし時、アノお方は夫樣なれ方ではありませぬ此小稻が附てゐる中は決して浮氣はさせませぬと言い返してやりたかりしも心にもしやと思ふ弱點あれば夫も得言はず――

* * * * * * * *

此翌日の晝小稻は八百膳に呼ばれて久河に逢ふたり（即ち第一回第二回にある通りなり第三回より是迄は其以前のことを叙たるものなりと言はぬでもよきことなれども……）胸に山ほどの恨みある小稻一ッ二ッの矢を放ちて窮所を射れば調査物で忙がしくッて無沙汰をしたと初めに言ひし久河益々死地に陷り疑はれの種を增し防禦頗る困難なり

熱心に言開する久河に小稻は冷淡に「然うですか夫〳〵、成程夫は何處のお話しですか」抔茶かし半

分に受應へする故久河も少しおれ氣になり、お前私しを冷かすのか。イヽヱ何う致しまして勿体ない貴郎樣は寄席ガお好きだけあッて落語は上手と最前から感心して聞て居ります今のお話しの落は何ですか。と飽まで人を馬鹿にしたる詞に久河は、コレッお前は。と手を擧げて打たんとすれば小稻は、お止しなさい夫なことは米八さんのやうな年の若い藝者にすることです私くし見た樣なお目出たい老婆藝者は眼も耳も遠くて用をなしませんから貴郎が好きなことをおすッても分りませんのさ。コレわ〳〵甚い御逆鱗跡で譯を聞いて氣の毒な思ひをせぬがよい今日の天氣豫報には快晴、風なしと有ッたに扨も〳〵太く荒れることだ斯ういふ處に永居していては險呑、ドレ宅に歸らうか。宅とは松榮屋ですか。松榮屋とは夫な宅が茲近所に在りましたか私しの宅は數寄屋町廿五番地尾花屋といふ所より外にはありませんお序の時はチトお立寄りを。ヘンお門が違ひます。ナニお門が違つたら交番に行ッて邪推の深いやうで愛嬌があッて憎いやうで優しいやうで額が富士額で顏が卵形で色が寒梅色で眼が星のやうで笑靨に家藏をも呑む女子の所は何處でせうと聞けば直に分る天が下に二人はないから。と言ひながら立ちにかゝるを此方は今迄側面てゐた顏を向き直し、マアお待ちなさい貴郎に少々伺ひたいことがある。ナニ私しに。と立戻る男の手を女は力限りに引きおろし、エーッ此惡黨め。と烟管を膝に投げ附くれば久河は之を手に受けて、ハイ〳〵拜承りました。と烟艸を吸ひ附て小稻の前に差出しながら小聲にて、一服お喫よ私しの實を堅くつめたる此雲井。

《第　十》

頭と尾を取りて胴のみを見せらるれバ鯉も鮒と見ゆべし其方が只其だけの事を聞いて起源と結局を聞かぬとすれば成る程腹も立つべし去れど此久河滋二郎はまだ夫ほど頼りなき心には成らぬつもりなり鯛の鹽燒を前に持ちながら隣りの干鰯を摘み喰ひする意地穢き茶人はイザ知らず我に限りて左樣なことをなすべき譯なし我眼足に附てゐるでもなく脊中に附てゐるでもなく人並に鼻の左右に附てゐるゆゑ鉛か銀か雪か炭團か位の鑑別は出來るなり何が不足で銀を棄てゝ鉛を取るやうな愚を爲さうや

噂の起因は如斯いふ譯なり聞き玉へ、彼の米八一年前までは雨にも風にも通ひし我を貧乏書生と見下してか足が留まッても只の一度の見舞狀も遣さず途中で逢ふても目禮もせぬ程の無情者此頃何を思ふてか氣の利た化物は退去んでゐる時分に思ひ出したやうに「おいで〳〵」をきめ込み三四度の招き文を我に送りしも素より返事もせず顏をも出さず打棄置きたり然るに忘れもせぬ四日以前のことなりソレ其方と後朝を惜みて別れし歸り途斗らず松葉屋の裏を通り過ぎんとせしに勝手口より彼家の下女お三突起飛んで出で、久河さん遣らぬ通さぬと双手を廣げ天井がきな臭いといひたさうな鼻を胸先に突出しながら松王車返しの見得よろしくわッたり折から二階より、朝晩玆所を通られては通行稅を貰ねばならぬと聲掛けたるは米八なり、米八さんがチトお話しがあるさうですから鳥渡這入ッてお茶一服召上ッて下さいましとお三が無理に引ッ張る袖を振り除け、用のない所に立寄ッては是でも叱る人があると故意と憎ま

れを言ひながら廣小路に出で例もの車に乘ッて歸れり
其日の晩家に在りて役所の調査物をなし居しに伊豫紋よりとて車夫手紙を持ち來れり披き見ればソレ其方も知ッてゐる李蹊病院の伊東からの手紙なり「大至急御面談致したきことあり万障差置き此樓まで御來車あれ晩酌しながら貴意を得べし」との文言、直に行くべしと口上の返事をやり大至急の用事とは何事ならんと車を飛ばせて伊豫紋に行きしに我を呼びにやりしは學友伊東李蹊病院長にはあらで米八こと本名伊東およねなりけり

（第十一）

我を呼び我を待ちしは學友伊東と思ひきや米八なりけり是より後の物語は我口よりいひ難ければ作者の筆に言はせむ

久河滋二郎は、是は座敷が違ひたり女中を呼びて聞き質さんとて手を拍たんとすれば米八は、貴郎のお座敷は玆所でムいます間違ひではムりませぬ何を考へてお在でなさる跡で小稻さんの所に歸へして上げますからマア下にゐて下され。と久河を引留れば、伊東は何處にゐる。伊東さんは今に見えますマア一杯召し上れ。伊東は何處に居る。今見えますと言ふに、マア一ッ召し上れ。
米八、伊東が來てゐるといふは噓ではないか。勘忍して下され實は貴郎にお逢申したさゝアノ様な手紙を差上げて玆樓まで來てお貰ひ申した譯。夫は折角の思召有難けれど夫は一年以前の迷ふてゐた久河に

いふこと昔しなら此方にも恨みとかつらみとかをいふて人柄相應の愚痴や甚助を鳴すべき處なれども米八さんのやうな權式の高い娯前藝者は兎ても私し等のれ派には合はぬと諦らめて何事も水にサラリと流して了ッた今日此の頃言ふべき用もなければ言はるべき用もないはづ。とサン〴〵に厭味を言ふて坐りもせず其儘立たんとするを米八は一生懸命袖を引き止め、お腹の立つも御尤もなれども悪い所は幾重にもお詫を致します撲つなり叩くなり心まかせにした上で何事も勘忍して下され。勿体ないお前を撲ッたり叩いたりしたならば今川橋邊のれ方にどんなに怒られるかも知れぬ怒られるばかりなら兎も角暗撃が恐ければ歩くにもうッかり歩けぬ始末久河は甚い臆病者生命懸けの仕事は眞平御免況して堪忍することもなければ詫らるゝこともない。といひ乍ら袖をふり拂はんとするを女は縦令手が折れても離さぬといふ一心、エヽッ、一時間や半時間此處へお在でなすッたとて滿更罰も當りますまい此席のお酒でも毒が這入ッてゐる譯では厶りませぬ氣強にも時に寄ること。ナニ氣強いにも時に寄ると是れ可笑しい男は何時でも鼻下長くでれりとして海鼠のやうなものと思ッてゐると當が違ひますぞ夫とも何んな時に氣強くして何んな時にでれる者か後學の爲め伺ひたい、が今は暇がないから預けて置かう。と思ひきッて毒を吐き、立つ、立てじと留むる、此時女中頭のお仲と言へるが入り來り、何んですネ久河さん貴郎にも似合ない機嫌よく温順しく飲んで下さらなけりや私等がお帳場に叱られます見榮稼業の藝者に恥をかゝせたとて何れだけ男の品位が上ります圓い卵を四角に切るのはきついお茶屋の禁物。と女中の道理ある一

言に久河は澁々席に座れり
米八と對座ではとて久河は相手に小稲の妹分濱子を呼びにやりたれども他に約束ありとて來らざりしかば今二階のお座敷より歸らんとする小三を其儘此席に招き一時間あまり面白くない酒を飲まされたり

（第十二）

久河は再び米八に狂へりと飛んだ浮名の立ちし起源は全く斯した譯なり疑晴れしか小稲。と久河に一伍一什を話されて小稲も何うやら今迄の言過ぎ氣の毒のやうなれどもよく〳〵考ふれば猶は胸の裡は半信半疑なり
夫から貴郎はよもや眞直にお歸りではありますまい二次會とやらは何樓で厶いました白狀なさい。八百万神も照覽あれ左樣な後暗いことは微塵骨灰。更に無いと被仰るの如何程お隱しなすッても然うは言はせませぬ何時も私しの宅にお寄りなさる貴郎がッイ目鼻の先迄來ながら其晩も其翌晩も何でお寄りなさらぬ。夫は……。夫は……其晩敷島へお光來なすッた貴郎が何うして私しの宅に來られませう。今更其方に對して面目なけれど小三の强請に已むを得ず一寸敷島で一口飲んだ只だ一口に敷島に行ッたと言へば何んな面白いことがあッたらうと思はるれど强請る二人の乞食に一座敷分の玉祝儀を惠んでやッたまでのこと其方の顏を汚すやうな所爲は此滋二郎奈何に醉ふてゐても良心が腐ッても他の口車に煽動られても誓ッてなさず此後は米八なぞゝ一座するやうなこと決して爲すまじ。一座なさる分は少しも搆ひま

せぬ何んなお交際で顔を見合せぬといふ譯にハ行かぬ場合もありますゆゑソンな量見の狹いことは私しとても申しませぬ去れど世間の口に色々と言はるゝのがうるさう厶います貴郞のお心一ッで私しの顏が立つか潰れるかの境も立ちますことゆゑ。ハテくどい分ッてゐる〳〵久河とても心もあれば目もある……酒が皆な冷たくなッたサア飮直さう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

是迄の内に小稻は幾度となく久河の爲めに骨肉も及ばぬ親切を盡せり何處にも無くてならぬものハ是なり無くてならぬもの不如意にて身分ある人までが困るも亦た是なり久河が或る月不手廻りにて此處の料理屋彼所の待合に不義理の借わりて拂ひの後れしとき小稻はチラリと此事を聞き我男が少しにても惡くいはるゝことが負け嫌ひの氣性に障り我身がよく言はれぬよりも猶は之を苦にして久河が知らぬ間に……先方には久河其人より囑托りたるつもりにして奇麗に尻を拭ひやりたり其翌日久河が小稻許行きし時四五枚の……何れも四五尺もある長き受取書を目の前に出され、幾程わッても足らぬは此里の金なり爾後は不自由でも成るたけ妾しの宅にて御心棒なさいませ。と言ハれし時の久河頭を搔き乍ら濟まぬ〳〵と手を下んとするを小稻も之を押しとめ、見ッともない御殿といふものハ女子に禮など言はぬもの。

又久河が去る學友と連帶してアイスクリームとかいふものに八錢の證劵印紙を貼りたる證文を與へ其代

りに利息と手數料とに二割前引されたものを受取り期限來りて殘酷に督促され、一日も猶豫ならぬ若し今日間違へば巡査に似て劍を帶たぬ公吏を差向るといふ一大苦境、芝居なら今日に迫ッた三百圓の才覺にアハヤ橋の欄干ゝ手を掛けるといふ塲合に……小稻より服帛に包んだものをドサリと眼の前に投出され。是は。と驚くを、お預りもの大きに遲くなりました早く玄關に待ッてゐる頭の黑い蚰斗に遣なされ春先に御心配は身体の毒です是から向島へでも行ッて遊んで來ませう着物が何處に在るの、お淸さん(久河の下女)に言へば分りますか、早く奥樣が出來ぬと不自由です子。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

是を思へば久河たる者苟めにも米八如きに心を移せば天の罰神の罰より小稻の罰が當るわけなり……良心一片內にある以上は久河爭でか仇し心を起さうや

(第十三)

米八は何故に一旦別れし久河に再び逢はんとするか是には相當の理由なくては叶はず世間の噂の如何によりて人を好き人を惡むの念も生ずるものなり茶屋の女中も聘ばれたる藝者も此頃は誰れ一人として久河の男ぶりを褒めぬものなし意氣で高等でしやんとして氣が附て行渡りが善ッて豪いお方で而して實があると賴みもせぬゝ久河は專らの好評判夫に引替へ「米八さんい目先の見えぬ人、アノお方をつきだしたはつきだしたはつきだした方が惡くッてつきだされた方ゝは咎はない」との蔭言を度々耳にする

米八餘り宜い心持ちはせざるなり

去る日久河は小稲と共に歌舞伎座の棧敷にありしを米八は西の鶉より之を見上げ、彼のいゝじやんとした桂男が一年足らず前までは我手の裡に在りし男かと昔しの戀しくて今を憾み棧敷の睦まじき鴛鴦を羨むの念起れり

かてゝ加へて米八が久河を冷淡に取扱ひし時分に其上客とも弗箱とも頼みし今川橋の若旦那は久しき以前より柳橋の後へは挽ぬ源氏車拍子と綽名ある小奴に引とられ此土地には頓と鼬の道切なり

手の裡にある雀を見くびッて屋根の上の鳩を羨みし昨日の淺慮こそ憾みなれ米八は目先の見えぬ奴と碌でもなき人の噂が癪に障る、今に見よアノ塒鳥元木に歸してくれん

米八は斯る心よりして久河に「れいで〳〵」をなしたり去れど其甲斐なかりき故に伊東といへる名を假りてやう〳〵伊豫紋に呼び寄せ小稲とは仲惡の小三を招き其助勢を借りて敷島まで連込みたり去れど女の思ふほど男は乘ッてこず況してや此男には小稲といふ大事〳〵の附者あり覆水容易に盆に復るべき摸様なし

* * * * * * *

ヲイ〳〵お女將さん此節何か面黑い話しはないか。有ります〳〵大有りです小稲ちやんと米八さんとの鞘當といふのを御存知ですか。イヤ此土地のことあら一から十まで知ッてゐる兄さんと言ひたいが口惜

しいけれどもまだ知らぬ。夫を御存知ないやうでは下谷通とは言はれませぬぞゑ。イヤモウ年は一ッでも取りたくないものさ一体何ういふ一件だ。先づ斯ういふ一件です。

米八、小稲さんチョイと伺ひますが物を遺失た人があッて而して夫を拾ッたものがあるとお思ひなさい其時は其品物は遺失主の所有ですか拾ッた人の所有ですか。小稲、是は又變ッたお尋ね私しが言ふまでもなく無論遺失主の所有でさアね。夫れでは物を拾ッて届けもせず默ッてくすねる奴は盗賊も仝じことですね。分りきッたことと夫なことを私しに聞いて何うなさる。イヤ他には聞かなくッても宜いが貴女には聞いておかねばならぬ貴女は私しの所有を拾ッて遺失主の私しに一應の挨拶もなく默ッてくすねるとは顔に似合はぬひどいお方、是は怪しからぬことを被仰る本氣で言ふのか夫れとも氣が狂ッてゐるのか賤しい勤めはしてゐても心までは腐りませぬ七年以來此土地で隨分人樣にも顔を知られてゐる私しに盗取したと言はぬばかりの其一言返答次第によりては只は置かれぬ。盗ッたから盗ッたと申したが惡いのですかアノとぼけた顔盗人たけ〴〵しいとは誰やら玆に虫も殺さぬ顔をしてすまして姉さん顔してゐる人だ。何ですと他土地から此土地に流れてきてやッと此頃褄の取り樣や撥の持ち樣を覺えた癖に餘り生意氣な口をれ所なさるお憚りながら此小稲はまだ口青いれ前さん方から兎や角言はるゝやうな耄碌は致しませぬ相手にしては大人氣なきゆえ聞き流して置きますが以來は少しお謹みなさい。

ヲイ〳〵お女將さん夫は何の話しだ。是は小稲ちやんの情人を米八さんが取り返さうとする口論の一件

です。夫なことが何時何處であッた。ナニ有ッたといふ譯ではありませぬが大方モウ有りさうなものと私しの推量です。ナアンだ馬鹿〳〵しいまさか小稻が米八を相手に口論はしまい。

（第十四）

人の背後に立ちて、やるべし〳〵やり玉へなどと煽り立つる者を俗に尻押、角文字にて教唆者といふ左程に熱心ならぬことまでもツイ氣が乘ッて熱心にやる氣になるも多くは尻押の教唆者ある爲めなり米八が小稻に手向ひしてまでも久河を取り戻さんと思ひ立ちしハ小三が智慧を貸して米八を煽動たること與りて力あり

アノ小稻め、下谷の藝者は自己一人といふ顏附が癪に障る斯ういふ時にウンと揚足取ッてあやまらせて置かなくては宜い氣になッて何時迄も增長する米八さんアノ男ハお前が出てゐたお客ぢやないか默ッて指を咬へながら巫山氣た眞似するのを見てゐる奴があるものか斯ういふ所は斯うして斯うなさい是から私しも及ばずながら力になッて上げませうと米八は一々小三に差金入れられ一度ならず二度までも手を燒きたるに猶は懲りず機會もあらばと待ち構へてゐたりけり

米八ハ初めは兎に角伊豫紋敷島にて久河を取り逃してよりハ高が男一匹、喰ひ餘しを乞食にやッたと思へば腹も立たぬと幾度か强いて諦めて見たりしも猶は心中未練殘りて思ひ斷れざる折柄小三に右の如く焚き附けられ又も初めの氣になれり

何處にも流行の同郷人士親睦會松源樓に開かれ久河も其席に在りたり席の周旋に招かれし紅裙十數名小稻も小三も米八も濱子も皆な一座なりけり

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此宴會散じたる後藝者は思ひ〳〵に立歸る小稻も同じく立歸らんとて階子を降らんとする時妹分の濱子は之を呼び止め震ひ聲にて、姉さん嘸口惜しうムいましたらう三人や五人のお客樣の前なら兎に角三四十人もゐる此大一座でサン〴〵恥かゝされ傍に見てゐる私しさへアノ小三に喰附てやりたい位でムいました夫に姉さんはよく御辛棒が出來ましたネ私しや此の通り口惜淚がこぼれます。でも私しが惡いのだから仕方がない况して大勢のお客樣の前で自分勝手の口論したなら第一お客樣やれ茶屋に對して申譯がないではないか。といふも又うるみ聲齒切は目に見えぬ所にあるべし、イエ夫も姉さんが眞正に惡いのなら仕方ない譯ですけれどもアノ小三め姉さんの後に故意とそッとアノ洗盃とお銚子を置いたに違ひありません貴女は夫とも知らずお立ちなさる拍子に盃洗と銚子はひッくり返してアノ始末、其時の小三の言ひ樣の面憎さ、ヲヤ〳〵小稻ちやんお尻に氣をお附けなさい大勢の妓を差圖せねばならぬ年をしてゐながら此粗匆はどうしたことゝお座敷を取持つための藝者でれ座敷を取亂す爲めに招ばれてゐるのでありませんへンお尻の用心の善い人は又格別なものだ是でも御當人は遖ぱれの姉さん株の積りだとサ。と言ひたい放題の惡口雜言いまだに耳に殘りて忘れられません、其時何故姉さんは盃洗やお銚子を覆す人

が夫程悪ければ人の覆すやうな處に故意とろッと置く人は猶百層倍も悪いと言返しておやりなさらなかッた私しがモッと年が行ッてをればお代りにサン〴〵逆捻を喰はせてやるのですけれども……是もアノ米八の……。と心から口惜しがるも吾身が恥しめられたよりも辛く思へばなるべし、お前の言ふやうに言ひ返せば自分の腹は癒やう此小稲いくら耄碌しても小三や米八と口論して負は取らぬつもりなれどもお座敷に出た藝者が同士喧嘩して座興を醒してはお客やお茶屋に對して濟まぬではないかね他人のお前でさへ夫程口惜しがるもの況して當人の私しが心はと、思はず握りし撥に指のめりこむも理りなり斯る時には紙屋治兵衛が耳からなりとと言ひしもの得て出たがるものなり

《第十五》

松源の大一座より打ち連れ立ちて歸るは小三と米八なり、眞正に姉さん今日といふ今日は胸が清々致しました一座の采配ハ獨りで取るといふ顏をしてゐる小稲が姉さんに一本やりこめられ何とか口返答をするかと思ッたら流石に姉さんには恐いと見ゑて素直に從順しく『惡かッた』と謝罪ッたアノ樣アは憐れ憫然でしたネ姉さんにサン〴〵に稠坐の前で赤恥かゝされ加之にお尻の用心の善い藝者は違ッたものだとまで言はれて默ッて一言も返すことの出來なかッたは何と小氣味の善い事ではありませんか。夫も然うだがアノ時小稲の背後にお前が盃洗とお銚子をソッと置たのを氣が附かぬといふは小稲も餘程お目出たい藝者サ然し夫は内所として置てお前彼を今夜連れ出すやうにして置たの。大丈夫です田村さんと近藤

さんに頼んで置きましたから屹度お兩人が二次會にアノお方も連れて三人で敷島に崩れますに違ひない然うなれば田村さんが屹度妾しを掛けて呉れますだらう。此度は迯さぬやうに確乎お遣りよ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

兼て一方ならず小稻の恩顧を蒙ふる箱屋の榮吉より聞たりとて下女のお里は久河は兩人と共に敷島に這入しことゝ而して其席に二三人の藝者が出てゐて其中に慥か米八も交ッてをッたやうなといふことを小稻に通報せり小稻は今やう〳〵松源の大一座より歸り小三の雜言胸にあれば氣分惡しとて外の座敷を斷り休み居りしがお里の報知を聞き露驚きたる氣色もなし驚かぬも道理なり小稻は、アノお方縱令敷島へ連れられたりとも何れへ誘はれたりとも落つく先きは尾花屋なり必ず今ま拔けて來り玉ふべし。と心に信ずる所あれば

されど自信は我を欺きたり久河は其夜十二時過ても小稻の宅に顏を見せずさなきだに小稻は松源にて小三に辱しめられし口惜しささへある今宵、久河が米八と共に敷島ま在りて今迄も我家に歸らぬとありては無念遣る方なく何うしてくれんと心の中は亂麻たり

ヨシ〳〵此小稻思ふ仔細あり是より久河の根岸の宅に出掛けて泊りこまん其宅は老婆もお淸も主人の久河よりは却ッて小稻に馴れ親みをれば何事も心置かるゝことなし翌朝何んな顏して歸り我に何と言ひ譯するか見屆けてくれん一句も强音を吐かすることでなしアノお方の出樣一ッに寄りては此小稻も量見あ

り何時までも馬鹿になりてはをらぬ
思ひ胸に定まれば今迄氣分惡しとて既に床に就きたる小稻急に夜具を跳退け、お里二人乘の車を一臺……れ前も根岸まで私しを送ッて行くのだから早く仕度を。

（第十六）

必定留守と目的を附け故意と其虚を襲ふて翌日久河の膽玉を驚かしくれんとの目算にて小稻は深夜根岸の久河宅を訪へりお里にトン〳〵と門を叩かせけるに四度五度目にて漸く目を覺したる老婆呼ぶ聲に夫と悟り門を開きながら『宜うこそと』言へば小稻はツット内に這入りながら、婆やさん毎度お邪魔さま旦那はお留守でせうけれども至急にお目に掛らねばならぬことがありますゆゑお歸宅まで往ッてをります。御串談ばッかり善く何事も御存知の癖に。ヲヤ何をですか。何をッて旦那樣は餘程以前にお歸宅でモウ御寢なッてゐらッしやいますが私しは又姉さんの所から御歸宅なさッたこと丶思ッてをりましたに。エ丶何ですとモウお歸宅ですとアノ旦那ハお歸……。ホ丶何を吃驚なさいます嘘と思召すならお部屋に入ッて御覽なさい。とトンと後より突やり、モウ何もお搆ひ申しませぬ其代り明朝タンと蒲燒か玉子燒でも御馳走致しませう。とて其儘寢間に下りたる老婆、此奴も中々の氣轉者なり此以前に小稻を送り來りし下女のお里はお婆さん何分宜しくとの挨拶を殘し挽かせ來りし人力車に再び乘りて歸りしものと知るべし

久河はてッきり今宵米八に引掛り宅にも歸らず吾宅にも立寄らぬものと一圖に目星を附けて憤怒、怨恨、遺憾に點火られ種々に胸の焔を燃せし小稻茲に來て見れば久河は遠うに家に在りて淋しげに孤衾を守れり之を見たる時の小稻の心の裡は如何ならん事の意外に驚きしは淺けれども事の意外ならざりしを喜びしは深く盗賊と思ひし吾子が大の慈善家たりし時の親の喜びも爭でか之に過ぎん是でこそ小稻の可愛イ男なり、チョイと〳〵貴郎モウ寢たの。眼は眠るか知らないが心ハ中々眠らぬ。女も挨拶なしに問へば男も挨拶なしに答ふ其間一言の虚禮なきは親しき仲なればなるべし、心が眠らぬとは夫ハ何故です。何故ッてけふの小三めが雜言。夫では貴郎は……。サア人事とハ思はぬ自分が恥かゝされたよりも猶腹が立つ今に返仇をしてやるから我慢しろ其方が從順しく出て相手にならなかッたのは皆なが褒めてゐた負けるが勝とは此事だ、然しアノ小三めが生意氣を思へば〳〵心が冴ゑて〳〵眠られぬ。

《第十七》

此頃評判の壯士役者吾妻一座に三奇人あり何れも皆歌舞音曲の諸藝に通じて横から見ても縦から見ても無意氣な書生のなれの果とは受取れず中に就て雪州といへるは幼少よりの丹精にや最も踊に精しく身体の輕きこと飛鳥の如く蝴蝶の如し又月華といへるは天然の美聲清元常盤津長唄よりさては一中富本に至るまでの呼吸抑揚大方心得ぬは無し花影といへるハ頗る三味線に精しく曾て十年以前師匠の某に吾等などは最早兎ても及ばぬと舌を卷かせし程の腕前、座中にて之を吾妻座の雪月花と稱へ又三妙藝と呼び顔

知らぬ人は多けれども名バかりは誰れ知らぬものなし

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

或る日の晩方松源樓に登りし三人の客あり銘々手に太きステッキを携へ肩を怒らし乍ら入り來る風体、一見此頃の選擧騒ぎにて懐中の暖まりし御雇壯士なることは分明なり紀州フランチルの垢じみたる襯衣定價三十五錢が關の山といふのを下に着し木綿の綿入の而かも夕陽斜めなりといふ奴を着流して大福白木綿の帶をグル〳〵と幾重にも卷付け髪は蓬の如く亂れ何れも一癖ある面体何うしても松源などに來て散財するお客とは受取れず

三人連れ立ちて座敷に通るや否、コラ女子共早く酒を持ッて來い、料理も精々注意して……ナニ……イヤに僕等の顔を見るぢやないか、決して怪しい者ぢやないぞ勘定が拂へずに馬を牽て返るれ客樣とはお客樣が違ふぞグッ〳〵すると亂暴するから然う思へ夫が恐けれハ須らく平身叩頭して最上の珍客として叮重に待遇すべしだ。と言ッても然し女中を相手に飲んだり喰ッたりするばかりでは滿足は出來ぬぞ誰か美くしいのを二三匹生捕ッて來い夫には此方に注文がある小三と米八は評判の藝者ださうだから此二人に赤襟二三人を添へて呼んで來い。と三人各自に大平樂を吐き女中をサン〳〵嫌がらせたり

やがて酒肴席に並び活版刷の挨拶『今晩は』を先驅となし島田は先に天神髷は後に行儀亂さずしとやかに鹿爪らしく入り來りたる翠袖紅裙は小三米八其の他二三の半玉にてありける、イヤ是は何うも何れを

見ても妍娟〳〵。下宿屋の二階で燒芋を喰ひながら立板に嚙り附ても支差ないといふ大道臼の下女はかり見習れてゐる僕等の目には眩くッて判然見ることが出來ぬ。左樣だ〳〵僕等は斯ういふ美婦人を見たからはモウ死んでも宜い是でこそ閻魔の前に行ッても少しは肩身が廣いといふものだ。是方の御臺樣が小三さんで成る程……是方のお姬樣か米八さんか。成る程評判の高いだけあッて立派なものだお目にぶら下るは初てなれど拙者ハ矢間重太郎。拙者は專崎矢五郎。拙者は原鄉右衞門と申す者以來は何分お心安く願ひ上げ侍り奉りまするだ。

座敷に坐りてズット客の頭の先から足の端まで一目に見渡し客種の善惡上下を見分け身分職業は勿論財產の多少妻の有無まで見徹すは老巧藝者の眼なり小三最前より此客を見るに貧乏書生放蕩壯士と見るより外鑑定の附け樣なく厭なお座敷に出たり宜い加減に酒を切上げて早く歸ればよいと心に十分に輕蔑したる形容、何ですネ貴郞方ハ私し等の顏の棚卸しばッかりなさらずとお酒でも召し上れ幾何お褒めなさつても生憎十錢の持合せがありませぬゆゑ。何だと十錢の持合せがないとはお客に對して無禮な一言誰が何時貴樣ヨ十錢頂戴と言ッた。加之にお酒でもとは何んだでもだけ多いお茶屋に來て酒を飮まうと無駄を喋べらうと貴樣の差圖は受けぬ是れさ。矢間君專崎君何うしたものだまだ醉ふのには早い餘んまり野暮な聲出すと赤襟達に笑はれるぞ。

參方に九寸五分を載せたる如く何だか凄い寸方のあるやうなお客なり

《第十八》

ナント專崎殿矢間殿美人のお酌でお互に大分酩酊致したでは厶らぬか。左樣々々今のお坐附なぞは實に感々服々藥罐の熱湯といふ次第。アノ腕前なら嘸かし甚句やカッポレでお茶を濁し書生客や田舍者を喜ばせることはお茶の子でせう。と彼の三人の言ふ所一言一句飽くまでも藝者を馬鹿にしたる嘲弄、之を聞く小三米八の耳は隨分痛し

『ナンだ此の素寒貧の青壯士小塚原か板橋の二十五錢の安女郞の顏を見て涎を流す男子の片塊人間の面垢しの癖に餘り生意氣の口を吶わがるナ』と一本やりこめてやりたき小三も此向ふ見ずの壯士如何なる亂暴を爲さやも計りがたければチッと堪へて言葉尻を捕へられぬ分別、妾等は甚句かカッポレしか知りませぬが此節は小塚原や板橋では何ういふ歌が流行ますか聞かせて下さい。と小三が笑ひながら言ひし一言柔かなれども內に針あり米八も半玉も心に善い氣味と思ふなるべし

イヤ小塚原や板橋は僕等の華客先なれどもアンな肥料風臭い片田舍の歌なぞは兎ても東京のするや町《數寄屋町》やどろぼう町《同朋町》の蓮ッ葉拍子の前では恥かしくッて歌はれるものでないノウ鄕右衛門殿。左樣々々夫よりも何か一ッ都の拍子のお手並を拜聽致さうでは厶らぬか。贊成々々夫では小三さん米八さん何卒僕等がまだ小塚原や板橋で聞かないものをお賴み申します。アラ夫なこと被仰ッても六かしいものは兎ても私等にも彈けません何卒有りさうなものを。と言ひながら小三は米八にめくばせして

撥に手を掛けしは地は清元の兩人土佐繪か吉原雀か左なくば桐の雨か梅の春でも赤襟に立ッて貰ふ心なりしなるべし

御兩所折角拜聽するなら氣に入ッたものが宜いぢやないか。然うとも〳〵何しろ兼て名は高しの濱の音に聞く小三米八兩君のことだから嘸ぞ聞物だらう。夫では注文しやうぢやないか。コレ小三君『鷄合』でも『傾城姿』でも宜いから一曲願ひます、ナニ、行ないと被仰るのか夫も無理はない子一中節なんて前世紀のものハ明治の世には流行ませんから子流石は文明の藝者方は舊弊なものは歌はぬから豪いよ。夫では『とらが文』といふのを一曲やッて貰はうぢやないか『まことに文は閨の友いよゝ御見と書たるは絆の種か花芒』なんていふ所は實に妙絶ぢやないか夫とも『放下僧』といふのにして貰はふか『雪解の水の泡沫に合やどりする蛙の聲』なんていふ所は安くはないぞ、ナニ二ッとも行ないと被仰るのか成る程夫も無理はないネ河東節なんで前世紀のものは明治の世にハ流行ませんから子流石は文明の藝者樣は舊弊なものは知らぬから豪氣だよ。ムウ成る程中々豪氣な藝者樣だ夫では小三ちやん長唄の『雁のふみ』といふのをやッて下さい『いざよう月の影ふけて』といふのは無論御存知でせう、ナニ、是も知らないと、ヲヤ〳〵あきれて何とも申し樣のない藝妓者樣ではないか是でも姉さん顏して大勢の妓を差圖する顏利かと思へば汗と涙が一緒に出るわ。何しろ三味線を伊達に持ッてゐる人は違ッたものサ。ナニ伊達ぢやない枕の代りに持ッて歩くのだとさ。然うか夫は初めて聞いた後學の爲めに小塚原や板橋で流

行る歌を聞かせてやらうぢやないか。夫では僕がチョット小三君の油臭い三味線を借よう矢間重太郎殿には一曲うなり玉へ専崎矢五郎殿にはれ立なされ。ヨシ然う役前が定れば僕は『五郎』を歌はう郷右衛門殿棹をお頼み申す。

《第十九》

やがて一人が撥を取りて調子を合せ一當チヤチヤンのきツかけに一人が歌ひ出すは長歌の「五郎」

　藪の鶯氣まゝに鳴て羨やましさの庭の梅アレそよ〳〵と春風を浮名たゝせに吹きおくる……

彈者は自慢の腕、唱歌者は固有の美音、音色も聲も樓の上下に冴え渡りて響けば樓下の女中も他座敷に出でゐたる藝者もさても不思議と皆此座敷の外に集りて或は耳を傾け或は差覗く

此三味此歌に連れて踊る其人も得意の妙技一擧手一投足皆其節に適ひ翩々として身は恰も空中に浮きてあるが如く覺えず觀る者をして妙と呼ばしむ彈く人も歌ふ人も又踊る人も善くも揃ひも揃ふたりステツキを振り廻はし亂暴を働き巡査と喧嘩するより外には一藝もなきものと思ひし壯士如何にしてかゝる優しき藝を心得居るやと室の内外に見聞する藝者も女中も不審の体なり蓬髪粗衣若くは無骨若くは素寒貧などゝいふ餘り有りがたくなき形容詞を附られたる此三人も爲めに數層の器量を上たり

ナント、デモ藝者の小三と米八、小塚原や板橋の流行物は先づ斯んなものさ。馬鹿々々しい同じ玉祝儀を出して藝者を呼ぶ程ならモツト藝者らしい藝者を呼べば宜かッたネ。斯んな藝なし猿に出逢ふたのは

僕等の災難サ道理で昨晩の夢見が惡かッた。コレサ〳〵餘まり藝なし〳〵と言ひ玉ふなかれでも轉ぶ藝が上手だとサ。夫は然うと斯んな藝者を相手にして飮んだ所が面白く醉はるゝ譯もなし是から何處かで飮み直さうぢやないか、コレサ小三何うしたものだ然う口惜しさうに睨めなくッても宜ではないか、早く女中でも呼んで勘定を貰ッて呉れ玉へ

斯の如くにして彼の三人の客は歸れり小三米八は生れてから以來いまだ曾つて經驗なき大恥をかきたり當前なら小三の氣性として、玉祝儀を貰へばこそお客樣なれ貰はなければ五分と五分生意氣な青書生の癖に人も無げなる雜言はチトお謹なみなさい。と祝儀を客の横面に叩き附けて立去り兼まじき勢なれども此日の事は客に寸分の無理はなくて言葉を返すべき隙少しもなければ胸も煮返るばかりの無念を押ねて三人に言ひたい放題の雜言を言せて一句も返すこと出來ざりき

* * * * * *

彼の三人の客は吾妻一座の三人役者雪州、月華、花影にておりける三人は久河が舊友にして久河より小稻が小三に恥しめられたるとを聞き一片の俠氣より物好にも斯る狂言を巧みしものとか

《第二十》

何事も素直にては金儲けの出來ぬ世の中別て此稼業は地道では藝者で御座候とすまして世渡の六かしきものとか浮世なれや

評判善くて全盛藝者と言はれんには硬骨にして應來、達摩なぞの異名を受けざるに在り去れども何處にか通常の玉祝儀以外に金穴なくば見榮を競ひ華美を爭ふ此社會に一日も巾を利かせること出來ずツマリ立派な藝者といふものハ善き金穴を持つの謂ひなり

小稻は硬骨拍子男嫌ひ藝の外には何も賣る人でなしとの評判高けれども何處へか金穴なくば四期の更衣にいつも衆妓の目を驚かせお茶屋の女中乃至は箱屋にまで心附けをよく行渡らせ姉さん〳〵と尊敬さるゝ譯なし小稻には實は此土地の人さへ知らぬ秘密の金穴あり俗に之を弗旦那と言ひ米櫃ともいふ此米櫃の旦那といふは年齡五十以上にして頭の少し禿たる長者なり此長者小稻を愛し信ずること深く小稻の言ふことは何事も聞くなり小稻が紅指に輝かす二ツのダイヤモンドの指環も又更衣の時に常に他に三四倍する金額を奇麗に呉服屋に拂ふも原泉は總て茲所なり去れば小稻も此長者大事と崇め奉り師直流に勤めるだけは吃度勤める筈なるに何事も無頓着頭痛がすると言ッては献れた猪口を斷はり歯が痛むと言ッては遊山の同伴を迯げ氣隨氣儘の爲放題をなせども長者は「或儘は其方の持前なれば」とて何時も怒りたることなく小稻は氣の向かぬときは無病息才の時にも顳顬に頭痛膏を張り振り出しを飲み又は按摩を呼びなぞして長者の同伴又は宿泊を斷はれば通常の者はムッとすべき處なるも斷はられたる長者は大事にせよとて温順しく其の儘歸宅、翌朝過分の見舞物を送り届くるといふ眞實男温良無二小稻一點張りの旦那樣なり

名は人を現はす此長者名を福山と呼びて淺草の某町に貸家の三四十軒も持ち日本橋邊にある某銀行の大株主「坐ながら百年位は遊んで暮せる大した身代と」長者の長屋に居る或る金棒挽の山の神が井戸端會議での品評、まさか嘘ではなかるべし此長者既に二人の孫さへある身分なるに窃かに小稲に、、、、つぎこむとを此上なき樂みとし、小稲が立派の藝者と褒めらるゝ噂を聞いては身が褒められた程喜ぶとは流石は廣い東京、隨分好事者もあればあるもの

「私しも此土地に在る以上は應來などゝ言はれたくなし貴郎も御身分あるれ身の上年甲斐もなく藝者狂ひなどをするとつまらぬ噂立てられては御損なり」と小稲機密を福山旦那に語り此土地の出場所にては招んで貰はずにいつも鶯溪の伊香保、根津の神泉亭、駒込の草津乃至は明神下、向島、三十軒堀等に遠出して合びきすることに取計ひあり又稀に尾花屋に立寄るときも夜中裏口よりソット出入する事に合圖しあれば小稲が斯る金穴を持つ事は此土地にて情人の久河と下女の外何人も知るものなしかゝる有樣ゆへ長者も此頃小稲に久河あることを絶へて知らず小稲も此の久河の事だけは隱すだけは隱しておかん若し早晩長者の耳に入り一本衝き込れたるときは立派に、ハイ是れ私しの情人で厶います兼々仰せの通り添ひたい男があれば添はせてやるとのことゆへ何卒添はせて下さい。と一か八かの返答をする覺悟、度胸は既に定まり居れば何事にも苦はなけれども長者と別るゝ時は同じとなら体裁よく腹を立せずに別れんとの考へなれば小稲惡いことゝは思ひながらも久河との關係は及ぶだけ長者の耳に入れぬやうに注

意せり岡目より見るときは長者のめでたさ加減は限りなしされど此里に足を入るゝ以上はめでたくなる位の大度なければ通人でなし

(第二十一)

或る夜久河は尾花屋に在りて小稻と共に長火鉢を中に夾みながら一ッの食物を二ッにして樂みけるに靜かに表格子を開くものあり上り口の二疊に今迄濟でゐたる下女のお里急に目を醒し入り來りし客への挨拶は後にして先づ此方を向て親指を出し主人に目配せすれば小稻は久河に押入に隱れよと知らす流石の久河も否むに由なく頭をかきながら押入に這入る此間の呼吸迅、速、急、斯る時には口ほどに物言ふもの手ほどに働き手ほどに働らく眼は電光石火の如く問答す

小稻は素知らぬ顔にて出迎ひながら、宜うこそ御光來なさいました。と言ひつゝソット福山長者の顔色を伺ふにまだ何事も氣取られぬ樣子なれば少しく安堵して、モウ少し此方にお寄りなされと押入の側に坐らんとせし長者に席を替へさせしは多量の意味あれども長者は頓と夫等のことゝは氣附かず、お前にお土産持ッて來たとて濱縮緬一匹小稻の目の前に投り出し、別に紙にひねッたものを、是れ里に。とて渡し茶を入れて持ち來りし其人に三ッ四ッ頭を下させる斯る時には「旦那樣有難う」の次ぎには「姉さん何卒お宜しく」との謝辭出で只取次たばかりの人が遣つた當人よりも却つて宜い顔になるものなり

小稻は押入に在る人の氣に掛り此長者を早く歸さゞれば狹い處に隱れて息も咳も儘ならぬ可愛い男、嘸

ぞや苦しかるべしと思へバ思ふ程猶更長者の尻は落着て見ゆるなり中に隠れたる者より隠したる者の方が却つて苦しきは待たるゝ身より待つ身が切ないと同じ道理なり

表からはお這入なさるなとアレ程申して置たに何故裏からはお光來なさらぬ。裏口は閉まッてゐて開かぬから仕方がない。でも誰かお這入なさッた處を見たかも知れません宅にお客を引張込で宿泊めるなどゝ言はれては妾しの顔が潰れますゆゑ何卒一旦出て下さい御請ですから然うして下さるれば誰が目にも鳥渡用があッて來た客だから直歸ッたとしか思はれませぬ御存知の通りアノ意地悪の小三が向三軒の内で絶えす睨んで居りますゆゑ又どんな後指さすかも知れませぬ。と言へば折角此宅で共に一杯飲まんと思ふて來りし長者餘り宜い心持にあらず少しムットなるを小稲は此點ぞと思ひ、ネ、何卒然うなすッて下さい而して何樓からかお座敷で掛けて下さい外口はあッても皆斷ッて直に參ります其樓でゆつくり召上る方が氣が落附て宜いではムいませぬか。此一言に長者やう／＼得心し、夫では辨天の湖心亭から掛るから直にお出で。ハイ拜承ました誠に濟みませんお里やお履物ハ出てゐるかヱ。とまだ長者が腰さへ持上げぬのに引張ッて押し出すやうな言ひ振り、アヽ人間生れて夢にも旦那様になる勿れ

長者は履物まで直され乍らまだゆッくりと搆へ込み一旦腰に指した煙艸入を又取出し三四服喫み夫で立つかと思へば又茶を酌がせ半分飲んで下に置き殘り半分を又二度に飲み仕舞ひ然る後又優々と懐中時計を取出して眺め漸く、夫なら一足先にとて出行けり

跡見送りながら周章て元の座敷に戻り押入を開け、嘸ぞ苦しう厶いましたらう。イヤモウ恐れ入ッたと言はうか何ともハヤ申し様のない始末サ子や孫には誤ッても旦那持の藝者に關係するなと遺言せねばならぬ

(第二十二)

其様に恩に着せて貰ひますまい押入に隱れた貴郎より隱した妾しの方が餘ッぽど辛勞う厶います折角土産物まで持ッて來た者を愛素なく取扱ふて追ひ歸すはどんなに切ないか知れません是を思へばモウ〳〵子孫代々までも藝者商賣などは幾程困ッても爲せるものではありませぬ斯んな罪な商賣は外にはありますまい。などゝ豪氣に時代な文句を言ふぢやないか夫は兎に角アノ長者が押入の直ぐ側に坐ッたのには驚いたネ手足を少し動かせばゴトリと響きがするし息咳すれば直ぐ聞ゑるだらうといふ恐れがあるし。と久河が小稻に言ふを途中より下女のお里が引取り。アノ時押入の襖がゴトリパサ〳〵と音がしましたのを若しも聞き咎められたら何う言はうかと心配致しました夫に姉さんはすまアしてお在なさるもの憎らしくッて。ナアニ何とか言はれたときは何うも鼠が出て困りますと言ふつもりだッたのさ。ヲヤ〳〵とう〳〵乃公を鼠になして了ッた、と互ひに危急事件の復習をなしゐける時表より、小稻姉さん湖心亭へお座敷。といふは箱屋なり、有り難う參りますよ。

アヽ此夜長者の不意撃に逢ふて柱にかゝりし久河の二重マントと帽子を何時の間にか暗隅にかくせしお

里ハ中々の氣轉者尾花屋の忠臣なりけり

やがて小稻は仕度をおはり、妾しは人車で行くゆへにとて箱屋を一足先きに追ひやり夫れぢや貴郎鳥渡行ツて參ります。ゆツくり行ツてゆツくり飮んでゆツくりお歸りなさいだ。何ですとお歸りなさいだの『だ』丈け餘計ぢやありませんか成る丈け早く歸して早く歸りますから從順しくチヤンと待ツてお在なさいよ。イヽエ思召しハ有り難いが歸途はどうせ宅に伴れてお光來なさるのでせうからモウ歸りと致しませう、エヽ夫ぢや御勝手になさい決して無理にはお止め申しませんよ伊豫紋に行ツて米八さんでもお招びなさい妾しも是から色男の所に行くのですから何うせ歸宅は遲いでせうと思ひます。と言ひ乍ら上り口まで出で何事をかお里に密話きたり其密話は久河の耳にハ聞えねども神通力ある作者の耳には慥かに左の如く聞えたり『歸ると被仰ッても歸してハいけないヨ履物をかくしてお置きまだ夕御飯前だそうだから松月に行ツて何かお好きな料理を取ツてお上げ而してお酌がなくツてお淋しいだらうから内に居ツたら濱子を呼んでお出で』

アヽ之を思へば美人意中の人にはなりたきものなりお里が久河の艶福を長者と比較して其果報を羨みしも誠に無理ならず

(第二十三)

我久河滋二郎生れて既に廿八年大學を出でしは早足掛三年の昔しとはなりぬ醫學上の新發明新學說は日

と共に進み人を追ふて須臾も停まらず然るに我今日迄僅かに學びし所を守るのみにて新たに得たる智識は少しもなし誠にライプチヒから郵送する此メチニツセ、ツアイトシリフトニに對しても壁に掲ぐる希臘の醫哲ヒポクラテスの像に對しても恥かしや申譯なし毎日衛生試驗所に通へども所長の指揮に從ふのみにてまだ自家獨立の意見を呈したることなく三年の日月夢裡に過ぎたるのみにして少しも發明する所なし我斯の如くにして碌々たらば遂に一個の藪醫として終らんとす誤ツて茶屋酒の味を覺えてより贅澤追々增長し側に白粉臭い髢や裾を引ずる柳腰を侍座せねば酒も可笑しからずと思ふ樣になり不斗したことから小稻の實意に絆され互ひに三日見ざれバ千秋の思ひ我訪はざれば彼恨み彼招きに應せぬときは我欝ぎ餘所目にハ此久河滋二郎天晴れの道樂者放蕩者とは爲り終れり我いつぞや學友の伊東と共に向島の百花園に杖を曳きし時米山伯爵の令孃に見染められ去る恩人より此令孃を娶らずやと强ひられし時何不足なき緣談を斷はりしも實に彼の小稻があるゆへなり今我小稻を引かせて公然結婚するは安けれども學士の末班を汚す久河が門柳路花の伍に入りたるものと結婚したりとありては世人我を何とか言いん世人の非難は猶は忍ぶべきが國元の嚴格なる父上が許し玉はざるを奈何にせん去れど我今更如何に非難されても如何なる障害あるとも彼と斷ることと出來ず又斷るゝ量見みぢんもなし斯く何時までもく足を花柳の巷に踏み入れて膓を汚し腦を腐らしては永久の悔を求むる種なりいツそ彼と結婚の時期の到來する迄斷然個中の遊びを思ひ斷り專心一意我生命たる醫學を研究せずバ人として此世に生れたる義務責任を

盡さで朽るべし責任を盡さぬ者を去る諷刺家は人間と言はずして製糞器と言ひ俗に之を穀潰といふ我も一個の人間なり製糞器、穀潰になり了りては天に對し地に對し祖先に對し師に對し友に對し何と言ッて申し譯すべきア丶我此際早く悟り早く決する所なくんば學士の面垢と言はれて返す辭なきに至らん

（第二十四）

久河滋二郎は深く感ずる所あり是より我生命とする醫術と醫學とを大に研究せんと志し人の指揮監督の下に在りてハ十分の實驗を積み玄妙を會得すること難ければとて終に東京を去り名古屋の某病院の長となり幾多の希望責任を抱きて其地に赴任せり

東京を出發する以前小稻は切に獨り此地に殘ることを否みたれども久河は懇ろに之を諭し、今暫らく時期を待つべし近々の內一度鄕里の廣島に歸り父上に乞ふて其方と結婚の許しを受けん又目下我身分不相應に有する負債をも以後一年も一心不亂に勤儉せば皆濟するを得べし外には斯の天下に最も恐るべきものといふ借金を拂ひ盡し內ゝは父母の心を和げて公然の許諾を受けなば心にかゝる曇りなく天下晴れての夫婦白日手を携えて人中に出るも誰も咎むるものもなく又自らも良心に咎めらるゝことなし遲くとも一年早ければ半歲經つか經たぬうちに迎ひに來る程に深酒と燒酒と夜更と而して浮氣を謹んで夫迄待ッて居てくれよと言へば小稻も一旦浮名立てられても苦にせぬ程思ひ染めし男と暫らくにても別るゝは心から厭なれども一年か半年の內に此人と天下晴れて添はるゝことゝ思へバ一時の戀は忍びて行末を樂ま

んと決心し、貴郎も是程心を打明した妾くしに斷はりなしに奥さんなど貰ッては濟みませんよ。濟むも濟まないもお前を除けて外に嫁取らうなどとは夢にも想はぬ。ですけれども名古屋女は男を只棄て丶置かぬ所ださうですから……此土地で妾しが見張ッてゐて鎖を附けてゐてさへ何處かへちよかつかう〳〵となさる貴郎だもの名古屋にお出なすッて鎖が取れたら小稻のやかましやの婆がゐないから宜い幸としドンなことをなさるかも知れはしない。其樣な御心配は御無用其意見は此方で言ひたい位だ世間で犬も食はないものは夫婦喧嘩と浮氣、其浮氣を此久河がする位ならモット前に米山伯のお孃さんでも貰ッて立派な義理知らずの不人情男になッてゐる

* * * * * *

語れども〳〵惜めども〳〵盡きぬものは名殘なりけり明日の別を今宵一夜に酌む兩人の四ッの袂の涙に宿る影とだに知らで澄む池畔の月の無情さ男優りの小稻從來男に泣きしことなかりしに今宵ばかりは限りなき別離の哀れさに人生にかゝる悲境もあるものかと悟れり

（第二十五）

久河と小稻身体のみは互ひに東西百里隔たりたる地に在れど心は一日として通はぬことなし稀には夢の通路に兩人半分づゝ歩き逢ふて箱根の頂上で手を握り合しこともあるべし一月の内三ケ日は必ず西の方に影膳据へて其人の無事を祈る小稻此點ばかりは丸で素人なり

久河も名古屋に赴任してより從來の久河にあらず醫學研究を以て酒色に易へ一意專心勤儉を守り只管小稻を迎ふるの日を樂み一切無益の交遊を絶ちければ其心を知らぬ或る一種の社會は今度の院長さんは大の「ケヽチキ」など〻無躾を拔かせり

實にや關守なきもの人を待たず小稻久河は不忍池畔月明の樓に離袖を絞りしは早や一年餘りの昔しとはなりぬ久河が一大苦痛たる負債も六七分は減り殘る三四分も既に償却の方法立ちければ久河はイザとて自ら鄕里に歸り父母に逢ふて小稻と結婚せんことを願ひぬ父は初めは之を許さゞりしも懇々の事情を聞き「結婚の事ハ汝の思ふ通りにせよ父は干渉致すまじ」との快よき返事に接しぬ此時の久河の嬉れしさ雨後に新月を見るの心地ありしなるべし

* * * * * * *

一天物凄きまでに色變り黑雲俄然日を掩ふよと見る間に遙かにゴーと恐ろしき響きの押し寄せ來たるは海ならぬに何の怒濤ぞ是はと經驗ある老人が眉をひそむる一刹那、地盤轉覆山裂け水逆だち家倒れ人飛び人畜悲鳴、號叫の聲耳をつん裂く是ぞ名に負ふ尾濃の大震災世間人事のあるとあらゆる哀れなること恐ろしきこと無慘なること不幸なることを同時同所に集めしは實に此時にぞありける

十年苦學の効顯はれ卒業證書を擔ふて久しぶりに父母兄妹に見ゑんとて歸鄕の途にある青年、千辛万苦の後漸く主君の使命を完ふし手並の程を褒められんとて復命を急ぎつ〻ある忠僕、嫁入道具も既に完く

整ひ明日の黃道吉日を腰元になぶられ乍ら待ちつゝある令嬢、昨夜めで度輿入の式を擧げ新枕交せしばかりの花嫁、十年ぶりに海外より歸朝し昨日神戸に着き明朝は最愛の妻子を見んと喜び勇んで東行の汽車に乘りし旅客皆な此震災の當日に希望滿々たる軀を空しく土中に埋めぬ

久河より吉報ある日を屈指り數へて今日か明日かと待ち座敷も兎角休みがちなりし小稻數日前久河よりの迎ひとて出入の男二人名古屋より來りければ小稻の嬉しさ何に例へんやうあく立派の「引祝ひ」町内に配りサン〴〵に朋輩にもお茶屋にも羨まれもし惜しまれもしたる上後の始末は一切一人の男と下女の「お里に托し置き自分は迎ひの男の中一人を供につれ一瞬千里の汽車も猶ほ遲き心地して名古屋を指して發足しぬ此日は恰も十月廿八日大震災の當日、今新橋を發したりとの電報のみ久河の宅に來りて其人は其日も其翌日も翌月も習年も終に來らざりけり……天無常！

《第二十六》

心ありて見れば咲き亂るゝ花も祇園精舍の鐘の聲なり昨日までは名は敎坊の第一部に屬し五陵の年少に爭ふて纏頭させし尾花屋小稻あれ今日は色もなき香もなき一個の髑髏となりて久河に無常を感ぜしむる種となりしこと盛者必衰の常理とは言へ實に千秋の恨事山砥は磨滅することあるも此憾みは爭でか盡きることのあるべき

花も月も御身あればこそ、御身を先だゝせてわれ獨り此世に殘るも何かせん山盟海誓、此久河御身を終

身の伴侶と思ひ心に種々の希望を畫き風をも雨をも憂さも辛さも只御身あるがゆへに忍べり御身なければ久河無きも同様なり久河の体軀はあれども久河の精神は枯れたるなり「誰知無定河邊骨、元是紅閨夢裡人」アヽ此髑髏、此髑髏、此髑髏は都門三千の紅粉社界に嬌名高かりし小稲のなれの果か羽色めで度山鳥のおろの鏡に向ひて眉黛に霞を引かる口紅に笹色見せし當年はかく成り果てんこと夢にも〳〵思はざりしものをアヽ思へば〳〵定めなき世の中や

髑髏に向ッて靜坐瞑目思ふ所果して何事、感ずる所果して何物、無常、無常、無常！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

院長の職を擲ち學士の名譽を棄て万般の繫累、万般の希望を泥土に委し只數百卷の書籍と一個の髑髏とを携へて飄然名古屋を去り小稲が菩提寺と聞えし東京小梅村長慶寺の片傍に草庵を結び「千秋追慕之碑」を建て朝夕の回向に餘念なきは久河滋二郎、別號無常隱士にぞある

其後幾たびか物變り星移り無常隱士も僅かに杖を手頼に歩くほどの白頭翁とはなりけり去れども何時までも〳〵變らぬものは此妻もなき子もなき隱士が亡情人の墓に向ッて朝夕回向することの一ツなりけり村内の患者を治療し其報酬にて其日其日の生計を營めども自ら奉ずること至ッて薄く僅かに寒暑を凌ぎ饑渴を凌ぐの外慾も望みもなき此老翁外見には何の苦みも樂みもなきやうなり

古稀に近き白髮の老翁夜更け人定まりて後草庵の一室に髑髏を孤守し涙に袖を濕すこと彼の人死してよ

り四十餘年の今の後までも曾つて渝らず
彌生が岡の黄暮に春雨を唄ひ不忍池の曙に迎酒を酌みし時此二個の薄命の塊、何ぞ今日あるを知らん實
よ水の流れと人の行末は

（大　尾）

◉百々逸釋義　にんげつ戯稿

（一）

『主の歸りが遲いにつけて留た昔を思ひ出す

妾も元は日本橋で五本の指に數へられ隨分人にも弘く知られた芳野屋の小歌源氏車の方樣と思ひ思はれ浮名立てられては意地となり互ひに面白きことと華美なこと仕盡して遂に首尾よく思ひを遂げやがて「れ」の字の名を呼んで島田も野暮な丸髷に無理酒飲まぬ身となりて數ある朋輩衆に羨まれしにけふ此頃の主の浮氣を聞かぬやうにしてゐても耳に入る世間の噂、藝妓もあらうに撰りに撰りて葭町に鞍替へせし松屋の小靜、元妾と一緒に芳野屋にありし時ハ姉妹同樣に仲善く交際ひ憂さも辛さも語り明せしあの小靜と馴染を重ねらるゝとは何を恨みての面當か男も男なら女も女なりヱヽッ腹が立つ今頃はアノ奥座敷で水入らずに……いッそ是から蹈込んで……イヤ〳〵商賣人の時は女房悋氣見ッともなしとて兼々笑ひし身が何うしてそんな淺慮なことが爲れやうぞ……モウ今夜は一時過ぎ又お歸なきことか、アヽこれに就ても留めた昔を思ひ出す

（二）

『思ふ心は只一筋よ三筋に鳴るのも浮世ゆゑ

『上邊は浮かれて流れにすめど眞は動かぬ月の影

主あればこそ此生命妾の心は奥の奥まで知りながら今更何を疑ぐらしやんす疑ぐらしやんせ〳〵嘘で涙がこぼれるならば枯れし柱になぜ花咲かぬ晴れし月夜になぜ雨降らぬ三筋に鳴るのがれ氣に召さずば此撥に恨みをなせ被仰らぬ水に浮かるゝアノ月影を主しは何と見やしやんす影は三ツ四ツ五ツに碎くれど形は一ッでムんすぞえ主と首尾して一言を十言に聞く一日を樂しみに殘る九日の悲しさを忍ぶわが身を泣かせるばかりが氣强い男の能かいな叩いてお腹が愈るなら心まかせにしたうへでれ目出たいやら羨ましいやらのお話しでも早う聞かせて下さんせ。ナニ目出たい話しとは。おかくしなさるお伊勢屋のお孃樣は何時れ輿入でムんす。夫を其方は何うして。知らいでかいな何ぼうらツかりの妾でも主に關はる事ぢやもの人が知せずとも虫が知らせてくれまする人に嬲られて嬉しがるほどのゝろい此顏を何うして立てゝ下さんす。氣樂さうに目出たいとやら羨ましいとやら言ふて貰ふて有りがたけれど其方に恨みらるゝ程我顏色の不機嫌なるも實は其緣談が苦になればこそ、小菊。アイ。叱ッ耳をかしな。

（三）

『無理はないぞへアノ人ならば實いわたしも惚れてゐる

チョイと小梅ちやんけうのお客は惚れても損は行かない好男子ぢやないか先づ色は淺黑いが何點となく水際が立ッてゐてキリヽッと締ッてゐる顏で笑ふ時には限りない愛嬌があッて服裝が氣意で人品が鷹揚

のやうで万事に行屆いてゐて言ふことに無駄がなくッてチョット喉が善くッてれ酒も程善く飲み洒落も程善く言ひ年が勘平さんぢやなけれども三十になるかならずで女房がなくッて。オヤ〳〵小米ちやんお前は女房の有る無しまで知ッてゐるの。ナアニ知ッてゐるといふ譯ではないが無ければ宜いと思ッてゐるのサ屹度家には公債證書が澤山有ッて鐵道株も澤山持ッてゐて土藏も三ッや四ッは有るだらうそうして屹度他日國會議員にでも擧げらるゝお方だらうと思ふよ加之に芝居と小説が好きで女子を殘酷取扱ふことゝわたしの嫌ひの蒲燒が嫌ひに違ひないよアレで浮氣ッぽくさへ無けりや一苦勞して見たいよ。オヤ〳〵お前が餘んまり喋ッてゐるから家の前を通過ぎやうとした。此時某樓に爪彈きの忍び駒「無理はないぞへアノ人ならば實にわたしも惚れてゐる」。オヤ。オヤと兩妓顏見合せて言葉なし

《四》

甲　『逢ふてしみ〳〵話しもせぬに歸しや歸るか義理知らず

乙　『膝に持たれて目につば附けりや上では脊中をなぐる眞似

貴郎に別れて三月の其間泣てばッかり居りました斯程浮氣な主とは知らず迷ふたは妾しの罪なり去れど迷はせたる主の罪はまだ〳〵重し今宵も明朝も歸すことでは厶んせぬ稀に顏見せてまだしみ〴〵と談もせぬうちにモウ歸るなどゝ何處を押せば出る言葉ぞ左樣情剛者には何時爲りました旅といふ者は怖いものなり僅か三月可愛男を旅へ手放せし爲めあたら男を情け知らぬ義理知らずの惡性者になしたり夫とも

久しぶりでのお歸京もへまだ廻る所が澤山あると被仰るのか、サア夫ほど顔を見せねば叱らるゝ所があるなら無理止は致しませぬ妾が逢ひたいと思ふ心も先方で逢ひたいと思ふ心も同じとなれバ羽衣さんの所でも都路さんの所でも顔を見せてお出なされ。夫程お邪魔ならドレ箒でも立てられぬ内に歸ッて膝吉と脛吉とでも抱いて寢ませう。と男は少しムットして煙管を筒に入れ立ちかゝれば女は膝に縋りつき袖を取ッて離さゞれば男は。エヽッ夫な初心な手はポット出の書生さんにでもするが能い。と又立あがれば、エヽッ貴郎……貴郎餘んまりな思はせぶりで厶んすか夫とも本氣で厶んすか。本氣かとは何の痴言追出されても歸らぬ程の意苦地なしにハまだ成らぬ積りだ。夫程行かねバならぬ所があるなら主に預けてあるものを妾に返して行かしやんせ。ナント預けたものとは。モウ忘れてか主の胸には妾しの魂が預けてあるはづ夫を出して貰はねば夢にも現にも迷ひの種にあッて果ては人知れず泣かねばなりませぬ。折から金蘭さんへ／＼八番のお客様へチョイト顔を出して下されと呼ぶは新造お咲なり。今日は心持が惡いゆへお前宜い樣に言ッて歸へしておくれ花魁は猶二三日は可愛イ人の側を離れることは出來ないと言ッて……エヽッ貴郎はまだ何を思案してお出なさる下に居て下さんせ。と男の膝に持たれかゝりて泣く(甲の解)

此の如く膝に持たれかゝり乍ら女は目につば附け男は此古狐めと手を揚げて脊中を撲る見得よろしくある是れ女は四十八手の裏表を知り盡したる山に千年海に千年の手取者男は臍の下に毛のあるすれッから

い
し知らず此夜更衣の無心首尾よく叶ひしや（乙の解）

（五）

『素振りて心は知れそなものを歸りや歸すかこの雪に

ナニ、宅の首尾を案じるからと、ヘンお爲ごかしはモウ少し耳が遠くなッてから聞きませう今晩はつもる話しがあるゆへ是非來て下されと是非の字を初めに二ッ中程に五ッ終りに三ッかへす〲もの二行りの中に又二ッも書いてあるゆへヨク〲の急用だらうと取る物も取り敢へず山阪越へて來て見れば飛んだ風變り自惚の罰が當ッて「それだやお歸りなされ」とは何んな撥で何處を彈けば其んな音色が出るとサ憤ッた所が肝腎の御本尊が此有樣ぢや仕方がない馬鹿々々しい宅の首尾を案じる位の御親切があるならば初めッから迎ひの手紙を出さぬが宜いや、ハイ〲れ茶を挽きさうな時は何時でもお呼出し下さいお埋合には役に立つ立派な案山子男ですドレ眞正に歸らうか運の惡るい時は惡るいもので雪までが降りあがるとお義理一片に止める袖をふり放し澁々出て行けば表を通る醉客の放歌「ふられて果報といはるゝよりも稀にや因果に迷ひたい」エヽいま〲しい辻占までが馬鹿にしあがる

（六）

『若も万一見附られたら其時や兄だと言ひぬける

今夜は旦那は濱へ往ッて明後日でなくちや歸りやしないから、緩くりお身腰を据てれ飲よ。其奴ァ有難

いだがお新下女のお初は何處へ往ッた。今夜ハ圓朝が錦亭に掛ッたから夫も聞たし宿にも一寸用があるからといふから緩くりと一晩泊ッてお在と先刻家を出してやッたよ。何から何迄上々首尾道理で酒が甘く飮めると思ッた加之に乃公の好な酢蠣はどうしてもお手料理とは思はれぬ流石はお新樣々々。ホヽヽ芳さんお前ばかり飮ずとチッと妾しの方にも巡してお吳れな。成程こりや惡かッた。と男ハ盃を女に献せば女は男に波々と注せながら、ねヱ芳さん今更いふも野暮なからツイしたことから深くなり旦那の來ぬ夜に首尾をして逢引するのも並大低の苦勞じやないヨ少しハ夫をお察しなら昨夜の樣に腹を立て洲崎などでヤケ酒呑むやうな水臭い所爲は止しておくれ。成程然う言はれて見りや一言の申譯もないが併しお前も今ハ立派な圍者吾妻屋で小新とて柳橋で伊達を賣ッた時とは違ひ山形さんの御愛妾目も鼻もない樣にして可愛がられて見りや其處はお前も人情で嘘から出た誠となり、しッかりしめて甘へることもあるだらうと思ひやア乃公だッて餘り氣持がよくハねへ人の花の盗見はハテ〳〵辛いものだ。馬鹿〳〵しいナンボ妾しが茶人でも夫な量見ならわざ〳〵お前を情人にやしないヨ、ナニ、山の手の清心尼（茶の師匠ならん）の一弟子だからと……人……他の苦勞も知らないで。コレサ乃公が惡かッた然う怒るな……夫は然うとお身腰を落つけて飮むハいゝがよくある奴で旦突放意と留守を見せ氣を許させ程を計ッて裏口から密夫見附たなどは御免だぜ。ホヽヽ心配おしでない旦那の鼻毛は何本で胸の深さハ何寸とチヤント知ッてゐる妾し夫なドヂな事はしないヨ、若も万一の要心に兄が一人あッて今は北海道へ行ッて

ゐると兼々旦那に聞かせてあるヨ

◉人文子

石橋忍月稿

忍月漫筆を綴り合せて假りに人文子とは名づけたり素より暗から暗に葬らるべき身が遂に或る人の煽賞に乘せられて明所へ恥晒しに出ること丶はなりぬ是れ何かの因緣か

一、美術的思想

金錢の奴隷となりて劣情劣慾の狂熱にうなさる丶の徒何ぞ共に斯の審美を語るに足らん吾人は信ず造化か人間に與へたる美想は實に靈妙至高のものたるを美術家は啻に時日が生み出す現在を永久に保存するのみならず亦た塲所に於ける物体を不朽ならしむる者なり(プラテンの語)幽谷に佳人あり蘭といふ一に何ぞ秀逸なる海底に佳人あり珠といふ一に何ぞ玲瓏なる而して斯の幽谷斯の海底は人跡の及ばざる所なり眼光の達せざる所なり然れども斯の蘭斯の珠を携へ來りて吾人に紹介する者は亦た是れ此美術家あり嗚呼美想――天授の能たる美想、卿は馥郁の花を以て人生の奥底を敷つめ眞綿を喜中に採り藥劑を苦中に選び光と眞理の古井より「明解」其者の反照を招かんが爲めに黃金の導線橋を天より心に架する者なり此頌を爲すもの豈に只チフリス(魯國市名)の哲學者のみならんや彼の一塲の算盤を將て至高永遠玉の如く水晶の如く玲瓏なる美術を誣ゐんとする者鶯を屠りてロースを調理するの忍をなす寧ろ憐むべし美想は猶ほ夏日炎天の旅客に惠まれたる樹陰の清泉の如し塵界の狂熱蓋ぞ來りて此樹陰の清泉を一掬せ

ざる

二、「美」と算盤

世人往々曰く吾國は貧乏なり宜しく實利實益のことを謀りて美術の如き贅澤なることに從事すべからずとア丶何ぞ誤れるの甚しきや「英」は至大にして亦至微なり、智、意、以外に立つ情の主宰する所あり故に算盤的の思想を以て之を測度せんとするは、掌を以て大海の水を量ると一般なり夫の義家が勿來關外櫻花に對しての風流もナポレヲンが陣中に詩卷を携帶せしの風流も馬鹿げた事なりと擯斥し了る算盤的思想家が朝夕隨喜崇拜して止まざる黃金の大權力あることは吾人も確かに之を認む然れども之を以て世界唯一の大權力となす者あらば吾人は其賤劣を笑はざるを得ず況んや是を以て彼の滔々たる紳商紳士輩の如く劣其劣慾を漏らし罪惡を犯し純潔なる者無邪氣なる者を薄命に陷るゝの器械となすに至つては復た言ふに忍びざるなり若し富士山動いて海上に立つの世に「美」と算盤とは兩立せざるものとなれば吾人は寧ろ算盤を棄て美を抱きて水中に投せんのみ

三、美術の妙

美は主觀的の感念なるが故に人若し美を感ずるの心を脫離せば世に美なる者なし美の妙は化學者の分析に於けるが如く明細に分拆定義するを得ず然れども其分拆定義するを得ざるこそ却つて其高雅靈妙なる所以なれ抑も滿圓充實せる觀念は人間不完全の語を以て其大を形容し得べきにあらず

或る人孔子の仁の言ひ盡す能はざるを說きて曰く『東坡の詩に（和錢安道寄惠建茶）胸中似レ記故人面、口不能言心自省と夫れ一椀の茶味尙ほ子細に評すへからず之れ胸中茶味を暗せざるに非ず口言ふ能はざるのみ』と吾人美術の妙に於ても亦た然か言ふ

四、美術の永遠不朽

美術家が美術品を作らんとするときは永遠不朽を期せざるべからず千載の下をして欽仰百回措く能はざらしむるの覺悟なかるべからずミカエル、アンゼロの繪畫に於けるゲエテーのファウストに於ける甚五が彫刻に於ける皆な然らざるはなし故に美術家にして巧妙秀逸の美術品を作らんと欲せば幾多の苦心經營幾多の血淚汗を積まざるべからず咄嗟の間に仕上げて敏捷に誇るは迂の甚しきものと謂ふべし試みに美術の主要素たる詩に就て言はんに古人が先生の嗔を怕れずして天下後世の笑を怕れしが如き又語不レ驚レ人死不レ休と吟せしが如き皆な此覺悟あるが故なり

五、詩は一字と雖も苟も下すべからず一字佳ならざれば全作佳を失ふ

昔任翻といふ人台州寺壁に題して曰く前峯月照一江水、僧在翠微開竹房と既にして去る觀る者あり筆を取つて「一」の字を改めて「半」の字に作る任翻行くこと數十里乃ち「半」の字を得て亟かに回り之を改めんと欲せしに既に人に改めらると傳ふ知るべし一字の工才力自ら長短あるを嘗て弘仁帝小野篁に謂て曰く阿陽館に遊んで一聯を得たり曰く閉閣唯聞朝暮鼓、登樓遙望往來船と篁曰く御製大に佳なり唯「遙」の

字を改めて「空」の字に作らは益々佳ならんと上曰く是れ白居易の詩にして「空」に作る今特に一字を換へて以て汝に試むと因て以て古人用意の周到なるを知るべし吾人は偏に方今の詩人畫家が此覺悟見識なきを憾む古來名刀を出せし鍛工が工事に從ふや沐浴齋戒肉慾を斷ち食慾を戒め神佛に祈り滿腔の熱識を工事に注ぎて復た他あるを顧みざりしが如きは實に百世の下に求むる所あればなり美術家たるものゝ能事何ぞ一時兒曹の歡を買ひ凡俗を瞞するに在らんや（梧窓詩話參考）

六、美文

美文とは則ち美術的の文字なり詩を別言したる者なり單に詩と謂ふときは漢詩と思惟するものもあらん結語整調の文字のみと思惟するものもあらん然れども吾人の詩即ち美文なる者は漢詩和歌俳諧俚謠長歌等結語整調の文字は勿論戯曲小説奇話比喩談等の散文と雖も美術的の文字は盡く詩と謂ふなり何となれば吾人は外面即ち形式上に美あるが故に詩と謂ふに非ずして內面即ち精神上に美なるを以て詩と稱ずればなり泰西にても詩に廣狹の二義を有せしめ狹義の詩は單に結語整調の文字を指し廣義の詩は吾人の所謂美文を指す然れども一般に詩學を論ずるときは之を廣義に用ゐるは泰西詩家の慣用する所なり文とは何ぞや曰く全然一色見て趣味なきは文にあらず起伏なく高低なく彌望平原なれば以て文と謂ふべからず文とは我俗語にて「あや」「もやう」と謂ふに均し一花一鳥を書くに幾多の曲直線と幾多の濃淡色とを要せざれば美術品たる繪畫とならざるが如く文にも亦た幾多の餘情風趣と幾多の意匠經營とを要す

るや明かなり故に裁判傍聽筆記の如き電信用文の如きハ眞正の文といふべからざるは明かなり文に事實の文と藝術の文とあり事實の文とは史論傳記記行等にして藝術文とは詩（廣義に於ける）なり（藝術の文即ち美文、美文即ち詩）

七、美文の効果

美文とは見て以て人ゝ活動幽玄美妙の感を起さしむるものなり人間の性情生活と意思生活とが文字の働きに因りて美術的に發揮せられたるものなり、「妾は良人に逝れて獨寢淋し」と露發して之を言ふときは寡婦の述懐何の風韵もなく何の餘情もなく聞く者亦た些少の同感だに起さず是れ美文にあらざるなり然れども之を「起きて見つねて見つ蚊張の廣さかな」（千代）と言ふときは無限の美妙を感ずるに非ずや其他吾は悲しき爲に泣くに非ず口惜しき爲めに泣くと云ふ是れ未だ美文にあらず然れども「悲しい涙は目から出で口惜しい涙は耳からありと出るならば云はずと心見すべきに」（時雨炬燵）と云へバ美文なり（右拙著想實論の一節）又痴女情人を戀ふるの光景を寫すに當り戀しくと言ふて「戀」の字を百字重ぬる共其狀を寫すに由なし然れども之を「ねつかれぬ宵は猶戀しくて寢かさぬ時を思ひ出す」（ふでのかさ）と言ふときは戀々たる痴情の光意彷彿として眼前に映出し人をして同情同念を惹起さしむるに非ずや其他頼政が昇位せざるに平かならずして「木の下に椎實を拾ふて世る渡るかな」と吟せしが如き清少納言が簾をかゝげて香爐峯の雪を見せしが如き皆な美術的の思想が外形に漏れたる者此間に意を了するものにあ

らずんば其趣味を解する能はず詩人たるもの常に此意を以て筆を採らば所謂美文の神靈には逢ふを得ん

八、美術家の覺悟

美術家たるものは滿腔の誠なかるべからず誠あれば良工良作期せずして來り會せん誠は血と涙の結晶なり如何なる地帶如何なる時代に於ても不朽不磨なるは誠より出でたる美術品なり鬼神を泣かすの應感力あるものも幽玄を穿つの妙あるものも皆な誠より來らざるはなし

美術家は常に社會より一等進歩したる眼孔を有せざるべからず又進んで止むを知らざるの決心なかるべからず然れども想像すべからざる無數無限を想像して妄想家たる勿れ「世途の入口には既に無際涯の橫はりをるなり然れども聖賢は常に狹き範圍に停まるなり」善い哉斯のシルレルの言、是れ吾人が曾て拙著想實論に於て論ずる如く想と共に實を重ぜよといふ所以なり自ら誠あれば信仰あり信仰ありて初めて玆に大創剏を成し常に社會より一等上に位し之を導き之を啓き之を豫言することを得るなり信仰なる哉

九、葛飾北齋

葛飾北齋は近世浮世繪の名家なり目下兒童走卒と雖も其名を知る然れども其如何なる經歷、生活、流風、性癖を有して如何なる家庭、交遊に圍繞されしやは吾人之を知らんと欲して知る能はざりき頃ろ葛飾北齋傳(上下二冊東京淺草駒形町小林文七發行)なる新著を讀み其奇行矯跡を知り其脫俗超凡の偉人物たる

ことを知れり此偉人去つて僅に四十餘年一人の遺族なく墓前亦た一炷の烟なし而して其墓所の何處に在るや之を知るもの亦た少なし嗚呼久しい哉美術家が紅塵万丈の中に埋沒して世人の厚遇を受くる能はざるや嗚呼甚い哉社會が秀吉頼朝等ハデな仕事を爲したる人を記臆して陋室閉居孜々美妙の感化力の創作する美神の愛兒を看過するや

北齋が畵界の一大名家にして其繪畫の勢力が小說演劇に向て光彩を增したるが如き貧に安んじて王侯貴族に屈せず美術を以て金錢の奴隷となさゞりしが如き一代の小說家馬琴に屈せず一代の名優梅幸（三代目尾上菊五郎）を罵倒して後ち心服せしめしが如き奇骨飄逸人をして欽仰百回塵懷を一掃せしむ北齋は實に貧に生れて貧に安んじ貧に死す八十餘年の生涯貧を以て貫く繪畵の報酬を紙に包みて送り來れば包中若干なるやを顧みずして机邊に投出し米商若くは薪炭商に取らす彼れの全身は是れ繪畵に献身せしものなり彼れは金錢口腹の慾を顧みずして死せり彼は克己自信安心立命の美德を有するものなり所謂信仰心あるものなり彼れ死に臨み大息して曰く『天我をして十年の命を長うせしめば』と暫くして更に謂つて曰く『天我をして五年の命を保たしめば眞正の畵工となるを得べし』と言ひ訖りて死す其大進取の氣象躍然として活動するゝ道に志さんものゝ應さに三復服膺すべきの言なり彼れ生涯一身を繪畵に委し筆を將軍の面前に揮ふの榮を榮とせず其名海外に轟き和蘭より書を請ふもの頻繁なるの榮を榮とせず更に死に臨んで眞正の畵工とならんが爲に更に五年の歳月を惜む眞に健全高上の信仰心あるものにして

『美神』の愛兒に恥ぢざるものなり
方今社會の嗜好美術的の方向に進まず社會の眼孔美術家を尊敬優待するの道を知らず滔々たる俗物、金錢、虚榮、淫樂、苟安を以て唯一の人生の快樂と心得復た他に崇高雄大の者あるを知らず人間の此世にある責任を知らず吾人葛飾北齋に就て玆に一言を費す豈に好事ならんや

十、敏捷は運筆の能事に非ず

賈浪仙が詩に云く『兩句三年得、一吟双淚流、智音若不レ賞、歸臥故山秋』と又金門歳節に載す賈島歳除を以て一年所得の詩を取り酒を以て之を酹すと見るへし古人の心を作句に用ゐる此の如くにして又能く自ら衿重するを其他孟東野が『夜吟曉不レ休、苦吟鬼神愁』といふが如き盧延遜が『險覓天應レ悶、狂搜海亦枯』といふが如き老杜が『語不レ驚レ人死不レ休』といふが如き又僧貫休が句を得て先づ佛に呈するが如き亦皆な浪仙の類あり凡そ詩文なるものハ永久不滅を期せざるべからず千歳に亘りて能く宇宙の大道を照らし天地の機を穿ち人をして吟誦賛嘆措く能はざらしむるの覺悟なかるべからず
近世操觚者の淺薄蕪雜なる一に何ぞ甚だしきや彼等は一雨毎に殖るゝ玉杓子の如き『ぼうふら』の如き一時消滅的の文を作るなり憐むべき哉吾人元來才を用ゐるを愛せずして思を用ゐるを愛す才を用ゐるに長ずる者は落筆章を成し千言立どころに成ると雖も粗醜率易唯以て兒童を瞞すべきも具眼一見疵瑕百出す思を用ゐるに長ずるものハ沈着融渾にして錬磨句を成す咸く是れ無瑕の美玉なり才ありてすら猶此

の如し況んや之れなきをや今人其才なくして徒らに敏捷を以て運筆の能事となし倉卒苟且の間連篇累章以て人に誇る而して之を讀めは淺薄無味只人頭をして岑々白日睡を思はしむ更に道ふに足る者なし彼等宜しく賈浪仙輩の爲す所を傚ふて可なり

十一、日本詩の完美成熟したる連聲

我國にて院本脚本等を見るときは屢々連聲の句を見ることあり此連聲は即ち泰西のアルリテラションなる者乎『れやなればこそ子なればこそ』は『お』と『子』とオ行の通聲にしてアルリテラションなり『ゆだんもすきもあらばこそ』といふが如きもウ行の通聲にして亦た然り

苦もなくうら門うち破り表裏一度に相圖の笛、心も、合に相詞天よ川よと亂れ入る　（忠臣藏）

あたゝめられつあたゝめついし原みちをあしびきの大和は爰ぞふる里の　（梅川忠兵衛）

右等の文句を咀嚼翫味するときは其連聲（アルリテラション）あるが爲めに意味をして高强ならしむるを悟るべし蓋し連聲は意味を高强にする者なり急速の光景には急速の意を高め艶婉の場合には艶婉の意を强ふす是れ連聲の特色なり

吾人我俳句中に於て非常に進步成熟したるアルリテラションを發見せし蓋し此の如き圓滿完美なる者は恐らく西洋詩屬中に於ても稀れに見る所なり芭蕉翁の句に曰く

うたがふなうしほの花もうらの春

はなを宿にはじめ終りやはつか程

一音貫通凡手にあらず見る者宜しく言外に味ふて可なり

かねつかぬさとは何をかはるの雪

たこつほやはかなき夢もなつの月

一行總通『イ行』と『ア行』との頭韻あるものアルリテラシヨシの上乘なるものと云ふべし

其他

松魚うり、いかなる人を、よはすらん

笠島は、いつし五月の、ぬかりみち

等の如き中間に總通の音あり是れ亦たアルリテラシヨンの變体として珍重すへきものなり噫俳句は日本詩の最も進步發達したるものにして且つ最も國民的の詩として廣がりたるものなり又爰に句脚に總通の音(即ち韻脚)あることをも併せ說き以て如何に吾俳句が進步發達したるかを報せむ

芭蕉翁の句に

樫の木の　花にかまはぬ　姿かな

是れ『ナ縱行』の音に總通したるものなり又

　象潟や　雨に西施か　ねむのはな

は『ア横行』の音に總通するもの共に押韻の妙を得たるものに非ずや

次に一句に換韻する者あり第一句の句脚と第二句の句頭と連聲し、第二句の句脚と第三句の句頭に連聲し互ひに相結合して相響くものなり例ば

　誰か聟ぞ　齒朶に餅おふ　うしの年

の如きは誰か聟ぞの『そ』と齒朶にの『し』と『サ縱行』の五音に通し餅おふのふと丑の年の『う』と『ウ横行』に總通す或る人之を評して上は父字にして下は母字なりと言ひ以て一句の魂となす

又左の二句

　年々や　猿に着せたる　猿の面

　夕立や　田も三圍の　神ならば

の如きも之を分析するときは共に第一句の韻脚と第二句の句頭と第三句の句頭と相連聲して相應呼し且つ中句を二分すれば所謂換韻ありて全句の要所とも稱すべき所に五音の切れぬ樣に鎖を施して以て之を結ぶ之れ偶然に出でたるか將た推敲に出でたるか吾人は之を知らずと雖も兎に角連聲の上乘なるものと謂ふべし

吾人是を以て毎に謂ふ吾俳句は國民的の詩として最も擴がりたるのみならず亦た最も完美發達したるも

のなりと斯道の士幸に其美を發揚して研究する所あれ是れ美術の一部たる詩を發揚する所以なり

十二、美育と社會

人の人たる所以人の萬物の靈長たる所以人の禽獸と異なる所以は眞善美の三ッを知るに在り美の人心に及ぼす影響及び人生が美を要する程度は敢て眞と善とに一步も讓ることなし方今世人智育德育體育と此三育を併べ唱へて以て敎育の能事此三育に盡せりとなし而して復だ世に美育なるものあるを知らず美育は之を性情意志に訴へて觀察的感覺的の力を養成し併せて至高靈妙の感化力を與ふる所以なり其啻に高等敎育のみならず普通敎育に必要なる豈何ぞ彼の所謂三育なる者に下らんや

世は國會議場に於て喋々する者は其ホコトンたるとホッキヨたるとを問はず之を厚遇するを知るも美術家を厚遇するを知らず內閣の椅子に列して三千の屬吏を指揮する者ハ其卑俗なると凡庸なるとを問はず之を知るも瞑目靜想孜々刻苦美妙の感化力を創作する茅屋裡の美術家を知らず今の世我日本に大美術家の出でざるハ主として社會の罪あり社會が美術を待遇し美術家を尊敬するを知らざるの罪なり

十三、靈の交通

美の妙到底言語に盡すべからず筆硯に由るべからず眞に美の妙を知るは自家の靈と美の靈と相交通して相知るに在り義なきものは義を知らず愛なき者は愛を知らず淚は淚を知り純潔は純潔を知るが如く吾人が美の妙を悟るも亦實に靈と靈との相會にして其間の作用や秘密にして默會なり不可思議にして光明な

り諸子請ふ美神に逢はんと欲せば吾人の區々たる辯說を聞かんより自家の靈性を發達せしめよ

十四、推敲

推敲は閑、寂、清、幽を愛す

閑、寂、清、幽の境は吾人秋天に於て最も求め易きを知る古人曰く「剪レ秋詩是刀」と

水畔　寒水孤鴈迷ひ夕陽遠花明かなり、橋危くして獨木横はり舟破れて平砂を閣す詩人此景に對して推敲を爲す必ず神に入ることあらん

月下　清光沙に滿ち蘆外一鷗飛ぶ此景宜しく詩家と畫家とに分與すべし

古來月下最も感懷多し家園、双親、情人、故人、曾遊、往事等總ての經過を想はしむるは實に月光の美妙力なり月下は是れ推敲の最適好境

郊外　無邊の暮山、幾點の枯本を菊老楓殘の間に訪ひ得て吟思を錬る是れ最も崇高健全の想を得るに適す

狂花、秋草、秋蝶、皆な多情詩人の眸中に映ずれば涙となり愛憐となり幽玄となり無常となり祇園精舍の鐘とならん吾人も亦た之に對し之を踏み之を見て未だ曾つて何物にか胸板を打たれざることあらず

山中　白雲紅葉夕陽の山、最も是れ詩人懷ひを動かすの處、塵襟を洗ふの松濤、木魚を叩くの老衲、伐木に餘念なき樵夫、詩句に入りて果して如何の響を起す

十五、暗合

古より詩家の思ひを搆へ想を錬る千種万種にして十人に十色あり百人に百態あり或は主觀的の觀察に長じ或は客觀的の觀察に長じ或は正寫を主とし或は曲寫を主とし或は敍事に長じ或は寫情に長じ或は淡粧を喜び或は濃抹を喜ぶ其人異にして其構思錬想の異なるは其面の異なるが如し

然れども彼等が宇宙を視、人文を視る人情常況の外に出でず故に十人十色の構想も期せずして仝一の軌道に相逢ふことあり洋の東西を隔て國語を異にする詩家にして此事あり況んや仝一の國に生れて國語を同じくするに於てをや

芭蕉翁の「くたびれて宿かる頃や藤の花」の句が獨逸の詩人リュッケルトの「羇旅」の歌と其の搆想を一にするが如きゲエテーの「歌人」の詩が幾分か李白の「天子呼來不上舟」の詩と其思を同じくするが如きは實に面白き暗合と言はざるべからず

權德輿が詩に

巫山雲雨洛川神。珠襻香腰穩稱レ身。惆悵粧成君不レ見。含レ情起立問ニ傍人一。

と結意極めて婦女の情狀を說き象想眞に逼る而して之と相類する者頗る多し請ふ試みに遜坡の詩話によりて之を擧げむ

朱慶餘が詩に

洞房昨夜停紅燭。待曉堂前拜舅姑。粧罷低聲問夫婿。畫眉深淺入時無。

韓偓が詩に

學梳蟬鬢試新裙。消息佳期在此春。爲愛好多心轉惑。偏將宜稱問傍人。

唐伯虎が詩に

春困無端壓黛眉。梳成鬆鬢出簾遲。手拈茉莉猩紅朶。欲挿逢人問可宜。

とあり此數作意趣同歸、暗合中の暗合と謂はざるべからず只其間に造語の深淺ありて自ら長短を表はすのみ（右梧窓詩話引照）

其他我俳人の句に於て奇絶奇類の暗合頗る多し今一々爰に列擧せず文學に忠實濃厚なる讀者若し是等の句を取捨綴合せば一篇の面白き「逸話」を作るに至らん

ア丶詩家の構想は實に人情常況の外に出でず是を以て其暗合往々此の如し所謂「閉戸造車出門合轍」もの歟

十六、探偵小說を火葬する詞

維時明治二十六年某月日忍月子淚香一派の探偵小說數十冊及び探偵小說を記載したる二三の新聞紙數百葉を火中に投じて之を葬る其詞に曰く

探偵小說は小說界に於ける獅子心中の虫なり小說の發達を妨げ其美妙の精神を腐敗せしめ其固有の馥郁

たる靈香を消滅せしむ吾人甚だ之を憎む之を火葬するも「詩美」の神靈は嗔り玉はざるべし

探偵小説は無心の小兒が淺草奥山に於て三文を投じて購ひたる「でん〱太鼓」若くは「風車」と一般自ら瞬時の玩具を以て居り瞬時の玩弄を以て安んずるものなり凡俗一時の歡を買はんと欲して飄忽變轉好んで其色の眩爛にて復た其理の淺薄なるを知らず痴女兒騃かに見て喜ぶべきも素より三復思ひ致して已まざらしむるが如きは探偵小説が夢想にも及ばざる所なり若し夫れ具眼の士が一見せば直ちに厭心を生じ嘔吐を發すべし夫の兒童が隨つて買へば隨つて破る玩具の生命も猶ほ三日間を保つと雖も探偵小説は三日の生命さへ保つ能はず何となれば彼は讀者に對し讀過さるゝ際に瞬間の歡を與ふるに止りて一たび其瞬間を經過せば復た之を省みる者なければなり憐むべき哉嗚呼探偵小説よ汝の身体はよしや坐隅の塵に埋れながらも猶存在すると雖も汝の精神ハ既に世に生れて瞬間の後ハ滅亡したるものなり故に今吾人が之を火葬して灰燼に委するも「詩美」の神靈は之を嗔り玉はさるべし

探偵小説はウドの大木なり其皮相は如何にも雄大なるが如しと雖も其用は方一寸の栴檀にも及ばざるなり術語の所謂小説の「大」を知らざる者なり「大」とは何ぞや精神意匠の大にして結構体裁の大を言ふに非ず龍踊り虎吼へ山倒れ海飜るの大光景を寫すも是れ皮相の「大」にして精神の「大」にあらず探偵小説ハ常に皮想の「大」に戀々として人に好奇心と忍心とを挑發せしむるの外毫も欲する所なく省みる所なし故に千言萬句も一時消滅的の文字にして永遠不朽なる能はざるなり彼は人間生活の現象を推摸観

玩して現象以外に無形の眞理を採り高遠を卑近の人情に徴するを知らざるなり今更言ふもむだなれども小說は終始「美」の約束を離る可からず若し美文ならざる探偵小說を作るを以て小說家と稱するを得ば裁判傍聽筆記を綴る人もはがき用文を綴る人も皆な小說家と謂はざるべからず彼等は實に「美」の何たるを知らず之を度外に置て自ら小說家なりと揚々誇言する者なり現今の所謂探偵小說なる者は美術的に發揮せられざるものなり美中に生存する能はざるものなり吾人は斯の如き意思なき文字を憎むと同時に亦た斯の如き不具不能力の怪文字が小說と云へる名稱を冐して揚々として世間に跋扈するを恥づ吾人は信ず斯の如き文字を火葬するも「詩美」の神靈は必ず嗔り玉はざるを

昔秦始皇は天下の書を燒き盡して狂名を百載の下に殘す是れ始皇の目的は天下の黔首を愚にするに在ればなり然れども吾人が書を燒くゝ文學に對する忠實の情より出で文學の進路を開發し其碍障を除去するの外他意あるあらず世人若し吾人を指して狂と云ひ酷と云ふも吾人は斷じて其の狂にあらず酷にあらざるを信ず

噫探偵小說よ汝は前生如何なる因緣ありて斯の不幸に陷りしぞ（然り吾人ゝ汝が一朝にして名をなし勢力を得たるを以て不幸と云ふ）啻に世間に對して不幸なるのみならず汝自身に對しても亦た不幸なり汝の名を成したるは眞の名を成したるに非ずして空名なり汝の勢を得たるは眞の勢を得たるに非ずして虛勢なり汝を迎ふる狂熱者の頭腦若し當初より淸冷なりしならば汝は體軀の未だ固定せざるに先つて悔悟

過を改むる所ありしならん吾人が汝を燒くは啻に「詩美」の神靈のみに盡す義務に非ず亦た汝に盡す義務なり汝をして煩腦の汚塵を脱し淨土の彼岸に達せしめん爲なり希くは汝盡未來際綠を探偵小說に惹く莫れ

告げ終りて後園に出て薪を重ね油を注ぎ之を焚く臭氣四方に漲り氛烟天を掩ふ幾百の魑魅罔兩朦朧として火烟中に現はれ飛んで彼蒼に入り其行く所を知ず忍月子忙然停止凝視するもの稍久牟

十七、殘酷の行爲

演劇に殘酷の行爲を仕組むの不可にして審美學的の基礎に反することは吾人曾つて之を論せしことあり(歌舞伎新報)夫演劇の材料は廣大無邊にして素より範圍を建て制限を設くべきものにあらず故に何種の行爲を寫すも何樣の人物を寫すも苟も『美』の其中に存在するあらば劇の本意に違ふ所なかるべし然れども戯曲を作り殊に之を劇場に演せしめんと欲するに當りてハ『殘酷の行爲』は忌むべきものと信ぞ種々なる關係よりして論ずるときは演劇に忌むべきものは猶は數多之れあるべしと雖も右『殘酷の行爲』は吾人實に其最も重もなるものたるを信ず

思ひ起す吾人が年齒漸く十歲前後なりしとき田舍芝居に於て夫の佐倉宗吾拷問に逢ふの場を見たり吾人は一種の惡感情を起し顏を掩ふて寸刻も其場の終るまでハ眼を擧ぐる能はざりき當時吾人の幼稚卑淺の眼光は素より演劇の何物たるをさへ辨知せず然れども吾人が當年過度に感情を害せられたるの一事は深

く記して今に至るまで忘るゝことなし一昨年（明治廿四年）東京壽座に於て家橘の松前屋五郎兵衛責苦に逢ふの幕を見たり然るに不思議なるかな之を見て惹起したる感情は吾人が十歳の童兒たりし時と毫も異なることなし去年（明治廿五年）十一月團十菊五の一座にて歌舞伎座中幕に演せし所の番町皿屋敷の阿菊が責苦さるゝ一段の如きも亦た同じ吾人が同座を訪ひし日隣座に在りし洋客數名此場の演せらるゝを一見するや否突然一同去て其席にあらず漸く其幕の終るを俟ちて再び席に就きしが如き蓋し吾人と感觸を同ふするものなるべし獨乙の某戲曲家曰く戲曲は須らく看る者に感動を與ふべし刺戟を與ふべからずと佳なる哉言や『殘酷の行爲』によりて人ハ感動を起さずして寧ろ刺戟を起すなり人ハ感動によりて哀憐を起すも刺戟によりては然らず感動には心の奥底より湧き出づる清淨無垢の涙伴ふも刺戟には此の者曾て伴ふことなし普通演劇にて人物の不幸薄命若くは數奇不遇等の逆境遇に在るを見るときは必ず多少哀憐の情を起すと雖も『殘酷の行爲』を見るときは拷問者呵責者殺害者等、其殘酷の行爲をなす者の極惡非道を惡むこと過度に且つ直接にして其應さに然るべき罪過を念ふの餘地を看客に借さず要するに『殘酷の行爲』は看客の感情を害し害惡の忍性を養はしむるの外一點として美妙の感を看客に與ふる所なし且つ之を風敎上より推すも無心の童女をして之れを看せしむること屢々なるときは知らず〴〵殘忍の性に慣れて非常の殘忍非道をも左程の殘忍非道と思はざるに至るべし加之前述の如く殘酷の行爲は罪過を念ふの餘地を看客に借さゞるが故に之を劇

場に演ずるは作の宜しきものにあらず又戲曲作者も特別の用意あるにあらずんば寧ろ忌み避くるを以て宜しとす

十八、戲曲に就て

近世文學を談ずるもの何ぞ夫れ源泉に溯らずして末流に誇言する者の多きや或は小説を評する者に只其結構のみを見て之に眩惑され其他を見るの明なきあり或ハ其事實の文たる史論を以て美術的の文學と同樣に取扱ひ史料の不完全なるが故に日本に文學なしと論ずるあり或は戲曲の種別を漫然に附し去りて此は『トラゲヂー』なり彼は『コメヂー』なりと言ふ者あり或る人シルレルの『ウヰルヘルム、テル』を評して巧妙なる『トラゲヂー』ありと言へり然れども『テル』ハ『トラゲヂー』に屬するものにあらず悲喜曲に屬するものなり吾人斯の驚くべき笑ふべきの誤謬を耳にし先づ此編を艸す蓋し已むを得ざるなり

詩は美術の粹なり戲曲は詩の粹なり戲曲は實に寫情詩の妙所と叙事詩の長所とを併有する者なり試みに見よ『心裡の感情』を寫し來りて之を人物に運轉せしむる者は戲曲に非ずや『既往の事實』を現在に呼び戻して目前に活動せしむる者も亦た戲曲に非ずや加之戲曲は舞臺に關繫する所少なからざるが故に繪畫術彫刻術建築術の粹をも有する者と言ふも不可なかるべし是れ吾人が毎に戲曲を以てあらゆる藝術の英を網羅する者と謂ふ所以なり審美學中最も有力にして高雅なる者と謂ふ所以なり獨り怪む吾が文學界何ぞ夫れ叙事詩の一小部分なる小説のみ盛にして戲曲家の少なきや否な少なしと言はんより寧ろ之れなしと

言ふの優れるに如かず依田學海二三の戯曲を著せしも其價値の甚だ高からざるを奈何せん福地櫻痴頃ろ歌舞伎座の爲めに脚本を草するも古人を切抜きて木と竹とを綴合するにあらざれは則ち「課題著作」の謚僻に陥り徒らに俳優の爲に情實の爲に道具建の爲に左右せらるゝのみ從來我國に所謂狂言作者なるものありと雖も奈何せん彼等は眞に戯曲の價値を知らず吾人は彼等の作りし脚本を其叙述法より見目的上より見材料採獲の點より見て其然る所以を證するを得るなり請ふ方今文壇の粹英諸子小說に用ゆる才筆の一半を戯曲に轉ぜしめよシルレルもゲヱテーもレッシングも曲戯家たりと雖も小說家ゝはあらざりしなり吾人の言ふ所は亦た是れ詩美神靈の本意なるを信ず吾人豈に一個の頑見を以て諸子を動かさんとするものならんや戯曲論を作る

戯曲論

第一章　詩体の分類

戯曲の何たる說くに先だつて吾人は先づ泰西の詩學を標準として詩体の分類を異說せん詩体に三種あり曰く叙事詩曰く寫情詩曰く戯曲是なり叙事詩は世界万物及び歴史上の生活を客觀的に叙記するものなり寫情詩は作家自身の意思感情を主觀的に直叙する者なり故に前者の性質は過去の事實にして話中の人物は三人稱なり後者の性質は現在の事實にして話中の人物は一人稱なり故に彼は傳記体にして此は判定な

り而して戲曲は此二者の中間に位し客觀的の材料を主觀的の材料となす之を別言すれば叙事詩の材料と寫情詩の叙述法とを結合により別に第三種の詩體を組織するなり

第二章　戲曲の定義

何に附けても凡そ定義ほど難かしきはなし吾人は一個の斷見によりて戲曲に定義を下す程の大膽わらずと雖も僅かに先進が敎ゆる所にたどりて其意を推度するときは

戲曲は既往に於る人間の行爲及び被行爲を現在となし之を其曲中人物の言語(Unterredung)に賴りて詩學的に發揮する者なり

と定義するを以て最も簡明穩當なりと信ず請ふ少しく之を解釋せん

(第一)戲曲は既往の事實ならざる可らず叙事詩が其材料を既往史籍上の事實及び人間世界の生活より採るが如く戲曲も亦然り既往といへる文字を嚴格に解するときは戲曲の出來事は屢々架空の想像より假設することわるが故に戲曲を以て一概に既往の事實ならざるべからずと言ふは誤れる者の如しと雖も茲に既往といふは實際既往に出現せし事蹟と云ふにあらずして只既往に在りしとゝ假定するの義なり故に詩に客觀的の想を叙するときは其架空たると假設たるとを問はず總て既往の出來事と見なすなり

(第二)戲曲は既往の事實を現在となさゞるべからず戲曲は叙事詩の如く材料を既往に採ると雖も之を叙述するに當ては現存に呼び戻し現存の事實として移植脫生せしめざるべからず是れ戲曲が常事兩詩体の

妙所を併有する所以なり既往を既往のものとして叙することも現在を現在のこととして寫すことも共に戯曲と云ふ能はざる所なり

（第三）戯曲は人間の行爲及び被行爲ならざるべからず戯曲は馬犬若くは猿等禽獣世界のことを爲すものにあらず戯曲の目ざすものは實に人間に在り人生の運命を説明するに在りあらゆる詩が最も多量に眞善美の智識を有する人間を目的物とし又目的物せざるべからざるは言を費すの必要なし次に戯曲は行爲被行爲を寫すものなり戯曲は活人の活動にして空想若くは意思等を主觀的に解剖するは戯曲の決してなさゞる所なり泰西の碩學等が「人と運命との間に生ずる動力と反動力とは戯曲の行爲を組織す」と言ふも必竟此意を異方面より明言したるものに外ならず

（第四）戯曲は曲中の人物言語に頼りて發揮されざる可らず例之ば心裡の所感を現はすに當つても寫情詩の如く作者自家の者として之を述べず曲中人物のものとして之を述べざるべからず故に戯曲には人物の言語のみより成りて地の文は之れなしと言ふも可なり（「言語」に「獨語」と「對話」（二人及二人以上の會話を指す）とあるは讀者の知る所なり）「言語」なければ則ち戯曲なし

第三章　戯曲の目的

戯曲の目的は既往の事實を現在に引戻して活動せしめ人間行爲の本性と被行爲の種類とを露發して以て外來的の想念を高强にするに在り戯曲中使用する人物の如何により事柄の如何により行爲に正不正の別

を生じ被行爲に難易の差を來す此行爲被行爲の衝突「コンフリクト」は結果となりて終に人の運命を說明す其說明や實演活動的の說明なり故に運命を說明すと言はんより寧ろ運命を實驗せしむと言つて可なり是に於て乎戲曲は美術中人に「同感」を與ふることの最も切なるものなり「自然の法則」を表はすことの最も著しきものなり

（第一）人生の運命爰に一人物ありと假定せよ數奇不遇にして不幸の境涯に沈淪したりと假定せよ彼を如何にして沈淪したるか之を表はさんと欲せば先づ第一に其人物の行爲の本質に尋ねざる可らず第二に被行爲の種類を窮めざるべからず然るときは自から人生の運命は說明さるゝなり其說明の巧拙―一歩を進めて言へば戲曲の巧拙―は一に其行爲の變化及び被行爲の難易正否を寫すの巧拙によりて生ずるなり運命とは神意の謂ひにもあらず所謂天命といふものにもあらず又怪異にもあらず古昔希臘人は人智の得て思議すべからざるもの即ち運命なりと思惟せり故に英雄豪傑の不幸に沈落するは其人の心之れを然らしむるにあらずして皆天意神命に出づるものなりと以爲へり（ヲフホクレス、ヲイリピデス等の戲曲皆此傾あり）然れども是れ古昔陳腐の解釋にして近世詩學家の採らざる所なり近世は運命を以て「都て人の意思と氣質とに出づる行爲の結果なり」と解釋す是れ吾人の同意する所なり故に行爲は意思と氣質とに伴はざるべからず運命は行爲と被行爲とに伴はざるべからざるなり

（第二）同感單に薄命は誠にあはれむべきものなりと言ふも吾人は未だ外來的の想念を高強ならしむる能

はず正義の復讐は誠に壯快なるものありと言ふも吾人は未だ外來的の想念を高强ならしむる能はず然れども茲に若し靜姬が鎌倉社殿に繰絲曲を舞ふの一段或は大石義雄兩國橋引上げの一段を見るときは眞に同感に打たれて憐れなること壯快なることの如何なるものかを知るを得るなり故に戯曲の巧拙は亦た同感を與ふることの厚薄によりて判別するを得と言ふも不可なきなり吾人が前號の本紙上に論じたるが如く極惡非道若くば殘酷の行爲ハ感情を害し害惡の忍往を養はしむるものなるを以て之を注意するを要す感情を害することも想念を高强ならしむるは一なりと雖も其想念や審美學上純傑優美のものにあらず

（第三）自然の法則必然の結果に對しては必然の原因あり之を自然の法則と言ふ人をして天地間に自然の法則あるを知らしむるは戯曲の目的にして兼て其責任なり例之ば無常は自然の法則なり哲學は理により て之を說明し戯曲は情に訴へて之を說明す理によれば勃窣にして解し難く情によれば卑近にして能く意を達す故に哲學によりて說明されたる無常は少數の學者のみに會得を與ふるに止るも戯曲によりて說明されたる無常は婦人にも兒童にも車夫にも馬丁にも熊公にも八公にも會得を與ふるを得るなり試みに見よ戯曲を見るときは何人と雖も畏敬哀憐の情を惹起するに非ずや此畏敬哀憐は取りも直さず自然の法則（天道）に對するの畏敬哀憐なり噫人をして畏敬と哀憐を起さしむるは實に亦た戯曲の要なり

之を要するに戯曲の目的は第一人間行爲の本性と被行爲の種類とを露發するに在り換言すれば人生の運命及び自然の法則を說明するに在り第二外來的の想念即ち同感を高强にするに在りと謂ふべし

第四章　戯曲の種類

戯曲の如何なるものにして其目的は那邊に在るかは既に之を説けり請ふ是より戯曲の種別を説かん戯曲の種別は我國に於ては之をなすの標準なきを以て吾人は專ら獨乙戯曲の類別法を基礎として之を論せんと欲す是れ蓋し已むを得ざることにして亦た却て有益なることゝ信ずるなり

曲中に使用する人物の如何により事柄の如何により資料の如何により行爲に正不正の別を生じ被行爲に難易の差を來す是に於て乎其性質及び衝突《コンフリクト》の種類に從つて戯曲を三種に類別するを得るなり曰く悲曲曰く喜曲曰く悲喜

悲曲の出來事は多難的大望的の性質を有せざるべからず喜曲の出來事は順序的平坦的の性質を有せざるべからず前者は偉人俊士をして其力量識見德行の他に超拔するにも係らず不幸の末路に終らしむる所の衝突を有し後者は素志を全うし寃を雪ぎ仇を復する等總て幸福嬉笑の境に赴かしむる所の衝突を有す故に吾人は一を逆境的の衝突と稱し他を順境的の衝突と稱せんと欲す而して悲曲の性質人物事柄資料等調和して一つのエルアイグニスを作す性質とは即ち此エルアイグニスの性質を指すなり》と喜曲の衝突とを個々片有して全曲を爲すものを悲喜曲と謂ふ請ふ是より例を獨乙戯曲に惹きて猶左に之を詳說せん

《第一、悲曲》　悲曲には罪過《狹意に於ける衝突》なかるべからず罪過とは曲中の主人公自己の情慾に克つ能はずして自然の天則に反したる行爲をなし遂に身を慘憺の悲境に沒落するを言ふ彼れは衝突に打

ち勝つ能はず故に彼の運命は欝屈不伸の状あり又彼は多難にして忍耐あり故に氣象凜乎として犯すべからざるの概あり彼は大望にして冒險なり讒舌障毒數奇等の身心を纏ふことあり故に彼の行爲には常に不快の状あり又不快を抑制するの状あり之を要するに悲曲の主眼は觀客をして曲中主人公の心事を憫むと同時に天道を畏れ且敬せしむるに在り悲曲中にて最もよく罪過の光景を寫せるものはシルレルの『ワルレンスタイン』なり『ワルレンスタイン』が傑作と稱譽せらるゝ所以ハ實に罪過の發達及び歸終を自然に出だして天趣を兼たるに由る我『天の網島』（小春治兵衛）の如きも亦た悲曲の上乘なるものにして罪過を寫すに於て是尤傑出する所ありと言ふべし『壇浦兜軍記』の如きも其性質は純然たる悲曲なり夫の景清は不可抗力に向つて抗せんとす故に其運命は欝屈不伸にして終に素志を貫くこと能はず

悲曲は三種の戯曲中最も貴重の地位を占め且つ最も叙事詩に相近似す故に其資料の如何によりて再び之を三種に小分することを得即ち奇怪的、歴史的、人情的悲曲是なり奇怪的悲曲は神意神託呪咀怪異等總て人智の得て抵抗すべからざる衝突を脚色すグリルパルツセルの『ミデア』及びヘツベルの『ニイベルンゲン』の如き其一例なり歴史的悲曲とハ我國の所謂時代物の如く諸侯若くは國民等總て史上の事實に悲壯的の衝突を仕組むものなりシルレルの『マリヤ、スチユアルト』ゲエテーの『エグモント』及びハイゼの『ブルュテッス、ウント、カラチュス』の如きは之に屬す又人情的悲曲は我國の所謂世話物の如く家族の愛情坊間生活の状態等總て道義上若くは義理上の事實に悲壯的の衝突を仕組むものなりレッシングの『エミ

リヤ、ガロッチイ』シルレルの『カバン、ウント、リヒベー』及びブラハフホグルの『ナルチス』の如きは此類に屬するものなり

《第二、喜曲》　喜曲には多難的大望的の主人公を要せず故に曲中の出來事も亦た社交界に現はるゝ順序的平坦的輕快的粉飾的の性質を有す故に隨つて罪過的の衝突なし故に縱令他の讒害若くは障礙ありと雖も之を排除して終に幸福正利の境に回復することを得故に喜曲の要は卑懼と希望と斷行と中絶と一意と他意とに輕易なる變換あらしめ以て正善の幸福快愉の生活を反照するに在り而して其價値あるは別に比喩借言以て諷諫刺議の意を寓するに最も都合よき詩體あるが故なり我國に於ては純粹の喜曲と稱すべきものにして發達したるものは殆んど之れなしと謂つて可なりレッシングの『ミンナ孃』の如きは喜曲の著名なるものなり其他ダアンの「婦人の國家術」フライタークの「ジュルナリステン」等亦た喜曲中有數のものにして又最も寓意の妙を得たるものなり

喜曲の變体に滑稽戯曲《ポッセ》なるものあり是れ我國の俄狂言の類にして素より詩學上に重要の關係を有する者にあらず

《第三悲喜曲》　悲喜曲とは既に其譯字が示す如く悲壯にも非ず亦た歡喜にも非ず此二曲の中間に位するの一詩体なり此戯曲は悲曲の出來事の如く多難的大望的の性質を有す故に其主人公は艱難流離に遭遇することあると雖も主人公に負はしむるゝ罪過的の衝突を以てせざるが故に其の艱難は不伸に終らずして

終に排除の期あるなり「忠臣藏」の由良之助の如き「ウィルヘルム、テル」のテルの如き即ち斯の主人公に恰當する者なり此等は皆運命と闘ふて之に打ち勝ち素志を全うするを得るなり即ち悲喜曲の衝突を有するものなり是を以て之を見れば悲喜曲の衝突は忠君愛國正義榮譽眞理等總て善意に於ける衝突にして正善の戰勝者たる正善の滿足者たる主人公と相結合するものなり我國の脚本院本と稱する者の十中の七八ハ皆之に屬す忠臣藏の如き千代萩の如き其他總ての所謂敵打なるものお家騷動なるもの皆然らざるはなしハイゼの「ルードウィヒ、デル、ハイエル」、クライスの「ヘルマンシャフト」、及び夫の本邦人に最も廣く紹介せられたるシルレルの「ウィルヘルム、テル」の如きハ純粹の悲喜曲なりとす

附記、ドラゲヂイとは希臘語の轉化にして素と「山羊歌」と言へる意味なり此語如何にして悲曲の意を表するかに就て種々の說あり或は曰く悲曲作者中の戰勝者が其賞として嘗て山羊を得しことあるが故なりと或は曰くヂヲニゾス（萬物を惠む神）の祭典に山羊を供へしが爲なりと或は曰く往昔の俳優が常に山羊の皮を以て製したる衣服を着せしが故なりと孰か是孰か非吾人之を知らず江湖博識家の教示を待つ。

次にコメヂイも同じく語源は希臘にして「田舍歌」の意味を有す蓋し田舍に於て豐年を祝し泰平を謳ひ村祭を行ふ時に當り歡樂の爲め幼穉の戲曲を弄びしより漸次に發達して終に今日の喜曲を意味するに至れるものならん歟。

戲曲の叙記法ハ他の詩体と異なりて最も正確を要し且つ最も順序を重んぞ他の小説の如きハ果を先にし因を後よし若くは落命を前に描きて發生成長を後に描くことありと雖も戲曲ハ眼前に長時日の事實を引き縮めて演出し一幕々々毎の行爲の現在には常に未知の未來と既驗の既往と相伴ふて離れさるものなるが故に最も秩序の整然と「時」の次第とを貴ぶ種子より芽芽より花花より實と漸々に其順序を追ふて發生の光景を寫さゞるべからず否らざれば未來を既驗し既往を未知するが如き不都合を生じ餘曲爲めに支離滅裂して終に戲曲本來の目的を達すること能はざるに至らん戲曲の叙記法は猶夫れ河川の徑行の如き乎原泉混々艸を分け石をくゞり玆所に一溪水を合せ彼所に一細流を吞み終に一個の小川を形成す是れ戲曲の「發端」なり小川一轉して河となり再轉して大河となり終に汪洋として海に注ぐ是れ戲曲の「終局」なり而して其原泉と海口との中間は水流中の水流徑行中の徑行にして最も注目すべき最も奇觀ある要所なり忽にして奔流激湍　忽にして蛇流灣曲　忽にして怒濤　忽にして軟波忽にして淙々　忽にして涓々　忽にして琴聲　忽にして電鳴　忽にして飛瀑直下岩を裂き霧を飛ばし雪を吐き珠を碎く忽にして深潭鏡の如く時に磯上釣翁の竿影を寫し時に微風に漣を皺よす或は農家の水車を動かし或は蒼々たる田野を灌漑し或は春江花月夜の畵舫を浮べ或は未だ雨ふらざるに何の虹を架す一歩に一奇十歩に十絶狀態千萬出沒變幻其極まる所を知らず是れ即ち戲曲の中段—戲曲中の戲曲—わらゆる奇觀の集合所とも稱すべき者術語

に之を稱して「境遇變轉」と謂ふ而して戯曲の意思の首尾貫通するも亦實に河流の徑行の如くならざるべからず嗚呼戯曲の叙記は眞に河流の徑行なる哉々々々々

戯曲家が戯曲の叙記に最も用意を凝らし最も推敲鍛錬を要するは實に「境遇變轉」に在り「境遇變轉」は即ち行爲被行爲の狀態人生運命の行移する光景を最も多量に含有するの場所にして且つ最も深く同感を惹起せしむるの力ありあらゆる奇觀あらゆる興味あらゆる境過の集合點なり吾人は之を戯曲の燒點と稱せんと欲す燒點と即ち戯曲の骨子なり骨子を失するは即ち戯曲なきなり故に「境遇變轉」の巧拙は即ち戯曲の巧拙なり

戯曲の幕を假に五幕とするときハ《泰西戯曲は概ね五幕を以て通常適切となす》第一幕乃至第二幕は發端にして《第二幕》第三幕第四幕及び《第五幕の前半》は「境遇變轉」なり而して結局は第五幕若くは第五幕の後半なり故に作者の眼も批評家の眼も觀客の眼も期せずして集まり又必ず集らざるべからざる所ハ實に第三幕第四幕に在りて存す

第七章　罪過及衝突

吾人は是れ迄既に屢々罪過及び衝突の語を用ゐたり然れども其如何なるものなるやゝ至つては未だ之を詳説せず多數の讀者中或は未だ之を知らざる者あらん請ふ左ゝ之を説かん

罪過の語はアリストテレスが之を其悲曲論中に用ゐしより起源せるものにして獨逸語の所謂「シュルド」

是なり邦語に之を重譯して罪過といふは稍々穩當を缺くの嫌ひありと雖も他に適應の語を見出さゞるを奈何にせん

人若し吾人に向ひ罪過とは何ぞやと問はゞ吾人は簡明に左の如く答へんと欲す曰く

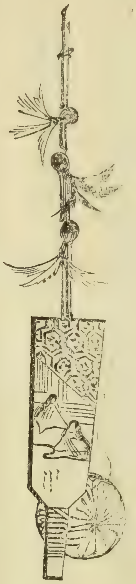
罪過とハ悲曲中の人物を不幸悲慘の境界に淪落せしむる動力《原因》なり

と此動力《原因》ハ即ち術語の罪過にして世俗の所謂罪惡過失及び刑法の所謂犯罪等と混同すべからず罪過は人物を悲境に落さしむる動力なるが故に只悲曲中のみに存して喜曲及び悲喜曲中に存するを得ず茲に曲中の人物が數奇不遇不幸慘憺の境界に終ることありと假定せよ其境界に迫るまでは其間必ずやソレ相應の動力なかるべからぞ語を變へて之を言へ鬪爭欝屈不平短氣迷想逆俗剛直高踏等ありて數奇不遇不幸慘憺の境界に誘ふに足る源因なかるべからず罪過は即ち結果に對する原因を言ふなり末路に對する伏線を言ふなり此伏線此原因ハ如何にして發表せしむべきや言ふまでもなく主人公其人と客觀的の氣運との爭ひを寫すに有り此爭ひの爲に主人公知らず〳〵自然の法則に背反することあるべし國家の秩序に抵觸することもあるべし蹉跌苦吟自己の驥足を伸ばし能はざることもあるべし零落不平素志を達せずして終に道德上世に容れられざる人となることもあるべし憤懣短慮終に自己の名譽を墜すことあるべし曾て之を爭ひしが爲めにワルレンスタイン　悲苦の境界に沈落したりマクベスは間接に道德上の罪人となりたり天神記の松王は我愛子を殺したり安達原の袖萩は失明して門に倚り戸に賴るの人となりたり其

他小春治兵衛の情死に於ける景淸の素懷を遂ぐる能はざる信長の本能寺に弑せらるゝ判官の切腹する皆罪過なくんばあらず故に吾人は斷言せんと欲す曰く世に罪過なくして不幸の末路に終るものは之れなしと人或は曰はん基督は罪過なくして無慘の死を遂げたりと然れども吾人詩學的の眼を以て之を視るときは基督と雖も明白に罪過あるなり彼は猶太人の氣風習慣に逆らひ時俗に投せざる時人の信服を買ふ能はざる說を吐けり是れ彼が無慘の死に終りし動力なり原因なり伏線なり別言すれば彼は術語を罪過を犯せしものなり孔子の饑餓に苦められしことあるも孟子が轗軻不遇に終りしも歸する所は同一理なり
偶然の出來事は世に存在せざるが故に悲曲の人物に罪過あるが如く喜曲及び悲喜曲の人物にも結果に對して必然の原因なかるべからず然るにアリストテレスは何故に前者の罪過をのみ說きて後者の「原因」に就て說くとなかりしや是れ大なる由緣あり當時希臘に於ては悲曲のみを貴重しトラゲヂイと言へばあらゆる戲曲の別名の如くなりをりて悲曲以外に戲曲なしと思惟する程なりき故にアリストテレスが戲曲論を立つるも專ぱら悲曲に就て言へるなり若し彼をして喜曲悲喜曲共に悲曲と同じく尊重せらるゝの現代に在らしめは彼は決して悲曲のみに通用する「罪過」の語を用ゐずして必ず他に一般に通用する語を擇びしに相違なし近世の詩學家は罪過の語の代りに衝突（コンフリクト）の語を用ゆ而して曰ふ悲曲の出來事は逆境的凶末路の衝突を有し喜曲の出來事ハ順境的吉末路の衝突を有すと嗚呼世間人物に對する衝突なきの出來事あるなし若し之れありとせばソは最早出來事とは稱すべからず人物の一枯一榮一窮一達は總

て其意思と氣質とに出づる行爲の結果にして此行爲は即ち結果に對する衝突なり別言すれば結果は衝突の寫影あるに外ならず故に戯曲は衝突と結果との二大素より成ると言ふも不可なきなり故に衝突なくんば行爲なし行爲なくんば意思なし氣質なし意思なく氣質なくんば既に人物なし人物なきは即ち戯曲なきなり。

是を以て之を視れば罪過も衝突も行爲結果の動力を意味するに至つては同一なり只其意義に廣狹の差あるのみ世に罪過說を排斥する者あり是れ取りも直さず衝突說をも排斥する者なり吾人は信ず罪過なき衝突なきの戯曲を想ふ者は是れ人物なきの戯曲を想ふものあるを否らざれば木偶泥塑を以て名作を完全せんと欲すると一般あるを。



『紅花染』に題す

『紅花染』は本書の補充として左に掲ぐるもの著者は愈虐桐生君其人なり愈虐君は加賀の人なり將に帝國大學に入りて法律科を修めんとする者年齢未だ二十二に滿たず予北陸渡遊中計らず君と金澤の客舍に於て相識る君の境界は予と同じく志法律學に在りて而して頗る文學嗜好の癖あり
君曾て「紅花染」を予に寄するや書を添て曰く拙作素より万の欠點あるべしと雖も然れども感情主人公を支配するが如き失策はあらず尊臺若し一點の同感を起さば希くば之を採れよと以て君が抱負を知るべし
本篇一個の神經質の青年を捉へ來りて其肺腑をえぐる人物光景共に躍如として浩動し「くらぶ山」をして顏色なからしむ之れ實ゝ殆んど處女作として見るべからざるものあり著者成竹なくんば焉んぞ此の如きを得ん予は未だ其意思の老熟せざるを咎むる能はずして其小說に對する着眼の出俗なるを喜ぶ

性格小說多くは世俗に喜ばれずして結構小說獨り時を得顏に流行を專らとす二者共に讀む人の眼識如何によりて相應の娛樂を與ふべしと雖も多數人の娛樂を起すは後者前者に優ること數倍なり然れども小說の責任は啻に讀者に娛樂を與ふるを以て盡きたりと謂ふべからず彼は「人」を描かざる可らず「宇宙」を寫さゞるべからず「運命」を說明せざるべからず人物と行爲の相關及び其結果を自然の法則に反照せしめざるべからず夫れ性格小說は人を主とし結構小說は事を主とす其孰れか小說の本旨に合し孰れか小說の責務を盡すかは多言を費さずして明かなり

「紅花染」の著者は能く小說を知りて而して之を好み之を樂まんとする者精勵倦むなくんば造詣豈に何ぞ之に止まらんや

明治廿七年七月

萩の門忍月生

◉紅花染

桐生愈虐作
石橋忍月補

（一）垣根の破れ目を通路に、ぬつと顔出せる一疋の洋犬

妍よき女の天晴當風に打込みたる風俗、艶麗なりし櫻もいつしか空に知られぬ雪と散りぬ。今は唯紫の昔懐かしげに、松の木に凭れかゝれる藤の花、憎くや男頼みに女は立つといひたげなり。

麗ゝ晴れわたりたる青空に、舞へる鳶の聲も勇ましく、ちよろ〳〵川の岸に繋れる水草の、流れにうなづくもいと嬉しげなり

花散りて一時は淋しかりし枯木も、若葉一葉づゝ増へ行きて、今はいとゞ涼しく繁り初めたる梢に、時鳥を啼かせたきが、唯一つの不足なりけり。

實に一年の内に尤も樂しきは春にこそ。之れと同じく人間一生の中にて最も樂しきは、十より廿にかけて咲亂れたる花の若者ならんに、さりとは當世のいそがしさ、うたてさ。昔ならば夢の如く暮すべかりし無邪氣なる時節を、學校へ通はせて、やれ英語、やれ數學などゝ、少しも心を休むる暇なく、一室に籠りて明暮の讀書三昧。かくては若者の眼鏡かけて病身にならでは、何處に身の立瀬があらうぞ。學識才幹いかに人に秀たりとて、いつも藥の厄介になるとでは、一生をぐづ〳〵として終るべし。名は忘れたるが、何とかいへるお方の折角と勉強し給ひて、首尾よく大學校を卒業せられ、月に百圓不足の月給

を取り給ひしは暫時。やがて二月も經ぬ中に、とう〳〵死なれたとの噂。當人にとりて口惜しき事は更にもいはず、父母が悲嘆は何の樣にあらふぞ。汝とても此の麗なる景色には、ちと散歩でもするか、或は石山樣の處へ遊びゆくか、ちと遊んだがよし。其樣に机の前にばかり座りて居ては、汝が平生の病身なるからだに、万一肺病など恐ろしき病の起りなばどうするぞと、れかしや、明年は大學の學生ともいはるゝ子息に、いはずもの事を、さも名說らしう並べたてゝ聞かせらるゝ母の慈悲心。これを知つた顏もせずに唯々とやさしく從ひて、益勉强する新太郎。日の漸く西に傾くと共に數理の八陣に腦髓殆んど倦れ果てゝ、書齋の障子をくわらりと開きて、頬付の儘暫時庭の景色を眺め居たりしが、やがて身をおこして、椽下駄を敷石に響かせつゝ、ぶら〳〵と庭內を散歩しけり。

櫻の木に縋りて、今を盛りと咲き匂へる藤の下に來り、仰いで其美しさに見とれ、近眼の悲しさは、其下に敷ける菫とは知らで、惜かな藤が散つたわと、藤ならぬ藤の花を拾ひ上げんとして、我ながら我か近眼に思はずふつと噴出しぬ。

植物は人に養はれ、人は復た植物に養はれて、心地すか〳〵しくなりて、益おちこちと漂泊ひありく程に、垣根の破れ目を通路にぬつと顏出せる一疋の洋犬、暫時は新太郎が顏を眺め居たりしが畜生にも流石は美を好む心のありてか、咲亂れたる菫を踏みもせず新太郎が傍を通りかゝるを、口笛を吹きて呼び止むれば、可愛い奴かな。愚に近寄りて裾にまつわるを、つくばふて頭を撫でやれば、喜んで益冴へぬ。

可愛き奴と思へば連れ來りて、ヽヽパンをやれば瞬間に喰ひ盡して、猶も欲しげに、大なる眼を開きて新太郎が顔をしげ〲と眺め入りて尾を掉る有樣。愛らしさ增りて、夕飯の菜の喰餘りを投げてやれば、それも亦ぐすぐ〲と喰盡しぬ。明日は又來るべし、澤山に食物を用意しておくべければといへば、犬は尾を垂れてしほ〲として立ち去りぬ。

犬との約束は全く忘れ果てゝ、日課を調ぶるに急がしき新太郎、椽前にうめく犬の聲をきゝて、障子を開けば、犬は明日來よとの言葉を守りてか、又は昨日の甘味を覺へてか、今日も復來りぬ。新太郎の顔を見るより立ち上がりて尾を掉り乍ら食を乞ふ愛らしさ。待てよ〲と臺處に行きて何か探せど〲、折節母が不在なるに、勝手知らざる新太郎は何處に何があるか一向に知れず。困り果て書齋に歸れば、犬は食を貰ふ事と心得て駈け廻りて吠る意地らしさ。机の抽出を探りてやう〲に菓子パンの一片を得、之れでないぞと投げやれば、飛んで來て一口に呑みぬ。猶物足らぬげに新太郎が顔をしげ〲と眺むる犬の頭を撫でやれば、喜んでごろ〲いひぬ。

頓て母は歸り來り、ワッと吠へよ、れ廻りよ、是れはおあづけなど、二人して犬に戯るゝ間に、家の隅々も暗うなりて、蝙蝠も一二羽空を飛びぬ。おかしき犬の戯れに飯喰ふ事を忘れぬ。どれ〲膳の用意せんと、母は立て膳立しつゝ、新太郎よ、其れは何處の犬ならむ。と問ひ給へば、何處のかは知らねど、美しき犬ありと、新太郎は餘念なく犬を撫でけり。

夕飯は濟みたれども犬は去らず。洋燈を點たれども犬は去らず。わりしや犬は其味を覺ゑてか、一向に去りませぬといへば、さらば今宵は止めてやるべしと母のいひ給ふまゝに、庭へ入れて雨戸をくれバ、犬は悲しむ氣もなくて其處に居眠りぬ。

頻りに吠ゆる犬の聲に、夢醒めて起きいづれば、太陽はほの〴〵と臥龍の頂に登りぬ。犬は勢よく駈け去りぬ。

二、折ふしそよ〳〵と吹き來る夕風につれて、耳を打ちしは調べいみじき
　　琴の音なりけり。

犬は度々來れり。されど何もやらずに戻したる事一度もなかりければ、犬は益新太郎母子に狃みて此頃は日毎に來りて宿る事、度重るに從ひ、犬は第二の主人を得たり。されど何處の某が犬なるか知れぬに、母はまづ好奇心に駈られて、いつか跡をつけて犬が主人の宅を探ねよなど、新太郎に命せし事もありき。新太郎とて此の好奇心なきにあらねば、或る日の夕暮、犬の來りしを幸に引き連れて散歩に出駈けぬ。犬は勇んで駈け行き、角毎に片足かけて小便して、新太郎の來るを待ちうけ、尾を掉つて駈行く愛らしさ。うか〳〵と其跡につきて行けば、いつしか××町を横切りて、一町を下りて、わぎ河に沿ふて曲りしは、此處×—×町二番町なり。

さるにても犬はかく遠き處より、毎日池田町まで來ぬる事のしほらしさよと、猶其跡につきて行けば、

二番丁のとあるいかめしき門内に入りて、口笛を吹けども／＼更に出ず。さらば此の家こそ犬が主人の宅ならめと、門に立寄りて眼鏡越しに表札を覗けば、進藤友彦とあり。進藤友彦／＼と腹の中に繰り返して、立ち去らむとすれば、あら妙なる哉。折ふしそよ／＼と吹き來る夕風につれて、耳を打ちしは、調べいみじき琴の音なりけり。新太郎は音樂の音などには余りに耳馴れず。時としては隣家に引く三弦の音を、姦しとて耳をふさぎて讀書せり。されど優にれとなしき琴の音の——殊更世界は靜まり初めんとする此夕暮の靜かさに——一揚一抑、一緩一急心なき草木までが其調子につきて躍り出さんとする、音樂の波に心は宙に漂ひて、定めて主は窈窕たる美婦人にやあらん。色白く、眉秀で、口しまり、鼻筋通りてなど、とんだ妄想むら／＼と湧き來りて、其主何とかして見まほしく、延び上がりて覗かんとすれど、塀の高さには詮方なかりき。

道行く人に怪しまれて新太郎は我れにもあらで五六間ハ無宙に走りぬ。新太郎が好奇心が今はかの犬よりも全くその琴の主の身の上にあり。

母には×－×町の二番丁の進藤友彦といへるへ犬が這入りたりといふ丈けを告げて、己れは書齋に退きて、洋燈を點したる儘、勉强せんともせず。ひたすらに進藤友彦といふ名の胸に浮び出てそれにつけて盛に興り來るは、いみじき琴の主の聯想なり。一体進藤とは何者ならん。琴を調ぶるは誰ならん。細君か、娘か。細君にしても娘にしても、其女は必ず美色ならむ。否、否琴が上手なりとて、其主まで

が美しきなどとは請合ひ難しなど、頻りに考へける終は、我ながら我が幼き忘想のをかしくなりて、ふつと噴き出せば、消燈は消へなんとして復光を放ちぬ。折ふし靜なる空を傳ふて響く公會堂の鐘は、高く十一時を報じつ。

時間の速に移り行くに驚きて、「技術は長し、時は飛ぶ」とつぶやきつゝ、床とりて横になれば、執念しく〳〵、胸に浮び出づるは、又もや、例の琴の主。

此夜の夢に、新太郎はパラダイスに行きて、佛敎の天女に遇ひ奉り、奏で給ひし仙樂に浮かれて、月落ち烏ないてと吟じ出せば、日はてか〳〵と登りて烏はがあ〳〵と騷ぎ立ちけり、

三、世を敢果なみ、身の不遇を怒りて狂氣じみたる仙人とならむも無駄なり、口惜し、

如何なる事の起りたりけむ。犬は今日は來ず。翌日も來ず。其翌日も來ざるに、凡そ來馴れしものゝ來ぬ程案じらるゝものはなく、新太郎親子が犬に就きての噂とり〴〵に評し合ひて昨日も暮れぬ。今日も暮れぬ。別けて女といふものゝ取越苦勞には、學問せし新太郎も、折々は迷の眉をひそめぬ。日飛び月流れ行くにつれて、犬の噂もひッそりと止み、新太郎が胸に描きし琴の主も跡なきまでに忘れ果たり。

六月の學年試驗も首尾よく過ぎて、暑中休業となりけり。新太郎は此の長の月日を如何にして暮らさむかと、色々思案の末、思ひつきし一事ありけり。我れの如く理學生の頭腦唯理性にのみ凝結して、感情

更に發展せざれば、人間社會に立つ事、中々にむづかしからむ。かの所謂時と空間とを脱して、一身を數學の犠牲に供し、古人が夢にだに思はざる大數理を發見せんと志す我れ、あはれ當世に容れらるゝと容れられざるとは、始より論ずべき限りにあらねど、いつぞや石山がいへりし如く、悲劇の主人公となりて、世を敢果なみ、身の不遇を怒りて、狂氣じみたる仙人とならむも無駄なり、口惜し。いかに眞理は後世の一知己を待つものとはいへ沈鬱暗澹として時ならぬ墳墓に葬られむも厭なり。見識高くして宇宙を悉く心の中に容包せんには、文學を學ぶに如くことなけん。よし〳〵我れは此の長日月を仇に過さん事の甚だ惜しければ、暇を盗みて專ら文學に眼を晒さんと、或る日炎熱に堪へ兼ねて、石山を訪ひてかくと語りければ、文學生の石山はぞく〳〵と打喜び、よき處に氣のつき給ひしものかな、固より人間は理想のみの動物にはあらず。又感情の動物なり。滔々たる世の數學者、理想殆んど天と一致せんとする勢あれども、彼等は全く人間が又感情の動物たる事を忘れぬ。彼等が頭腦には固より國家の觀念なく、唯此宇宙をもて乾燥無味の一体物たらしめんとす。凡て物迷はざれば悟らず。彼等は唯科學にのみ迷ひて、眇々たる一小理を發見すと雖も、更に人事に迷はず。苟しくも人事に迷ふなくんば、いかでか能く人間界を達觀するの能力あらんや。人間の正當なる研究は人間なり。理學者なりとて人間たる以上は人間たるものゝ、如何なるものなるかをも知らざるべからず。やれ〳〵君はよくも此處に眼をつけ給ひしものかな、まづ小説より讀み給へと、反身になりて饒舌り散らし、書棚より近松叢書の世話物五

六冊を引摑み來りて、新太郎が前に落して、君が此點に眼をつけ給ひしは實に賀すべし。我が所有の文學書は殘らず君に貸し與へんといへば、有難しと禮いふて、心中天の網島をとりて、さん上はつからふんころのと讀みかけて、之れは何か、一向にわからずと問へば、それハ淨瑠璃をかたるときの拍子ならん。妓が情の底深きより讀み始むべし。妓が情の底深き是れかや戀の大海を替へても干されぬ蜆川、思ひ〳〵の思唄、心が心留むるヽ門行燈の文字が席。ゐや〳〵君は之れを暗記してゐるのか。さりとは驚き入りたりといへば、何の是れしきは暗記せずとも、文學者たるものは、自然それ程の事はいはるゝなりと、笑へば、おけよ〳〵と大笑になりけり。

四、一人は男にて此年十二、一人は妹にて此年十六なり。

はなしの末は怪しくなるか、色になるものと、何時の誰か穿ちしやら、今にいひ傳へて天晴旨き觀察なり。石山滔々として文學を談せば、三輪喋々として數理を講じ、一方が語れば一方が點頭き、聲も自然と高かりしが果ては耳熱し、眼光りて熱心なる語音漸く低く、石山はほつと紫の息を吐きて、我が望み絕ゑたりと嘆息すれば、三輪は吸ひかけし煙草をはたと落し、其樣に落膽せずともの事なり。何もそれ一人が女といふでもあるまじといふを打消し、固より花ハ三芳野、月は須磨のみかは、淋しき野に咲く櫻、名もなき水に映つる月も又一段の興あれども、我が戀はさる淺間しき戀にあらず。肉躰の愛にあらずして、精神の愛なればにや。總てもの一旦かうと心を入れかへれば、瘦我慢にも又慰められて、心地

すが〳〵しくならむふしもあるべけれど、之れのみは餘りに深く我心に浸み入りたるにや、寐る間も忘れず、それ〳〵我が戀はかのダンテが戀にも似たるべしといふ。それならば君は其女を妻にせむとまで思ひ詰め給ひしや。ゐかしや妻にせむなど〻露思はねど。されば浮きたる戀にあらずやと數理にたけたる三輪は早くも其欠點を見出して爭へば、石山は口をつぐみぬ。

暫時は二人とも無言なりしが、三輪は流る〻汗を拭ひ、さて靜かに口を開き、一体其女の名は何といふぞ、又いかなる由緣ありてか、君は其女を知り給ひしやと問へば、さればなり、其女の名はいふもゆかしや木の下風も進藤かほるといひ、父は進藤友彦とて石川縣屬なり。友彦の姉は我母にて、かほると我れとは從兄弟なりと答ふ。これはしたり、進藤友彦とは、それよ〳〵忘れもせぬ五月の十日、犬の跡をつけて、見て來りし表札の名なり。かの犬の主なりと思へば、跡なきまでに忘れ果てたる例の戀しき琴の主、さては其夜の夢までが、現然と胸の裡に浮び來りて、三輪は唯呆然と聯想の野原に漂泊へり。三輪君、如何したと咎められて漸く己れに歸り、恥かしや見ぬ戀に憧かれつる我が擧動の、必ず石山が鋭き眼に觀破られつらんと思へば、俄かに恥かしくなりて、かほるを慕へる彼れを浮きたりと、罵りし我こそ實に浮きたる戀の奴なれ。かく思へば滿身の熱血頭上に集りて、耳鳴り口乾き、無理に平氣を裝はんとて煙草を吸ひつけ、すつと喫みてぽんと落せば、吸殼飛んで疊の上に落つるを、周章て〻手指にて拾ひ上げ、アツ〳〵と耳朶を摘みぬ。

斜目にちらりと石山の顔を覗けば、何氣なき体に胸を廣げて、頻りに團扇にて涼氣を送り居しに、まづ〳〵安堵と顔をあげぬ。

石山に悟られずに濟みたるは嬉しけれど、其のかほるとやらんが、我が戀しき琴の主にてはなかりしや、もしかの琴の主が婚姻したりとの事ならば、第一に石山よりも此の我に係りたる話なりと思へば、いよ〳〵氣遣はしくなりて、其のかほるとやらに兄弟はなきや、姉はなきや、妹はなきやと問へば石山は不審顔して三輪が顔を差覗き、君はそれをしらべて何にするかと咎められ、もぢ〳〵と口籠るを、嬉れしや石山はよき奴なり。強いては咎めず。二人の兄弟あり。一人は男にて此年十二、一人は妹にて此年十六なり。かほるが結婚したるは何時頃なりしや。忘れもせぬ四月の十五日。嬉れしや〳〵我が犬を送りてかの琴の音をきゝしは五月の十日なりし。我が戀人のかほるが妹なりしこそ幸なれと、心中に喜ぶと限なかりき。

慾には限なけれど、聞たきは其名なり。其容貌なり、其性質なり。されど今此處に突然之れをたゞしては、石山が疑は必ず我が心中を觀破らては叶はじとて其日は歸りぬ。遠き道を厭はで音信れし朋友は不在にて、空戻したる心のうたてかりしも、なか〳〵に其比にはあらずかし。

五、吹く刎れ、畏ろしき旋風、埋む刎れ、砂煙、

浩々乎として平砂限りなく連り、遙に見ゆる耶子樹の頂、地平線上に漂へる白雲ならでは、露目に觸る

ゝものなし。折ふし一群の鷙鳥空を切つて飛ぶ羽音、暫時は耳に響きたれどそれもやがて遙かの空に、數點と消へ去りては、四邊は寂寞として一つの聲なし。

其處に唯一人しよんぼりと彳みしは三輪新太郎なり。東顧西盻人の影なく人の音なく、歩まんとすれば何處を北とも南とも分ち兼ね、呆然我れを忘れて、瞠と尻餅つき、暗涙坐ろに襟を濕しぬ。やゝありて、ふと思ひつきし瞬間……ヽヽヽサハラの砂漠……嗚呼サハラの砂漠かく思ひつきし一刹那、沛然として起り來る心の聯想、吹く勿れ、畏ろしき旋風。埋む勿れ、砂烟。アヽ我れもし此處に滅しなば、跡に殘り給ひし母の悲嘆。果てはもはや戀人に逢はれぬ悲しさ。アヽ厭なり〳〵。吹く勿れおそろしき旋風。あはれ、神よ、佛よ、願くば荒き旋風の息をな吹き給ひそ。あはれ、神よ、佛よ、願くは哀れを知らむ隊商を導き給へ。弘誓の船を得させたべ。と人は得手勝手なる、てきない時の神を賴めば、嬉れし、御利益は爭はれぬものなり。遙に響く駱駝の鈴の音、思はず躍り上りて耳欹れば、止みなん〳〵賴母しき鈴の音と聞きしは、我が耳の過なりけり。砂漠はしんとして音なく、太陽は地半球に旅立たんとて、此の賴なき哀れなる我れを見捨てゝ、名殘の光は西の空に紅を流しぬ。

名殘を惜む太陽の光に、新太郎が胸は張り裂く斗りに隆しく、兎や角とひた逐ひに迷ひけるが、ふと思ひつきしは『太陽は西に沒す』なり、喜び勇みて天地を拜し西に對する南方を指してひた走りに走りぬ。

太陽はいよ〳〵西半球に旅立ちて、東半球は暗黒となりぬ。新太郎は物に躓きて眞向けに倒けぬ。漸々起き上りて、足下を探れば躓きしは、鐵の棒なりけり。天の與へと此れを笻きて道を急げば、日はベッタリと暮れ果てたり。東西のあやめも分らぬに困り果て『呆然と佇めば、饑、渇、疲勞、一時に襲ひ來りて、其儘其處に倒れぬ。

かくてあらば旋風など起りて、我れを埋めもせんと氣を取り直し、鉄棒に縋りて屹と四方を打眺れば、天道は猶我れを見捨は給はざるか北方にあたつて――神よ、神よ、――北斗星は煌々として輝けり。嬉れし〳〵と勇を鼓してのひよろ〳〵步行に二里も進みしと思ふ頃、嬉れしや一つのオーセスに來りぬ。新太郎が喜び筆に盡すべきもあらず。其儘淸き泉の傍に倒れて、鯨飲すると數分、耶子樹の菓實に腹を充たし、さて嬉れしさにつれて思ひ過さるゝは、野蠻人の襲擊なり。

鉄棒を笻き起ち立りて四方を見渡せば、黑暗々として一點の光なく、衆星瞬く中に神の北斗星は煌々として輝けり。

嬉れしや野蠻人に襲はるゝ、けはいもなければ、今宵は此處に疲勞を休めぬ。

六、あはれ夏の夜は夢ばかりなる現寐に明け渡りぬ。

宿鳥一時に騷ぎ立つに、夢驚かされて立ち上れば、こはいかに昨夜までは、物として淋しく悲しからざるはなかりしサラハの砂漠、今日は綠樹蓊鬱として繁り、百鳥梢に「春の歌」を歌ひ、見るもの聞くもの

一つとして心を樂しめざるはなし。新太郎餘りの事に呆れ果て佇立めば、其山の景色何となく醫王山に似たり。嬉れしと勇を皷して下らんとすれば、斷崖峨々として嶮しく、遙かの谷に一つの庵あり。見るからに足こそばゆく、杖に縋がり、草にからみ、辛々中腹まで下りたれども、谷までは未だ〳〵に程遠し、折ふし庵より出でたる一人の女豆粒の如く見ゑれり。足わなゝき手震ひ、一歩〳〵利刀に切らるゝ思ひに下れば、不思議や、鉄棒は目の前に蟠れる岩石に吸ひ着きて離れず。危き中にもいと不思議に、ふと其の石の滋石なるを思ひつきて、是れを土産に持ちて歸らんものと、碎かんにも何分堅くて一向に碎けず。鉄棒にて碎かんにも、其は石に吸ひつきて離れず。叢を蹈臺にして力に任せて引く。引かれて鉄棒は磁石を離れければ、新太郎が体も叢を放れて、眞倒に斷崖を轉げ落ちたり。

何處とも知らず、新太郎は黒暗々の中を右往左往に迷ひけるが、遠き處より頻に我が名を呼ぶ女の聲に、不思議に其聲をあてどにたどり行けば、聲は彌々大うなりぬ。やがて我が耳根近く響くに驚きて、曇りたる眼半開けば、驚きしも理なり。我れを呼び生かして介抱に如才なきは、一人の女なりけり。女も女我が想像より見れば、恐らくは彼の琴の主ならむ――あらず、必ず此主あるべしと思へば、嬉れしさも湧き恥かしさも焚へ、何とせん方も途方にくれて、介抱せられし禮さへもいはで躊躇ひぬ。よく〳〵見れば石山は傍にありて、これこそ例の女なれ、君が戀する女なれといふ。かの主なるとは、石山に聞かざるも疾くより識れり。唯嬉れし耻しが胸に込み上げて、何とせんと思案に塞がる途端に、朋友の傍

にあるを見つけ、之れに話しかけて紛らし、折々女の顔を盗み見んと、是れより樂しきとはなかるべしとて、身を起せば、此度は石山は何處へ行きしやら傍にあらず。辛々に心を沈着け、石山は何處に行きしと問へば、女は凉眼怨めしく我れを見遣りて、石山樣が何處に行き給ひしとか、其れは關ずともなり。妾がかうしてお傍に付添ひ參らす上は、御心丈夫に得させ給へかし。さるにても怨めしきは此方樣の御心なり。斷崖より下り給ふを見るさへ下にはよい心配も致しましたに、况して轉げ落ち給ひしを見しときは、アヽ思ひ出すだに恐ろかりしと、小さき体を震はして新太郎に取り付き、さて何かはなしに此の庵へかき入れ申し、水よ藥よと騷ぎ立てゝ、辛々此の樣に呼び生けましたる妾が心づくしを、譽めてやつて下されても御損はあるまじと、果ては赤き唇おのゝき、凉しき眼段々と曇り來て、熱き露の一雫、二雫を新太郎が腕に落しぬ。嬉れし御手を取り參らせて、引き寄すれば、引寄せたるは女かと思へば石山なり。南無三、慌て一散に駈け出せば追ひ縋りて袂を捉らへ、君には何が故にかくは逃げ給ふぞや。不束なる妾なれば定めて厭なるは知れてあれど、さりとは御卑怯なり三輪樣、此期に望んで外聞を厭はるゝなどとはといふ顏つく〴〵見れば、うれしや我が戀人なり。何の汝を見捨てよいものかと抱かんとす。見る間に女は石山に變りて、我れを罵る。是れはならぬと駈け出せば、追縋りて怨ずるは我が戀人。よく見れば石山。又駈け出すを止むる女。なだめんとすれば又候石山なり。三十六計走るを上策とあれば無我無宙にかけつきしは我が家、嬉れしやと其處に倒れけれ

ばあはれ、夏の夜は夢ばかりなる現寐に明け渡りぬ。

七、活潑は時として轉婆の又の名なる事あり。

とかくに琴の主の事思ひ出されて、朝飯三膳味なく喰ひ了り、さて机に向ひて、石山より借りて來し近松叢書を繙きて、聲高く讀み續けば、瞬く暇に五六枚は讀めたり。されど讀書の際には、ともすれば琴の主を思ひ出されて、名は何といひ給ふや。容色は定めて拔群ならんなど、妄想の叢雲其間を隔て、心には貴き近松の理想を見せず。一刀兩斷、此の樣な妄想を切り拂はざれば、近松は得讀めずと、肅然として容を改め、さて讀みかゝれば反つて何の事やら一向に譯らず。新太郎は嘆息して本を閉ぢぬ。妄想にまで疲れ果て思はず吐息つきし頃は既に正午なりき。晝飯も濟みたれども猶思ひは去らず。此の上は己れが戀を石山に白狀して、ゆかしき逢瀬を賴むにしかずと、今日も又石山を訪ひぬ。

石山は三輪が戀の始終を聞き了りて、莞爾と笑ひ、數學者も亦情に驅られぬ。情の理より大なると、ヒマラヤ山富士の如し。其の琴の主は、名を下枝と呼び給ひ、かほるに劣らぬ別嬪なり。惜らくは少しおとなしく過ぎて、人形の樣なが彼れに取りては欠點あり。滅多に愛嬌の笑顏はくれず、男にさへ顏を合せば、ポッと赤面して俯向く風俗。愛しといへば愛らしくあれど、餘りに小兒らしからずや。我がかほるのおとなしきは妹にも劣らず。第一美しく、活潑なり。其圓滿具足の美人が、他所に結婚したりと聞きしときの、我が失望は君の身にも引きあてゝ見給へと、始めは勢よく後れ愚痴にこぼれて自然語音

も弱はりぬ。
おとなし過ぎるが、何の女の欠點ぞや。おとなしきが上にもおとなしきが女の淑徳ならんに、活潑といふ點は必しも女の具ふべき性質にあらぞ。活潑は時として轉婆の又の名なる事あり。おとなしく過ぎるのが女らしくてよし。おとなしきが中に、活潑なる氣質あるを認め得ざる石山の愚さ。表面はいかに凍へたりとて、その熱をして一旦其物に觸れしむれば、人形とまで見へし下枝が胸中、活潑の猛火炎々として起らん事を知らざるなり。よし〳〵下枝を人形と罵らむものは罵れ。我れには外に一つの花なしと、心中に石山が說の過てるを辯じ、さて口を開きて、いつかの機會に彼れに遇はしめ給ずやと問へば、石山は少し頭を傾け、俄かに思ひつきたる風に、それよ〳〵來月の一日は父が昇等の祝日にて、親類一同を招きて御馳走を致すよしなり。其折君も來り給へ。下枝に逢せてやらん。それともそれ迄待たれずとの御意なれは、明日にても下枝樣に逢ふて君が思ひを知らせてやらんかと笑へば、三輪は慌て言葉を遮り、其樣な事は決して〳〵、何事もかうじや〳〵と手を合して拜みけり。

八、此の粹樣に何條拔目があるべきぞ。いはゞわれが眠れる心を覺して君にラーブさせた我れは嬉れしき結ぶの神なり。

ちよいと袖を引きて、我れに連れ立ちて來よと石山に促がされ、新太郎は此座を離れがたけれど、朋友がすゝめを無下にことわらむも管なく、引かるゝ儘に石山が跡につき添ひ、植木涼しく、螢一二羽ちら

〳〵と光かる前庭を通りぬけて來しは、此處後庭の東屋なり。どんな用があつて此處まで連れて來しやと問へば其樣に腹は立ずとも、マアベンチに腰をかけて涼みながらに螢でも見給へ。花ばかりに憧がれて居ては、唯さへ懶き夏の日ゝ腸が腐りて、さては形に現はれし君が擧動、他人ながら見る目も氣の毒なりし。ちと浩然の氣でも養はでは、將來は天晴れ前代未聞の數理を發見する豪傑を、むざ〳〵と犬死さするが口惜しさに、こゝまで連れ來し朋友の親切を、其樣に怒り給ふては、下枝樣に君が思ひを打ち明けても大事なきといふにやと笑へば、虚を衝かれて三輪はどつかとベンチに腰打ちかけ、成程下枝に無宙となりては、我が腸の腐らん事を恐れての君が親切はいと有がたし、されど、いはゞ我れを無理に此處までおびき出したる君が罪は脱れじ、涼氣に醉も程なく醒めて、破れん斗りに轟ぎし心臟もやう〳〵靜まりたれど、何かから長閑なる春の景色を急に堪へがたき秋の淋しさに變じ給ひし君が無情はいはずともありとて日頃に似合はぬ三輪が語氣、それもあれが來ておるせいかと三輪が顏を覗けバ、べた〳〵と笑ひ崩れ、さるにても不思議なるは下枝が目付の變なのなりと、恍れておるといはれたさに、そしらぬ顏にて問ふ新太郎。それはあれも君に戀れてあるに相違なし。それは毎度あれを訪ねて、くど〳〵と説法をして來たるお影あり。此處で三輪、隨分奢つて貰はなければならぬと脊を打てば、三輪は吃驚して、彼の樣に賴みておきしに、君は其義務を破りて、下枝に其樣な事を告げしかと、嬉れしさをわざとむつと怒れば、其樣に怒らずともよし。説法とはあの事ならず。君が學識才幹人に秀でたりといふ事を

聞かして君を譽めてやつたのだ。此粹樣に何條拔目があるものぞ。いはゞおれが眠れる心を醒まして、君に、、、ラーブさせた我れは嬉れしき結ぶの神なり。

九、一層抱きつきて退けふかとまでに心は狂ひ獅子の、

春は花、夏は納涼、秋は月に冬は雪と、四時各眺めあるが中に、春は執固く、秋は淋しく、冬は寒し。執固ければ心がとろけ、悲しければ胸を痛め、寒ければ心までがゐじけかへりて、精神の保養、所謂浩然の氣を養ふは、夏の夕暮に限りたり。炎熱に流るゝが如き汗を、夕方の行水にさつと浴みて、、、、フランネルの浴衣しどけなく縮緬のへこ帶にてちよッと後へ結びさげ、團扇に涼風をとりながら、試みにぶら〳〵と犀川の大橋にでも出駈けて見給へ。もしくはかうして東屋の前にベンチに腰打かけ、あの樣に飛んで行く二三羽の螢を眺め、木の間をかほる清風に吹かれ、美人――下枝樣の樣な美人を膝まくらに人生五十功なきを愧づなんどゝ、吟じ出さば如何に高尚ならんと君は思ひ給ふぞと、初めは尤もらしく後はおどけに落して石山がしやべり散らす途端、聞ゑたりや木の間を傳ふて劉々と響く琴の調べ、さてこそ始りたれ、行かう〳〵と三輪は石山を引き立てゝ本屋へと急ぎつ。

何と云ふ曲か知らねど、早きは溪流の山間を流るゝが如く、遲きは暮煙の風に靡くが如き妙なる琴の手に、心は宙になりてうか〳〵と座敷へ入り來る二人、初々しく手をつきて一座に禮しぬ。さてつら〳〵想へば、先刻より壓程此處に座りて飮食し、氣がつまりての庭園散歩を、琴の音にうかされて立ち戻り

し事に氣が付きて見れば、二人は顔を見合して噴出しぬ。如何にせしか、二人が座につきて間もなく、琴の音は止みたり。猶物足らぬ思ひに、人々はもう一曲彈きてきかせ給へと、頻りに下枝に迫りつ。下枝ハぽつと赤面したる顔をハンケチにて蓋ひながら、之れより外には知りませねば、何卒是れにて堪忍して下されと頻りに辭しつ。その樣な言拔は大嫌ひなり。下枝樣の樣なお方が、琴の手二曲より外かには知らぬなどゝいはれては、とんと腑に落ち申さず候。但しは眞實是れより外にお知り遊ばさぬとならば、私が御指南致すべく候。と仇口には上手なる出入の古着屋が大口開いて笑ふを、それならば半吉ちと聞かしてくれ、其癖爪があはぬなどゝ云拔けては承知はせぬぞと、石山ハ笑ひ返しつ。其樣に見下げたものでもムりませぬ。それでも若い時は、琴、琵琶、月琴、三味線、尺八、しのぶ、明笛、洞簫、それ〴〵、ピヤノ、オルガン、バイヲリン、何でもかでも學びて得ざりし事ハなかりきと。座り返るを、半吉は實に博士だと石山の母に嬲られ、そうとも〳〵博士樣じや大博士じやと眞面目になるを、草履はかせかと笑へばべた〳〵と膝を崩し草履博士とはない名を附けて下されました。と吃となり、抑々此の半吉を博士といつぱ、今年三十四の星を頭に戴き、持病の疝氣ゟ頭痛がしてこり〳〵すれば、今年はもう往生遊ばすべし、やがてハかいし(墓石)が棺の上に乗るであらふと、變な聲して泣き出す眞似に一座はどんどと賑はひけり。

笑の收まるを待ち兼ねて、戲談はさておき、下枝樣もう一曲をと石山の母がすゝめに、子を自慢したさ

い母の癖に、あれほどに御所望なさるものをもう一曲彈きてきかせよと下枝の母がすゝめを、返答はなくて下枝は、そつと三輪の顔を覗きぬ。

我が能を顯いしたきは、誰しもの人情なるに、かほどに辭退せらるゝからは、石山がいひし如く、實におとなしくして人に恥かしきが故ならむと、三輪早くも推したり。されど其の人に恥かしきとい、餘人ならで我れに恥かしき故に辭退せらるゝとは、そつと我が顔を盗み給ひしにてわかりぬ。かう思ふては座に堪へられぬ程に嬉れしくつッと座を立ちて手水に行きぬ。

嬉れし〳〵に胸滿ちて、うか〳〵と歩みし足下の危ふく、敷居に躓きて倒れんとするを、お危ふムりますと戯れし下女も今日は何となく可愛く、可愛相に其樣に人を笑はぬものぞと、愛嬌をまきける。是れを思へば眞面目なお方も油斷はならぬ世ぞかしと、いつかの序に下女がいひしを、ほんにそうじやと大笑ひゐなりぬ。

躍る心を無理に靜めて座につき、見れば下枝が美しき夏風俗、象牙を展べたらん樣に滑かなる襟元を見るにつけて、乳房の柔き處までが見へすく樣に思はれて、一層抱きつきて退けふかとまでに心は狂ひ獅子の。

十、曲線の圖にも、いつの間にやら目鼻の出來て

勉强には馴れたる三輪新太郎、わからぬとて之れを棄つるが如き倦怠なく孜々として讀み、讀みては考

へ、わからぬを石山に問ひなどして、近松の世話物はおぼつかながら讀み了りぬ。さて心を靜めて作中の婦人を考ふれば、天の網島の小春の如く、冥途の飛脚の梅川の如き、阿波鳴門の夕霧の如き、卯月の紅葉のおかめの如き、無敎育の女にこそあれ、男に盡す心中の立派さ、其愛の高尙さ。人間には尤も可愛き「我」を捨て、死門に向つて駈け入りしあはれさ。さては世に戀ほど高尙なるものはあらじとまでに、新太郎は思ひ詰めぬ。其刹那むら〳〵と起りし戀人の聯想。あれ〳〵其美しき姿、其のおとなしさ物腰、さてハ一城を傾くべき意味ありげに、いぢらしき目元、目の前に現然と表はれ來りて、くる〳〵と水車の如くに廻りつ。心はふは〳〵と之れに乘りて沈着かす。ヱヽ天晴れ大の男一匹が一婦人の爲めに惱まされて堪るものかと、下駄つゝかけて散歩に出で、無我無宙、いそぎ足に駈け行けば、町の角にて思はず行き違ひたるものゝ、何者ぞと顏を上げて見れば、男でもよきものを、しや女なり、御免といひさま五六間は逃げ延びしが、無理に押へし胸中の妄想、婦人に逢ひては、やはか、かの戀人を思ひ出さゞらんや、アヽ下枝、よき女なり、もし彼れをして我が未來の妻たらしめば、アヽさなり〳〵。菫の床もよも快からじ、見よや女の愛の尊きをと、心亂れては足の歩みも覺束なく、石に躓きて倒れんとすると幾度なりしぞ。

一目散に走せ歸りて力學を繙き、是は好な事あれば、かゝる妄想も起るまじと、一向專念に讀みかゝれば、曲線の圖にもいつのまにやら目鼻のできて、笑ふ下枝の顏に其儘なるを、アヽ之れも埒なしとはり

つけて、吐息つく事しばらく。詮方つきて行く先は石山が宅なり

情を殺すには情を以てすべし。さほど情火の燃へ立たば、かの方樣を妻に娶り給へ、周旋は御意次第なりと石山が戯るゝを、ほんにさうじや、されば石山、何卒周旋を賴むぞと笑ふ。實に執念きものは戀なり。結婚してからは取戻もならぬ、他所の花なるかほるをも折につれて我が思草の繁れるも君が戀にいづれぞや。察しても見給へ、それが我ばかり上り詰めたる鮑の片思といふではなし。あちらにも我れを焦るゝ心は我れにも劣ざりけるを——アヽ世界は厭なり〳〵。今一雨のうるほひを得なば、天晴れ咲き亂れんず蕾の花を、仇に散らさんは無殘なる父母が心づかひを我れに妻合さんはよけれども、我は今より盛に勉むる身にしあれば、アヽ思ひ出すもいやなり、としほれたり。三輪とても同し思ひは、逢ひ見し月日こそ淺けれ、焦るゝ思ひは君にも劣らじとしほれたり。

十一、眼はきら〳〵と輝きて宛然二箇の金星に似たりけり。

暑中休業も過ぎぬ。今日よりは又學校に通ひて、新らしき日科を學ぶとなりけり。古きを厭ひて新らしきを悅ぶは吾人同じければ、新太郎は日毎に日科の中に一心を埋めて、下枝が美しき姿を暫時らくは忘れけり。

十月二十三日なりき。新太郎は今日も日課を調べんとてノート、ブックの半書き汚れたるを開きて、微分の例題にとりかゝりしが、瞬く間に了りて淋しかりき。此度は敎師に習ふたる方法は止めて、自分一

家の理論もて例題を解しけるが十題までハ滞なく解し得たり。さて十一題にかゝりければ、答へは違ひぬ。運算の間に間違ひしあらむと、繰返し見るに、一點の誤もなかりき。さて不思議と頭を左右に傾けて頻りに我が過ちを發見せんと勤めたれども、過は何れの點にあるか、偏に知れず。更に自家の理論に過ちハなきやと、丁寧反覆心を罩めて試せば、嬉れしや一點の過もなきが上に、我が理論のかくも條理を収め入れて餘地なかりしには、我れ自ら我が才に驚きぬ。さては古人の理に過もあらんかと煩碎を厭ハず、一々運算して見れば、其筈なり、我が如き薄淺なる凡庸書生にはあらで、名ある大家の汲々として探り得たる理論に、なぞて過のあるべきやと、我が生意氣なる心より、先人の名理を疑ひけるを痛く恥ぢけり。されど先人の理と我の理とかくまでに衝突することそいと怪しけれ。と再び我が理の進路を精細に繰返し、見れども〱此度も一點の過ちなかりき。今は詮術盡きて鉛筆を投げ捨て。瓢然杖を筇きて公園へと散歩にでかけぬ。

夕陽紅を西天に潮し、樹木、人家、人間、物として皆ほんのりと茜色を帯びぬはなく、松脂もなだれ落ちんばかりに、熱くるしく鳴き叫びし蟬の、一つ二つと鳴き止みて、今は皆ひつそりと靜りかへりぬ。此度は蓮地の蛙一つ二つ鳴き出づるにつれて、衆蛙囂々として耳に響きぬ。木の下かはる風は輕く袂をひるがへして、日中の煩悶を何處へか吹き飛ばしけん。心地すが〱しくなりて羽化して登仙とは此處らの快さをやいひたりけむ。

新太郎も此の好風景に對し、胸中大に開け、此機に乘じて我が數理の過ちを發見せんと獨言きつゝ、姸よき女の打連れて納涼に行く湯上姿も目につくものかは。一心凝りてい歩みながらも、兎やかくと考へつゝ歸る路に、同校の生徒二名に行逢ひ、かれが丁寧に禮を施すを知りもせで、わきめもふらず急ぎしかば、跡に三輪はふとい奴じやと罵られけり。

歸りて夕飯もそこ〳〵に食ひ、早速燈下にノートを開きて靜かに心を數理にひそめ、書きては消し、消しては書きつ、我が知れるあるとあらゆる手段を盡して考ゆれど〳〵終に一點の過ちをも見ず。再び前人の理を疑ひて驗すれども、更に一つの過もなし。詮術つきて頰杖に默然と眼を眠りし折は、世はしんとして音なく、唯我れをまどはすものは澤の蛙と葉末の露にすだく虫の音のみ、折から公會堂の鐘の音二つ耳根に響きぬ。おや〳〵早や二時かと洋燈を見れば、油は將に盡きんとして、火影暗く徐ろに我れに眠りを促がし顏なり。寐るべし〳〵と床はとりながらも流石に未練は殘りて、今一度机に對ひて、眼を眠たる儘に、考ゆるともなく、茫然たり。發矢、其一刹那、遇然と頭に浮びし一思想。然り〳〵と小躍して、急ぎてノートを繙き、何か知らず二つ三つ書き記して、然り〳〵と思はず机を打つて叫びし顏色、神氣靄々として滿面に浮び、眼はきら〳〵と閃めきて宛然二ケの金星に似たりけり。愉快〳〵と椽下駄つッかけながら庭に下り立ち、仰いで晃々たる明月を眺め、胸をひらきてほつと一息つきぬ。

十二、見送りて自分の室に歸りしまでは、一切無宙に覺はなかりき

昨夜の夜更しに、今朝は眠たきを、勤めておき出で、顔を洗ひて庭園を散歩すれば、アヽ今日程愉快なるは嘗て一度もなかりき。心さへ〳〵として天地も自ら廣く思はれけり。

熱心より人間に必要なるものはなし。始めは暗憺として一歩も見ゑねど、倦まず撓まず。これに寄りかれに辿りて行かば、嬉れし燧道は光明遍照なる別天地に開くものぞかし。我れいかに愚なりとて、常に昨夜の如く熱心に數理を研究せんには、いつか大數理を發明せんと疑なしと、かう思ひては歩き振も我れながら高尙なる樣に思はれ、鼻を挾む眼鏡の光も今日は必らず夥多の諸生を驚かさむと思ひぬ。學校の教場にありては此の夥多の書生は日每に何をかする。碌々たる日課に追はるゝか、或は優遊不斷に其日を送くるものならむに、見よや我が高尙なる態度を。待てよ、天晴れ萬人の眠りを醒さむ大數理を發見して見すべしと、思ふ心の胸裡に往來しては、神經自ら激しく、些細なる小事にまで、心の引かれぬ。

歸路に石山と連れになりて、昨夜の事を語りければ、石山は莞爾と笑ひて、其樣な數學者を徒らにおくこと惜けれ。我が依賴する一件、請合ふてはくれぬかといふ。更めての依賴とは何事ぞ。身にかなふべき事ならば、左右なく承知すべきに、先づ語り給へと促せば、下枝樣が代數を教へてくれとお賴みなさるゝが、君教へてやつてはどうだ。何にも每日といふ譯ではなし。一週間に二三度位は、あの美しき姿に、日科を犧牲に供してもよからふがと笑ふ。それは何よりも嬉れしき事なり。ともかくも教ゆべけれ

ば、毎日でも來る樣に告げてくれ給へと、笑ひ聲賑はしく別れけり。

中一日おきて石山が音信れけるを玄關まで迎ひ出でミウヱルカムと禮すれば、石山は外を覗きて、なにも其樣に恥かしき事はなし。といふを、何かと聞けば、獨乙語にてあれを連れて來たといふ。三輪は吃驚し、石山が先日の話しは我れを嬲りしならむとひたすらに思ひけるが、さては眞實下枝を伴なひ來れるか。男子ならばとにかく、婦人とありては母の手前も何となく氣のおかれて厭なり。されども今となりては、先に諾ないしは、全く偽りなりといはむもよしなく、我れも庭にいでゝ御遠慮なしに入り給へと挨拶すれば、下枝は中腰に禮しつ。

三人共に新太郎が書齋に入れば、下枝はちよッと室の隅に手をつきて何やら挨拶するを、ハイ〳〵と受答のみして(其時の眼の作用を見たかりし)手足の震ふを、石山に恥かしき事、此上もなかりし。ずつと此方へ寄り給へ、 代理學は何處より學び給ふやと問へば、方程式よりと答へしのみ。三人は啞なり。

やがて石山が、左樣ならばと立ち上らんとするを、今暫時殘りて居てもよいではないかと止むれば、又來るべし。今日は是非にと立ちあがるを玄關まで見送りて君に歸られて堪るものか。我れと彼れとの差向ひでは、何となく氣のおかれて畏ろしい、もう暫時居給へと頻に止むるを、君ならば女と差し向ひに何をして居ても誰れも咎めじとて歸りけり。

室に歸れば、思は同じ、下枝も三輪に歸られては、何となく恐ろしき樣子に頭をうなだれて無言なり。かくてあるべきにあらねば、早速方程式の理論二三を說明して、此の例題を自分でおやり遊ばして、不解らぬを金曜日に來り給へといへば、本と紙製石盤とを風呂敷に包みて、左樣ならば、お邪魔致しましたと禮いふて立つを、玄關まで見おくりて、自分の室へ歸りしまでは、一切夢中に覺えなかりき。一時心の錯亂のみなりせば、猶堪ゆべけれど、心の收まらぬ事常に今日の如くなりせば、願ふてもことわりたきは是れなり。心を取り直して勉めんとすれども、心臟の皷動自ら亂れて、することなすこと一つも手につかず。手を空しくして其日は暮れぬ。

夜に入るにつれて心も自ら靜まりて、今日の事ども一ッ〳〵に考へ出され、考ゆれば考ゆるほど、實に戀ほどおかしく又もかしきはなかりき。論理を說明する我が聲の震へし事、耳鳴り舌乾きし事、下枝が顏を赤くして聞き居し事、折々上目にぢろりと我が顏をながめし事、さては小さき物音にも驚きし下枝のおかしさなど、暮煙の風に靡くが如く、徐ろに胸の中に湧き來りて、我れを捲き込んで異境に行きぬ。唯恍惚の間に眠る時は來りぬ。床に入りても下枝が美しき姿は、胸をあふさきるさに搔き亂して、果ては疲寐に寐ける。

十三、下枝が前にありては百姓の大名にお目通を許されたるが如し

待ち兼ねし金曜日は來りぬ。今日も美しき御姿を拜めるかと思へば歸校の急がれて、瀧なす汗を絞りて

歸りつ。今や來ると動學の書を繙きて讀ともなしに待ち兼ねければ、、、、ガタリと障子の音にも吃驚して、心臓かき亂るゝを、胸に手を當てゝ漸々に靜めし。

ガラ〳〵と玄關の戸を開く音に、一騎落の遙かに數萬の敵を見つけたるが如く、顏色蒼然としてひた震ひにふるひぬ。

嬉れしとやいはん、失望とやいはん。遠慮なき足音に襖を開きて、會釋したるは下枝にあらで、石山なりけり。

何用あつてと問ひたげなる顏に、石山は袂よりハンカチを出して顏の汗を拭ひながら、今日は來ぬぞと意外の言葉、來ぬとは誰が來ぬといふ事ぞ、勿論かの樣よと英語にて答ふるを、、、、ホワイと問へば、まア聞き給へと座り返りぬ。

「成程、それもそうぢや」を前置にして石山がいひけるやう、昨日下枝が我れを訪ねていひけるは、代數を習ふ事は暫時止に致しませう。もし三輪樣の女子とあれば、かうもあるまじけれど、男女の間は兎角に心おかれて、何となく其處らあたりの恐ろしく、血は逆上して、耳鳴り舌乾き、三輪樣の御說明なさるゝ聲も、何となく、遠きより聞ゆる樣にて、一つも心に落付かず。本を抱へて玄關まで出しまでは、夢中でおりました次第にて此上は日毎に通ました處か、何の役にもたゝずと思へバ、いはゞひやかした樣にも思はれませふが、貴君より何卒よき樣に申上げてくだされ。又三輪樣とて御說明中にも御聲の震

へました御様子にも見受けましたればといふ事にて、今日は謝りに來れりといふを、三輪はそれだから厭ぢやと云ふたではないか。唯の女ならばとにかく、苟しくも戀れてをる女に顔をさしつけての說明はなか〳〵に骨が折れたぞ。來ぬとあれば恐ろしき事がなふてよし。これ見給へ、今君が來りしをあれぢやと思ふてと、心臓に手をあてるを、小膽な奴ぢや、女位に胸をいたむる樣では、と石山は笑ひつ。

新太郎は下枝が前にありては、むかし百姓の大名にお目通を仰せつけられたるが如し。いひたき事は喉につまりて出ず。おづ〳〵顔を上げて、下枝はどうしてゐるかとそつと覗けば、しや、下枝が顔とひつたり出逢ひて思はず顔をそむけて、何一つ樂しき事いなきに、何故か知らねどそれが又無上嬉れしかりしが、今日より下枝の來ぬとあれば、一層淋しく、思は下枝が小さき懷の中へかけ入り、戀はいよ〳〵燃へて魂をやかんとせり。

十四、今や其の賞品を得べき時期は來れり。

アゝもし彼れ新太郎をして無賴の少年たらしめば、忽ち戀の奴となりて、浮名を立てんは、暗夜に螢火を見たるが如し。されど彼れは整然たる一つの思想もて、專ら數理を研究し、死に至るまでも止めじと思ふ念の、常に心頭に蟠りて、仇なる思を制したり。されば一旦は心靈をもやき盡さんまでの戀に惱みたれど、心を靜めてなすべき事情を考ふれば、多忙多端、優遊不斷に日を送くるを得ず。乃ち敢果なき戀は殆んど打忘れて、ひたすらに數學をぞ學びたりける。されど彼れが經驗なき腦裡に逸早くも忍び入

りたる戀の種は、彼れが勉强の風にも全くは吹き飛ばされず。隅々に殘りし二三粒のつれ〴〵なる雨に遇ひては、ともすれば苗ばえせんとすなる、實に戀ほど執念きものは世にあらじ。

一月と過ぎ二月と過ぎ、新太郎は多年螢雪の苦學をへて、今や其の賞品を得んとする時期は來れり。此年の七月拔群の成績を得て、新太郎は首尾能く高等中學を卒へ、證書の授與式にも、彼れは校長の祝辭に對する答辭を聲朗かに讀上げたり。

ひた待ちに待ちたる大學に行かむは、僅かに三月の中にありと思ふ心の勇み起ちては、平常の暑中休業の如くならず、凡そ遊戲の暇にも數學に關する書は何くれとなく繙きぬ。

學校の開業間は自勉と日課とに追はれて、ついゆかしき戀を打忘れけるが今暑中休業の閑暇なる身となりては、殘りし戀種の此時ぞと各先を爭ふて芽ばれるを此度は引き拔かんともせず、其儘に放念つておけば、恣に繁り行きぬ。ア丶去年の此頃なりし、石山の宅にて戀しき琴の主に逢ひ初め、それより見ぬ戀は眞の戀と榮へ行きて、心はおふさるさに思ひ亂れける、其折石山が依賴にて一度——唯一度——かの主に代數を敎へたりしが、ア丶思ひ出すだに夢の樣なり。彼れが顏を赤らめて挨拶したる頭つき、おづ〳〵我が顏を眺めてポッと赤面して橫をむきたる愛度氣なさ。ア丶其時はその樣に此心が搔きむしられて、此身がうつとりとしたか。一筋二筋ほつれかゝりし鬢の毛の輕く薔薇色の頰を撫で、ア丶かの香ある漆の如き銀杏返の美しかりし事、是等を見たるときの、我が心は如何に刺擊せられしか。身はま

るで空蟬の殼となりて、いかに魂は戀神のあたりを彷徨ひしか。思ひ出すだにあれに對せし時の感情の高尙さ。されど惜しき事は、何となく畏ろしくて十分に顏は見られず。——目付はどの樣ならん、口付きは、鼻筋は——オヽ定めし驚く程に美しからんなど、其折は夢にだに思ひ出さゞりし感情の、月日隔りての今日此頃は不思議にも、現然と胸に湧き出でぬ。

十五、あなたは何としてかの犬を知り玉ひし。

恐怖は心に弱點あるが爲めなり。もし我れに一ツの弱點だになかりせば、世に恐ろしきとは一つもなからん。其翌日は約束なれば急に急かれて、石山が宅を訪ひぬ。戀しき下枝は我れより先きに來りて、石山が書齋にて何やらん高笑に話せり。新太郎書齋へ入れば、話はひたりと止みて、石山は多く問ひ、三輪は多く答へぬ。何か話かけたきは胸に充滿たれど、其人の前にありては、何となく口籠りて、いひたき事も、喉にて無理殺しに押下げたり。アヽ下枝をして常の女たらしめば、かく心の怯るべき理はなけれど、彼れは新太郎の戀人なり。我がゆかしき戀人なり。されば仂なきよしなし言いひ出て笑はれもせん、我が拙きを見つけられもせんかと、思ふ氣遣の絶えず胸中に彷徨ふが爲めか。但しは婦人に馴れざる我れの女の恥かしき爲めにや。何となく怯氣の立つは、蓋し戀神を此の胸の中に宿したるが爲めあらん。

下枝は如何思へるかと流眄に見遣れバ、此人も同じ何となく座の落ち付かぬ素振りにて、頻に袂に手を

入れて何をか探り給ふらん。其人も我と同しく我れに恥かしくてもぢ〳〵し玉ふかと思へば、神ぞ嬉れしく、猶更ょ口は開かず。一座しらけて居心のおかしからねば歸らん事を思ふは、我も覺のある事なり。もしかうなりて下枝の歸らんといひ出さば、何とせんと案じ居しが、長らく忘れてありし、例の犬の事ふと心に浮びいでたるを機に、犬はどう致しましたかと問へば、是れ丈にても心臟は俄かに躍りて舌乾き、息を切つてない唾を呑み込みぬ。下枝ハ痛く驚きたる樣子に、貴君は何としてかの犬を知り玉ひし。その犬は疾うに死まして、先月の二十五日が丁度一周忌にあたりましたと答ふる聲の自らうるみぬ。さればかの犬は此人の愛犬なりしならんと新太郎は早くも心づきけり。かの犬を送りてゆかしき琴の音をきゝしは、去年の五月の十日なりし。其翌日より犬の來らざるを母と共に憂たりしが、犬は其時より病に罹りて四十五日目に死せしかと、かく胸の中に過ぎ來し方を繰り返しながら、犬の病みつきしは五月の十一日ではなかりしやと問へば、貴君は何としてかくは悉しく知り給ふや。と半はいぶかしく半は悲し氣に、忘れもせぬ五月の十一日より病み出して、四十五日の間苦難に肉落ち、眼窪みて、吼へる聲も自然と哀れに、可愛や六月廿五日の朝妾が心づくしの看病の効も敢果なく、とう〳〵往生致しました。さるにても貴君は何としてかくは一々知り給ふぞと怪しみ尋ねけるに、新太郎は一伍一什を語りて、眞實に悲しき事をしました、他所の犬とはいひながら、あの樣に我等に狃みしものをと、かくいひて下枝の顏を覗けば、いぢらしや、彼れが眼には涙一杯なりき。

犬よ、犬よ、犬は實に我れと下枝との戀の緒を繫ぎ合はしたる月下氷人なり。ア丶かの犬だに我れと下枝との似合はしき夫婦ならん事を思ひて、かくまでに我れになじみしか。神はかの犬をもて我れと下枝が戀の緒を繫ぎ合せんが爲めに、暫時らく此世に生れさせ給ひしならむ。さればこそ、彼を送りたる我れに、下枝の琴の音を聞かせ、神の使も首尾能く果てければ、直に招かれて、もとの天國に歸りたるならめ。かく思ひ詰めては、何とかして下枝を我が妻にしたしと思ふ念のひたすらに燃へあがりて、下枝を愛し且つ敬し、徒らに彼れが歡心を得んとを勉めぬ。

下枝は又犬の死を悲しみながらも、犬がかほどまでに三輪樣になじみしは、いかなる譯ぞ――他所に宿りて歸らざりし夜は幾度なりしぞ。――これは三輪樣が暖き御情に畜生の犬までが、かく絆されて、思はず知らず三輪樣の宅にて宿りしならむ。三輪樣はかくまでに柔しきお方にや。其上實《石山の名》樣に聞けば、誰しも譯かり兼ぬる數學を、容易く解し給ふと、掌の玉を轉すが如く、現に豫科二年より特待生を一度も欠け給はずとやら、ア丶我れも女と生れたる身の、何時かは緣に繫がる折もあらんに、願くば三輪樣の樣なお方の妻となりたしと、かく思ひては、狹き女の心其れのみに走りて、夢にも現にも見ね給ふかの樣の御姿に、唯うか〳〵と其日を送りぬ。

十六、數學なるかな〳〵、汝は我が命なり、我が妻なり

戀は二人を無念想無に置し事なし。夫れ〴〵今日の勤めに暇なき折はとにかく、少しの暇ある毎に、僅

の隙ある毎に、男は女、女は男の姿と性質を各々が胸の中に描きて、ひたすらに戀の花に迷ふ、あはれ蝴蝶の身なりけり。

* * * * * * *

新太郎は沈鬱の面をあげ、長大息していへらく、實に欲てふものには限あらじ。されど此の欲ありてこそ、人間界は立つなれ。生存競爭は欲の變形ならずや。もし人間をして無欲ならしめば。世はいかでか進歩せむ。無學の徒は小欲なり。故に碌々として其生を終りつ。見識高き學者は大欲なり。故に能く名を後世に傳へられる。見よやアイサック、ニウトンを。彼をして、もし林檎の落つるを輕々に看過せしめば。——是れを知らんと欲するの念なからしめば、彼れいかでか引力の大則を發見し得ん。見よや、ナポレオン、ボナパルドを、もし彼れをして、コルシカの農夫たる事を滿足せしめば、彼れいかでか、歐洲を併呑せんや。欲なるかな〳〵、此の欲なくんば人間は蠢蠕として終らん。精神大に發展し、靈妙なる眞理を發見せんと欲せバ、まづ此の欲を養成せざるべからず、我れあはれ斃るゝ迄も此の欲に纏絡して、少なくとも五以上の數理を發明せでは止まじ。此時新太郎が顔ハ晴れたる青空の如くなりぬ。過てり〳〵此の高尚なる欲をもて、最低級の情欲を犠牲たらしめんとしたる我が心の卑しさよ。嗚呼もし一歩を誤らば、我れは終身墮落の境遇に沈みしならむと、ぞつと身をふるわして、我が過ちのよくも悟り得たるを、ぞく〳〵と喜びぬ。

されど情慾といへば賤しむべき樣に見ゆれど、愛、ア丶神聖なる愛、こを得んとする我が慾はかの高尙なるもの丶一分子なり。我が欲はあながち賤むべきものにもあらじ。されば大學にゆかんとを止めて、下枝を妻にして世を樂まんか。然り肩書時代は既に過去りたり。數多の凡庸學士又た何をかなさん。今の世に願はしきは其人の才なり、其人の見識なり。よし〳〵我れ思ふ處あれば、大學に入らんとを止めて、家内生活をなさむ。ア丶我が先きの說は謬てり。我れはかの高尙なる愛を捨てゝ、最低級の色慾を取らんとするにあらず、此の慾、此の神聖なる慾を、發展せしむるには、大學が唯一の學校にあらず、我が心の中にも此の學校はあるなり。故によし妻を娶りたりとて、此の慾を捨てずんば、後世なすあらんと請合なり。女なるかな、妻なるかな、幽婉なる愛の中に日を送りつゝ、我が志を仕遂げ得ば、是れぞ世にいふ幸福の極度なるらむ。

されど我が學識は、高等中學を卒業したるのみにて、能く精細なる數理を發見し得らるゝや。我が腦は能く微小なる數理を考案し得る程に、養ひ得たるや。新太郎が眉には憂の雲蓋ひかゝりぬ。若し未だ我が思想十分に發達せずんば、大學に入りて孜々として勉めざるべからず。我が數理は我が命にして、我が下枝は我が飾なれば。戀は幕の切れ目に奏する音樂なり。我が數理は劇場に上りて活動するセキスピヤのドラマなり。ドラマを取るべきか、音樂を取るべきか、數學は捨て、戀は取るべきか。否、否、寧ろ捨てゝも受るべきは數學なりけり。數學なるかな〳〵、汝は我が命なり、我が妻なり。行け大學へ、

數學的思想を十分に養へ、堂々たる大丈夫何ぞ纎弱たる一女子の爲めに腐らんや。かう思ひては新太郎道理の見解に責められて、惜しみながらも下枝は忘れざるべからずとて、石山を尋ぬる事此折より疎くなりぬ。戀の芽の萠さん事を恐れて。

十七、一年の嫁詮義多分は此月に濟みたり

男程自由なる物はあらじ。今おる位置の惡しと思へば、明烏の翼を借りて高く空中に翔け上ぼり、名譽平和の光照り輝きたる高山の頂に羽を靜めて、遠き下界の昔を見下ろし、其時のおかしかりし事どもを一笑に附し去りぬ。女ほど苦しきものはなし。賴むは唯戀の世界のみ。狹き籠の中に押込められて、悲しや鳴音血を吐く苦しみも、我が形を見、我が聲を聞きて喜ばん人の爲めぞと思へばこそ、憂いの、つらいのは微塵もなけれど、眺め人もなく、聞き手もなき所に投げ遣られては、何處に此身の立つ瀨があらふぞ。されば古き語にも女は己れを知るものゝ爲めに形造るといへり。我れは唯三輪樣の爲めにこそ身を裝へ、もしかの樣の我れを嫁り給はずば、此髮、此姿、アヽ何にかせん、實に果敢なきは浮世なるらん。三輪樣が此度の高等中學を御卒業なされしを、もし大學の御卒業なりせば、いかに嬉れしからんに、かの樣は是れより進みて益々御勉學なさるゝ身に、妻などを娶り給はんなどは、露思ひ玉はざるべし、アヽ悲しきは浮世なり。我れも今年は十七なり。よもや父母の廿まで我れを嫁入させずにはおき玉はじ。アヽ如何にせんと思ひ亂れ、我が身の今須臾跡に生れざるを悔みぬ。かくて新太郎を思ひ染め

し、一念の戀は、世の常の制裁にてはなか〳〵に收まらず。果ては飯も進まず、髪も結ばず、時々ホッと吐く息の、母に咎められたるゝ幾度ぞ。

されど本人が進まぬ縁組を、御情深き父母なれば、よもや無理には押し付け給はじ。よし〳〵其折にも至らば、厭なりといひ張りて、四五年をつき延ばし、かの樣首尾よく御卒業なされし曉を待ちて、無理にも妻にして貰ふべし。

さりながら妾れのみかく思ひ詰めたりとて、かの樣妾れを嫌ひ玉はん日には、いかにせん。いや〳〵かの樣も我れを慕ひ玉ふは、其形其言葉づかひにてもよく知れたり。あはれ下枝が心は有頂天に舞ひ上がりて、見事我が今日の位置を知らずなりけり。

*　*　*　*　*　*　*

始めての上京なれば、大學の始業前に着京して、其の都合を豫め知らむこそよけれと、新太郎及び他の卒業生五名は、今朝八時出帆の敦賀丸に乘り込めば、親戚朋友波を蹴てかけ行く艀の後姿、見へずなるまで見送りつ。

*　*　*　*　*　*　*

下枝が心の淋しさ、いかで新太郎が母にも劣るべき。今は唯一日も早くかの樣の御卒業なされて歸り玉はん日を待つのみなりき。

既に此年も暮れ果てゝ、今は又人の山築く花の彌生となりぬ。若者は花に浮かれて春駒の狂ひ廻りて、一年の嫁詮義多分は此月ヶ濟みたりと、此處丈は神有月の出雲の大社に諸國の神々集ひ玉ひて、打ち興じ給ひけるとぞ。

下枝はいよ〳〵他所より結婚の申込まれぬ。唯厭なりと云張りて此山一つを越しさへすれば、跡は平き原を走みて、三年の月日を暮らし、かの樣の妻となつて、及ばずながら片腕ともなりて御助け申さん。日よし〳〵心弱くては躓く事もありなんと、妾は未だ嫁入する事は厭なり、嫁入する程の働なしと、頭の柔和なる性質にひきかへて菅なくいひ放てば、父母大に驚き給ひて、其方は今年何歳ぢやと思ふぞ。世には十五六にて嫁入し、十七八は既に子持となるさへあるに、と母君叱り給へば、今年十八ヶもなりたるものが、嫁入する程の働きがないとは、何として親の口より言はれふぞと父君誡め給ふを、無理に拒みて親の意を害ひ、私の忍夫あるかなんどにて、此の樣なよき緣を拒むならんと疑はれんも本意あし。又現在親の口より今年十九ともなりたる娘が、嫁入する程の働きがないなどいはれぬも尤なり。さりとて此の緣を諾ひては、かの樣に添はれず。さりとて父母が道理に及向ふ及はなく、思ひ惱みて、何と答へむ言葉もなく、何か知らねど頻りに悲しくなり、ワッと泣き出しぬ。

纖弱き心は戀と孝との二筋に思ひ亂れて、兎や角と千々に心を碎きし末は、何もかの樣に末の約束したりといふでもなく、唯我が切なる心の中に未來は斯うよと自分勝手に定めたるものから、親の勸め給ふ

を否まん道理もなし。よし〳〵此縁調ひて他所の妻となりしとて、かの樣に義理立たずといふ譯にもあらず。さりとて、ア丶戀しきはかの樣なり、願くばかの樣の妻になりたし。

ア丶下枝の戀は眞の戀にはあらざりき。たゞ三輪が思ふた樣にかれは貞淑なる女にもあらざりけり。

十八、唯叶はぬ戀のみに候はゞかくも落魂致すべき義は決して無之候へども

初戀は常に叶はぬものと、何時の誰れが定めてか、我が戀ふるかほるは人に横取せられ、今又三輪の戀人も他所の庭に咲く花となりぬ。我が身にも覺へある事なり、下枝がいよ〳〵鈴木といへる官吏に結婚したりとの、報に接せし三輪が驚きと悲みとはいかなりしぞ、今日は何とか返事あるべしと、待ち詫びたる處へ、郵便と、聲ばかり勢よく投げ込むで行く手紙は果して三輪よりの手紙なり、手に取るも遲しと、封とく〳〵讀みつゞくれば、

御手紙拜讀致し候處、誠に驚くべき次第に候、上京以來派手なる都風俗の女に幾人となく或は路にて出遇ひ、或は面のあたり談話致し候へども、我が幼き心にもかく刻み入りし戀のいや深く、妍よき佳人の面影にも美しき下枝に似通ひたる姿の目に映り見ゐて、唯ひた焦がれに焦がれ候ひき、愚なるは我が笑ふべき心に候、國にありし折は賢くも我が戀は我が勉强心の爲めに制せられ殆んど忘れ果候ひしが、他鄕の風月に呻吟致す今の身と相成候ては、さしも消へなんとしたる戀の、ふく〳〵と燃へいでゝ、鬱怏の煙に捲かれたるは幾度に候ぞや、今は唯一刻も早く暑中休業になれかし、人よりさきに

歸國して、懷かしき下枝が顏を見んものをと、是のみを樂みに日毎に勉學罷在候處、嗚呼今や我が幸福は全く盡きぬ。盃の底に殘れるは鬱快といふ滓のみに候、我愛らしき戀人の結婚したりと聞ては。

唯叶はぬ戀のみに候へバ、かくも落魄致すべき義は決して無之候へども、先般申し上げ候如く、高等中學におり候折は、大學といふものゝいかに高尚にして人物を養成する處ならんと、幼き心にも思はず慕ひ候ひしが、いよ〳〵大學の風に吹かれて見れば、他の大學い知らず、我が理科大學の賤しさ、專ら數理のみを研究して、高尚なる學者を養成する方針ならんと思の外、齷齪たる小數理のるつぼの中に諸の學生を一まろめにして押込まんとする博士、學士のうたてさ、つまらぬ事にのみ氣をあせりれり候齒痒さ、されば余が敎場に出席せんとする勇氣も失せ、病氣と佯りて、常に寄宿舍のベットに伏し、唯一念我が志の向ふ處にのみ、數理を研究罷在候、回顧すれば前月の二十日にて候ひし、例の如くベットに籠り力學を研究致し候處、思はぬ所より屹度おもしろき原理を發見致候、其折の感情は文學者ならぬ我れの筆には盡し難く候、されどかくベットにのみ籠り居ては、監督の眼鋭くて叱られもやせんと、折ふしは敎場に出席致候へども、敎場にある中は絶へず頭痛が致し候、此の如き次第に候へば、來月は早々寄宿舍をおり本鄕邊の下宿屋に投ずる覺悟に候が、其時は我が思ふ儘に、數理を研究致さんと今よりいとゞ嬉れしく候、されど案じらるゝはマークの事に候、一學期も二學期も

皆降級の點に候、されど試驗の及落は物かは、我が數學を研究せんと思ふ念の、燃へ立ちては、世界に何の恐ろしき事も無之候、

我が周圍のおもしろからぬ事かくの如くに候、世界の愉快ならぬ事かくの如くに候、それにつけて懷かしくゆかしきは婦人の愛に候、かくの如くぐず〳〵しておもしろからぬ日を送らむよりも、早く妻を迎へて其の愛の露にうるほひ、かくて我が志を衝き透さば、いかに嬉れしからむと思ひ候へば、さらぬだにゆかしき戀の益ゆかしくなり増り候、然るに今や其の戀は他所の戀となりぬ、我が心に無量の苦を見捨て、嗚呼我が進歩の敎導者たるべき下枝は人にとられぬ、我か賴みと思ひし大學はいまはしき學校敎員の養成場なりき、今や我れは如何にして生活すべき、かく思へば我か腸ハ日毎に九廻致し候餘は必しもいはず、感慨迫りて筆の運びを妨ぐべければ敬具

月　日　　　　三輪新太郎

石山實樣

讀み了りし石山は思はず落涙して、今更に浮世の味氣なきを悟りぬ。

十九、絕ゐて方便といふものには考へ及ばさゞりき。

學校の出席も怠り勝ちなりければ、其結果三輪は終に降級したり。石山は高等中學を卒業しつ。新太郎は下枝が美しき姿を見んものをと、一刻も早やく暑中休暇となれかしと待ち兼ねたる甲斐もなく、下枝

が他所にとつぎしときゝて歸省せむ勇氣もなく、且つはまんまと落第したる此の我れが何んな面提げて親戚朋友に逢はれふぞと、其の夏は東京に止りて、千々に我が將來を考へたり。鬱々たる中に暑中休業も終りぬ。石山は大學に來りぬ。新太郎今までは、渺茫として際限なき砂漠中に彳みしが如く、顧みて一つの語るべき友もなく、暗涙坐ろに袖を露せし程の淋しさも今は語るべき親友の石山を得たるを幸に、日毎に我が志と、周圍のおもしろからぬ事などを語りて、僅かに心を慰めぬ。學校は始りぬ。前學年の降級に困り果て、此度は厭ながら頭痛を押へて、講義を聞かんものと、思ひ定めたりし決心も、其折となればいつしかに消へ失せて、新太郎は此學年も欠席勝なり。同じ高等中學より行きし學生の、餘所にのみ見て止まんは、朋友の義務にあらねば、新太郎が下宿を訪てとやかくといひ爭ひたるものもありけり。されど一度養ひ得たる習慣の炎は、ともすれば、燃へ上りて、新太郎は一間に籠りて專ら數學をのみぞ研究したりける。

滔々たる數多の學生、彼れ等は如何なる目的ありて上京したる。小唄に浮かれ絃器を弄し、放蕩遊逸狂犬の綱を切りて放れたるが如く、日毎に夜毎に色を淫女の間に漁り、或は無禮講を集めて情談に數夜を徹し、負債山の如く、氣慨日々に衰へぬ。嗚呼彼等は一生をかく朧氣なる霞の中に終りて、以て滿足し得るやと、今しも喧々として色慾を談じ、昨夜の夢の未だ覺めやらぬ故にや、小唄交りに跳ね躍りし同宿の書生も埒なく眠りて、遠きに吠ゆる、犬の聲と天井を驅け行く鼠の音のみ、世界はひつそと靜りぬ。

其の時新太郎蹶然として起ちあがり、火を點じ、思はず一慨してかくの如く獨言きぬ。暫時は悵然として瞬もせず燈火を見詰めぬ。嗚呼新太郎が胸の裡にはそも如何なる感慨の往來しけむ。やがて暗涙はら〱と頰を傳ふて落ちつ。

やゝありて嘆息して曰く、身体の奴隷たらんは猶ほ堪ゆべけれど、思想の奴隷たらむは堪ゆべからず。かの博士の教授に現を吐かすものは、思想の奴隷となつて終に知らざるなりと、かくて急ぎ力學の書を繙き、一向専念に夜を徹しぬ。

*　*　*　*　*　*　*

君がいふ所ろ甚だよし、假令當代には捨らるとは雖も、眞理は千載の下に一知己を待つ、こはこれ學者たるべきもの丶守るべき第一の原則なり。されど之れを世に發表する手段に拙くして、空しく廣大なる眞理を抱きながら、幽鬱慘憺空しく一生を犬死する、是れがまさかに人間の幸福でもあるまじ、義務でもあるまじ。見給へ、豪傑は時代に造られて而して后ち時代を造りぬ。固より人間界に生棲する以上は我が意見に叶ばぬ事もあるべく、又死たき程の殘念にも逢ふ事あるべし。されど其度毎に、憤怒し落魂する樣では、終生我が抱く處の眞理を發表すると能はじ。君が碧天に向つて一直線に飛翔せんとするの志は大に似て反つて小なり。壯絕なるに似て反つて落膽なり。社會といふ周圍の事物を忘れて、濫りに血氣に逸らんとするが故に小なり。時代に制せられて時代を制せんとするの氣慨なきが故に落膽なり。

故にもし大に成すあらんと欲せば、先づ社會とハいかなるものなるかを知らざるべからず。其の手段としてハ第一にドラマを讀むべし、ドラマは人間界の圓滿なる寫眞なり、セキスピヤのリヤ、タイモン等に對してはいかなる感情の興るらんと、石山が常に誡しるむをも、うるさしとて耳を塞ぎつゝ、三輪ハ專ら我が意の向ふ處に走せぬ。

もし石山のいふ如く、社會といふものゝかくも淺薄果敢ならんには、彼等が何が故に此の氣味なき社會に碌々として生き永らへるにや。何が故に死せざるにや。あはれ彼等は此の影だに捉へ能はざるか。否、否、かゝる小さき事を悟られざる人間もあるまじ。此世界は何條かゝる賤むべき輩の巣窟のみならんや。もし是れを事實とすれば、武斷的豪傑はとにかく、學術的英雄は如何にしておこらん。石山は過れり、大に過れり。かく我が心に一々辯駁して、新太郎は絶へて方便といふものには考へ及ぼさゞりき。

兎角する中に、學年試驗は頭の上に來りぬ。今復降級とては人に合すべき面もなければとて、試驗間近くなりて、俄かに學校の日課をのみ勵みしかば、是れはまたあきるゝばかりなり。一日も欠さずに出席したるものよりも、反つて其成蹟大に勝りて、此度は首座となりて昇級しぬ。

新太郎は此の時より、孜々大學の價なきを知りて益出席を欠きぬ。暇ある毎に一室に籠りて、專ら我が意の向ふ所に任せて數學を講じけり。されば時として幽玄なる境に入るときは、手の舞、足の踏む處を忘れて、躍り出づることさへありき。

二十、取り上げて見れば母よりの手紙なり。

數學を命とまで思ひ込みし新太郎も、八手の觀音樣にもあらねば、痒い處へ手の屆く樣に、兩方の埋め合せはなか〳〵にむつかしかるべく、況してや、博士輩の講義をもて暴主と見做し、其下に養育せらるゝ學生を稱して、思想の奴隷とまでも賤みし新太郎なれば、學校の日課は其處ぬけにしての數學研究三昧に、行末を案じての石山が諫言も耳に入るものかは。大學に入りてより二度の降級に、今は大學の籍を除かれ、あはれ果敢なき身の上となりけり。

かくあらんとは豫ねて待ち設けたる新太郎なれば露憂へる色なく、是れよりは我が天地にこそ。碌々たる大學を卒業したりとて何かはせむ、かの奴隷の養成場を。今は我が意の嚮ふ所ろに從つて、恣に數學を研究し、天晴れ世の數學者の魂を挫かむ程の大發見を遂げ、今日の不名譽を一轉して、令聞普く歐洲に輝かしてくれむ。アゝ待たるゝは其の喜ばしき日にこそ。狂と呼びたくば呼べ。愚と罵らんものは罵れ。我が才を顯はすは近きにありと、かう思ひ立ちては、故鄕の母に送るべき手紙にも、余が今度の大學除籍は實に喜ばしく賀すべき事なりなど、恣にかきちらしける。

今日しも新太郎は我が室を座禪堂に、結跏趺座して、ひたすら數理を考へけり。其時我が默想を足音に破りつゝ、下女が唯郵便とばかりにて、机の上に投げ行きし手紙を、取上げて見れば、母よりの手紙なり。母にも必ず我が思想の高さに、感じ給ひしならんと、封押し切つて急ぎ讀みに讀下しぬ。中程に至

つて新太郎の顔色は忽然として變じぬ。
母上よりの手紙は思ひ迫りし故にやわらん。筆の運もいと覺束なく、候なしにて言葉の通りに書き連ね給ひし處々に、涙の飜れし故にやわらむ、文字のうるみしは、母の御怒と其の御嘆を目のあたり見る心地したり。新太郎よ、汝はいつの間にかくは氣儘者となりしや。かくも怠惰者になりしや。小さい時は至つて魂性小さく、母が氣に背きし事などは一ッも覺なく、夜に日につぎて勉强せしもの故、子をひいきする親の目は賴むに足らねど、人々にまで神童と呼ばれしが嬉しさに、いふが儘に養育し、高等中學に入りし折も、大學に行きし折も、汝が纖弱き身体にもしや病氣もおこたらんかと、母は賴まぬ神もなかりき。かくほどに思ふ親の心を、子は萬分の一をも酌みたらんには、二度までも大學を落第し、へイ〱謝罪りてこそせめ。大學を除籍せられたるを此上もなき喜びとはよもいふまじきに、うちか身にはいかなる天魔の身入りけむ。悲しや母は落第と聞きてより、放校と聞きてより、身も世もあられず、病の床に伏しながらも、憎き汝か行末を案じけり。今は一刻も早く歸るこそ、よけれ。此處に爲換金十五圓を送りければ、此手紙到着次第疾く歸國せよ。もし萬一歸國せざるときは、送金は是れ限りなるぞ。誰か此の如き道樂子息に送金するものがあるぞ、汝は歸國を恥かしとも思はむが、母はいつまで、かゝる子を手放して、放蕩者にせふぞ、我が一人子の放蕩を餘所に見て喜ばふぞ、さつさと歸るべし。されど詮方つきてのつまりは、ようわる事なり、必ず身を忘るゝ樣な事はしてくれまいぞや。世の笑草となる

樣な事は決してしてくれまいぞや。隨分身体を大事にして早速歸國すべしとの文面なりき。新太郎は讀み了りて、唯ワッと咽び入りぬ。さては母上には、我が落第したるを全く婦人なんどにのろけしか故にと、一圖に思ひ給ひしか。さりとは情ない御仰せ、あれはどく〳〵しく書きて送りし我か志を、全く僞なりと思ひ玉ひての此の御立腹、アヽ悲しさは我か身の上なり。されど此儘に歸國したらんには、それこそ人の笑草とならめ、よし〳〵我れ思ふ子細あり。天晴れ男一匹か何條此身一つを養はれぬ事があるべきぞ。アヽ母上、今暫時らく待ち玉へ。故鄕へ錦を着て歸らむ、其日をこそ待ち候へ。と涙を拂ひて立ちあかりつ。されど常々御病身なる母上の、我か皈國せざるを何ぞの、婦人の癖に兎や角思ひ煩ひ給ひて、御病氣のおこりし時ハ何とせん。否、否、我か落第を聞き玉ひし今でさへ、病の床に伏し玉ふとの事なれば、餘所に見捨て、其日を過すに忍びずと、かく思ひては堪られずやありけん、憧と倒れて、ハ、ハ、ハ、ハ、ハンカチーフを顏へ押し當て泣きぬ。

考には緻密なる新太郎も、孝と名との二途に思ひ亂れ、何とせん方なく、石山を訪ねて此由を語れば、石山も暫時涙にくれぬ。

君が除籍は賤しき放蕩などに耽ての所業にあらず、立派なる思想の盛んに燃へ立ちて、計らずもかく成行きし過なれバ、一先は歸りて、母にも君が志を語り、一つは正しき君が行蹟を示して御心を休めんこそ肝要ならめ。信用を得たる後に、又上京して一旗を樹てんは容易なれど今の如き有樣にては、な

か〳〵にむつかしかるべし。我れも明後日は歸省すべき心組なれバ、同道して一先皈國してはいかゞと石山が勸告、いつの間に石山ハかくも實着なる人物となりしかと其卓説に服して、されば明後日は同道して一先づ歸省せんと約して歸りぬ。

廿一、此の恩は決して忘れまじと心中に誓ひける、一つは賤むべき世を敢果なみ、一つは故郷の母が病に伏し給ひぬる、我が過失を悔ひて、形も自然と痿れ、石山が列車の窓によりて、こゝかしこの景色をとやかくと評するを、無言にて點頭きながら、時々ホッと吐く息に、同じ列車の乘客は皆新太郎が素振にぞ目をつけたりける。

勢よき列車は勢なき体を乘せて金ヶ崎の停車場に止りぬ。〇〇屋といへる旅宿にあがりて、今日午前八時出の加能丸に乘りて、夢の間に金石につきたる頃は夕陽將さに西海に沒せんとして、海面は著しく紅を流せり。石山が傭ひし人力車に乘り移りて我が家の門に着きし頃は、日ハ猶全く暮れ果てねば、新樣が歸られましたと、近隣の兒女は、人力車の前後に集りぬ。

母の病氣は如何ぞと俄かに思ひつきたる樣子に、駈け入る物音、下女か誰やらんと出逢かしら、衝きあたりて御免くだされと詫ぶるをもきかず、新太郎は急いで母の室に入れば、三年見ぬ間に、さしも健なりし御からだの瘦せ衰ひ玉ひて、此憎き子の歸りしとも知給はで、すや〳〵と寐入り給ふに、思はず取りつきて、新太郎が歸りましたと、泣き入りぬ。

母は睡眠靜かに開き給ひて、長の月日、逢たうてならざりし我が子の顏を、今面のあたり見しものから、驚きて立ち上らんとし給ふを、手をもて制しつゝ、固の如く床に寢させ、新太郎はしげ〳〵と母が顏を打守りて。許してくだされと涙を落しつ、許してやるも遣らんも過ぎ去りし事は、いふとも詮なし。唯汝が健かにおひたちて、無事に皈りしこそ嬉しけれ。淺敢果ある人間の過ちなきを願ふは、水に住む魚が空を翔ける鳥の翼を羨むが如し。過ちハ誰しも有り勝なり。汝が手紙を讀みし折はぶちすゑてなりと懲らしめんとまで思ひ詰めし我れの、辛々心收まりて手紙を繰り返し見れば、恥かしや女といふものゝ淺間しく、物を疑ひ、事をきゝかぢりての腹立に、汝ハ定めし母が手紙を端なしと思ひしならむ。大概の事はわかりたれども、委しきは汝が漢字まじりの文にてはわかり兼ねたり。いかなる譯にて大學の籍を除かれしぞと。勇こそし給へ、目に涙一滴持ち玉はぬ母が顏色に、新太郎は我にもわらず勇み立ちて、さん〴〵に大學を母の前にて罵りけり。

よし〳〵かゝる面白からぬ大學にぐず〳〵してれるとも何かはせむ。上京ハ今暫時見合してよき折を待かねし。我れも――未練とは笑ひ給ふな――一人子の汝に別れては、鶴のたちおがりたる跡の淋しく、ともすればバ病に惱まされんとする此母を、不憫と思はゝ金澤に止まりて、此の心を休めてはくれぬや。母も此年は五十の坂を超へぬれば、目出度往生せんこと程遠からざるべし。我れもし死せりとせば、身に係累なき汝は我が思ふ通りにすべしとの母の言葉、新太郎は一つの苦しみを拂ひぬけたれども、拂ひ

ても拂ひても拂ひ難きは、老年の母をいとしと思ふ心なり。よしさもあらばあれ、暫時本國に止まりて、英氣を養はんも一策なり。かの汚れたる都會の空氣を呼吸せんよりもと、かくて新太郎は行を愼み、懷かしき書齋に引きこもりて、是れは又止められぬ數學研究三昧に、母もやう〳〵安堵して病も癒へぬ。

三輪が今度理科大學の籍を除かれたるは、己れが數學に拙きが故ならで、他の諸生に秀でゝいみじかりければなど、石山が逢ふ人毎に語たりて賞めければ、傳へ〳〵て島田といへる義氣ある高等中學の校長の耳にも入りけり。

義氣ある校長は、天晴高き才を懷きながら、世の不遇なるが爲めに、かくも落魄したる三輪が境遇を大に憐み、何とかして救ひ出さんと思ふものから、三輪が知己にして我が宅を訪づれけるものに、いつか三輪を伴ひ來よといひ傳へぬ。

校長は道理に明かに人を憐むに親切なる人にて、今までに三人の貧困者を救ひて、學業を卒へしめたりとの評判ありければ、此人によりて我が志を伸さんとにはあらねど、頃日の鬱々たる折に、かゝる人よ逢ふて物語せんことのいと嬉れしく、勸めらるゝ儘に、三輪は知己を同道して、校長を訪けり。

校長は丁寧に三輪を劬り、種々の問題を問ひかけたるを、三輪は滯りなく答へけるものから、校長は大に其才を愛し其境遇を憐み、高等中學の助敎員になる氣はなきや。尺蠖の屈するは將來の大伸を期する

なり。まづ教員となりて、我が才を示し給へ。才を示したる上にて世の信用を得んに易ければ、此處しばらくを忍んで教員とならん心あらば、よき程に周旋してくれむなど勧はるを、新太郎は固より教員たらんは露うれしからねど、情ある校長が言葉に、否ともいひ兼ね、兎も角も母にも語りてと、いひ拵らへ、さて其日は歸りけり。

さて母に此よしを語りければ、これ願ふてもなきとあり。汝が出世せんも此時にあれば、と校長が美徳を稱して頻りに勸め給ひぬ。さればと中一日おきて校長を音信れ、母もこよなく喜びぬれば、何とかして御周旋くださるべしと頼み入りければ、校長もぞく／＼と喜びぬ。新太郎は將來に關する注意、社會に關する用意など、こま／＼と聞かされて、思はず涙を催し、此の恩は決して忘れまじと心中に誓ひけり。

廿二、嗚呼人は此の殺風景に對して何か故に愉快なる。

翌くる年の一月十二日、新太郎は聘せられて、高等中學の助教員となりぬ。一度信用を失ひしもの、、そを回復せんには、一入の苦心もいるべし。さるを新太郎は世の不遇を憤り、大學卒業生は皆取るに足らざる人物なりと思ふものから、他の學士などを露敬するの念なかりき。されば其信用を回復せんとなか／＼にむづかしく、日々に新太郎を惜むものぞ増しける。且つは生徒の中にも我か大學より除籍せられたる事を聞き知りて、彼れに傳へ、是れに傳へ、我か講義を熱心に耳聳つるものは特待生の外には、

多くあらざるのみか時としては我れを困めんとて、つまらぬ問をしかくるものもあるを、冷笑ひて答へざりければ、生徒の中にも我れを罵り、我れを卑しむものも日に增り行きぬ。アヽ新太郎は日々にねじけ行きぬ。母には幾度か教員を辭せんと迫りぬ。されど母が校長の慈悲を稱して、我が心の賤しきを責め給ふを理なりと思へばこそ、虫を殺して出勤するなれ。アヽ新太郎は日々にねじけ行きぬ。今は命とまで思ひし數學も日々疎くなり增りぬ。机の前に坐したる儘、唯嘆息の中に其日を送りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

頃は彌生の末つ方、花は爛熳として匂を競ひ、鳥は嬉々として歌を爭ひ、月は沈々として詩想を呼びつ、人は愉々として血氣盛なり。唯新太郎は濁りたる心の鏡に、映ずる花鳥風月、皆悉く心を痛ましむる媒とぞなりける。陰々朦々我れ自ら我れの此の世に棲むや、あらずやを疑ひぬ。アヽ人は此殺風景に對して、何が故に愉快なるや。

或る日ひら〳〵と一通の文我机の上に舞ひさがりぬ

《上畧》花笑ひ鳥歌ひ候此の好時期を仇に過さん事、いと口惜しく候、さるは例の事にてさほどに珍らしくも候はねど、去年我が庭に植ゑ込みし櫻花、此の長閑なる春の景色に逢ひて、雲か霞かと見紛ふ斗りに、咲き亂れ候佳人の粧の珍しさに、珍らしからぬ田樂を焙りて、一盃の酒に無量の醉をとら

んと致候途方もなき慾心も、仇に散り行く花の無念さを、推量致し候次第に候へば、何とありても夕暮よりハ是非とも御來車被下度候、實が不在なればとて、必ず〳〵遠慮には及ばざる事に候早々、

月　日　　　　石山逸藏

三輪新太郎樣

廿三、誰ぞと問へば、「私」と答へしは正しく下枝の聲なり。

前庭と後庭とを境して植へ込みし、幾十本の櫻花、半開きて笑ふが如く、折節月は臥龍の頂に上りて、清き光は遍く庭園を照らしぬ。其の快さいはむ方なし。主人も招かれたる客も、頻に此花と此月とを賞して、田樂に腹を滿し、銘酒の顏を赤めながら、談辯雲の如く、甲語れば乙答へ、乙語れば甲點頭き、和氣は靄々として座敷に滿ちぬ。新太郎は片隅に蹲踞りて、酒も旨からず、櫻もおもしろからず、勸められたる酒に醉ひくづをれて、默然たり。唯繰返さるゝハ、世の腹立たしき事のみ。アヽもし此の席にかの懷かしく戀しき下枝のなかりせば、新太郎は疾く辭して歸りしなるべし。

さても懷かしきは初戀なるかな、新太郎は命とまで思ひ込みし數學をさへ、捨てゝ頻りに世を憤りし程に、周圍の事物何一つとして心におもしろく映ずものはなかりき。されど此席にて計らずもゆかしき下枝に廻り逢ひて、我が幼かりし心に、かくも刻み入りし初戀の、徐ろに眠を破られ、一時は我が身も下枝の位置をも全く忘れ果てたり。別れてより三年といふ長月日を經たるも、下枝が美色は少しも衰へた

る處なきのみか、反つて蕾よりも今の咲き亂れたる花の姿の一層美しく、魂は宙に捲き込まれて、下枝が懷に飛び入りけり。又我がひが目かは知らねど、下枝も始終我れに眼を放ち給はで眺め入り給ふを、我れよ咎められて、顏を垂れ玉ふ愛らしさ、新太郎が戀はいよ〳〵燃へぬ。されど我れを顧れバ、二度の降級に大學の學籍を除かれたる鈍しき此からだと、かく思へば恥かしさも湧きぬ。又今まで忘れつる世の憎むべきふしの心中に轉々として湧き出で、終には此の我れを我れながらとんと厭になりけり。

默つてれればおる程、醉へよ〳〵と頻に酒を勸められ、顏は燃ん斗りにほてり、眼は飛んで出でんまでに重くなりて、心臓は破れん斗りに激しく打ちて、其席に居堪へず、危き足を踏みしめ〳〵、石山が書齋に來りて、其儘に倒れぬ。下枝も石山につれて立ちけり。

水を召せ〳〵と呼びれこされて、醉眼幽かに開けば、しや、其人なり。水を勸むるはかの戀しき下枝なり。周章ふためきて、起き直らんとするを、手をもて制せられ、ハイ〳〵と横になりて、下枝が勸むる冷水をぐつと呑み干しぬ。からだをもまれては惡ければ、一休みし給へと、かひ〴〵しく夜具を運びて着せかくる其人の親切、神ぞ嬉しく、「難有」を百度もいふて、箒を枕に横になれば、水が御用ならバ、もう一杯あげましやうかと尋ねられ、神ぞ、神ぞ、神ぞ、嬉れしく、思はず御手をとりて力を限りに握りければ、れよしなされ、人も見るものをと、額越に睨みて、下枝は座を立つ。アヽ惡しき事してけり。

今はかの人も怒り給ひて、二度と此處へは來り給はじ。かく思ふ途端、バタ〳〵と衣の裾の疊にするゝ音して入り來りし其女、嬉れしや〳〵かの人なり。水を持ちて來ましたと、さし出せる冷水を又一息に飲み乾せば、酒の醉の醒めむはしだてか、總身ぞつと寒くなりて、ぶる〳〵と震ふを、夜具の隙間などしと〳〵と叩きて、樣々勦り玉ふ下枝が親切を、嬉れし〳〵に寐入りけり。

* * * * * * *

誰か來りしけはいに目覺めければ、誰かは知らず、我れと同衾するものあり。誰ぞと問へば、「私」と答へしは正しく下枝なり。アヽ其一刹那、新太郎は思はず体をすくめぬ。かれは寄り添ひて我が胸に觸れし下枝が柔かき乳房を押しのけんとする勇氣はなかりき。

廿四、書齋に入りて見ればやあ〳〵〳〵〳〵。

今日は日曜なれば、新太郎は例の如く一室に籠りて外出はせず。熟々昨夜の過ちを繰返せば、總身ぞつと冷汗に浴びて、身の毛もよだちぬ。

彼れな苟くも人の妻なり。そを姦したる我れは容易ならざる罪人なり、たとへ彼れより勸めけるとも。アヽ我れは何が故にかくまで賤しむべき身に成り果てしや、我れなから之れを知らず。アヽ彼れが肉置豐かなるもゝの我が毛膸に觸れしとき、我れは何が故に之れを蹴るの勇氣なかりしや。アヽ酒なり〳〵、憎むべきは酒なり。我れを此の魔境に墮落せしめしは、かの憎むべき酒なり。あらず〳〵、戀なり〳〵、

憎むべきハ戀にこそ。此の正しき我れを驅りて此の淫池に沈めたるは、かの賤しむべき戀にこそ。あらずくいかに戀なればとて、身に觸れざる女を、姦せんと思ふ邪念は神も知る——露あらざりしあり。かア、下枝なりく憎むべきは下枝にこそ、我が淸き心を、不義の泥土に穢せしものはかの下枝なり。此の日は一日良く思ひてハ眼を怒らし、拳を握りて、「おのれ下枝め、淫婦め」とハッタと机を打ちつ。心に責められて、立たり居たり、日暮れて世靜るに從ふて我が良心は此機に乘じて、我れを責めさいなみ、床にいれば、此の思は一層激しくなり增り行きて、益々此のあはれなる我れをさんぐに苦しめぬ。

翌日は眠たき眼を擦りつゝ、取るものも取りあへず、急いで學校に出勤すれば、授業ハ既に始りて、生徒は我れを待ち顏に、敎場にて騷ぎ立ちぬ。新太郞は急ぎて、代數の講義にかゝりぬ。何かは知らねど、あそこにもこゝにも私語きて、頻りに我が顏を見て苦笑ひする生徒もあり。鐘鳴りて敎授は了りぬ。そろくと引き連れて、扣席に歸る生徒の中には、三輪の大濡事師、恥かしくないかと罵るものもありけり。三輪は此れをきゝて、思はず一二足後へ身を退きぬ。

敎員扣席に入れバ、敎員の眼は一齊に我れに注ぎぬ。新太郞は氣味惡さに、机の上にありし新聞を取りあげて讀み始むれば、くすくと笑ふ敎員もありき。不審に堪え兼ねて、もしや我が一昨夜の醜行の露はれて、新聞の雜報などに掲載せられたるにはあらずやと、かう氣がつきては、さきに生徒が罵りし事も思ひ出でゝ、こわぐ雜報欄内を見れば、有たりく、高等中學の敎員とあるも見えたり。官吏の

妻と書てあるをも見たり。まだ〳〵驚くべきは、我が二度降級に大學の學籍の除かれたる事をも記しありたり。新太郎が顔色は蒼然として死人の如くなりぬ。堪えられずやありけむ。ついと立ちて門を走り出たり

心は全く之れに責められて我れにもあらずしほ〳〵として歸宅せり。路にて人力車夫に叱かられしは幾度ありしぞ。

* * * * * * *

翌朝新太郎が日の高く上りしまで起き出さるに母は新太郎が昨日の行のいぶかしかりしを怪みながら、書齋に入りて見ればやあ〳〵〳〵。

◉但馬行李（紀行）

宇田川文海著

小序

去年八月の初めつかたに家を出て西京より丹波路を越て天橋立の潮風に夏を忘れ湯島の温泉に心の熱さへ洗ひ落し播磨を經て浪花に歸りける一月ばかりの旅のほどにこゝかしこにて見聞きたる事を何くれとなく書いつけたるを但馬行李と名づけて家土宜にせしをそれが中より一つふたつ取り出て左にのす

（壹）

丹後縮緬ハ縦し名物なりと云ふとも豐岡行李は縦し名物なりと云ふとも一ト風變りの予に取りては何かあらん鬼殺の酒の跡を尋ぬる暇あらば智惠の餅の店に再び行かん藝者の顔を見て居るよりは古る佛の時代を考へるが面白しと云ふ風變りの予に取りては三丹州の拾ひ物に一ト風變りてあるや知るへし

行李の中につめたる拾ひ物數ある中よりツマミ出して二つ三つ丶丶丶丶丶先づ

貞室と芭蕉

芳山の花に空前絶後の名吟を唱へし貞室の洒落ハ夕立のさらりと過ぎ行く如く古池の蛙に以心傳心の妙句を賦せし芭蕉は時雨のをかしく降りくる如く一は貞門の滑稽を弘め一ハ一風の寂栞を創む風雅は同じ

うして趣味の異なる所を常に其作句に見て併せて其人と爲りをも想像り居しにこたびはからずも此二哲が一對の遺墨を見る事を得て大方は其意志の在る所を知るを得たり丹波園部の驛にて晝餐にとて立寄りし其家の屛風に

然者御約束の水雞笛れくり給り　忝　珍重　存　候此里の人々聞訓れず女子どもゝ集り我を藝者のやうに申おかしく行脚さき國所により一向音をしらぬ人御座候間吹てきかせ候得ば　悦　申候鹿笛も木曾よりもらひ申　郭公　笛も御座候はゞほしき者に候水雞笛つくる人はつくるべくと存候乍御面倒是も御聞可被下候出來候はゞ御賴可被下候賴入申候何にても相應のもの細工人に謝禮いたすべく候殺生の道具ながら水雞笛鹿笛も只ふくはをかしく候初雁の聲水雞たゝくなど歌にも發句にもつくる人のさし竿にてとりあみにかけなどいたし候はゞ口と心と相違にて名句吐くともうそつきといふものに候得ばまことの風人から見ればあはれなることにてたとへころさずとても雲にとび地に走り候鳥を小さき籠に入たのしみとなすは牢番も同じ事にて候を心づかず籠をならべ是は二兩の駒鳥なりこれは五兩の鶯ありといひて摺餌に小袖の肌れしぬぎ高祿の人にもあさましきさまする人武林連中には有ものにてかの開籠放白鵜（鵜は鷴の誤りあるべし）の詩意など敎訓可被成候伊賀家中の人々も御座候間土芳にも此事申遣候

『一篇の文章さながら徒然草を讀む如し芭蕉もとより兼好の文を襲ひしにあらず自然に符合せしに

て其意氣の相投ずるなるべし』

うぐひすや餅に糞する椽の先

『籠中の窮屈をしらで自由を得たる藪鶯のさま是の如し顯貴に愛せられて摺餌の美食に飽きても
飼はるゝは鶯の本意にあらじ』

芭蕉庵

二月十六日

一笑様

又武士は殺生するもの也といふ人御座候得ども魚鳥をとりて腕かためにもなり申間敷候只心のいやしき故それ／＼獵師も御座候間是より買求りやふりの事はつみあるまじく候

見よ其の批點の所を見よ事々に就て此翁が用意の如何に在りしかを見よ丹後に遊びて宮津の万象亭に宿りし時一室の額に、、、丁度

年比れもいわたりし橋立の月にあこがれ侍りて今年万治三はつき十日あまりに京を立れはくの山阪を歩より趣きて十四日の暮つかたに宮津と云所に着爰より小舟に取乘て漕出に月は東の山に指出て波にうつるさま海面にはくの小袖をひろげたらんやうにきら／＼と光りあひたり波はいと靜なれどもちいさき船なればゆるぐ事隙なし今宵をなんこもち月と云ひならはせる程に

小舟にも乘せてゆるぶや小望月

　うみのまゝの光や波の小望月
『縁語秀句をもちゐて綴るは貞門の滑稽なり芭蕉も若き時の句には此体多し』
と獨り言して御堂に來てあかす十五日つとめて成相の觀音にまうづ阪の半に女郎花盛りなりければ
　なまめくや女郎の觀世音なべし
と云て登るに聖觀世音にていまそかりける十五日空いとはれて月なほよし
　すみわたる橋立は月の宮津がな
狂原といへるも此橋立のうちなりと聞て
　月に今宵文珠や兒のまいが原
夜更るまで舟に乘りてながめあかす
　智惠照す月や文珠の島の松
いざよひの空もいと晴てよし夕鹽指のぼるほど月はれかしう出つされどいさゝかかけたらんさまはいざよひなればやあらん
　みつ鹽に何とて月ハ客の船
きのふのぼりし世野山も月影に見ゆ坂口より御堂まで丁石を立られては十六やありつるとこよひの空におもひあはせて

十六夜成相の阪を下り月

主の僧南宗和尚より酒殽を舟に入れ侍者達をそへてこさる此なさけ忘がたし

　御出家のちそうにあへる月見ぶね

　　わが罪障の海をしぞ思ふ

幸藏主と云ふ客僧に盃とりかはしてかく長き逗留に

　秋風は吹くともよしやなからへば

　　又月を見に幸藏主どの

十七夜は夕つかたよりいとくもりて立待の月もおゝかれと御堂の庭に立て待つ

　立待の月にしびりも切戸かな

御堂の後に籠りて靜に經をよめる沙門あり何所の人と問へば丹波國氷上の圓通寺より爰に來ると云此沙門如何なる宿願の侍らん七日のほど食をたちて今日六日にあんなるとかやされど色あいをももちいさゝかもやつれず立居もくるしげに見へず大聖文珠の御恩力を添給へるならんいとたうとし此人を舟にのせて島を眺る人を見て

　七日まで食をたつとき御聖と

　　一つにのりの船はたのもし

實弘誓の深き事海の如くに說るもまのあたりの不思議なりけりと北海たゑぞが千島につゞきてゆぼひかなり

天の橋たゞいなかけや秋の海

などよしなき事なれどこのほどの宮つかへせし寺の新發意のために書きてやる

十五夜

十五夜の月の面や兒文珠　　貞室

狂歌

錫杖に似た橋立の松かげに
ふりたてゝ啼くすゞ虫の聲

葉さきまで照りや月のなぎりまつ

見よ其の批點の處を見よ此老が世の中を見ることの如何にありしかを見よ

（二）

奇人傳

第二の土產も亦第一に劣らざる奇物なりこれに冠するにの名稱を以て適當なりと考ふる程の奇物なり

法印　朝嚴

七十六の齡を以て夜毎に嶮はしき坂道を五六丁も下り友人某と云へる醫師の許にて十時頃まで碁を圍みて又寺に歸ること恰も十年一日の如く霜雪の降り積る中も風雨の吹き荒む中も更に意とせずと云ふ此事を聞ても必ず此法印の奇物なるを知るべし

錢を孔方兄と賤み阿堵物と罵りたる古人にも劣らぬ風ありときゝしが予が此人を訪ひし時目前に見たる無慾のさまは一人の參堂者歸らんとして一二の銅貨を方丈の疊の上に置きたるに法印は之れを呼返して「こんなものを何にするか」又以て奇物なるを知るべし住職となりてより歲月の久しき堂宇の修覆を要すること頗る多ければ檀家之を勸むること頻りにて法印の一諾と共に若干寄附の金穀を集ることは容易なるを嘗て應するの色なし餘りに無頓着なるを嫌ひて檀家より隱居を勸むること頻りなれど頑として應せず今尚は平氣に其職に在り又以て奇物なるを知るべし

更に驚くべき一奇談の此奇物の價を昂からしむるに足る者あり法印が常住坐臥の一室は曾て掃ハず曾て拭はず蚊帳は夏冬の差別なくて釣りたるまゝ寢床は年中を通して敷きたるまゝなり

其のまゝあること久しきを經て一二年前は寺中大掃除の時に及び始めて之を動かしたるに蚊帳の上は安全なる蜘蛛の細工場として年月の間に彼功妙なる細工者の尻より編み出したる大小千百の網は塵を帶びて層又層、寢床の下は疊朽ち綿腐れて恰好なる棲息處を濕虫に向て與へ無數の棲息者は不意の襲擊に逢

ひて蠢又蠢、法印が奇物を熟知せる人々も餘りの意外に愕きて此一室は何時から斯くてありしやを尋ねたるに平氣に答へて曰く多分十八九年も前からならん

此奇物は湯崎を姓とし但馬國城崎郡湯島村温泉寺の現住なり往時高野山に學ぶこと久しく當時に在りては釋雲照と其の名を伯仲せりとぞ

畫工奇石

奇石に冠するに畫工の二字を以てすることハ恐らくは其人に於ては大なる不快なるべし然れども予は其畫がける物を見て冠するゝ此二字の上に更に大の字を加ふることは兎も角も此二字を冠せしむる丈は最も適當なるを信ずるなり此人は眞の畫工なり此人は極めて貧しき畫工なり此人は極めて清らかなる畫工なり此人は世間に於て喋々する所の美を云ひ自然を云ふが如きことに付て如何なる思想を有するか予は之を知らず然れども予は推測し得るに此人は所謂る美、所謂る自然と云ふことに付ては一も思ひ到ることあらざるへし此人の胸裏には曾て斯る一分子だもあることなく此人の胸裏は空々寂々たるなり嗚呼空々寂々たる此人の心此人の一身即ち是れ眞の善眞の自然にあらずして何ぞや

此人の畫を見て其曾て岸氏の門下に在るの日は今の竹堂氏と共に連山の双腕たりしを知るの外に其行ひを聞きて其師匠なる連山の性癖に幾分か感化せしを知れり又更に眞の畫工として彼が有せる資格は殆んど世の表面に有名なる諸畫工の上に在るものならんことをも知り得たり

妙手の故を以て利を求めず赤貧の故を以て名を賣らず此世の裏面に閉ぢ籠りて宮津の町外れの蝸大の廬の中に淡々たる生涯を送れり其清貧を憫みて若干の揮毫を世話すべければ其料を以て自らの助けにし玉へと告るものあれば其度毎に答へて我は書を書くことを好まざるにあらず左れど下手なる書を殘して死したる後までも人に笑はれんことの口惜しければといへり

只筆を執りさへすれば日に一圓以上の仕事を爲し得べき老書工は其神彩ある手を以て日又日唯一の此世の友達なる老妻と共に一錢二錢に價する元結の賃仕事をなしつゝあるなり其無何有の樂境なる此小廬の外を取り巻ける掌大の餘地は天が此老書工に向て惠める所の菜圃にして南瓜の蔓は此老人の嗜好と愛養とに對して十分なる報酬を與へ而して此南瓜の報酬は此老人が此世に於ける唯一の「樂」とも云ふべき者なり

同門の舊誼よりして岸竹堂は其清貧を憫むの餘り京都に招きて爲に一の仕事を周旋したり然れども此人は月を重ねずして歸去來を賦せり鴨川の水三十六峰の山も宮津の小蝸廬に優らずと覺ゆたるか將た其仕事なる友染の模樣を書くよりも一錢二錢の元結仕事が寧ろ快かりしなるか

曾て淡路に遊び某の家に在りて揮毫を依賴せらるゝこと夥し漸く其の一半を了るに垂として俄かに筆硯を收め倉皇として旅裝を爲すを見て家人怪みて其の故を尋ねければ先刻書を書きながら不圖故鄕宮津の膾殘魚釣りを想起し昨今丁度盛り時なればは是非共歸りて釣り度くなりたり御賴の書は澤山殘りあれ

ども氣の毒ながら今度は斷り申すなりと答へて直ぐに歸路に上れり
知るべし此人胸中にも眼中にも利と云ひ名と云ふべき者一點も無きことを心は眞に空々寂々たり身は眞に淸淨無垢なり貧を樂み知を求めざるは此人の美此人の自然を日常に保つ所なるを宮津の人々此に氣付かず此人自身も亦此を知らず奇なるかな此老畵工

（三）

刀鍛冶　雨福

其姓を知らず其名を知らず其年を知らず只だ其宮津の人なるを知る其俳諧を好むを知る雨福は其得意の別名なるを知るなり
雨福の子某年已に富みて家督を讓り吳れよと逼ること屢々なれども雨福曾て隱居すべき色なし時恰も舊曆盂蘭盆に方り逼ること愈よ切りなりければ雨福額を撫で手を拍て大笑しながら

　まんまるうなれば手放す團子かな

刀鍛冶として熟練せる雨福の名は封建時代より丹後の山彥となりて著るしく人若し刀劍の鑑定を賴み又は刀劍の由來を尋ぬるあれば其滔々たる講義ハ少くとも三四時間に渡るを常とす某陸軍中將宮津に遊びて偶ま一劍を或人の家に見初め古刀の精良なる者なりと思ひ之を尋ねて雨福の手に成りしを知り其の鍛練を感ずるの餘り若干の金を贈られしに其の金を神棚に祭り祝拜して曰く老耄の鍛冶屋も今知己を得た

りと以て其人となりの一班を見るべし

俳諧師　萬籟

前三人物の体形風采今日に於ても猶ほ接し得べきなれども此最後の一奇物ハ既に泉下の客と爲れり然しながら此人は埋沒すべからざる俳諧師なり予は此人を吊はねばならぬ此人の名ハ此人が奇才の五分一だも著はれざるなり予は此人を發揚せざるべからず梅通芹舍南溪芳英と云へば此道の宗匠たること隱れなし萬籟の名は何ぞ寂々たる同しく是れ蒼虬門下俊英の一にして予の見る所予の癖する所寧ろ是を以て彼の上にわるものとなすと共に愈よ以て怪しまざるべからず萬籟の名ハ何ぞ寂々寥々たる

嗚呼是れ萬籟が奇物たる所以ならん磊落疎放なる天性は是れ豈に浮世の名聞と云ふことに付て此人なして冷々淡々たらしめたる所以ならずや予は其性行の一班を描くと共に其遺稿なる花神窓句集の中に就き予が見て以て妙とする所の數句を摘錄して以て此奇物の靈魂を磅礴の間に吊はん

其巳に蒼虬の門を辭して去る雲山烟水只足に任せて行く偶ま彥根藩の某が家に滯留して藩の若殿に俳道を授けぬ若殿家督を相續ありて祝の時大なる物を咏めとの命を受けて

富士產んだ母に抱れて竹生しま

若殿感賞の餘りに銀製の茶碗と腰の物を賜はりぬ此處にも亦長く居らず將に去らんとするに臨みて若殿曰く强いて去らんと欲するは詮術なし左れど成るべく速に再び來れ御身を待つに相應の士格を以てし

永く師弟の交を保たんと萬籟已に去て浪遊止まる所を知らず三年の後再び藩に來りて問へば若殿は早く彼の世に在りて不幸なる場所に彼を待つ身となりてありき
萬籟京に止まること屢々人彼に告て曰く風雅の道は富と貧とに頓着無き者とこそ云へ卿の如くに浪々なるも亦出來せることにもあらざるべし此頃聞けば蒼虬先生も稍や蓄財せられたる由卿の師匠すら斯くの如しと彼笑て答へず

さうきうに金のまふかるものなれば
　俳偕やめておれも宗匠

と書きて與へたり
萬籟一生を浪遊の中に送り少しも家事を省みず然れども宮津に於ける其が家は弟に由て祀られ浪遊の資も多くハ弟に由て得たり萬籟の浪遊に必ず伴ふ所の一從者ありて大工を業とす或る年萬籟又出んと思ひたちて此男を訪ふ折ふし夏の日暮とて薄暗き屋の下に此男が常に其の生活の困苦を手傳はるゝものと喞ち萬籟は汝こそ甚だ有福なる者なれといひたる其言葉の種子なる此男が五人の小兒の寝顔を取り散らしたる傍らに世の憂きも樂しさも共にする人が焚く蚊遣り火の烟の中に沈める顔色もいぶせげに酒傾けつゝありけるが本職の顧客ならぬ旅の供といふ片仕事の顧客なる唯一の顧客なる萬籟の姿をみとめて乍ち嬉し氣に又隨行の事を約しぬなは話の序に此男は兼て親しき間なる故に是まで心付かざりしかど若

し御身が返らぬ路に旅立たれなば其處までは御伴を致し難し不吉に似たる賴みなれども何物か紀念の種を無事の日に賜りたしといひければ萬籟笑て直に筆を採りて

子寶の寢顏並べて夕涼み

此書今も猶ほ大工の家に傳へたり萬籟姓は荒木其家は宮津に存じて宿屋を業とす萬籟の弟子到る所甚だ多く千を以て數ふ今山陰に此道の巨擘たる松江の曲川も此奇物の高弟なり曲川今年陰曆仲秋を以て橋立の月を訪ひ併せて其師の追福を營まんとす奇人靈あらば應さる首肯すべし予は紙上に依りて之を吊ふ奇人靈あらば亦首肯すべきや否や　　以下

花神窓句集採錄

（四）　春

元朝も禮者の外の往來哉

月と梅離れぬやうに見て廻る

埃とりにたきこむ春の氷哉

雪ちるや嫁菜つみたるあくる朝

かしこにも覘てゐるや春の水

菜の花の畠へだてゝ聟舅
人の手に渡せば霞む小笠哉
叱られて馬の歩行や春の草
身を返す時糞おとすつばめ哉

彌生十五日古郡より上野東町何某なる旅籠屋にうつる宵の人音に引かへ朝は何音もなく成行さま海上あれてなぎ行がごとく埒明なる業ひなりけり予か籠れる四疊半の小隅に蒲團を四ツゝ折まらくをのせ宵の行燈其まゝに片寄てそこにならべたるいとわびしく松の火の消安き火鉢一ツを抱へ物思ふとや見るらん下女の喰わと片附て坐敷廻りの掃除にかゝり次の四疊半をふきはきするに襖をあちらこちらと引替る若き力あまりて尻のあきたるも知らず引つる旅籠屋のさるなりけり

待人の音かと覗く日永かな
鳥雲に入るやのつぼり塔ひとつ
山吹や澄切る底を染る花
朝の外はく時のなきさくらかな
颪もなくちるが櫻の輕み哉
見る日よりちる花ありて嵐山

立かけし箒もこけて花吹雪
東山あたりさまよひてとある寺に入れバ茶の下けぶらせゐる桑門あり人音に驚きてこなたをむけば久しく中絶たる人なり驚ながらさすがに古き知已あればうちとけて語らひけるに今は有とも思はねば又なしともおもはでたゞ貧を樂みけると答ふ潔き哉此人元載石崇が徒にはあらざりけるよ
うらやまし花を拂くのが仕事とハ

秋

その後はたゝそよ〳〵と秋の風
朝がはや寝て見る事の癖になる
ひと吹に散もしまわず樹々の露
ちる下にまた色のよき紅葉哉
貧乏もはづかしからぬ月見哉
吹わげし蛤なりや後の月
九日や何所からなりと菊くるゝ

夏

旅人の宇治になりけり初袷

臼ふみの一夜樂してほとゝきす
　紫も夜は詮なし杜若
葉に成てかくれて仕舞ふ櫻かな
笹粽男結びのはじめ哉
ゆづりあふ蟻の往來ゝや苔の花
孑孑の自由にするや浮しづみ
向ふたら見たとは暑し岨の家

冬

覗かるゝ時雨すがたや須摩簾
笠とわらじは尾陽の海に捨簑は伊賀の山中なる猿にうちくれて身にまとふ雲霧を拂ひ赤裸に成て名聞を離れ徘徊につかれまとふ唯獨尊の聖翁今年天保庚子のとし伊勢の蝶舎に造立成て主人捻香各敬拜し奉る奚ぞ眼を開て信者を導引たまはさらむ
斧聞てのぼる山路やはつしぐれ
土からも掃ば埃出る落葉哉
衣かけや面かけも無きかれ柳

此上の枯やうなくてちる柳
凩も落さぬ杉の木立かな
ぬくもりを寢て覺へたる榾火哉
掃た所一間貰ふやすゝの宿
ゆきの鶴嘴わげたれば二ツかな
戸に音のして火のよれる吹雪哉

雜

つけ髪におさなくなりて神路山

《以上》

《五》

途中口吟

妙心寺の山號を正法といへば
塵の世の心をはらふ松かせはまさしき法の山よりぞふく

雪江和尚手植松
松になほ其名殘る其人は傳へんものと植ずやありけん

探幽書龍
夕立の雲よりすごし墨のあと

佛殿天井の畫龍は探幽の妙筆なり探幽此龍をかきし時本寺より潤筆として金三百兩を贈りしに一度之

を請けて謝辭をのべ直に又其金を其まゝに寺へ寄附せりとぞ

捨君像　　浪華津の風はしらねど捨小舟

捨君は豐太閤の御子にて秀頼公の兄君なり幼くて失せ玉ひし故に其像を作り日頃弄び玉ひし小舟に乘せて其墓の上に安置したりいと可愛らしく憐れなり

探幽狙曳襖　　筆の妙やんれめでたや狙ひきのふすまが外にまたあろかいな

探幽等春院に滯留せし時院主座敷のからかみを新に張替られしが一日探幽いたく酒に醉ひて院主の他行を幸に筆に任して彼襖へ狙曳の圖を畫けり院主歸り來て之を見て腹たてければ探幽醉を覺して大に之を謝しけり今は其襖當院の名物となれり

（以上妙心寺）

老之阪　　杖つかで越へて涼しや老の阪

龜岡　　聳えてもやがて崩れて雲の峯

福知山　　城あとの木はなほ枯れず蟬の聲

雨城とも明智光秀舊迹なり

大江山　　鬼の首とつたてがらは山伏の法螺ふきたてしはなしなりけり

奈倶　　白波の中よりふくや青あらし

由良湊

千舟よる由良の湊は海山に心もとまるところなりけり

桃島

よい景色眼にみちとせの桃島で一寸かじつてみたるざれうた

ふところに入れてめきたや陸郎のたちばなならぬ奈倶の桃島

三荘太夫

報いある世をむさぼりて鵜飼人

宮津

荒海や月にも近き秋の色

餘謝海

與謝の海うちとにわたる潮風をたもとにうけてすゞむけふ哉

涙の磯

憂きに身をさへ沈めつる。昔のあとを來てとへば。なみだの磯の名もしるく。涙に袖こそしをれけれ

涙磯は昔花子といふ狂女が身を投げし所にて謡曲の丹後物狂は此女の事を作りしものなりとぞ

片枝松

どちらから詠ん松の表裏

切戸文珠

獅々と見る岩も尊し夏木立

天橋立

ひさかたの天の橋立きて見れば神代の松ぞいまにしげれる

月花のかざりは入らず松六里

磯清水

髪の汐洗ふをと女や磯しみず

浦島の故事を思ひて

玉手箱あけてはかなし夏の夢

宮津青年會の人々に謝す

宮津の里の風流士が。あつき心を身にうけて。すゞしく遊ぶ此の圓居。何はゝおきて浪華津の。つとに語らんかゝりさと。樂しく遊ぶ此圓居。

文珠にて名物の餅と田樂を食ひて

田樂の幾度味噌をつけし身も今日より少し智恵をもちいひ

宮津の新潮の發行を賀す

山水多きその中に。三つと敎へし一つなる。天の橋立程ちかく。あしたは行て風に馴れ。夕は見つゝ月をこひ。つゞれる文は金なし。ながめし歌は玉に似る。是の宮津の新潮ハ。彼の名所ともろともに。世人擧りて愛ぬべし

（以上宮津）

宮津より出石に到る途中

いく峠越ても上や雲の峰

仙石城跡

石垣を如何に見よとや忍ぶ草

久秀墓

あはれさを鳴かぬ勇みや轡虫

出石少女

桑の葉にわが身をなして蠶飼するいづしをとめの手につまれなん

出石少女はおしなべて色白う容淸らかにみやびたり何くれの業をする中にも殊に養蠶するが多ければ

荒木仙石邸跡

麻よもぎひとつに荒れて露の原

荒木玄蕃仙石左京の邸は向合せなりしとか今ハ一つに桑畑となりて忠邪ともに昔の夢となれり

《以上出石》

切先のをれて鋭しゑのすゝき

次郎兵衛塚

越中盛次は京にて討たれしと諸書に見えたれど實は此所にて欺かれて討たれしなりと土人は言傳へて墓あり

玄武洞に造化の不思議を見て

玉をうむ洞の光りや石の露

心のみ中を渡るや霧の海

應擧寺

美含の大乘寺には應擧の畫多ければ世に應擧寺ともいへり余も一見と志しゝかど風に阻てられて得行かずなりしはいと遺憾し

二見浦

藤原兼助が明けてこそ見めと詠みし所なり此處にて湯島の人々に別る

玉くしげふたみのうらにわかるともあふてふことのなからましやは

義士の遺墨

今見たし其手ふれたる物の本

湯島の西村氏が坐敷は豊岡なる石塚氏の邸を引き移したるなりとぞ石塚氏は赤穗の大石主が親族なり主が手翰を傳へて今西村氏の所藏となれり其手翰の奥に

五月雨や貌も枕も物の本　といふ句あり

呼子の笛

なき初る艸葉のむしのそれよりも昔こひしきもの丶音ぞこれ

殘夜水明樓　たかどの丶有明白し水の音

此樓の名は柴博士が名づけしなり

北辰館　秋の夜の闇を破るや星の影

此北辰館は三木屋某の別莊の名なり

《以上城の崎》

某和尚の墓　簑虫の啼音にくちし卒土婆かな

豐岡蒼源寺某和尚は仙石左京の子息なりと聞て其墓に詣づ

姫路にて　案山子のみ昔をすてぬ弓矢かな

滊車の中にて　送る山迎ふる水もあかぬ間にはやもさた野と車はてけり

◉但馬行李拾遺

天の橋立

三景の一、天の橋立久しいかな彼が名の人口に膾炙すること、其の曾て天に向て立ちしてふ其事の信なるとも信ならざるとも其の今日の形狀が錫杖に似たると云ふ其事の適評なるとも適評ならざるとも深く

問ふ事を止めよ、彼が一里許の長髯を遠慮なく蒼海の中に突出し與謝の入江の衆勝に取り捲れて遠近數里の烟雲を我物顔に壟有しつゝある天然の秀美ハ 苦に形容せんとする程却て野暮の至りなるべし、成相寺の古什は殆んど終日の探討を價し切戸文珠の舟遊は以て一夜の吟膓を曳かん、濃松の中、古廟寥落海神を祀る之に傍ふの一古井は千古の奇泉磯清水なり水迫り樹古き邊丈餘の石榻横るは宮津の人荒木天籟建つる所の碑『橋立やゝく松が根の友がらみ』とは其先萬籟翁の句を刻みたるなり此邊一帶水淺く砂明かにして夏時の泳浴に最も適せり橋立貝は紫色斑爛として立派なる彩紋を包み橋立石ハ一見磔々たれども中に松の落葉の化形を含む共に此の磯邊の奇産にして橋立松の細工物は撫松庵の巧手に頼りて宮津の町旅客の行李に納めらる智恵の餅と才覺田樂とは文珠に因む切戸の名物丹後鰯オツ濱の鯊亦謝海の名物たり古人の吟せし夜深人待龍燈上月落文珠堂裏鐘其鐘聲は猶ほ謖々たる松濤に和して聞かるべきも所謂龍燈の影は見るべくもあらぞ想ふに清風明月の夕更に一段の仙趣あらん憾むらくは遊時正に晦に屬して予は其趣を貪るを得ず故に又述ぶるを得ず拙き筆には却て幸なるかも知れず

嗚呼此山陰の一大公園物替り星移る滄桑の幾千秋を閲するも依然として渾沌原始の秀美を改めざる奇絶勝絶の大公園只惜むらくは山重水複の外に僻在するの故を以て其名の著しきにも似ず徒らに一地方人民の遊賞に止まり藻鹽燒く蜑女が足跡薪伐る賤の夫が逍遙の外には此山靈水伯を慰むるの便なきを奈何せん予は天橋の爲に哭せざるを得ず左れども予は之れよりも更に天橋の爲に哭すべき者あるを知る彼が

二十八年に開かるべき奠都紀念祭の聯帯區域中に立ちながら遊覽地としては等閑視せられたる一事なり京都府下の丹後の地日本三景の一なる此橋立の地を殆んど度外に冷遇しつゝある紀念祭事務員諸氏の心情に就て予は大に疑はねばならず若し交通の不便なるが爲ならば乞ふ少しく顧みよ既に京鶴鐵道の設計ありて二十八年の其時分迄には少くとも二分の一若くは三分の一の便を開くべきにあらずや若し地方有志家の運動を怠りしに由るとせば何ぞ之を警起せざるを見よ紀念祭に付て聯帯せる區域彼の鳳凰の兩翼中に入りたるの地は皆な事務員の先づ之を唱へて而して後に始めて起ちたるの有様ならずや西は廣島より東は名古屋に至る所々方々の運動は皆鳳凰兩翼の説を聞きて而して後之に應じたる者のみ誠に指を此間の勝區に屈して見よ嚴島を除くの外孰れか能く天橋と頡頏すべき京都の百勝奈良の千蹟播州名所瀬戸内の沿岸より和歌の浦堺の濱布引の瀧須磨の浦滔々たる千百の山川各々以て一地方の秀たりと雖も之を天橋の大山水に比ぶれば百歩の後に瞠若たらざる者あらんや彼等と伍せしむるさへも屑からず况んや只彼等を取りて天橋を度外に捨て嚴島のみに厚くして橋立に薄き斯の如くなるに至りては予は橋立の爲に絶叫するの他なきなり借問す紀念祭の當事者諸氏よ予は只だ鳳凰の翼を東西に伸ばすを聞くのみ未だ其の頭と其の尾との何邊に在るかを聞かず京都にして中心たり鳳凰の胴体とならバ宜しく此鳳凰をして北西に飛ばしめよ然る時は其の頭れ必ずや此橋立に於てあるべく其の尾は結好に數線を曳きて或る者は紀州に或る者は泉州に和州に勢州に在らん

言を換ゆれば宮津の人民も亦甚しき鼾睡の底に沈めるにあらずや此大山水の中に生死する天然の幸福を享けながら之に報ゆるの所以を究めず此好時機に咫尺して恰も聾の如く啞の如くなるは抑も何の心ぞや起て起つて汝が大山水の爲に如何んぞ此大冤を雪がんとはせざる

彼が仲間なる松島には既に充分なる保勝の企あり嚴島にも亦若也の擧あるやに聞く獨り彼天橋に至りては未だ毫も計る者なし蓋し天然の大山水に向つて區々たる人力を加へんとするは却て眞美を汚がさんも計られずとは云へ之を愛賞する吾人々類の心より見れば又捨て置くことの出來ざるも無理にはあらず天橋をして大公園たらしむる以上は之を保護すべき適當の企を要すべく之れが天然の大天眞を傷けざるの制限を以て

天橋保勝會

とでも稱すべき一會の起るべきは最も穩當なる美擧なるべし而して余は之を宮津の有志者に責めねばならず僅かに十六丁の距離を保つのみなる宮津、特別輸出港となりて將來に多望なる宮津に向て此の大山水が果して幾何の光彩を與ふべきかを容易に知るを得ば天橋保勝の催促を試るも強ち無理なる注文にはあらざるべし宮津が享くべき交通の便宮津が得べき凡百の幸福は天橋も亦極めて直接なる分け前に預かるべければ彼が單獨に要する物は今日に在りては先づ

大ホテル

なるべし日本人は勿論探勝遠來の外國人をして其の縞の財布にあらぬ羅紗のポッケットをピンと出さしむべき十分の準備なかるべからず今日に於て早く此に氣付し者は獨り宮津の人荒木天籟あるのみ彼性頗る奇矯にして俠骨あり人に先んぞるを以て常に喜ぶ既に万象亭を開きて海浴の場所を設け又犬堂山に天籟閣を營みて來遊の客を待つ加之ならず橋立の地數千坪を借りて大に將來に期する所あり彼中々に話せる男漢なり

湯島

の名は久しく聞けり左れども其地固より僻なるの故を以て其の繁昌も亦其名の如くにはあるまじと是れ予が未だ遊ばざる以前の考なりき

已にして一歩を其の村落に入るや予は意外の光景に刺擊せられて『有馬よりも優れり』と思はずも獨語きぬ湯島の路は宮津より出石に出で豐岡を經なば十七里有半姬路より銀山を踰へて豐岡へ下りなば二十八里許雨ながら磽确の道なりと雖も步行嫌ひの旅客には忍びて車上に在るを得べし豐岡より湯島に至る三里の間道路稍や平かにして蓼川一名圓川の流に沿ひ舟を泛へて下るも宜し

湯島の部落は蓼川の左岸に在りて來日山と云ふ高山の麓に據り左右山を負ひ中間に大谿川の細流を狹みて人家三百五六十警察分署あり學校あり村役塲あり湯宿と料理屋と麥稈細工桑細工屋等其の一半を占む油筒屋三木屋の二軒は第一流の宿屋なるべし予は舊友善積順藏氏を尋ねて其親家なる總江傳左衛門の多

井屋に投せり此地の有志家も亦予が浴遊を聞きて訪問せらるゝ事數を知らず予か下戸なるを聞きて抹茶の清讌を紫明樓に催し二十餘名の來會を得又或ハ遊覽の先導となり或は探古の材料を助け懇到ならざるは無し予は厚く卿等に謝す

天の日戟命か古來より漂流の身を以て沼計りなる渾沌の中より但馬の國土を開拓したる其の當時には在るべくもわらざれども垂仁天皇より二十四代を降りたる舒明天皇の元年の頃には此溫泉か地層の外に湧き出でたりしことと疑ふべからず此頃一農夫ありて耕作の際脚を病める一羽の鸛鶴田間に下りて其脚を泉流に洗ふ事連日の後脚全く癒へて飛び去るを見不思議の餘り其の泉を探りて終に溫湯の湧出るを知り此に始めて今日の濫觴を形造くるに至れり今を距る千三百四十年計りの前のこと

此の最古の源泉は鶴の湯と稱して今猶は町外れの少さき藁葺の下に長へに混々たり鶴の湯に次で第二の古湯なるは曼陀羅の湯なり今同所に存在せる舊記に依て案ずるに人皇四十四代元正天皇の養老元年に僧道智と云へる者廻國の途此地に來り夢中の神託に從て三本の杉の樹下に道場を搆へ一千日の間八曼陀羅の法を修して養老四年に至り始めて靈泉湧き出しとなん其三本の杉の木は千有餘年の風霜に摧けて跡方も無く成りしとは云へ其の湯は今も最初の場所に存して道智上人が阿架を取りしてふ獨鈷の水も板もて作られたる蓋の下に深き綠を湛へたり御所の湯は村の中央にあり文永年中後堀河院の皇后安嘉門院の入浴し玉ふ處大納言爲家三位光成等從ひける由增鏡の中にも見ゆ是れ此の名の因て起る所、口の湯は王橋

の側にあり一の湯二の湯の二源ありて湯槽六箇を備へ各浴場中最も大なる者なり其が最後に開かれたるの故を以て又之を新湯と稱す香川秀庵の一本堂藥選に曰く海内第一の温泉なりと地藏の湯は村口の河岸に在り以上五ヶ所の温泉各其場所を異にすと雖も其泉質は同一なり今佛國醫博士エロン氏及技師村橋氏の調査せる其分析表及び效用を掲げば

分析表

無色無臭透明にして鹹味あり其の反應は微亞兒加里性にして煮沸すれば稍其性を加へ固形分五、三一六瓦を含有せり一リーテルに於ける各成分及其量は硫酸加僂母〇、〇八六二硫酸那篤僂母〇、三七七四格魯兒篤那僂母三、〇一六五格魯兒加爾叟母一、五九〇六蒲魯謨痲僂涅叟母〇、〇〇〇六炭酸加爾基〇、〇六二五炭酸痲僂涅叟母〇、〇〇六〇礬士〇、〇〇六六硅酸〇、〇六九二

主治効用

消化不良慢性腸胃加答兒、慢性氣管支加答兒、腺病、貧血病、脚氣、子宮病、就中赤白帶下、經久梅毒、痳疾、痔、僂痲質、皮膚病、金瘡痛症、痛風歴疾、肝腎臟病、脊髓炎、石痳、腎石、膽石、鉛毒、水銀毒、肺結核、神經病の總てに宜し但し其温度に至りては各々同じからず同一の源泉も日と時とに由りて冷熱を變ずること著しきは如何なる源因にや地質理學の先生は咳一咳の下に解釋せらるべきも専門以外の我々には只以て造化の戲と申し置かんのみ

此より下に列記する所ハ

湯島の特色

とも謂ふべき二三の事實にして他の温泉場には殆んど夢現すべからざる所の者第一湯宿の宿賃なり宿屋の上下等に應し少差あるべけれども三度の食事を籠めて通常

一泊九錢

なりとは豈意外の廉價ならずや蓋し是等の湯宿は表面湯宿を以て營業となせども其實數百年來傳襲せる祖先の田畑ありて衣食の計に富み縱し富める迄には行かざるも左りとて乏しきとも感せざるが故に昔時に於ては一種の座敷貸しを爲したるに止まり浴客の財布を目的として生活するが如き他の温泉場とは全く趣を異にしたりとかや此の無慾淡泊なる宿賃は營利競爭の激烈なる今日に及びても此地の特色として嚴重なる共同規約の下に行はれつヽあるなり之に次て入浴劵一枚の價

五厘

なり幕湯と稱して別に浴槽を設けたる者一日の入浴料

四錢

なり總て五ケ所の浴場の中盛んなるは口の湯御所の湯曼陀羅の湯にして浴客は皆早朝と半夜とを問はず(夜の十二時後は無料)男女老幼混浴をなすなり此に此地の特色として最も奇妙なるものは

なり此温泉の憲法として如何なる手不性の者にても必ず一本の柄杓を持たねばならず而して此柄杓は如何なる働きを有するやと云ふに浴槽の深さ殆んど五尺に過ぎたると温泉の温度一体に熱き方の傾きを有するを以て浴客は先づ湯槽の外に坐臥しながら此柄杓に湯を汲みて懸り湯をなし其れより入りて浴するなり其の雜踏麕集して浴客塲に滿つるの時には阿房陀羅經の聲、祭文の呻り、義太夫の擬音、べーロ〳〵（但馬豊岡地方の躍りの名）の謠など四隅に起り此憲法の從順なる履行者が柄杓を片手に浴槽を取り卷ける其の光景は如何に面白く如何に可笑しきポンチ繪の趣味なるぞ

柄杓

寛文六年豊岡侯の領となり降て久美濱代官所の配下となりし時の頃湯島の地は湯宿即ち座敷貸の業を爲せる者五十三軒其の今日に在りては十數軒を減せりと雖も之れ湯島の盛衰をトすべきにあらず總体に於て宿屋の座敷數の著しく增加せること料理屋の多くなりしこと藝妓を始め此地の通稱なる團子（賣淫婦）の數の年々に殖へ來ること以上の點は徐々ながらも此地の進歩を證すべき者か村の入口に

記帳所

とて浴客の姓名を記錄し又は浴客の案内なぞを曾て取扱ひたる番所樣の者今猶は在りて浴客の宿所を尋ね或は宿屋の案内を問ふ者には多少の便宜を感ずるなるべし

啻に温泉の靈能のみならず啻に山水の奇勝のみならず別に千古の舊蹟を保てるは湯島の爲に幾何の光彩

を加ふる者たり予は此地の乗勝を列擧するの首に於て先づ

末代山温泉寺

を記さねばならず寺は村西甘露峰の半腹に在り千百層の石磴を上る事三丁許りにして達す即ち道智上人の開創する所安置する十一面觀世音は稽文の作其他の諸佛像も亦少くとも千年以上の物末代山の號は聖武帝の賜ふ所金字もて之を扁額に書したるは後西院天皇の皇女寶鏡寺の宮のもし玉ふと聞く山門の二王は運慶の刻む所と聞けども今見る所の者は恐らくは眞物にわらざるべしと予は疑ふ藥師堂の傍に此地の名物たる麥稈細工の元祖其人の石碑わり高さ丈に餘る碑面には書して曰く『雪月道伯因州牛七之墓』

次郎兵衛の塚

も亦足を止むべきもの越中次郎兵衛盛嗣は平氏の牙將にして上總五郎兵衛忠光惡七兵衛尉景清と共に一の谷に勇戰したる剛の者壽永も過ぎ元暦も去り建久二年となりて或者は魚腹に龍宮を尋ね或者は汀に蟹と化たるが中に彼は首陽の薇を採るに屑とせずして博浪沙の鐵槌を抛たんとの壯圖を蓄へ時の到るを待て跡を丹波の峡中に晦まし猶も奥深く分け入りて終に此湯島の一里許り河向ふなる氣比の里に彷徨ひ來り時の領主氣比道廣の家に仕へ何時か道廣の女と通じぬ正に是れ源氏其の全力を覇治に注ぎ追捕使の勢は恰も烈日の霜を照すが如きの時不幸にして次郎も亦永く其の黠と髻とを保ち得ざるの急に迫り道廣の勸めに從ひ落ち行きけるが道廣計りて道にて之を殺せり此の塚は道廣の女が建つる所とも云ひ又曾

て次郎に契りたる京女郎の建つる所とも傳ふれども此と同じき石碑を氣比の城中に建て其趾今に存せりと聞くからには道廣の女建てしと云ふ事、實らしく思はる碑固と松ヶ崎に在りしを今は辨天山の下老樹の蔭乱草の畔に移せり『古塚に虫の念佛や平家れち』仙石魯川の吊ひし當時に比べて今は一層の哀れを添ゆ

千三百餘年の舊家

を此村中に訪ふを得んとは豈意外の意外ならずや天の日槍命の從者たりしことを其系圖に徵し又父老の口碑に証して毫末も疑ふべからざる上は此一族の血統は但馬の國の開闢と共に此に生じて但馬國の今日と共に此に存する者なり此一族の氏は日生下と稱し天か四年の頃には日生下權頭と稱して祖先以來神主を奉職し頗る有名なりしと見ゆ後家世零落して農となり其の正統を傳ふるを日生下民藏の家とす他に二軒の分家あれども其の血統ハ傳はらず之を柳屋曼陀羅家と稱す柳屋は數年前に湯宿の業を廢し曼陀羅屋は今も猶ほ盛んに營業を爲せり曼陀羅の湯に深き因みあり其の家も亦曼陀羅湯の直ぐ隣に居るを以て屋號とす獨鈷と名くる彼の道智上人が阿伽の水は此の家の小庭先に在り

停杝巖

は來日岳の山巓少し下りたる所にあり上古洪水の時神々の船此處に杝を停め玉ひしと俚俗は傳ふ、斯程に峻しき高山の上に船の着きしとは船頭多かりしにやと打笑へば『否とよ巖の下に蠣の売今も殘れり何

より一番の証據ぞ』と東道の主は答ふ、然り此の蠣売が洪水と云ふ事を證據立て洪水と云ふことが停柁巖の名を証據立てるならん左れども或地質學者は此の灰白色の貝売を以て或る一種の石なりとし各所の山巓に屢是と同一なる石片ありて是と仝一なる洪水の話を聞くことを説破したるは予が耳にせる所なり此山腹に雲光寺の古刹あり

日和山

又は神武山とも云ふ湯島の村口に在る一小邱遠く北海の洪波を天際に極め近く蓼川の碧流を脚下に臨む來日が岳は咫尺に兀立し鞍懸太白の山々ハ岸を隔てゝ呼べば答へんと欲す土俗此邱に上りて晴雨を卜す故に名あり四季の眺臨の他別に漁火を観るの勝地と云へり蓼川の下流岐れて二となり海に入る所之を迫門と呼び湯島を距る一里孤舟に棹して下るの客は須らく網と竿とを試むべきの場所鱗碧蟹紫極めて富む若し秋風漸く吹き老るの節に至らばじゆん菜も香ばしく鱸魚も躍るべし此の間右岸に

絹巻山

あり山は奇石を以て骨とし老樹を以て皮とす年古りたる楓林の奥に絹巻明神の祠堂あり之より迫門に至る水又の處を

津居山

と稱し漁家蟹舍巉嵓の上に據るもの總て二百餘戸島の周圍一里の間に後島、猿城、烏帽子岩を始め怪石

奇岩點々散布して奇絶又勝絶津居山の西に

西細亞の濱

あり海水浴に適せる所其の西に連るは

鷹野の濱

日本海の浩洋を斷崖千尺の下に控へ月明かに風清らかなる夜は宛として是れ小赤壁更に東風駘蕩の候に及べば加島山上千百の櫻樹花咲きて海山萬碧の中に一抹の紅を添へ着色の妙蓋し言外に在らん是より西して美含郡の沿岸は一帶に山骨高く海牙鋭く眺臨の勝少しとせず六里の馬道を踰へて香住に到らば有名なる

大乘寺

を得ん憾らくは予は彼の十七八日頃の暴風雨の爲に阻てられて行を果すを得ざりしこと左りながら予は今一箇美術界の奴隷となりて此光彩ある巨刹を此僻陬なる境界より起して滿天下に紹介の勞を取らねばならぬ斯の如き事は我々の仲間に於て常に好んで從ふべき者取り分け予が持て生れたる大癖なり
龜居山大乘寺は香住村の內字森と呼ぶ所にあり紀元千四百零五年即ち聖武天皇の天平十七年に創剏し行基菩薩の開基する所たり中世の頃回祿の災に罹りて稍衰頽の運に向ひけるが安永年中密藏法印なる聖僧あり其弟子密英上人に至りて今の大伽藍を再興せりと云ふ密英初め京師に在る頃屢々圓山に遊び赤貧

なる一畫工と相交れる密英彼が奇材を知りて贈るに銀三貫目を以てし以て彼が志を成さしむ彼此の銀を以て江都に赴き爾來雁魚を通せざること三年にして彼が大名は海內に響けり彼赤貧なる一畫工は今や圓山應擧てふ大畫伯と成り上れり深く密英の德に感じたる此大畫伯は其子應瑞及び數名の門人を伴ない此寺に來り其の有らん限りの大筆健腕を以て彼が綈袍の眞知己に報じたりとなん寺中に藏する所の軸幅の外に其壁も其襖も皆應擧の畫神ならざる無く圓山畫の大展覽場にあらざるなし

山水の間	應擧
芭蕉の間	仝上
竹の間	仝上
孔雀の間	仝上
農業の間	吳春
禿山の間	仝上
使者の間	弟子山本守禮、龜岡現禮
狛子の間	守禮
藤の間	貞章
鯉の間	應瑞

仙人の間　雪亭
鴨の間　源琦
猿の間　蘆雪

此他寶什の中に於て特に珍奇なるは十六羅漢の屛風なり筆勢氣韻明書に逼りたれども落欵なければ其の應擧の妙手に成りしことを知る者少なし四五年前某顯官の此寺を見舞ひし時千五百圓もて讓り受けんと云はれしも猶は愛を割かざりしと嗚呼今や應擧の寸縑尺幅も珍賞秘玩して措かざるの時誰にてもあれ苟くも彼が大手腕健精神を知らんと欲せば須らく此

應擧寺

に來るべし應擧寺ハ應擧の爲に千秋唯一の大紀念なり此他擧ぐべきは

湯島八景

なり曰温泉寺の晩鐘曰松ケ崎の晴嵐曰桃島の夜雨曰氣島の秋月曰畑上の暮雪、絹卷の落雁、氣比の夕照、津山の歸帆即ち是れ

『舟の仕度已に出來たり去來ゝゝ』との報を得たりしは予が此靈山勝水におさらばの一言を遺したる朝のことなりき導かれて河岸に赴けば十許名の土地有志家は赤船ヌ幔幕を張りて待てり藝者らしき者二三人撥を持て交り居るを見て彼の潯陽江上の昔を坐ろに思ひ出せり赤舟は古來此地に於ける最上の遊山船

にして全体を赤く塗りたる者仙石騒動の時左京が腹心の徒たりし宇野甚助が妓を載せ酒を置きて出石まで此河を溯りたるも此赤舟なりしと聞く舟の流に抗抵すること三丁餘り

半夜水明樓

に着く樓は樋口某の家碩儒柴栗山翁の臥遊する所臨水亭の名を今の名に改めしは翁が杜句より取りし者翁自筆の扁額あり壁古るび欄干傾きたれども二三株の老松は猶は槃桓の昔を風に語れり樓前亦一樹の垂柳の下に碑あり

風雲詠歸山吐月　濯纓歌罷水揚瀾

と柴翁の句柴翁の書側に美濃人村瀬東城の小碑もあり小竹篠翁を始め諸大家の湯島に遊び此處に遊びしもの吊詠極めて多しとかや其は頃日湯島に發行する臥遊集の中に載せて漏すこと無かるべし

玄武洞

は又石柱洞蜂窠洞とも稱す玄武の名は柴栗山翁の改めて命ずる所豐岡より一里半湯島よりも一里半の東岸にあり其狀千百の石柱を縱橫に積み重ねたるが如く洞中廣濶にして十間餘を入るべし仰で之を見れば蜂窠の如く又龜甲に似たり左壁に玄武洞の三大字を刻みしは之も亦栗翁の筆なり斯かる石質の岩山は曾て地理書の中に英國の某地に在りと覺へし外未だ多く聞かざる所蓋し海內稀有の大奇觀玄武洞の對岸泉冷かに沙清かなるは『夕づくよ覺束なきを玉櫛笥

二見ヶ浦

は明てこそ見め』と藤原兼輔朝臣の詠みし舊蹟此の歌の石碑は加茂直兄大人の手に樹てられて今も在り泉の清冷なること實に稀に知る所なり嗚呼予は永く記憶すべし二見ヶ浦の名は湯島山水の最終なるのみならず予が湯島の諸氏と手を分ちたるの地なることを又記憶すべし二見と云ふ名は予が再遊の爲に如何に好き龜卜なるかを

湯島の古物

として特に此に附記するの價値あるものは鯰江傳左衛門藏する所の

大石内藏之助　呼子笛

象牙を以て作り長さ曲二寸圓周一寸金を以て五六の落梅を鏤む是れ吉良邸に打入るの際義士各々が携へし所の物而して此大石所持の笛は豐岡の藩老石束源五兵衛の家に良雄が手から贈りし物豐岡藩の變故に逢ひ石束氏斷絕の不幸に際し血緣の故を以て鯰江氏に歸せりと因て想ふに外四十有六の笛も亦必ずや何處にか在るならん之を藏する者恐くは自ら知らざるかも知れず惜むべきかな

大石の短冊

去來今日は君につけはや櫻花
わたし見る目にちらまくもおし

大石の手簡（西村氏所藏）

數度御尋被下忝く此方よりは御不沙汰計打過申候此程は霖雨何方も淋しく暮居申候此一樽は唯今到來候條懸御目候雨中の御慰に被成可被下候何れ二三日中に參上以万々可申述候先はあまりく降つゞく雨故あけし暮しと打ふし居申候に付一句仕候

○○○○○○○○○○○

さみだれや顔も枕も物の本

いかゞ御笑艸とは此事なるべし以上

大石内藏助

廿一日

山形左衛門様

山形左衛門とは何藩の人なりしや又二十一日とは何年何月の二十一日なりしや分らずとは云へ其の手蹟より見るも其の文味より考ふるも此手簡は彼が四十歳以上の時の者たるや疑なしさみだれの一句彼が其の沈厚なる腦髓と容貌とを如何にして養ひつゝありたるかの平居の時の嗜好を窺ふを得べし短冊の歌は筆勢稍若さを覺ゆ

大石主税

の物の一字（鯰江氏所藏）ハ彼が五六歳の時に書きしもの字下に右の手先を一杯に廣げて一面に墨を塗り其儘押せし可愛らしき掌の跡あり彼をして此字に書かしめ此處に押さしめたる此の掌彼をして其大

義の讐上野を刺すの時積る恨の白刃を握らしめたる此右の掌、彼をして從容笑を含みて自害の九寸五分を握らしめたる此右の掌、嗚呼此の右の掌

石束源五兵衞の玄關

れ豐岡より移されて今西村六衞門氏の離れ座敷の玄關となりて在る屋根は二重にして破風作りとも謂ふべきか菊花に桐の葉三枚を付けたる紋瓦あり玄關口の廣サ一間半位敷臺は取り去られて無し更に湯島の美風として特記すべき者は

養老會

なり會は久しき以前より起され今猶ほ渝らず催さる此地の人にして男女を問はず貧富を論せず總て七十の齡に達する者七十以上の齡を保つ者を盡く招待して祝宴を開き其費用は一切村費を以て充つる事とし毎年雪消へ花開くの期を例とす近年に至り六十九才の齡に達する者も亦招きて御相伴たらしむ是れ僅かに一才の差違に由りて此目出度き儀式に列ならずして彼の世に赴くもの多きを惜みてのことなりと云ふ今の時節には一寸難有き企なり

最後に至りて予は湯島の爲に一言の婆心を述べねばならず直言すれバ湯島の浴客は概して下流の人多く隨て一二の湯宿を除くの外は其の百般の設備に對して所謂る紳士の小言を免かれざるなり湯女の尻輕く働くこと亭主の頭低く挨拶することなどは極めて好し不足を言へば

ハ湯治専門の客に向て一大不便を感ぜしむるなり

牛乳の店なき事

倶樂部の無き事

酒と肉との遊びの外に西洋めきたる當世紳士は玉突、骨牌の戯を好み又新聞の縱覧にも徒然を慰め又斯かる場所にて新らしき交際を得るを好むが故に少くとも之を滿足せしむべき方法を注意すべし

下水の臭き事

も亦一欠點なり本年の如きは長早六十餘日に及び大谿川の水涸れ盡したるが爲め所々に溜りたる汚水を流掃するを得ず由て一段の臭を感じたれども平年に斯てハ斯ヽることはあらじと或る者は語りき左れども五所の浴場と三百餘戸より流瀉する汚水は總て此大谿川に注入するが故に其川尻の川床をして今日の儘にあらしむるは此樂境の一不潔と謂ふて可なり

設令ひ湯島を以て有馬に優ると云ふ言の失當なりしとするも有馬と伯仲し難きの遊地たることは予が保証して以て天下に紹介するを甘んずる所若し鐵路の便開け播但の關徹したる曉には彼の客を此に引かんこと期して待つべし唯今は只彼の千山万嶽を奈何せん

《終結》

明治廿六年八月三十日內務省許可
明治廿七年九月一日印刷發行

定價金拾五錢

版權所有

編輯兼發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　曲田成
東京市京橋區築地二丁目十七番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發兌元　博文館
東京市日本橋區本町三丁目

桃川燕林氏講演　松本楓湖氏畫

東洋義民 **佐倉宗五郎**

全一册洋装大判　正價廿五錢郵税六錢

三ッ兒も名を知たる佐倉の義民宗五郎の事蹟を桃川燕林が有名なる辯舌を以て講談仕りたるを一言漏らさず速記したるものなれば、一本を坐右に置かば寄席に幾十日通ひしに勝らむ

村上浪六君著　三島蕉窓氏畫

高山彦九郎

全一册和装　正價拾二錢郵税四錢

高山彦九郎は安政三奇人の随一にして一生の行事總て奇を極む今奇文を以て奇名を博したる浪六子奇想を練り奇筆を揮て縱横に彦九郎の心胸面目を描けり眞に近來の一奇書なり

石橋思案外史著　武内桂舟氏畫

寧馨兒

全一册和装　正價拾二錢　郵税四錢

精神一到何事か成らざらんと、本編は實に此語を實行せるものなり。人到る處靑山ありと、本編は實に此語を事實に表出して餘あり。身を渺々たる一介の賤民に起して、加も不具の躯軀を以て奮然猛進叱咤一番、誓つて正義の爲に一命を鴻毛より輕んじ、艱難に會ふ毎に志望漸く堅く、屈せず撓まし、牢として拔くべからざるの氣慨あり。遂に單身孤劍深く不毛の境域に入り蠻烟瘴雨の裏よく其縱横の枝を檀にし、殘忍酷薄禽獸を相去る遠からざる蠻土の酋長をして、倘且つ歸依心服措かざらしむるに至る愛すべき欽すべき好少年か親しく經歴せる立志談なり。一讀惰夫をして起たしめ、再繙懶民をして愧死せざむるに足る。其あいた或は泣き或は喜び、一起、一伏、一抑、一揚、案を打つて快哉と絶叫せしむる談柄に富む。世の少年諸君、幸に一本を坐右に具へて熟讀玩味せば、諸子を益する事蓋し尠少にあらざるべし。敢て云ふ

松居松葉君著

西洋滑稽落語

全一册和裝　正價拾錢郵稅四錢

かわり合ひまして、かはりはひのあるや否やは、今こゝにいふを須ゐす、奇想は天外より落ち、妙鬼地下に湧く。來年のことならねど鬼も笑ふへく、詞は上品なれども佛も相好を崩すへし、かつて讀賣新聞に劇場の逸話をのせて大喝采を博したる松葉子、今また少年諸君のために、這の好笑話を纂む讀まん人まづ頤の外れ、臍の落ちぬ要心して掛らるべし

內田不知庵主人譯

めをと

全一册洋裝　正價五拾錢郵稅六錢

魯國の文豪トオストイ伯か傑作中の傑作にして最も微密なる夫婦の情愛を描きて眞正なる愛、人生の至樂の何たるを示し一棒華飾社會を喝破して醇厚なる人生の福利を教へ懷疑社會の岐路に彷徨せる妙齡女子の指針を示し世間普通の戀愛小說を打破して別に一生面を開く純潔淸靈、家庭の讀本として無比の絕好小說なり

石橋思案外史著

滑稽小兒四十八癖

全一册和裝　正價拾錢郵稅四錢

世に癖てふものほどをかしきはあらす、殊に小兒の癖に至りては最もをかし。我が國滑稽の改良を以て自任する思案外史茲に見る所あり。得意の筆を揮つて、巧に小兒事實の癖を活寫す。奇景百出、妙想湧くが如く、人をして送迎にいとま無からしむ、世にこれ程をかしき書はあらざるべし。幼年諸君早く一本を購ひて、をかしき程にをかしがり給へ。

阪田霧山人譯

なまけもの

全一册洋裝　正價五拾錢郵稅六錢

獨國文壇有數の詩人アイヘンドルッフ男が幽邃なる詩想と艶麗なる筆とを以て、畫がき出せる「なまけもの」趣向斬新靈妙神變不可思議、庭師となり、收税吏となり、道を失ふて友を得、友を失ふて金を得、古城に身命を危くして、公園に名譽を博し、貴女に辱められて羅馬を去り、畫工に伴はれて維納に歸り、結局藝が身を助けて、戀人と偕老の契を遂ぐ、其間密かになまけものゝ實相を穿ちて、或は空想に、神を飛はし、或は夢現に魂を迷はすなど、叙し去り叙し來て餘す處なく、滑稽洒落の中に、自然眞摯の意を含みて、縱横無盡に寫し出せる好小說、三代の炎熱に身を溶かすの折から、一本を求めて窓下に繙き給はゞ、讀一讀妙味愈深く、以て半日の暑を忘るに足るべし

楠廷尉秘鑑

原書百三拾巻合本一冊脊皮上製
正價金五拾錢　郵稅拾六錢

楠公の精忠大義、兒童走卒も亦これを耳にせさるものなし、されど當時の情況を詳知するものは世なかく〳〵に多からさる、是れ何ぞや、世に好書少ければなり、楠廷尉秘鑑百三十巻、頗る楠家殉國の事蹟を詳記す、以て元弘建武の史を補ふに足る、然るに從來寫本のみにして且訛誤甚たしきを憾み、玆に數本を集めて校訂補正、以て印刷に附す、天下始めて此書の完本を得たりといふべし

通俗十二朝軍談
通俗武王軍談
通俗明清軍談

原書三部四拾七巻合本一冊脊皮上製
正價金五拾錢郵稅拾六錢

十二朝軍談は盤古氏以來殷紂に至るの史にして支那歷朝軍談中の最古のものなり、武王軍談はこれに次きて殷末より周秦に至る歷代の事蹟を叙す、此の二書以て支那上古の治亂盛衰の狀を窺ふべし、而して本編附するに明清軍記を以てす、所謂國姓爺の、雄材偉略を叙して歷朝史の殿後たるもの、本編は支那軍記の先鋒と殿軍とを集めたり

通俗呉越軍談
通俗漢楚軍談

原書二部四拾五巻合本一冊脊皮上製
正價金五拾錢郵稅拾六錢

支那歷史の軍記中、尤も波瀾あり光彩ありて。玻瓈陸離の奇觀あるは呉越漢楚の兩軍談に如くはなかるべし、一は勾踐夫差と互に相復讎し、伍子胥の忠憤、范蠡の奇策、以て其偉觀をして益々偉ならしめ、一は高祖項羽と鹿を中原に爭ひて、范增韓信蕭何張良等の諸豪俊之が帷幄に參畫し以て其活劇をして愈々活きしむ、彼の三國以下の史を讀みたるもの、及び讀まざるもの共に先づ本編を一讀せざるべからず

眞書太閤記

附錄　太閤朝鮮軍記

原書三百六拾巻附錄廿四巻合四册上製
正價一册金五拾錢郵便稅拾六錢

豐太閤の雄圖偉蹟一にして足らず、其藤吉より筑前守となり、明智を仆し織田に踵きて遂に太閤となるに至る迄、一擧一動悉く載て太閤記にあり、而して其末年海內事なきに當て髀肉の歎勃々止むと能はず　**鷄林八道**を**席捲**して**朱明四百州**を**呑**まんと**欲**し、百萬の貔貅に令して雲山萬里の異域に渡らしめたるの事蹟は太閤記闕て錄せず、仍て　**太閤朝鮮軍記**を**附刻**して以て豐公の面目を全くす、加藤小西が先陣を爭へる、小早川が碧蹄の大捷、嘉明の沈毅、島津の驍武、韓明幾千萬の人士をして顏色なからしめたるの偉蹟、大和民族英豪の氣象、明に三百年前まで存在したるを見るべし

源平盛衰記

原書四拾八巻合本一册脊皮上製
正價金五拾錢郵稅拾六錢

我邦演義の稗史中殊に舊くして尤も面白きは源平盛衰記に若くものなし、其事其文共に千古に傳ふべきに足れり、古來版本寫本十數種ありて廣ろく世に行はるゝも之が爲めなり、但當時文運未だ開けざるの際に成り、而して歲次の久しき彼此傳寫したるが爲め、魯魚亥豕の訛謬頗る多く、假字の用法を誤れる、假字文中に往々和習の漢語調を雜へたる等は諸本何れも然らざるなし、隨て世人が此書の流讀に不便なるを歎ずること久し、仍て今回數本を集めて互稽參訂し、字を正し、假字を改め、句讀訓點の謬誤を校正して、以て世に公にす、盛衰記の版本世に多しといへども、恐らくは本書を以て唯一の正本となさゞるを得ず、猶ほ古劍の新たに磨を經たるもの、如く、精氣光怪、千歲始めて顯はるゝものと云ふべし

博文館編輯局校訂

校訂

星月夜鎌倉顯晦録
北條九代記

原書二部四拾貳卷合本一冊脊皮上製
正價金五拾錢　郵税拾六錢

源將軍鎌倉に勃興してより天下の事實に奇觀多し、而も僅に三世にして亡ぶ、次で國柄を握るものは執權職北條氏なり、時政義時の兇悍に始まり、泰時時頼の恭儉、時宗の勇健に成り、高時の暴逆を以て終る、凡て九世の間、亦屬目すべきの事少からず、今二書を合せて校訂印行す、源平盛衰記に次ぎて讀まざるべからざるの書なり

校訂

甲越軍記

原書六拾卷合本一冊脊皮上製
正價金五拾錢　郵便税拾六錢

甲將は精、越將は猛、天地間の奇觀は甲越二將の戰に極めたり、ナポレヲン、ウエルリントンと逢ふ、此の奇略にあり、此の精猛は未だし、鞭聲肅々夜渡レ河、曉見千兵擁ニ大牙一、遺憾なし兩人の川中島に戰ふの奇觀

博文館編輯局校訂

校訂

通俗三國志

原書七拾五卷合本二冊洋裝背皮上製
正價一冊金五拾錢郵便税拾六錢

策畧、戰法、盛衰、興廢共に奇正の變を盡し、謀臣猛將雲の如く、俊傑各々其の技倆を逞ふして、人生の奇觀を極めたるは、實に支那三國の時代なり、東亞の大陸を三分して、奇正相爭ひ、智勇相角し、縱横夢幻殆んど端倪すべからず、之を古今東西の史に求むるも一も比敵すべきなし。故に三國志は水滸傳、西遊記と合して中華の三大奇書の随一とす。特に此の書は歷史的小說にして、又小說的歷史なり、文章趣向の妙は能く英雄俊傑の眉目心胸を露はし、又奇變縱横の奇觀を極めて遺憾なし、之を歷史として讀むも小說として視るも眞に宇內の奇書、天下の逸品なり、全部七十五卷、今合せて二冊とす、後漢の衰運より、奸臣の跋扈、忠良の苦心、美人の魂膽、梟雄の窺達を首め、時會竟に英雄を生じて、桃林の盟となり、曹瞞の雄圖となり、臥龍の三顧、天下三分の神算となり、又赤壁の血戰に至るまで、人生の奇變、天下の妙觀を極む。

博文館編輯局校訂

校訂

風來山人傑作集

原書拾二部卅四巻合本一冊脊皮上製
正價金五拾錢郵便稅拾六錢

目次

●風來六々部集●根なし草●風流志道軒傳●そしり草●金のなる木●神靈矢口渡●前太平記口跡鑑●弓勢智勇湊●嫩芽葉相生源氏●田舍芝居(二世●驪山比翼塚(二世)●平賀鳩溪實記(附錄)

尾崎紅葉。渡部乙羽兩君校訂

校訂

西鶴全集

原書廿部百十一巻合本二冊脊皮上製
正價一冊金五拾錢郵便稅拾四錢

目次

●一代男●二代男●一代女●五人女●本朝廿不孝●男色大鑑●武道傳來記●日本永代藏●俗つれ〴〵●胸算用●本朝櫻陰比事●織留●武家義理物語●萬の文反古●諸國はなし●置土產●新可笑記●三代男●日本新永代藏●元祿太平記

本書ハ發賣ヲ禁止セラレタリ

博文館編輯局校訂

校訂

南總里見八犬傳

原書百八巻合本三冊脊皮上製
正價一冊金五拾錢郵便稅拾六錢

文の妙、事の奇、馬琴氏の八犬傳は實に宇内有數の珍書なり、唯其巻帙浩瀚にして藏架に不便なるを憾むるのみ、本館仍て之を三巻に約す、用紙精良、印刷鮮明、製本は美にして堅く、挿畫は密にして麗し、且巻首に附するに依田學海先生の細評を以てす、先批評を讀みて後本書を味ひなば、必ずや手の舞ひ足の踏むを覺えざるの妙味あらん

博文館編輯局校訂

校訂 滑稽名作集

原書卅一部百卅六卷合本二冊背皮上製
正價一冊金五拾錢郵便稅拾四錢

本書目次

●開卷百笑●花暦八笑人●舊觀帖●滑
稽二日醉●忠臣藏偏痴氣論●滑稽和合
人●魂膽夢輔譚●六あみだ詣●傾城買
二筋道●世の中貧福論●妙竹林話七賢
人●一盃綺言●指面草●大師巡●箱根
草●大山道中膝栗毛●狂言田舍操●人
間萬事謔計●口豆飯茶番樂屋●浮世名
所圖會●役者必讀妙々痴談●役者妙々
後夜の夢●妙々痴談返註錄●稽古三味
線●福助緣起●曾我慊袋●評判の俵●
穿當珍話●杜選商●酒徒雅●俄ジャ々
々々

校訂 京傳傑作集

原書拾一部四拾二卷合本一冊背皮上製
正價金五拾錢郵便稅拾四錢

目次

●昔話稻妻表紙●本朝醉菩提●双蝶記
●忠臣水滸傳●優曇華物語●手段詰物
娼妓絹篩●四書京傳餘師●仕懸文庫●
通言總籬●夜半の茶漬●志羅川夜船

博文館編輯局校訂

校訂 種彥傑作集

原書七部四拾四卷合本一冊背皮上製
正價金五拾錢郵便稅拾四錢

目次

●淺間嶽面影草紙●逢州執着譚●正本製
●綟手摺昔木偶●天縁奇遇●勢田橋龍女
本地●阿波鳴門物語

校訂 三馬傑作集

原書拾四部四拾五卷合本一冊背皮上製
正價金五拾錢郵便稅拾六錢

目次

●浮世風呂●浮世床●古今百馬鹿●四十
八癖●辰巳婦言●船頭深話●船頭部屋●
人心覗機關●潮來婦誌●狂言綺語●大千
世界樂屋探●酩酊氣質●逆麻疹神表●素
人狂言紋切形

博文館編輯局校訂

校訂 一九道中膝栗毛

原書四部七拾八卷合本一冊脊皮上製

正價金五拾錢郵便税拾六錢

快活磊落なる二人あり、膝栗毛に鞭ちて海内を跋渉し、足跡大八洲に遍し、頂天立地、旅を家さし彤骸を土石さす、放泿自恣、滑稽洒落、その胸中實に光風霽月の如し、三伏の炎暑に苦しめらゝの人、世途の塵熱に勞るゝの人、無事に困しむの人、匆忙に倦めるの人、共に一本を購ふて以て、淸涼の仙丹に當て給ふべし。抑も二人を誰さす、曰く彌次郎兵衛、曰く喜多八、二人の言動を爲したるものは誰ぞ、人も知たる一代の奇人十返舍一九その人なり、一九は如何なる人物ぞ、卷首の詳傳を讀みて、一九さ膝栗毛さを知悉すべし。

柳澤、越後、黒田、加賀、伊達 騷動實記

原書五部百廿五卷合本一冊脊皮上製

正價金五拾錢郵便税拾六錢

主闇弱にして妻妾驕り、權奸威を弄して佞邪之に乘す、奸臣驕婦さ相結托して、所謂『お家騷動』玆にその形體を生成すめり、古より今に至るまで、殆ご一轍に出づるものゝ如し、而して國亂れて幸に忠臣の出づるものあれば、天日を殆ご傾くに回すことを得るも、時に慘毒を後に殘さゞるものゝ稀なり、主たるもの深く省みる所なかるべけんや、若し此意を以く此書を讀まば、或は修身齊家の龜鑑に充つべし、獨り消閑の娛樂のみに非ざるなり

博文館編輯局校訂

校訂 梅曆。春告鳥

原書八部百二卷合本一冊脊皮上製

正價金五拾錢郵便税拾六錢

爲永春水の小說は天然の美人の如し敢て意を用ゐて修飾せざるも、情致纏綿、愛嬌滴れんさするものなればなりその人を動かす處はその天眞爛熳の處にあるなり、梅曆、春告鳥、は爲永流即ち人情本中の傑出たり、これによりて彼は馬琴、種彥、一九、三馬等さ併稱せらるゝを得るなり、梅曆は惠の花、梅曆、辰巳園、英對暖語、梅見舟、以上は五種の總稱にして春告鳥は春告鳥、籬の梅、春の若草三種の總稱なり、本編は此八種を集めて、例の美麗鮮明なる印刷、堅牢精良たる製本を以て發刊せられたり。

日清韓政治家及陸海軍將校肖像軍艦支那朝鮮之景色寫眞銅版入

日清戰爭實記

毎月三回發兌

正價 洋裝大判●毎編寫眞銅版入 一冊(百頁)金八錢●六冊前金四拾五錢●十二冊前金八拾五錢●廿四冊前金一圓六拾錢●郵税一冊四錢第二編遞信省認可出願の手配に付き一冊一錢

日清の交戰は我か國開闢以降絶無の大快事也、進歩と保守の爭ひ也、文明と野蠻の爭ひ也、東洋消長の機運全く之に在り、此の書は縱横に其の事實を描し、特に我が陸海軍の精鋭か敵壘を屠り敵艦を破るの狀は、千古の快史筆を驅て能く龍虎相搏ち電雷相擊つ的の光景を詳かにし、且つ日韓修好の始めより東學黨の起因兩國出師の緣由顚末等に發端し凡そ地理兵制等に關するもの一として漏すとなく毎卷百余頁間々兩國英雄の肖像戰圖地圖等を挿みし完全なる戰爭實記也、讀者啻だ自から戰塲に立ちて千軍萬馬馳尖の狀を目擊するの感あるのみならず、永く子孫に傳へて千秋の好歷史と爲すに足らん

◉第壹編　八月三十日發兌（本編には博文館發兌の圖書總目錄六十四頁を附載す）

小川一眞氏製版　寫眞銅版目次

第一編　參謀本部總長陸軍大將 有栖川宮殿下。海軍々令部長海軍中將 樺山資紀君。參謀本部次長陸軍中將 川上操六君　廣島第五師團長陸軍中將 野津道貫君。混成旅團長陸軍少將 大島義昌君。朴泳孝君。金玉均君　朝鮮國王殿下。大院君。朝鮮國總理大臣 金宏集君。日清韓三國畧圖

第二編　近衛師團長陸軍大將 小松宮殿下。陸軍大將 山縣有朋伯。陸軍大臣陸軍大將 大山巖伯。海軍大臣陸軍中將 西郷從道伯　常備艦隊司令官海軍中將 伊藤祐亨君。朝鮮京城凱旋式之圖。吉野艦。浪速艦。秋津洲艦

第三編　朝鮮國王宮。東西南北四門。定遠號。鎭遠號。清國北洋水師總督 丁汝昌

第四編　內閣總理大臣 伊藤博文伯。外務大臣 陸奥宗光君。特命全權公使 大鳥圭介君。清國直隷總督 李鴻章　袁世凱。大阪第四師團長陸軍中將 北白川宮殿下。東京第一師團長陸軍中將 山地元治君　仙台第二師團長陸軍中將 佐久間左馬太君。名古屋第三師團長陸軍中將 桂太郎君。熊本第六師團長陸軍中將 黑木爲楨君

巖谷漣山人編

日本昔噺（にほんむかしはなし）

版權所有

毎編有名畫工之密畫挿入

桃太の遠征、猿蟹の戰爭、兎の功名、雀の報恩、是等はお伽ばなしの傑作と仰がれて幾百年來幼年諸君に謹聽せられ、秀吉も家康も西鄕も木戶も、皆一たびは是等の談を無上の講話とも小說とも して喜びたりき、されど錦の衣裳も目馴れては麗はしからずと、幼年文學の大手筆たる巖谷漣山人が、敏妙無類の奇想を凝らし快筆を揮ひ、古搆に就て新案を立て一層面白くして有益なるやう綴らるゝに、畫は當代十二名家を撰びて每冊各家の精妙なる繪畫を加へ、全部十二冊として每月二回發行するもの、即天下無双の昔噺文庫なり

日本昔噺目次

第一編 桃太郎
第二編 玉の井
第三編 猿蟹仇討
第四編 松山鏡
第五編 舌切雀
第六編 大江山
第七編 花咲爺
第八編 俵藤太
第九編 かち〻山
第十編 瘤取り
第十一編 文福茶釜
第十二編 物臭太郎

第三編 猿蟹仇討 寧齋主人題詞 戶川殘花唱歌 大江小波述 東屋西丸記 菅原丹陵畫（九月一日發行）

一名 昔々文庫

全部拾二卷
每月二回發兌
洋裝大判美本

本誌定價
一 冊金 五 錢
六冊前金二十七錢
十二冊前金五拾錢
郵便稅一冊 二 錢

株式會社東京築地活版製造所印刷

圖書出版
東京博文館

短篇小説
明治文庫

第拾七篇

江見水蔭著作　武内桂舟畫

血染櫻　娘巡禮
宿直物語　後檜笠
白眼競　猿曳
谷川　旅畫師
湯坂越　社
盆燈籠　丑時参
病畫師
以上拾三種

（蔵書印）

短篇小説 明治文庫第十七編目次

◉血染櫻……一
◉宿直物語……四三
◉敵討白眼競……五八
◉病畫師……七一
◉旅畫師……七九
◉娘巡禮……九九
◉盆燈籠……一〇八

◉谷　川……一六一
◉湯坂越……一七四
◉後檜笠……一七八
◉社……一九二
◉猿曳……一九六
◉丑の時參……一九九

以上

短編小説 明治文庫第十七編

◉血染櫻

江見水蔭

（一）
敵討の敵討

京の四條河原に若衆歌舞伎興行。櫓には毛鎗に幣束、定紋染抜きたる幕を張り、下の入口の板内には長棒持つて立てる木戸番。大模樣の華美着を片肌抜ぎて、手細に包む面いかめし。竹矢來に子供が縋るを呵り。額の太夫觸讀む人を勸め。ゝゝゝゝやんちや坊の狼籍亂入を防ぐ、如何にも強さうなる人なり。いや松分きて此頃評判の高き小太夫座の前には小石の數程見物押合ひ、袖浦半之丞の笠物狂ひ面白し。井重三郎の鎗踊が興わり、なぞと口々に噂して這入りぬ。

富士颪の大編笠に面を包み、黒羽二重に薬菊の五所紋、糸打の平帶、ぬき鮫の大脇差、素足に藺から草履穿きて、此方へ來る一人の浪人わり。これと摩違ふ一人の若衆、未だ角入れぬ前髪美しく、雪に松ヶ枝の摸樣小袖、宗傳唐茶の疊帶に兩刀さしたり。何思ひけむ此若衆は、足をかへして、行過ぎたる浪人の笠の內差覗きしが。「やれ嬉しや！日頃信ずる神々の御引合せとをぼゐた、これ、待て、水島傳九

郎。ト矢庭に刀の鐺を取り、力に委せて引戻すにぞ、浪人は大いに驚き。「待てと留めたは此方か。「如何にも拙者が呼留め申した。「して何御用ばし御座るの。「しら〳〵しい、其言葉、問はずもがな用の次第。「はて一向に合點が參らぬ。「何んの合點が參らぬ事があらうぞ。義兄石橋德十郎が敵たる水島傳九郎——好くも今まで潛居りしぞ。此所にて我眼にかゝりし上は、逃げやうとて逃がすべき、和主も武士なら尋常に刄を合せて勝負なせ。「先づ待たれよ、それは人達で御坐らうぞ、拙者人に怨を受け、敵と呼ばるゝおぼえ曾つて無し、又石橋德十郎とやら申す御人も存ぜねば、拙者水島傳九郎とも申さぬ。「やア卑怯なるぞ傳九郎、未だ相見たる事あらねど、噂にきゝて存じ居るは、鼻筋通り、眼鋭く、額の左に刀疵、加之汝が着せる小袖の紋は葉菊の丸形。かゝる證據のある物を、未だ彼此と言張るよな。「愚かなる事申さるゝ人かな、世間に定紋の同じ家門たゐてなしとは申されぬ。拙者は瀨山剛助と申して浪々の身には御座れど、人に喧嘩を仕かけられて逃げかくれする臆病者には御座らぬ。但し素性の分らぬ爭鬪なら、舌頭でも厭ぢや。「あら何たる因果ぞや、まざ〳〵敵に出逢ひながら、口賢く說きつけられ、討つに討たれぬ殘念さ……遠山錄彌が武運の果、ト切齒を爲して浪士の顏、睨付けたる其極、今は勘忍なしがたく、好しや人違にてあればとて、かうなりては騎虎の勢。否々人違にはなき物を、彼が口より名乘らずとも、義兄の仇たる傳九郎に相違あらずと思詰め、あはや刀の鯉口放たむとする矢先き、彼の瀨山剛助と名乘りたる浪人は、聲を掛け。「何んと言はるゝ、

今一度御身の姓名を言はッしやれ。　「遠山錄彌を知らぬ御身か。　「やや、遠山錄彌……すりや和主が遠山よな、おのれ、やれ、此方よりぞ遺恨のある不倶戴天の父の仇、遠山錄彌、不思議な處でめぐりあひしぞ、　ト一刀三尺二寸、そりを打たせて身構へたり。

最前より往來の人々、立留り此樣子を見てありしが、扨て〳〵世の中に分らぬ事もある物かな。これは又不思議なる敵討、敵が敵でなうて、敵を討たれむとしたる人が更に敵を討たうとする、これには深き仔細ぞあらんと、遠卷にして、われよ〳〵と騷ぐ所へ、小屋の前で切合はれては、掛り合の迷惑、何んでも留めるにしくはなしと、木戸番の若者五六人。　「まア待ちなされえ、トロ々に呼ハり、兩方に分れて抱き留むれば。　「いや留めるな。　「留めて吳れるな、　トいよ〳〵火の手強くなり、玆に若衆と浪人が、喧嘩やら、敵討やら、更に判じがたき爭鬪を生じぬ。

（二）　艶女にも膽大

若衆が浪人を呼留めて、敵呼ハりしたるが事の起因。其若衆が遠山錄彌と名乘るを聽きて、模樣忽ち轉倒なし、此度は浪人の方より若衆に向ひ、父の仇なりと言掛けて、勝負を決せむと拔刀振翳すに、若衆も亦鞘走らし。「汝の父とやらを殺したるおぼえ毛頭ない、敵と言はれる筈は少しもない。此方からこそ義兄の仇。　「我とても汝如きに敵と言はれるおぼえなし、誠に汝が遠山ならバ、却ッて此方から敵と狙ふ、父の仇たる錄彌奴ならむ。　「此場に及びて言葉を濁すか。　「和主こそ逃腰するか。

「何を……。　「何が……。　「何を……。　「何んだ……。　「斯くなる上はいさぎよく。　「共に勝負を。　「決しやうぞ！兩人は斯く呼はりながら、木戸番の留めるをも聽かず、秋水振廻はすに、これは又いよ〳〵物に成つたり、傍杖打たれて怪我しては大損、我々の力でハ如何もならぬと、こそ〳〵鼠戸に逃込む男供。留める者なくなりては益々荒狂ふ若衆と浪人、風に狂ふ翠の柳太刀、これハ紅の鎗梅に枝を掛ければ、燕と鶯を一所に見る如く、業は速かに、尾がへし、翼がへし、飛んで散らすは花一輪。蕾程の血ほとばしれば、そりや切つたぞ、切つたか、切られた。雲雀めかして囀りつ、むらむらぱッと逃散る見物。

最前より役者紋楊子の店の影に居て、始終の樣子を見て居たる一人の女、地淺黄の小袖に金糸の櫻花、銀糸の櫻の葉、朱糸の名古屋帶結びて、垂髮の艶なる姿、扨て美しい事千人の肌を磨きたる彼の貴き御方も斯くや、其筈湯女なりと口囃す者あり。何思ひけむ此女は、臆せず刄の中に分入り。「まアまア御待ちなされませ。「やア女、怪我するぞや、其所避け、邪魔だ。「邪魔だ、其所避けッ、怪我するぞ女。「怪我はいづれも樣ハ互ひに仕ますぞえ、嵐も此頃は優しう吹くに、まア何事で御坐りまする、花ハ散らして見やうより、梢の雪が眞價とやら……。「ねッ言ふな。「留めるなッ。「女にしてハ手尙兩方より切結ぶ劒の上に富士颪、編笠冠せて下に伏せ、上に乘りたる手並の鋭さ。強さ留方。「抑も御身ハ何者ぢやよ。

「おう小染か……。　「其小染が見分けられいで、何んの敵が知れませうぞ、最前から此塲の有樣、委しく見て居りましたが、如何も合點の行かぬだらけ……これには深い仔細もあろう、まアまア待ッて御二人樣、とくと話を仕て見たら、お互ひに心も解け、敵同士が裏がへり、存外味方か知れませぬぞ。　「ぢやと申して武士たる者が、抜いた刀に稻妻の、雲に血染の光も見せず。　「風に散らして水の色、花を流さぬ其上は。　「假令誰が留めやうと。　「何奴がつン出やうと。　「引かぬ〳〵。　「いつかな引かぬ。　「そんなら此方も笠の上、女ながらも初音風呂、小染が頼みをきかれぬからは、滅多に引かぬ島祭、迹へは花車を遣らぬわいなア。

（三）　娘にも芝居嫌ひ

外は此通りの大騒ぎ。若衆歌舞伎の小屋の内にては、今が丁度袖岡半之丞の出になりて、鳥足の高木履、衣裳ハ紙子に樣々の切接。これは連理の縁つなぎ、人ならで戀の神の化身、出雲の榊木に結文の鈴成。御姿てんと溜らぬ、何とも口に言はれぬ御利益、難有し〳〵と、拍手打ちて喜ぶあり。浮心の女供は被衣の中から手を合せて拜むあり。棧敷から荒蓙の上まで蟻一匹住はせる隙間のない見物の大入。いよう〳〵。命取。半樣半之丞樣々と口々の褒詞。これからいよ〳〵聞所の長臺詞、好色中興の世捨者云々と、扣鐘の音を靜める時や――外の騒ぎ急に傳はりて、此大勢總立の亂脈。「白晝の物取ぢやとい。「いや〳〵敵討の敵討ぢやげな。「なんの喧嘩ぢや。「さうでもない狂人の刄物三昧。「わけもない

泥醉の抓合ぢや。「いづれ劍難、恐やの、恐やの、　ト蜂の巣に火を付け、蟻の穴に湯を注ぎたらむ如く、散るわ〳〵逃げるわ〳〵板圍蹴破ぶり、垂筵押破り、矢來垣の間から這出すあり、舞臺裏へ駈込むあり、若い者勝を制して年寄はまご〳〵。子供は泣出し、女子は泣聲出し、舞臺の役者はさらなり、囃方まで肝を消し、半扇開きて靜まッしやれを極て見ても、常のじや〳〵とヽ事かはり、中々に留めがたし。

大臣柱の傍に立ちて逃派を失ひたる袖岡半之亟、上から見下せば人々の右往左往、岸打つ浪高の汐に熊野石洗ふが如くなり。

時に何處の娘やら、乳母に手を引かれて舞臺下にまよひ來り、上には半之亟のありとも知らず、涙含みたる聲震はせ。「これ乳母や、其方が芝居と言ふ物ヽ、それは〳〵面白うて〳〵一度見たら其味は忘れられぬと口をきはめて賞るによッて、進まぬながら來て見れば、色の生白い女の樣な男子が、いやらしい事して舞うたり、唄うたり、妾や少しも興にならぬ。それに又此樣な恐ろしい目に逢ふて、命も如何やら危いげな。母樣が御遺物の櫛笄、落しでも仕樣ものなら、佛樣に申分けがない……。「はて、左樣にれッしやりまするな。これから面白ふなりかけの小口で、魔が指した今日の騷ぎ。芝居と言ふ物は毎日此樣な狼籍があるとおぼしめしては、きつい間違で御座りまする。「それなれば尚の事、もうこれからは謹まねばならぬ、父上に隱れての物見故、こりやてッきり罰が當ッたのぢやわいの。「他愛

のない事おッしやりまするな——さア〳〵其様な事言ふて居る間に少しも早ふ逃げませう。「逃げやうとて逃げる路がないに……。「それでも、あれ〳〵彼の通り、刄を合せる音が聴ゑて……。「おゝ如何したら好い事か。「乳母も途方に暮れまする、トうろ〳〵なせる二人の様子、半之亟は見て氣毒がり。「其所は場所が惡ふ御座りまする、人が突飛して行きまするに、此方へ先づ〳〵御上りなされませ、ト信切より手を取りて、舞臺の上にあげてやれば、乳母は年にもめげず役者に手を取られたを喜びて、握られたる所を大事に懐へ入れるも可笑。娘は又、如何に危急の場合とは言へ、野郎の手の肌に觸りたるを羞ぢて、颯と赤らむ顔の色、見せじとや、花に被衣の霞を掛け、情送る風余所に吹かすとは、今時に珍らしい娘。

（四）　敵役が味方

切結ぶ刄の中に臆せず飛込みたる女の一心。引かぬと言ふを無理に引かせて、初音風呂の二階に伴ひたる小染。先づ打解けるは酒の事と、瀬山遠山の中に盃臺を出しても、只睨合ふて誰からも手を着けず。これでは成らぬと小染氣を揉みて。「これもし御二人様、何方からも敵呼はり、それではとんと分りませぬ、先づ遠山様から敵討の起因、つぎてこれまでの成行を、此所で御話しなされませぬか。又其迹で瀬山様とやらも、御父様の仇敵、御たづねなさる一部始終、御きかせなされて被下りませ。其上にて、瀬山様の敵が愈々遠山様と知れ、遠山様の仇が瀬山様と分りましたら、それこそ改めて御勝負なされま

せ。

「おう其方の言ふも一理、さらば錄彌から申さう、聽かれよ、瀨山氏とやら。拙者は和州郡山の家中にて遠山七左衛門の一子、松浪の殿中にて御小性役を勤め居りしに、義兄石橋德十郎殿、眉間寺開帳の歸途に、佐保川堤の夕間暮、劍道の遺恨よりして同傍輩の水島傳九郎に、だまし討たれて無慘の最期。其水島は江戸詰にて、近頃御國へ來て間もなし。それ故未だ掛違ゐて互ひに顏を知らざれば、慥かにそれとは分らねど、人より聽きし顏形、和殿に寸分違はぬのみか、丸に葉菊の紋所……三年の間諸所をさまよひ、尋ねさがせし甲斐ありて、今日めぐりあふ嬉しさと、扨てこそ仕掛けた途上の刄合。「其儀なれば益々此方に、おぼえのない事分りまいた。拙者は播州明石の家中にて、實名包まぬ瀨山剛助。丸に葉菊は代々の定紋。今は浪々の身には御座れど、未だ江戸の土を踏まず。和州の春日參詣、霰酒の味も存ぜねば、郡山へは尙更參らぬ。水島傳九郎とはまッたくの別人、刀疵は幼少の時、惡戯からの怪我の迹、扨て顏が似て居るとは他人の空似、世間此ためし澤山に御座る。それしきを證據に敵呼はり、甚だ以て心得ぬ。「それしきの敵呼はりと申さるれど、左言ふ時は和殿とても淺墓なる敵呼はり、遠山錄彌の名をのみ聽いて、一圖にそれとは氣の早い、これとても世間には、同名異人いくらも御座る。

「むはゝゝ御若い御了簡、眞實拙者に敵ありと思はれたか、誠に和殿を敵と狙ひ、刄合仕たと思はれたか。「何と言はるゝ。「和殿の見幕鋭さに、はては無法の敵呼はり、到底言葉にては留めがたしと、見て取りたる拙者の氣轉。先んじて人を制し、石を割るに石を以てし、水を呼ぶに水を以てする、

武道の極意を引來り、此方からも好き加減に、口から出まかせの敵呼はり……。「えツそれは誠か……」
……。「二言があろうぞ、武士で御座る。好し又拙者眞に和殿を敵と思はゝ、疾くに和殿の首は御座らぬ。「何を高言……。「又眞實拙者が和殿の敵、水島傳九郎とやらで御座ッたら、和殿が抜く手も見ぬ内に、只一刀で仕留め申すわ。それを好き加減にあしらッて、打たれる隙を見のがしたが、敵でない何よりの證據。「打たれる隙を見のがしたとは……。「和殿の右の手を見られよ、小疵ながら十文字を、刀の先きで刻んで御座る。「や、や、右手に十文字が……。ト初めて聽いて袖をまくれば、氣の張弓の此時切れ、血を眼に見ると忽ちに、痛さを少しく感じそめぬ。

剛助は冷笑ひて。「吾疵さへも見分けられぬ、未だ〳〵未熟の太刀筋にて、敵討とは早い〳〵。茲に三年修業めされい。ト言はれて今更面目なく、小染も共に言葉なし、差扣へてぞ居たりける。剛助更に膝をすゝめ。「さるにても若年の御身が、父母の仇ならで、義兄の敵を取らうとは、今の世に見上げた心底。瀬山剛助感服致いた。袖ふり合はすさへ何とやら申すに、一度劔をまじへしも、つながる緣とや申すべき。及ばずながら和殿の後立、隨分力にも成り申さう。「すりや此方の無作法を、御咎めもあらずして、敵討つ身の拙者に、御助力なし被下ますとか……。「如何にも……。「は、はッ忝けなき其御言葉、ト言ふ尾につきて小染も喜び。「これで妾が御留め申した、甲斐のあッたと申すもの……したが貴郞が敵をさがす御方樣とは、今日まで、妾や知らずに居りましたぞえ……何に致

せ御酒一献。「御ちかづきの盃頂戴致さう。「人には語らぬ敵討の密事、これから後はお互ひに、心を明かす其盟約。「丁度流るゝ血をすゝり。「此方も赤き心の色、流して共に酌かはさむ。「それにしても人間は、不思議な所で仇となり。「不思議な人の味方となり。「いづれ不思議の世の中に。「不思議な御縁は今日此席、膝を崩して、語り申さう。

（五）　役者の戀わづらひ

茲に歌舞伎若衆の袖岡半之丞は、彼の大混雜の其中にて、逃派を失ひたる乳母と娘が舞臺下にての話を聴き、扨て〳〵世の中には變物もあればあるもの、今時の娘に芝居が嫌ひで役者を好かぬとは珍らしゝ。父親は石地藏、母親は金佛か。北國にありと言ふなる化石谷の水でも産湯に湧してかと初めは興にして手を取り、其所は危いと上へ來させて、目付から厭な乳母をさへ引上げぬ。金魚の爲めには溝の孑孑を掬ふためしなり。

其内に騒動も靜の舞の囃子打初めて、人々元の座に納まり。わッけもない事一時の通り雨にあたら一張羅を汚したりと、口々に罵る聲、雨後の蛙の小田に鳴くが如くなり。

それも亦役々の妙舞に浮かれて、終に褒詞のつきぬ名殘を、今日一日のおさめとなし、櫓太鼓の打出しにつれ、又も我を先きに争ふ男浪女浪、小浪の子供交りて、引汐の家路〳〵へ、村千鳥のぱッと散りぬ。

此後半之丞、うつら〳〵と面白からぬ病にかゝり、贔負の客の夜の席斷はり、晝の舞臺も勤むるに憂く

て、それも二三日は引籠り、吾家の枕に睦みて、花を蝶、夢は眞實か、方様の御姿、あり〳〵と見えて御言葉なきぞ怨みなる。彼の被衣の中に隱し給ひし御顔の美しさ、羞かし氣にあちら向かれた愛らしさ、我今の世にかゝる艶女ありとは思はざりし。それが又役者が厭ひとは何事ぞや、芝居を觀るがはじめてとは何んたる事ぞや、役者なる此身を彼は愛し給ふまじ、此身がするおぞりを女臭しとて嫌ひ給ふとは、嗚呼情け知らずの小町女。戀は道なきに辿るとかや、厭がられてぞつのる此方のあさけ、あな苦しや、これ程に思ふても屆かぬとは、神もない世、佛もない世、吉祥天女よ救はせ給へ、歌舞の菩薩よ助け給へ、出雲の神の縁結び、此身の藝にありながら、これが向ふへ通せぬとは、何んたる因果かと布團抱締め、一層戀焦れて死んだ方が極樂、生ながらの地獄に彼の樣な美しい鬼があるとは、今の今まで知なんだ〳〵。

處へ御免なされい、　ト入來る男の聲、又も贔負の旦つくから見舞か、大道寺の和尚から祈禱の札か、御醫者樣でも草津の湯でも、治らぬ病を御存じないかと、うるさげに枕をあぐれば、これは日頃仲の好き扇賣の源兵衞。相變らず調子の好い無絃の口琴、指先きをぺき〳〵鳴しながら。「これさ太夫、如何した物ぢや。チトうき〳〵仕なさらぬか、蝮の燒串なら六條で買うて來るぞや。ヲツトそれは茶羅鋒、これは源五郎の鮒ずしぢや。珍らしふはないが五十年と言ふを取柄にして、藥喰にちよツぴり遣りなされ。「れ前の信切はしんぞ忘れませぬ。「それも此口が可愛いからぢや、はゝゝ、いやも何處の

御屋敷へ上ッても、太夫とちかづきぢやと言ふ事話しすると、此我までがちやほやもてなされ、あの源兵衛や、今度來る時には彼の樣の鼻紙を地紙にして扇子折ッて呉れや、なぞと姫君の言はしやる事、はゝゝゝ、なんの虚言かい、大眞實。先づそれはそれとした處で、此間賴むでおいた直筆の發句、な、それ、是非今日ハ書いて貰ひませう、それを持ッて行かねば御出入のかなはぬ御屋敷があるのぢや。助けると思ふてちやッと一筆、ほんの走書で結構ぢや。

それは安い御用、私の樣な惡筆を其樣に御所望となら、喜んで書きまするが、其、書きは仕まするがな。

「おう書いて被下るか。

「此方の賴みも一個ある、それ聽いて被下れぬか。

「何んなりとも太夫の賴みなら木海月の骨でも搜せとなら詮議仕樣。

「其樣な道化ではない、命にかゝはる事ぢやわな。

「命。命。太夫の命にかゝはる事なら、扇賣源兵衛折紙ノ骨差が命にかへても、へ、へ、見ン事引受けまいた。

「はてさう言はれては差かしい。

「差かしいとは他人への言草、さア言はしやれ、耳の垢は今朝取ッた。

「如何もお前ぢやとて言ひにくひ、こりや一層書かうわいの。

「書くならこれへ、

ト扇面を開きて、差出す氣轉商買にぬかりなし。

宮城野の萩筆口に割りて、行成流にさら〳〵と書きながし。

「これ見て被下れ、

ト投出して、抱布團に顏を伏せれば、髮は亂れて伽羅香し。雪より白き首筋に、耳朶すこしく曙の色。

（六）　賴み賴まれ

「どれ〳〵拝見、これは又いつもながらの御能筆。戀風は此扇から、ト扇面取上げて源兵衛打眺め、二三遍首を捻りしが、膝をぽんとたゝきて。「讀めました、これ太夫。こんな事なら御家物の當狂言、何故早ふに打明けいで櫻の炭竈むしやきに焦しなされた、未だ源兵衛の眞實が見えぬからと思へば、眞底殘念でなりませぬ――八重垣や流れぬ水に落椿――無情の水に散り込むだ花は不憫、八重垣の御池に浮ばれぬ此方さん、さしづめ神役は此源兵衛、して〳〵敵手は何處の誰樣。「それが知れて居れば此樣な苦勞は御座りませぬ。「よしんば知れずでも大事ない、其所が扇賣の源兵衛ぢや。廣い都を金の草鞋穿いて搜すまでもない、居ながらにして何處の娘は如何、彼處の娘は彼樣、親御の身分から、出生の年月、飼ふて御座る猫の首玉は何日拵へてはめたと言ふ事、彼の帶は母親のゆずり物で、心だけは上總を張込まれた事、毎日の濃化粧、あれは鼻の下の痣をかくさるゝ爲めと言ふ事、四明ケ嶽から湖水の舟を數へる樣にチヤンと心得て居りまするぢや。先づ人相書を口觸に仕なされ。「これぞと言ふてきはだツた所もないが、色は白ふて雪にしては暖か氣な肌合、髪は定めて黑かろう濃いかろう、被衣にかくれて見ゑなんだが、其他目元口元鼻筋から齒なみと言ひ、姿風俗又とない美人。「はてそれでは如何も手がゝりが見ゑぬ、何しろ女にあきた此方さんが、病伏すまでの執心とはきよとい〳〵。美少の開山當時天下に名の高い袖岡半之亟が戀するに、なびかぬ女がある物か。安心して氣を強ふ持ちなされ。「處が源兵衛殿、世の中に不思議は其娘が、大の〳〵の芝居嫌ひで、大の〳〵の役者嫌ひ。「それは

まア如何した事か、なるほど今時の娘に芝居嫌ひの役者嫌ひとは、緒絶の橋から突落した仕方。「私は其芝居嫌ひ役者嫌ひと言ふ處に惚れました。「それで思當る事は矢張私の出入先きに、小羽根樣と言ふ御浪人がありますぢや。御浪々はなされても御家ハ御有福、御なぐさみに謠曲の師南なされ、扇子は毎度の御入用、其所の娘御が二三日前に、この世には御座らぬ母上の御墓參、乳母と黑谷へ御出ましの歸途、一寸々々と無理ずゝめの乳母に載せられ、いや〳〵ながら見て居た中に外で敵討と言ふ大騷ぎ。其時舞臺下で役者に手を取られたが。あのやうに氣味の惡かッた事はないと、さも口惜し氣に此源兵衛への内所話。さては其役者は此方か。「私ぢやわいの。「それならば彼の娘が役者を嫌ふのも道理、妾の好きな殿御は何處までもハキとして、力のあッて強い御方がのぞみぢやと、父樣にきこえぬ處で乳母との御物語、チラと聽いた事が御座りまするぢや。「あゝそれでは如何しても此戀、かなひませぬか、ト急に枝垂の柳風なきに惱むを。「はてさう力を落す物でもない、源兵衛が智謀を地紙箱の中にめぐらして、隨分要につなぎとめる手段、ないでもなし、あるでもなし、但しこれをかなえるには大分の骨折、おッと錢金で禮は取らぬ。これは扇面に一筆頼みました此方からの御禮、其御禮の御禮がなされたくば、又一ッ此方からの頼み、なんと聽いては被下ぬか。

（七）　男が男への戀

如何せ人間は浮いた物と、無闇に煽立てる扇賣の源兵衛。袖岡半之亟の病の源を聽きて、それならバ心

勞御無用。但しこれに頼まれて片肌ぬぐかはりには、此方からの依頼も聴いて被下と、根を動かして葉を落す言分。半之亟に何の否やがあるべきぞ。「此方の戀さへ取持ちて被下れば、お前さまのお願ひ何事でもきゝませう。「其御言葉ありがたい、實はこの源兵衛も人から頼まれた戀の取持。これから先きへかなえて貰ひませう。「そりや私へ戀する人が……。「あるとも〳〵世間ざらの其中にも、分きて執心の御方が御座りまする。丁度此方さんが小羽根の御娘を慕ふてのやうに。「それは又誰様が……。「言ふまい〳〵但し入念の願事、男子が男子への戀ぢやわさ。

* * * * * * * * * * * *

佛光寺通り立花町に源兵衛の扇店あり。掛椽にどッかりと腰を据へて、大脇差の門木ざし、看板の張箱を突倒す町奴二人。髪は手の内の一束に結び、髯は鼻の下に釣上げて剃らせ、裾短の着物は毛臑見せる爲めか。喧嘩面恐しく、不斷往來を眼張る處強氣なり。これに話入りて乘光の源兵衛かひそ〳〵聲。

「何んと今も言ふた通り、其娘が、凛々しふて力の強ひ男が好きで、兎ても歌舞伎若衆の優方では行かぬと言ふ處から、急仕立の强力、若さに似合はぬ手練を見せ、それから段々思ひつかせると言ふ工風。如何だ我ながら天晴の名案、恐ろしいか〳〵。「何かと思ッたらそれだけの事か、何を馬鹿な。

「宇治で茶の木人形造るやうに、そう人間が自由になろうかい、吹けば飛ぶ樣な色若衆を、强力の手きはに仕立てると言ふのは、丁度我達の鬼面に女形させると同じ事ッちや、はゝゝゝ。「處を仕て見

せるが源兵衛の働き、但しこれには金主があツて金子で自由にするツモリぢや。　「其金主とは誰ぢやい。　「それきかして呉れぬかい。　「身分も名前も言はれぬが、茲に又其若衆に執心な御人があツて、此御方から引出す算段、もツとも此御人には若衆が娘への戀ひ知らしてない、結局源兵衛が獨飮込、胸の中の金平人形、つかひ手が中々の骨折ぢや。其所で話がもとへかへり、翌日其小羽根の娘が乳母を連れて、隣家の人達と嵐山へ櫻見物、其時病中ながらかうなれば構はぬ、押して出る太夫に出來るだけの美をつくさせ、熊谷の中笠を冠らせ、衣裳は好みの伊達拵へ。小袖幕の陰へかくしておいて、別に入用は酒に醉ふた狼藉人二人。これが娘の手を取りて、お定まりの惡戯から、段々附上りて山奥へ連れて行かうと、たぞかしの文句よろしくある處へ、それ、編笠の若衆本尊、ずツと出て來て其女を助ける、狼藉人は怒ツて若衆に喰ツてかゝる、二三合立廻はりて、さん〴〵に投げられる。　「おい〳〵誰が投げられるのぢや。　「誰に誰がさん〴〵の目に逢ふのぢや。　「飮込の惡い其若衆に狼藉者がさ。　「それでは相對づくで負けるのか。　「前から二人には打合せて賴むでおいて、いざと言ふ時には見ン事轉がツて貰はねばならぬ。　「さて〳〵余程間抜な役ぢや。　「定めし見物が笑ふであろうの。　「素より二人が笑はれて、若衆が賞められる處が眞價ぢや。　「シテ其馬鹿を見る狼藉者には。　「誰を賴むツモリぢやよ。　「他に望手がない故、さしづめお前方二人を賴むため、扨てこそ呼留めてこれまでの物語、トぬからぬ顏の源兵衛口輕、二人は顏色をかへて腹立し。　「たきやアがれ、ト罵るを

源兵衛此所ぞと二人を制し。「いや〳〵若衆に投げられると思へば腹も立たうが、金子で轉ぶと思へば好いではないか、ハテ兎角世の中はこれが通り物。

（八）　弱い達衆

それ花につらきは夕嵐、女につらきは酒呑の狼籍ぞかし。玆に小羽根の娘お妙は父が仕込みに風流の心得、三十一文字若しくは十七文字や歌俳諧、花鳥風月に心を寄する處より、隣家の娘達連立ちて例のしやべり乳母のお町が宰領。大堰川の吐月橋、麓寺から分入りて、あれ〳〵落花盃中に花筏、小袖幕の模様が浮いて飛びますと、他愛もない事に興を添へ、果ては萠出づる青芝の上に毛氈敷詰、塗重さゝやかにして本格は文臺に敷紙短尺。散りまがふ嵐の山の櫻花何々。又たぐひ嵐の山の櫻花何々。問ふ人も今は嵐の山櫻何々。入日の奥の嵐山何々。當代の紫女、和泉、それ〳〵に腰を折る時しも。「これや此方へまかりつン出たは、湖水の月、芳野の櫻、富士の雪の三景を粉にして丸薬にして鵜呑にした大雅人、ありやうは月に雲助、花に小櫻坊、雪に達磨の丸六と言ふとほうとてつもないあばれ者。「其次ぎにひかへたは、これも色事を鶺鴒の仕方大、慾れ食氣の布袋腹、千倉の鮓桶七ッ明けて、虎屋の二匁棹の羊羹を尺八喰ひに五本して、志貴の毘沙門天へ晝までに參詣して戻ッたと言ふ、兩頭蛇の長九郎。「二人揃ッて來たからは、何奴も此奴も片ッ端から、腕ッ骨の續くかぎり。「腰ッ骨の弱らぬかぎり。「仕て仕て仕て酷い目に仕て呉れるぞ、ト呼はりながら亂入するは、當時都に毛虫がられる

町奴、微塵組の二人。
それや狼籍と總立に騒ぐを、其實御本尊は只一人、源兵衛が頼みしは此娘と、お妙の手を兩方より取り、彼方へ引けば此方より、引きつ引かれつ、ゆら〳〵由良の、湊出て行く棚なし小舟。お妙はいたく驚きて、只われ〳〵と呼ぶ子鳥、猿ならば猿、鵺ならば鵺、後の話は此方知らず。今に若衆が出て我達を、投げられるまでが大事な役、と言いねど二人がうなづきあひ、今の内に娘の手の、雪の樣に白い處、羽二重の如く柔かな處、觸ッて居るのが此方の役徳、ならば頰ずりの一ッも仕て見たしと、あられもなく縺れたる處へ。熊谷の中笠眼深に冠り、飛格子の振袖に二重菱の柿地の帶引廻し、割胡桃のはなち目貫、小脇指、一對の鞘に光あり。昔印籠になめし革の巾着、駒引の根付を下げたる若衆、小袖幕の陰よりあらはれて、二人の中に割ッて入れば、そりや來たこれが半之亟と、未だ手も見せぬに頭轉動、芳野の岩飛を地の上に見せて、二人供に見事倒れぬ。「痛いは〳〵見れば美しい若衆の癖に、力のある事不思議千萬。「好くも我達を投げたな〳〵和主は強い奴ぢや。「我が女なら直ぐに惚れるは、ト圖に乘りて二人又投げられむと、若衆に掛かる其途炭、笠の中の顏を覗きて。「や、や、袖岡の太夫ではなうて。「和主は見知らぬ他の若衆。「ねッ、ろうと知ッたらむざ〳〵と。「汝等如きヱ投げられるではなかッた。「いめねましいこンだなア、ト今度は眞劔に打ッてかゝるを、又投げられる其拍子、笠を千切ッて若衆の顏、これは遠山錄彌なり。

（九）　虚僞の氣絶

歌舞伎若衆の袖岡半之亟れ、扇賣源兵衛が周旋にて、今日ぞ思ひを晴衣裳、肌小袖の白羽二重に中は遠山鹿子艶けく、上は鼠繻子の紋付、白羅紗の羽織、小鳥づくしの唐衣の裏を付け、八所染の胸紐解きて白糸の長柄。都富士の大編笠冠りて、我が衣手の社の方より、彼の樣達の幕の內、いざ打合せの町奴を、見事に投げて吳れむずと、心は空に足は地を、月に舟借る時鳥、朽木はなれて行くに似たり。向ふから來る一人は、算くづしの大縞に龍紋の袷羽織、七ッ梧の紋を付け、中脇指に按角の銀鍔、扇子を背襟に差して微吟の古今節。髪切仕たる草履取に紫竹の細杖持たせ、何か取卷の幇間を尋ね顏して、人々の行違ふを調べる途炭、どッたり半之亟と鉢合せして。「あいたッ。「不重寶はれ互ひ樣、此方からもあやまりまする、「つひ心急ぎまして、すまぬ不重寶致しました、何卒御ゆるし被下りませ。ト尚傍に寄り挨拶の砌、顏見合せて。「れ前は……。「あなたれ……。「かはッた處で旦那樣……。「イヤ好い所で逢ひました、これ太夫、つれないぞや半之亟、あの扇賣の源兵衛を以て幾度となく願ひの眞心、通ふ千鳥の千束にあまる文にゆかりの雁金屋辨三。男が男の其方に惚れて、惚て惚て惚ぬいて……いや人目も草も構ふ物か、言ふだけは言はねばならぬ……ケチな言分だが山吹も隨分、其方の爲めにつかッて、我裏枯も見て居るぞや。「これは又如何した事か、私には少しも分らぬ御話、それは定めて源兵衛が中溜仕たので御座りませう、それは又ゆるりと後刻、

只今少々急ぎまする用事のあれば……。「ハテ花見に急ぐ無風流、其樣な逃口上は聽かぬ〳〵是非とも今日は返事きかねば、いつかな此袖ははなさぬ〳〵。「あれ〳〵人立が致しまする、此所御はなしなされませ。「はなさぬ〳〵いつまでも言出すからには、これ、太夫……。「さ、さ、それは全く私の存じませぬ事、いづれ源兵衛からきゝまして、其後御返事致しませう、今日は先きを急ぎますれば……。「いや、それは虚言ぢや、源兵衛からの話には枕も上らぬ大病で、舞臺へも出ず、座敷へも出ず、高枕に厚布團、紫の鉢卷で寐て居たと言ふ者が、此樣にのこ〳〵歩いて居るのぢやもの、野郎の手くだか知らないが、此上我をだます氣か……。「さア全く其通り、寐ては居ましたが、其病氣を治したさに、無理押しして今日此有樣。「いや〳〵それも虚言ぢや、病氣揚句ならば尚の事、我と一所にちやッと來やれ、あれ〳〵向ふの花見茶屋、彼の奥へ行き、ちよ、ちよ、ちよッと……。ト金子の威光に力づく、無理に半之亟を引立てたり。

斯くては大事な魂膽が、水の泡となる事なり。あら、惡い處で、惡き人に出逢ひし事と、半之亟、むら〳〵胸は張裂ける如く、折角彼の娘の前にて、强がり見せんと爲す矢先、此妨害は緣遠き前兆なるかと悲しめば、氣の張弓も俄に緩み、病に弱りし身躰とて、雁金大盡に手を取られたる儘、ウンとばかりに氣絶なしたり。

（十）若衆違ひ

微盡組の町奴、達磨の丸六と兩頭蛇の長九郎とを見事に投げたる遠山錄彌、倘も二人が手向ふを、好さ加減にあしらひて、果ては散々に投付けたるに、これは溜らぬ柳に蹴毬、此頃あまり流行らぬ模樣と、頭抱へてへらず口、おぼえて居ろト言捨て、花見の人の群集にまぎれ、いづこともなく逃去りける。

乳母のお町は進出で。「これは〳〵何方樣かは存じませねど、女ばかりの花見連、とんだ狼籍に出逢ひまして、既に危い其處を、好くぞお助け被下りました、難有ふ存じまする。「あいや、其禮には及びませぬ、人の心も春になれば花と共に開くとか申せは、つひ酒故の彼等が亂暴、世は太平のこれも數か。何に致せ又もや彼等の押寄せて參らぬ內、御宅はいづれか存ぜねど、御歸りあツては如何で御座る。

「はい、難有ふ御座りまする、御言葉に從ひまして、左樣致すで御座りませう、ト幾度か辭儀なして、娘供にも目配すれば、皆一樣に禮ほどこし。「お影で難儀をのがれまして……ト言ふ聲たしかに聽取れず、虫がつぶやく如くなり。

「御緣もあらば又重ねて、さらばこれにて御免蒙りませう、ト遠山は一禮なし、行かむと爲せる向ふには、彼の長九郎丸六の、兩人を眞先きに立て、五六人の醉漢ずらりと並び、歸るを通さじ、行くを遣らじと、仁王門の仁王尊、運慶の作のこ〳〵と、步き出でたる如くなり。

「扨は待伏せするとおぼえたり、これでは御身樣達が歸路の程きづかはし、其あたりまで御見送り致しませう、折角お助け申せしに、此儘捨て別れむは、佛造ツて魂を、入れざる譬もある事なれば……。

「左様に願はれますれば、如何ばかり仕合か存じられませぬ、何卒左様に御頼み申しまする、宅ハ今出川通、圓岳寺の辻に御座りまして、主人は小羽根金太左衛門、これなるハ其娘御、お妙様と申しまする。「それは幸ひ、拙者はツヒ御近所の阿彌陀寺横町に住居致す遠山錄彌と申す者、イザ御同道致しませう、ト先きに立ちゆく錄彌の跡より、あたりそこ／＼にかたづけて、從ふ女の五六人、待構へたる町奴は、女ばかりと思ひの他、又彼の若衆のあるよりして、手出しもならぞ、胸をさすり、隙もあらばと同じ様に、川岸までは送り狼。

遠山錄彌は、娘達をそれ／＼に家へ送り、最後に小羽根の娘と乳母を、門口まで送り付け、これにて辭し去らむとするを、斯くと聽きて立出る、主人の金太左衛門。「先づ／＼此方へ御通りなされ、いろ／＼御禮を申上げねは相成らぬ、ト言ひながら錄彌の顔をつく／＼見て。「貴殿はもしや和州郡山の藩中にて、遠山七左衛門殿の御子息では御座らぬか、ト問ひかけたり。

（十二）　眞實の氣絶

世の中は薄情で不德で馬鹿で輕卒で茶々無茶苦茶な人間で固めた物と罵る人あり、さうかも知れず。今命までも進せるとて戀慕の情を運びたる雁金大盡は袖岡半之亟の氣絶するを見て、こりや溜らぬと雲霞、花か雪かは白雲の見物人は黒雲の、中にまぎれて一目散小者引連れ逃出しぬ。これ又裏には裏の路あり、氣絶と見せたは半之亟の計略、大盡の前を一時も早く逃れて、彼の打合せの場へ行きたさが故なり。さ

りとて見物の手前もあり、舞臺で泣いて樂屋で笑ふ様には行かぬ人前。自然に正氣の付きたる如く、眼を半開きて眉を顰め、紅唇を白歯に嚙〆め、白魚の如き手して胸元を押へながら、あいた〳〵〳〵ト松ケ枝の雪、朝日に解けるさゞめきの如く、口の内に曲を遣る時、あはて〻、飛んで來る一人の男、遅かりし扇貴の源兵衛。「やア太夫、遅かッた〳〵。「おう源兵衛殿か、遅いとはお前の事、遅かッた〳〵遅かッたわいの。「遅いとは何故遅い、私は先きで待兼山、扨て時鳥の血を吐く思ひ、トンダ迷惑を仕ましたぞや、それが又何故遅い。「其わけ聴いて被下、今約束の場所の方へいそ〳〵と行く其途中、雁金大盡に逢ひましたわいな。「いや、これは扨て情けない處で、雁金大盡の豕助に逢ひなされましたなア。「常の贔負と好き加減に挨拶を仕て、切抜けやうとすると、源兵衛に頼むでこれ〳〵、これ〳〵の返事は如何して呉れる、早くきかして呉れえとの事、扨てはいつぞや噂のあッたは、此雁金屋の事かと思ふたなれど、此所で其顔仕ては面倒と、空とぼけて居た處……お前はなア〳〵、これ源兵衛殿、お前は能くも中溜に伽羅を抓むで猫ばゝ仕なされたなア……。「其儀は平にあやまるわやまるトンだ處で尻がバレた。「それはそれで好いとして、いよ〳〵それから私を連れ、花見茶屋へ行かうと言ふ故、それこそ此方の一大事と、其所が氣轉の空病、日頃の癪の手練を見せると、案の如く吃驚して、其處此所に逃げたわいの。「それで私に來やうの遅かッたのも分りましたが、お前さんの來やうの遅いばかりで、いやも大間違々々々。「大間違とは心がゝり、さ、さ、早く聴かして被下れ

い。「其大間違の起因と言ッぱ、氣の早い達磨と兩頭蛇、私が一寸花の山に無用の物、小影で便じて居る内に、あのお娘にじやれかけて、いろ〳〵騒ぐ眞最中、あらはれ出でたる編笠扮裝、これも若衆の伊達づくり、それをお前と間違へて、もろい奴よ、投げられました。「え、えッ、それでは人達とも氣が付かず、餘所の若衆に投げられましたか。「餘所の若衆に投げられて、二人はすご〳〵逃出す、娘は餘所の若衆に連れられ、早や家へさし歸ッたと言ふ、誠に南部の鮭の鼻、喰違ひでおそれべ〳〵、「や、やッ、もう娘は歸りましたか、や、やッ……ト。驚いて今度は手管でもなく虚僞でもなく、眞實誠正銘の氣絶。

源兵衛面喰ひて稻荷參りが油揚を落したる如く、うろ〳〵三遍廻ッてれ辭儀をして、九遍廻ッて目を眩して、果ては自分も倒れさうになりて、やッと半之亟を抱き起し、背中をドシ〳〵なぐる處へ。「それには此氣付藥を上げなされ、御主人からの御志、ありがたう頂戴しや、い、、トれすゑらしき女中が信切、錦襴中の妙藥は何んざぶろ、見れば髪引下げて匕髷結を掛け、火燈額に置墨の濃いさ、無垢は名のみの黄ばみたる肌着に、增花染の模様草々、扠てまんまるの丸袖に、紺地の今織後帶、そが上を小取廻しに紫の抱帶して、内懐に守刀、拔いて覺悟の聲よりも、第一番に逃げる方なり。これが御主人とは何處の御殿女中か、塗籠の脇に被衣落ち氣の御風情。綸子の白無垢、紫地の縫箔小袖。襠裲の模様は金銀千糸萬縷の心まかせ、一針一兩とは虚言でもあるまじ。綾文金砂の上〆、、、、はこせこの銀ぐさり。蘭

奢待の香り此所までつたはり、氣の弱き蝶は羽根の力失ふべし。蘆手の畫扇塗骨の艶好きを半開にして、心あり氣に此方を見る目付き、浮世何某の妙筆に好める圖なり。籠脇の六尺供廻りの人數こそ馬鹿を見れ。かゝる時にも兩手をつきて、鳥居內の唐獅子と言ふ見得、御苦勞千萬、芝居で仕ても好き役者ハ勤めじ。

藥のきゝめは爭はれぬ物、息吹きかへしたる半之亟、これで源兵衞も安心袋。其女中に難有しの百遍も言ひつゞけ。「さア〳〵氣がついたらば永居は恐れ、今日は大方戌の日ぢや〳〵。家へ歸ツて又一談合、今日の失策を取りかへさにや、八幡、源兵衞の（ト塵を拂ふて）男が立たぬ。「御主人へはくれ〴〵も、御禮をれはせ被下りませ、　ト半之亟源兵衞の二人は、すご〴〵と立去るを、見送る被衣の御殿女中、例の通り見惚れて扇を……。

（十　二）

修業か見物か

「如何にも和州郡山の家中で此方の身上知顏に金太左衞門が聲掛けしにぞ、遠山錄彌は少しく驚き。「遠山七左衞門の息子に御座ります、それを如何して貴翁には……。「扨ては拙者の目鏡に違はず、七左殿の御子息か、遠山と名乘られしよりフト胸に浮びまいてつく〴〵足下の御樣子を見受けまするに、如何も御親父に其身其儘、其所で以て御尋ね申した處、果して此方の存じ通り、イヤ珍らしい事も御座る物かな。まづ〳〵此方へ御上りなされ、娘が不意の危難を御救ひ被下れたる御人が、舊友の御子息で

御座らうとは、誠に存じよらぬ儀で……さ、さ、むさくろしくは御座れども、お構なくば御通りなされ、
ト錄彌を執て一間に通しぬ。

小羽根金太左衛門は、遠山錄彌に向ひて。「何が扨て拙者只今こそ浪人致せ、舊は矢張貴殿と同家中、御親父七左殿とは相役で御座ッたが、少しく存ずる仔細あッて、君に永の御暇を願ひ、おゆるしを得て本國を立去り、此都にて風月を友とし、世を氣樂に送りまするぢや。妻ハ娘妙が幼少の砌相果てまして、老の樂しみは娘の成人、好き婿取りたき只一心で御座る。四五年前より去る人の勸めに委せ、近所の子弟に謡を指南致し居りまするが、何が扨て自分さへおぼつかなきに、人の師たる事我身ながら片腹痛い儀で御座る。シテ又足下は何御用で此都へハお出なされた、御修業の爲めか、但し御見物の爲めか、御修業とならばよも歌俳諧なぞでは御座るまい、古實か、但し劍道か、三十三間堂に通し矢の御催でも御坐るか。又御見物あらば金閣寺、銀閣寺、清水の觀世音、或は加茂の社、嵯峨野の昔尋ねて嵐山は今日がはじめてか……。「あいや其樣な儀では御座りませぬ、チト尋ねる人が御座りまして……。「それは又誰を。「敵討に國を出でましたる拙者、尋ねるは其敵に御座りまする。「いや、これハ〳〵敵討に出られたとなシテ誰の敵を、御親父七左殿は御達者であろうに……。「義兄石橋德十郎が佐保川堤に於て、水島傳九郎と申す者に撃たれましたる、其仇を報せんとて……。「扨て〳〵それは感心なる儀で御座るの、義兄の仇討とは一入やさしき御心掛け、小羽根金太左衛門、ホト〳〵感入致いた、

ト扇で膝をたゝき観世流の聲で賞めける。

* * * * * * * * * * * * * * * *

程遠からぬ阿彌陀寺横町とて、これより遠山錄彌は毎日の樣に小羽根の家へ行きて、金太左衛門と何彼物語しける程に、其往來の繁きをいつかぎつけたりけむ、彼の扇賣の源兵衛、それと知りて小人が小智に惡く氣を廻はし、扨てハ花見の騷ぎが緣となり、此奴娘と出來たなと早呑込。此由袖岡半之亟に知らせて、又一方ならぬ騷動を生じ。加て初音風呂の小染が角を出すと言ふ面白い話は追々。

（十　三）　敵の手係　實の行衛

初音風呂の二階にて、今日しも何の氣もなく登來る遠山錄彌の胸倉取りて、小染が嫉妬の眼尻鋭く。

「貴郎はなア〱如何した物で御座んする……。　「これは仕たり、其方は氣でも狂ふたのか、ゑたいの分らぬ此騷ぎ、私にはちッとも分らぬわね。　「何んの御存じない事がありまず物か、空とぼけなされても、妾はちやんと知ッて居ります、此頃きつい御出がないと實お案じ申して居りましたに、其樣な事とはつひ知らず、神や佛に願掛けて、何卒息災延命と祈ッた甲斐も御座りませぬ。　「ハテ何が何やら少しも分らぬ、何か氣に入らぬ事でも私が言ふたか。　「あれ〱其口つきの巧みさにつひ乘せられたは妾が阿呆、それはもう貴郎と妾は、身分からして違ひます故、今更お捨てなさるのを決して御無理とハ申しませぬぞ……。　「こりやてッきり發狂ぢや……。　「はい、如何せ物狂で御座います、如何

せ左様で御座います、嗚呼氣も狂ひませうから、阿呆にも成りませうわいな。「物ハ言ふて見よだ、仔細を語らねば分らぬわえ、　ト錄彌大いに迷惑なすを、小染は益々突入りて。「それではチョコチョコ申しませう、彼の今出川通り圓岳寺の辻……彼の邊は好い所で御座りまするなア。「何を申すかと思へば、そんな事か、如何にも閑靜で好い處ぢや。「それに彼所の謠曲の先生、あれは大層御上手とやら。「如何にも當時ハ名を知られて小羽根金太左衛門と申せば、大方知らぬ者のない程じや。「彼の御娘御は……大層御美しいさうで御座います。「如何にも當世の美人で、如何にも高尙な風がある……。「それ、それ、それ、それ御覽なされませ……。「何がそれぢや。「えい、もう、妾は知りませぬわいなア、　ト疊の上に泣伏すに、遠山錄彌は漸く氣がつき。「あゝ、其事か、それを彼此と申すのか、それは大きな邪推と言ふ物、何んの彼の娘御と其樣な事がある物ぞ。「いえ〱妾が何も知らぬ事とお思ひで御座ンせうが、妾は先日垣越にチャンと見て居りました。「見たとて何も致しはせぬに……それは彼の小羽根の家へは、嵐山の花見が緣とあッて、度々は參るなれど、決して娘御に逢ふためではない、彼の金太左衛門殿は同家中、父上の御朋輩であッた故……。「いえ〱それは表向き……。「はてまア好く後まで、聽きやれ……扨て彼の小羽根の家へは謠曲の弟子供が大勢入込む故、もしや敵の手掛りでもありはすまいかと、それを聽きに通ふのぢや。「いえ〱その又裏にも裏が必ずあるので御座ンせう、　ト思込みては女氣の、更に心の解けざる處へ。「大分火の手

が強い樣な、ま、ま、仲を直して笑ッて被下、拙者が仲裁仕ろう、ト屛風の影よりあらはるゝは、これぞ瀨山剛助なり。

「これは〳〵瀨山氏、とんだ處を御覽に入れて面目次第も御座りませぬ。「わいやそれは格別。今日拙者が參ッたのは、余の儀でも御座らぬ、敵の手がかりが御座ッたぞ。「え、えッ敵の手がゝりが御座ッたとな。「遠山氏御喜びなされ。拙者も亦日頃尋ぬる寶の行方も朧ながら、漸くに分りました。

（十四）　おもわくの茶室

烏丸通りのひんがし、六角堂の片ほとりに、千家の茶庵、園蜩と言ふ女宗匠。表は眞面目のぶく〳〵と見せれど、內幕は大變、かゝる世やと眼には淚、口にはいつも唾ぞかし。供の者を外に待せて、此所へ乘物鈎らせて入來るは、彼の花見の時に半之亟へ、藥を與へたる御殿女中。鷹揚に內へ這入れば、女主人出迎へて。「これは〳〵初瀨樣、好くぞおいでなされました、今日は恰好釜日。よろしい處で御座りまする。「さアそれと存じた故、錦天神樣へ御代參の歸るさ、上へも其事を願ふて來ましたわいの。「御殿へは度々うかゞひまする妾、男猫一匹居りませぬ女世帯の蜩が家、れ表へきこゑましても一向に御差支御座りませぬ、ト供の者に聽ゑよがしの高話。これより茶室の四疊半、御掛地が結搆の、御生花がよろしいの、いろ〳〵な御世辭を言ひて、ぶく〳〵を濟ませ。これからが秘傳の口授と、好くある密談の方で耳に口、口に耳、扇子颯と開きて。「首尾

は……。「れ喜びなされ上々吉、太夫は呼寄せて御座りまする。「それはまア嬉しい事、何んにも言はぬ、これ、この通り。「これは仕たり初瀬樣、日頃御贔負にありますする貴女の事、此位の忠義ハ未だ〳〵御初心、もッと御けいこなされませぬと奧ゆるしは致しませぬ、さア今一ぷく……ト言ひながら床の間の掛物取はづせば、其所に切穴あり、人の出這入りの出來る程。其所へ羞かしがる初瀬を無躰に押遣り、これより中へ入れやうとする――此時中より○○○○○○○○○○○○○○○○○
◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

金子で戀する半之亟、自分の戀は儘ならで、人かられのれへの戀慕多く、都名所の數多けれど、中に別して深間客、男子では雁金屋の辨三。女子でハ御殿女中の初瀬。茶の湯の師匠の仕掛座敷、人目を忍ぶ魂膽に、蜻蛉が水吸ふ急がしい首尾して、巻上げる黃金は源兵衞に分配。彼の小羽根の娘ハ妙の一件、おがむ〳〵と賴む中、戀の間者の達磨が注進、源兵衞もそれと感づき、お妙と錄彌と出來た事と早合點して、それならば其計畧、これ〳〵〳〵の手段にてれ妙を引出す智謀あり。何かの打合ハ又御耳拜借。

（十　五）　馴合の喧嘩

初音風呂にては盆と正月が一所に來りたる如く、遠山錄彌には敵の手がゝりありと言ひ、瀬山剛助には寶の行方大畧知れたりと言ふ。かゝる目出度き事は又とあるまじ、嫉妬の上の痴話ハ忘れて小染の喜び

も二人に劣らず。扨て寶は何方にある、敵は那邊にあるやと尋ぬるに、瀬山剛助が詮議の爲め、浪々なして、播州は明石の城下を立退きしより、千辛萬苦重ねたる末、漸く此頃聽出す御家の重寶、御祖先が戰場の功名に依ッて權現樣より拜領に成りたる黄金の鼠は（賴朝が西行に與へたる黄金の猫と同時代の作なり）去る奥女中の手に渡り居るとの事。又石橋德十郎を討ちて逐電したる水島傳九郎、それか、あらぬか、左の額に刀疵ある侍、志賀は關寺の邊にて見たりと言者あり。

此由聽いて遠山錄彌の喜び、仰いでは比叡山の佛を禮し、伏しては加茂川の靈を拜しぬ。これ優曇華の花咲く時、盲龜の浮木を得たる時か、うれしの森の下草は、今日萠出る最先きに、いざや酒を酌まうよ。

これより剛助と錄彌は、小染の酌にて酒飲はじめしが、翌日より互ひに袂を分ち、實非を正しに分るゝ身の、旅の垢に染まるべければ、今宵肌を淸めなむと、二階を下りて風呂の場、柘榴口より入りたるが、此所に入込の客の中に、町奴の兩頭蛇長九郎、達磨の九六、其他二三人の荒男が浴衣の儘、何か仲間内に喧嘩をはじめて、どたばた〳〵の大爭、源五郎鮒を臺所に放生會仕たる如く、大亂脈やらかす處へ運惡く出合ひたる瀬山剛助、添杖ならぬ水桶が飛んで來て、危く剛助の足元に落ちしかば。「何奴ぞ、騷々しい、ト罵る聲を待構へて、今までの敵同士、手の裏かへした一味の連合、剛助一人を取圍むで。「我達の出入りを騷々しいと言ひ居ッたは、此方か。「まかり間違へば首と胴との一六勝負、喧嘩

買申し候かしく揃ひの命不知。「湯屋のどさくさは毎日毎夜、それを騒々しいとは何んのたわこと。「相手は和主だ、さア來い、　ト打ッてかゝる。　「扨ては所望か、此剛助が拳の雨。　「何を、旱の天竺浪人、いけ洒蛙々々とした其の面へ。　「どりや水でも掛けて呉れう、　ト五人一所に打ッてかゝる、他の入湯客大いに驚き、昔の富士川の夜討はこんな物か。いやさ近くば大坂の夏陣、随分裸で功名もあッたげなと、流板ですべッて轉んで鼻血を出して、あいたちゝ、間違へて湯の中へ逃込み、いつまでも出る事が出來ず、上氣して湯陀佛に成る奴あり。水船に片足突込みて、火傷した、秋葉の御守呉れと言ふあり。桶の中へ首を入れて、此所は好い隱所と言ふあり。人の着物を我着て、己の帯を人がする、下駄に雪駄の、ちやらぽこ〳〵〳〵。翌日下帯の數二十七本。

録彌も此騒ぎに驚きて、浴衣の儘駈出し。「御加勢に遠山録彌！

（十六）　魂膽衣服にあり

これ皆曰附きの喧嘩、扇賣の源兵衛が采配取りて、孔明得意の虚實手段。とは知らずして剛助に録彌、一生懸命に荒男を投飛し、散々の目に遭はしければ、これは溜らぬと逃げてゆく。

長追もせず其儘にして、口程に無い弱い奴、と瀬山に遠山は顔見合せ。「とんだ騒ぎだ又汁に成ッて「又一風呂入りなはさうか、それにしても今の中、二人は過ぎし嵐山花見の折、如何やら見た様な奴、たしか彼等が娘を捕へて亂暴致し居る處を、拙者が出て投倒した彼の町奴で御座ろう。シテ見ると先日

「如何様、それもさうか、何しろ久々で好い腕
の意恨を晴しに朋輩連れて參ッたのかも知れませぬ。
だめしを致いた、　ト これより二人は又湯に入りて再び出て二階に上り、浴衣を脱ぎて衣服をあらためむとするに、這は如何に遠山錄彌の羽織と着物、いづれへ行きしかあらずして、脇には見知らぬ若衆の着物置きてあり。扨ては隣室に居たる若衆の客が、今の喧嘩の雜混にて、薄暗き室なれば間違へて入り、着物を輕卒しく取替へて行きしならむか。それとも亦板の間を働く奴にてもありたるかと、小染を呼びて正しけれど、其實を知る事得ず。但し隣室の客と言ふは歌舞伎若衆の袖岡半之亟とて、當時都にて名高き野郎なれば、決して心ありて去る事は爲さゞるべし。全く喧嘩の混雜と夜燈の暗かりし故なるべし。今に心づきて參るならむと、少時の程待居たるに、中々取替へに來らざりけり、歸らざりけり。」

いつまで待ちて居らるべき、夜は更くるに、翌日は敵詮索の爲め、志賀の方へ出立すべきに、今宵の中是非とも、小羽根金太左衛門に訣別仕て來ねば、相成らぬ。儘よ、浴衣でも出られまい、其若衆の羽織衣裳、一寸借りて行きて來んと、小染に後から着せて貰ひ、遠山錄彌は袖岡半之亟の姿となりて、初音風呂をぞ立出でける。

抑も如何にして衣服のかはりたるやと言ふに、遠山錄彌が湯に入るを見定めて、わざと板の間で町奴に喧嘩をさせ、其混雜にまぎれ顏して、源兵衞と半之亟が魂膽、首尾好く取替へ終んぬ。抑も如何にして衣服を取替へたりやと言ふに、これぞ袖岡半之亟に遠山錄彌の姿をさせ、小羽根の娘を呼出して、これ

を引さらひ行かむ姦計、あな恐ろしや片輪車。

（十七）　人違ひの返討

月はあれども夜は更けて、人の往來も途絶へたる、三條小橋の東より、朧の中を來かゝる二人。一人は袖岡半之亟、一人は扇賣源兵衞なり。「何んと此源兵衞の計畧、うまい物で御座りませう。「いやも其方の御影でうま〳〵と濟付け、この樣な嬉しい事はありませぬ、此上は首尾好く彼の娘を……。「ハテ大丈夫金の脇指、扨て兩頭蛇に達摩の二人は先きへ廻ッて糺川原に待伏を仕て居る手順、只此方から彼の人を用ありに呼出せバ、それで役目は濟むと言ふ物、それから後は此方の腕次第……。「嗚ゝ何とあく氣がそは〳〵として成りませぬ、此間の敵を如何かして討ちたいものぢや。「尤もだ〳〵、

ト言ひつゝ過ぐる後より、不意に出でたる一人の乞食。「遠山錄彌！返討だぞ、　ト呼ばりながら竹杖に仕込む刀の只一閃！

血烟立つて倒れるを、見て吃驚源兵衞が、こりや溜らぬと一目散、雲を霞と逃げて行きけり。

乞食はこれに眼も呉れず、倒れて苦しむ半之亟の編笠越に面をバ、月の光にすかし見て。「苦しいか遠山錄彌、いやさ苦しかろう苦しかろう、和主も我の顏を見るのは初めてゞあろうが、我も和主の顏を好く見定めるは初めてだ。いつぞや三條の歌舞伎小屋の前にて、知らぬ浪人を我だと思ひ、敵呼はりを仕たとやら、其時我は祇園に居て、其話を聽いた故、實はびッくり致したわえ。それから後は枕を高く、

眠る事がならぬ故、次手に和主をも打殺し、世を太平に暮さうと、尾けつ狙ひつ致す内、漸く今宵初音風呂へ、和主が這入る後影、常の衣服にればゑがあるから、出て來る處を三條小橋、柳の影で待つて居たのだ、　ト惡口なせど初手の痛手に、早や弱りたる半之亟、我遠山にあらずとも、言解きかねて藻掻きける。

乞食は又セヽラ笑ひて。　「この水島傳九郎が劍道の意恨よりして、汝の義兄石橋を、眉間寺開帳の歸途、佐保川堤に待受て、殺した宵も十三夜、月に縁ある遠山の、霞と消ゑて成佛しろ。どりやこれからは廣々と、大手を振ッて往來が、自由自在に出來ると言ふ物。長い臺詞の聽問も、佛理を示めす三部經。これから後が引導の、彌陀の利劍で一思ひ、ずぶりとトヾメを刺してやろうよ。　トあはれや半之亟の喉笛突切り、血刀拭いて莞爾と笑み。　「人の來らぬ其内に、ぼつ／＼住家へ歸ろうか、　ト行かむと爲せる後より。　「水島傳九郎滅多に遣らぬ、まアまア待てッ、　ト呼はる者あり。

（十　八）　人違ひの密會

世は樣々の角兵衛獅子、覆轉りて逆樣に成る中に、半之亟は遠山の眞似して歩きたる爲めに殺され、錄彌は袖岡の衣裳着て小羽根の家へ急ぐ途中、六角堂の横を通る時しも、土塀の忍口より飛出す一人の女。これは太夫と心得て、空蟬の衣は彼の人の晴衣、寄生貝の他人とは露知らず、松に執念山藤のひしと縺れて。　「これ／＼太夫樣、其樣に知らぬ顏して御通りなさるは惡い戲事、但しあまりお出がなか

ッた故、蜩の家を御忘れなされたか、　　ト朧に笠の顏を見ず、無躰に塀內へ引入れむとす。錄彌は驚きて聲を掛け。「それは人違ひ、拙者は左樣な者では御座らぬ、　ト言へど中々に袖をはなさず。

「あれまア作り聲の上手さ、舞臺の上は兎も角も、此所で其樣にとぼけなさるな、彼の方樣も御待兼ね、今日は御宿下りの願ひを出して、御殿から一夜の御暇、奧の二階で最前から、如何程御苦勞なされてか知れませぬ、さア〳〵ちやッとお出でなされませ、　　トいよ〳〵強く引張られ、不意に錄彌の胸に浮びしは、御殿と言ふ一事、はて、これは、と思ふ內、何かなしに忍口へ搔入れられて、戶を締め錠をピンと下しぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

玆に御殿女中の初瀨は不義の快樂を取りたさに、表を好き加減に胡魔化して、茶の湯の宗匠園の奧二階に、半之亟の來るを待詫びたり。立廻はしたる屛風の中、わざと燈火を暗くして、枕弄びつゝ、ぢれ居る時しも、蜩の聲として。「さア〳〵御喜びなされませ、彼の樣がおいでに成りました、ちやッと御逢ひなされませ、　　ト突遣る男は何を羞ぢてか、家の中にても笠を取らず。これはきつい初心さうなと、二人して紐を解けば、這は抑も如何に姿こそ、まごふ方なき半之亟なれど、顏は得知らぬ若衆なるに、これはとばかり驚きて、腰をぬかして其所にばッたり。

「それ御覽なされ、最前より人違ひと口を酸くして申しても、さらにお聽きなされずして、これまで拙

者を御連れなされ、何んたる事で御座りまする、　ト屹として錄彌が言ふに、蜩は恐入りて。「こ
れは全く妾の麁相、どうぞ御免し被下りませ、此儀が世間へ知れましては……、　ト手を合して拜む
後に、彼の初瀨も震へながら。「御屋敷の面目にもかゝはります故、何卒内密に御はからひの程一重
に御願ひ申しまする、　ト額に疊の目を付けて、あやまり入るこそ笑止なれ。「それは此方とて、
好んで事は起しませねど、全躰貴女の御屋敷は何處の御國主に御座りまするな。「さアそれは……。
「それを御明しなき上は、此方にも所存が御座る。「では御座りませうが、其儀ばかりは……。
「おはせあくば今宵の仕末、表立ちて吹聽に及びませうか。「さアそれは……。「如何で御座る返
答は……。「左樣なれば致方御座りませぬ、申上げるで御座りませう、　ト言ふかと見せて油斷を
させ、突と立ちあがりて此場をば逃げむとする御殿女中、どッこい、それはと引留める、錄彌の力に結
ぶ帶、するする解けて奥女中の、懷中より落ちる物あり。見れば金色燦爛たる黄金の鼠なるにぞ、思は
ず錄彌ハ聲を發し。「や、や、これはこれ明石家の重寶、黄金の鼠……。「それを貴郎に知られて
はと、取らむと爲せる御殿女中の片手を逆に捻上げて。「これさへあれば瀨山氏も、再び世に出られ
ると言ふ物、ても好い品が手に入ッたなア。

（十九）　眞劍殺さぬ秘傳

月に嘯き血刀を靜にぬぐふ曲漢は、これぞ水島傳九郎が姿をやつせる食乞非人。紫銅の擬寶珠加茂川の、

水氣を含む大橋の、方へ行かむと爲す後に、待てと吾名を呼ぶ者あるにぞ、這は見られしかと胸にぎッくり、されども不敵の水島なれば、平氣を粧ひ、踏留り。「待てと御留めなされしは此物貰ひに御合力被下りますので御座りまするか。「如何にも乞食の分際にハ、珍らかなる手内故、些少ながら與ゆる物あり、ト言ひつゝ軒の蔭を出で前に立ッたる大男、傳九郎はセヽラ笑ひて。「被下る物ハ夏も御小袖、今宵は春の朧夜に散らず紅葉の立田山、夜半よ御腰の一刀を焼刄ためしの御馳走なら、眞平御免蒙りませう。「流石は水島、好く氣が着いた、何を隱さう拙者は、今貴殿が切害なしたる遠山錄彌の義友にして、瀨山剛助と申す者だ。「それでは又も敵討か、さて〳〵無法の猪武者、落して言へば夏の虫、飛んで火に入る惡い了簡、返討の返討、迚もかなはぬ刄向ひ立、勝てぬ力を競べんより、尻尾を卷いて犬侍、早く此場を逃げるがよい。「逃けて能くば汝こそ遠山錄彌の來ぬ内に、此場を逃げる支度しろ。「如何にも死したる遠山奴が、再び蘇きて此所まで來たら、隨分逃げぬ物でもないが、倒れて息を引取ッた、今となッては逃げられぬわ。「むはゝゝゝ愚かや水島、今汝が切殺したる彼の若者を遠山と思ふか。「如何にも遠山に相違はないわ。「着たる衣裳は遠山のだが、人は袖岡半之亟、當時名高い役者だわ。「やや……。「一足違ひで汝をば取逃す所であッた、まッた一日速かりし故、遠山は志賀の方へ出立せずして、これも幸ひ。これから汝を引捕へ、小羽根の家へ連てゆき、多年の遺恨はらさせやうか。「なにを阿容連れゆかるべき。「汝は行かぬ了簡でも此方の腕にある事

だ。

ト言ふ内水島傳九郎は、早や仕込杖振翳して、無二無三に切付け來る、心得たりと受流し、此所に電光石火を現じ、秘術を盡して鬪ひしが、素より剛助ハ劍道の達人、されども傳九郎を殺すの意なく、好き加減にあしらひて、彼を疲勞さしたる上、縛りて引連れむ心なれバ、思切ツて刄合せゝぞ。されども自然にあらはるゝ其鋭さに敵しかね、水島傳九郎大敗北、こりやかなはぬと逃げて行く、先きは祇園の鳥居前。

（二十）

兄が敵で妹が情婦

一太刀！殺す意ではなく、走るを逃がさぬ引留めの法、水島傳九郎の腰のあたりを、切付けたる瀨山剛助。これにひるみて祇園の社頭、鳥居の前にばツたりと、倒れて苦しむ後より、又振翳す刄の冷風。

「如何に水島傳九郎、最早や逃れぬ處故、卑怯の逃立致さずして、尋常に繩にかゝり、小羽根の宅まで同道せよ。其所にて義友遠山銖彌と、晴れての勝負致すべし。但しそれも厭とならば、只一太刀に切殺さうか。

「無念なれども仕方がないわ、言ふが儘に連れて行かれう……と言ツたら其方に都合好く、萬事がうまく行くだらうが、まア厭だ、見る通りの腰の疵、今受けたからもう立たれぬ、輿でも釣ツて持ツて來たら、乘つて行かぬ物でもなし、此儘おやア行かれぬわね。

「やア引れ者の小歌とやら、其高慢な鼻柱、いで〳〵ひしぎて吳れんず、と一時の怒りに剛助が、又取直す其後に。

「其所よおいでなされまするは、瀨山樣で御座りまするか、ト女の聲して近寄るは、初音風呂の小染なり。

「おう如何にも瀬山剛助なるが、小染には如何して此所へ。「今まで隠して居りましたが、風呂の仕舞の時を計りて、毎夜々々此祇園の、社へ參詣にまゐりまする。それと申しまするも遠山樣に、早く敵が御討し申したく、御百度踏みて御願を掛け、今宵が丁度七日の夜。「其敵なら此所に居る非人が則ち水島にて、拙者が漸く突留めたわ。「すりや其乞食が敵で御座んすとか、やれ〳〵嬉しや〳〵、これも神樣の御引合、まア此事を錄彌樣に、御早く御知らせ申したい。　ト喜ぶ處へ遠山が、息を切りて走り來り。「おう小染にも瀬山氏にも、此の社前においでなされたか、御喜びなされ瀬山氏、かねて御詮儀なされたる、黄金の鼠が手に入りましたぞ。「それは又何んたる嘉報ぞ、かゝる嬉しき事があろうか、此方の喜びに又加へて、遠山氏、いやさ錄彌殿、貴殿が敵の水島を、只今これにて手を負せ、此所に引据へて御座りまするぞ。「とは又夢か、眞實か、ど、ど、どれ、何處に。「それ、此所に……。　ト水島の髻抓みて月に面を差向ければ、傳九郎は口惜氣に、錄彌の顔を打眺め。「衣物が替ッて居たばかりで、罪もない役者を殺し、肝腎要めの汝をば、生延せしこそ殘念なれ。斯くなる上は望みに委せ、敵討の勝負をば、此處で仕てやろう、手は追うても、なアに、汝の如き青若衆に……「言ふにや及ぶ水島傳九郎、義兄の仇を報ずるぞ。「助太刀するまでもなし、瀬山剛助これに於て、見分を致すであろう。「なにを白痴の瀬山に遠山、愚かや腰に受けたるは、カスリ疵で痛みもなし。立てぬと見せたは此方の計略、さア水島の鋭き太刀先、受けられるなら受けて見よ、ト言ふかと見

る内すッくりと、立上りたる水島が、首に掛けたる首陀袋、はづす途端に中より出るは、櫻錦の守袋。見るより小染は走りより。「これを所持なす其方はもしや、丹後の宮津の產れでは御座んせぬか。「如何にも我は丹後の宮津……。「それでは元の御名前は中川桃治とはおッしやらぬか。「如何にも我は中川桃治、諸所流浪の其末に、江戸表にて郡山家へ召抱へらるゝ其砌、水島傳九郎と改名したが、それを知りたる女性こそ、もしや妹の染野ならずや。「それでは貴郎は兄樣なりしか、これ妾も此通り櫻錦の守袋。「それを所持する上からは……。「兄樣か……。「妹か……。「兄樣か……。「妹か……。「二世を契りし其人の敵と言ふは兄樣か……。「遠山錄彌と契りしか、や、や、や、やッ……。

これにあきれて遠山、瀨山。小染、水島、敵、味方、只茫然と爲し居たり。

言合さねど兄妹が、同時に刄抜きつれて、一人は腹へ、一人は喉へ。

「やア何故の生害ぞ、ト遠山は小染を、瀨山は水島を、介抱すれど早や深手、傳九郎は小染を見て。

「血迷ふたか、こりや妹、幼少の時別れたる、妹にめぐりあひしより、日頃の惡念生滅なし、此身を殺して其方には、この遠山と末長く、添はしてやりたき兄の本心。性は善にと立かへり、切腹なせしに又其方も、自害なすとは、ち、ち、ち、血迷ふたか。ト苦しき中に言ふ聲の耳に通じて小染も亦。

「そりや兄上、御情けなし、妾とても武士の娘、今こそ湯女の數なれど、恥辱と言ふ事知ッて居ます

る、如何に契りし男子ぢやとて、それが兄とは敵同士、敵を討ッて兄上を殺さむ人に連添ふは、心苦しふ御坐りまする、それ故此身も兄上の、冥途の旅の道連を……。　ト言ふも苦しき息の内、血は染出す落花の櫻、散るは無常の祇園の社、鐘もあはれや春の月、朧ればろの人の世に、奇しき縁も有馬筆、書けば此後拙からむ。皆々よろしく愁嘆の思入、四人引張りの見得にて霞幕。

* * * * * * * *

水島傳九郎と小染との死骸は、鳥部野の烟となして、手向の櫻に血染の銘を打ちしとかや。遠山錄彌ハ兎にも角にも敵討の本意を達せしより、本國郡山ゟ歸參なせしに、義兄の仇を取りしは感心なりとて、殿より百石の御加增を賜はりぬ。小羽根金太左衛門の娘お妙は直ぐ遠山錄彌と婚禮、あら、めでたし。瀨山剛助は黃金の鼠の手に入りしかば、これも本國明石に歸參し、以前の馬廻りの役を務めて家富榮へしとかや、あら、めでたし。御殿女中初瀨は彼の事誰の口よりとなく世間に傳はり、遂に御殿を永の御暇、後には雁金屋辨三の妻となりしとかや。緣は異な物なり、あら、めでたし。袖岡半之亟の墓場には香花絕ゆる事なし、これ生前の妙藝が後にまで傳はりし故なるべし、戀に亂れざりせば、かゝる最期もあるまじきに、あな、いたまし。兩頭蛇の長九郎と達摩の丸六は大いに悟る處ありて、半之丞の墓前に線香、手向の花水賣り、隨分儲かるとかや、あら、めでたし。扇賣源兵衛と小羽根の乳母お町とが結婚せしとかや、これ破鍋に閉蓋なり、何しろめでたし、兎に角めでたし、めでたし〳〵。

（をはり）

◉宿直物語

（一）

今宵の宿直として馬廻りの大組七八人、二の丸の竹の間に詰切りて、殿の御寐を待ちながら、四方八方の話に仔細もなく夜を更す內。出仕してより今日初めての番に當り、城の勝手も未だ心得ぬ高橋忠之進と言ふ若侍、片隅に一人離れて膝の上に扇子をつき、之れに腮を載せてこくり〳〵と居眠りして居るを、一座の中にては古顏の右田嘉太夫と言へるが見付て。　これ忠之進殿、御身は眠むさうな顏をして御座るが、其樣な事では相成らぬ、御廊下を二三遍廻ッてお出なされ、左すれば目が覺めてよろしく御座る、　と言はれて、はッと驚き樣威儀を正し、其扇で膝を二ッ三ッ擲き。　これは誠に恐入ッた、實は今朝未明に的場へ弓の稽古に參りまして、夫れ故思はず此体たらく、其樣に切込まれては見事に一本參りました、　と言ふに、又一人くす〳〵と笑ひながら。　貴殿のお出なさる的場では、弓弦にたしか菅糸、馬の尾なぞをれ用ひなされるとか、的には生物の魚を御射留めなされるとて皆々感服致し居ります、　と夜間の鮎釣りをそれとなくにほはせられ、忠之進面目なく頭を低れて。　楯もたまらぬ方々の矢つぎばや、平に降參致しました。どれ長廊下を歩いて氣を養ッて參りましやう、　と極り惡く立ちかゝるに、嘉太夫はわざと落着きはらひ、　長廊下へお出あるならば、彼の天井に釣り

てある葛籠の下を通る時能く能く氣を着けて通りなされ。　ねッあの葛籠の下を注意して通れ？如何にも夜分は別して御油斷ある可らず。　さてこそそれに極ッたれ、拙者初めて御登城致せし砌より、ふと目に留りしはあの葛籠、何故あの樣な思ひも寄らぬ天井に釣りてあるかと、日頃からいぶかしく存ぜしが、　と言切る時には、急に腰付を變へ、足は內の方へ向ひてあり。　何、餘の儀でも御坐らぬが、夜分彼の下を通る時は其人の襟首にぽッたりと血汐がたれるとの噂。　ねッ血汐が……と首を縮めながら、わざと高笑ひして、　何を御串戯言ひ給ふ。其樣な事が御座る物か。　と言捨て、此樣な場合に惜しや一生の勇氣を絞り、廊下口に出行けば、皆々跡より凄味の言葉掛けて、御用心あれと煽動ける。　忠之進勢ひ好く板間踏鳴して四五歩進みかけしが、何と思うてか又立返り。今のお話で目も覺めたり、最早や御廊下廻るにも及ばず、　と言ふに、一同いよ〳〵興に入りて腹を抱へぬ者なし。忠之進眞面目に成りて、　右田殿其おほせなされたは眞實で御座りまするか。と改めて問ひなほすに、他の若侍も此話は今日がはじめてと見え、　戲れは戲れと致し、これが誠あらば何れ面白き物語御座るべし、　宿直のつれ〳〵何卒語り聽かされよ、　と各々膝を嘉太夫の方に進むれバ、仔細らしく咳一ッして、　さらバ一席語りましやうかな。

（二）

抑も此鳥城は元浮田家の本城にぞありける。

後には八丈島の鬼と成りし中納言秀家の未だ時めきし頃なりき。近侍の小性に菊岡勇三郎と言へる美少人あり。家中一の艶姿、美しさ極まりては凄しとも申すべきか。顏の肌面濃かにして常に頬紅指したるかと疑はるゝ程、春は曙の色ほんのりと見ゆるに、目は又夏の夜の新月か、抑もや涼しさは何に喩ゆるも風致に乏しく、總て語らば語る詞拙なし。まだ〳〵此上に何とも言はれぬ麗しさは、重ねて言はでもの事ながら、是人間第一の取得、精神の優しさに加へて、柳の風を流すのみかは、雪をはねる勇——凛として動かぬ氣性も見えたり。

十四歳の秋の夜に、髯面の野武士が狼籍を尾花が下に組敷きて、一人を月影淀まぬ水中に投込みしと、其頃の評判隱れもなし。親は誰ぢやと身上を尋ぬる者あり。聞けば不憫なり霜夜にむせぶ寺門前の捨子なりしを、妙禪寺の和尚が拾ひあげて、此の歳まで養育てしと言ふ事、秀家が耳にも入りて、天晴行末たのもしき若衆かな、召抱へて一枝を手折る菊岡勇三郎とは名からして氣に入りたりと、早速使者を以て和尚を說附け、城中に引取りて出世、御小性役。寵愛並ぶべき人なく、美色たとふるに花なし。天下多事なるの時に方ッては軍馬寒に嘶く戰場の假家にも、陣幕漏る風な障りぞ。四海平穩、二子山の狩くらには、鷹天を衝く雲なかゝりぞ。花月共に吟じ行く風流の大將、君が爲には蓬が下に黑髮も亂すべく、誠の血汐旗に濺ぎて、紅葉時、忠義の武士の手本見せばやとれ、勇三郎が常の心なりしに、果せるかな衆道にも戀の遺恨、君を怨む不忠、友を墜入るゝ不義、同じ小性の中に腹惡しき者兩三輩ありて、

先君直家公が苦肉の計略に無念の最期を遂げたりし備中松山の城主三村紀伊守家親が殘黨、何某が遺子なりと、捨子にして親元の定かならぬを幸ひに、人知れず言觸しければ、元より猜疑深き秀家なり。是より心に油斷なく、菊岡の擧動に眼を注ぎ居るとは、神ならぬ身の勇三郎、雫ばかりも知らぬ間に、早や濡衣はかぶりてあり。

勇三郎或時一日の閑を願うて、城外の玉井宮に社參せし歸途。東山の麓を通る時しも、迹より久濶と呼留る者あり。誰かと見れば彼の妙禪寺の寺小性、平川連之助と言へる舊友なるに。こは久々の對面かな、と互に袴の襞を擲きて、喜び合ふ其中にも連之助の顏元晴やらず、憂苦に萎れたる樣見ゆるに、何か心配事にても起りしかと、流石勇三郎心ならず。信切よ問ふに連之助答へて、されば有り。此頃我身上に取りては、容易ならぬ一大事起りて、日夜思案に精神疲れ、好き思想の出る事なし。今計らずも御身に逢ひしこそ幸ひなれ、何卒好き智惠借しては給はらずや。御身とは日頃睦じき我。兄弟同樣に爲したる處、及ぶ事ならば何所までも力に成るべし。一大事とは何事ぞ、と問ひつめられ、連之助四邊見廻し。さらば仔細語り申す程に、何卒供の人を遠ざけられよ。

（三）

供の下郎を遠慮さして、姿は見ゆる處、聲は聽えぬ鳥居前に待せ置き、扇子開きて招くまでは何用ありとも來るを許さず。これにて他に漏る憂ひなし、と二人安堵して切株に腰をやすめ。して〱御身

の上に振りかゝる一大事とおほせなさるは、　と眉を顰むる勇三郎。其顔連之助はつく〴〵とながめて、

餘の儀にも候はず、妙禪寺を逐轉致し本國を立退く所存。　何んと言るゝ。　其驚さは道理なれど、我も本年十七歳、他人は疾くに元服も濟せ男一人の役目勤むべきに、角も入れで女々しき長袖にぞべらし〳〵と暮す事、面伏の至りなり。　此儘過して終には圓頂黑衣の身と成り、一生を線香の烟と共に送らん事、如何でか是が人の本意なるべき。かゝる御身が出世を見るにつけ聽くにつけ、浦山しさに身の不幸を悲しみ、如何で我も好き主取なし、武士の勇める道に入りたしと願ふ事、一朝一夕の企念ならぬに、天も我を見捨て給ひしか、未だ好き其期會を得ずして、空しく胸のみ苦しめ居る矢先き、いよ〳〵我が佛門に入るの日も近寄り、黑髮ぞそと剃落す時もせまりぬ。今は暫時も躊躇なすべき時にあらねば、思ひ切りて妙禪寺を立去り、一先つ大坂に立越ゆる覺悟。これに就きて願ひ申すは我今無斷にして立去らん事、師の坊に對して恩を仇なる致方なり。さりとて人の運命ハ定かならぬに、最初より立身の高言を置手紙に誌さん事何となく穩かならねば、仔細わッて此世にはながらへ難く、西大川の水に投じ一命泡と消えたる体にもてなし、後安く落のひ他日志を得たらん時、改めて名乘出る胸中。其時貴殿の取なしを以て、師の怒を解かん事是願ひの一ツなり。今又差當りての願ひと言ふは、我家の實とて今まで人に知さず所持為し居る極秘の巻物一巻、先祖が密事の手紙數通、萬一大坂までの道中にて闕門の咎め受けたらん時、是等の物をあらためられん事迷惑なれば、これも立身の曉まで御身預かりて

は給はらずや。　何事かと思ひしにそれは御身の爲と成る事、いづくまでも秘すべく何物たりとも預り申すべし。さりながら事を穏かになさんとて入水と見せらるゝ事、却ツて師の心を勞せずや、と問返され、連之助はたと詞閉がり、玄ばし返答に苦みしが。　いや〳〵それもうれなれど、追手を避くる計畧にも成る事と言ふに。　さらばそれにて好しと致し、早速其巻物とやらを御渡しあれとて此より行末の心がけ、永の別離の言葉何呉と交し、中々に盡きるとも思はれねば、好き程にして勇三郎、相圖の扇子開きけるに、待ちくたびれたる供人等、いそ〳〵として來りける。之を連れて二人餘談の中に道を歩み。妙禪寺に立寄りて勇三郎は師の坊に面會なし、久々の口上ありて、今日表向きは社參なり、重ねてお暇を願ひ御意得べきも近かるべし、と早卒にして辭し去る時、紫の幅紗に包みたる巻物を、連之助ひそかに手渡しなしたり。

（四）

心の清き者は他人の濁れるをも己が眞實の鏡に照して、同じく澄渡れる樣に思ふ物なり。兄弟同樣に爲したる連之助が、悪人輩の依頼を受け、我身を罪に墜さんとて、たくめる業とは知る由なき菊岡勇三郎ぞあはれなる。

茲に妙禪寺を辭してより、急ぎ城内に立歸り己が一間に入る頃は、夕告烏森に落ちて、太皷御門に暮六つを報ず城内例に依りて忙しきにまぎれ、彼の紫の一包を葛籠の底に納め置き、衣服をあらため居る處

へ、急に君の御召なれば早速御出仕めさるべし、　とあはたゞしき同役の口上、何事ぞと胸安からず、脱ぎ捨し袴穿きなほして取る物も取りあへず、長廊下つたひ行く途中にして、これは如何に近侍の面々鯉口くつろげ片手にさゝげし手燭に前後を照して、正面の御錠口に控へたり。おッ取り刀の中納言秀家血相變て中に突立ち。來るは今かと待構へたる樣、容易ならぬ權幕物凄じき有樣なり。血走る眼はハッたと勇三郎が上に注ぎ。　やッ、それへ參ッたは勇三郎か、何故遲滯致せしぞ。　はッ、我君是れに渡らせ給ふか。火急のお召に直樣出仕致しまする處。　勇三郎、今日は殊のう歸城が暇取れたの。恐れ入りまして御座りまする、途中計らずも舊友に出逢まして……。　下郎を遠ざけ密談數刻に渡りたり、いざやと相圖の扇を開き、鳥居先きより供を招き、それより妙禪寺へ立越ゑたであらうがな。我君には如何にしてそれを御存じに御座りまする。おほせの如く妙禪寺にも立寄りまして、舊師に久しぶりの面談、それ故の遲刻何卒おゆるし被下る樣願はしう存じまする。　其遲刻を咎むるではないい。やをれ勇三郎、秀家が問ふは汝の舊友とか言へる者と何を密談致したと言ふ事では。　別に仔細も候はねど此儀は……。　話せぬか、よもそれは語れまじ。備中松山の城主三村家親が殘黨輩、假令如何樣に手段を廻らし過し舊怨を雪がんと勉むるとも、此浮田家は萬々代、秀家が首は手安くは落ちぬぞ。　何んと御意あそばします。　知らぬ顏の惡らしさよ、豫て汝が三村の殘黨と申す事は、薄々耳には致したれど、片言以て信ずべきにあらず、殊に證據のなき事なれば餘所ながら眼を注ぎ居りしに、

今日の社參をこれ幸ひ、人をして窃かに跡を尾けさせしが、知らぬ汝が運の盡き、果せるかな東山の麓に於て、あやしげなる一人の若衆と何か密談致せしよし……。　思ひも寄らぬ御疑、三村の殘黨とは何事ぞや、申すも羞しきことながら。寺門前に捨てられたる世ゝ親なし子の勇三郎。好し又兩親判然なし三村の殘黨と知れたればとて、子を捨つる親は鬼と申し蛇とも言ふ。拙者如何で獸心、君が御恩を仇に爲し惡逆の徒に組しましやう。　言ふな！遺恨は末代までの祟りを期するとかや、遠き計略を廻らして汝を捨てしや知る可らず。されども斯くまでさかのぼる事、邪推の傾きなきにあらぞ。余が耳に入る風說も出所知れねば搔消して、更に三村の事は問ふまじ。只々密談致せしとは如何なる事をか。申し開け！

此儀は人の身の上にかゝり語るにつらき事ながら、是非に及ばぬ申しましやう。なれども誠私に野心あらば、淺墓な何を憑みに彼の若衆としかも晝中何をか語りましやう。お忘れも候ふまじ、過し夜神宮寺の森へ御微行の道すがら、御供と言ふは拙者一人、闇夜に光る螢火の、劍の光りに左も似たり。汝大敵を切拂ふの勇あらば、此小虫の光る刹那微盡に切ッて消して見せよとの御難題。承はりし其時に――誠君を害せん心あらば、恐れ多くも後より不意を狙て只一刀……さ、それをしも爲さゞりし拙者が潔白はあらゆる神々も照覽あれ、と淀みなき言葉に涙を含む勇三郎が辯解に、流石血氣にはやりし秀家、重ねかける詞なくて、手持無沙汰に見えたりける。

（五）

此時近侍の一人秀家の袖に縋りて、御免と言ひながら耳元近く進寄り、何をかひそ〳〵と密話けるに。それには氣の着かざりし、と刀の柄をうつて合點き。又も威猛き事前にも倍し。好し、いよ〳〵汝潔白なりと言張るならば、急使を走らして其若衆を呼出し、余が面前にて汝と對談致させ。まッた汝が室を搜して所持の物品逐一あらため見るべし。斯て何事もなきならば、其時こそ青天白日我疑團の晴れし曉なれ。誰かある疾く詮議よかゝるべし、その一言、四五輩ばら〳〵と小走りに退りて、西東兩方に立別れ行く。勇三郎此体には驚く事更に無し、さりながら疑團は却ッて我にこそあれ。抑も何によりて曇りなき我身を斯く罪せんと仕給ふにや、讒者ありてか、其人は誰ぞ。口惜し氣に差控ゆる處、程もあらせず西の方より、兩人にて運來る衣裳葛籠、秀家の前に置きて平伏なし。隅々までたづねましたれど、別に怪しき物も御座なし。唯此葛籠の中こそ、と心あり氣に言出せば。秀家心急きて、自ら蓋を取らんとやすか〳〵と進寄るに、小姓の一人氣轉顏に手燭指出す。勇三郎突ッと立ちて此手燭打落し、片手に葛籠の蓋しッかりと押へて。はしたなし我君、是を何と御思召す。臣下の者の衣裳を入れ置く古葛籠では御座りませぬか。一城の主、一國の君、浮田中納言秀家公が小姓づれの葛籠を開き給うては、城下の民へは言ふも更なり、近國への傳聞はづかはし。殊よ近侍の方々ゞ心得ね、萬一此葛籠が怪しとならば、何故其時其場にて開き給はぬ。假りに拙者逆意あッて

此葛籠の中に人を忍ばせ、もしくは火薬を貯へ置き、此如く君の御前に持出たる時、不意に中より切出るか、又は火薬の破裂せなば、なんと仕給ふ御所存なるか。如何に、如何に、御所存の程承りたし、と一心凝ッては磐石の如し、葛籠の上に腰打掛け、動くべうも見えざりける。　やゝ過言なり勇三郎其所退れ。　退りませぬ。　退れ！　何んと仰せなされても此上ばかりは退きませぬ。　主の言を用ひぬのみか、事に依せて蓋を取らせぬ事、愈殘黨と極ッたり、それ召捕れ！　と秀家の一言、待構へたる誰彼一時に左右より立ッて、兩手おッ取り捻上げ捻伏せ、板の間に面を擦りつけて動かさぬに、此間なりと秀家、足を上げて蹶飛す葛籠——蓋は開きて此所に四季の花織錦、伽羅の香散つて紅白色々の中を分くれば、さめ安き紫色の包、これ不審なりと急がしく解く程に、ぱら〳〵と落つる書狀、別に巻物一軸——極秘の巻物は抑も何ぞ。三村が家臣に謀略千變萬化と聞えたる浦岩軍次兵衛が家の系圖、書狀は何ぞ。秀家を刺殺す前に先立ち、一門の内に重立ちたる邪魔物を讒言の舌頭に殺し盡し、其枝葉より引て根を枯せよとの教書めきたる文言。

秀家讀終ッて冷笑ひの眼鋭く、巻物取ッて勇三郎の面に投けつけたる時しも、東の口よりあへぎながら歸來る早馬にての使者、息切れ〳〵に述べる樣。　彼の若者平川連之助と申す者は、事の破れしを未然に悟りしか、但し他事の候てか、西大川に入水致して死骸も留めず失せました。

天勝たず、惡人盛んなるの時ありけり。今は何をか言解かんやと、勇三郎切齒、幽かに無念の一言洩し

て血走る眼を閉ぢたりける。秀家益々聲荒らゝげ、恩を仇なる人非人、余が直の成敗忝けなく思へと呼はりつゝ左右を指揮して無二無三、勇三郎を葛籠の中に押入れ、上より細引もて八重十文字に搦めながら、これを屋根裏の棟木に釣上げさせ、下より突上る大身の一鎗。

* * * * * * *

嗚呼世の中に又とあるまじき例。善者に此惡の果を見るれ、惡人が惡たるの抑も因か。怨魂永く迷ふも道理なきにあらず、血痕拭へども消えざる事亦故なきにあらず。傳へ〳〵て長廊下、天井裏の古葛籠の由來を言はゞ斯の如し。あはれ無慘の物語あらずやと右田嘉太夫話し終りぬ。

（六）

誠に耳新らしき物語とて一同深く勇三郎の最期を憫み、猶二言三言洩れたるを問へば、落ちたるを補ふて何彼と話す處へ、奥坊主の左谷魚仙と言へるが、杉戸明けて入來り。殿様には先刻御寢あそばしましたるに方々は未だお休みなされませぬか、愚老は御免蒙ッてお先へと言ひながら、次の間に立ち夜具包解きかくるに。是は仕たり、話に浮かされて思はず遅く相成ッた、と年役なれば嘉太夫が引受け、同じく夜具包開きけるに。扨又其惡人輩は如何致しました。平川連之助は何んと仕ました、と一同連れて床敷きながら口々に問へば。夫は又後程の事と致して、忠之進殿に御頼み申す事が御座る。拙者に依賴……何御用で御座りますな。餘の儀でも御座らぬが、御廊下の御

錠口に鍵をおろして來て被下れ、　と言ふに一同身振ひして、敷きかけたる布團の中へ我先きにともぐり込み、掻巻すッぽりと冠るもあり、氣の早きは鼾の眞似するもあり、忠之進迷惑限りなく、怨めし氣に嘉太夫を見詰めて、行きもせず行かぬと言ひも出さず。ぢり〳〵と其所に座りて。　每夜あの御錠口は〆めるので御座るか、　と早や怪しき聲なり。　あはゝゝ實はそれにも及ばず、早く貴殿もお休みなされ、　と一杯かゝつれがて腹立の裏に喜色滿々。ぶつ〳〵言ひながら是も布團取出すに、己一番迹に成りて、敷くべき場所閉がりたり。嘉太夫これを見て親切顔に。　其大きな柱の方を枕にしてお敷きなされ、　と言ふ。不知案内の事なれば、何事も先輩の指圖に委せ、忝けなしと禮まで言うて、言葉の儘に夜具をのべたり。

廣き城中も更行く程靜かになりて夜廻りの拍子木、石山狐の鳴き聲、大藪のざわ〳〵、長廊下の方にびし〳〵と言ふ響き、魚仙老とは知れど次の間の齒ぎしり、竹の間の古天井に雨漏りし跡、薄暗き鐵網の行燈俄に明るく、總じて聽くもの見る物、忠之進の身には冷水となッて落來り、襟元ぞく〳〵として寒氣立つに、幾度か手をのばして枕元の兩刀をさぐり、後には其手を出しかねて、古葛籠、勇三郎、大身の鎗、秀家、模糊たる中に現はるゝに、忠之進たまらず、掻巻頭より冠りたりしが、

半時經つか經たざる内に、忠之進如何にも苦し氣なる樣子と成り、悶へて高聲を發せんとすれども、喉につまりて聲は出ず。恐ろし氣に呻る事益々劇しきに、一人覺め二人覺め、一同それと聽き定めて、夜

具の間より袖引き合ひ、それ〳〵竹の間の「不思議」が初まッたぞと、一合程に縮まりたり。

（七）

苦しさを喩ゆれば、大入道の布團の上に跨りて喉を絞めるが如き心持なり。夢かと思へば夢にもあらず、さらバ現かと言ふに現にてもなし。心は正氣にして眼ハ明かに天井を認め、耳にも幽かに夜警の拍子木を聽けど、扨て五体は小動も出來ぞ、聲は助聲を呼ぶにつらし。忠之進冷汗を絞りて身を悶ゆる事益々劇しきに、漸く次の一間より魚仙老が聲として、二言三言名を呼び呉れ、ハッと思ひしに忽ち魔界破れ、水底より浮み出たる如き心持して、ほッと新しき息を吐きける。

これにて一間の者皆起上り。　やれ〳〵魚仙老が呼びかけたので好ッた、如何に高橋氏苦しく御座ッたか、　と言ふよ、忠之進喜ばず。　人の惡い方々だ、拙者が魘れて難儀致して居るを誰一人起して被下ず。　いや〳〵左様な仔細では御座らぬ。貴殿此城の樣子を御存じないから、如何にも薄情者と思ひなされやう、我達も初めて宿直に當りし節は、必ず一度は其樣な目に逢ふ事にて、同じ室の者が心づいて呼覺しては又候其人が魘れ、次から次ぎと總間殘らず魘れ申す、之を竹の間の不思議とて、それ其大きな柱の方に枕をして、貴殿の樣に寐る時は誰彼の差別なく、魘はるゝ事奇怪此上は御座らん。　えッ此柱の方に枕を向ければ必ず魘れますとか、　と、嘉太夫の語るを聽きて忠之進氣味惡く柱を見るに。此時、　其の通り〳〵、　と答へつゝ次の間より魚仙出來り、　高橋殿は御存じなき

か此城に未だ浮田殿の住まれし時代、或小性を無實の罪に墜して無慘な最期を遂さしました惡人——何某とか言へる近侍の役人如何なる仔細わりしにや其柱に倚りたる儘、立腹掻切て死にましたとやら、まだ〳〵それぱかりでは御座りませぬ、關ヶ原の一敗に浮田の家は滅亡、秀家殿は伊吹山の間道を經て美濃國白樫村の民家に潜み、又も走て薩摩に逃れ、終には八丈島の燒土と成られたもこれ皆其小性の祟りとか承る。其後金吾中納言小早川秀秋殿、浮田の故地を受けて此城に乘入られしが、これも其柱にもたれた儘、狂ひ死に死なれたと申す事。　ひやッそれでは秀秋公も此柱で狂ひ死に死なれたとか。石田殿は何も彼も舊記にくわしく居らせらるゝが、　又此通り一同揃うて承はること來月の御番までは御座らぬから、序にれ聽せ被下れ、　と高橋はじめ問ひよるに。　夜は更けたり、殊に宵の長物語に疲勞たれば拙者は御免蒙る、其代り話上手の魚仙老にお聽きなされ、　と此方の岸のかゝり木を向ふの方へ突遣れば、魚仙迷惑顏に丸頭を撫まはして、　とんだ軍談師で御座るな。

（八）

天下分目の關ヶ原大合戰も、秀秋が松尾山の裏切りに、大坂勢大崩に崩れ立ちて、大谷刑部の空轎と成り、浮田秀家の窟隱れと成り、石田三成の飢渇とせまり、小西行長の臆病に林藏主の訴人と成り、義弘は薩摩に家定は筑後に、太刀は暫らく鞘にかへりて、關東勢大勝利とぞ成りける。

家康大坂に乘込んで諸將の慶讓を行ひし中に、秀秋の功大なりとて浮田氏の故地——備前國に封ぜられ、

岡山の城に居所を定めける。
岡山の城より二里東、西大寺村觀音寺の下を流るゝ吉井川の川淀に殺生禁斷の場所あり。秀秋此を破つて漁遊に一日の歡を盡し、戰塲の塵を洗うて、心持好く歸城の途中、峠越の山坂に落馬なして頭腦劇しく打ちしが起因、其夜發熱の苦しさに飛起きては枕を投じ、近習蹴散して氣絶するを打見やり、指示しながら呵々と笑うて、
　大谷刑部！大谷刑部！
さるかと思へばすや〳〵と眠ッて、夢結ぶ寐顏靜かなれば、先は安堵の胸撫おろして諸士休息の座に着きかゝるに、又も跳上ッて四邊見廻し。
　大谷刑部、刑部吉隆
我京殿の内意を受け、德川方に意を通じたるを、刑部吉隆薄々悟ッて、我陣所なる松尾山の麓に、手勢僅か六百餘ながら、決死の强者あなどり難く、鎗衾作ッて我に供ふ。抑も刑部少輔が其日の出裝、練絹の小袖の上に村蝶を墨もて書きたる鎧直衣を着し。同じく白色の絹をもて彼が惡疾の面を包み、下知は家臣平塚因幡守に打委せ、己は竹輿に乘りながら、此方の一擧一動、風に靡く旗の手にまで心を配る、夫よ其日は寢覺月十五日、辰の刻より東西の兩軍、矢叫び勇しく打亂れ入亂れ、彈丸天を破り、刀鎗地を裂き、戰塲は走馬燈籠、敵去り味方去り、敵來り味方去り、味方來り敵去り、追ひつ追はれつ目も暉ふ忙しさ、未の刻に至ると雖も、未だ勝敗定まらず、此内次第に東軍の旗色危く、數々破れて卻きけるに、我心中決しがたく、如何はせんと躊躇ふ處。關東勢の窪島孫兵衛、大筒を打放ちて促す事急なり。

さりとて麓には吉隆あり、一方には相圖の筒音、一方には六百の死士が鎗先き、東西を跨にしていづれに飛ばんかと決せざりしも、遂に裏切の旗をひるがへし、兵士八千銃手六百を引連れ、一時に山を降ッて吉隆を撃ちたり、斯くと見るより吉隆齒切をして我を罵言り——秀秋の不義骨髓に徹したりと言ひしよし。あはゝゝそれに又浮田の秀家、我の變心を怒ッて決鬭せんと申したとか。あはゝゝ馬鹿な、馬鹿者、あはゝゝ馬鹿者輩！

それ其所に大谷刑部、吉隆無禮なり、秀家か——浮田が參ッたか。何此の城は秀家の居城であッたと、そは一大事なり。迚も此城に居る事は出來ぬ、參れ參れ、大谷刑部、少輔吉隆！

拔刀振翳して狂ひ廻り、城内隈なく狂ひ〳〵て、終に竹の間の柱にもたれ、墓なく息は絶えたりける。

（完）

◉敵討白眼競

（其一）

世にも珍らしき敵討の話ありけり。昔の武士の氣質あらはれて面白ければ其大畧を物語らむに。抑も事の起因を尋ぬれば寛永三年の頃とかや。越前國府中の城主何某侯の家臣に南條順左衛門生重と言へるあ

り。其頭の武士は各々武藝軍學を勵みて。何にもあれ一藝の人に秀でたる處あらざれば。一代の耻辱とぞなしける。中に此順左衛門が得意とする處は。劍道にあらず。弓術にあらず。鎗術馬術にも亦あらず。さらば何の技に長じたるかと言ふに。兩眼すぐれて鋭く光り。遠目に掛けては家中に及ぶ者なし。假令ば八町先きの高札の字も讀むべく。一里後の塚の表も見定めるべし。水中の魚を數へ。霞の中の小鳥を指折り。扨ては闇夜に烏を認め。雪裏の鷺を見出すなど。怪しきまでに明らかなりければ。彼は千里眼なり。千里眼の南條よ。千里眼の順左よ。終には南條とも呼ばず。順左とも言はず。只千里眼。千里眼とぞ言ひはやしける。

此事城主の御聽きに達し。そは興ある奴かな。變あらば用ゆべきに。物見の役こそふさはしけれと本地に五十石の御加增ありければ。近頃になき面目をほどこして益々忠勤怠らざりけり。

戊年五月梅雨晴れて若葉繁れる頃。今日は久々の天氣なれば。近郊に出で野狩せばやと不圖思ひたち給ふ城主の性急。言出しては後へ引き給はぬを知るものから。さらば御供仕らむと。御傍小性を初として近衆の面々。皆それ〳〵に身支度なし。俄に御馬廻。御弓組。足輕。仲間等を集むると雖も。不意に驚きて中々に揃はぬを。それまでは待ち給はず。裏門よりの御微行。甲斐黑の三歲駒を一散に走らして乘打仕給ふに。遲れじ。續けと。我を先きに走る人々。さりとて馬四足人二足の悲しさは長き路のいつまでも息はつゞかず。途中にて倒るゝ者多かりけり。

野とも言はず。畑とも言はず。路の大小素よりゑらばず。無二無三に走らしたる城主は。府中の町を離る事半里餘。城外稻葉ケ岡と云へる坊主山にぞ着き給ひける。此所まで附從ひて走續きたる武士は僅かに二人。一人は手塚太郎左衛門と言へる徒士目附にして。一人は彼の千里眼と噂立ちたる南條順左衛門にぞありける。

此時城主は兩人の健足なるを殊の他愛で給ひて。腰の軍扇開き。手づから兩士の上を煽ぎ給ひつ。城主『天晴なるかな兩人が今日の徒歩立。馬の歩みに遲れずして之まで從ひ參りしは。他の者にすぐれたる働き。是と申すも日頃よりの心掛けが好きからなり。今日不意に思ひたち。野狩に事を寄せて一人一散に遠乘せしは。諸士の中にて誰が何處までも從ひ來る者ぞ。すは戰場と言ふ時には誰か吾馬前を離れざる者ぞと。それを見拔きたさの催しなり。ためしに意を得たる手塚に南條。余は滿足に思ふぞよ。トありければ。兩士はハツと平伏なし。手塚『難有き其御言葉。我々身に取りて如何ばかり喜ばしき事に候はむ。南條『此上益々注意致し。殿の御守護仕らむ。ト言上しけるに。彌々城主の御機嫌能く。尚彼此と話し給ふ内に。此稻葉ケ岡より一目に見渡さるゝ一本街道。遲れたる御供の面々喘ぎながら走來る樣。恰も蟻のつゞく如くにぞ見えたりける。城主これを御覽ありて。城主『あれ〳〵遲馳に人々の來る事よ。眞先きに進みたるは誰なるらむ。それより遠目にかけては及ぶものなき南條こそ此所にあれ。如何にや順左。見分けて來よ。トありけるに。畏まツたりと一禮して。岡の崖に望む松の木の下に行き。逐一細かに眺め

たる後。此方へ歸りて申上るハ。南條『眞先一番に進み候は近藤又六に御座りまする。又それに次ぎてハ野村半左衛門。三堂九十郎。老躰ながら白木鐵之進。其他は散々亂々。後になり。先きに成り。いづれが早しとも定めがたく候。ト言ふ。

（其　二）

此時差控へ居たる手塚太郎左衛門。打笑みつ。手塚『南條氏。それは見違ひにては御座らずや。失禮ながら千慮の一失。第一に進みたるは野村半左衛門にして。近藤又六が次ぎには候はずや。南條『這は手塚氏。何によりて左樣に言ひ給ふぞ。篤と見定めての御言葉か。百發百中は弓の上のみかは。遠目に掛けては並ぶ者なしと。自分の口から申すも異なものなれど。我と信ずる南條順左衛門。何を見違ひ致さんや。と日頃の短慮面にあらはれ。血相變へて言出でしを。手塚ハ却ッて冷やかに受けつ。手塚『君の御前にて爭ひ致すハ恐れおほけれど。拙者存ずるには必ず眞先きに進みしこそ野村なれ。眼は貴殿に及ばずとも。心にそれと見拔きたる日頃の擧動は好く知りぬ。近藤は客氣盛んなるのみにして弛まず勇氣の續く者にあらず。これに反して野村こそは沈默の中に剛氣滿ちて。いざと言はゞ眞先に進む者。今日も中途にて草鞋さへ踏切らずば。我々と同樣に御供致して。最前是にあるべき筈。恐らくは遲參の其中にても半左衛門こそ先登ならめ。ト落着きはらひて演べたりける。城主は今兩士の爭ひを聽かれて。面白き事に思はれ。城主『南條が吾眼を信じて先登は近藤なりと言張るも一理あり。又手塚がおのれの心もて計り魁

は野村ならむと言ふも一理あり。いづれが勝つか負くるかは此所に彼等の來りたる上ならでは知れがたし。いざや其の勝負の行司には余が成つて遣はすぞ。ト馬上よりの御聲に。南條手塚は彌々張合ひ。野村か。近藤か。勝つか。負けるか。片唾を呑むでぞ待ちたりける。自分を信ずることの厚さより。南條順左衛門は近藤又六が一番に來るべしと言ひ。手塚太郎左衛門は野村半右衛門先登なるべしと言ふ。城主ハ此爭ひを興あることゝ。勝負の決するを待ち給ふ處へ。汗水流して稻葉ケ岡の此方へ早や登來る者あり。誰ぞや。何人ぞと見てあれば。正しく手塚の言ひたる如く。野村半右衛門にてぞありける。遅れては近藤又六。三堂九十郎。白木鐵之進。後は前後の差別分らず。七八人は亂れて着きける。茲に於て千里眼とも言はれたる南條順左衛門が物見をあやまり。手塚太郎左衛門に負けるにぞ。君前にて面目を失なひ。赤面なして無言の儘。場の末方にぞ控へける。これは此一時の戯れに過ぎざりしを。遅馳に來りたる人々。順左衛門が物見を過まりたる事を次ぎから次ぎと傳へきゝて。日頃南條の出世を妬み居る處のやから。袖引き眼引き冷笑ひ。それとはなしに順左衛門が今日の失策を嘲るにぞ。疳癖強き性質として。今日の無念骨髓に徹し。たのれ。やれ。笑ふ奴輩只一刀とハ思ひしかど。待て少時。君主の御供先にて血を流さむ事。恐多き限りなりと。ぢッと堪ゆる忍の一字。押ゆる程にむら〳〵と氣の急るは物の理なり。果ては此場に居づらくなりて。急病こそ起り候へ。御免蒙りて歸宅仕ると。其儘に岡を降りけるまゞ。人々これはと呆氣に取られ。顔見合せて言葉あらず。城主はこれを御覽ありて。俄に御氣

色を損じ。城主『扨て〳〵南條順左衞門と言ふ男は。我にも益したる短慮の性質。餘程の小心者と見えたり。されば斯程の事にて立腹なし供先を辭して歸宅するとは我儘千萬の擧動。これ上を上とせず。君臣の別を知らざる者の致方。不埒至極の奴なるかな。早速閉門申付けて當分謹愼致す樣言渡せ。ト即刻三堂九十郎白木鐵之進の兩人をして御使者の役にぞ立しめられける。

小事より大事を生じ。戯れ事より眞實の爭鬪を出す事古今其例多かり。南條順左衞門は病氣と稱して歸宅するや。追掛けて御出先よりの君の御上意。承はりて來りたるは三堂九十郎白木鐵之進。閉門の由申傳へて御沙汰あるまで謹愼罷りあれとの事。畏まッて御受をなしゝが。上使歸りての後胸彌々安からず。元來順左衞門には兩親死失せ。兄弟もなく。妻子もなく。家には老僕と小者二人居るのみなるが。何思ひけむ老僕にも小者にも暇を出し。只一人になりて座敷の眞中に端座なし。頻りに物を考へて居る樣なりしが。夜に入りて人知れず屋敷を忍出で。櫻馬場の木陰に隱れて今日しも自分を嘲りたる諸士の下城を待伏せなし。不意に起りて刄傷に及び。前後七人。別に手塚太郎左衞門をも切害なし。合せて八人切りの血の雨を降らし。暗にまぎれて府中の城下を何處ともなく立退きける。

* * * * * *

南條順左衞門は櫻馬場にて八人を切殺し。其夜直ちに越前國府中を逐電して。一先丹州福知山在中川村にある知人。多々良孫八と言ふをたよりて身を潜めけるが。日數經つに從ひてつら〳〵考ふれば。いや

しくも武士の家に生れながら。少かの事より爭を爲し。あまつさへ八人の朋輩を切害なせし事。短慮と言ふも限りあり。敵と戰場に闘ふて高名を極むるこそ武士の本分。君主へは忠にして。祖先へは孝とこそなれ。嗚呼今更歎きて甲斐なけれど。世に恐ろしき惡業を。爲したる事よと氣で氣を咎め。言譯の爲めに切腹なし。せめては亡友の魂をなぐさめむと。一度は刀を取りしかど。又思ひめぐらすれば。今死したりとて惡業消滅なすにあらず。それよりは此世に存命て。亡き人の菩提を弔ふこそ好からめ。浮世の絆を髪と共に切り。弘誓の船に法の海。墨染の衣に身を遁れむと孫八に此由を告げ。發心の門出は旅の啓行。紀州高野山西院谷の松影院に孫八が親しき僧のあるをたよりて。中川村をぞ出立なしける。

（其　三）

抑も紀州高野山と言へるは。嵯峨天皇の御代。弘仁年中の草創にして。佛法の靈場なり。金剛峯寺と號して寺領は二萬千七百石。坊舍の數は七千七百七十七坊。山に八葉の峯あり。谷に又八の谷あり。名所としては玉川の毒水。故跡としては秀次の自殺せし處。誠に類なき名山にして。しかも隱家には屈強の處なりければ。南條順左衞門も大いに喜び。西院谷の松影院に入りて剃髪なし。名を幽院窓月と改め。いつしかに娑彌の姿に馴れては。衣の露の玉だすき。結ぶや草の庵にも。眞如平等の松の風吹き。感念自から淸くして。難行苦行茲に幾年。今は天晴の碩學とぞなりにける。

話頭一變。南條の刄にかゝりて空しく櫻馬場の露と消えにし手塚太郎左衛門の一子に太郎五郎と言るあり。父が非業の最期を遂げしを深く悲しみ。扨ても惡きは南條順左衛門。不倶戴天の父の仇。やはか此恨晴さでれくべきかは。何地如何なる處に逃げ隱るとも。草を分け根を苅りて尋出し。無念の刄一刀を。彼が首に加へむと。敵討の願書を差出し。城主より御暇を申受けて。俄に發足の要意。源七と呼ぶ家郎一人連れて。見送る母と姉に分れ。迹に殘して行く雁や。網を逃れて只一羽。闇に啼くなる悲しさを。袖に包みて踏行きける。

斯くて手塚太郎五郎源七の主従は。西に行き東に歸り。南に馳せ北に返し。或時は雪になやみ。或時は風に苦しみ。樣々の困難辛苦なめつくして。三年の星霜を旅路に過すと雖も。敵の行衛更に分らず。尋ねあぐみて紀伊見坂。弘法杉の下を過ぎ。上は芳野の妹背川。末は紀ノ川打渡り。加室の驛より坂を上り。高野の山にのぼりけるは。寛永六年の秋の末。草には虫の鳴く頃なり。彼の蛇柳の此方より。御廟の橋を打渡り。兩側にある石塔を。何心なく見て行く内。不圖太郎五郎の眼に付きしは。未だ新しき石塔なり。面を見れば鮮かに。深く刻める其文字。『幽院窓月靈位』と誌しあり。後を見れば這は如何に。俗名越前國府中の住人南條順左衛門生重とぞありけるに。これはとばかり打驚き。主従顏を見合せて。頓には言葉も出でざりける。

漸くにして太郎五郎は落つる涙を振拂ひ。太郎『扨は敵も先達て。なき身の數に入たるか。兎は知らずし

て主從諸共。仇に月日を餘所に過して。遂に敵を得討たざりしか。死なしたりや。遲れたりや。武運拙なき太郎五郎。ト又た地に伏して泣沈むに。源七も亦た聲震はせ。源七『神も佛もなき世かな。これまで主從心を合せ。敵の在家を尋ぬる爲め。困難辛苦なしたるは水の泡となつたるか。殘念や。口惜しや。ト吾身を撲りてなげきける。太郎五郎も癪りつゝ。太郎『泣くまじ泣くまじ。今は歎くも用なし。素より敵を討たぬ身の。何阿容と歸國が成ろうぞ。あれ見よ手塚太郎五郎は。親の敵を討ちもせで。面厚くも戻りしよと。後指をさゝるゝが。何としても口惜し。さりとて此所に切腹なさば。敵を討ち得ぬのみならず。却ッて我が敵の爲めに。返討に成りしも同然。所詮いづれも出來ぬ身の。之を菩提の種として。今日より佛門に入ると致さう。此事其方は國へ歸り。母上や姉人に。委しく申傳へて呉れよ。女子程世にたよりなく。心細きはあらざるを。今又我が沙門となり。行衞定めぬ雲水の。旅から旅に端つるぞと。聽き給ひなば如何ばかり。歎き給ふや知れがたし。其所を其方がなぐさめて。御力落の無い樣に。能くはかろうて呉れよ。源七。頼むは此所ぞ。こりや家郎。源七『そりや何事に御座ります。生るも死ぬるも主從共にと。出立致せし其折柄。御約束致したを。太郎樣には御忘れありしか。貴郎一人を坊主にして。何んで下郎が只一人。御國へ歸參が出來ませうぞ。余の儀は知らず此事は。平に御免被下れ。ト忠義を面にあらはして。聽かぬ源七。太郎五郎ハ。わざと言葉を荒らげて。太郎『ヤア聽分けなし。これ源七。其方が歸國致さずば。誰か音信を傳ゆるものぞ。汝を連れて出立せしも。斯る時の用ともと。

思ひし事を仇にして。我をあなどる不忠者。たッて厭と申すならば。又無理には勸めぬが。左るからには主でもない。家郎でもない。何んでもなし。七生までの勘當なるぞ。源七『や。や。すりや如何あッても源七に。歸國せよとおほせあるか。太郎『何程言ふても同じ事。重ねて口を動かさむより。これ。此兩刀は母上への筐。此小袖は姉上への筐。筐は人のなき跡の思ひの種と申せども。思出さる折々には逢ふ心地して御覽ぜよと。これ源七。イヤサ源七。えッ泣くな。申せし言葉を傳へて呉れ。　ト否む家郎を說伏せて。切るは髻。黑髮の。亂るゝ胸に張る弓の。絃引絞る憂きおもひ。扇子を取りて石塔の頭を丁々打おろし。生ある者に物言ふ如く。太郎『やあ南條順左衛門。親の敵ぞおぼゑたか。南無阿彌陀佛。ト三度唱へ。袖を拂ッて其後は。女々しさ淚絕ゑて滴さぞ。いざや其方は國へ行け。我は御山の佛弟子。寺に行くには右の道。左は下向の大門口。さらば〳〵と太郎五郎。留める源七。突飛ばし。姿を杉の林ゑ隱しぬ。

手塚の家郎源七は主人太郎五郎の姿を見失ひてより。仕方なければ泣く〳〵も筐の品を携へて。高野の山を踏み降り。越前さしてぞ歸りゆきぬ。去程に幽院窓月が墓前にて髻を切りたる太郎五郎。親の敵を打得ずして。仇に先きへ死なれたるを。深く悲しみ。世をはかなみ。一身院谷の剛淸院と言へるに入りて。懺悔の上授戒せられ。名を空存と改ためて。此所に暮す事二年の餘。他ながら南條の事を。それとはなしに尋ね見しかど。同山とは言へ谷を異にし。坊の違いし事なれば。少しも噂さを聽く事なし。至

たく南條ハ死したる者と信じて。毎日々々欠く事なく。彼の石塔の前に到り。親の敵思ひ知れよ。南無阿彌陀佛と三度唱へ。如意を以て丁と打つを。勤めとこそはなしたりけれ。

(第　四)

其内空存が修業も漸く積みたりければ。此上は山を去りて諸國行脚を爲すべしと。師の坊に暇を乞ひ。命を論ずれば草の上の露。身を觀ずれば江の中の萍。寄邊定ぬ旅衣。雪にや染めむ。雨にや濡れむ。網代笠に首陀袋。錫を飛して和泉より。攝津浪花を船出して。ちぬの浦浪。和田岬。須磨に明石を横に見て。淡路の瀨戸を越の島。播磨の灘も追手風。阿州德島へ無事に着き。板野郡板東村靈山寺より巡出し。阿波の國にて二十三番。土佐に十六。伊豫の國にて三十六ケ寺。讃岐にては二十三ケ所。合せて八十八の靈場。其他の堂社佛閣を殘なく廻りて後。再び阿波に立歸り。岩ケ崎龍淵寺と言へる眞言の寺の前まで來れば。頃しも水無月二十日餘。枝もゆるまぬ三伏の。暑さを消して俄の夕立。おどろ〳〵と雷鳴の。空に碎けて鳴響けば。這は溜らじと思はず知らず。駈込む法華阿彌陀堂。それかあらぬか椽側に腰を掛けてぞ休ふ處へ。立出でたるは主人の僧。主僧『旅の客僧にておはすにや。不意の夕立に嘸かし難儀仕給ふらむ。晴間を待には此方へ上て。ゆるりと休息なされ。ト言ふ。空存『實にや一樹の雨宿。さらば御言葉に從て御報謝に從はむ。ト言ひつゝ上へ通らむとして。互ひに顏を見合すれば。這は抑も如何に。這は又抑も。如何にや奇怪。高野にて。土と化したる者と思ひし。親の敵の幽院窓月。空存『やア珍らしや

南條順左衛門。慈月『這は思ひがけなし手塚太郎左衛門殿の御子息。同苗太郎五郎殿。空存『變ッた處で此對面。慈月『變ると言へば御身の姿。何とて身をば墨染の。僧躰ばし仕給ふぞや。空存『此方よりも貴殿こそ。何故の圓頂黑衣。慈月『これと申すも六年以前。御身の父太郎左衛門殿。まッた七人の朋輩を切害なし。國を逐電致したる。其罪障を消滅の爲め。見らるゝ如き此有様。朝暮追福に世を送り。此所に斯うして假の庵。空存『其言譯暗し〳〵。左程に思入りたる身が。行衛を眩ます手段か。あらぬか。死せざるに早や石塔を。高野の山には建てられしぞ。拙者は彼の墓石を見て。御身ハ既に死せしとあきらめ。國へ歸るも歸られず。御覽の如き僧となりて。今日まで行脚を致せしぞや。慈月『成程彼の高野の山に。石塔は建てしかど。決して後を暗ます爲めに。造りし物には候はず。最前よりも言へる如く。全く先非を後悔し。見らるゝ如く出家と成りしは。西院谷の松影寺中此所に居る事三歳にして。思立ちたる廻國の。其門出に我と吾。石碑を建て遺せしも。行く先き何處定めねば。何地に於て死するや知れず。死しても我を弔ふ者。他にあらじと思ひし故。出る其日を命日と。人には告げで下山せしが。緣ありて今月今日。此所にて御身にめぐりあひ。益々因果を悟りたり。今は何をか命惜しまむ。御身の手にて殺されむは。此方の本懐上越すものなし。早や〳〵首を撃ッて。亡父君の靈前に手向られよ。ト首差延べて端然たり。

（其五）

敵と狙ひし南條は高野の山にて死せしと思ひし空存法師の太郎五郎。圖らず阿州岩ヶ崎龍淵寺の本堂にて雨の宿が奇遇の原因。順左衞門の窓月坊に不思議の再會なせしかバ。空死なして石碑を建て後を晦ます卑怯の仕方と。いきまき猛く問詰めたるに。そは全く其意にあらず。行衞定めぬ旅の空。出る其日を忌日として身は萩原に朽つるとも。名のみハ石に遺さむ爲め。逆修菩提の墓表。さらく命を惜しみての卑怯極めし所業ならず。佛祖にかけて僞りなしと涙を流して言解きし上。いざ亡父が修羅の無念此場に於て晴らされよ。命ハ御身に差出したりと覺悟極めたる窓月の言葉。聽くと均しく空存も兩眼に涙を浮べ。空存『斯程優しき御心にて何とて父を討ち給ひしぞ。因果の程こそ訝かしけれ。誠に惡人の友を振捨て善人の敵を招けよとは。今ぞ思ひ當りたる古の金言。討てと言はれても如何で御身を殺さるべき。兎ありて御身を助けたくは候へども稀に逢ふたる親の敵。其儘別るゝも本意ならぞ。さりながら。我も御身も三衣を纏はぬ身あらむには。刄の上にて討ちもせむ。討たれも亦仕給ふらむ。今は互ひに佛門にありて。それも叶はぬ此場の結局。現在敵はありながら。討つに討たれず。窓月『討たれむにも討ち給はず。嗚呼如何にせば好き事か。ト兩人途方に暮れ居たり。空存俄に膝を打ち。空存『それよ。好き事こそ候へ。抑も事の起因を尋ぬれば。御身の眼力と吾父の見たる處と意見を異にしたるより。それが產出したる騷動なり。されば眼力を以て起りたる事の眼力を以て結ぶも面白からずや。昔は武士の手塚太郎五郎。今は發意の空存なり。親の敵を白眼殺さむと存ずるが。

如何にや。窓月『そは尤も好手段なり。唐朝の項羽怒ッて白眼む時は人を倒し。吾朝の將門は戯れに雁行を睨み落せしと言ふ例あり。さらば愚僧を白眼殺し給まへ。我は又一意一心に御身を白眼て。白眼つかれて殺されむ。空存『早速御聽入れ被下。忝けなし。さらば御覺悟候へ。やよ。南條順左衞門生重。今手塚太郎五郎が。盲龜の浮木時を得て親の敵を討ち候ふぞ。ト言ふを相圖に双方より。一時にハッタと眼を見張り。佛尊三像の燈前にて。白眼競の敵討。心を瞳に寄せて他を顧みず。一方は殺すと言ふ一念。一方は殺さるゝと言ふ一念。一念互ひに通じたるが。精神自から一命を支配して。自然悟入徹底の定に落ち。終に其曉消えのこる星の行衞と共に幽院窓月の命絶へて。結枷の儘に死失せけるこそ不思議に見えて不思議ならず。これや今の世の催眠術。知らぬ昔は佛の利益と貴み。傳へ傳へて阿波の國。龍淵寺の敵討と古老の物語にぞのこれる。

（完）

◉病　畫　師

（上）

春の海は浪靜にして白鷗の睡眠も覺めぬ程なれば、沖の白帆は尙更動かず。霞深くして今日は大島の消えて見えぬに、右の方眞鶴崎、左の方三浦岬、これのみは幽かながらも眺められぬ。此方の長汀に散る

は潮の花にして、彼方の曲浦ゝ碎くるは浪の珠なるべし。彼の須磨明石に似たりと言ふ此所の景色ハ、相州小出原の濱邊なり。折柄此地に榮ゆる鷗盟館の構內、靑松の陰より立出て白砂の上を踏みて行く一人の若者。年の頃二十五六、身の丈は長く肉は瘠せたり。久しく刈りやらぬ髮は亂れて蓬の如く、永き日病の床にありけむ、顏の色いと惡しく、彼の菜色とは之なるべし。

若者はそろ〳〵と步を運びつ、此好き景色に目も呉れず、濱邊を傳ひて行先きに、干潟の上の漁舟一艘。それに近寄りて身を倚せつ、先づ一ッ咳吐出して。　あゝ苦しい、苦しい、我はもう死ぬるかも知れない、と言ひつ、二度三度、胸撫下して。　さりながら、如何で死なねばならぬのならば、あの書きかけた油畫だけは、如何しても畫終ッて、其內我は死なうと思ふ。それにしても嬉しいのは、あの宿の主人……世の中から見放されて誰取合ふ者のない不遇畫師のこの亂水を、好くまア世話をして呉れる。我大畫の出來かゝりたのも其爲めと思ふ。引變へて情けない、彼のお德のつれなさ！氷の樣に冷めたい心で、見事火の樣な吾心を、再び燃へぬ樣に消してのけた。

家もなく、產もなく、親もなく、妻もなく、何もない。只身一ッの石山亂水。畫道修練の大志を抱きて、英に渡り、佛に渡り、獨露の諸國言ふに及ばず、以多利の奇景、羅馬の古都、其所此處と漂泊して日本へ歸ッたのは三年以前。自体日本は美術國、いでや吾腕を充分に揮うて、共に天地の美を樂しまう、と思ふたが、世の中は自分の心通りにはならず。失敗の上には失敗を重ね、落膽、落膽、得たものは何ん

ぞ。不治の難病、肺を壊ひて毎日吐出すは血、血。一塊毎に縮む命の、嗚呼我ながら憫れなる畫師よ!外國にさまよふて居た時の方が、余程心も平かに、身も亦安らかであッたもの。却ッて日本へ歸ッてから東京にも居られぬ仕誼。松島の初霞、象潟の春雨、日光の青葉、筑波の白糸、東北の方歩盡してこれから西の國に行かんため此濱邊まで來りしが、時しも寒風の肌を擘き、病氣一入重り來て砂の上に倒れて居たのは、去年の暮の或日の晩方。年も行くべし、我も亦黃泉へ行くべきかと思ひしを、宿の主人に見られて助けられ、親身も及ばぬ信切に介抱受けた今日此頃。少しは快く成ッた故、ぼつ〱氣分の好い時を計ッて吾最後の大畫に掛ッたが、我死して臭骸を地下に埋らるゝとも、責めては世に遺したい、彼の畫ばかりは遺したい。其畫中の美人の顏は、抑も誰を摸型に仕た。未練なやうだが、あの、お德を。と言ひさして、彼れ薄氣味惡くにや〱と笑ひ。　お德!お德!扨て美しい女ではあるけれど、又怨めしい彼の人の所致振。あゝ腹の立つ、腹が立つ、けれども我は思ふまい。あゝ思ふまい〱未練は筆を鈍らして、大畫の邪魔だ。大畫の邪魔だ。

* * * * * * * * * * * * * * * * * *

山櫻幾本となく咲亂れ若草地を封じたる處、小袖幕、毛氈、塗籠、瓢簞、向ふの方に遠山の霞みて見ゆ、其所に十一二より十八九までの少女各々美しき衣服を着て目隱鬼をなして戯れ居る圖は、、、、、、カウンバスに張られてイーズルに掛けてあり。中に最も力を盡したるかと見ゆるは、年の頃十七八、矢飛白の振袖、

福面織出したる錦の帶、脊丈は左程高からねど形好く整ひて、髮黒さを高島田、生際濃く、眼元すゞしく、鼻筋通り、殊に口元愛らしく、それは〳〵美しき事誠の人にはこれほどの顔立あるまじ。さりとて他の女が美しからぬにあらず、皆それ〳〵のおもむき見えて、彼も小町、これも揚妃、美人の中に美人を出したるは、反映の魔術に人の目を眩まさぬ書き方。火の中に火より熱き物を現はし、水の中に水より冷き物を生じ、雪と炭との比較を取らすして、此美人を描きたるは畫工其人の大手腕。

下には疊まぬパレットあり、差込まぬレストスチックあり。一號より號を逐ひての毛筆は何十本となく散らしてあり、インヂヤンレッド、イタリヤンピンク。それ〳〵の色々は鉛管の儘其所に亂れて、空しきもあり。未だ口を開かぬもあり。この中に倒れて半ば眠り半は醒めたる一人の若者、これなん濱邊をさまよひたる石山亂水なり。燈火は彼を照らさず、畫を斜に射て光線の加減尤も好く、さながら生けるが如き美人！

亂水むツくり身を起して兩手を後に突きながら畫面を睨む眼光鋭し。右から眺めつ、左から見詰めつ、又正面から見上げつゝ、はては莞爾と打笑みて。出來た〳〵と呼はりしが、其言葉の末より咳起りて苦しきに堪へぬまで咽びぬ、咽びながらも亦。後面之景を、後面之景を、と叫びつ。それさへ塗つて仕まへば、もう仕上げられるのだが――此畫の出來るのが我の此世を死ぬる時か、此畫に吾筆を加へるのは自分で自分の墓を立てるやうなものか、死ぬるを何んの今となツて厭はぬが、此畫に別れ

るのが惜しいやうな、只それだけが殘念でもある。思出すまいとは仕ても甲斐更になし。お德ハ秋山家の侍女。老主公の肖像賴まれて同家に繁々通ふ時、お德を初めて見たのであるが、それから染込んだ戀風も、彼のつれなさに、彼のつれなさに、つれなさに、つれなさにも程のあるつれなさに、見事我は投出されて、隻手聲なき片思ひの、はかなさを味はせて吳れた。美術家の戀は劇烈なる物、發して情火の燃出した時は正に天をも焦がしつべきぞ。

我が溢れんばかりの愛を受得ぬ其方、そんな、そんな、大俗の其方の心とは知らず、戀した我が我との罪。實物の其方はもう戀慕はぬ。只々姿を圖に借りて心を入れた理想の佳人。實物のお德は大きらひ、畫面のお德ハ大好き〳〵。

《下》

夜は更けて、晝は潛める浪の音も松風に和していと高く響きぬ。此時次の一間にて、わッと泣出す女の聲。亂水驚きて唐紙引明れば、泣伏して顏こそ見えざれ、誰あらう昔の戀人。扨てはお德か、先づ眼に入りたるは島田ならで根上りの丸髷に赤き手柄の色なるべし。

よろ〳〵とよろめきてイーズルを倒さんとし、氣の着きてハ血相變りぬ。物をも言はず又唐紙を荒々しく締めんとするに、これはと急に立上りて其手に縋り見上る顏、海棠の露とや美人の淚、ぢろりと見て未だ一句もなし。

亂水これを振切りて。　又夢か、又夢か、今夜の夢のまことらしさ。覺めては又も泣かすのかと、言ふ。　いえ〳〵夢では御座りませぬ、まことのお德が參りました……。　夢でない、これが眞實のお德となら、不潔々々見るのも厭だ。何仕に來たのか知らねども、もう用はない筈ぢや。疾々此所を立去らぬか、この亂水はな、い、いつまで其方を戀うて居やうぞ、もうすッぱりと思切ッておとくのとの字も言ひはせぬ。用はない〳〵幾度操返しても用はない。えッ早く出て行かぬか。　行かせませぬ〳〵妾の心を一通り貴郎に打明けた其上でなうては、如何しても參りませぬ。　咄、俗膓の其方、汚らはしいぞよ見るも厭、と聲張上れば其下から又もつゞきて咳の苦しみ。透さずお德は後へ廻りてやわ〳〵と背を撫でつ。

それほどまでに妾が汚らはしく御座いますか。石山樣。そりやあんまりで御座います。つれなく貴郎に當りましたのも、それにはいろ〳〵仔細ある事、如何に妾が足らねばとて貴郎の御やさしい御心を、何んの知らずに居りませう。知ッて〳〵知りつくして居りながら、余所吹く風の空々しく、加之つれなく致しましたのは、斯うした仔細で御座んする。　えッ言ふな、聽かぬ〳〵と又張上れば、又もや強く咳入るに。　それ御らんなされませ、御氣を急ると惡ふ御座んす。ま、ま、少時心を落着けて一通り聽いて被下りませ。

石山樣。この德も女で御座んす、情ある御方の御言葉には身の痺れる程嬉しふおぼえて只慕はしくなり

ますれど、其所が妾の意地とでも申しませうか。秋山樣へ御奉公に上ります時に神懸けて誓ひましたのは、御殿に勤めて居る中はたとへ如何なる事情があつても、人樣から後指をさゝれますまい、惡い噂の蔭言を言はれますまい、爪の先ほども他人から非難を決して受けますまいと、一圖に思詰めましたのが凝固まつて居る矢先、世の常ならぬ石山樣、貴郎の人から立倍さつてそれは〳〵情の深い其の御心を酌分けて、流石の妾も心の中どの樣に嬉しふ御座んしたか。清き貴郎の御心よりも妾の濁つた心の程は一入きついかと存じました。なれどもそれを押へて、包んで、押通し、包通しましたのは、自分ながらもあまりの氣強さ。道理が情に勝つたのでも御座んせう。さあ申す通りの仔細故で御座んすから此所を味はうて被下りませ、さら〳〵貴郎の御信實を知らぬ女では御座んせぬ。只なみ〳〵の女の樣に貴郎を嫌ふたのでは御座んせぬ。美術家の貴郎を見分けぬ樣なそんなさもしい妾でも御座んせぬ。では御座んすが、もし、石山樣、實を申せば妾から貴郎を御怨み申しまする。あれほどまでに妾を――妾の樣な足らはぬ者を眞に戀して被下るなら、何故妾が秋山樣の御殿を下つた其時に、妾の兩親に入してなりと、これ〳〵と打明けて根強く撓まず言込んで妾を引取つては被下ませぬ。それを妾は今日か翌日か、いつれの日かと待つて居ました。待暮して居りました。それに何んの音沙汰もなされぬとは、頼み甲斐なき方樣かな。扨ては彼の時の御言葉御擧動。只一時の出來心か。それとならば彼の時につれなくせしが此方の手柄と危い瀬戸の事をし思ひ、思ふても又其裏から、でもあれほどまでにお言ひなされた、あの、御言葉に譃

はあるまいと果敢なき事を頼みにして、待つて、待つて、待ちつくして、それでも貴郎の御たより無きに、何處に如何して御いでなさるかと案じつゞけて居ましたが。親のすゝめに否みかね、石山様、妾は余所に縁付ました。

亂水は益々咳入りぬ。お徳は涙はら〳〵と落して聲は震ひぬ、手も震ひぬ。震へる手して亂水の膝に縋りつ。

何を御隠し申しませう、新婚旅行の其かへるさ、箱根から今日此所へ參りまして、何の氣もなく食事の折、給仕の女中が訝し氣にしきりと妾の顔を見詰めて物問ひたげに仕まする故、如何した事とたづねましたら、離座敷の御方が畫いておいでの、油畫の中の女の顔と、妾の顔とが瓜二ツ。寸分違はず似て居ると、言ふより話の口が切れ。それからそれと聽出して畫師は貴郎と知れた時は、まア妾の驚きは如何でせう。丸で夢中で御座いました。

直ぐにも參りませうとは思ひましたが、良人の手前も御座んすゆゑ、何氣なく其場を過して、やッと只今參りまして。とは言へ何の切掛もなく御目にかゝるにかゝりかね、次の一間に茫乎として只立ッて居りましたが、貴郎が最前の御言葉を聽きまして、それほどまでに妾を賤しんで御いでなさるのか、又一度は之れ程までに慕うておいでなされたのかと、思出しては身も世にあられず。不覺に泣聲立てまして取亂したる涙顔、變ッた樣で御目通り…………と跡は言ふにも急き來る欷歔。

亂水聽終ッて畫面の美人と眞實のお徳と見くらべつ。

扨ては矢張其方は天女。誠に貴き心掛、さり

とは知らなんだ亂水は白痴、此逆境も自業自得か。これお德さん、御詫を申す、御詫を申す、今と成ッては此他に何も又言ひますまい、只一言御願ひ申すは、此世で人の妻たる貴女。未來は何んと亂水の最愛の女房に成ッて、面白い、樂しい、苦勞のない、一家を成しては被下ぬか。　妾からこそ願ひますれ、必ず未來は夫婦で御座んす。　その聲は貴女の聲か。何んたる喜ばしい聲でおらう、えい、それ聽けばもう望みなし、と劇烈なる歡喜の情、思はず知らずお德の手を握締めしが、力を込めても氣の緩みに吐出す鮮血はクリムソンの色をうばひ、茲に有髮の尼と、後面之景の塗終らざる油畫とを遺して、石山亂水は息絶えたり、其死顏のさも樂し氣なる。

（完）

◉旅畫師

上之卷　萠出つるは若菜にあらで、雉子の羽根に及ぼす野火

三月三日雛祭の翌日は、殘んの白酒に重詰の輕きをも携へ、野にもあれ、山にもあれ、行きて遊ぶを田舍の常とす。これも其類ならん。大和芳野山の花なき處、猶消やらぬ枯芝の小山に、色さびたる毛氈を敷きて、上には組重酒筒などおき、五ッ六重ほど女羽織、しかも肩揚の取れさるもの、たゝみもやらず散らかりし他、主と思ふ人は見えず。只隔りたる芝の上に旅裝束なる一人の若者。横になりて足を休

めつ、下なる里の景色を眺めて、余念のなきがあるのみなり。

若者年は二十一二、乞食さへ何とやらてふ、春やけに色は黒く。塵の中に往來してか、髪の艶は赤きが上に、風にまかせて亂れしまゝ。されど目鼻立の尋常さに、何處となく氣高く見え。衣服の異様に唯物ならぬと目のつくも道理。一寸一兩と昔は云ひし黒羅紗の羽織を、房々とせる紫の打紐、結び様も嚴重にして、垢のつきたる着物を治め。糸ぬけたる博多帶、矢立を入るゝ余地をあけて、廻れる腰は三重と半ばか。これにはさめる裾を取れば、四重にも及ぶ細り男。見たき手は菅笠にてかくし、足も脚絆に包みてあれば、深く調べぬが作者の慈悲。

時は今。小山の下より登り來るは、十六七を頭として四五人の女連、中に十一二の男の子一人。手には各々土筆早蕨なんど、袖にも前懸にも、皆其の草々。親の目に涙、男の目にも涙、ても子供らしきと。さても此一群、彼の毛氈の座にたどり、つきての後は休ふ事少しもなく、何か睦じさうに語り戯れ、我多し、彼少しと、得物の功名に余念なき体。若者も一寸此方をふりむきしまゝ、又も下なる景氣をながめて、同じく余念のあらぬ體。

抑も下なる景色と云ふハ、絶景にして無類なり。後は一目千本てふ櫻林、花まだ咲ねど苔づく枝ぶり、さすが名所だけ、時ならで感ずるに餘る、前ハ芳野川の流を望む、鴨の住みかぬる急流とはまこと。瀬をつくつて白布を敷る形。もつとも兩岸の菜種畑は、黄と緑の切續羽織をひろげたる様にて、これは古

着屋の古き洒落ぇ似たれど——河豚喰はぬ人に語るな——其様はまことにかく。かゝる次第の色合を、一段廣く畵しそむれば、一面の田景大和大半の廣さは皆、黄金と緑の色とにして、これに霞の彩色よく、遠く行く程薄らぎて、後は茫々たるその限りに、峨々と聳ゆる金剛山、峯には掛る雲なけれど、中程は切れて空に浮べる形、風吹かば飛ばあん、止めよや鳶、凧わぐる兒はさけぶとも。

これだけは若者の眼にうつりて、若者の心を樂ましけん。されど毛氈の一群は常に慣たり。友と遊ぶを以て樂みとなす。樂漸く傾き、目漸く轉ず。一人見出せば又一人、一同彼の若者を見て、一同に笑ふ。

《ちよいとおかしな奴ね——》

《こわい人だわ》

《泥棒見たいな……》

《わッ、きこえると怒つて來ますよ》

一言づゝの渡り臺詞も深くは行かず。又も立あがつて、今回は鬼事、聲高くおめきて、裾もわらは。さはがしさよと若者ハ、顔をしかめつ、こなたに向きしが、はじめこそ此意氣組。いつかは解けて和ぐ顔。實に吾も旅せぬ昔しは、かく睦じく戯れたりき。樂もしき友もありき。今は漂泊の身の悲しさ、恐ろし、こはし、はては泥棒なぞと云はれて、其群に入ると難きは勿論、見てさへ呉れぬ我姿も心をも。嗚呼戀しきは昔なりけり、旅せぬ昔の身なりけりと、——さすがは年の勢——うつかりと見とれてや居る。さ

れど猶見むきもせぬ一群。中に年上の娘、容色も衣服も人より上の娘、折節こなたを打見やるは、若者を痛はりてか、但し又心ありてか、否全く左にはあらで、やはり油斷を見せぬがためなり。

これ此の時若者の情は如何。草鞋を捨て元の身姿を見せたきが山々。くやしさは登りつめ、海の如くもて云ふ心、穏ならず、溢るゝまでに無念、口惜い。それも一時。思ひなほす所やありけん、見ぬ顔して風呂敷より厚紙、上には白紙そへしと、鉛筆一本取出して、眼下の景色をぞ寫しはじめぬ。此樣をまづ見出して、それと皆に傳へたるは、彼の年上の美しき娘にて、先づ近寄りしは十一二の男の子。一人二人、終には皆鬼事をやめて、若者の後より窺へり。されど彼の發見したる娘のみは、躊躇ふて寄もせず、よらぬのみかは。

《皆さん、なぜよしたの、お山さんも鬼で居ながら廢すなんて、卑怯じやアありませんか》

と呼びぬ。鬼に當りし娘は卑怯と云ふに心いらちて＝よしたのではありませんよ＝ト云ひつゝ毛氈の方に歩みよれば、他も又從ひて元に集る。集れば彼の娘少し笑を含みて。

《皆ンな、あんまり騒ぎつゞけたので、それで草臥たのでせう、一服として休まうじやありませんか》

ト先づ我より腰をすゆれば、どよめきて皆之に從ふ。一擧一動長者に傚ふ折合のよさ。なれども男の子は此群を放れ、袂より椿の葉二三枚、紙に包める煙草とを取出して。

《アヽ一服さ、一服しやう、お前なんざア一服つて有名無實だわ》

この体と詞に笑ひそむる娘供、中に澁り切つたるは又彼の娘。

《おや〳〵又……今から煙草なんぞ吸つて、お父さんに云告ますよ》

《云告たら、しどいぞ》

《おや睨むで、姉を睨む者がありますか、それにマア其煙草は何處から持つて來たのだい》

《何處ツて……》

《それに煙管が無いもんだから木の葉なんぞに卷いてさ》

《木の葉に卷くのは……紀州の熊野ではみイんなかうだつて、裏の爺やんが云つてたい》

(詞の樣子にては姉弟なるべし)姉が止むるをもきかず、マッチ取つて、點せんとすれば、折ふし、強き風に消ゆ。法わりと云はぬばかり、枯芝の中にてすり出せば、思ひの他パッともえあがる。ハット思ふて消さんとあせれば、風は火の手を助けて走る。見る間に枯芝一面。小山ももねて櫻林にもうつらんず大事に、それよど騷ぐ娘子供、只あれ〳〵とさけぶばかり。道を開きて火の手を通せば、白烟又逃ぐるを追ふ。

此時彼の若者は、奮然と立ち上り、着たる羅紗の羽織ぬぐ手も見せず、猛火一重飛びこえて、芝の燒け迹黑き中に入るや否や、烟と火炎をやりすごして打散らしたゝき伏せて、これを消さんとつとむる、げ

に樣の勇ましさ、火花をぞ散しける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『見ればお衣服も……お髮も焦げて居ります、まことに御氣の毒でございました、元は皆弟からの起りですから……兎に角宅まで……どうが宅までお越し下さい』

年上の娘が、若者に云ひし此詞、これぞ此話の糸口を引き出しぬ。

中の巻　長し短しは借物の重衣、緣定まッて姿畫の遣取

（大和の國の農家ハ一流ある建方にて、長屋つきの門構、曰く窓と云ふ武家づくり、少し長者めく所に至れば、石垣高く築き揚げ、溝を廻して要害堅固、白壁に三角窓など、一寸見れば城かとも思ハる。内に入ればさしたる事なけれど、庭園の美しきハ又珍らしく、都よりわざ〳〵見にとて來る人もありとかや。中にも芳野山の麓、湊野依友と云ふ人の庭こそ、先づ親指にまげらるゝ物なりとて、人常に繁く通ふ。主人依友と云ふは年五十余、元は村の名主、中頃は戸長、今は衛生係とかの閑職にありて、随分の周旋家なるよし。此人、其庭と娘の小兼と云へるが、事の他の自慢の由にて、二ッ合せてほむる人あれば、身も共になりてほめ、一ッなりとも譏る人あれば、其人を譏る事倍なりとかや。されば、庭に入る人あるに委せ、遠慮なく見せ、其代として庭の來歷、築造の骨折、昔し殿樣が鷹狩の歸さに立寄玉ひ、御賞美の詞ハかく〳〵、近頃知事公御巡廻の途次に休み玉ひて、なに〳〵とほめ玉ひしと云ふ事より、

この石は何の國より、この木は何の山の何とそれは〳〵細密に說明を聽かするとて、此方を面白がり目のわるき者までとは、興さむる次第なり。して又娘はと云ふに、衣かざらして其所此所と、人の寄場に出すが常。娘小兼は今年十七。一通の敎もあり、分前もありて動かす可らず、子供の內は兎もあれ今となりては、うしとして避る事多し、それも重ねては否かたきか。三月四日、弟の仙三、近所の娘四五人を連にして、山に登り遊びしをりから、計らず仙三の過失より――花見る人の涙――、櫻林を燒きつくさん珍事の卵を、旅の若者が鐵石の心、義に勇んで消し止めくれしに、喜び禮を述べんと近寄り、見れば衣服の燒たる樣子、これは一先づ我が宅までと、伴ひて歸りしは中々、氣のきゝたる捌なり。

父依友は娘があやしき若者を伴ひ歸りたるなれば、一時は驚きたれど、次第を聽けば、かく〳〵の恩人、若者に挨拶して來歷を問へば、

――美友學校の卒業生、西業次郞。畫を以て身を立てんとする者、今回思ひ立ッて諸國を遊歷し、あまねく山水の妙景を探り、兼て古器、古幅等の模寫に從事すると云ふ――

庭を見するとしても、賴もしき人物なれば、まづ〳〵と客間に通して、談ずれは答ふ、答ふる詞あッさりとして、面白さうな性質。之ならばと安心していなむを無理に、それお風呂、それおめし物、丈は足らずとも今春の新調なり、二三日御逗留ある其內には燒迹つくろひて參らせん、殊に祖先傳來の古物、美術取調員より賞狀を得し物澤山あり、御心をきなくとたッての詞……)

湊野が奥座敷、此所の前こそ主人が得意の庭の一部、築山のなき平庭に、泉水のありと云ふが山なりとかや。其水はもとより淸くして、何處より來るとも知れず、何處へ去るとも知れねど浮く木の葉一ツ、沈む塵も見當らず、養ふ魚の腸まで澄渡ッて、水底に影逍遥せり。之を包みて、漣歸す岸を限る小芝、枯葉の中に翠を含みて、余る所あらはれたる岩の上には、まばらながら豆蔦のをぎなふ。なほも延びて水に臨む臥龍松の根に及べば、これは雪よと白苔の止め顔。さて此泉水を曲りつ折れつ、をぼつかなくも横切る八ッ橋、下にはお定りの杜若、言い分ばかり、面より二三分ものびてあれど、風吹く度に沈む事繁ければ、とまりかけて見合する蝶二ッ三ッ、はては飛んで向に至る。此所にハ笠のみ見ゆる春日燈籠、下はつみこみの躑躅に蔽はれて、伊部燒の鹿は岩の影となる。これのみ、永住の地ならずとや又飛んで塀を越し去る、塀と云ふは彼の城風の物、されど夫は外よりの事、內からは有とも見えず、かえッて見ゆる塀外の菜花一面、色に香をそへて囀る雲雀の聲ぞわたる。これを見晴す一間。さすが山國、材木の組立に苦勞せぬだけ、丈夫が見ゆる一間の內にハ、彼の業次郎が筆を以て坐す、脇には湊野の息子仙三一人、手のだるさうに墨を擦りつゝ、まがりはせぬかと心づくる。前には畫の具皿其他、古びたる卷物、木像など數多く竝ぶ。筆を置く業次郎。

《よろしい〳〵。あまり濃イ過ぎても………》

墨を倒す仙三。

《アー手がだるくなッた》

《御苦勞樣。……ちッと庭へ出て一休しませうか》

業次郎立てば、仙三ハ早や庭下駄をはく。足に余るを引ずりて音高く。八ッ橋のほとりにかけよれば、業次郎は漸く水の岸に近寄る。寄ッて何氣もなく覗く水に「鏡ケ池や春の長閑さ」寫すともなく寫す姿。

――こはそも如何に美しの若者――我ながら我の美しさに只茫然と見惚る山鳥、それか。　それよ、それもしばし。ハット氣つきて迹しされば、バッと立つ不意の笹波。氣と共に定るを待ちて、再び覗けば、なんの幻像、變りなき以前の顏。されど姿ハ絹物の重ね衣、髮梳りて顏も光る。噫、アッ……………。

《どうか被爲ッたの》

向ふよりの掛聲。

《ヱッ……なに、金魚が……金魚が居ますねヱ澤山》

《金魚なら此方にも居ますよ。緋鯉も》

《さうですか、どれ……》

呼ぶに委せ――足をも。飛石靜に踏み行けば、向ふからも又其音。フト見ればつゞく庭の、植込を限る柴戸のほとりに、娘の小兼が四ッばかりの、男の子を負ひつゝ來る。

《おやお庭に居らつしやるの》

過し日にかへて我からなつく莞爾やかさ。背の子供は之に反して、人見識かられども亦、業次郎が顏の澁さが故か。

《いや〳〵、あッち行こう、姉エちやん、あッち行こうよ》

顏を背にすりつけて、兩足を震ふ。

《おや〳〵そんな事云ふものではありません、ね、好イ子だ、ね、今に此お方が綺麗な花だの人形だのいろんな物を畫いて被下ッて、好いねえ、うらやましイねえ、だから音無しく……》

業次郎も不重法に。

《坊ちやん花が好かい、今に畫てあげるよ》

手慣せんとて餌物を投ぐれば、礫と心得散る雀。

《いや〳〵、行ふよ〳〵姉エちやん》

《ゑゝ、も、情の強い子だねゑ》

遺りをしげを足元に知らせて、暇取つゝ去る。後影目で送る業次郎は取られた玉の手持無沙汰、碎けて後の恨には、泣ぬ子供ぞ戀しかるべし。

所へ椽側傳ひて歩み來る主人依友。

《西さん、お茶を入れました、まづ》
かたじけなしと坐に直れば、宇治の銘茶、名物の櫻菓子。
《なんなら芳野葛でお湯は……》
《イヤ、それには及びません》
池を廻るばかり、後を取りたる仙三。椽側に上らんとするを睨みつけ。
《お前は勝手へお出、さ之を以て》
菓子二ツ三ツにて人を掃ひ。
《時に西さん、失禮な事を申す樣ですが、貴君は洋畫の方は如何で御座いますな》
《少しはやりますが、どうも》
《おやんなさるか、それは結搆。洋畫、洋畫でひとつ、其まことに申惡い事で御座いますが……西さん人の顏を寫しては頂けませんか》
《隨分寫せん事もありませんが、マア全体何方のを》
《ハイ娘のを願ひたいので御座イますが。實はかう云ふ仔細で。ま、由來から申ませう》
規則通り茶を一口。
《先頃或人の周旋で、奈良の金滿家の息子と緣談が出來ましたが》

《アノ小兼さんが》

《ヘー、それで一先づ見合と云ふ段になりましたが遠路の所わざ〳〵出かけるにも及ぶまい、便利の世の中寫眞でよかろうと云ふ相談で……すると、先方は中々の氣取家で御座イますから、此間油畫の額で送ッて來ました。さア向ふが油畫だのに、こちらが寫眞、吉事の糸口に釣合が惡うてはと妻が舊慴で。現在寫眞を寫して居ながら送る事も出來ず大平降》

《よろしィ下手でよろしくば一ッやッて見ませう》

《下手のなんのと、……有難ふ御座イます、早速の御承諾》

喜んでたゝく藥鑵頭、袖がさわッて本物の銀瓶を覆す。之はと驚く依友。業次郎はそれ所でなし、あの娘の縁定め、さてもあの娘の縁定め、つり合ぬとて書けと云ふ、小兼故の提燈持、馬鹿らしけれど否がたく。筆を喰へてうなづくのみ。

下の卷　妹と背の分れ〳〵、流れ行く芳野川の水

眠れぬ夜半。往事を追懷するが業次郎の質。今宵も湊野が奥座敷にて、書き出す今日一日の事。

○………髮撫でつけて正座に坐る小兼、着物更めて一段と美し。之に對ふ業次郎、——いでや我も、かねておぼゑの和洋折衷、寫生畫は得意なり。此娘が面其儘に寫して、婿君の心を得さしめなん。万一腕鈍らば、我に野心あッての仕業ぞと、腹搜らるゝも痛き事なり。初め山にて見し時は、つれなかりし人

〻、今は親しく敬まはるゝ、嬉れしさの禮心、心つくして筆を揮はん。——いざと毛氈の上に延ぶる絹地一枚。文鎮もて之を壓ゆ。脇には片手ついて依友、首をのばして仙三、抑も如何にとぞ、待構ゆ。此間無言なり。畫具解く音色と薄く、水鉢に刷毛濕すもかすかなり。其時業次郎、靜に羽根取ッて塵を拂ひ、擦筆之に次ぎて手に、心には長閑を持ちて、キッと小筆の方をぞ見る。之を受けてはづかしとや、——赫ッと——顏に薄く畫具をや解く袖に拂へど此塵は去らず。極り惡るさに下へむけば、光線の加減宜敷からずと、擧動でさとす業次郎。今は中々、心臆れて、益々濃色にぞ移りゆく。うつらす儘に過して、今はと見合せる顏。嗚呼、數日の滯留、此内にしば〳〵逢ふ、されば其人の美しさ、其人のやつれたる事、互に見識りて充分あるはづ、それに不思議今日しかも今に限りて、茫々眼の力失せ、誰やら、誰か、分明ならぬ霞中の櫻、霧中の尾花。知らず〳〵震ふ手先、自ら下る面。これではならず——。取なをす筆と心又見合せる……。それもいつかゆるみ行きて、今度ハ二人一時に笑ふ。つれて仙三の高笑、依友の苦笑。——これはしたり親の前。——主人の前——傍目こそはずかしかりと、氣を定め、一度、其下から又笑ふ、笑ふまじと唇を嚙絞れど、同じ事重りては、たまりかね、筆を投じて一語…………○

（寫眞がありますなら、それから……）

思はず出る詞に我と我を驚し、空想の幕切ッて落せば、枕屏風に英一蝶の富貴草、はて痴情の極、人

聽さやしつらんと、見廻はす傍には仙三のすや〳〵。勝手の方もひつそりとして、馬小家に蹄の音のみぞ響く。――思ふまじ〳〵、見る影もなき我身を、などいたわる人のあらんや。消す火の手の働き勇ましかりしが故に、我が畫く描の美しきが故に、人皆敬ひ貴ぶ。これ全く繪畫の德、風流の德。そを自惚るは大なる誤りなり。加えて小兼ハ夫の定まりし人、我も又大望のある身。よし、小兼に夫なく、我に大望のなきにしろ、亂れたる世を嘆ずる我にして、不義の人となりさがらバ、何とて合されやう月の鏡。笑止之は杞憂なりき。泉水の邊にて、奥座敷に於て、爲せし小兼があの風體は全く我が僻目なりけりと――禪に拔けると間もなきに、怪しや忽然と入り來る一人の娘。誰あらう小兼なり。殘念至極、腦裏も亂れたるが故に、目の先にこそ姿ハ見ゆれと眼を閉ずれば小兼の聲なり。

《仙ちやん、お前寢て仕舞ッたの》

《おや御免なさイまし、克くおよッて居らッしやるのを……》

正しく其聲、見開げば正しく其人。

《いゑ搆やアしません》

口には云へど不審なり、抑も何故に、何用あッてか。

《貴郞、つイ寢衣を着かゑさしますのを忘れて居ましたので。………仙ちやん、おさましな目を仙ちやん》

夢中ながら仙三。

《いやだよ。いやだッてば、此儘で能いじやなイか》

と布團スッポリと冠る。

《おッかさんに叱られますよ、これ仙ちやん》

《今時分に來てなんだい。いやだッてば、どうしてもイヤ〳〵》

《じやア着ないがいゝ、おッかさんに左樣云イますから》

《ウン〳〵、ウ――ムニヤ〳〵〳〵》

寢衣を二ツに折リながら。

《兄弟とも情が強くッてこまります》

《可愛さふに眠いからでせう》

《睡いと申せば、あなたこそお氣の毒さま》

《イツエ…………》

二ツに折リしを又のべつ又折リつ、此所去るでもなし、終には詞もなし。業次郎は手を胸に載せて、目を閉ぐ。

《あなた、…………あの畫は幾日頃に出來ましやうか》

『畫ですか、……まだ二三日は。しかしお氣の毒です』

『なぜで御座います』

『でも美いお方のに下手ですから………』

『アラ、あんな事を………』

暫し無言、やはり手を載せ、目を開かず。のべつ、折りつ。

『アノ、あなた。西様、折入ッて願いたい事が御座いますが』

次ぎて演べかゝるはずみ、俄爾起きあがる仙三、突立ちて目をこすりつ。

『ヂヤア着かえ様か』

『びッくらしたよ、不意に』

『だッて話なんぞして八釜敷くッて寝られなイものを』

『では此所へおいで。さア、さ、早く………』

小兼は仙三に寝衣着せつゝ。

『ほんとにお願い申したいので御坐います』

『まア何んな事です』

『アノ――』

仙三を楯にして顔を隠しつゝ。

《畫の事につきまして》

此時仙三、小筆の手を離れ、兵子帶を卷きつゝ、走りながら厠へ。跡見送ッて。

《申惡イ事ですが……思切ッて》

手に衣もなく、前に楯なし、顔うつむけて。

《思切ッて醜く、寫して頂きたいので御坐います》

《ヱッ、醜く……》

《この儘でも醜ふは御坐いますが》

《それは、ま、どうした次第です》

《其仔細は……》

醜く畫けと我から望む、これ照君の裏からにして、大和は紅葉が筆に咲けど、似て非な事よと、迷ふなり西東。南の障子あけて、歸る仙三。

《姉さん、まだ居るのかい》

殘る詞の葉、移したさも、垣は弟のせめ詞の葉。越られぬ、つらさを忍びて、置く露の一雫。

《お休みあそばせ》

心を留む、姿ハ去ッて。妙なる薫りぞ眠れぬ種かも。

* * * * * * * *

芳野川堤、柳の渡場近し。今小學校の授業終りて。歸り來る童、乙女、麥の莖に笛を鳴し、豆の葉合みて舌皷打ちつ、騒がしくぞ歩む。之にすれ違ふて來かゝるは、業次郎と子供負ひたる小兼。小包持て依友も從ふ。見れば業次郎の出裝、又も旅する物の如し。此三人は生徒の群を一々に見定めつゝ。

《まだ仙三は歸らぬと見ゆる》

《あちらの道を歸ッたのではありませぬか》

《ではお目にかゝれませんか》

二三歩行く後、或稲村より。

《バアーーッ》

出る仙三づか〳〵と走り寄り。

《西さんはお歸りなさるの》

《私はもう歸ります》

《なぜお歸りなさるの》

《今日届イた東京の新聞に、私の師匠が大病と云ふ事が出て居ましたので、それで急に歸るのです》

《おや〳〵淋しくなるなア》

《れ前も御見送りをするかい〻》

《行かなくッて》

同勢傳ひ行く道すがら、背の子の情知らず。

《姉エちやん歸らうよ、お内い行ふ〳〵》

願の筋のある此身、一言云ひたさも、親の前におぢて隙間見る時に、歸うとは何事ぞ。——今暫し忍びてたべ、これ好兒——

《好い子だから、音無くね、音無しくしてねえ》

背の子定まりかくれば、前の親。

《さう、むつかれば、お前は此所で御免蒙るがい〻》

如何なる詞——れ情ない父上樣——

《いえ、もうぢきで御座イます》

云ふ内船出の場所、河原へと着く。待兼ねたる柴船の船頭、友綱片手に、とく〳〵とさし招く。依友は立留りて。

《この船でお降りなされば、流れは早ふ御坐いますし、今夜中には橋本へつきます、船頭い叮嚀な

者ですからお心置なく』

『まことにれ世話になりました』

『お世話とい手前共の事、殊に面倒な事をお願い申して』

『イエ、どう致しまして。東京へ着き次第お送り申します、で、あのお寫眞は暫時拜借してをきます』

『どふか、吳々もれ願ひ申します』

云ひ置きて船の方へ依友。此間にと小兼、ひろむる眉、ひそむる聲。

『お願い申す苦い仔細を申したうは御坐いますが……』

『大概察しては居ります。しかし小兼さん其御注文通りには出來ませんよ、これと云ふも、貴孃のお爲めです、貴孃のお爲を思へばこそ……』

『それは有難う御坐いますが、どうも……』

『どうしても成りませぬ、私は少々考へがありますから』

云ひ切つて船の方に急ぐ、待てと云ひて止められもせず、心の内の悲しさは解けねど、友綱は早や。二ッ三ッ搖ッて中流に出づ。柴の上には業次郎、菅笠を上げて之を名殘、依友は手を、仙三は帽子あげて之を名殘。顏上かねたる小兼の一雫は、增す水の瀨となるや如何に。

流れ、ながれて行く末は、跡白帆のみぞ見えける。

（巻の外）湊野にては待てど暮せど書の來らぬに平降せる内、先方よりの催促に、止むを得ず寫眞を送り、都合能く整ひし曉、通運にて屆く姿畫、見れば美し小兼其儘なり、されど見本にと送りし寫眞は如何にしてか歸り來らず、且ッ手紙の端に『人知れぬ苦心の程お察し被下』とは小兼にのみ合點ゆくべし。

（完）

◉娘巡禮

上の巻

富崎より洲の崎に通ふ街道。房州一の難處にして、二里が間は一面の砂路。此間家と云ふは一軒もなく行けども〳〵右手に兀山の連りて、左にはとう〳〵と打寄する大浪ばかり。目なれぬ貝拾ひながら、二三町は面白く歩けど、踝うもれて心のみ先立におれこみ。眞中頃にては、前後の遠さに、心ひよ〳〵折れ、身は倒れて得たゝぬが多し。まして夏の暑さには、木影一ッあるでなし、上下より照りつけられ。冬は寒風の砂巻あげて、頭より冠せられ。運惡ければ、命にまで別條あるより、大廻りして山の影を行

くか、浪平なる時は、漁舟やとふが旅客の常。それを又我から好みて、此難所を通らずば、御大師様の御利益なしと、名のみ春の新一月、雪花飛ばす寒空に、たどる二人の坂東巡禮。一人は六十餘りの老母にして、一人は孫と見ゆる十四五の娘。過去の罪障消滅のためか、未來の功福を祈るためか、或は現世の苦を避るゝためか。口に唱ふる南無大師遍生、金剛の杖ハ氷の様なる娘の片手。可愛や桐油の包、重きを負ふて、一歩一歩に抜足する其有様。雪にあさる白鷺、それは風情あれど、これは又あはれなり。肩に落せる菅笠に風含みて、跡へと歸す度毎に、亂るゝ前搔合せ、そッと口にあてゝ、又老母の手を握り。

「おばあさん、どうも寒い事ねえ。

腰にそりうたせ、唱名の口を止めて。

「あアまことに寒いねえ……お前風邪でもお引ぢやアないかへ。

「インエ妾はなんともありませんが……おばアさん、お寒くば荷の中に、妾の半天がありますから、それを上にでもお着なすッて被下い、よ、ほんとに妾は寒くないのですから……。

「イヤ〳〵妾はそんなにはないから、遠慮せずにお前着ておくれ。

鼻のほとり撫でゝ、咳一ッ苦しげにすませ。

「今日は新暦のお正月ださうだが……内に居れば着物でも着かへて……立派に年を取のだがねえ

「おばアさん、もう内の事は言ひますまいよ、折角忘れて居ッた處ですから。
「だッてお前、なんぼなんだッて、あん、あんまり彼のしむけが惡いから。
ほろ〳〵と涙をこぼして。
「思出すまいと思たッて、斯有時には思出さアね。
「あれ御覽なさい。砂烟が立ッて來ましたよ。早う洲崎迄參りませう……あれ〳〵もう來ましたよ

浪の音はげしく、見る内自然眼ふさぎて、耳も口も顔も、はては体まで飛はされたかと思ふ程。娘は老母をしッかりと抱きて、菅笠の天に舞ふを知らず。
「恐ろしい砂烟だッたねえ。
「目にでも這入はしませなんだか。
「インエ目には這入なかッたが、どうも息が出來なくッて、今に死ぬるかと思ッたよ。
「妾もどうしたらよからうと思ひました。
「おや、まアお前の髪は眞白になッたよ、まあ〳〵しどい物だねえ。
「おやさうですか……。
「どれ此所へお出し……。

手拭取りて掃ひつゝ、又も續く老のくり言。

「此頃流行る吾妻いてふとやらにでも結ッて、紅お白粉のつけたい年だのに、かうやッて巡禮するのも、前世の約束とやら云ふのであらふよ。

「おばアさん、まだ向ふまでは一里もあるでせう、おそくならない内に、此砂原を通り抜け様ぢやアありませんか。

「さうだねえ、又風が吹いて來ると難儀だから。

思ひかへして元の唱名三昧。なれても寒風は、おひづるの上よりつんさぎ。破足袋の中に溜る砂、踏入る毎の痛さを忍びて、漸く進む一里、二時間はどかゝりて行き盡し、まづ安心してふりかへる今來し路。渺茫として眼の限遠く、いまだゝ立迷ふ塵の中を、濱邊烏の飛び入るばかり。迹に續く人一人も見えず。何として此所まで來しぞ、これも佛様の御加護か、孫娘の手引こそありがたけれ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

坂東三十番の札所、洲の崎の養老精舍に、入相の鐘響き渡りて、元日も亦無常。

居ながらにをがむ西方彌陀の國來りむかへん時をこそまて。

これを口に暗んじて、今宵此所に通夜するは、彼の老母と娘。砂路の長さに殊のほか草臥て、次の村までの勇氣はなし。観世音の常夜燈たのみて、其身其儘の仮寝、枕に浪の音通ふばかりが眞實にて、寶船の夢いづちいづこを逍遥ふか。眠い顔寒い顔、疲勞しとはなほさら見せず娘は老母の腰をさすりて、

身を楯に風を防ぐ。

「もういゝよ、もうよしてお前も横におなり、御免蒙ッてちとおやすみ、え、それでないと又翌日歩けないから。

「インエまだなんともありませんから。

言はるゝ度に疲勞しと見せぬ爲、一段力を入れて撫でる。それもいつしかゆるみて輕くなれば、老が身の脆さも知れて、答うすらぎ、唱名止て心から寐入る。寢入る顏つくゞとながめて、こたへし涙一時にはなし、何が悲しふてか泣き伏す娘。

噫道理。それ十五とは娘心の盛んなる頃。お正月とは遊ぶ時と云ふ變名かと思ふ今宵。人ハ歌留多双六にうつゝをぬかし、福引の景物に趣向をこらすを、御詠歌謠ふて手にハ鐘木。おみくじ引けバ四十七番の凶とある。凶から吉に歸ると云へど、吉又凶に歸ると思へバ、流石心弱くて悲しく、何が凶かと種々思ふ内、はてハ他の事思ひ込み。故郷の都に友達娘の樂遊び。我身も共にと思ひて氣のつけば、早いと云ふ滊車に乘りても、二三時間は費す道程。今と云ふ今の間に合はず。まして鐵道のあるでなし、なし樣のなき房州の海邊。物凄ふ鳴る潮風寒く、さし時知らせる法螺が音ひゞきて、燈火繁くまたゝき初む。寢入りし老母が顏を見ては、袖しぼる源となる、なぐさむる物はなきか。見れば多く懸たる繪馬の中に、美しき押畫の額、照手姫が潮酌む處。新駒と云ふ役者の似顏。たしか隣家のお梅さんの羽子板に、

この様なのがあッた事よ。こんな事思ふ内、つひとろ〳〵と体安んじ、心散じ、老母の上に重り合ひて、たわいなき身とはなりぬ。

下の巻

起きて居る間は空想に行末を考へ。眠りてハ過ぎ越し方を夢に見る。今宵娘は如何にしてか、飛び離れたる不思議の夢。

——軍服かざりたる立派なる男、いつの間にやら我夫と定まり、今日出陣の出装勇ましく、サーベルの音馬の嘶これも亦勇ましく。軍帽取ッて渡す時は何となく嬉しくて、莞爾と笑めば、それでこそ我妻ぢやと夫の微笑。随分お手がらといへば、凱陣を待てとの一言。馬の横腹一ッ蹴ッて乗り出す所は——不思議我屋の前は——いつの間にやら修羅の街、火花は大砲小筒より咲き、鯨波の聲は兵卒の裂けたる喉より。入り亂れ、引分れ、虚々實々の其中にも、一段目立つ我夫の働きぶり。あぶなし、今飛ぶ玉——丁度はづれて。あやうし、後に敵一騎——切り捨て進み行く。眞向よりのそれ玉、後より敵一騎。恐ろしき一喝を名殘、咄と地に落ちて馬のみ飛び去る。淺間しや、妾のみ迹に殘りて、何事を樂みとせん。さらばと屋敷に火を放てば、炎々と燃ゑ上る——驚き醒れば、こは如何に、堂内一面白煙滿ちて、紅色の猛火立のぼる。これのみは眞實なりけりと、いそぎて老母を搖起せバ、いづくにてか高らかに笑ふ聲。いづれと見れば、火の正面、に伊賀栗頭の男一人、二度の驚きをまづ〳〵と制して。

「巡禮の人、さぞ寒いだらう此所へ來てあたんなさい。

ハイとも云はず、何とも答へず、老母抱きて恐る〳〵見れば、横手に安置せる不動尊の御堂より、護麻壇運びて、たきびせる体、男と云ふは年頃十八九。薩摩飛白の綿入同じ物の羽織、紺木綿の兵子帶ぐる〳〵とまきて、素足に草鞋かけたるばかり。見つきこそ恐しけれ、鈴ヶ森の雲助、函根の輿丁と云ふ格ではなし、心おかれぬ書生と見て、漸く胸をなでおろし。今更の様にゑしやくして、寝ざめの寒さを取かへさんと、ぢり、ぢりと火に近寄る。

「お前達は感心だのう、此の寒いのに……僕が此所へ來たのも知らず寝入ッて居るから。僕なんざアたき火でもして暖まらないと兎ても寝られない。

以前より何事と、只あきれて居し老母。

「ハイ〳〵御免被下いませ。

遠くより手をのべて、嬉しげに暖りつ。

「お影様であたゝかになりました。

「霜がかゝッて居るから外の枯木はいぶッていけない。お前達は此火の消ゑないやうに番をしてお呉。よく燃ゑる木を取ッて來るから。

言ひ様立ッて外へ行く。此時老母は、今まで若者が腰掛たる物、はげたりと雖も、黒塗の經机と見て、

俄に腹立ち口の內につぶやきつゝ娘にむかひ。
「ほんとに、もつたいない事をする人だよ、全体何者だらうねえ。
「おばアさん油斷は出來ないねえ。
言ふ內、歸り來る若者。
「外にはなんにもない、こんな物しかない。
投出せるは大願成就の古繪馬五六枚、見るより老母は赫と怒りて、はツたと睨む力はなけれど。
「お前さん、飛んでもない事をする人だねえ。
恐ろしきか、又氣の毒にてか。
「いゝよ、おばアさんいゝぢやアないか。
「どうして……どうして、あんまりしどいからさお前さん、そんな事をすると佛樣のお罰が當りますよ。
若者しきりに、はゝ笑ながら。
「あゝばアさん、僕が惡かツた、實に亂暴だツた、もうこんな事はしないから、そんなに腹を立なさんな。
「全体お前さんは、なんですね。

「僕か、僕は書生さ。
「其書生さんが今時分此邊にお出なさると云ふのは、どうした仔細なのでス。
「は、はッ僕を怪んどるな、そんなに恐れなくッてもいゝや、僕は今云ふた通り書生だが、此正月休暇中、東京でぼんやり暮すのは、つまらないから、此房州から上總をかけて漫遊して居るのだ。
「へヱー、やはり書生さんでも廻國をなさるのかねエ。
「ヲホヽヽヽいやな、おばアさん、おほヽヽ
と、此處に打解けて語り合ふ内。及ぶ三人が身の上ばなし。老母は云ふ、實の息子は身持惡く、親を親とも思ぬ故、孫娘連て此廻國。娘は云ふ、産の母の死したる後、まゝ母のつらさに、祖母樣と此巡禮。書生は、軍人の志願者と名乘。名は何某。生國は何の縣。今の番地まで云ひ交し。一河の流一樹の蔭。古き諺を新しく誓ひて。立身なしたる其後は、必ず尋ねて來られよと喜ばせ。此旅はいつつきる事かと泣き合ひ。一見舊知。互になぐさめて、遺りの夜を明し。東雲烏に驚きて、御手盥に顔を洗ひ。書生は東。巡禮は西。東には昨日通りし砂原あり、用意して行き玉へと心づけ。西には鹽見村の伏龍松、舘山の觀世音、鏡ケ浦より那古の寺。無事に札をおさめられよと意をそゝぎ。御縁もあらばと山門にて交す詞。分れ〳〵、見送り〳〵、あちらよりも、こちらよりも、終に姿は見えずなりぬ。
さても奇妙にして又奇又妙なるは、今までの孝行娘打ッてかはり、萬事何につけてもはき〳〵とせず。

歩む事、腰の曲りし老母より遅れ、一言云へば答へなし。二言三言、漸く一句。四言五言云へば、之に倍する口答。それも那古寺の石段あがりてからは、心持元にかへりぬ。

（完）

◉盆燈籠

（其二）

山より出て尙山里の中を流るゝ名無川の川淀に村々の子供大勢集りて游ぎぬ。鹿ならば一飛にすべき程の幅なれども向ふの岸に泳着く者は稀なり。岩から岩を傳ひて又岩づたひに歸り、不時に勇氣出してばちや〱と乘出せど、急に又引歸して底に川童が居たと言ふ。此種の水練家は淺き處に滿ちて、手を突きながら足にのみ水を蹴るあり。面冠りの一流にて無二無三に進むあり。小石を重ねて城を築くあり。手拭の端を二人して持ち目高をすくはむとするもあり。這は寶の石なりとて赤き色なるを珍らし氣に拾上ぐるあり。藻潛りて砂の中より埋木を起し、削りて木太刀を造らむと言ふもあり。此方の一群の軍戲して水を掛合ふ樣勇ましく、飛沫高く揚りて天馬の羽根雲を煽ぐに似たりけり。

不意に一人兩手を擧げて叫びぬ。見ろ〱彼を見ろ！又一人叫びぬ。桃だ〱大きな桃だ。梨もある。

一時に鳴を靜めて皆水面を見渡したり。果して川の上より好く熟したる桃と梨と亂れながら流來りぬ。淸き水にたゞよひてどんぶりこ〳〵とそれは〳〵澤山々々。何處から如何して此賜物の來れるかを問ふの暇なし。皆又前の如く騷出して、菓物と共に浮沈みしぬ。溺れむとして驚き、折角拾ひたるを皆無落せしもあり。

木蔭の岩の上に立ちて此樣を笑まし氣にながめ居る一人の旅人あり。片手に麥わら帽子を抱えて、これに山の如く盛りたる菓物を、攫みては投げ攫みては投げぬ。髮長く縮れて獅子の如く、鬚しよんぼりとして山羊の如し。汗には染まぬ麻衣の雪とも見ゆる白さなれども、皺多く寄りてわざとは出來ぬ縞を現じぬ。

傍に菓物を入れたる籠を置きて、これに渡したる荷棒の上に腰掛けたる商人あり。彼の眼は淀に騷ぐ子供等の方には注がず、惜氣もなく菓物を投ずる旅人の擧動に肝を消して。はい、三分が物を大方投げたわ。

後ちには籾を箕から移すごとく、帽子より川に明けて、もう之限りと言ひ顏の旅人。さも嬉し氣に笑みつ。　何んと子供は神樣ではないか、ト菓物賣に話掛けたり。商人ハ魂消たる面して。左樣さ、ト答ふ。

畵だ〳〵まるで畵だ、神の子達が浴泉の圖だ、ト此度は獨語の樣に首を振りながら言ふ。商人はれ負申

してと云ふ様なる調子にて。　左様さ、ト又た答ふ。
川淀の子等は流來る物の少くなりたるより、漸く川上に目を着け、岩の上に人ある事を知りて、扨ては彼の人の賜物かと言合さねども一同が口を揃へて、禮を言ふて、其次ぎの言葉には。　もつと澤山投げて被下い。
旅人は夢中に成りて、好し〳〵とうなづきつ、枝に懸けたる包籠を取り、中より白銀を出さんとす。商人は思ひもよらぬ花客先きと眞からの笑顔もて之を迎へ、籠の端に手に掛けて二三遍動搖れば、瑪瑙と琥珀と艶を競ひ、虫ばみの微瑕は底の方に隱れぬ。此時向ふの岸の楊を分て、ぬッとあらはれたるは色黒く髪赤く夜叉かとも見ゆる婦人、田舍訛の大聲揚げて。　其中に家の若は居なさらぬか。

（其　二）

それやこそ水野の鬼女來れりと俄に萎氣て誰も言葉なし。岸の黒女は之れを見て又吐鳴りぬ。　如何して斯う川遊びが好きか、其樣に游泳たくば一層鯉抱の息子に遣つて仕舞ふ事ぢや。さあ〳〵上りなされ、早く上つて來なされぬか、おい、これ程呼んでも返辭の無いのは、アヽ又何處かへ隱れたさうな。此所にある衣服は誰のか知ら……。
乳母、此所に居るよ、ト言ひて、淺瀬に首だけ出して縮居たる一人の子供、兩手に桃を持ちたるまゝ兀然として立ちたり。水は膝より下を流れぬ。

まア其黒さは。日に焦けて黒光に光つて居なさる、誰家の兒も同じ色ぢやに、見分られぬも道理。さアさア早く上つて來なされ、ト巖疊鐵の如き手にて招きぬ。　ウン最少し居たいよ。　はツて、水の中に左う長く漬つて居ては、流行病に罹つて、釣臺に載せられて、連れて行かれるに……。　でも、皆未だ泳いで居らア。　其皆も惡い、さア〳〵誰家の兒も上りなされ〳〵、若と一所に止めなされ、ト見幕中々に恐ろしければ、一同いよ〳〵鎭まりて、瀨々の音のみ岩に響きぬ。

呼ばれたる童は悄然として水を離れ、黒女も川原に下りて火の樣に熱したる平石の上の衣服を取り、塵を拂ひて待つ、童は其前に進みて乳母の顏を見上げたり。　いつもは拭かずに着るのであらう、トつぶやきながら、手拭を出して玉を磨く如く急々と拭きぬ。尚小言つゞけて衣服を着せんとなせしが、袖から出でたる兩手の桃を見付けて。　これは如何して持つて居なさる。

問はれて吃驚、不意に落せば、左右の袂俄にふくらみぬ。

少しの隙間も油斷はならぬ。水の中に長居した上に此樣な物を食べやうものなら、賴まずとも向ふから來て、山奥の避病院とやらへ遠慮なしに連れてゆくわな。萬に一其樣な事に成つた時には、如何も斯うも取りかへしがつかぬ。さあ〳〵御座れ、ちやツと御座れ。日影も大方出來てあらう、一息したら並木の塾へ御本の稽古に行なされよ、袂の物は捨て〳〵。これ、皆も弄物にするのなら好いが、食べる事は止めにさんせ。家の若は此通り捨てたぢや、ト枯れて殘れる底の草花、これまで振りて振りおとし、い

やがる童の片手を取れば、鷹に釣られし小雀の、もう如何しても身動きならずと、觀念定めて迹をも見ず、未だ濡色の髪の上に、大きな帽子すッぽり冠りて、草履ぺた〳〵引かれて行きけり。

迹に殘りたる子供達は、楊の動くが遠くなるを見て心をゆるし、又もや飛込み、泳出し、賽の川原に鬼の去りたるを喜びぬ。

最前より石地藏の如く直立して乳母と童の有樣を一心に見て居たる旅人。思出す事のありてか、急に皮籠と帽子を取り、對岸を行く二人を追はむと、橋を尋ねて急足に去りぬ。

茲に茫然たるは菓物賣りかけたる商人なりき。

（其　三）

後は絶壁、前は山田の幾重。横手の藪の中より清水流れて、庭を過ぎ、垣に沿ひ、槽に落ちて分れて數條の筧に入りぬ。家は西日を受けて風入惡しきまゝ、晝も蚊が居て痛き程刺すなり。

此所に彼の岩頭に立ちて菓物を投じたる旅人あり。脇には中途にして游泳を止め不平ながら歸りたる童あり。これを連れて歸りたる乳母もあり。

旅人は佛檀に向ひて涙を忍び、瞬きながら塗木の位牌を見守りたり。乳母も一杯の涙を湛へて、誰か先づ泣かば切放して我もと我慢に我慢、利根に船曳く水手が苦心、汗にまぎらして幾度も顏を拭きぬ。童は二人の樣子に誘はれて、これも悲氣なり。

旅から旅に暮す事六年。我と人とを忘盡して殆ど木石、無情の山河を友として、はがら〳〵と世を送つて居た岸萍水。その中でも只一ッ忘切れずに、頻りに慕はしく、なつかしく、急に逢たく思ふたのは實に御身等夫婦の上ぞや。山一重隔てたばかりの隣の國まで來て居ながら、寄らずに行くのも殘念なり。いざ久々にて顔を合せ、消えやらぬ夢の名殘を語りて、共に樂しまむと道を曲げ、わざ〳〵此所まで來りしぞよ。

白雲峠を登詰めて赤根の里を見降して、此家を幽かに認めた時には、嬉しさに不知涙も出た。彼の中には我を知る友の住むと思ふて。其友は安らかに暮して居る事と思ふて。今頃ハ何を仕てあるか、暑さに負けて病みでもしては居らぬかと、甲斐もない心配も仕て見たに、嗚呼病氣ならば未だも好し。もう夫婦共に此世に居らず、家ばかりが昔の儘とは、扨てまア何んたる悲境ぞや。

何故死んだ、何故死んだ。我より先きに何故死んだ。我の死骨を芒の原に尋ねて、弔うて遣ると言ふたのは誰ぞ。しかも可愛き子を遺して、何故死んだ、何故死んだ。

親はなくても子はそだつ、子のそだちゆく不憫さよ。我が力雄と名を命けたる息子は大きく成つて居るぞよ。今日も途中の名無川で、村の子供と遊んで居たのを、知らずに居た程大きく成つた。好い兒だ好い兒だ、父にも似たり母にも似たり。斯る好い兒を一人遺して、如何に病氣とは言ひながら、一月置きに夫婦が逝くとハ、扨てまア何んたる悲境ぞや。

君は滿足に埋れ、我は失望の爲めに葬られ、旅から旅に暮す身と成つて殆ど浮世を離れたる生活。これが詩人の本意であらうか……世に逆うて立つ者は其種の詩人と、嗚呼孤兒！

絕叫したる岸萍水、此所に至りて言葉ふさがり、淚は泉の如く衣の上に濺ぎぬ。黑き乳母は初めて此時、我慢の綱を切つて、兒を引寄せ、聲を出して、夜及も泣くなり。

（其　四）

乳母に淚はなき物と今の先きまで信じて居たるを、これは又如何した事ぞと怪限な顏して力雄訝りぬ。不思議ハ未だ之のみにあらず、最前名無川の川淀にて菓物を呉れたる餘所の人が、父の友なりと言ひ、義叔なりとも言ひ、名付親とも言ふ。仔細問はむとして乳母の面を覗込めば、黑女は見られじと横に向きつ、力雄を萍水の前に押遣りて。　これから若のたよりなさるは、此所に御座る義叔御ぢやほどに、好く行末をたのみなされ、ト矢張後ながら震ひたる聲にて言ひぬ。突附けられたる萍水も、眞直に對して語る能はず。首を垂れて僅かに頷けり。

岸樣。貴郞の御名は旦那樣から、好く聽いて知つて居ます。何處の御醫者も匕を捨て、藥も喉に通らばこそ、引息ばかりに御成りなされても、貴郞の御名を呼つゞけて、又しても力雄を、力雄を、坊を賴むは岸の義兄と、もうそればかり繰返して、心を遺して御死去なされた。又奥樣の御臨終にも、旦那樣と同じやうに、坊を賴むハ、市よ、其方と、岸の義兄樣より他にはないから、面倒を見てやつて呉れと

……言ひつゞけて死去しやりました。常から病身嫁御でおッたが、旦那の行かれたのに力を落して、それは〳〵めッきりと力を落して、子と言枷すら支へ切れず、死んでのけて仕舞ひおされた。其樣に弱い嫁御故、此子に妾の乳が入用。初めは里子に取つて育ましたが、妾の家も不幸がつゞいて、嫁に遣つた娘の他は、皆死ました所から、住居を拂つて此方の家へ若と一所に參りましたが、嗚呼其時に乳ばなれの、坊をそだてにいつまでも、遣つて居やうとは思ひも寄らぬ。第一こんな事に成らうとは、誰が先きから知りませうぞ。

たよりに思ふ貴郎は、何處に御座るやら知れぬ故、御報知申す事も出來ず、今日が日まで妾の腕で如何やら斯うやら育てあげ、無事な顏を貴郎に見せます。親の無い子と侮れて、それが爲めに僻根性でも起さしては、死なれた親御に申譯がないと、女ながらも一心に、畑も耕し、機も織る、合間々々には山へ行つて薪木を苅つて市街へも出る、さうしてこさへた鳥目で、小學校と又別に並木の塾へ漢學の稽古にまで通はしまする。

いつぞや村の祭禮の時、一所に詣でた鎭守の社。餘所の子供も親達に連れられ、大勢來て居ましたが、大人は大人と世間話、子供は子供と集つて仲好く遊んで居た其內、如何した拍子か一人の子が、我の母樣は此所にゐると、走つて親の所へ行けば、同じ樣に又一人が、我の父樣は此所に居てぢや、我のは此所に、我のは其所にと、皆々親の手に縋つて、さも嬉氣に見えた時。若も他人には負けぬ氣か、但しは

妾を眞實に左う思うて居なされたのか、坊の母様はこれぢやと言ふて……縋付いてゞ御座んした。

おう、乳母。黄泉の兩親に代つて私が謝す。其方の苦心、これまでの熱情、謝す、謝す、大いに謝す。私も只うつら〳〵と山水の間に醉臥しても居られじ。今ぞ六年の昔に復り、再び人界に降つて浮世を味はゝねばなるまいか。これ、力雄、もう慘憺孤兒の生活は見せぬぞよ。我を父とも母とも思へ、此義叔は美しき菓物を與へたる旅人ではないか。

（其　五）

霧深き朝、赤根の里を出て名無川に沿ひ、轡塚を横に見て白雲峠の麓にかゝりたる一行れ、岸萍水に、力雄に、乳母のお市。萍水は古き皮籠を肩より懸け、力雄は新しき脚半を穿き、草鞋を痛しとて麻裏の草履なり。お市は布呂敷包を持ちぬ。此後よりぞろ〳〵と從來るは、小さき友を見送りの爲め、同じ村に成長し同じ學校に通ひ同じ川に泳ぎたる仲間なり。日頃の惡太郎今日に限りて音無しく、道端に蟲螽飛べども誰一人捕へむともせず。之等の前後には五六頭の大犬、小犬、黑もあり、白もあり、先きに走れるは岐路にて待ち、迹より來るは口笛に呼ばれぬ。

力雄は何となく勇立ち、揚々として歩きつ、誰にか話掛けたく思ひしかど、妙に友達のしらけたるに張合抜け、止むを得ず乳母に向ひて、何處まで其方は送り呉れるやと問ひぬ。お市は峠の頂上まで一所に行くべしと言ふに安んじて、彌々得意にぞ見えにける。

これからは登り道、坂で急なれば此所までにして皆歸ッては被下ぬか、ト立留りて乳母が言ふに、一同顔見合せていと本意無氣、漸く一人年長の童が。　最少し上まで行きませう、ト答へたり。　御志は難有いが、何處まで行ッても同じ事ぢや、もう此所で止しに仕なされ。さあ若よ。皆さんに挨拶して、御別れ申しなされト注意を加へぬ。力雄は頷きて進寄り。　東京へ行ッたら手紙を皆によこすよ。此方からもあげるよ、ト一同は答ふ。　直ぐ歸ッて來るからね、今度の祭禮には一處に遊ばふ。それまでには歸ッておいでよ、ト二三人口を揃へぬ。　あの次郎さんにあづけた繡眼兒、僕が居なくなッても大事にして被下れ、羽根を切ッてはいけないよ。　切りア仕ない、可愛がッて飼ッておくよ、ト次郎と言ふ子は答へぬ。

では失敬！　失敬！　小さき手まて帽子を取り、指上げて振廻はせば、萍水これを見て微笑なし。それで訣別はすむだのか、ト言へり。子供達は又萍水の方に辭儀して。　詩人の叔父さん、左樣なら……。　はゝ、詩人の叔父さんとは面白い。　ほんとに子供の何を言ふやら、他愛もない暇乞、ト、お市も思はず笑出しぬ。

片手に帽子を指上げたる儘行かむとする力雄の足に、まつはりつく小犬あり。流石に之にも名殘惜しまれ、抱上げて彼の首筋に腮を載せ。　連れて行ッてやらうか。されども又思ひなほして。　我が歸るまでに大きな犬になッて居ろ、ト下に置きて又頭を撫でたり。

岩多き急坂を三人は登りはじめぬ。尚小犬を先きにして二三頭の犬は從ひしが、持主の呼聲に驚きて下りゆきぬ。

麓には行を盛んにして少年の拍手起り、谷の隈々に響渡りて勇まし。

一歩一歩上に行く程、下の路は霧重なり、只犬の泣く聲のみ封を破りぬ。

力雄は急に淋しさをればゐて幾度か振かへりぬ、されども何んにも見えざりき。義叔の顔を見れば青し、乳母の顔を見ても同じく青し。松の枝に雫あり、落ちて帽子を打つ事雨の如し。

山里に生れて山には馴れたり。急坂を苦にもせずすた〱と登る程に、高きに從ひて蟬の聲繁く、谷川の音幽かなり。白雲峠の絶頂に達すれば、或峯は隱れ、或峯は朝日に輝き、或峯は峯のみ出て下を見ず。空は拭ふが如く晴れて、今日も暑かるべし。過越し方を覗けば霧、行く手の方も霧、茫々として天地を分ちがたし。これより向ふ東京は扨て何方なるらむ。

國境の標石、苔蒸したる下に留りて、切倒したる材木の上に三人休みぬ。此間無言なりき。

軈て乳母は手に持つ小包を力雄の肩から袈裟掛に結びつけ、解けかゝりたる脚半の紐を締めてやりて。

それでハ、若、もう此所で別れませう、ト言ふに、今更力雄情けなく。　もう行くのか。　はい……。　乳母！……ト言ひながら溜りかねて、縋付かむと爲す處を、目を潰りて突退けて。　何事もこれからは叔父樣に御たよりなされ。岸樣。呉々も御頼み申しまする。さらば、ト言切り一散に驅

降る坂路、霧の中に入りて姿は見えず。

（其　六）

呼べど谺もせざりき。力雄は泣きたくも泣きそびれて泣けず、名殘惜し氣に下を見降して只其所に立ちたり。時に聽く老鶯の二聲三聲、夏山に秋風吹きて淋しかりき。萍水は輕く力雄の肩を扣きて。何を其の樣に考へて居る、乳母に別れたのがつらいのか、ト言ふ。されど答へず尙立てるのみ。捨置かばいつまでも立ちて動くまじく、はてしなからむを見て取りて。　行くべし、行くべし、いざ行くべし。此所で手間取てゝ日が暮れても宿へ着けぬ。サアそろ〳〵と歩まぬか。東京へ出てゑら者に成るお前ではないか、これ限り來られぬ故鄕ではなし、此後逢れぬ乳母でもあるまい。力雄、此先きには雪解の清水と言ふて岩の間から冷めたい〳〵氷の樣な水の出る泉がある。早瀨川と言ふ急流があつて其所には曲橋と言ふ橋もある。五所の森、唐傘松、小さな山を一ッ越えて、又一ッ越えて、それから大きな山を越えると、それは〳〵面白い――目のさめる樣な景色が見られる、それを樂しみに行かうではないか。

其目のさめる樣な景色とは、どんなの。　それは海が見えるのだ。　海、海ッてどんなもの。

おう、お前は未だ海を見た事がないか、それも其筈、山に育ちて山から外に出た事のないのだから……

……。さらば少しも早く海を見に歩かうではないか、ト言ひながら、身先づ坂を降りかけたり。力雄も仕方なく、すた〳〵と從ひぬ。

降るにつれて霧漸く薄らぎ、谷川の音も近くなりぬ。其水の流るゝ方も故郷にうむきて行くなりけり。道にてすれ違ふ旅人の赤根の里へ降るかと思へば、可懷き心も起りて、成らば傳言の、嗚呼、仕たし。義叔が口を極めて說立たる雪解の淸水來て見れば、村にも澤山にある泉なり。早瀨川の曲橋渡れど、名無川の蔓橋と大したる相違もなく。五所の森、唐傘松、何程も珍らしからず。小山一ッ越えて又小山に登掛る時は、草臥て足は痛し、汗流れて如何にも暑し。背に結びたる小包重たく、草履破れて豆踏出しぬ。

　義叔さん、未だ海は見えませぬか、ト問出せば。　これを降りて此次は、大山、それを登らずば見えぬ、トの返辭。嗚呼痛い、足が痛い、ト跛足引きながら行きぬ。見かねて萍水は道端の竹を折り、杖を造りて與へたりき。されども矢張歩は進まず。見かねて萍水は手を引きて遣りぬ。されども矢張歩は進まず。

終に水間村の茶店にて駄馬を借り、力雄を載せて行く事となしぬ。馬も恐ろしけれど足は痛し、仕方なく乘る事にして馬子の老爺に擔上げられ、荷鞍の前にしッかりとかぢりつきて、縮まりぬ。

軈て此所を立出で、愈々高山の峠にかゝりぬ。義叔は馬子と話ながら行き、馬は首を低れて尾に蠅を拂ひながら歩みぬ。後には伯父一人先きに進みて、詩を吟じながら登り。馬子は無言にてゆたり〳〵と續きぬ。馬子が追分節唄ふ時には、義叔の方無言にて、音の惡き馬の鈴は好き拍子を取りぬ。後には力雄馬上に馴れて、落ちる事も思はず、足の痛さも忘れ、立髮二三本引拔いて指の先きに弄びぬ。

（其　七）

雲の峰を下に見れども未だ高き此方の山、………………登盡して漸く其頂上に達すれば、神代より傳はるかと疑はるゝ杉の老木蓊鬱として繁りぬ。中には古き神社あり。此所までが約束の一帳場、これからい徒降り路にして麓は直ぐに蟹川驛、其所に泊る便宜もあれば今又歩くも好かるべしと、力雄を荷鞍の上より下して、萍水賃銀を馬子に與へぬ。老爺は幾度か禮を述べて馬には道端の草を一抓食ませ、手綱垂らして元の路へ歸しぬ。

萍水は杉の立木の影を見て。　大方今が正午でもあらうか。秘水で中食をすませ、社殿で晝寐して行くと仕やう。降り坂でも一里と十五丁　此間には日陰のあい燒山。急いで行かずとも涼風を待つて、晩までに驛へ着けば好し、ト言ひすて、乳母が包みたる握飯の竹皮、紫蘇卷の梅干添へたるを開きて、力雄にも勸め、自分も食ひぬ。

力雄は此頃になき美味をおぼえて、殘らず平げしが、不圖思出せしは今頃同じく、乳母も食事を仕て居るならむか。

食後、山上の冷氣に汗を去りて好き心地になりたる萍水、社殿に皮籠を枕として寐て仕舞ひぬ。力雄は午睡を好まぬ上に旅馴れねば彌々眠られず。仕方なければ階段の下に行きて、山蟻の走るを見て居りけり。それも格別面白からず、嗚呼詰らぬと退屈して、知らず〳〵歩出し、杉の林をいつしかに離れたり。

見降す方には兀山重なりて次弟々々に低くなり、其末に田あり、川あり、森あり、家あり。家ある處は蟹川の驛か、其先きに又小山重なりて果ては雲漠々、青空の天を覆ふて限りなきのみ。玆に於て力雄大いに不平なり。海が見えるとは虚言なりしか。義叔ハ又我を勵まさんとて此所の景色の目ざましき樣に說かれしならむ。來て見れば彼の雪解の清水の樣に、早瀨川の樣に、唐傘松、水間森の樣に、何の事もあらず。して見ると東京と言ふ處も存外狹く汚き市街ならむなど考へ、すご〳〵と又元の社殿に歸りぬ。

暫時して萍水目をさまし、寐過したるに驚きて急に起上りながら。　力雄。れ前は寐なかッたのか、ト問ひぬ。これが答へはなさずして、突然。　義叔さん、海は見ゑませんね。海は無いでハありませんか。　何、海が無いものか。杉林を出れば好く見ゑる。　いえ、見えません、何も見ゑや仕ません。兀山の麓に田があッて、田の中に澤山家のある處が見ゑて、其先きに又山があッて、それから先きハ……。　それから先に海が見ゑるだらう。　いゑ、雲です。　其雲の樣なのが海だ、ト笑ひながら言ふ萍水。力雄はこれに合點せず。　いゑ、雲です。雲の中に大きな鳥が澤山飛んで居りました。ト言ふに、萍水思はず手を打ちて。　詩だ〳〵自然の詩だ、れ前の言ふ事は詩だ。　義叔さん、矢張雲でせう。　れう、力雄。れ前は未だ海を知らぬからだ。大きな鳥と見たのは小舟であらう。雲と見たのハ海の事だ。　えッ……。　最一度見に行ッて來い。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

杉林を駈出て山上より再び見降す力雄。扨て〻雲と見しは海なりしか。海を雲と見て珍らしからず、海を海として見れば如何にも目ざましき物。あきれて茫然唯茫然。

後より來りたる萍水は、一心に海を眺めて餘念なき、力雄の肩に手を掛けて。　如何だ力雄、海でおッたらう。　義叔さん、海でした。　目がさめる景色とはこれだ。　義叔さん、私は海は好きです。　我も海は好だ。山間の僻地に居ては迚も想像が及ぬの〻海だ。　東京にも海はありますか。東京には、入海がある。　いゝな、海さへあればいゝ。義叔さん、僕〻海が好きです。　それでは、れ前が鳥と見た船は如何だ。　船も好きです。　それに乗るのは如何だ。　それも好きです。　では力雄、海軍士官に成る氣はないか。

（其　八）

岸萍水が旅に出でたりとは誰も知れど、何處に行きしかは噂區々。後には人に忘れられて語る者なし。最初は傑作を出さんとての籠城なるべしなど我通な顏して言ふ男もありしが、此頃は彼が洛陽の紙價を狂はしたる詩集の、夜市の蓙の上に晒されて、撰取何錢の古雜誌と列を同じくなすに至りぬ。六年の昔に復りて詩壇に打ちて出でたる萍水、誠に勇ましき事なり。四新聞、五雜誌の紙上に於て彼は天地の美を唄出しぬ。夏山白雨の後、急湍岩を流すの狀あり。世は大喝采を以て彼を迎へたれども、萍

水の眞價を知る者は皆泣きけり。

岸の住居は麻布の高臺、掾側よりは袖ケ浦の見ゆる處なり。誰人の別邸なりけむ手を盡したる建築、しかも新しくて木の香失せず。萍水は友の家にありたる自分の手道具持來りたれど、おもなる物は大きなる机と、十二單衣はぼろ〴〵になりたる女雛の人形とのみ。其他は實にこれと言ふ物あらず。蓋の破れたる本箱一ツあれど、中には他人の書を藏せず、未だ世に示さゞる長篇の詩稿を以て滿されたり。天井と座板の高き間に道具少きはいと淋し。

新に傭ひたる米飯炊きの老母は肝を消し、毎日世帶道具の名を並べて、彼も入ります、これも入ります何々もなくては不自由と、買物に奔走して腰を痛めぬ。

唐紙一重隔ちたる次の間を力雄の書齋と定め。机は欅、本箱は桐、其他の文房具は言ふまでもなし、力雄が好む物は悉く求めたる中に、球形の洋燈と五本疊の小刀は、殊の他彼の氣にかなひぬ。

家も出來たり、道具も集りたり。これからは力雄を教育の方法なり。大事な子供を今の學校に如何して委しておける物かと、讀書は懇意なる友人の宅に遣り、算術も其向の友の家に行かしめぬ。體育も肝要と近き擊劍の道場に通はす他に、家にては習字をさせたり。萍水爲めに日課を造りて、何時より何時まで學べよ、何時より何時までは遊べよと、表にして力雄の机の前に張りぬ。

力雄と共に規則的の業務を爲すは、萍水の身に取りて堪へがたき苦限なり。されども勉めてこれを爲し

ぬ。四新聞、五雜誌。殆ど毎日一編の長詩を作らずば、間に逢はず。有名の遲筆家が生變りての健筆、僅か八行に六ヶ月係りたる頃は。

（其九）

されば力雄に友達少く、學事を勵むも義叔と共にし、遊ぶも亦義叔と一處なり。萍水は新聞社の歸途、銀座の舶物店に立寄りて、玩弄物の軍艦を求來り、これを盥ほどの泉水に入れて、烟を吐き、水を蹴り、金魚を驚かして向ふの岸に着くを見て喜びぬ。力雄は自ら船長と名乘れり。雇婆は言ふ、あんな物を御買ひなさる程ならば未だ〳〵中立てる品が澤山にありますもの。

日曜日の遠足は尤も力雄に樂しき物の一つなり。義叔に從ひて珍らしき處に行き、珍らしき物を見て歸るほどに、足も馴れて達者に歩かれぬ。

只嫌ひなるは算術の日課、これに次ぐ物は擊劍なり。共に頭を痛めて、厭。

萍水は英詩の中より海に屬したるを撰りて譯して聽かせ、維新前後慷慨の士が作りたる詩歌をも說きて、三ツ四ツ暗誦せしめぬ。淸らなる音調にて力雄の吟ずるを常に耳傾けて聽きぬ。

木の葉紅色、燈火したしむべき頃となりては、幾分かゆるやかなりし日課も引締りて嚴になりぬ。力雄もつらし、萍水は尙つらし。夜は力雄の習字すべき時、萍水の詩稿を起すべき時なり。額に手を當て筆の軸を嚙みながら沈思する事數時、蜘蛛に生血を吸取られたる賴光の斯やありけむ。時々に吐息を漏し

て玉の如き汗を絞りぬ。欣然紙を飛して忽ちに六七葉を染むる事あれど、それは誠に稀なり。力雄これを見て作詩は苦しきものとおぼえぬ。自分も習字の時には故郷の事思出して、秋の夜は殊更に物さびし。鬱極りて堪へがたき時は萍水常に雛人形を取出して机の脇に置きぬ。之に對して何事をか密語くなり。力雄も面白き事に思ひて、我にも人形を求めて被下と言ふ。これには萍水迷惑して、悉く私の眞似をして吳れてはあらぬ。餘り好き事にあらず。是非にとならば五月人形の加藤清正なりと買うて得させむ。赤根の乳母よりは手織木綿の冬物を送來りぬ。娘が代筆の手紙にて、力雄に注意の數々は、學問を勵み給ひて早く水野の家を起し給へ。乳母の事は思給ふな。伯父樣の言ふ事は御聽きなされ。寢冷をな仕給ひそ。

此頃萍水は多忙の上にも亦多忙を重ねたり。そは『遠山霞』と言ふ雜誌を來る天長節の當日に發行せむとてなり。編輯も、會計も、活版屋の掛合、賣捌方の約定、總て一人にて遣るつもりなれば、暇少きこそ道理なれ。力雄はそれ故友を失ひて、仕方なく一人遊べり。軍艦に、厭きたれば、扨て何をかせむ。

（其　十）

愈々『遠山霞』發行の期は近寄りたり。早や二三の新聞には廣告出で丶、世人の注意これに集り、其出版の日を待つ聲は市に滿ちたり。されども校正摺は未だ全く終らず。天長の佳節に遇はでは、初號の最先き不震の兆と、妙な處にも力を入れて、萍水一方ならぬ骨折。それは又それとして他の原稿も捨ては置

かれずと、夜の目も合ハせず詩神を使役し、晝も疲れたる惱を驅りて、朱筆に校正を染めると雖も、をとおと、へとえと、魯を魚の誤字中々に見分けがたし。それよ、子供は正直なり、力雄の眼を借りて少時の補助。其間寐て休息する程に、原稿の本文と一字々々見競べて好き樣に直して呉れと、稚き者に依賴をなし、夢も見られぬ眠に就きけり。

力雄最初は何となく恐ろしく、一字見逃しては一寸の命を縮むる心地、それも四五行の內に平氣となりて、讀下す文句に面白き處あり。吾義叔は不思議な事を書く人かな。むづかしくて解しがたき節もあれと、勇ましき處に至りては自から此方も勇ましく、悲しき場に成れば我又悲しまれぬ。さうかと思へば、何んだ、下らぬ條もあり、是が詩か。我にも書けさうなり。今度の日曜に散步して何か好き材料を見付たならば、さうだ。僕も書いて見やうや。

門には國旗飃へりて目出度き天長節の當日、扨ても漸くにして『遠山霞』は出でたり。萍水の苦心は言ふまでもなし、力雄の盡力大いに豫りて功あり。內務省への納本、諸新聞、諸雜誌、知己と未知との區別なく、あらゆる文學者に宛て配らむ爲めに、傭婆に封紙を爲せ、萍水は宛名を書き、力雄の役は切手を張るなり。早や午後に至れバ賣捌店より車を持ちて取りに來り、夕方には五千部の摺高、殘部少くなりぬ。直ちに端書を活版屋へ飛ばして、再版五千部！

二三日の後諸新聞に其評陸續として出でたり。非難の聲ハ、作詩家にして出版業を兼ぬるは如何にやと

言ふにあるのみ。それとても萍水が深意を知らば恐らく此言なかるべし。他は皆筆を揃へて其粹美を稱揚し、廣く照會の勞を取りぬ。地方の讀者これより加はりて、再版も亦殘部少なし。

此景氣に力雄驚きて、抑も詩が何に成るかを問ふて見たく、萍水に向ひて或日尋ねたり。萍水これに答へて曰く。詩は清き水の如し、これを酌む者は詩人なり。受けて飲む者もあらむ、受けて洗ふ者もあらむ、樣々なり。若しそれ濁りたるを酌まば、飲むに心地惡く、洗ふとも穢れたるは落ちまじ。道に撒きて塵を防ぐか、草木の根を濕すに留りて、それは只水の用なり。清き水の任にはあらじ云々。力雄之を聽いて、如何も分らず。

（其十一）

此頃泉水の軍艦には雨水溜りて沈沒せむとす。船長力雄はそれに構うて居られず。詩と言ふ物が作りたさに日曜日を待兼ねて土曜の晩より支度なし、明るや早朝、半ズボンの洋服、草鞋に脚半、手帳と鉛筆と小刀と麵包と砂糖とを藏したる包籠を懸け、新しき海軍形の帽子を冠り、紫竹の細き杖を手に振りて飛んで出でぬ。

市街を離れて初めて知る身に泌む秋。雲なき空に太陽輝けども、それは暑からず。小路の兩脇にゃ尾花枯れて、禮服着けたる兵卒の並列正しく、帽の白毛揃ひたるに似たり。林を過ぎれば彈丸に似たる鈍栗の實、木の葉に交りて落ちてあり。農家の垣越しに熟したる柿の美しく、烏は屋根から羨しさうに眺め

て、案山子を人かと首を傾けたり。力雄も少時其下に立ちて、これが詩にならぬかと考へたり。時に鍬の先に大根を結付けて擔ぎたる農夫の意味あり氣に此方を見て、軈て此家の裏口より入りたるが力雄の詩趣を破り、足早に又歩出しぬ。誰も居らぬ野原にかゝりては聲張上げて詩を吟じつ、人の影を見れば忽ちに止めぬ。

小川の水に從ひて行き。小山に登りて四方を望み。或る佛堂に入りて憩ひ。扨て斯くの如く何處ともなくさまよひける内、遠き製造所の上に白き烟の上るを見て、續きて滊笛の鳴るを聽き、今は正午なるを知りぬ。麵包、麵包とつぶやきながら、皮籠の蓋を開き、小高き岡の燒芝の上に横り、左も〳〵詩人ぶりたる中食をはじめぬ。見渡す田の畔、苅稻の上にも、小作人共の辨當を開くあり。乙女の大藥鑵提げて小路を歩むあり。馬は枯草を食み、犬は飢ゑて吠えぬ。

麵包は食盡したれど、未だ詩の出來ぬとは殘念なり。矢張詩は難かしき物か。出來ぬは材料を未だ見ざるが故か。材料無くても詩は出來さうな筈。此樣な事にては義叔を驚かす程の好き詩は作れまじ。最少歩きたらばあるべきかと、落ちたるを拾ふ格にて、力雄奮起、鉛筆を削りて耳に挾み、手帳を取出して片手に持ち、又此所を立出でたり。

行き行きて鐵道線路の踏切に出でたり。其所には我と同じ程の年頃なる子供一人、小旗を持ちて立ち、木柵を閉ぢて通行を遮斷せり。向ふには四五人の子供、此方には力雄一人、滊車の過ぐるまでは待たね

ばならず。向ふの子供は口々に言ふ。　未だ滊車が見えぬから通しても好いではないか、學校へ行くのが遲くなる、ト言ふ。思ふに午飯を宅に歸りて喫したる連中なるべし。旗を持ちたる子供は手を振りて。　でも、今に來る、もう來る時間だ、通す事はならん、ト言ふ。忽ち一人の子供は叫びて。　なんだ、剛情張、跛者の癖に生意氣な事言ふ、通さないと迹で撲るぞ、ト鐵拳をして威張りぬ。されども旗持子供は一向ゆるさず。　撲るなら撲つてもかまはん、規則だから仕方がない。跛者々々と笑ふけれど、我の跛者に成つたのは、規則を破つて駈抜ける拍子に、轉んで線路で挫いたのだから……。　なんでい、跛者。跛者やい〳〵、ト向ふの子供口を揃へて嘲りぬ。其の内遠雷忽ち屋上に響き、轟然として滊車ハ來りぬ。扨て稻妻の如く過去りぬ。

旗を持つ子供ハ先づ力雄の方の戶を開き、次ぎて向ふの門木を取りぬ。待ちに待ちたる四五人の子供は、又もや跛者々々と罵りつ。一人を圍みてぽか〳〵と亂擊。はては突倒して、又跛者やい、跛者やい、呼はりながら走去りぬ。

痛さより口惜しさに泣きて、起上り樣追はむとしても、其所が片輪の悲しき處、二三步にてよろめき、木柵に縋りて留りぬ。屹度向ふを見渡して、又さめ〴〵と泣きぬ。

（其十二）

見かねて力雄は傍に寄り、天晴彼を慰め顏して。　お前何處か怪我したの、え、如何かしたの、ト問

ふ。旗振の子供は袂に涙を押へての泣吃逆、疳走りたる聲を籠らせながら。　如何も仕ないけども、口惜しくッていけない。あ、あんな惡戯童はありやアしない。　ほんとに惡戯童だねえ、だが、あんな奴は打遣ッて御おきよ、學校へ行ッて何んだよ屹度先生に呵られてるよ。　跛者々々とからかはれるのは毎度の事だから、そんなには思ないけども、何も今日の樣に不具者を、撲、撲らなくッてもいゝやア。　さうども〳〵、酷い事をする奴だ。あんな奴は碌な人間には成りやア仕ない。　我は跛者で足こそ不具だが、あんな奴には學問では負けない。日曜でも學校へ行ッて、先生に漢學の稽古して貰ッて居るが、親に言はれて仕方なしに行くのでは駄目だ。我なんざア父樣が學問なんか止せと言ふし、家が貧乏で又學校へも行かれず、只斯うして家に居るけども、本は好で毎日讀んでらア。　それは感心だねえ、お前の父樣は學問を止せと言のかい。　好く言つたつけが、今では家に居ないから……。　父樣、何處へ行ッたの、ト何心なく力雄が問へば、旗振の子供口籠りて。　家の父樣は……昔はゑらい人であッたのだが。酒ばかり飲んで、よつぱらッてばかり居て、とう〳〵家を出て行ッて仕舞ッた。　それぢやア家には母樣ばかしかい。　ウン、母樣は父樣の居なくなる前に家を出ちまッたのだ。　ぢやアお前一人か。　姉さんと二人暮だ。　其姉さんは……。　毎日紡績所へ通て、朝早く出て晩遲くでなきやア歸らない。　すると此踏切の番人は、大概お前が一人でするのだね。あゝ、ト答へたり。

二人は木柵に倚掛りたる儘、尙會話をつゞけたり。　君はこれから何處へ行くの。　何處と言ふ目的はないの。　何處から來たのだい、お前の家は何處だい。　僕は麻布だ、麻布から來たのだ。

君の父樣は何をして居るの。　父樣も母樣もありやしない。　では誰と居るの。　義叔さんだ。

義叔さんは何をして居るの。　僕の義叔さんは岸萍水と言ふ詩人だ。　詩人？　僕も詩人だ、僕は水野力雄と言ふ詩人だぜ。お前詩てい物を知ッてるか。　知らない。　むづかしい樣で、やさしい樣で、面白いもんだぜ。僕は詩を作る爲めに斯うして歩いて居るのだ、ト大層威張りて言ひぬ。

旗振の子供はつくづくと力雄の扮裝を打見遣りて。　君は兩親がなくッても好い義叔さんがあると見える。　あゝ好い、義叔さんだぜ。　我等には親があッても無いと同じだ、義叔さんは四人もあるが好いのは一人もないや。　其かはり姉さんがあるからいゝではないか。　姉さんは可愛がッて呉れるけども、……本なんぞは知れないと姉さんにおそはるが、洋學が出來ないから困る。　僕は英學知ッてるよ。僕の義叔さんは英學と獨逸語と兩方出來る。去かし僕は英學ばかし習ッてるの。　英學は是非習ッて見たいけども……。　僕が習ッただけなら敎へてあげてもいゝや。何、本なんぞは買はなくッてもいゝ、僕の古いのを上げるよ。其代り日曜日でないと來られないよ、ト言ふ内、又もや汽車の通るべき時間となりぬ。

（其十三）

これより力雄は、跛者の子供の名を春山芳松と言へる鐵道踏切の番人と、無二の親友になりけり。日曜日には必ぞ行きて、ナショナルの讀本を敎へ、其後は打解けて遊びぬ。されども芳松は旗振りの役目ある故に遠くへ行く事出來ず、それのみを足らぬ事になして、他は思ふ儘に戯るゝ内、不圖力雄思附きて「雜誌ごッこ」をせむと言ふ。芳松これに同じて名を『詩の雜誌』と題したり。主筆ハ水野力雄、補助は春山芳松。偖て赤インキにて表紙を染め、半紙幾枚を綴て体裁も出來たり。中には何をか書かむと二人いろ〳〵考へしが、先づ力雄『菊の花』と言ふ新体詩を作りて、三枚ばかりを埋めたり。芳松これを讀みてうまく出來たりと賞ぬ。力雄大いに喜びて、我は詩が書けるとほこりぬ。次ぎに芳松『紅葉を觀るの記』と言ふ文章を綴りぬ。

これが初號の目次なり。一日の中忽ちにして號を重ね第三號まで出版なせり。其中には『親がほしい』『親はわれども』『詩人の伯父さん』『女工の姉さん』等を載せたり。五七。七五。字餘り。字足らぞ、無茶苦茶なり。それでも互ひに褒めあひて、うましと言ふ。斯くても何とあく人に見られるを恥ぢ、大事に隱しておくと言ふ社規を設けたり。

これを樂しみにして常ハ日課を勵み、此間まで軍艦を弄びたりし暇に、雜誌の材料を集むる力雄。仔細らしく筆を嚙み、額に手を當て溜息などを吐きぬ。これを見て岸萍水は、力雄が此頃の音無しきを訝れど、何故と言ふ事を知るを得ざりき。

月三回發兌の『遠山霞』其方の忙がしさに毎週の散歩にも行かず、されど相變らず力雄一人朝早くより飛出しぬ。あはれなる跛者の子供に讀本を敎へにと言ひて。

『遠山霞』の第三號中尤も評判高き韻文あり。それは『線路の子供』と題したる物にて、力雄より聽きたる芳松の事實を骨子となし、これに自分の理想を合したる作なり。

或る踏切番人何某の子供が、一日父の代理にて木柵を閉ぢ、旗を持ちて靜に汽車の過ぐるを待ち居たり。其内虫を追ふ蝮の如く、恐ろしき勢ひにて汽車は來りぬ。何心なく列車の窓を見たるに、其窓より何家の令孃やらむ、誠に美しき一人の娘の花の顏を出して外の景色を眺め居たるを見付け、はッと思ふ間に早や通過ぎ、遠くの森の方にて汽笛の鳴るを聽きぬ。其美しさが子供の眼にも留りて、何となく慕しく、可懷しく、忘れむとしても忘れられず。又もや彼の娘の此所を過ぐる事ありいせざるかと、これより父の在不在に係らず、毎日々々踏切の處に立ちて汽車の過ぐるを見送ると言ふに筆を留めたり。

この韻文を尤も喜びたるは力雄に芳松なり。二人は暗誦して節をかしく吟じぬ。或日力雄一人吟じ居たるを、萍水に聽れて、顏を赤めたり。加へて力雄の机の上にありたる『詩の雜誌』の原稿『僕の軍艦』と言へる一編を見出されて、總て秘密は露顯に及びぬ。呵られるかと思ひしに、左はなくして伯父は只笑へるのみ。後には初號より見せよと言はれて、仕方なく社規を破れり。萍水は見て又笑へるのみ。

『詩の雑誌』は益々盛大になりゆけども『遠山霞』は最初の様にもあらず、此頃淋びれたり。萍水に規則的の運動出來ずして發行日を過まり、且つは雷同の讀者次第に減じたる爲めの影響もあらむが、正しく江湖と萍水との衝突なり。降られるだけは降りて見むと、目を潰りて階段を下りたれど、底の底までさうさうは下られぞ、急に引上げて思ふ樣の詩材を思ふ樣書散らしたる原因と、某批評家は某に語れり。

（其十四）

餘程寒くなりぬ。今歳は去年より寒しとは誰も言ふなり。力雄寒し、萍水殊に寒し。傭婆は迚も堪がたしとて暇を乞ひ、未だゆるされぬ内に荷物造りてすた〳〵と出てゆきけり。

萍水此頃俗受に厭きて、一年に一種の大作に係りたく、時も好き冬籠と、新聞の三社を斷わり、雑誌の四社を辭し、一新聞一雑誌に只御つとめの叙事詩を送り、如何か斯うかの境遇を作りぬ。

さりとて力雄には惡い顏も見せず、力雄には又萍水の苦心知れぞ、相變らずねだり事して、何を買ふて頂戴、彼を求めて給われ、其都度言ふが儘の需に應じて、例の如く締る事能はず。

活版屋へは三回分の支拂を遲延せり。されども催促も受けざりき。

此時に當りて傭婆の去りたるなれば、流石の萍水驚きて、如何したらば好きか、腕を組みぬ。力雄も素より驚きたり。

第一米飯の焚方を心得ねば、今日からして食ふ事出來ず。酒屋の御用來りても如何して好きや分らねば又來いと言ひて歸しぬ。其夕は二人家を明けて書生受の好き洋食屋に夜食をすまし、廻路して傭人口入所をたづね、早速一人女中を頼むと鷹揚に言ふて歸りぬ。何を呑違へてか翌朝に成りて、粉屋の鼠を狼婆は喰へ來りぬ。

それと知らねば萍水も力雄もこれに安堵して、一人は作詩、一人は稽古に、かくて夕方歸り見れば、又もや女中の影見えずして、萍水の常になき不快の顏を見るのみなり。翌日又一人狼婆は連來りしが、これは又土龍の如く背から頭につゝきて首の埋れたる芋堀女。水を酌むの力はあれども、薪を燃す術に拙し。矢張主人同樣の不經驗、これでは仕方なしと今度は此方より追出しぬ。

彌々以て困りぬ。此上は是非なし、自炊するより他には法なしと、萍水其覺悟を力雄に示せば、結句面白がりてそれも好かるべしと賛成なし、又續々と連來る受宿よりの口入を絶ち、氷柱を手繰る井戸の水、生木に涙こぼして吹竹の吹詰、粥の樣なる、又燒米の樣なる、强弱の米飯を作りて、うまし／＼と舌鼓、無理打にせしも二三日、煮豆、佃煮、納豆にもいつしか飽き、炊置きの冷米飯、氷りたるには益々厭き、如何しても男世帯は花の咲かぬ生活ぞと、萍水頭を搔きて微笑。

力雄依て此所に一策を奉り、芳松には踏切の番人を辭さしめ、姉には紡績所を止めさせて、二人に來て貰ふては如何と言ふ。萍水少時考へて。力雄。又此上に孤兒の悲慘を見せやうと言ふのか。もう我

はろれには堪へぬ。目を瞑づて自分を隱さバいざ知らず、そればかりはゆるして呉れ、ゆるして呉れ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

雪の夜力雄は火鉢を抱きて茫然と机に對しぬ。庭には松よりすべる雪塊の音の時々聽えて、其度に風の鳴りぬ。さら〱と雨戸を打つは南天の枝の障るにや。

唐紙一重の次の間には義叔萍水が筆を驅りて紙に走らす聲すなり。十時にならバ寢て好しと日課表に誌しあれば、枕時計の針をながめて未だか〱、遲れては居らぬか。常は讀む書物も今日は進まず。常は作る韻文も今宵は厭なり。眠むたし〱と洋燈の心を細くしたり又太めても見たり。火箸を弄して又考へても見たり。思ふに芳松は此雪の夜も、外套を引冠りて踏切に立居るならむ。枝木杖に縋りては線路の見廻りに歩き居るならむ。それを思へば我は極樂の身分、奮發して十時まで勉强せむと、目を見張りて又机上を睨みぬ。其所には開きたる讀本あり。

書にはネルソンの肖像ありて、下に荒浪を蹴て軍艦砲戰の圖あり。嗚呼海軍！私は海軍の軍人に成るつもり、義叔さんも其樣に御教育なさるれど、如何も私は軍人には成れない。擊劍では打れ、撲られ、私より强い人が澤山に居て、それ等は皆軍人に成ると言ふ、聽けば又海軍でゝ數學が一番大事とやら、其算術大きらひ、如何しても私にはおぼえられぬ。厭で厭で如何もならぬ。自分で仕て見て面白く、これならバと思ふ物は先づ、詩、詩、詩より他にはない、自分は詩人に成らうと思ふ。

何んにても私の言ふ事は必ず聽いて被下る義叔さん、これを相談して見やうよ。折あらば言うて見やうよ。詩人々々。聽けば父樣も詩人でおッたとか、赤根の里に埋れて終られた父の名を擧るのは力雄が義務、父が唄ひのこした天地間の美を唄ひつゞけるのが私の役目、こりや何んとしても海軍は厭。

（其十五）

不意に筆を取りて洋燈の傘に、詩人、詩人、大詩人とぞ書したりける。氣の着きて力雄ハ獨笑みぬ。斯くての後も口の内にて、詩人、詩人、大詩人と呟きたり。此時待に待ちたる就眠時は來りぬ。喜びて机の上を大急ぎにかたづけ、他は其儘にして寢床を敷く忙がしさ。洋燈の心出過ぎて火屋燻れども知らず、火鉢の火も埋めずして、震へながら寢間衣となり、布團に繰潛りがけ、義叔さん御先きへ、ト一聲掛けたり。されどもこれが答はなくて筆の紙上に軋る音いよ〳〵高し。庭の方にては雪積む響幽かにして、塒を吹雪に拂はれたる烏、羽ばたきして二聲三聲啼きぬ。赤根の里にあらば翌朝をたのしみにして、太郎さんに次郎さん、大勢の友達と、黒犬と、白犬と、打交りて一隊を爲し、墨繪野に雀取と出掛けるのだが、此方ではそれも成らず。嗚呼故郷、故郷の雪、故郷の雀取、今頃は畑を我物に走る犬の聲すならむ。後には吾家の軒の下に集り、くん〳〵と言ひ居るならむ。今聽く遠吠の犬の聲は我を知らぬ餘所の奴なり。雪深き赤根の里の物にはあらじ。降れや降れや赤根の里の樣に降れ。此所では何程降りても好し。裏に山あらねば雪頽の來る事なし。只心がゝりなるは故郷の家に一人居る乳母。

此時次の間にてぱッたりと音しぬ。筆を抛ちたるならむ。
扨て乳母は今頃如何になし居るやらむ。嘸淋しき事なるべし。一層乳母も東京へ來れば好きに——。
遠くにて聴えたる犬の聲近くなりて、これを叱する人の聲もすなり。それも行過ぎて又遠くなりたる樣なりしが、又々此方に歸りたるは、前のと同じ人か、犬か。忽ち門前にて留りたる如き氣配、其内とんとんと雪の門をたゝきぬ。隣家にはあらざるかと力雄起上りて耳をすましぬ。益々高く擲きいだしぬ。電信にてはあらざるかと、急ぎ飛起きて、先づ義叔の部屋に至りぬ。萍水は彼の雛人形を傍に置きて膝を枕に轉寐してあり。二度三度呼びたれども、中々に眼のさめるべき景色あらねば、力雄立出て玄關の雨戸を開きぬ。颯と吹込む雪風は肌を切て、思はず人を戰慄せしめたり。外にては犬の聲益々加はり、戸をたゝくも亦急なり。　今明けるよ、ト言へど、向ふには達せざるにや、引續きてたゝきぬ。おう深い〳〵と言ひながら、外に飛出したる力雄。中途にて又、　今明けるよ、ト聲掛けたり。此度は通じたりけむ、戸をたゝく音は止みて、犬の聲のみ姦まし。冠木門に五六歩と言ふ處にて、力雄又言ふ。　今明けるよ、誰だい。
其聲は若か、ト外よりの聲、これを聴きたる力雄は一飛に門の傍へ駈行きて。　乳母か。　おう若か。　乳母か。　若か。　今明けるよ、ト門木をがた〳〵。此響屋根に傳はりて、一塊の雪は後に落ちたり。あせればあせる程開かぬもどかしさ。外からも氣を揉みて、　早く明けて被下れ、早う

明けて被下れ。　今明けるよ、今明けるよ、ト同じ言葉繰返す内に、扉は兩方へ開きたり。出んとする力雄、入らむとする乳母、突當り樣、抱合ひて、顔見合せる雪明り。思はず涙は瞼を切つて、凍れる袖も。

（其十六）

犬はいづれも吠えそねて皆散々に失せたり。開きたる扉は風に煽られて音高く閉ぢぬ。乳母の菅笠傾きて力雄の襟首に落入る雪。　冷めたい！　これは〳〵とんだ事を仕てのけた、ゆるしなされ〳〵。

何、構はないよ。それより乳母こそ冷めたいだらう、寒いだらう、こんなに身体が氷ツて居るぜ早く家へ御上りな。　さう致してから御話も仕ませう、何んにしても無事な若の顔を見て、氣が緩むだのでもあらうか、俄に寒さをおぼえて來た。　さア此方から御這入り――降るわ〳〵、早く此方から家へ御這入り、ト力雄は先きに走りて玄關に飛入り。　義叔さん〳〵赤根の乳母が來ましたよ、ト大きな聲にて呼はりたり。お市はのそり〳〵と從ひて同じ入口に草鞋の雪を拂へば、此時奥に萍水の聲ありて。　何、乳母が來たと、それは本統か、ト腑に入ぬ言葉。力雄は連りに呼はりて。　來ましたよ〳〵本統に來て居ますよ、ト言ふ。　どれ〳〵、ト燈火持ちて出來る萍水。　おツこれは眞實ぢや、誠に珍らしい。乳母であツたか。　岸様。とう〳〵市も參りました。　好くまア此雪の夜に……

……何しろ早く上りなさい、嘸途中が困難であツたらう。　はい〳〵只今上りませうが、臺處は何方で

御座りまする。　それは又外から廻らねばならん。　しかし洗足あらバそれに及ばん、此通り力雄も我も、時には泥足で上へ通るぢや。　これは又夜目にも知れる掃除の届かぬ板の間、して見ると東京の女衆は餘程存在と見えますな。　ところが其女が居らぬ男世帯、これにハいろ〳〵話のある事ぢや。何しろ雨とハ違ふ雪の中、足袋も汚れては居るまい。其儘で、さ、さ、通るべし。

* * * * * * * * *

火鉢の端の焦げるまで炭を山盛にして乳母の前に御馳走振りする力雄、自分も萍水も共に手をあぶりながら、互ひの無事を祝しあふ挨拶。次ぎては一別以來の物語を飛して、誰彼の傳言を簡畧に述べ、それから第一に力雄の成長せるに驚きたる由語り、先づ問ひたきは男世帯の次第、何した仔細と尋ね出しぬ。萍水鬚を握りながら。　仔細と言うて別にはないが、如何したものか思ふ様な女中が一人もないそれ故、仕方なしの此始末、ト答へて。　いやも力雄も困て居やう、私もこれには大閉口、ト迹は高笑に長き髪を漂はしぬ。乳母はまんおりともせず口を結びて、何か考へて、然る後物言ひたげあり。力雄は此中に言葉を挾みて。　乳母、如何して東京へ出て來たの。

萍水も亦續きて問ひぬ。　不意の上京とハ、何か。急な用事でもあッてか、心配な事でもあるためか。

乳母、僕は乳母が來やうとは夢にも思はなかッたよ。　大方こんな事であ

されどもお市は未だ答へず、唇を震はして目たゝき繁き内、咄として言出せり。

らうと思うて居りました。見つゞけた夢は皆惡し、觀音樣の御鬮を引くたびの凶、心がゝりで、心がゝりで、如何してもならず。娘が春に成ツてからと留めるのも構はず、無理に出て參りましたも、若の身上がきづかはしさ。實を言はゞ岸樣、貴郎にばかり委しておくのが如何も安心ならぬからの旅立、はいはい一圖に思詰めて來ましたぞゑ。

（其十七）

早朝起出て門外の雪捨を爲したるはお市なり。尙庭の掃除よりして上は椽側の光るまでに至らむは一月の後なりと言ふ。限りなく力雄喜び、萍水も亦同じ心、よろしく賴むと萬事を委せて、今日から冷めたさに米を漸く世話もなし。俄に春めきて只火鉢に對しぬ。お市は又押入を開きて、まアと一聲大口明けてふさぎ得ず。成程其筈、洗はゞ未だ役に立つべき足袋、靴下、中には新しきシャツあり、ズボンあり。綻、鍵裂に破れたれども、繕はゞ充分に用を爲すべき品の、姬路祭の小袖山を築きて、所謂勿体なき次第なり。大方此樣な事とは思はぬにあらねども、今更驚かれるずぼらの御生活。これだから安心ならず、乳母がわざ〳〵出ても來る旨儀。定めて其他も冗費多かるべし。何も彼も妾が元締、隨分すばりて見せます程に、其御了簡なされませと、嚴重なる口上に萍水萎れ、如何樣にも仕て見て吳れよ、根から收入は思ふ程あらじ。

時來りて力雄は例の如く讀書算術の稽古、擊劍の道場にも立寄ると言ひて出行きけり。萍水も留守番を

得て、久々の外出、或る畫工を訪問に道の惡さも四番町まで。初めて東京に出て雪に包まれたる一様の市街を見て、都とは雖も田舍同様の麻布高臺。家の中に居ては赤根の里に住ひたると大したる違もなく、誰も居らぬに遠慮あらねば、力雄の兵子帶を襷にして、裾を高く引からげ、煤拂を一人で仕らむ勢ひ。室々の障子唐紙打開きて、とんぱた〳〵とんぱた〳〵、無殘や書掛の原稿紙も、反古籠へどしこと詰めたり。

此最中入口に訪問ふ者ありて、それは女のやさしき聲なり。　はい〳〵、トお市あわて〳〵、兵子の襷い取りたれども、姉さん冠りの手拭其儘、ずか〳〵と玄關に出で見れバ、其所に立つ年頃十七八の娘。何とやら羞かしさうに控へて、挨拶に下げたる顏を上げ得ず。　何處から來なすッたえ、ト地聲太くお市より問へば。　妾は春山里と申しますが、あの、力雄樣は御在宅で御座いますか、一寸御目にかゝりたくッて參りました……ト答ふ。　それは折角の御入來だが、若は出て行きなすッたよ。大方晩方でなくば歸らッしやるまい、ト氣毒さうに言ふお市。お里と言へるは之を聽きて、少しく力落し氣なりしが。　それでは岸樣は……。　これも生憎御留守でね、いつ御歸りか知れませんよ。　あの岸樣も……。　はいさ、誠に御氣毒で御座んす――さてお前ハ何か御用が御二人の內に御あんなさるのかへ。　いえ、別に用と申しては御座いませんが、妾の弟の芳松と申しますが、力雄樣に英學を敎へて頂き、其他いろ〳〵御厄介になりますから、其御禮かた〴〵參りました。　さうで御座んすかえ、

それなれば先づ／＼此方へ上ッて、ゆるりと休んで御いでなされ。其内に萍水様が御歸りになるか知れませんに。　はい、難有御座いますが……ト何かもぢ／＼して居たりしが、籠に入れたる小鴨一番、恐る／＼差出して。　それでは今日はこれで御免蒙りまして、又折の好い時に伺ひますから、如何か萍水様にも力雄様にも、よろしく申上て被下りませ。これは誠に可笑な物で御座いますが、工場の裏の池に下りましたのを、芳松が昨夜捕りました故、日頃の御禮と申すのも御はづかしう御座いますが、わざと御目にかけますとよろしく御つたへを願ひます。　これはまア結構な物を難有ふ御座います。だが折角の御入來、ほかには何方も居りませぬ故、上ッて御茶なりとめしあがれ。其内御歸りで御座んせうに。　ありがたう御座いますが今日は御免蒙ります、ト留むるに留らず。叮嚀に辭儀して行かむとせしが、又た立かへりて顔の色あからめ。

あの此方様では此間中、御女中がなくッて御困りとやら承はッて居りましたが……失禮ながら貴女はいつ御上りになりました。　妾は昨晩參りました。市と申しまして以前から力雄様の乳母、赤根の者で御座います。　それでは貴女が乳母様で御座んしたか。さうとも知らず失禮を申しました。しかし貴女が入らッしやれば、此方様でも御安心でせう。誠に結構で御座います。力雄様の御喜び一通りでは御座いますまい。　でも男の子はあッさりとしたもの、此方から思ふて居たほど嬉しがッてゞはありませなんだ、ト言に、お里は力なく首をたれて。　いえ、さうでも御座いますまい……ト尚も言ひ次

がむとして心づき。　これは思はず話に實が入り、とんだ御邪魔を致しました。呉々も御二方によろしく、別て萍水樣には未だ御目にかゝりませねど……よろしく御つたへ被下いませ、トはさと言ひて、つと去りぬ。

（其十八）

前後歸來れる萍水と力雄、跛者の姉の訪問たる由お市より聽きて、それい遠路を折角來たもの、逢うて見るべかりしと殘念がり。芳志の小鴨見て氣毒千萬。されど芳松が捕りしとい合點ゆかず、未だ〳〵不審なるは、今日は火曜日、紡績所には休暇なしと聽きつるに、何として彼女の出來りしかと訝りぬ。何か知らねど御留守と聽きて、それからは急々と歸られたとお市言ふ。萍水問ふて、まア其姉とは如何樣なる風俗、美人か、醜婦か、と戯れぬ。乳母の答へを發せぬ間に、義叔さん、あの、義叔さんの大事な雛人形に似て居りますと力雄言ふ。成程承はれば其通り、女雛を今風に仕立たらば、今日の娘其儘と、乳母までが口を合はすに、萍水思はず膝を進めて。そんなに似て居るか。それが眞實なら見たいものだ。　義叔さん、今度の日曜日に春山の家へ行ッて見ませんか、晩方にい歸て來ますせ、ト力雄熱心に說きぬ。　だが。だが。だが……ト三聲つゞけて、萍水後には默つて仕まひぬ。

お市は此所に二日居り、三日居り、力雄と萍水と共に暮らして、つら〳〵家内の樣子を見るに、如何も齒痒くて、まどろしくて、馬鹿らしくて見て居られず。萍水より話を聽けば、見す〳〵損の行く雜誌と

やらの商賣して、それが爲めに借金も出來、益々淵に沈んで行くのも、一向構はずに平氣で御座る。それから日頃の擧動とても、十何歳の若と同じく、一所に成りての子供遊び。これが一家の主人たる者の身持か。さうかと思へばうつら／＼と、只寢てばかり一日を過して、夜はと思へば夜も寢る、朝はと思へば朝も寢る、机の上に溜りて居る書狀に葉書は、社の方より櫛の齒を挽く催促と、力雄樣は申されき。それを、まあ、捨ておくとは、呑氣と言ふよも程こそあれ。自駄落の風若にも染みなば、何んとして直し給ふ氣か。其他不都合、數々あれど、第一捨ておかれぬは此家なり。僅か三人の生活に、間數十二間、廣過ぎて贅澤至極。こりや若ばかりの看督でない、萍水樣も引くるめて、此乳母が世話燒かずば成るまじ。やれ／＼困つた、おぼッちやま、全体御歳はいくつに成られる。

斯く思込みたるお市は、一徹。萍水を突付けて、これこれか／＼と吐鳴出しぬ。大詩人閉口、さう言ふけれども、さうも成らずと、此言葉にて受流せど、中々言出しては後へ引かぬ鬼婆。非を非として理から詰められ、茲に詩人的家風滅茶々々に破れて、岸萍水頭は上らず。詩を知らぬ其方にはと言ひかければ、詩は知らねど、家の事は貴郎より苦勞人、何んでも妾にお委せなされと、獨で呑込んで、說けども動かず。泣寐入りに沈みて、嘆息、嗚呼！漸く切拔けて『遠山霞』の命脈のみつなぎしが、其代り金子の澤山取れる、そして面白さ昔の草双紙の樣な物を書けとの事なり。家は此土曜日限り、同じ麻布櫻田町に僅か三間の明屋を尋出して、日曜の朝からこれへ移る事とはなりけり。

流石に其日は芳松の所へも行かれず、力雄仕方なしの手傳ひすれば、萍水も迷惑さうに、箒を持てまごまごうろ〳〵。中に一人して一家の荷造りするお市は大力、荷車傭ふも無駄なりとて、大布呂敷に一切包み、これをかつぎて五度通ふ程に、それでわたましは目出度く濟みぬ。

（其十九）

どさくさの騒ぎにて此日曜日にハ芳松の家に行く事出來ず、いやとも次の週間まで延す事となりぬ。今度の宅に七日暮すは、前の家に一月あるより長く思はれ、厭でならぬ力雄。萍水も亦左樣なり。裏店の聲は耳につきて姦しく、これでは何も出來ぬと筆を投じて、當座は何一ッ成さゞりしが、それでも思直して無理に書きぬ。氣の乘らぬ拙作、これで世間にハ好い加減なるべしと、笑うて漸く我を慰む事のみ。力雄も同じく不平なれど、乳母に睨まるゝが怖くて勉强なしぬ。

この日にて今年中の日曜日ハ盡きると言ふ日に幸ひの天氣、風はあれども少年詩人は櫻田町の詫住居を立出でたり。雪山明かに枯林の上を畫して、空飛ぶ鳥の翼に氷柱あるかと疑はる。道は霜解に泥濘、田は氷りたるもあり、氷らざるもあり。竹藪鳴りて水車小屋につゞき、水は車より響きて淵に聲を失へり。力雄は例の如く詩を吟じて行きぬ。俄に節を留めざるは、人の來るなきが故なり。扨て踏切近くなりてハ一段と高く吟じ出しぬ。

常は彼方より口笛吹て答ゆる芳松の、今日は如何にせしか、それ無し。不審ながら線路を横切らむとす

るに、其所の番人は知らぬ老爺なり。番小家に進みて中を見れば、知らぬ老母あり。孰れも見馴れたる春山の道具あらずして、樣子變なり。事の不思議に力雄突如として問ふ。芳松は如何したか、知りませんか。

老婆も老爺も一時に力雄の上に眼を注ぎ、少時言葉なし。又問ふ。如何したの、春山芳松は……。其芳松かい、あれは可憐さうな事をしたよ、六日ばかり前にの、鐵道往生を仕て仕まッた、ト老爺が言ふ。力雄は茫然自失して、只眼を見張りぬ。

それにの、未だ可憐さうなのは、姉ッ子のお里さ。あれも一所に死んだがな、ト老婆が言ふ。これを聽いて未だ後を耳に入れず、燕の風を切る如く力雄は一散に駈出して、吾家の方に向へり。中途より泣ながら尙一散に駈りぬ。

（其二十）

時を違へず滊車は過ぎるなり。紡績所の烟は絶えず空に漲るなり。それで芳松は居らず、お里も居らず、誠に力雄には淋しき年の暮なり。此少年詩人は義叔萍水と共に散策なして、可憐き二人の故家を訪ひ、新しき番人の古き夫婦を見る。老爺は線路に沿ひて案内なし、二三町西の方に行きぬ。其所の邊には沼あり、林あり、枯草の繁る土手あり、枳殼を植ゑたる垣あり。滊車進行中は往來を禁ぞる條記したる木札あり。老爺は立留りて。此所でがすよ、丁度此所でやられましたよ。

萍水は線路を見詰めて、幾度か瞬きぬ。力雄は萍水を見て、線路を見て、又萍水を見て――瞬きぬ。老爺は腰の手拭を取りて涙を拭きつゝ。　不憫な事を仕ましたよ。花の盛りの若けい者を二人まで殺してしまッた。兎に角親もありながら、それは未だ死んだ事も知らずに居やせうよ。世帯道具を賣拂ッて、御葬は出しやしたが、親類が好くねえから、御石塔はむつかしかんべいと皆さう言ッて居りやすのさ。

如何して死んだのでせう、義叔さん、ト力雄は問ふ。萍水答へず。　何故死んだのだらう、爺やん、ト力雄又問ふ。　それが今に分りましねえ、書置なし、死ぬる前の樣子を知ッてる者もなし、ト老爺は答へぬ。　何故でせうねえ、ト力雄又更に問ひぬ。徐ろに萍水口を開きて。　何故死んだか、其疑問は知れて居る。書置がないと言ふけれど『詩の雜誌』に芳松が書いてる物を見れバ、大概分る。彼は常に親ありながら孤兒同然、生きては居ても片輪の悲しさ、死せる身も同じなりと、常に唄ふて居たでハないか。此世の逆流に負けて倒れたのだ。不憫な事だ、誠に氣毒だ。力雄お前に乳母と私がなくて見ろ、或は芳松の終焉を踏むかも知れぬぞ。扨て姉娘のお里は……ト、言ひさして途切れしが、首を垂れて聲曇らせつ。　彼女は詩人を知る者なり、詩人を知つて身を過まり、はかなき空想に埋れて、遂に詩人の運命と共ゝ夢を抱いて死んでのけた。しかし詩人も亦詩人を知る人を知る――二人の最期は寧ろ二人の身の爲めに賀す。能くぞ去りしよ、汝の逆境を。

（其二十一）

十二月三十日の夜は世間一樣に忙がしく、立松飾竹買うて門をぞろ〳〵と通るぞかし。家々の軒には高張を點して、人々の出入繁く、それならば明日は必ずと言ひて歸るあり。茲に岸の家にも活版屋より手詰の談判、加へて新聞初摺の筆はじめ、組方の小僧が幾度となく來りて、今宵の間にあはずば、一欄を白抜にせねばなりませぬと、雅俗混合の催促。萍水は今更の樣に年末を蒼蠅となし、筆も取らねばならず、口も開いて言分つけねばならず。大いに困りぬ。お市ハ書出しに度肝をはづして、まアこんなにありますのかい。

萍水は力雄々々と呼付けて、さア〳〵てには何も構はず、無茶苦茶に假名を附けて呉れと、幾枚の原稿を渡して、尙颼々と毛穎を驅りぬ。洋燈を眞中にして、机を差向ひに並べ、殆ど額を合せての夜業。此燈火を次の間より受けて、お市は內職の元結捻り、指先の細かなるは乳母のガヲに無き圖なり。十一時に稿を脫しぬ。力雄は好きなる道とて眠いとも言はず、未だありませんかと筆を火鉢の炭團の上に翳しながら問ひぬ。萍水は最早や返すべき言の葉すら疲れたり。其儘倒れて天井を睨みて居りしが。

どれ！これから行ッて來やうか、ト言ひながら、決然として立上りぬ。　翌日になされては如何と乳母が言へば。

翌日では間に合ん。　郵便では如何ト力雄が言へど。　それも亦間に合はん。

では、妾が持ッて參りませうかト言ふお市。　いや其方では先方の家が知れまい。　ぢやア僕

が行きませうか、ト言ふ力雄。　　お前では途中が嶮呑だ。巧拙は兎も角も持ッて行く物は二度と書き得られぬ原稿。持つて歸る物ハそれだけの報酬。たしか百圓ハある筈。万一落しては何方にしても困るから。　え、え、百圓！トお市は叫びぬ。　紙が紙に變るばかり、何の不思議があらうか。此原稿は薄片の紙幣と輕はづみの名譽より他には、何にも得られぬ廢物だ。不朽と言ふ事は迚も望まれぬ。我詩神の滿足は迚も〳〵買はれぬ。歸には乳母、何とか言ッたッけの。輪かざりに門松、ゆづり葉に、飾炭、これだけは我が買ッて來るぞ。其他の雜物はあしたに讓りて、餅は好物、澤山に求めて呉れ。又力雄の入る物があるならば遠慮なしに見つもりして置け、トて帽子冠るや否や寒風の外面に身を躍らして衝入り、夜は晝なる街の混雜、織るが如き中にまぎれて忽ち見えず。

山の手すら是なり、下町の市は又一入、夜店に点す石油の煙と、風と人に捲れたる砂塵は、朦朧として空を覆ひ、正しく歳暮の一種言ふべからざる不快感の天地を造りぬ。

此中を來往する一寒生。徹夜の事務に死斯を消さぬ新聞社、雜誌社、某書店を歴問せり。此戰場の如き中なれども、殊の他優待を受け、岸萍水が財嚢は、案外の福を以て滿ちたり。但し銅貨の封棒、幾本を込めて重き事瓦礫の如し。

彼ハ之を懷中にして歸途に就きしが、人爲の白晝も深夜の寒氣に肌凍へ、溜らなくなりて途ある蕎麥屋の前に留り、一考して暖簾を潜りぬ。中にハギシと客人詰めたり。大根おろしを造り居る丁稚は、疳走

りたる聲にて、入らッしやい引と呼びたり。次ぎて二三の口より同じ言葉は出でたり。人々此方を見ぬ。大詩人の來降を知れるやと言はぬばかりに座を占めたる萍水、神々の會食に我長たる心地に浮れて、四方を見廻しぬ。去るに彼等の顔の乞食の樣に見え、貧兒院の厄介者の樣に見え、何となく憂ふる處あるが如く見ゆるが氣に障りて、心の內に呼はッたり。何とて其樣にふさぎ顔するぞ、食へよ〳〵、暖き物を、美味き物を、品々撰みて澤山に食べよ。そして皆去れ、其儘にして去れ、我此所に金子を持ちぬ、殘らず拂うて遣るぞよ。

（其二十二）

冴へたる下駄の音聽えしが、軈て格子戸を開く響の天地を破り、次ぎて上口に倒込みたる男あり。義叔さんが御歸りなされたと未だ寐もやらぬ力雄の、先づ第一に出迎ふるに、お市もそれと立出て、御寒い事で御座りましたらう、此樣子では三ケ日の內に又雪かなど言ひながら、燈火を差出せば、如何に、萍水帽子を冠りたる儘其所に轉がり、早や高鼾にて眠りてあり。これでは途中も夢を見ながら歩かれたのであらう。何んにしても不思議なるは、常から嗜まれぬ酒の香高く、見れば土の如く血色惡くて、額の筋は脈を打つなり。徒事ならずと力雄もお市も、右左より動搖りて、起きよ〳〵と呼はれども、魂魄既に去つて又不歸の人の如く、何としても他愛はなし。力雄は泣聲になりて、只義叔さん〳〵と言ふ。お市は鐵挺の如く腕を延して、兎にも角にも此所にてはと、萍水を抱上げ一間に連れ行きぬ。此時懷中よ

り落つるは、紐の解けたる財袋なり。手早くお市は取上げて、中を見て、驚くまいことか。これには何もなし。何も買ふて歸られぬ筈、まア如何した旨儀で御座りますと、疊をたゝきて問詰むれば、萍水わづかに目を見開き。

さう言うて呉れるな。仕方がない、後の祭だ。拾うた奴は好い年越をするであらう。

それでは御落しなされたのか。

さうかも知れぬ。何か知らぬが、財袋だけは殘ッて居やう。いゝさ、いゝさ、言ふても無益。もう小言は止して呉れ、呵るのは勘忍して呉れ……。

貴郎はまア如何なされたので御座りまする。もし、もし、萍水樣、わ、あまりと言へばあまりの事、もし、萍水樣、如何なされたので御座りまする。貴郎は〱、ト乳母は烈火の如くなり。之を聽く萍水は氷の如くなり。

成程言ふても無益、何も市はもう申しませぬが、今日と言ふ今日こそ貴郎には、あきれはて、愛憎も何も盡きました。岸樣。これ、萍水樣。最先鳴ッたのは午前の二時、もう十二月の三十一日で御座んすぞ……。

分ッたよ、分ッて居るよ、我が惡いのだ、もう言ッて呉れるな。二時過ぎなら寢るとすべし、又翌日にあれば、好い思案が浮ぶかも知れぬて。

翌日になれば好い思案が浮びますとえ、そ、それは駄目。當になッた事では御座りませぬ。嗚呼如何して貴郎は其樣で居らッしやる。此市ゝな、若を看護に赤根から來ましたが、却ッて貴郎に世話が燒け、若にも心配をさせる樣な有樣。何んたる因果で御座りませう。

分ッたよ、我が惡かッた、もう言ふ

ゐ。

言ひませぬ、決して無理は言ひませぬ。でも、それでも、言ひたや〳〵まアぢり〳〵歯掻くて、えッ、居ても立ッても居られませぬ、ト身震ひしての腹立。

肝を潰して只直立せる力雄――お市は不意に其力雄の手を取りて、荒々しく外面に出でむとす。力雄愈愈吃驚して。　乳母、何處へ行くの。　はて、これから赤根の里へ歸るのぢや程に、とッとく急いで支度なされ。　え、えッ、赤根へ歸るのかい。　歸るのとも〳〵、急いで此所を立去りませう。迚も伯父樣に御前樣を委しておく事ハ、出來ませぬ。

（其二十三）

待て！一聲凛としてずんと響ぬ。さしもに猛き乳母の勢ひも之に挫けて、力雄の手を取りたる儘立腰に座りぬ。萍水儼然として更に語を發し。　まづ待て、兎もあれ乳母、力雄も待て――成程乳母の眼を以て見たらば大事な力雄を委しておけぬと、我の仕方をあやぶむのもそれは決して無理とは思はぬ。今に始めぬ乳母の熱情、常に謝すのは其所にあるのだ。なれども亦一歩下つて能く考へて貰はねばならんのは、抑も此世の生活に迂い世外人の萍水が、眼を潰つて墮落して、江湖に再び迷うてまでも力雄の教育仕て見やうとしたのは、何の爲めであるかと言ふ、さア此所を思うて見て呉れねばならぬ。物好から出來やう事か、利益の上から出來やう事か。言ふまでもなく友の子の孤兒の境遇が不憫さに、それを救うて遣りたさの只一片の慈愛からぢや。慈愛と言はゞ其方とて我に少しも劣るまいが、互ひに劣らぬ其中にも

内と外との別れある。知ッての通り此我は隨分ずぼらの性質故、或時は飢させもしたらう、或時は寒からしも仕たらう。去かし精神の教育は未だ曾て怠ッたともおぼえない。折角植ゑた苗を拔いて赤根の山田に移すも好いが、それから先きは如何するつもりぢや。孤を托すべき人他にあるか、さ、さ、さ、乳母少しばかりの喰違ひで肝を消すのは女の持前、それで男兒がそだてられるか。いざと言ふ極に到れバ百や二百の端金、如何にでも成る事ぢや。雪見小路の屋敷へ手紙一通持ッて行けば、向ふは喜んで辨じて呉れる。これまでそれを仕なかッたのは、我の方が厭であッたから逃る様にして斷はッて居たのぢや。斯ふ何も彼も言うて仕舞へば、大概合點が出來たであらう。乳母、まア御輿を据ゑて、これから語る次第を聽けよ。去かしながら萍水とて徹頭徹尾過失がなきにもあらず。力雄の爲めには思切つて身を落し、我を捨て働かうと思ふたが、これと言ふも自分と自分を知らなんだ罪、元來我には潔癖の感情強く、如何も其濁流が泳切れなかつた。それ故の失敗今日に於て愈々せまり、尚後に到るに從つて其方の心配益々加はり、遲かれ速かれ今夜の様な衝突、必らずあるとハ知れて居る。其所でぢや、乳母、力雄も能く聽け、此櫻田町の住居は今日を限り即ち今年を限りにして、一家分散を仕様と思ふ。これも前から計畫して居たのを急に實行するバかりぢや。驚くな。驚くな。乳母は直ぐに赤根の里へ歸れ、我は再び旅に出る。力雄はもう獨立になッても心細い事はありはすまい。幸ひ無二の親友に太田何某といふが私塾を開いて、海軍兵學校へ入學の志願者を、熱心に教育して、海國男兒を養生して居る。其所へ入塾するが好からう。

我の意見はこれだけぢや、ト一氣滔々述べたりけり。
最初は酒の高調子と思ひしが、段々の理詰に漸く悟り、瓢の錨で船の泊りたる思ひ、捨て者よしたる萍水の本心聽きて見れば、扨ては矢張えらい御方と、罵りたるが耻かしくなり。お市赤面して立腰を下しぬ。
此時力雄は思入りたる意氣組にて。　義叔さん、それでは私は其太田さんの塾へ行のですか。さうだれ前は海軍々人の志願者ではないか。　義叔さん、それなら私は厭です、太田の塾へ行くのは厭です。海軍も厭です。私は軍人になるのは厭です。

（其二十四）

太田の塾も厭、海軍も厭、軍人に成るのが抑も厭だと、あア分ッた。それでは力雄、お前は詩人が望みなのだな。左う言ふであらうとは滿更知らぬでもない、お前が此頃の擧動に就いて見る處がなかッたでもない、早晩言出すとは豫想して居た事ぢや。扨てもそれでは困ッた事かな。とんだ我のが傳染して、詩人熱に身を亡びさせる事か。去かしながら力雄、れ前は詩人の行手の方、如何なる障害があると言ふ事、よも知ッての上ではあるまい。只此伯父を見習うて、遣ッて見たさの發心であらう。もしそれならば何處までも、其不了簡を留めねばならぬ。
でも義叔さん、私には軍人には成れない。私は詩人になら成れるのです。
はて、それを見定めるのは長者の責任、れ前が言出すまでもない、好くば我から勸めるわね。聽けよ力

雄――我はれ前の意志を曲げる者ではないが、曲りかけたを撓めるだけの役目がある、されば力雄、今言ふ義叔の言葉を以て、無二無三に詩人を止めさせる攻撃ぢやと思ふなよ。腑に入らずバそれまでぢや、合點行かずばそれまでぢや。扨て第一に名乗り上るは、萍水自ら詩人と成りたるを悔る者なり。萍水は詩人なれども、岸某と言ふ其方の義叔は何處までも詩人を嫌ひ――今の世の詩人を嫌ひ、後の世の詩人を待つ者なり。百人の空想者を造らむより、今の世に一人の實行者を出さむを望む者なり。自然だと言うて手を拱き亡國の歌を得意に吟ぞる大詩人を嫌ふ者なり。成程詩人ハ天職を得て神と同位の者かハ知れぬ。其眼中に區々とした國の差別はないか知らねど、又、悉く人に詩美を解させむと勉めて御座るか知らねども、今と言ふ今の日本には、そんな詩人は結構過ぎて、其人々が働くべき、美術が支配の黄金時代は、未だ數百年の後にあるのだ。花なくして實は結ばねども、花咲く春にあらぞして、花開きなば再咲、味好き菓物の如何でか生ぜむ。詩人なくして世は欠くるとも、未だ不自由は感せぬ現時、外に焦眉の急があるぞ。高枕なる世人は知らねど、外に焦眉の急があるぞ。嗚呼斯くの如く大詩人ですら、縮むで居らねばならぬ時、世の風潮に從ふて只漂うて華文を弄すは之眞の詩人にあらず。さらバ手段の爲めにして教化の編を作らむか、之も眞の詩人にはあらず。嗚呼むつかしき文學界、何を苦しむで入らむとするのか。岸萍水は既に溺れ、今如何とも詮やうなし、僅かに國体の美を絶叫して、餘命を茲に繫ぐばかりだ。それにこれから前途や遠き有望のお前を其淵に沈めやうとは、如何しても出來ぬ。百千の

空想の人より、唯一の實行の人を貴ぶ。力雄、力雄、大日本帝國海軍々人を志願せよ。さら〳〵義叔の眞似ばかりハ仕て呉れるな、賴む〳〵。説く者未説盡さず、聽く者も亦會得に至らず。時や外には鷄鳴の四方に起り、愈々大晦日の朝は白みぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

麻市櫻田町不動祠の隣、元日に門松のなき明家一軒。かしや札に驚きて年賀狀の配達の郵便脚夫が困りぬ。

（其二十五）

『遠山霞』廢刊の後五年、何事も昔と過ぎて萍水の名は何の紙上にも見えずなりぬ。力雄は一人東京に留りて、太田の塾にあり。今歳兵學校の試驗受けて、未だ及落の沙汰分らず。此間に久々の歸省せばやと、拂曉霧の中に都門を見捨て、滊車に乘らず、滊船にも乘らず。初めて海を望みたる處は初めて山に入るの坂路なり。杉林の中の社殿に憩ひ、秘水を掬びて飲みつ、彼の馬引の老爺の事、義叔と共に握飯を食ひたる事、此所にて義叔が海軍々人たれと勸めたる事などを思出しぬ。水間村、唐傘松、五所の森、早瀬川の曲橋、雪消の清水、次第々々に故郷に近寄るかと思へば嬉しく。出る時に遲勝なりし足も歸る時の今の速さ。小山も大山も急坂も險道も草鞋一足の命に踏破りて、愈々白雲峠にかゝりぬ。これを登れば赤根の里は一目、五年前には霧深かりしがと、汗を絞りながら蝙蝠傘を杖としてすた〳〵と登りぬ。

一角を廻らば其頂上の見ゆると言ふあたりにて、犬の鳴く聲と人の話す聲とを聽きぬ。既にして翠微登盡せば、其所には故鄕の友の大勢と、乳母のお市とが出迎へて居たり。互ひに恙きを祝する中にも、我が力雄を見よと言ハぬばかり乳母は傍を離るゝ事なし。言葉の合間には必ず言ふなり、此大きくなられた事や――扨ては我も友達の一同が大きくなりたる如く長じたるかと、力雄思ひぬ。されども乳母自らが言ふ如く、乳母の元氣衰へたりとも思ハれずして、此年齡になれど未だ何となくおッかなし。

* * * * * * *

今宵は舊曆の孟蘭盆、土地の習慣とて先祖代々の墓場に燈籠を點し、參詣は夜に入りて爲しぬ。常は淋しき山路も、人の往來繁くして、賑はひぬ。更けては人去り、燈籠も消ゑ、處々に二ッ三ッ。此方に一ッ消殘るは、白張の盆燈籠。火は幽かに照して水野家の文字を見せたり。苔古き二個の墓石の前にぬかづきて、首を得上げざる一少年あり、力雄なり。彼は此所に留まる事久し。漸くにして彼は立上りぬ。されども中々に去り得ざりき。茫然として空を仰ぎ、銀河を渡る流星を見たりき。更に歩まむとして又歩み得ず、阿伽桶の手に面を伏せて、再び蹲れば、虫蟋々の聲尙倍さるなり。力雄は腰の矢立を搜りて、此度は勢好く立上りぬ。進寄る盆燈籠の前、筆を取りて白き處を染めたり。

　亡親の顏照らさずや盆燈籠。
　　飛來る虫ハ又飛んで行く。

卒塔婆より芒は高く繁るなり。
さら〳〵鳴るは早や秋の風。

亡親の顔照らさずや盆燈籠。
水を手向たりの甲斐もなし。
思ふ事通すにかたき浮世哉。
船に乗れいと義叔さんは言ふ。

亡親の顔照らさずや盆燈籠。
劔で文字の題されもせず。
吾手には筆より他に持てぬなり。
なさけは重き千鈞の鼎。

亡親の顔照らさずや盆燈籠。
消えての後は元の闇の夜。
夕月の雲より山につゞくらむ。
歌謠はねば又人もなし。

二度三度口の内に吟じて、吟じつゞけて此所を去行く。力雄が降りしは東の坂なり、一歩遲れて西の坂より登來る一人の旅人、これも同じ墓石の前に來りて、ぬかづきて、大嗟する事少時、振上る顏に夜露を受けて、涙の散らぬ眼に映るは盆燈籠の文字數行。これはと氣の付きて四面の四句、幾度となく讀かへしたるが。　嗚呼ト一聲先づ洩して。　もう仕方がない、許す〳〵、それ程詩人に成りたくば。

（完）

◉谷川

（其一）

御產所ケ嶽は雲に隱れて見えず。三重川の上流は湯の山の谷を分きて、瀧と成り、淵となり、岩を嚙み、石を呑み、斷崕に碎けて曲り、其色雪の如く白き巖の間を潛り、今は吾立つ獨木橋の下を流れゆく、いろ〳〵の紅葉を載せて流れゆく。

我此所にある事久し、此景に對して詩もなく、歌もなく、唯立ちて居たる事久し。此路を斷ちて橋上を專有すれども、一人の我に避けよと命ずる者來らず。江州への間道と聽けど、誰一人通ずる者なし。時に蕭颯として散る兩岸の紅葉、渦卷に卷込れて沈みて浮き、二度沈みては又浮く頃、鳥の水面をかす

りて飛びたるを見き。少時して魚の跳りたるを見き。此他に生ける物は恐らくは住まぬなるべし、如何に寥落たる山ならずや。

三岳寺の和尙の我を戒めたる言葉ありき。彼の谷川の邊に長く留り給ふなと。何故に斯く言ひしか、かゝる詩境は少しと言ふにあらねど、又多からぬ眺めあるに、此所に長く留るなとは如何なる心にて言ひたりけむ。菰野溫泉の八景に此所を數へざりしは何故なりけむ。これより下る事一町不足、其所には浴舍四五軒、浴客我と同じき者二三十人、之等の何とて此所へは遊ばざるにや。

白石、碧流、紅葉、此三個の色は誠に畫にもなき配合の妙なり。

御產所ヶ嶽は雲を破りて其姿見ゆる樣になりぬ。其下に炭燒の烟あり、扨ては彼所にも人ありや、此路より通ふにや。思ふに朝早く霜を踏みて行き、夕の星を頂いてこそ歸るらめ。

兩岸の紅葉は繁く散りはじめぬ。瀧は霧と成り、淵には浪高く、斷崖に碎くる音すさまじく聽えぬ。扨ても秋風の寒や。夕日指す大岩の上に行かむと、橋より石に飛び、石より石に移り、石より岩に登りぬ。扨大いさ十二抱、これのみは色黒く、上に二三本の小松あり。

此所に安座して扨て最初ありたる彼の獨木橋を見遣れば、いつの間にやら來りけむ、我の佇立たる跡に一人の男あり。背に炭の俵を負ひ、手に力杖を穿きぬ。年齡は若し、顏燻りていと醜けれど、何となく優しき處も見えぬ。

行く者か、歸る者か、只橋の中央に立ちて、行かむともせず、歸らむともせず、動かざる事岩の如し。我も彼の如くにてありけむ。

（其　二）

自分と趣味を同じく仕たる人を見れば、假令其人の未だ知己ならずとも、何となく語りたき心起るが吾癖なり。我の佇立たる如く同じ獨木橋の上にありて、行かむともせず、歸らむともせず、只一心に水面を見詰めたる炭燒の男あるに遇ひて、吾癖は愈高くなりぬ。此岩の上より呼ばむか、水流の遮りて恐らくは通ぜまじ。行くに物好きハ又も引歸して石に飛び、石を傳ひて橋の根に至りぬ。男は我ある事を知らずや、俯下を睨みて去る事なし。我の横木を踏む爲めに少しく動ぎたるにて、初めてそれと氣や着きけむ、驚きたる顏して此方に向きぬ。傍にて見れば優しきが誠なり、燻りたるは稼業の表、洗はゞ忽ち又清からむ。近きて見出したるはこれのみならで、其眼に溜る涙なり。物平を得ざる時は鳴るとかや。詩人の不平ハ一篇の詩と化し、俗人の鬱したるは双行の涙――嗚呼今我に詩なうして却つて炭燒に涙あり、是正しく平ならず。我より問はむか、何をか愁ひ、抑も亦何を感じたるや、何をか觀つゝあるや。彼は我の來りたるを只此橋を過ぎらむ爲めとのみ思ひけむ。避けて通さば好しとのみ思ひけむ。嗚呼、人、我はさる冷かなる男子ならず。熱き血を以て汝に問ふあらむとせる者なり。

物の水底に沈むを觀るにや、又水面に浮ぶを見るにや。

彼は此言に答ふる能はず。我は再び問ひぬ。

御身は抑も何物を見るにや。

彼は是にも答へざりき。三度我は問ひぬ。

さらば此所に憩へるにや。

此時彼は我をつく〴〵と打守り。

此橋を過ぎ給ふにや。

否、然らず、御身に問ふ處あるなり、谷川に何物の潜むや。

水面に人の顏の寫るを觀むとて。

御身それを見たるや。

未だ見ず、朝、夕、此橋を過ぐる毎に必ず佇立て窺ふと雖も、一度も我の見たる事なし、恐らくは虛言ならむ。

見たる人ありと聽くや。

然り、我の知人は皆見たりと言ふ、之を見て恐れぬ、之を見て走りぬ。我ハ恐れず、走らず之を見むとて來れども、吾眼に映せざるは實に虛言に違はざるなり。彼の人の顏の吾眼に觸れねばな

らざるなり。さるに今日まで其影をだも示さゞるは虚言に違はざるなり。我は翌日より窺はざるべし。昨日も想ひぬ、翌日よりは窺ふまじと、されどもそを破りて未練にも今日は立ちぬ、必ずや翌日よりは……決して、決して、此に立つまじ。

人の顔とは、誰の顔ぞや。

此所に死したる人の顔なり。

死したるは誰ぞ、何故に死したるぞ。

彼は涙を水の面に濺ぎぬ――話の中も見て居たるなり。我は繰返して。

死したるは誰ぞ、何故に死したるぞ。

言ふも益なし、語らば長し。

嗚呼かゝる美しき谷川にて人の死するか。

左なり、此谷川の如く美しき人の死したるなり――何故に死したるかと又問ひ給ふな、言ふも益なし、語らば長し。

（其　三）

語らずして去りぬ彼の炭焼の男は。山隈に入りて見えずなりぬ。嗚呼何故に言はざるか、言ふに忍びざるが故ならむ。死したる人の友か、親類か。

和尚が言今思ひあたりぬ。此谷川の邊には長く留るまじ。
三岳寺の暮の鐘は頻りに歸途を促しぬ。我は此谷川を見捨て、徑路より入り、筧の水と共に曲折五六町、礀泉樓に歸りたるに燈火は早や室を照らしぬ。温泉に浴して出れば、晩餐の膳を整へて下婢は待ちぬ。落鮎を肴にして一德利傾けながら、尙谷川の景を想ひ、彼の炭燒の男を懷ひぬ。實に淋しきは秋の夕、悲しきは死したる人の上、誰が何故に身を投したるか、問ふには彼の和尚より他に能きはなし。これより三岳寺に行かむと匆々に盃を伏せ、箸を納め、湯場下駄を穿きて裏づたひ、石階を登りて庫裡に至りぬ。
葷酒を山門より許して、和尚も腹に入るゝ處なりしが、喜びて我を迎へぬ。我は盃も受けず、茶も受けず、圍爐裏の前に座するや否や、彼の谷川の事を語出しぬ、今日の大畧を語出しぬ。
次で問ふ。
其故なくして止むべきやは、美しき人とは誰ぞ、何故に死したるぞ、語り給へ、聽して給へ。
和尚は笑ひて——他を言ふ。
御身の好み給はぬ情話なり、我も語るにつらく、御身も聽くに物うけむ。
否是非に聽かしめ給へ、彼の谷川の我の心にかなひたる如く、彼の谷川に死したる人の身上も、左ならむ。

和尚は膝を進めて、粗朶を投じ。

左程に御身執心ならば、語るに何んの雜作もなし、話下手は今日に限らず、細かな所は眼の届かぬ愚僧、洩れたりとて咎め給ふな。

*　*　*　*　*　*　*　*

夏は此山も殊の他賑ひて、浴舍一軒に百余人の客あり。御身の宿れる磵泉樓は殊に多し。此二三年は又殊に多し。主人と我とは圍碁の友なり、彼の乞ふに委せて明きたる僧房を貸し、眞に病を養ふ人、又は身分賤しからぬ人を宿しぬ。食事一切は此方の關せざる處。

客既に斯の如く多し、少數の下婢にては用を辨ぜず、急に下の村々より女を呼びぬ。されども思ふ樣にはあらざりき。詮方なくて親類の娘を手傳ひと言ふ名儀にて頼みぬ。二三人來りたる中にお錦と言へるあり。

其時彼は十五歳、誠に可憐の者なりき。彼の身上は好く知りぬ。彼の父の死したる時、愚僧は誦經の爲め行きたれば。

彼の家は此湯の山より出る三重川の支流、里川の邊にあり。彼は其水にて產湯をつかひぬ。其水にて、嗚呼、自から末期の手向を受けぬ。

彼の母は誠に薄情なる女にして、お錦の八歳の時、其妹の五歳の時、其弟の三歳の時、振捨て去りぬ。

其行衞は知れて居りしが、父は又引替への好人物、別に迎へにも行かざりき。心の腐りたる者ハ迚も治すべからず、操を捨て、愛を棄てたる者は、此方よりも捨つべしと、更に見向きも爲さゞりき。後妻を勸むる者ありしかど、聽かざりき。子が可愛くば娶れと言へど、子が可愛き故娶らずと言ひけり。

八歳のお錦は、母のつれなきを覺れども、跡の二人の稚兒は、母を慕ふて止まざりき。父の苦しさは如何ばかりぞ。　母は惡しき人ぞ。母は恐ろしき人ぞ。母の眞似をな行ひぞ。假令命ハ捨つるとも、女の操をな失ひぞ——これ父が朝夕の言葉なりき。

お錦は悲しき事ある度に、母の無情を怨み、其品行を賤しみぬ。父の正直を受つぎて優しかりき。田面の星、枯野の霜、此所に五年を過したる夏の暮、子等三人を跡に遺して、父は去りぬ、此世を去りぬ。其正直の心は不滅なれども、其肉骸は墓の下に腐りぬ、誰も棄てぬ物を。

嗚呼憫れなる子等三人は途方に暮れて泣くのみなり。お錦は年長なる程、悲しみも深く感じぬ。行末を思へばなり。さるに飄然として母は歸來りぬ。二人は喜びもせざりき、何となれば大方母の味を忘れたれば。一人も喜びず、母の惡しき事を知れば——さりながら親なり、子なり、父を失ひたる折に母を得たるなれバ、いつしか又嬉しくなりぬ。母は前の母とハ總て異なりぬ。好き衣着せ、佳き物を味はせ、一も二もなく愛したりき。こは誠の愛ならずして、二月は保ち得ず、又もや三人を捨て去りぬ、家の財

産を持ちて。此度ハ行衛知れず。
親類の誰彼、村の世話役、寄集りて種々と議したる末、弟の長ずるを待たで、戸主にすべき養子を求め、お錦の許嫁の夫として由松と言ふ若者をゑらみ、位牌の前にて盃をさせたり。
されども眞實の祝言するまでに至らずして、一家分散せでは叶はずなりぬ。由松は兄の家に歸り、お錦は親類の何某、妹は村長の家に、末の弟は四日市の縁家に、皆それ〳〵と引取られぬ。家と田地と知らぬ人に引取られぬ。これ母の印を自由にしたる結果なりし。
他人の家に住む身の何事にも心れかれて、些細なる響にも驚きぬ。お錦は吾身のつらさよりひきて、妹も、弟も、さこそ悲しからめと思ひぬ。一日も早く吾家を取かへして、妹と、弟と、又彼の兄樣と、睦まじく、樂しく、氣苦勞なく、只面白く暮さむと思ひぬ。
夏の暑さに沸るが如き泥田に入りて、田草を拔き。冬の寒さにも水を酌み、洗濯し。霜の朝、米を洗ひ、人の起きぬ間に竈の下を燃しぬ。人は眠るとも燈心の短きまで糸車を廻はしぬ。
由松も亦再興の任を擔ぎて、山中に炭燒の業を爲しぬ。

其四

或日由松とお錦ハ千本の松原にて出會ふたり。其時若者は燻りたる面を見らるゝを厭ひて、常に下を向き、娘は其手の輝裂を袖口に隱して、彼より、　つらからむト言へど、否、少しもつらからずト答

へ。此より、　苦しからむト問へば．　苦しき事なしト言ひ。其他は語らぞして別れしとかや。

扨て前に言ひたる如く十五の夏緣家より此湯の山の磵泉樓に移りぬ。其忙がしき事目の暉ふ樣なれど、且てありたる境遇よりは幾分か生きたる仕業に近ければ、身体を勞して心ハ結句樂なりき。怒る客、惡戯する客、長々と話仕掛ける客、小言言ふ客、睨付けて物言はぬ客、樣々なる中を立働き、東の二階にて手が鳴り、西の座敷にて呼聲し、鳴る方に行かむとすれば、呼ぶ方を如何にせむ。行きかけて、戻り、又行きかけて、戻り、立ちつゝ、居つすれば朋輩の女中共、何を迂路つくと呵付ける――嗚呼、何とせば好き事かと彼女は溜息を絶へず吐きぬ。

給使する間も穩かならず、此客多き夏の盛りを湯治場にては戰塲と言ふ。八方に敵を受けて、廊下を走る事、道程になほせば日に二十里ゟ余るべし。

お錦は此中に揉れて一夏を過しぬ、夢中に過しぬ。此間は如何なる人の四面を繞りしや。戀より落ちて今慾に入る宿屋稼ぎの下婢、慾の心より計りたる戀を樂しむ客、此輩に弄せられて野咲の菫は馬糞の下に敷れむとす。

されども父が臨終まで言つゞけたる彼の言葉と、時々顏を見合せる由松の無言有情、この二ッが危き間を繫止めぬ。

夏去れば、右の如き不潔動物も去りて、遺るは眞に病を養ひ景を愛するの客のみなり。下婢も亦物靜な

るが留りぬ。お錦も其一人なりき。
初夏の頃より此僧房に留りたる客あり、四日市の富家の息子にして東京に遊學爲し、商業學校を卒業なせしも、肋膜炎を罹ひて歸鄉間もなく此山に來りぬ。夏を通じて此所に留り、秋に成りても尙去らむともせず。
產富みて、子に貧しき家の息子なれば、兩親の寵愛一方ならず。其子の病みたるなれバ、心配も亦一方ならず。出來るだけの手段を盡して其療養をなさしめ、少しく好く成りてよりは、空氣淸らかなる此湯の山に來らしめ、四隣寂たる此僧房に居らしめたり。
東京に行きたるには珍らしき若者、惡しき風俗を見習はずして無垢の息子そだち、存外學力もありき。
澗泉樓より食事の給使に來るは彼のお錦なり。朝と晝と晩との三度の他。室の掃除と床の上下、湯、炭の世話。茶の出からしを捨てる世話、梨の皮むくも皆お錦なり。
居るに從ひて病薄らぎ、山の人々とは交情日々に厚くなりぬ。最初の程は入かはり立かはり家に出入の人々見舞にと來りたれど、それは一時の通り雨、いつしか次第に少くなりぬ。霧晴れて見る山下の遠景、蟬の鳴入る溪流、翠滴たる近山のながめも、早や目に馴れて珍らしからぬ折柄、友欲しき心高まりて、自然日々顏見合すお錦に話する樣になりぬ。お錦も此頃客人の減りて少しく身に暇も出來れバ、夢中に

働きし時とは異なり、何番の客の顏は如何樣なりと言ふ事の、目に留るまでに漸くなりぬ。扨て其中にも寺に居給ふ客人、若きに御病氣とはいたわしや、嘸淋しくおはさむと影ながら思遣りて――其癖面のあたりにては腹にても立てたるかと思はるゝ顏付。御暑いとも。涼しいとも。何一ッ言出さぬかはりに、敎へられたる口上の、何か用事の御座なきやと問ふは、常なりき。

客と言ふ者はいづれも荒き物、いやらしき物、能く怒り、能く笑ひ、能く饒舌物とのみ思ひたりしに、四日市の客の音なしさ、扨て又優しさ。一夜身上たづねられて、つひ、涙ながらに物語れば、彼方も涙こぼして聽いて被下れしとて、喜びて愚僧に語りし事ありき。

若者が三本杉の跡、戸くゞりの瀧など、近きあたりを散歩の折、供して行くお錦を見たりき。

夜更くるまで若者の小說本讀みてゐるを耳を傾けて聽き居たる事ありき。

或日の事若者の顏恐ろしく青く、娘の面赤らめて小走に去りたるを見き。

それより二三日は彼少しも來らざりしが、或夜洋燈と行燈と取替へに來りしを見て、其いつ歸りしか愚僧知らざりき。

其翌朝より來らざる事又四五日。

若者は又病を起しぬ。四日市よりは兩親と某醫學士と又彼の見舞人續々と來りぬ。

同ぐくれ錦も病氣にて、女中室に伏したりしが、由松が、枝なりの栗の實を持ちて見舞に行きたる外、

誰も訪ふ者わらざりしと。朋輩の女中供は虚病なりとて嘲けりぬ。さるに若者の病氣は存外輕るかりき。一同安心して引取りぬ。

一日愚僧庭掃かむとて僧房の裏の方に廻はりし時、不意耳に入る若者の聲。

斯くまで言ひて分らずは、我は彼の谷川に行かむ、それより他に詮方なし。つれなきにも程こそあれ。

お錦の聲。

分らぬにはわらねど――妾の苦しさも察し給へ………

愚僧の咳にて話は切れぬ。

南無阿彌陀佛。月なき空に明星のきらめき、風ひそかに落葉を渡る夜半、彼の谷川に少時河鹿の音を留めぬ。

* * * * * * *

* * * * * * *

其色の雪の如く白き巖の間を潜りて、三重川の上流はながれゆく。此清き谷川!三岳寺の和尚に聴きたる翌日、我は同じく獨木橋に立ちぬ。四邊の景色昨日に異ならねど、風の寒は、肌を徹しぬ。御產所ケ嶽に雲はわらねど、今日は不見炭燒の烟。

此時我に漸く句あり、流來る木炭を取りて、白石に記したるは。

わくら葉の散る物ならは散るそよき

（完）

◉湯坂越

昨夜は大雷大雨、蚊帳をずた〱に引裂れるかと思ふ程ありしが、今朝は果して玉緒橋打絶え、川には濁流漲り、亂石軋る音、瀬々の音、根より其儘なる杉の大木、押流されて漂ひ、絶壁を貫きて激してめり〱と折れる音。不憫川下の誰やらが家は危しと、口々に叫立ちて人々走りぬ。

去かも朝霧深く封じて、對岸を見るに難く。燃殘りたる篝火のみ鈍色とほのめく傍に、人影散亂とはすなれど、呼交ふ聲は恐ろしき響きに奪はれて、山寺の早鐘のみぞ聴えける。我と同じ様に宿取りたる旅人は、一足先きに踏出さゞりしを悔ゐ、昔の大井川今は早川に見る事よと怨ずるを、宿の主人は處の達衆とて。川留は吾家の繁昌なれど、急用の御方に知せ申すべし。裏手の山にそれは〱險しき樵夫路あり。辿りて登り給はば、富士見岩と言へるに出で給ふべし。其所には一筋の細き路あり。昔足柄の古道、湯坂越とはそれなり。右は瀧の前の間道、左を取りて參らるべし。嶮岨なれども下り坂なれば、一とろに湯本へ出でべしと、信切に敎えけれど、斯くなれば、今までの口痴にも似ず、避暑入湯の贅客とて、

兩脚は挽物細工か。生憎脚氣と二の足を踏むで、此道を行かんと立出たるは、我と六十餘りの老婆と二人なりき。

老婆は千個寺參り、よぼ〳〵として杖に縋る樣、いたはしや〳〵。何を急ぎて山越するにや、事に因りなバ力を添へむと、歩行ゆるめて後より從へバ。は、丶、と苦しき息を吐きつ丶、すた〳〵と登行く。登行く一曲り一曲り、木の根を求めては休み、岩角を尋ねては憩ひ、只さへ拔齒にさびしき口元、力なげに少しく開きて、上の方を見詰めたる樣、是より幾程の坂路なるやと人來らば問ひたげなり。

宿の主人が詞眞實なり。黃ばみたる粘土の濕ひたれば、一足毎にすべりて情けなき程踏甲斐なし。左程高く登りたるにあらねど、早や人里は霧に隱れて、すさまじき水音のみ響きぬ。類の知れざる「何物哉」と呼ぶ木々、檜木に似たる「翌日可成」と言ふ木々、いやが上にも繁りたる間より、葉風に連れて舞下る霧、蛛蜘の巢に姿を宿して行手を無遠慮に遮りたるに、ばた〳〵と音して落るは、雫か山蛭か。夏なほ寒し晝暗し。

大概の老婆は假令性質寡言なりとも、世間には慣盡して、彼より詞かくべき筈なるに、前を過れども挨拶さへ無く。彼の口元をもご〳〵と動かし、一念上の方を見詰めたるこそ怪しけれ。我より仕方なく口を開きて。扨も苦しき坂路ならずや。御老體のさぞかし息切せらる丶なるべしと言ひけるに、只左樣ぢやと言捨てしのみ。

萬一登るに惱み給ふとならば、跡より押して進ずべし。手を取りて導かむかと言へば、忝けなけれど夫にも及ばずとて、口元もごく〳〵とさし、消えかゝる目元に上を見入りたる事前に同じ。執て言ふべきにあらねば、辭儀して我のみ登行くに。右に曲り左に折れ、一步一曲、屈曲、曲更に急。隈笹肩に押分けて進み、漸く手の屆くべき處の木の根に飛付き、踏去る岩のゆらぎ、踏んとする岩の落ちてためらひ、躊躇する每に此路を如何にして彼の老婆の來るやと思ひ、心遣して行く程に、初めて水聲の遠きを覺え、霧薄らぎたる處に達し、梢まばらなる處に達し、道平かなる處に達し、終に富士見岩のほとりに出たり。

幾峯續き宮城野の上に當り、眞黑に繁る瘤山ハ、俗稱金時山なるか。二子山ハ霧の上、富士は雲の上に聳えたり。此所は蟬の聲姦しく、連嶂早や赫々と日に照され、霧は谷底幽かに殘りて、中に塔の峯の山門を見出したり。

幸ひに松林の木影あり。風も相摸の海よりか、涼しさ言はん方なし。汗を拭ひながら此景色眺めて、烏帽子着たる男子の此路を過ぎたる昔時、甲冑附けたる男子の此岩に憩ひし古代、如何なりしやなど心に書き、今日しも計らず湯坂越の、古道を踏みしを喜び居たり。

さるにても心にかゝるは彼の老婆が上なり。彼拒めばとて無理にも手を取り、助けたらばよかりし物をと、過し我を咎めて今の我を勵まさんずる處へ、飄然と登り來れり。口の内にて來た〳〵と密言きなが

ら、矢庭に富士見岩に腰掛て、溜息一時に吐出し、肩せはしく動かして、絶ねもやせむと脇目には見えたり。震へながらも唇ハ結ばれ、消か丶る眼は見張る毎に瞬き繁けれど、塔の峯の山門、太平臺の炭燒小屋、新道の九折、宮の下の人烟、富士の雲、二子山、鷹巣山、洩さず眺めて又も腰を据えける。風流の老婆、これも歌人の旅なりしかと我其前に進寄り。能き景色ならずやと言出れバ、老婆は驚きて身を起し。これを能い景色と申すにやと、何も知らぬ顔眞面目なり。又も不首尾に今更出過ぎたるが愧かしく、松の影に下りてひよ〳〵樣子窺ひ居るに、老婆はがわと立上りて、杖の上に手を重ね此上に腮を載せて、同じ景色を繰返しては眺め。果ては涙はら〳〵と落してさめ〳〵と泣きける。軈て包の中より畫帖樣の物一冊取出し、これを繰りてハ咽び入り、今度は彼の方より我に來ませと呼びながら。これを見て被下、天にも地にも掛替の無い唯一人の孫が、去年斯世に遺して行ッた畫の帳面。中に此所の景色もあるげな、妾には如何しても見ねませぬ。

（完）

◉後檜笠

其一

櫻は雨に濡れ、人は雲に包まれて芳野山を下り。牛車に崩れたる新道を泥に塗れて歩む事三里餘、鳥井戸村に達せしは既に正午頃なりき。林、北窪、高天村を過れバ葛城への登り口とて、急に平道は坂と變り、坂は俄に嶮しくなりて、雨に山土の濘り易く。一丁毎に道標の立てあるを、漸く八個數へたる時、脆くも草鞋の裏は破れぬ。

ぬぎ捨て一息なしつゝ、麓の方を見降せば、烟雨大和一面を封じて中に近村の白壁のみちら〱と見ゆる樣、晴し日の眺望知られて、しよんぼり其儘立ちて居りしが。思へばこれより四十餘町、盡さる所は雲の中なるに、斯くては成らじと勇氣踏出し、遂に其頂上に達しぬ。

去歳の落葉の鳶色なるが堆高く重り合ひて、杉の木立の根を埋め、梢洩る雫の風渡る毎に落來る音、幽かなる程厭な物なり。雨雲に只さへ暗きを、木の間の奥限りなうして、中に如何なる魔物や住むらん。

葛城の神居ます社は、恰も此林の中にありて、元は結構美を盡したる建物なりけん。今はいやが上にも荒はてゝ、幾百年を過したるや、社殿の破損甚しければ修繕の中は神躰を社家の方に勸請申すと、柱に打ちつけたる木札さへ、虫に朽ちて文字薄し。

これより下る事一町ばかり、移したる社家と言ふも、社殿に劣らぬ破損の有樣。屋根全く雨に扳けて、疊の上に枯草繁り、根には新芽の萠出て、夏は蚯蚓の吟ずるなるべし。板戶に狩野何某が丹精を凝したる櫻樹の畫も、洗ひ出されて一種の古色あり。此破目より奥を覗けば、百疊も敷かるべき大廣間、疊は片隅に積重ねて、座板も大方にはがして無し。わづか床の間と思ふ所に、四明繩を引きて簾の垂れる其中こそ、葛城の神や居ますなるべし。人は正かに此所には住むまじ。庭の横手の五輪の塔、誰が墓所か聽くに由なく、すご〳〵として立出し時、不思議や裏手に立上る烟、扨はと蹈留りて玄關を見るに、此所に張紙して楠公遺跡全一冊、これを望む者は案內を乞へと誌してあり。さらバ其書を求め、なほ話あらば尋ね見んと、聲高く案內を乞ふに、奥深く應と答へ、みしり〳〵と座板鳴して、家の中を下駄穿きたる儘、あらはれたるは一人の男。眼銳く鼻隆く、頰髯濃きに頭髮少しく禿げて、年齡は四十餘にもなりぬべし。異樣の姿は神官の故なるか、凜として昔時ゆかしく、これぞ南何某とて、浮世を厭ふ不平家とは後に至りて知れたり。

其二

我も此世に嫌はれて、不平漏すに處なく。故人が轍を旅路に踏みて、此葛城に登りし者なり。曾て枯骨錄と言へる自家の日記に「我が面相の惡なるは世に惡氣の滿つるが故なり。一變して世の善とならば、我顏も之に從はん」と誌したる事ありしが、其時よりも風雨に窶れ、益々青ざめたる面色に、光る物は

窪みたる眼、肉落たる頬にさびしく笑を含みて、主人の顔を打見やり。　楠公遺跡を見たく思へば、一部わかち給へと言ひけるに、主人ハ我を睨みながら。　其内摺らせる筈なれど今は一部も無しと言ふ、誠に冷やかなる返事なり。　さらば序に問はむ、庭内の五輪の塔は誰の墓表なるや。　誰と言ひ彼と言へど確實なる處ハ知れず。　さらは千早の城跡は何處ぞ。　此より下三十町餘。　其他見物致す物はなきか。　此處ハ多門屋敷とて楠公が千早に籠城と見せしも、實は此邊に隱れ居て、軍畧を廻らせしとかや。土地の故老が口碑なれど、眞僞の程は保しがたし。なほ此他に問ふ事勿れ、我の知りたるはこれより無しとて、其儘奥に入りぬ。

我が相の惡なるが故に、いつも〳〵失敗して、宿ありながら泊れぬ事あり。道を問はずして迷ふ事あり。主人が我に取合ぬハ、我が相を嫌ひし故か。總ての人を嫌ふが故か、我が惡相を嫌ふとならば、これぞ則ち世を惡むが爲めなり。人跡絶無とも言つ可き、此山中に住むより推しても、世の人類を厭ふての事と、先づ我は想像なしぬ。

己が田に引く水かは知らねど、厭世不平の人とならば、これ同情同感の士なり。我は世人の志想低く、肉躰の快樂を取るに汲々として、精神上のたのしみを知らざるを惡み。一個人の快樂を知つて國躰の如何を顧みざるを憤り。現今日本の貧か富か强か弱かを餘所にして、其度を守るの肝要なるを知らす。外に啄木鳥の來襲するは、内部に生虫の寄れると言ふを悟らず。一言以て言は日本魂の何物たるを忘れ

——むしろ知らざる者多きが故に厭ふなり。世の風潮は此腰拔者等に支配されて、我も幾度が漂ひかけたり。世の非常に亂れたる時は、非常の英傑出て救ふとかや。我が杞憂か、英傑出ず！我に其任の力なく、奮然立つべき勇氣にとぼし。今は只一身を潔くするの他なしと、扨てこそ檜木笠に身を隱して、旅に暮れ旅に明け、見るは山又山又山、海渺茫として限りなきに、抑もや聽きたきは此家の主人が、不平厭世の源なり。再び逢ふて問はん物と、又もや聲高く案内を乞へば、あいと答へて立出る人、此度は四十餘の女なり。

其三

扨も夫の不平に連れて、此淋しき山住居に、流石は女の人なつかしきか。我を見て莞爾と笑みながら。案内を乞ハれしは御身にやと言ふ聲、正しく吾妻の訛なり。　如何にも私なり、用の儀は今一度御主人にお目にかゝり、少々お話し申したし。　其事ならば誠にお氣の毒なれど、御斷り申しまする。　とは又何故の拒絶なるか、其仔細承はりたし。　仔細を妾の口からは、如何にしても申し惡し。　其所を枉げて願ひたきは、今、つらく御主人の風采をうかゞひしに、私と同樣の志想を持ちて、此山住居仕給ふにはあらずやと、ふと心に浮びたれば、扨こそ再度の案内を乞ひぬ。　おほゝゝゝ貴郎が如何樣な志想を持ち給ふかは存じませねど、迚も我が夫程にはよもあるまじ。　何處を以て計り給ふ。　されば、既に御身は我が夫にも亦妾にも、求めて話を仕掛け給ふにはあらずや。

如何にも然り。　我が夫は世の中の人々を見て蛆虫か何ぞの樣に思ひ。話す事は殊更、其人の影を見るさへ嫌ひにて、實を言はゞ妻たる妾をさへ嫌ふ事蛇蝎の如し。さりとて假令夫は妾を世の人の如く不義、不德、不忠、不孝の者と思ひ居らるゝとも、未だ夫が思ふ如き浮薄の心を持ちて無しと、妾自身を信じ居れば、去れと言はれても去り申さず、行けと言はれても行き申さず。元より去られて行くべき故鄕には、親もなく同胞もなく親族も亦友達もなし、あるは只行衛知れざる息子一人なればと言ひさして、眉は愁の爲に顰みぬ。　詞の如くんば、誠に主人こそ己より苦を求めたる不平の士、一方にかたよりたる厭世家と言ふべけれと一心に言ひ放てば、妻なる人忽ちほゝと笑出し、　そは御身の言はるゝ如く極端たるには違ひあらねど、妾の目より見る時は、御身が言ふ不平とやらも、これに同じ樣に思はるゝと、滔々と語る詞、是女子の口より出でんとは如何にしても思はれず。嗚呼旅に珍しきは、山河の景色にあらずして、葛城山上此人あり。さりとて此女の詞に盡く伏すべきにあらず、言ふべき事も聽くべき事も、まだ中々に澤なるべければ、大に論ずる處あるべしと。　さらば御身は主人が極端たる厭世說を、何故に碎き給はぬ。　そはおほせまでもなし、常に彼此と申しますれど、女の口の男に勝つは、妾自ら嫌なり。殊に前にも申す如く、一朝一夕の不平にあらで、これには樣々の事情もあり、好し又此事情無しとしても、蛇の嫌ひな人に何故嫌ひと問ふ用なく。墓を好く仙人に何故好きと言ふ道理もあるまじ。古人ハ知らず今の世の人は賴みがたき人なりとて嫌ふ夫の其心は、千曳の岩の動し

難し──われ〳〵向ふの林を見給はぬか。彼所に嘯くは夫なり。御身と妾と語る内、其聲聽くも可厭しとや、裏口より家を出でられたり。御身の去り給ふまでは歸るまじ。無益な空話は止めになされて、暮れぬ内に御下山あるべし。これより下は河内の國、金剛山の麓には、木賃ながら宿屋もあるべしと、何んの苦もなく言ひくるめられて、我折れ、年の効かなとつぶやきて。　思はず長話し致したり、さらば御免蒙らむと、二三歩行けバ暫しと呼留め。　下りの道知れ惡し、其所まで敎へ申すべしと、彼は竹皮笠の大なるを翳し・下駄は其儘に立出で丶、　破塀の間より萱草の枯れたるを踏分け〳〵、裾濡してぞ進みける。

其四

悟と迷とは背合せ、大和の方を葛城と言ひ、河内に屬くを金剛山。若し明かに境を畫かば、標杭にはふ蝸牛の角の左右や別れあるべし。人事茫々烟雨の中、千早へ降る岐路の、案内なくては知れ惡しと、南の妻に導かれ、行く〳〵下を見渡しけるに、遙かに聳ゆる六甲の兀山の根を限りとして、此方は河内、攝津、和泉、三國つらねて只一面、時は菜花の眞盛りに、緑は麥か、紅は蓮華草か、どんより霞みて定かならねば、りんじ祭の小袖山に、薄衣かけて見るが如し。

行く事しばらくにして萱草は盡き、兩傍に雜木の繁りて谷の樣になりたる細路に出たり。妻なる人は立留りて、行くべき方を示しながら。　これよりは一方道とて、只いづくまでも下り給はゞ知らぬ間に

千早なり。

わざ〳〵送り被下れ、御信切の段忝けなし。さらば此所にてお別れ申すと、なほも繰返して禮を述べ、獸物の足跡傳ひながら、五六間降りけるに。　なう待ち給へと鋭く呼ばれ。　忘れ物でも致せしやと、急ぎて元に立歸るに。　否、其の樣な事にあらず、少しく御身に話もあり頼みもあれば。　扨こそ呼戻し給ひしか。　無駄足させてお氣の毒な。　何の路の十間不足、扨て話すことありとは何事にやと問ひよるに、彼はつく〴〵我をながめて。　御身今年何歳に成り給ふや。　已にして二十二歳。　道理こそ！　息子と同年なり。今しも御身を此所まで送りて、降り行かるゝ後姿を、見るにつけても思出す、息子が鹿島立の當時の事。顏も姿も似ては居給はねど、御身を他人の樣にも思はず。殊に詞は吾妻訛り。同じ都の人とおぼえて、遂なつかしさに思はず知らず……。　私も最前より其所に氣が着かぬにはあらねど、家事を糺すは失禮とて、一句も問はず差控へぬ。如何に御子息が事苦しからずば聽し給へ。　お話し申すのもれ頼み申すも實に其息子の上なり。忘れもせじ五歳の前、息子は父のかたくなに似ず、此山中に朽ちはてんは、人の本分にあらずとて、一度吾妻の都に立出、思ふ樣勉強なして、御國の爲めにつくしたしと、父に幾度か願ひけれど、如何でかゆるし給ふべき、只一言に叱らるゝに、今は他に詮なしと、妾にのみひそかに告げて、けな氣にも家出を爲し、東京さして行きました、其の時妾は知らぬ顏して、丁度此所まで送りて參り、山に育ちし山だちが、知らぬ都に迷ふかと、

親の涙を子は知らず。只の別離と餘所にして、喜び勇む其の中にも、流石は跡を振り向きて、木魅返しに母様と呼ぶ。あヽ其聲がまだ耳に、いつかな消えず遺りてあり。されば最前御身の來られ、案内を乞はれし其時には、もしや我子の歸りしかと、思はず胸の騷ぎ立ち、日頃氣強き夫でさへ今日に限りて取次ぎに、づか〳〵と出られたり。人を見ればそれかと思ひ、此場に來れば昔を思ひ。此所に斯樣して居る所へ、あれあの道の曲り角より、息子の姿はあらはれぬかと、暇さへあれば此所に來て、半日仇に過せしは、度々の事になむ。　して〳〵其落着かれし先きは。　はじめ東京の神田なる、わづかの知邊をたよりて居りしも、最後の手紙に南洋の島めぐりするよし誌して、それから今に二年餘、風のたよりもある事なし。死せし事か生きて居るか、れ頼み申すは此れにして、もしや如何なる緣ありて、夫に好く似た若者にて、南小太郎と云ふに巡りあひ給ひなば、兩親共に無事なれば、勇氣を挫かず勵み呉よ、御國の爲なら身を殺しても、いづくまでも盡せよと、お傳へなされて被下れかし——女々しけれども今一事は、一筆にてもよろしければ、安否の程を申し越せと、何卒お傳へ被下されと、迹は得言はず翳したる竹皮笠に面を隱して、ひそかに涙を拭ふ樣なり。

其五

正しく小太郎と言へる人は、書くに忍びぬ苦境に墜入り、歸るに歸られぬ場合となりて、心ならずも音信を斷てるなるべし。我も是に似たる身の上、天地の間に只一人の母親を、浪花なる親族に托して旅か

ら旅とさまよふ事、言語に絶えたる不孝者なり。烟雨に霞める其中には、浪花の市街も包まれ、母人が居ます家の上も蔽はれ、物縫の窻や暗かるべし。吾妻を去りて幾星霜、浪花の母が許を出でしハ、旣に數月の前になりぬ。歸思急に張弓の弦を放れて、矢の如く成りたるは、此時此人の物語に、父母在す時は遠く遊ばず、これは古くより言ふ詞なれど、成程と感じたるは耻かしながら此塲が初めてなり。何事ぞや幾多の人、世界微塵と成て碎くるが最期、はかなく消ゆる名譽の爲に、千里の浪を遠しとせず、老たる親を愛らしき子を、最愛の妻を迹に遺して、外國に渉る心中分らず。

大事業家は系累の絶ゆるを待ちて奮起すべし。小は我の如き漫遊家も、兩親を安かに見送りて、未だ妻を娶らざる間こそよけれ。妻子を振捨てゝ行脚の途につきし西行法師は拙劣なり。行きゆきて倒れ伏すとも、お風邪召すなと羽織かけらるるが、萩の原の眞意なるべし。

明日はつとめて浪花にかへり、母が無事の顏を見たしと、心これに傾きてハ、矢も楯もなく性急に成り。

御依賴の趣万事胸に納めたれバ、必ずや御子息に廻りあはゞ御傳言致すべしと、眞底より誠意を絞りて、此の不孝なる女性をなぐさむるに、彼は益々繁き涙に面を隱す笠の手の振ひ留らぞ。呉々も御願ひ申しまする、一家の泣事お聽し申してさぞ耳汚はしくおぼせしなるべし。何んの〳〵左樣な事あるべしや、好學問を致したり――雨空に暮るゝも近し、酷く降らざる其内にお暇申すと、再び前言の辭

儀を繰りて、おさらばの一語を聴流し言ひ流し、笠を見送り笠に見送られて、金剛山をぞ下りける。楠正儀の石塔あり、木柵朽ちて蛞蜒の迹鮮かに、誰が手向の山櫻、花立に散りて其葉も枯れたり。此所にぬかづきて拜石を濕し。これより路を谷に下りて、細き坂登りつむれば、これぞ千早の城跡にして、天下の兵を引受けたるは此所なり。松柏繁りて當時の風枝を鳴し、雫は人の袂を拂ひて木の根を洗ひ岩を濯ぐ。感慨胸に溢れてハ、見るもの胸を嚙むの種ならざるはなきに、鳴くは山蛙の谷に響きて、雲梯の山に炭燒の烟。

靜に笠を解ぎて、雨の音なきに心幽なり。一歩一句を練り、一絶櫓の跡を下りて、二段の頂に安置なせる楠神社の後に出でぬ。御手洗に木葉腐れたり此水我口を漱ぐべきにあらぞと、其儘參拜なさんとせしが、無禮！大に癪にさはる事見出したり。相合傘を書ける村の俗物、何縣何國と姓名誌す道者の筆。これはまだ〳〵罪あらねど、生慷慨の文人が、出放題の詩歌を惡筆美事に、矢立の墨薄ぎたなく、清淨ある社の扉に書して、得々たるは字面に躍りぬ。嗚呼忠烈楠公が、此千早に籠城ありしは、其時汝等の如き奴原の多かりしが故ぞとて、散々に叱しける。

其六

社前を去りて降る事一段、此所には拜殿あり、麓の若者が宮相撲せし迹あり。石の鳥居の下を潜れば、是より長き石段にして、降り盡せば千早の村なり。日は一里とは持つまじけれど、行ける所まで進みて

翌日の道の少しにても短かれ——一時にても早く母上に逢はれよと、九十九折の坂を滑りながらも、只一心に降り行くに、一里漸く踏去つて何村か早や其所に見え、森の中なる或る寺の鐘は、今日の日の限りを告げて、畑の烏を塒へ歸しぬ。

雨は霽れたれど、烟未だ收らずして、夕陽雨氣に映ずるの力なし。小高き岡に登りて向ふの方を打見やれば、森林も薄らぎ林も黑ずめど、小川のみは濁流長く漲りて瀨に白蛇の躍り狂ひ、行衞は菜花の雲に消えて雲雀の聲漸く靜かなり。

是より浪花へは十里不足、疲勞たる此足にてハ、迚も今宵中には歸るまじ。いでや旅に寐る名殘の旅籠屋に、木枕の仕納め爲さむ物と、岡一ツ降れば思はぬ所に、小路ありて、これを登り詰めたる處に、芝山の大きなるがあり。人數多上に集りて、篝火の用意など爲し、誰をか待てる樣なるに、抑も何事ぞと我を忘れて、同じく上に立ちてあれば、人は次第に數を增して、孫に手を引かれながらよろ〳〵と登り來る老人あり、今日を晴着の小娘あれば、人の妻らしきも親らしきも、およそ此村の總勢群かり、皆滿面に笑を含て、西の一方を打眺め、互に話す詞には、未だ姿の見えずやと言ひ、獨密言にも同じ言の葉なり。今日の雨に道の惡きが爲め、扨こそ遲うなりたるなれと言ひつゝ、空を仰ぎて腹立てるあれバ。これを慰めて、さりとて今は晴れたればまだ〳〵幸ひなりと言ふあり。既にして篝火を點ずれば、分別ある男此村の顏役らしきが、前につだふ子供を叱りて、其所に立ちなば歸來る人の目に此篝火の見えざ

るべし。甲橋から此火を見る程嬉しきはなしとて、肥松を又五六本投入れたり。女は女達打ちかたまりて、誰殿は色黒く成りは仕給はずや、面瘻れ仕給はずや抔、樣々に語合ふ處へ、我大役の名譽見よかしと、日頃の早足を自慢らしく、馳歸る一人あり。これを見るより一同鳴を靜めて、其詞聽漏さじとつとむるに彼は得々として顏役の前に行き。　八人共恙なくして今しも甲橋を渡る頃なり。程なく此所へ來るべしと報ずれば、俄に喜びの聲溢れて、元に增して騷ぎ立つるに、我一向合點行かず、一人の男に向ひて、　何人の出迎ひなるやと問へば、男袖を拂ひて、　それ所でなし、息子が今歸るなりとて夢中なり。

次ぎて一人の翁に尋ぬれは、これは心落着き居て、　御身他鄕の人なれば、今日の事知り給ハぬも道理なり。抑も此村にハ參宮講と言ふがありて、每日一戸一文を積立、一年に一遍其年二十歲に當る若者八人、一生に一度の大役とて、其金を持ちて伊勢の兩宮へ御札授かりに行くなり。今日ハ其若者等が歸村の當日なれば、扨こそ一同出迎へ居るなれ。

太神宮樣の御影もありがたけれど、若き者に世間を見せて、御利益は此村の繁昌、己が昔もこれ〳〵と語る內、芝山の下の方にて驛路の鈴響き渡り、節勇ましく伊勢音頭謳ふ聲聽えけり。

其七

すはこそ歸り來れりとて、一同芝山の登り口に集り、上を下へと立騷ぐ所へ、恰も百万の軍を打破りて

凱旋なしたる將軍の如く、威勢よき若者の一連、二人宛牛の背を分きて櫓に乘り、四頭腰に驛路の鈴を鳴せバ、八人上に調子揃へて「見たか見て來たか大坂の城を」と、我が親に聲の勇ましさを、我が愛する人に聲の麗はしきを聽けよと、己が心々に謳ひつるれば、待てる者も打囃して、齒の拔けたる老人さへ謳ひける、子供は早や牛の前後を取巻きて、拍手打そふるに、流石女の子等は近寄りかねて、遠くより小聲を洩す。皆是れ勇ましく勢よく何物か興せざるなきが中に、牛の平氣なるは常に變らず、のそりのそりと泥を踏みて、不意に鳴く聲の不作法なる。

生きて歸るべしとは思はざりし人の、不意に今見ゑたるがごとく。萬里長程の旅路踏來れる、遠征の客を迎へたるが如く。嬉し涙を事大袈裟にこぼして、途中病煩ひは無りしかと問ひ。さぞ心細かりつらんと慰め。歸れる人も亦其量見にて、數年來家にあらざりし如く。留守中に變事は無りしかと問ひ。行く時に誰某は病氣成りしが、如何に。寺の櫻は能く咲きしか、今歳は村の花を見ずして仕舞ひけりなど、人を見れば語りかけ、語りかけられたる人は之に喜びて答へ。しばしは其所此所に打かたまり、樣々の物語に過しける。

顏役が、いざ一先づ引取りて、村長殿の屋敷に集るべし。毎年の例とて酒盛の用意早や整ひ居るにと言へば、皆々左なり〳〵とて、牛より降りたる若者輩を、親が手を引き同胞はつき纏ひ、情人はわざと離れて、親類の者は前後を取圍み、がや〳〵として此所を去に、今まで賑ひし芝山も、大風の後の如く靜

りて、遺るは我と篝火の消えやらぬがあるのみ。

我葛城の山上までは、子に離れたる親と語り。今其麓の村にては子に逢ふ親の喜ばしさを見たり。親一人子一人の旅人が身に感なくて止むべきやは。腸は何物にか絞られて、女々しくも涙袖を濕し、茫然腕を拱きて長大息する幾回。篝火消えて火の灰に成り行けども突立ちたる儘動く事無し。

風が持て來る談笑の聲、これぞ村長の屋敷に人々酒宴爲すとおぼえたり。我が足疲れたりと雖も、浪花までは十里に不足。我を迎ふる者は、只一人の母あるのみなれど、彼等が今宵の嬉しさにも一歩も讓らじ。されば名殘の旅をさめに、一時も早く歸着なして、當分不平と旅行は止めるべしと、闇に菜花の明りをかりて、富田林、古市、大和川の土手を傳ひて、明治橋より右に折れ、天王寺の片ほとり母の在ませる家に着きしは深更。草木も眠る頃なるに、夢驚かさん事心苦しく、先戸の隙間より窺ひけるに、中にはまだ燈火照して、名所圖繪見て居給ひき。

（完）

◉後檜笠　　謫天情仙

愛兒消息隔天涯。不似迎歸篝火加。父老芝山皆大喜。夫妻葛嶺只長嗟。騎牛壯漢參宮講。謝客祠官厭世家。一樂一憂關底事。怕看反哺散林鴉。

賛云。孤身探勝最推君。到處風流記所聞。請見河州新檜笠。閑閑點綴紀行文。

◉社　（分題）

花の巻

吾日本には櫻花の咲かぬ處無し。日枝神社の境内にも今日を盛りと咲亂れて、杉の木の間、池の水の邊、朱の廻廊の此方、黑き格子の彼方、其所、此所。風有つて聲なき落花の、蝶々雲より出て雪に入るかと疑はれぬ。

刻みたる如く箒の跡未だ鮮かに見らるゝ石の階段を、靴と下駄とに踏消して登來る二人。一人は九歲ばかりの男子にして、組上の靴を穿き、黑羅紗の半ズボン、帽子は學校の徽章を附したる新形の物なり。一人ハ七歲ばかりの女子にして『赤鷺絨の緒の塗下駄を穿き、紫の矢飛白の振袖に、緋の紋繻子の丸帶をおハさみに結び、時色縮緬の帶揚を締めたり。キリヽと結上げたる童髷に銀色の根卷、揷頭はなかりき。』假令ば勇みたちたる若駒の蹄の音にさも似たり、此音隨神門の傍にて留りぬ。二人は下の方を見下して、同時に放ちたる言葉。　皆ンな遲いね。　早いのは僕と貴女だト男子の言ひぬ。　あゝ、貴郎と妾とが一番速くッてねエ、ト女子次ぎたり。　皆ンなの來ない間に二人で御宮へ行ッて見ませう、ト男子言へば、女子これに從ひて、　さう仕ませう、そして神樣を拜みませう。　貴女は何と言ッて神樣拜みます。　何と言ッて……別に何とも言ひませんわ。只あの、拜みますわ。　僕は兄樣から

致はッたやうに言ッて拜むのだ。　何ンと言ッて……。　天皇陛下萬歳！　皇后陛下萬歳！　皇太子殿下萬歳！　そして永く　皇基を守らせ給へと言ッて……。　さう、妾もさう言ッて拜みませう。

それから其次ぎにかう言ッて拜む、御父樣萬歳！　御母樣萬歳！　妾も御父樣や御母樣の事言ッて拜みませう。　まだある、兄樣だの、姉樣だの、叔父樣だの、叔母樣だの、皆ンなの事言ッて拜む。

それから僕は貴女の事も言ッて拜む。　では妾も貴郎の事言ッて拜みませう。　さア早く行かうよ！。

二人は又走りて敷石を踏みながら拜殿の方へと行きぬ。少時して鈴の響き、小さき柏手の音ぞ聽かれける。

月の巻

社の後の見晴より夜の景色眺むる人なし。掛茶屋の芦簾は風に倒れて、座板の上に木の葉の聲繁し。下の街に騷がしき絃歌は、客に酒を勸むるなるべく。向の臺にて吹出す喇叭は、兵に寐よとの報知なるべし。巴峽ならぬに猿の聲は、清風亭に飼へるが叫ぶなり。雁は溜池を失ひて又來らず。澄渡りたる月はあれども、木立密にして影闇きに、御手洗の邊のみ漸くにしてあらはれぬ。

神舞殿の後の方より歩來る二人連、八坂神社の前を過ぎ、稻荷の宮の横を通り、本社の後を廻はりて行きぬ。

如何しても貴郎は……ト女の聲。　如何しても私は……ト答ふるは男なり。

今我々が勉めなければ、後に成ッて如何する事も出來ないのです。能く考へて御覽なさい……燈火は風前にありまするぞ……いづれの亡國史を讀むでも必ず記してあるものは、利己の民の多數を制して、國家と言ふ觀念を放擲して博愛の假面に迷はされた結果……愛國の心にとぼしいからで……別して吾國人は忠君の情に富まねは成らない……生存競走と言ふ事を知らば、幼童と壯者が同じ土俵に立つ事の不利益位は分りさうなもの……今力を角せぬのは後の勝を計るが故と言ふ處へ、眼が付かぬか、角力ならば投げられても又起きる。投げられ、倒され、轉ばされる中には段々強くなるであらうが、一度內地の雜居をゆるして萬利を彼に占られた曉、又取返す其困難、容易な事でないのみならず、終には……遂には……ト聲途切れぬ。

漸くにして又これを次ぎ、　さア論じかければ中々盡きませぬが……ト、これより一段聲を潛め、何事をやらむひそ〳〵と語りて。　今言ひました次第ですから、家族の系累に縛られては——殊に情よ脆い私……系累の爲めに勇氣の挫けるのは、明かに分ッて居ます。　それでは妾を丈夫の妻に耐へぬとお思ひですか、良人を勵ます事の出來ぬ女とお思ひですか。　いえ、さう言ふ意味ではありませんが……。　妾を寡婦には堪へぬ女とお思ひで御座ンすか。

嗚呼、貴女は……ト男叫びぬ。

月や傾きし、人や歩みし、此時照すは二人が袖に置く露なり。

雪の卷

或處は數尺、或處ハ一二寸、雪さへ平かには降らずなりぬ。櫻、椿、杉、榎、槻、樅、木々も年々に枝枯れて根は只腰掛と成りて遺りぬ。彼の高臺より見渡せば、家の建築いたく異なり、住む人も亦多く違ぬ。諸所に吹出す煙筒の煙は雪空を染めて漲れど、這は大和民族を寒からしめぬ暖爐の名殘にはあらじ。御手洗のありける邊には噴水器立ちて、其壇上より落つるハ皆氷柱となりぬ。拜殿のありたる處には、カトリック教の寺院建てり。神さびたる鈴の音は吠ゆるが如き時鐘の聲とかはりぬ。神輿庫は何人かの馬車を仕舞ひ、大祭の高札ハ變じてペンキ塗の廣告札となりぬ。其文字は蟹字なり。

嗚呼、岡の上の建家、荒れはてぬ。橋の此方の一構、荒れはてぬ。彼處に護國の武夫も居たるに、彼處に經世の文士も居たるに、今ハ彼只空劍を弄するのみか。今は彼徒悲歌を吟ずるのみか。昔の面影は何處にか留めし。彼の五十二段の石階のみ存したれど、隨神門は夢の跡。二個の石猿は雪に埋れて老いぬ。

* * * * * * *

又もや雪は降出しぬ。此所に倒れたる老人あり。そを介抱せる老女あり。又もや雪は降出しぬ。烟筒の煙彌々黑し。烟筒の煙彌々黑し。白きは雪に、二人の髮毛、烟筒の煙益々黑し!!!

（完）

◉ 猿　曳

（探題五十分急作）

あれ、お猿をおんぶして。まア可愛らしいお猿だこと。御母樣御覽あそばせ、御父樣も早く〳〵と呼立つるは、今年六歳にも成りたらんか、切禿の女の子。藤色地の幽禪の被布を着て、下にハ紫の矢飛白の綿入に更紗縮緬の下着、手には空氣毬を持ちたり。

處ハ箱根塔の澤の鈴木の表二階。今しも玉緒橋を渡りて此方へ來らんとする猿曳を見て、斯く呼びたるなり。

なんだねえ、まア大きな聲で………何處に御猿が居るのだね、と云ひながら立出たるは、これが母なる人にや、二十七八の上品なる夫人なり。障子の中より聲して。猿に浮かれて上から毬を落すな、と言ふハ大方父なる人にやあらん。猿曳の男は年既に老ひたり、猿はまだ稚し。老猿曳は破れて音の惡き太鼓をたゝきながら、とぼ〳〵として歩を運びぬ。小猿は脊の上にて彼の鋲釘の如き眼を輝かしぬ。

あれ〳〵可愛らしいお猿！　御母樣、あれを呼んで頂戴、ねえ御母樣、呼んで頂戴よ、お猿を舞はして見せて頂戴、と彼の過行かん事を恐れて早言に母に願ひぬ。つれ〴〵ハ湯治場の常なり、母は諾して猿曳を呼びぬ。唯々として猿曳は留りぬ。扨て小猿を背より下して、綱を片手に曳きつ、片手に破れ太鼓たゝきつ、しわがれたる聲して唄出しぬ。されども如何に仕たりけむ、小猿は舞はざりき。太鼓の手を止めて。　これや太夫、如何したものぢや。何故藝當を御覽に入れぬのじや。ねい、しッ

かりと〱。

されども小猿は虚呂々々として彼の目を恐ろしく瞬きしつ、頬をふくらし、歯をむきいだし、意味有氣に上の方を見入りたるのみ、倚舞はざりき。猿曳れ怒りて鞭打ちぬ。小猿はキャ〱と鳴きつ、扨てれぼつかなくも舞出しぬ。其内忽ち立留りて又上の方を見始めたり。　ねい、脇目しては塲がテレる、と太鼓の棒にて酷に鞭ちぬ。鞭れては舞ひ、止めては鞭れ、漸くにして一曲を終りければ、母なる人は白紙に小錢捻りて、娘の手に渡しつ。　お前からお猿へ投げて御遣り、と言ひぬ。娘は其紙包を受取りて、地上に投げんとして、却つて片手の毬を落しぬ。

猿曳は氣轉顔にて、小猿に其毬を拾はせ、手に捧げさして柱より登らしめ、彼の二階の人に渡さしめたり。瞬一瞬。小猿れ叫びぬ。娘も叫びぬ。猿曳は驚きて面色土の如し、周章力一杯綱を手繰れば、べり〱と言ひて裂ける衣の音す。二階より落ちたる小猿の手には幽禪の被布の片袖あり。

此異變の物音聽付けて、障子を蹴飛して立出でたるは娘の父なるべし。大喝。　猿曳！との一聲。此方は縮上りて、身を震はせ、猿を抱きながら地上に坐し、低頭して其罪を謝しぬ。上には娘を抱きて母、親の只立てり、あまりの驚きに言葉は出でず。下には早や跳出でたる店の若者、あはれなる猿曳を捕へて打擲を加へぬ。父親は益々怒聲荒く。　これ、猿曳、和主の不注意は何事だ。大事の娘に疵が付い

て居たら、其儘にはゆるさぬぞ。

此聲よいよ〳〵低頭して、額を砂の中に磨込み〳〵。　御免なされ〳〵、と操返して言ひぬ。

幸にして怪我のなかりし事を母親の見出して、これも不意に驚きて泣止まぬ娘の被布を示しつ。疵が付きましたのは此被布でした、其他は無事で御座います。

今一手遅かつたら被布ばかりではすむまい、危いこと〳〵、と父は言ひつ、尙打据へむとする下の若者を制し。　もう好いわ、ゆるして遣れ、と留めぬ。猿曳は此上の痛き目を逃れて、不圖首を持上ぐる時、上なる人と顔見合せ。　や、や、貴郎は……。　れう其方は……。　麹町の旦那様か。筑波の爺か。

*　*　*　*　*　*　*　*

常州筑波山の奥に分入りたる獵好きの紳士は、一頭の女猿を撃殺し、一頭の小猿を生捕りぬ。されどもあまり其小猿の不憫さに、教導として連れて行きたる土地の獵師に、其小猿を托してそだてしめぬ。年は過ぎたり。其紳士は此所に今ある娘の父にして獵師は此猿曳の老爺なり。彼の時の小猿は則ちこれなり。

奇遇は酒宴と成り、扨て猿曳は少からぬ祝儀を得、小猿は片袖の破れたる美しき被布を得て、共に倶に喜びつ、又彼の太鼓の音立て、宮の下へとのぼり行きける。

（完）

◉丑の時参（探題）

送り狼に丑の時参り戀の暗路に曇る鏡の話

我日光の山奉行たりし時、それは〳〵恐ろしき物に出逢ひたり。或る冬の夜半止みがたき用事のありて、下部一人具しながら、奥の中禪寺に行かむと、石坂道を登りたり。晝さへ暗き並木の下、片破月はありながら、僅かに杉の梢を照して、下葉の闇の足元危く。それも次第に影落ちて、今や向ふの山の端に、入らむと爲せる其時なり。九折の坂の上より、此方へ當りて一線の、光り鋭くさし來る。何の氣も無く其方を、見上げて驚く我も下部も。言合さねども二人共、急ぎて路の横手に曲り、隈笹の陰に身を潜め、呼吸を殺して居たりける。

扨ても其光物の正躰は、次第〳〵に坂を下りて、隱れたる我等に氣の付かずや、前の石坂を踏〆め行く。只見れば色青褪めたる年若き女、眼きりゝと釣りて、小鼻落ちたり。黒髪は白無垢の肩に亂れ、胸には一面の鏡を懸けたり。青竹の中に點したる蠟燭の火を片手に持ち、片手に金槌を持ちたるは、畵にある丑の時参りに、少しく異なる處あれど、先はそれに相違なきなり。紫色の脣を鐵漿黒き齒にて嚙〆ながら、跣足のまゝすた〳〵と行く音、四邊靜かなれば冴へて響きぬ。青竹の火は鏡に反射して、笹の中の、吾が袖を照されたる時は、身毛自然に逆立ちて、思はず知らず束に手を掛け、躍出で眞二ツに妖女

切らむと構へたり。されども彼の足は速くして、いつしか曲りたる下の坂を降行ぬ。立上りて密に笹の影を出れバ、歯の根も合はぬ下部の佐助、袖に縋りて聲震はせ。　もし旦那様、け、けッして切ッては成ませぬぞ。　切らぬ分か引ッ捕へて一詮儀致さにやならぬ。　はて、一念凝ッた女の怨恨は恐ろしい物で御座りまするからと、如何にしても袖を放たず、此内又一角を曲りて、三段ばかり下の路を走りぬ。間は近けれど路は右の如く屈曲せる故、手に取る如く見ゆると雖も、跡を追ふには及ばざるべし。又廻り、又曲りて、終に杉林の影に隱れたるが、此時月は全く沒して、彼の青竹の燈火のみ、あるやなしやに明滅の光。

下部はやれ〳〵と胸撫下し。　さア旦那様參りませうと言ふ。　つまらぬ事で暇をつぶした、さア行かふと言ひながら、隈笹の中を出でむとする時、又もや怪しき足音して、上の方より飛來る物あり。何物なるか見届け呉れんと、二手三手搔分けるを、佐助は又もや袖に縋りて、無言ながらも放さぬ大力。遂にこれも遣過して、正躰何物か見えざりしが、獸物二三匹の走りしには相違なし。

間もなく麓の方に當りて。きやッと一聲、女の魂切る聲。

佐助は念佛を唱へ、我は束を握〆めたり。程なく獸物の鼻息響きて、再び坂を登り來る。前を過るを見れば、何やらむ白き物を口に噛はへて、次第々々に引きて行くなり。扨ては狼か。先きの時參りを殺して、これを己が巣窟に運ぶにや。彼の胸に懸けたる鏡は、時々岩角に觸れて鳴りぬ。

此時は假令佐助の留むるなくとも、笹村を出でむ勇氣はなかりき。荒き鼻息も、鏡の響も、幽かに消えたる迹までも、笹村を出でむ勇氣はなかりき。

（完）

短篇小說　明治文庫第拾七編　終

版權所有

明治廿六年八月三十日內務省許可
明治廿七年十月一日印刷發行

明治文庫定價		
一册(二百頁)		金拾五錢
六册	前金	八拾五錢
十二册	前金	壹圓六拾錢
廿四册	前金	三圓拾錢
郵稅一册六錢		

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　曲田成
京橋區築地二丁目十七番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
仝所

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目

江見水蔭君著
(全一册洋裝美本)

少年文學
加藤清正

武內桂舟氏畫
(正價拾二錢郵稅四錢)

俗傳を排し、正史を取り、勇壯なる快筆を走らして、清正の一代を記實し、以て日本武士の摸範を示せり。故に未聞の奇談多からねども、亦未知の逸話少しとせず。清正の孝なる、忠なる、智なる、勇なる、誠心の發する處、熱情の溢るゝ處、其人に接するの感あるべし。更に筆を轉じて清正の人物を、解剖し、論評す『秀吉生前の清正』と『秀吉死後の清正』の二大篇に區別し、又分類して數十余章。中に最も壯快なるは『遠征清正』てふ一章なり。鬼上官が朝鮮八道を蹂躙したる事蹟を見んと欲せば、必ず一本を求めて坐右に備へざる可らず。

江見水蔭君著　武内桂舟氏畫

今辨慶

まかり出てたる今辨慶日本一の快男兒人を抛け舟を曳き錨を扛け鷲を仆ほし大石を擲け鐘を支ひ汽車と疾行し外人と角力し獅子と闘爭する等痛快壯絶知らず〳〵日本尚武の美風を滋養し英姿爽颯蒼天に飛揚するの猛志を吹き込まんとする著者が少年文學の安排少年諸君が大得意の物語り也

全一册和裝
正價拾二錢
郵稅四錢

江見水蔭君著　武内桂舟氏畫

幼年劍舞

近來の流行物として幼年諸君が最も喜ばるゝ處の劔舞。勇壯活潑にして國民の元氣を奮起せしめる處の劔舞。遊戲の中に知らず〳〵慷慨の士氣を涵養し來る劔舞。愉快極まりなき劔舞壯絶限りなき劔舞。優美にして高尚。意拔にして猛烈。幼年遊戲としては最も適當なる劔舞は。放吟家亂舞家を以て自ら任ずる江見水蔭氏の新工風。經營慘憺頭腦を碎きての今日に於て成れり。端物歷史物の二欄に分ち。詩編合せて百有餘種。中には吟詩家の心得あり演舞の注意あり。電光虹色紙面に燦き。疾風急雨文外に漲る一讀情夫も起つべし。再讀手の舞ひ足の躍るを知らずして。弱虫も知らず劔舞々々々々

全一册洋裝
正價拾二錢
郵稅四錢

醫學士岡本武次君校閲　松尾連君編

通俗 簡易治療法

本書は世の病痾を患ふるもの、及び健康者をして、豫め不發に防ぎ健全なる快樂を得せしめんとて、內臟病より、外は火傷感冒其他日常吾人が患ふる最も多き疾病數十を撰び、之が原因豫防療法等を詳說したれば、短命なる才士佳人は勿論、何人も一坐右に備ふへき生命重寶鑑なり、

全一册洋裝
正價拾錢
郵稅四錢

第三高等中學校教授醫學士高橋金一郎著

通俗看病法

本書は醫學上の事を解せざる、婦人方にても、容易に行ひ得べく、且つ有益なる治療法を說明したるものにして、從來世間に行はるゝ看病書の如く、漫然種々の藥方を記載したるものにあらず、病名は多く世間に行はるゝ、名稱を附して明白に知り所べからしめ、箇々皆親切に其看護の方法を詳記したるものなり。

全一册洋裝
正價十五錢
郵稅六錢

森刈城君著

美身術

美を好み醜を嫌ふは是れ人生の當、此書は是れ著者が積年の經驗と學理とに依り、美身の術を述べられたるものにして、當今彼の世上に流行する劇藥を用ゐて、皮膚を傷つくる如きの類にあらざるなり、

全一册洋裝
正價拾錢
郵稅二錢

毎月二回發兌
毎編有名畫工
彩色密畫挿入
洋裝大判美本

短篇小說
明治文庫

正價一冊（二百頁）拾五錢
十二冊前金一圓六拾錢
郵税一冊六錢

第一編目次
◎風流辻占飴……巖谷漣山人
◎秋の蝶
◎黒衣魔
◎梢上月
◎京自慢
◎けなげさ
◎白面鬼
◎山時鳥
◎花の旅

第二編目次
◎雪折竹……川上眉山
◎福の神……村井弦齋
◎佛魔一紙……廣津柳浪
◎薄命の鈴子……嵯峨の屋
◎姥櫻……石橋思案
◎驚く鷗……江見水蔭

第三編目次
◎劍客……江見水蔭
◎初嵐
◎骨武者
◎斷紘
◎信天翁
◎漁郎
◎畫師の妻
◎雲烟過眼
◎痹癖太守
◎畫師
◎若楓
◎故家水
◎わかれ霜
◎一夜の宿

第四編目次
◎縁外縁……蝸牛露伴
◎落語媒介人……巖谷漣山人
◎新學士……漣山人
◎風流新狂言記……川上眉山
◎隅田川の秋……田山花袋
◎庭の教へ子……嵯峨の屋
◎都土產……乙羽菴主人

第五編目次
◎みゝすはれ……山田美妙齋
◎田舍聖者
◎大龍王
◎くされ縁
◎雪折竹
◎古切手
◎戸隱山紀行

第六編目次
◎忠義お安……福地櫻痴
◎當世二人女婿……依田學海

第七編目次
◎俄長者……中村花痩
◎狂蝴蝶
◎俠魂
◎破鏡
◎合歡花
◎片時雨

第八編目次
◎村上義光錦旗風……山田美妙齋
◎花やぐら……佐々木信綱
◎若みづ……巖谷漣山人
◎國民大帝……嵯峨のや
◎二十日月……田山花袋
◎滑稽二人男……骨皮道人
◎夜行汽車……松華庵主人
◎江戸舞蹈會……眠花道人
◎青春夢……抱一庵主人

第九編目次
◎浮田一蕙……渡部乙羽
◎捨扇
◎戀今樣
◎こぼれ梅
◎新細道
◎故鄉錦繪
◎邪正一如
◎京屋娘
◎神田七不思議
◎玉川河童泳記
◎花摺衣

第十編目次
◎僞紳士……福地櫻痴
◎一人娘……巖谷漣山人
◎母心……嵯峨のや
◎銃猟……松華庵主人
◎鏡花縁……松井十八公
◎薄暮山……紅葉山人閲 田山花袋

第十一編目次
◎月雪花物語……遲塚麗水
◎畫師
◎偕樂園梅
◎啼美人
◎新佐世姬
◎懸想文賣
◎餓鬼
◎心字池
◎寶刀

第十二編目次
◎斷腸花……石橋思案
◎片破月
◎美人車
◎わが戀
◎禿木魚
◎可愛い子
◎羽拔鳥

第十三編目次
◎吉野拾遺……依田學海
◎名歌譽……嵯峨のや
◎世の中……幽芳女史作
◎未開紅……南翠外史補

第十四編目次
◎爪の痕……宇田川文海
◎信夫摺
◎葉末の露
◎萬金丹
◎藤袴
◎胸算用
◎竹生島
◎犢鼻褌
◎和氣清麿

第十五編目次
◎迷霧……幸田露伴
◎裸美人……尾崎紅葉
◎加利保留尼亞……村井弦齋
◎片時雨……巖谷漣山人
◎星……小金井きみ子
◎若木櫻……柳園主人
◎香の雪……廣岡柳香
◎納豆賣……睡花亭主人

第十六編目次
◎くらぶ山……石橋忍月
◎百々逸釋義……石橋忍月
◎人文子……石橋忍月
◎紅花染……桐生愈虛
◎但馬行李……宇田川文海

博文館編輯局校訂

人情本傑作集

全二冊洋裝脊皮上製
正價一冊五拾錢郵稅拾四錢

目次

●假名文章娘節用●清談和歌翠●女今川●春秋二季草●孝女兩葉錦●所緣の藤浪●由緣の梅●春色戀白浪●娘太平記操早引●春晩八幡鐘●恐るべし●契情肝粒志●意味張月●秋色綾朝顏●傾城買虎の卷

渡部乙羽君校訂

其磧自笑傑作集

原書拾八部合本二冊洋裝上製
正價一冊五拾錢郵稅拾四錢

目次

●浮世親仁形氣●世間子息氣質●諸國物語●世間娘氣質●世間手代氣質●風流軍配團●風流要海硯●渡世身持談義●國姓爺明朝太平記●御伽名代紙衣●商人軍配團●風流曲三味線●鬼一法眼虎の卷●傾城歌三味線●咲分五人媳●傾城禁短氣●傾城情の手枕●自笑樂日記

校訂

滑稽名作集

原書卅一部百卅六卷合本二冊脊皮上製
正價一冊金五拾錢郵稅拾四錢

目次

●開卷百笑●花曆八笑人●舊觀帖●滑稽二日醉●忠臣藏偏痴氣論●滑稽和合人●魂膽夢輔譚●六わみた詣●傾城買二筋道●世の中貧福論●妙竹林話七賢人●一盃綺言●指面草●大師巡●箱根草●大山道中膝栗毛●狂言田舍操●人間萬事謔計●口豆飯茶番樂屋●浮世名所圖會●役者必讀妙々痴談●役者妙々後夜の夢●妙々痴談返註錄●稽古三味線●福助緣起●曾我糠袋●評判の俵●穿當珍話●杜選閙●酒徒雅●俄ジヤ々々々

尾崎紅葉。渡部乙羽兩君校訂

西鶴全集

原書廿部百十一卷合本二冊脊皮上製
正價一冊金五拾錢郵便稅拾四錢

目次

●一代男●二代男●一代女●五人女●本朝廿不孝●男色大鑑●武道傳來記●日本永代藏●俗つれ〳〵●胸算用●本朝櫻陰比事●織留武家義理物語●萬の文反古●諸國はなし●置土產●新可笑記●三代男●日本新永代藏●元錄太平記

本書は發賣を禁止せられたり

巖谷漣山人編

日本昔噺（にほんむかしばなし）

製本既成

桃太の遠征、猿蟹の戰爭、兎の功名、雀の報恩、是等はお伽ばなしの傑作と仰がれて幾百年來幼年諸君に謹聽せられ、秀吉も家康も西鄕も木戸も、皆一たびは是等の談を無上の講話とも小説ともして喜びたりき、されど錦の衣裳も目馴れては麗はしからずと、幼年文學の大手筆たる巖谷漣山人が、敏妙無類の奇想を凝らし快筆を揮ひ、古構に就て新案を立て一層面白くして有益なるやう綴らるゝに、畵は當代十二名家を撰びて毎冊各家の精妙なる繪畵を加へ、全部十二冊として毎月一回發行するもの、即天下無双の昔噺文庫なり

日本昔噺目次

第一編　桃太郎
第二編　玉の井
第三編　猿蟹仇討
第四編　松山鏡
第五編　舌切雀
第六編　大江山
第七編　花咲爺
第八編　俵藤太
第九編　かち々々山
第十編　瘤取り
第十一編　文福茶釜
第十二編　物臭太郎

一名　昔々文庫

全部拾二卷
毎月二回發兌
洋裝大判美本
毎編有名書工
之密書數個入

本誌定價
一冊金　五　錢
六冊前金二十七錢
十二冊前金五拾錢
郵稅一冊二錢

日本昔噺第三編

猿蟹仇討

村田丹陵氏畵

野口寧齋先生題詩
戸川殘花先生唱歌
巖谷漣山人編

全一冊洋裝
正價金五錢
郵稅　二錢

日本昔噺第四編

松山鏡

饗庭篁村先生序文　巖谷漣山人編
落合直文先生唱歌　武内桂舟氏畵

全一冊
近刊

株式會社東京築地活版製造所印刷

音樂全書全部出版完成

從四位錦雞間祇候金井之恭先生題辭　百足登君著

琴曲之栞

全一冊和裝　正價拾錢　郵税四錢

琴曲の栞出づ、從來音樂の著書其數尠なからずと雖ども、獨り琴曲の書に至りては、歌のみの本にして、未だ琴を彈ずる手法あるを見ず、本書は著者が苦辛して、箏曲の調子合せ方より、使用法及琴曲の彈き方まで、一も漏らす事なく一見以て初學者にも誰にも、彈琴し得らるゝ樣説明したれば、師に就くの必要なき獨稽古の書なり、編中には組歌、六段、八千代、獅子、越後獅子を始め、數へ歌、黒髮等數十曲ありて、古來唯一の珍書なり

尺八之栞

百足登君著

全一冊和裝　正價拾錢　郵税四錢

本書は尺八の吹方より音の長短及拍子等より懇ろに説明を下し誰人にても本書を閉けば數日ならずして自由自在に吹き得へき世間無絶の珍書なり又書中には數へ歌、大祭祝日唱歌、春雨、こすの戸、夕ぐれ、つるの聲、くろかみ、あしかり、六段、菅掻六段、越後獅子、八千代獅子、大津繪、今樣、詩、九連環、滿板流水、西皮調等其外數十曲あり

横笛之栞

百足登君著

全一冊和裝　正價拾錢　郵税四錢

横笛は我邦固有の樂器にして、上は宮廷より下は民間に至るまで、雅俗諸般の音樂に用ゐざるはなく、殊に三絃と合奏するに、横笛なければ音樂曲を成さゞる程なり、本書は雅樂の越天樂太平樂を始め、神樂の嘶子民間の數へ唄、秋の七草、勸進帳、越後獅子等に至るまで、細大漏らさず最も丁寧詳細に説き明かしたる者なれば世間絶無の獨習書なり

明清樂之栞

百足登君著

全一冊和裝　正價拾錢　郵税四錢

近來明清樂非常に流行し、都鄙の論なく月琴清笛胡琴等の音調を聞く、然りと雖も始終教師に就かざれば研究習得するを得ざるは大に憂ふべきの一端なり百足登君之に着眼せられ教師に就かざるも明清樂の樂器何れにても研究獨習し得らるゝ樣反覆丁寧に説き示し本書を坐右に置けば明清樂の教師に接するより便なり殊に圖解の如きハ尤も鮮朝詳細にして曲は明清樂の秘曲に至るまで百有餘曲又本邦俗樂とも附記したり古今絶無の獨習書と云ふべきなり

胡弓之栞

百足登君著

全一冊和裝　正價拾錢　郵税四錢

音樂全書第五編として出てたるは胡弓の栞なり元來胡弓及三味線等には一定の音符なく、また感所を示すことなし、是れ著者が多年その一大欠點なるを嘆ぜられし所なりしが、今や此音符感所を發明せられ、此書を公にせられぬ、一たび卷を開かは直に胡弓の獨習をなし得べく、從來胡弓を習へる者は之に因て大に其蘊奥に至ることを得ん、書中に流行曲、俗曲、本曲等を音符もて丁寧に記載せること他の諸篇に同じ

洋樂之栞

百足登君著

全一冊和裝　正價拾錢　郵税四錢

洋樂の我邦に入りてより都鄙の論なく流行盛にして大中小の諸學校皆之を用ゐざるはなし隨て之に關する著書も種々あれども概れ一方に偏して大躰に通する者を見ず本書は風琴、バイオリン手風琴等の彈奏法より移調法、音符、記載法、洋樂々理、教授法に至る迄を説明して獨習に便ならしめ又日本俗曲中の高尚なるもの、清樂中の妙曲、その他諸種の歌曲百餘種の曲譜の音符を挿入し尤も明瞭に説明せり

女子高等師範學校長
華族女學校長 細川潤次郎先生序文
女子高等師範學校助教諭
共立女子職業學校講師 寒澤振作君著

家政の栞

全一冊洋裝 大判美本 正價二拾錢 郵稅六錢

本書は最も多數なる中等社會の婦人を標準として平易に家政上の事柄を述べたるものにして其目次は總論に於て主婦の務めの貴重なる所以を論じ二章以下時間の儉約、物品の整頓、品物の時價、貯蓄、經費、手藝、物品の保存、雇人の待遇、室內の取締、家屋の構造、廢物利用等全篇十二章に分ち詳密に辯せしものなり請良妻淑女一閲して家政上の智識を得られんことを

文學博士 加藤弘之先生序文
女子高等師範學校助教諭
共立女子職業學校講師 寒澤振作君著

婦人のてかゝみ

全一冊洋裝 大判美本 正價二拾錢 郵稅六錢

本書は既刊の「家政の栞」につき婦人の心得べき要件と其務むべき事項とを說きしものにて先つ男女兩性の異なる點を歷擧しその異なる所即ち一家和合の基たるの理を辯じ次に夫婦は人の大倫にして一夫一婦は人倫の正道なるを明にし婚姻の方法も人文開明の深淺に從ひて種々の差ある實例を示し自由結婚の誤まれること、許嫁の弊、親族結婚の害、早婚の害等事實を掲げて論斷し、婚姻法は此の如くなるべしとの希望を述べて、婚姻の叨にすべからざるを論じ、終に婦人たるもの既に嫁して後の任務を說き凡そ婦人の守るべき事は詳述して亦餘蘊なし

獨逸國ダブィヂス女史原著 阪田孫四郎抄譯

處女のつとめ

全一冊洋裝 正價拾錢 郵稅四錢

女大學事古く今川も流淵れて今は時世に連れて新らしき處女の心得無くてかなはぬ時節となれり本書は最も我日本と氣風人情相似たる獨逸國の有名なるダブイヂス女史の著にて十五版に迄なりたる好書なるを殊に譯者か我國風に適應する樣意を用ひたれば實に當今の處女に向ての好羅針盤たること疑なく之を一讀する者は淑德圓滿の處女とならんこと更に疑なし

正一位三條實美公。從三位渡邊洪基君
從二位芳川顯正公。從四位淸浦奎吾君題序
文學士濱田健次郎先生校閲 濱本義顯君著

婦女教育 明治姫鑑

全一冊和裝 木版密摺 正價五拾錢 郵稅六錢

女子教育の要は家庭にあり本書は幼女家庭教育の料に充てんか爲に著す所にして卷首には數字、片假名、平假名より單語、聯語を掲げ次で短文より長文に入り其他英語の教、作法の教、花の教、文の教、道の教等を說き進み修身道德の編に及びては一々古今賢女の言行を擧げ終に育兒手藝を以て之を結ぶ且卷中密畫數十個を挿みて頗る解得し易からしめたれば女子家庭の讀本としては眞に得難きの良書なり

圖書出版

東京博文館

短篇小説 明治文庫

明治文庫第拾八編

互疑惑　櫻痴居士
博士違　櫻痴居士
鐵道旅行　嵯峨のや主人
去年の雛　漣山人
鐘の音　小倉山人
深山物語　小倉山人
一文字　中川青葉

短篇小說明治文庫第十八編目次

◉互疑惑……櫻痴居士……一
◉博士違……櫻痴居士……三八
◉鐵道旅行……嵯峨のや主人……四〇
◉去年の雛……漣山人……七一
◉鐘の音……小倉山人……一八一
◉深山物語……小倉山人……一八六
◉一文字……中川青葉……一九二

以上

[seal stamp]

短篇小說　明治文庫第十八篇

◉互疑惑（新作滑稽劇）

櫻痴居士

登場人名

東京ノ紳士	淺井智識	團十郎
淺井ノ朋友	遠山外	新藏
淺井ノ書生	木柄落太	猿藏
淺井ノ妹	淺井兼子	福助
佛蘭西ノ貴婦人	テレザーベルクール	テーオー
淺井ノ家僕		四八

本舞臺壹面の平舞臺に所作舞臺を敷き正面上手寄に煖爐を設け（但時候は夏なれば煖爐の口は美しき花摸樣の縫物したる板葢にて塞ぎ有之）煖爐の甲板の上には置時計花瓶等飾りて其側に

は大小の寫眞いくつも並べある甲板の向には姿見の大鏡にて此所都て西洋風の裝飾なり此煖爐より下手に掛けては都て張壁にて西洋風の唐紙にて張り其上に水墨又は彩色の古今畫幅を數幅掛け其前には古卓並に棚を置きて其上に古代の土偶石器佛像彫刻物の類何と無く取交せて置並ある。夫より下手には書棚を置き西洋日本の書籍類積重ねある。尤も上手の方には日本の机を置き筆硯等を並べ其前に座蒲團を敷てある。上手出入口は西洋風の戸にて下手の出入口は日本風の襖二枚立なり。所〻に硝子障子を建たる窓ありて窓の上は釘隱しを打たる長押造りにて此節流行の日本西洋折衷の座敷なり。舞臺正面能き所に椅子高机を置き（高机の上には卷煙草入マッチ入日本煙草盆を並べ高机掛は日本織物の帛地なり）高机の下には程よき位の絨氈を敷く事よろしく見計あるべし。都て東京某區の紳士淺井智識が住宅の体。此に淺井が朋友なる遠山外は黒絽の羽織縞の單物白足袋にて椅子に腰をかけ煙草を吸ひながら高机に寄掛つて佛文の新聞を讀み居る体にて鳴物にて幕明けば下手より紺絣の單物短き木綿袴を穿たる書生木柄落多右の手に横文の電信を手に持て出來り遠山に向ひて

書生　モシ遠山さん〳〵

　ト呼べども遠山は新聞に讀入ッて耳に入いねば書生は大きな聲にて

遠山さん

ト呼べば遠山は其聲に驚いて首を擧げて

遠山　木柄何の用だ折角わしが此論説を讀んで興味に入ッて居る所をなんで呼んだのだ。時に貴公此新聞を讀だか

書　イヽエついしか讀だ事は有りません

遠　讀だ事は無いと。ムヽ扨は貴公佛蘭西は讀ないのだな

書　ハイ僕の學校では當節獨逸計りで佛蘭西語は用ひませんに由て

遠　ナニ佛蘭西語は學校で用ひ無いと。イヤ怪からぬ事だ。凡そ此文明の世界に生れて佛蘭西が出來無くつては紳士學者の耻と云ふものだ貴公も是から少し宛學ぶがよいわしが段〻に教へて遣ろう

書　デモ今日では公立私立とも佛蘭西は流行ませんせ

遠　夫だから困るネ。抑も流行は追ふべからず勉めて流行に反對せよ流行の反對は即ち流行の先陣で有るとは世の中を見通したる名言。夫だからわしなぞは洋行の歸り此かた萬事佛蘭西流で押通して居るが今に見たまへ流行が變つて來やうものなら此東京の社會が忽ちに佛蘭西風に成てソレ紳士も貴婦人も先を爭つてわしが所に押掛けて、モシ遠山さん佛蘭西ではどんな踊りがはやりますか、モシ外さま佛蘭西風のお世辭をば一ト通り教へて下さいましと、あちらからも御用此方からも御用と仰しやつて此遠山は目が廻る樣に忙がしく成て大もてにもてるせ

書　其時はどうか私をあなたの執事になすつて下さるやう前以てお願ひを致し置きます

遠　ムヽそりやア執事にも仕て遣らうが肝心の佛蘭西語が出來なくつては差支るぜ

書　だから今日からでも佛蘭西語を稽古いたしませうと存じます

遠　夫が宜イ〳〵早く稽古を初めさつせヱ

書　勿論その積りで御座ります。併し家の大將は英語が少し出來るバかりで佛蘭西も獨逸もちつとも出來ませんが。われでも西洋に往て大層もてたそうですが

遠　サア爰の大將ぐらゐに成ると佛蘭西獨逸は云ふに及ばず英語が出來イでも日本語が甘く話せずとも世間が夫を承知して呉るから不思議サ。其所がそれ虚名の一徳で東洋の妙所だワ

書　成程そうで御座りますかね。時に東洋と云へバ其新聞では此節の東洋問題朝鮮事件をどう云ふ工合に論じて御座りますネ

遠　サアどう云ふ工合に論じてあるか

ト手に持たる新聞を撥返して捜して見て

成程此に長い論説が出て居るが。ナニつまらぬ事だから實はわしもまだ讀で見ないヨ

書　へヽヱ夫じやアあなた何を讀でおいで成さいました

遠　何を讀で居たと。此劇評論を讀で居たのヨ

書　へゝエ夫じやア佛蘭西の芝居評判記をバ一心に讀で御座いましたが。此東洋多事の今日に怪からぬ

遠　何が怪からぬ貴公は劇の好惡が文明の進歩に大關係が有ると云ふ事を知らぬと見えるな、ハテ扨嘆はしい不便な男だ。我日本でも學者連中が少し議院熱や政治論を止めにして演劇改良に心を委ねて吳れぬじやア開化の度がいつ迄も高尙に成らぬから困るヨ。此節櫻痴居士などが團洲と相談して時々新劇を見せるけれどまだ〳〵おれ位の事では改良のかの字だけの價も無い。まア蚊の脚程の力しか無いワ、ハヽヽア

書　そうで御座いますか。夫では本統の改良は

遠　わしが今に日本西洋の文學者を集めて其委員長に成て新奇妙案古今未曾有の面白い新狂言を書て見せてやる積りサ

書　そう成つたらさぞ面白い事で御座りませうナ

遠　面白いとも〳〵其新劇を舞臺でやつて見せる日にやア貴衆兩院內閣諸省華族紳士豪商金持或は順禮古手買せきぞろに至る迄我も〳〵と詰寄つて初日から賣切て二百日はきつと打ち通すこと受合だね

書　其芝居はさぞ儲かる事で御座りませうが私も其芝居に關係して身を立たう存じますが其委員會の書

記生ぐらゐには成れますまいか

遠　ム、書記生か作者試補の狂言方見習ぐらゐには用ひてやらうが、夫にしても其氣なら少しづゝ西洋の脚本を讀んで置かつせヱ。法律や政治の學科は二の次にして佛蘭西の名家が作つた脚本を勉強して讀まなくちやァ役に立た無いせ

書　宜く分りました、其積りで是かられ心を改めて勉強致しませう。大に有難う存じます何分御願ひ申上ます

ト書生の木柄落多は大悦びにて禮を述べて下手に歸り掛て手に持たる電信に氣が附て取て返し

ヤア大變だ〳〵、モシ遠山さん〳〵、大將はドゝドコに居さつしやいます

ト吃りながらうろたゆれば

遠　何をそんなに騷ぐのだ

書　デゝデンシンが來ましたから

遠　ナニ電信が來たのか

ト電信を受取て

宜しい〳〵淺井君は今奧で古物の陳列を仕て御座るに由てわしが取次で上やうよ

ト是にて木柄落多はやつと安心して

書　それでやっと落付ました、どうぞ宜しく
　ト胸を撫つてあたふた下手には入る。遠山は上手の戸を明けて奥に向ひて
遠　大兄〳〵電信が參りましたぜ、夫へ持て參りませう
　ト云へば戸の内にて
淺井　イヤ夫へ參らうヨ
　ト答へて此家の主人淺井智識上布の帷子仙臺平の袴にて團扇を使ひながら出來り
電信が來たとドレ〳〵
　ト右の電信を遠山より受取り椅子に腰を掛けて披いて見ても佛蘭西語で解らぬゆゑ少し笑ひを
含みて
遠山一寸讀でくれ玉へ
　ト渡せば遠山は請取て默讀して
遠　ハヽア、テレザーベルクール、ムヽ兼てのお話のあつた孀婦ですな
淺　そうサ。其所で其電信は横濱發だがなんと書てあるな
　ト大きにせき込み心許なき体にも尋ぬれば遠山はわざと落付顔して
遠　今朝横濱に着た午後三時の汽車にて東京へ往くお待受を願ふ横濱ホテルにてテレザーベルクール、

モッシユール淺井』
と讀で電信を渡せば。淺井ハ大驚き大悦びにて電信を見て
淺　成程そうだな、マダムベルクールが去年の春巴里で別れた時に來年の秋迄には屹度日本へ往くに由て待て居いと云つたけれど、實はどうだか當にならぬ約束だと思つて居たら果して遣つて來たな。夫ならそうだと前以て郵便か電信で先觸をよこしてくれるとこつちでも用意の仕様があつたのに、何で出し拔に遣て來たのであらう。兎も角も遠山わしは新橋迄馬車で迎ひに往くと仕やうか、イヤ待ちたまへヨ、若しもあつちに連の男でも有る日には却つて間の惡い思ひをするかも知れぬものだ
ト煖爐の上の時計を見て
ヤアモウ三時三十五分だ急行だから馬車で往つても迎ひの間には迚も合ふまいに由て、家で待受ると仕やうか
ト淺井はうわ〳〵する是を見て
遠　イヤ大兄恐悦千萬、戀焦れて御座つた嬬婦のお着で胸どきは恐入ますな、併し情男が出來はせぬかと御心配は御尤さ子
淺　戯談いはつせヱ。マダムベルクールは婦人でも高尚なる美術家わしは又歴史研究の古物家で御互ひに心の合ッた學問上の交際、それヨ戀だの色だのとは怪からぬ、左様なる卑劣な批評は嗜んで貰は

うせ

遠　コリヤ恐入つた、併し情戀と云ふ事が何も卑劣な譯合でも御座るまい、御腹立はおかしいじやア有りませんかハヽア

淺　ハヽア何も立腹は致さぬけれど、君がおかしくからかふに由て一寸一本參つたのサ。其所で彼の人もモウ今に參るであらうが、幸ひ〳〵君は歸らずに居てくれ玉へ

遠　通辨の御用かネ、承知仕ました。夫に付ても初めて逢ふのに袴なしでは体裁が惡いが、大兄の袴を

淺　オット二人袴は御免を蒙るヨ、奥に新しいのが一具あるから遠慮なく出させて穿たまへ。わしも羽織を引掛やうに由て其次手に持つて來てくれたまへ

遠　承知仕ました

ト上の奥には入る。淺井はそこらあたりを片付ながら

淺　あの夫人が日本に來やうとハ思ハなかつた、佛蘭西の婦人が約束を違へぬ勇氣の有るのは實に感心なものだ、今に遇ツた上では色〳〵積る話も有るが、アツ困ツた事にはわしは少しばかり覺えて居た佛蘭西語も今じやアかたなしに忘れたが、彼も英語は大方中絕であらうてな、宜ワ遠山が佛語ハ達者だから話しには少しも差支へなしだ

遠　ト座敷を片付けて居る所に。遠山は上手の奥より袴を穿て出來り手に持たる羽織を廣げて
大兄サア御羽織
──ト後ろより引掛けてきさせる事よろしく有つて
淺　マダムベルクールは實に非常の美人だから、貴君見とれて魂をぬかしちやアいけないぜ
遠　左樣サ、巴里育ちの美人と來ちやア又別段です、ろの笑顔でも見た日にやア隨分魂を奪はれます
からね
淺　貴公が魂を奪はれるのは敢て巴里育の美人ばかりじやア有まいヨ、塲合に出ては印度の黑いのを見
ても半分位は奪はれた事があつたらうせ
遠　ハヽヽアまさかそうでも有ませんヨ
ト宜しく個樣の捨せりふを言つて居る所に。書生の木柄落多は向より忙しく出來りて
書　ヘイ申上ます御客來で御座ります
ト西洋名刺を一枚盆の上に載せたるを出せば。淺井は取上げて一見して
淺　マダムベルクール。サア直樣是へ御案內致せ
書　畏りました
ト急いで向ふには入る。淺井は遠山に向ひて

淺　遠山貴公も一所に出迎はつせヱ

遠　へイ承知仕ました

ト淺井ハ衣紋を繕ひ附際迄進む。此時向ふより書生木柄は案內として先に立ちベルクール夫人好の西洋服にて出來り家僕等は木の箱一を兩人にて持ち竹籠一を一人にて持ち小箱一を一人にて持ち附添ひて出て直に舞臺に來り、夫人は淺井を見て（但し家僕等は箱物を置いて直には入る）

夫　ア丶淺井さん御機嫌よう

ト手を出せば淺井は握手の禮をして

淺　マダムベルクール、あなたも御機嫌よろしう、實は只今しがた横濱よりの電報が屆きましてステーションまで御迎ひに出ますする間合も無く大に失禮で御座りました。あなた日本へ御出に成りますならナゼ前以て御通知は下さりませんでした。せめて一周間も前に知て居ましたなら横濱迄なりとお出迎ひに參りましたもの

ト挨拶する。遠山は是を佛語で通辨しやうとすると

夫　ワタクシワカリマシタ去年の春お別れ申した時にれ話を致した通り少しも早う此日本へ參り度と存じましたに由て巴里で日本語を習ひました、尤も話す事は出來ませんが聞だけの事は大体分ります

よ。扨其後は世間の習ひで何やかや煩さい事が多いのでツイ一日〳〵と心ならずも月日を送り實に旭の出るのを見る毎にあなたの事ばかり御案じ申して暮して居ました所が、當夏幸ひに心安い朋友が日本見物に出掛やうと云ふので夫では我も一所にと俄に思ひ立つて巴里を立ちやう〳〵と今朝横濱に着まして御座ります

ト答ふ。是にて主客共に椅子に腰を掛け、淺井は此話しの聞取れぬ思入、遠山は通辨仕やうと思ひながら、まだ夫人に近付に成らぬに由て當惑の体にて

遠　大兄一寸僕を夫人に紹介して下さりませんか

淺　ムヽそうであつた

ト夫人に對ひて

マダム是は私の信友で遠山外と申す紳士、以來何分御懇意に願ひます、私も歸國以來佛蘭西語をさつぱり遣はないので全く失念致しましたゆへ遠山君に通辨を頼みます積りで御座ります

夫　そうで御座りますか。遠山さんお初に御目に掛りましてお嬉しう存じます

遠　マダムベルクール御面識を得まして私の榮譽に御座ります

ト互ひに挨拶して

夫　遠山さんあなた佛蘭西を話しますか

遠　へ、ヱ巴里には五ヶ年程留學致して居ましたゆゑ佛蘭西語と來たら却つて日本語より上手で御座ります

夫　夫では唯今私が申した事を憚ながら通辨をなすつて下さりませ

遠　畏まりました

ト淺井に向ひて

大兄、マダムベルクールが申されますには、去年の春佛蘭西で御一別以來早く日本へ遊歷に參らうと存じたれど多用に取紛れて居ましたが、幸ひ懇意の朋友が日本見物に參ると申すので、然らば同道致さうと俄に思ひ立て巴里を發足して

淺　オット遠山待てくれ玉へ、その朋友と云ふは語は男性か女性か

遠　勿論男性です

淺　フーム

遠　そこで巴里を發足して漸く今朝横濱着に相成たのです

淺　ハ、ア左樣ですか。シテ御道中はいづれの方を御廻りに成りましたナ

遠　私は生得船が嫌ひで御座りますゆゑ馬里塞から佛國郵船ゐ乘りまして孟買で上陸を致し印度を見物仕ながら鐵道で通つて甲加塔に出て夫から又船で新嘉坡香港上海と支那見物をして長崎へ參り鐵

道で陸を通り神戸大坂京都と所々方々を見物して東海道を下つて參りました

ト遠山は通辨仕やうとするを淺井は押止めて

淺　成程佛蘭西から印度支那日本と所々方々御見物で西京から東海道鐵道にて御上京に成りましたか、夫じやア大分御道中でお手間が取れたで御座りましたらう

夫　ハイ四月の三日に馬里塞を發まして六月の廿日に長崎に着き今日が七月廿八日故調度百十五日に成ります

淺　ソリャ隨分長い御旅行で色々面白い御見物もありましたらうが、日本は如何で御座りますか、御氣に叶ひましたかね

夫　ニッポンワタクシダイスキ印度や支那を見物した目で長崎に着ました時には丸で別世界に來た樣な心持に成りましたよ先づ着物風俗を初として家の造りや庭の模樣一體の諸道具器に至る迄淡泊とした中に趣味があつて其優美で高尚な所は誠に美術の極意を含んでありますし夫に到る所どこでも山水の景色の宜事はそれは〳〵詞に盡されませぬ譬へて申さば古來の名人がかいた名畫の中で古代の美術を實地に應用した樣に見えまして此樣な面白い見物は世界中で外の國にハ有るまいと存じます

遠　大兄日本の衣服風俗や山水の風景が頗る夫人の氣に入りまして

淺　ムッわかつた〳〵、そこは夫人が常々から風流の道をお心掛で美術には尤も心を委ねて御座るによつて我日本の一種特別な所がお氣に叶つたので御座りませう。だから私が夫人に是非とも日本見物に入らせられい、必らず思召に叶ふに相違ないと頻りにお勸め申したは是故で御座りました。なんと私が申した詞は噓では御座りますまいがな

夫　あなたのお話しよりは目のあたり見た方が遙に勝てれ居りますヨ。それはそうとして、所で私は何かあなたへれ土産を持て參り度と存じて搜して居ました所が丁度巴里を立ちまする少し前に不圖した事で手に入りました不思議な古物

ト書生に手傳はせて木の箱を明けさせ遠山も倶々に手傳ひて取出したるは大きなる綿包み其綿を取れば人間が火山の流動灰に生たまゝ包まれて化石に成たるなり是を見て

書　ヤアコリヤ是人間の干物

ト愕りして立退けば。淺井は近くよつて是を眺めて

淺　ムヽコリヤ奔百の地中より堀出したる古物に相違ないがどうして是がお手に入りましたか

ト古物家の癖を出して餘念なく見とれて居れば

夫　誠に御鑑定の通りで御座ります。此化石は那百耳の古物家が持て居たを賣物に出して既の事に佛蘭西の博物館で買上に成らうと云ふ所を、私があなたへ贈らうと存じて直に求めたので御座ります、

淺　御意に入りまして御座りませうか、御意に入つたら是が第一のお土産ナニ此化石をお土産として私へ下さると仰しやりますか、是ハ〳〵實に意外の賜物、御承知かは存じませぬがモーミーは上野の博物舘に備へ附に成て居りますが奔百の地震に埋まつたる人体は日本では是が一品で御座ります、此一品で私の參考室も忽ちに聲價を揚げて此上も無い悦び、萬々御禮を申上まする

ト頻りに嬉しがつて右の化石を見て入ると傍より書生の木柄は

書　へイ夫でハ是が地震に潰された人間の化石で御座りますが、ドコの地震ですか、此間の大地震ではありますまいが

淺　なんの日本の地震でハ無いワ、コリヤ今を距る事千八百年前伊太利の大噴火でポンペーと云つた町が噴火山の灰の爲に全く埋まつた時の人体よ

書　へー夫じやア此間の地震とは質が違つたのですね

遠　そうよ、まア早く云へば先年盤梯山の噴火の極大きいのサ

書　じやア東京では安心で御座ります。夫でやつと落付ました

夫　ホヽヽホそんな氣遣ひはありませんに由つて、あなたその化石を少しわきへよせてこちらを手傳ふて下さいましな

遠　オイ木柄そりやア安心だから、わちらの手傳ひをせいとよ
書　畏りました
ト夫人の差圖にて竹籠を出せば
夫　淺井さん、コリヤ珍らしい蝦蟇で御座りませう、先日印度を見物してアグラからアラハバットへ出まする途中で土人が恒河の岸で捉まへたと云つて大騒をして珍らしがつて居たのを私が買まして、夫から甲加塔に參つて學者連中に見せましたら是ぞ即ち前世界の種が今日まで殘つて居る種類で極稀な蟇じやと申されたてわちらでも大層欲がつた人もありましたが、みんなすげ無く斷わつてあなたへお土產に致しませうと存じて持て參りました
遠　大兄分りましたかね、此大蝦蟇は印度の產で前世界の種至つて珍らしい物だと云ふに由てマグムが大兄へお土產に御持參に成りました
淺　ム丶わかつた〱
ト右の竹籠の中を覗イて頻りに見入ツてハタと手を打つて
イヤコリヤア妙だ、日本でも日の中には三足の烏あり月の中には三足の蝦蟇ありと云ひ傳へたが其說の根原は支那では無くて印度よりの傳說だらうとわたしは不斷思つて居たが、コレ見たまへ此蝦蟇が後足を揃へてくツ附て威張てる所は三足の樣に見えるであらうが

遠　成程三足に見えまするな

淺　‥どうだ是で年來の疑がさらりと解て學問上の大發明を得たる事全く夫人の厚意、實に有難う存じまする

夫　ろうで御座りますか、お役に立てバ私もお嬉しう存じまする。あなた此大蝦蟇をば長の旅の其間だ活して持て參るには大層骨が折れましたヨ

淺　で御座つたらう、第一に鐵道の中や飛脚船の内で三度の食事の世話ばかりでも御大体では御座りますまいし、それに個様な品は持運びを仕まする者が兎角否がりますので

夫　夫で私も困り切りましたヨ、併しそれが貴君の歴史古物御研究の參考に成ますれば此上も無い私の悦びで御座りまする

淺　參考所が此上も無い慥かな證據物で御座りまする、ヱヽ遠山近日此蝦蟇を研究會に持出して一演說して大勢を驚かしてやり度ものだ

ト大悦の体にて右の竹籠の戸を明けて蝦蟇を眺めて居る内に、蝦蟇は砂利糸の仕掛にて籠の中より飛出て舞臺を飛あるく、夫人は肝を潰して飛のく淺井遠山書生三人にて押へ様とすれども蝦蟇は飛廻る、此間三人おかしみのこなしよろしく有つて、蝦蟇は書生の足許に來れば

遠　ソレ木柄そこを捕まへ無いか

書　へイ

　ト氣味惡がつて、手を出し得ず

淺　ヱヽ早う押へ無いか、不器用の男だせ

書　デモ押へたら喰付さうで無氣味で御座りますもの

淺　何の喰付ものか大丈夫だワ

書　大丈夫なら貴君お捕まへ成すつて下さいまし

淺　おれが捕まへる位なら貴樣に言附は仕ないワ

　ト云フ内に蝦蟇は又々飛廻る。淺井はドヾ竹籠を持て蝦蟇の上に冠せて

書　サア是で大丈夫だ、遠山その蓋を下からさし込でくれ玉へ、木柄その繩で外をシツカリ結んでくれい

　ト三人掛にて蝦蟇の始末をして元の如く入れて。淺井は汗拭にて顏を拭きながら

淺　此蝦蟇め、大骨を折らせおつた、お蔭でびつしより汗に成つた

　ト汗を拭き畢りて夫人に向ひ

淺　大きに失禮を致しました

夫　どう致しまして、まづ無事に納まつてお目出度存じます、オホヽヽホ

淺　ハヽア有難う存じます

ト此内に書生は蝦蟇ヌ懲りて諸人の意の附ぬ様に逃げて下手には入る。夫人は書生が居合せざるに由つて自から小箱の蓋を明けて石の冠を重さうに両手にて持ち遠山も手傳ひて漸く高机の上に置けば

夫　淺井さん是を御覧なさいまし

ト押やれば。淺井は遠山と倶に見とれて

淺　コリヤア不思議だ、ハヽア石冠ですな

夫　いかにも石の冠で御座ります

淺　シテ此石冠がどこから出ました

夫　三年前バビロンの古跡を堀ました時に土中から出たと申す事で、佛蘭西へ廻りましたのをある學者が買取つて秘藏して居られました、夫を私があなたへ差上やうと存じて無理に所望致して持つて參つたので御座ります

淺　ナニ私へお贈り下さる爲に無理に御所望に成ましたので御座りますか

夫　サア鑑定家の説でハ是ぞ正しく石の時代に用ひたる國王の冠だと申す事で御座ります

淺　何さま石の時代の冠に相違御座らぬ、此石質と云ひ製造の手際が我國の雷斧や石槌と同じ事だから

妙だ・

遠　サアそれが妙では有ませんか。ロンバルジーの鐵冠は宗教上の寶物、バビロンの石冠ハ古物研究の珍品

夫　さうで御座ります。淺井さん一寸その石冠をお頭に乗せて御覧なさいまし

淺　ナニ此石冠を私に冠つて見いと仰せらるゝか、ドレ戴いて見ませうか。イヤコリヤア獨りでハ冠れぬ、遠山冠せて見てくれ玉へ

遠　然らバ僕が羅馬法王に成て王冠を乗せて進せ様か

ト右の石冠を受取りて兩手に持ちて立ち

成程是は中々重いぞ。イヤ大兄そう腰を掛て居ては冠せ惡い、法王の前に跪づか無くては往けませんせ

淺　大層威張込むせ、是で宜しいか

ト淺井は片足を折り片足を立膝にして遠山の前に跪けば。遠山は勿体らしく法王を氣取りて

遠　サア殿下、只今王冠を戴かせまするぞ

ト右の石冠を淺井が頭の上にづぶりと冠せる淺井ハ兩手を頭の上の冠の縁に掛けて

淺　イヤ是は重い。成程王位の冠は重荷で御座るな

夫　トヤツト立て椅子に腰を掛れば

淺　淺井さんその兩手をはなして、御覽なさいましな

夫　此兩手を放せと御意なさるか、個樣で御座ります

　　ト兩手を放せば夫人は淺井を眺めて

淺　誠に宜く似合まして國王樣と見えますよ

夫　宜く似合つて國王と見えませうが、中々王位の責任が重くて立切れませぬせ（ト冠を取に掛れども獨りでは重くて取れず）オイ遠山早く取てくれ玉へ

遠　マダムベルクールが大兄には其石冠が宜く似合て人品骨がらが大層優美に見ゆるとお賞めなさるに由て、今暫く辛抱して冠つてお出なさいましな

淺　イヤ優美でも高尙でも肝心の頭がめり込みさうに成つて來た、戲謔じやア無い早く取てくれ玉へ

夫　遠山さん早く取て上ておあげ成さいましな

遠　夫人の御意とあるからは取て進せませう

　　ト取て元の如く高机の上に置けば淺井は首の骨を揉んで

淺　ヤレ〳〵漸と首の骨が助かつた、此石冠の重いのでは頭が胴中へめり込で仕舞かと思つたせ、是でハ國王に成るのも明めものだ哩

夫　まづお頭も御無事で御目出度存じます、併しお冠りなさいましとお勸申してお氣の毒さまで御座りました

淺　何と致しまして此石冠を戴きましたのは取も直さず月中の仙女より賜はつたる桂の冠、男冥加な事で御座ります

遠　月中の蝦蟇でなかつてお仕合で御座ります

ト小聲にいへば夫人は聞附て

夫　ナニ蝦蟇がどうか致し升たか

遠　イヤサ蝦蟇といひ石の冠と云ひ實に珍らし御品で御座ります

淺　其珍らし御品を賜わりまして有がたく頂戴致しまする、御厚情は幾久しく感佩仕で御座りませう。そこで私はまた夫人に日本へれ出になりました其時には御覽に入樣と存じて少々計り貯へたる品々。オイ遠山余が書齋の棚の上にのせてある箱をば憚だが持參して下さらぬか

遠　委細承知しました

ト遠山は上手へは入る

夫　あなたが御信切にお貯で私へ御見せなさらうと仰やるお品、定めて高尚な美術品で御座りませうが、早う拜見いたし度う御座ります

淺　ナーニ、別に珍らしいといふでも有ませんが、日本古代の美術を見る丈の品で

夫　夫が何より私の望で御座ります

トいふ中に、遠山ハ奥より文庫を持出て

遠　大兄是ですか

淺　ムヽ夫だ

ト受取て高机の上に置き其中より金の平打の鳳凰の笄を出して夫人に見せて

夫人、是は聖徳太子の御品で凡千三百年前の製造、尤も原品ハ博物舘に保存してありますが寸分違はぬ様に寫させて即ち此通り、ナント古雅なもので有ませう

夫　是が日本で千三百年前に用ひられた笄の寫で御座りますか、高尚で優美な所は得もいはれませぬ

ト笄を手に取つて頻に眺めて賞せば。淺井は勾玉と管玉をつなぎ合せたる首飾りを出して

淺　マダム是が日本の古代のまだ支那風の行はれませぬ前の首飾で御座りますト云へば夫人は手に取て

夫　ヘー是が日本古代の首飾、なるほど京都で見ました將に此樣なものを首へ掛て居た男が書いて御座りました

淺　イヤ男ばかりでは御座りませぬ、古代には婦人も同様この飾を用ひました

夫　其古代の飾を寫したので御座りまする

淺　イヤ〳〵なんと致して、コリヤ古代の遺物で二千年前の眞物を集めて此通りに取纏めたので御座りますどうで御座る麗しいものでは有ませんか

夫　スリヤ是が二千年前の眞物、この色合から製造方が何とも言へぬ程にうるわしくて美術の妙をあらわして御座りますよ。是を見るに付け古代の美術が知れますネ

ト勾玉を取て見て居る

淺　如何で御座る日本の古物美術は又格別なもので御座らうがナ（ト得意になつて古き檜扇を出して夫人に示し）是が七百年前に高貴の婦人が用ひたる檜扇で即ち菖蒲の前といふ日本歴史で有名なる婦人所持の品で西京のある寺院に寶物で有たのを二十年私の手へ入りまして御座ります

夫　へイ七百年前に日本では此樣な美しい畵を扇へ書ましたかナ。此花や草木の工合は面白い位置で彩色の配合なぞは中々今時の繪師には及ばぬ所が御座ります

淺　デ有ませうよ

ト文庫の中の裝束の裳を出して

マダム是を御覽なさい、是は裳と申して宮中で貴婦人の官服、袴の上へ掛て後に引た品で御座る。尤も近世は追々此裳の摸樣も變りましたが、此品は和泉國の某といへる古物家の秘藏で五百年前の品古代衣服考と申す書物にも此寫がのせて有ます

夫　それでは是が五百年前の貴婦人の裳で御座りますか。此縫摸様の安排は何とも彼とも申分のない趣が御座ります

ト裳を眺めて後に前の金笄勾玉檜扇と倶に高机の上に置きて

淺　誠に珍らしいお品を拝見致しまして有難う御座ります

ト押戻せば

夫　イヤ此品々は私があなたへ上げませうと存じて集めましたゆゑどうか御受納下さりませ

淺　コノ古代美術の品々を私へ御贈り下さりますとな

夫　如何にも左様

淺　そりや有難ふ存じます此品々は金銀で得がたい高價の美術品、貴君の御信切が此美術の様に深い趣きが此中におのづと籠つて居りますれば一入れ嬉しう御座ります

遠　大兄夫人には大したお悦びですせ

夫　この品を頂きますからは迚もの事に身に付て見たう御座りますれは。淺井さんどう言ふ工合になるのだかお手傳なすつて下さいまし

遠　夫人が此品々を着用して見やうと仰しやるから、大兄手傳てお上なさいましな

淺　オット心得た、個様に致すので厶り御座ります

ト淺井は勾玉を頸へかけ笄を髮へさし裳を洋服の腰ゟ結び檜扇を持たせて

夫 サア是で宜しう御座ります

有難う存じます。どれ程似合ましたか鳥渡姿を見ませうか

ト煖爐の前に來り鏡に移して自れの姿を眺めて

遠 是では立派な日本の貴婦人と見えますか

淺 似合た所か第一等の日本貴婦人で御座ります

實に高尚で美麗で比ひの無いお姿に見へまする

トこの內夫人は煖爐の上に並べてある寫眞を一寸見て少し不審の思入れあれどもさして氣にも掛けず原の所に立戻つて

夫 日本の貴婦人に成ましかたらは日本風に座りませうか

ト舞臺へすはる

淺 そこへお座りではきたのう御座ります

夫 ナニ少しも搆ひませぬ

遠 夫じやア座布團を上ませう

ト遠山は舞臺の隅にある三枚の座布團を出して三人ながら舞臺にすわる

夫　これで全く日本風になりました

ト言ふ所に。上手より淺井お兼令孃は絽のかさね織物の帶にて出て來り

兼　お兄イ様只今歸りました。オヤ遠山さんよくお出なされ升た

ト わざとよろ〳〵しく挨拶して、夫人を見て

あなたはどなた様で御座りますか

ト尋ぬれば。遠山は小聲にて

遠　あの御夫人はマダムベルクールといつて唯今佛蘭西からお附になつた御珍客です

ト淺井は夫人に向ひ

淺　マダム、是は私の妹で兼子と申しまする

ト紹介すれば。れ兼は丁寧に

兼　お初にお目に掛ります以來は何分ともにお心易く願ひます

ト いへど、妹の言詞が夫人には意に落ちぞ、夫人は眞面目になつて

夫　御機嫌宜敷しう

ト至て冷淡に挨拶する。お兼は夫に氣も附ず

兼　お客様かお出なのにまだお茶も何にも差上ずに、マア怪しからぬ、是だから男子方のお留守番ハ困

りますネー、どれお茶でも上ませうか

ト一禮して上手へ入る。夫人は後を見送りて不興の顔色になれども淺井ハ心附かず

淺　そこでマダム此東京の御旅舘の御都合は如何相成て居りますか

夫　左樣、東京へは唯今參つたばかりで旅舘はまだ定めませぬ

淺　シテ御荷物ハ

夫　荷物は横濱のホテルに預けて御座ります

淺　どうで御座ります、別に御旅舘をばお定めなさるまでもなく若しからずば拙宅へ御逗留に相成ましてハ

夫　左樣で御座ります、併し御差支に成りましても濟ませんから

トこの時お兼は上手より茶腕茶瓶を盆にのせ菓子菓物及びラムネ葡萄酒の類を順々に持出せば遠山も手傳ひて運び、お兼は茶を出し菓子を進め菓物を皿へ盛り夫人淺井遠山に配る事よろしく。夫人はジット此体を見て愈々不機嫌になる。お兼は是に氣も付ず小さき籠に花を盛りたるを持出して

兼　これは日本の花で私が盛りましたゆゑお慰みに御覧に入れます

ト籠を夫人の前へ差出せば

夫　有がたう。併しこれは私よりも淺井さんが御賞翫なされませうよ

ト右の花籠を淺井の前へ突出す。お兼は此体を見てムッとして奥へは入る。淺井は不審の思を爲して

淺　妹がさし上た花籠が何で御意に入ませぬか

夫　お妹だか誰だか存じませんが、大層れ美しい御婦人で御座りますヨネー遠山さん

遠　左樣お美しう御座ります

夫　其御美しにつけても御邪魔になつては濟みませんからお暇を致しませう

遠　大兄夫人にはお暇を致さうと仰しやりますせ

淺　なんでお歸になりますナ

夫　ハイ横濱にも朋友が待て居りますから

淺　ナニお朋友が待て御座りますとな

ト是には淺井も少し不興に成れば。夫人も更に激して

夫　左樣さ、私だつて朋友もあらうでは有ませんか。併し私の朋友は妹では御座りませんヨ、子ー遠山さん。あなたは佛蘭西の風をよく御存で有りますか佛蘭西では夫婦と兄妹とは同じ樣なものでは有りませんヨ

遠　勿論日本でも同様で御座ります

淺　夫人は何と仰しやるネ

遠　イエナニ、佛蘭西の話で御座ります

淺　左様か、日本では男は男の朋友女は女の朋友と別れて居るが、佛蘭西ではさうでないから剣呑だネ

夫　分りましたヨ、何が剣呑です、憚りながら兄妹ほどじや有りませんヨ

ト互に詞すごくなる。遠山は面倒に思つて、スルリと其所を抜て上手には入る。夫人は其座を立上つて

淺　巴里で別れた其時に必らず日本に來いと約束して其後度々の文通ゆゑ、八重の汐路をわざもつて遙々と尋ねて來て見れバ、何じや、わたしの妹じやと、じやらくらとして舌たるい振舞、よく私の前であんな事が出來たもの、兄妹か夫婦かは一ト目見ても分りますヨ。貴君は東京の紳士で、しかも學者で御座りますさうだが、そんな成され方はどこの國でも學者や紳士には無い事かと存じます

淺　何を言る丶か分らぬが、ム丶扨は佛蘭西から同道の朋友と懇意に成たに由てモウこつちが嫌になつて約束變換といふ心じやナ、たとひまだ夫婦の契りこそ結ばね御互に心の合たる中と中やさしい詞を眞に受て今以て獨身で居るこの淺井智識、心がかわつたに由て一旦の口約束は反古にしてと手紙一通およこしあればどの様に心中に未練が殘つても不承知云はぬが日本魂、夫に是れ見よがしに其

夫　朋友と同行して約束破談にわざ〳〵來られたハ、私に耻辱を取らせる爲か。外面如菩薩内心如夜叉
花の樣なる美しい顏せに似合わね恐ろしい　棘魂。すんでの事扨々こわい了簡で御座るナ
ヤレ〳〵恐ろしい了簡、すんでの事にだまされて此身の操を失ふ所であつた
トさしたる笄を取て見て
此鳥も夫婦連て睦う行末を添遂げやうとの祝ひの摸樣、それも今でハ他しの簪
ト持たる笄を投出して、胸に掛たる勾玉を見て
玉は丸くて紅の眞心かへぬ物じやのに、それに引かへ此玉のくねり勾つた形こそ取も直さず貴君の
心赤いと見ゆるは僞で濁つた色の此管玉其手管にて女子をだましたらし込まうと思つてか、チー腹
の立つ事である
ト投出して泣入れば。淺井も腹立て
淺　泣て見せるは空泪でまだ此上に我を欺き遊んで見たい心底よナ
ト傍にある化石の人物を見て
此化石の人物も羅馬では定めて何の某と人に知れた男にて有しならんが噴火の難にあへなくも斯の
姿に成つたるも大かた夫人の樣な女性に欺され其身に掛る大難に心附ざる故にこそ
ト化石の人物を押到し高机の上の冠を見て

夫　此冠を戴いて世に時めきし國王が塵土の烟と成られしも天運盡てか但し又果報の末か知らねども貴婦の如き恐ろしい婦人に心を蕩されて本心までも失ひし其禍でありしも知れず、其身を責むる石の冠、ヤレ〳〵恐ろしい事であつた

ト石の冠を取て投出せば。夫人は腰に掛ける裳をはづして

この裳とやらも誰が腰にまつはつて何なる男子の手に觸れて其移香を殘せしやら、思へば此方の清淨を穢さるゝ心地がする、エヽ氣味の惡い物ではある

ト傍にある檜扇にくり〳〵と巻付る所に妹のお兼は舞臺の騷ぎを聞付けて出て來り

兼　まアれ二人さま何事で御座ります

ト仲裁に入らうとする途端に

夫　お前に似合の此裳とやら、サア持て行かしやんせ

ト右の裳をお兼に擲付れば。お兼は立腹して

兼　何をなさります失禮で御座ります

ト又右の裳を夫人に擲返す。夫人は又取て淺井に擲付る。三人にて擲やり擲返す大さわぎになる。此騷に堪兼て遠山は上手より出來りお兼を圍ひて

遠　何の間違か存じませぬがマアお鎮り下さりませ

卜雙方を慰むれば。淺井も夫人も靜まつて椅子に腰掛け。遠山は淺井に向ひて

大兄全体どう仕たので御座りますかな

淺　ナニ夫人が何だか出抜に怒り出した上に長の道中同道の朋友と云ふのがどうも怪しく思はるゝに由て

夫　是は仕たり、そんな蓮葉な私で無い事は淺井さん貴君もよつく御存では有りませんか、若又其朋友とおかしい中であるならば初めつから日本へは遙々とお尋ね申しては參りませんヨ

遠　大兄唯今のお咄しは分りましたが、其朋友が情人なら大兄を尋ねて日本へ來る必要は無いと申されますがどうで御座ります

淺　成はどそう言われて見ると大きに其通りで御座るナア

卜是にて淺井は疑とけて機嫌を直せば。遠山は夫人に對ひて

遠　シテ又貴婦は何が御不興で御立腹なされましたなア

夫　サア遠山さん隱さずに話して聞せて下さりませ、アノ御婦人は淺井さんのお妹と云ふたは僞り誠は奧さんで有ませうがナ

遠　是は仕たり、妹も妹正直正銘の妹御で御座ります

夫　イエ〳〵夫でも先刻からの身振がどうも怪う思はれますから

遠　ハヽア大兄、令妹のお兼さんがどうも細君の樣に見えて怪いと思はれますと

淺　ハヽア是れ迷惑千萬

兼　お兄イさんの迷惑より私の迷惑がどう御座りますワ。假令他人でも誰がこんな顔の長い眼の大きい不人相な男を亭主に持ちますものか、第一年が私とは大層違ひますもの、いやな事だ馬鹿〳〵しう御座りますョ

ト少し急腹になつて言へば。夫人は是にて少し疑はとけて

夫　遠山さん令孃に御立腹の無い樣によく言譯をして下さいましな、それではさつとお妹に違ひはないのですネ

遠　れ妹に相違御座りません

夫　それでは奥さんでもなく淺井さんの情人でも有りませんか

遠　決して淺井さんの細君でも情婦でもありません

淺　サアどうで御座る夫人この淺井智識の潔白が分りましたか、お疑が晴ましたか

夫　さつぱりと分りました、是で私も大安心を致しました

ト機嫌を直してお兼と遠山と二人の素振を見て、扨はと勘附きて

ム、それじやア遠山さん令孃と貴君とは思ひ合した中で御座りますね

淺　ト是にて遠山は赤面する、お兼も是はと思ひて顔をかくす。淺井も思入あつて

ム丶夫では夫人の仰の如く遠山とお兼とは思ひ合つた中で有つたか、さうとは今まで心附ませんで

御座つたに

夫　只今の失禮のお詫に私が媒人を致しませうが。遠山さんとお妹とを御夫婦にしてあなたに御不承知

は有ませんか

淺　妹の亭主には似合の遠山、當人同志が望なら私に於ては不承知どころか尤も願ふ所で御座ります

夫　宜しう御座ります。そこで遠山さんは

遠　そう相成ますは誠に私の望み通りで御座ります

夫　シテ令孃は

兼　どうぞお願ひ申しまする

淺　サアから夫人の御執持で極る上は明日にも婚禮致させ様が二人ともどうだの

兼　お嬉しう御座りますかお兄イ様がまだ奥さんをお迎へなさらぬ其前に

遠　私どもが婚禮いたすも何とやら無遠慮に御座りますれば

淺　ム丶私の婚禮も近々に出來るつもりだが。モシ、ベルクール夫人、れ疑が霽たからは貴婦のお手

を

夫　改めて授けませう

ト手を出せば淺井は其手を兩手に握り、遠山も同じく握手をして、兩組向ひ合ひに立つて

遠　さて斯ふ目出度婚禮の約束が整ひまする上からは幸ひ此所で四人がダンスを始めては何如で御座りませう

夫　それも宜しう御座りませうが、日本ではこんな目出たい時にはどう致しますか

淺　日本では斯う目出度ときは舞や踊を致すがならひ

夫　それでは私も日本風で其舞とやら踊とやらを致したら御座りますに出て、淺井さん一寸見せて下さいませんか

淺　イヤ私よりも舞や踊はこの遠山が上手。サア遠山一さし舞て見せ給へ

遠　畏まりました

ト扇を持ち前へ出る

うた『結ぶの神の惠にて。叶ふ願ひぞありがたき。そも初戀の初めから。目元に送る一浪に。千々に心をいはせの森の。月には見せぬ戀衣。忍びあふ夜のたまさかに。變りはせぬか變らじとかはす詞も耳と口。人目の關のはゞかりや。風に吹るゝ桐の葉の。窓うつ音にれどされて。ハッと飛のく鴛鴦の。其思ひ羽の今日の今。届いて嬉し妹脊中

ト中程よりおかねゝらみ、夫人と淺井は見とれて浮れ出る態などありて踊の切と俱に純張をおろす

◉博士達

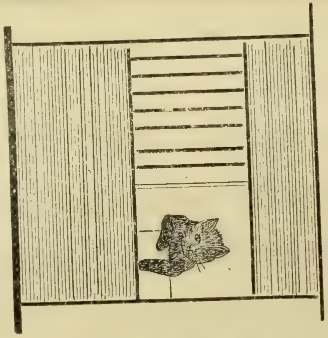
本舞臺一面の平舞臺後ろ景色の書割、都て佛國巴里の街頭にて夜の体なり。玆に西洋婦人ひとりにて佇み居る。この摸樣鳴物にて幕明く

婦人　私の顔付でも知れやうに、まアなんといふ事だらう、今朝からどうも氣分が惡くつてなんとも彼とも言ふにいはれぬ心持で熱が出たり下つたりして堪られないから、お醫者樣の處へ行て見て頂きたいたのサ。お前うそだと思つて居るのかへ、それはほんとふなのだよ。笑い事じやア有ヤアしないよ。夫にまア動氣がするといつたら一通りじやアありやしないのさ、スルト私の極能知つて居る朋友が、直き此脇に好ひれ醫者樣が住つて居るといふから、そこへ見て貰ひにかけ付たのサ。呼りんを鳴すと直に若ひ人が出て來て戸を開けてくれたから、先生はれ宅ですかと尋ねたら、私が先生だといわれた時には自分でぞつとしたよ。つれられて先生の御部屋へ入つて挨拶が濟と、其先生と云つた人が何の御用ですかときくから、どうも動氣がして仕方がムりませんに由つて御療治を願ひに出ましたと答へたら、大へん六ヶ敷顔付してそれはお氣の毒の事で嘸御難儀でしやう、どうぞ肌をおぬき遊ばして動氣をば聞かせて下さいませといふから、一生一代誰にも見せた事のない繻絆を脱

ひで先生さんのいふ通にしたら、其人は胸へ耳をつけたり背中へ耳をつけたりして長い間なんだか口の内でいひながらあつちへまわつたりこつちへ廻つたりして見て呉れたのさ、その間の心持といつたら幾度吹出そうになつたか知れなかつたよ。それで其先生ハ、なんにも別に大した事もないと云ひながら口まめに一生懸命色だとか直だとか謂ふから、碌々返事もしないで禮をそう〳〵といつて戸口まで來て、先生藥は何を頂きませうかといつたら私は博士(ドクトル)では御座りますが法律の博士で御座りますと云はれた時は、氣も動亂して前後も知らず往來へかけ出したのさ。アノ青二才の前で湯でも遣ふ樣な姿をして馬鹿らしい

併し是から先は動氣がしたら其動氣は今のとは別で法律學士のせいですヨー

トこの挨拶よろしく鳴物にて幕



◉鐵道旅行　嵯峨のや主人

八月某日は曾祖母が百歳の誕生日なるを以て、余が一家の總代となりて山科の郷醍醐へは往事となりぬ、此時余は十三歳にして旅行は始ての事なれば、一家の人皆種々と注意をなして途中の恙なからん事を祈れり、余は何となく心面白く、早く出立の日の來らん事を願へり、二三日を千秋の思にて過せしが、やうやくにして其日とはなりぬ。

愉快！　余は勇ましく兩親と姉と弟とに告別して車に乘りぬ、然れども車夫が梶棒を擧し時、門前に立送る母や弟を顧みて最後に、『左樣なら往て參ります』、と言ひし時は胸は不可言の悲しみを以て滿されき、母は兩眼に涙を浮べて、『夫では氣を附てね』、と言ひたまひき、嗚呼如何に慈母の恩愛の深きよ、彼女が一滴の涙は余が爲めには全世界よりも尊し、車の横町を曲れる時余は我家の方を顧りみしが、母と姉とは門前に立ちて余が後姿を見送り居たりき、余は帽子をふりて禮をなしたるが、一轉瞬の間に車の横町へ走り入りて、懷しき姿は我眼底より消けり、此時心は不可言の寂しさにかき亂されて、須磨の浦和の夕波の如く最靜に波打き、

余は山科行の切符を買ひて五時の夜滊車に乘込めり、何となれば夜滊車は翌正午前後に山科へ着する便あればなり、客車は各種の衣裳を着たる各種の人物を以て滿されてありしが、彼等は其性質の樣々を其

風裝の樣々に現はしつゝ、路上一片の表式的談話を輕やかになして、何となくどよめき居たりき、余は恰も大人の如く一目に其風裝の異なるを數へて面白き事に打見やりぬ、彼等の中には他を見る眼光きよろ〳〵として鋭く、稻葉小僧歟鼠小僧の末葉歟と思はるゝも有き、又腮の髯もじや〳〵として奇麗ならず、眦の稍さがりて色好みらしき梁山伯の豪傑、小覇王周通に似たるも居たりき、其外職人の職人らしき、商人の商人らしき、官員の官員らしきは、別段珍らしくもなければ余の目にも止まらざりしが、一人余の前に坐し居たる三十餘りの美人は甚く余の注意を惹きたりき、彼女は華美なる肩懸を敷て余の正反對に坐し居たるが、余を足の爪先より頭の髮の毛の天邊迄、怪しむが如く、疑ふが如く、又危ぶむが如く、物珍らしさうに打眺め、やがて隣席の男に向ひて何事を歟小聲で語りてホヽヽと笑ひぬ『失敬な奴だ女の癖に』、と余は思ひぬ、

滊車が橫濱へ着せし時乘客の頭數はげッそり減して人々足を延す事を得たりき、『おゝ暑かつた、やう〳〵少し涼しくなりましたねへ』『貴君は何處へお出でございます歟?』『私は箱根へ湯治に往きます、貴君は?』『否、私は少し遠方で、中國の方迄』、此種の談話を始めとして、或は故鄉々々の自慢話をするもあれば、或は溫泉の功能を說もあり、或は山水の風色を誇るもあり、或は物產の種類を數ふるもあり、或は地方の便否を評するもあり、或は都鄙の文野を論ずるもあり、或は同行者同志途中の都合を談ぞるもありて、人々の体は絕間なく右左に動き、頭は絕間なくランプの光に影を轉じて、其樣何となく白面

かりき、

余は別に談話の相手も有らざりし故、窓より顔を出して前面の景色を眺め居たるが、滊車の走るに從ひて我を送り迎ふる風色の變はる面白さ、遙なる杉の一群しげる中に社の家根の神寂びて見ゆるは、如何なる神を祭れるにやあらん、野火の煙はしめやかに立昇りて森の南端を朦朧とかすめて空に消ゆる、近く見ゆる農家の收納場には頭に手拭を被ふれる賤女が、筵に乾あげし麥を取入れつゝあるも見ゆれば、其子供にやあるらん、司馬温公とも思はるゝ三尺の童兒が鷄を床屋に追入れつゝあるも見ゆ、忽ちにして走來る山は雜樹雜草生繁りて綠濃く、凉しげなる木間陰には蜩の音けん〳〵として高く聞ゆ、忽ちにして汽車山の一角をめぐり出づれば、田野開けて遠村近落の眺望見れども飽かぬ心地す、彼方なる田中の細道を小車を牽て農夫のゆく、此處の崖の半腹を目籠を負ふ賤女の話もてゆく、孰れ歟畫中の景色にあらざるべき、既にして日影西に入果ては暮煙一面に野面をかすめて遠き彼方の岡山は裾野の方より暮てゆく、余は風景に別を告げて此方をふり向きしが、彼失敬な奴と思ひし例の女は、左右隣席の男を相手に絶えず何事をか物話り居たりき、其調子何處となく世なれて、笑ふ口元には一種の媚を裝ひ、秋波を送る目元には一種の愛敬をたゞへり、其物言ふ度に上唇の下唇よりも稍前へ出たる、音調の少しく甘へる樣なるは年よりも淡しく、何處となく甘やかある香の全身より香り來るを覺えぬ彼女は今も尚余を疑ふが如く、折々不安心の視線を余に投ずる事を止ざりき、『失敬な奴だ！』余は再び斯思はざる

事を得ざりき、

斯思ひてジッと彼女の容貌を睨みてやりぬ

彼女は實に人にすぐれたる容貌を持てりき、額際より眉のかゝりはけむる樣にて、口元の匂ふ斗りにやさしげなるはいふも古し、若し人間の容貌の中、眼を以て肝腎要とするなれば、夏山の葉越の月よりも清しき彼女の眼光は、其寸心の智慧を語りて敏捷に動けり、おさらばと反けし貌のむき玉子の蜀山の咏じけんも斯や、玉子をむける如き頰の白さ、艶々として輝かぬ斗なり、其垢抜脂ぎりし肌膚の香と言ひ、其衣裳の着こなし襟門の作と言ひ、其中には一種の「婀娜めける原素」を含みて、甘やかな香の四方に溢るゝ風情、馬琴が田舎酒の人を酔しむると言ひけんも斯や、何處となく人の注意を惹く力のあるに、談話の際は絶えず眸子を轉じて、眉去り眼來るの間巧に人を虜にするの術を弄せり。嗚呼何等多情の尤物ぞ？

己れ、目くされ、失敬な奴だ。

余ハ三度斯思はざる事を得ざりき、

何だから予が左樣疑はしいのだ、予の風俗の中に怪しむべき所があるの歟？

余は斯思ひて我身を顧りみぬ、然れども別に怪しむべき所は見出さゞりき、余はフランネルの襯袢に薩摩がすりの單衣を着、紫縮緬の帯を其上より締め、赤毛糸の靴足袋に紐沓を穿ちて、麥藁帽子を被れるのみ、一點の怪しむべき所なきに非ずや、何が故に訝し氣に余を見るぞや？

失敬な奴だ、

余は四度失敬な奴を繰返して、ジッと彼女を見詰てやりき、此時彼女は靜に珊瑚の金簪を拔取りて、纖々たる素手にて前髮せわしく搔ながら、目を細々とまぼしさうにして、視線を余の方に投じたるが、其は端なく余の視線と出遇ひたりき、此時は以前の誘る如き風情は微塵もなく、全く無心の容貌なりき、然して其まぼしさうな風の、如何斗彼女に似合ひたりし歟　余は屢日向に睡する猫が、他の足音に目を覺して、まぼしさうに、細々と目を開く姿を、如何にも愛らしやと思ひて見たる事ありしが、此時の彼女の姿は恰も此樣な愛らしき姿なりき、

余は覺えず見惚居たれば、彼女は靜に金簪を元の位置に插直し、目元に一種の情を運び、口元に一種の愛敬を溢しつゝ、

貴君はお一人です歟、何處まで往らッしやいますの？

と問ふ、其言葉の中には一種の甘ッぽき香の滿て、柔婉優美の反響響けり、然れども余は冷然として答へぬ

私れ山科迄。

山科迄？

驚ける如く言ひしが、又賞むるが如く慰むるが如く、

よくねへ、た一人で、お强うござんす事ねへ。

と言ひぬ、此時隣席の男も口を出して、

山科とは京の山科です歟、成程、京の。感心ですな。今の子供は皆お強い、何ぼ滊車でも百里餘の道を一人でゆくとは。

眞に左樣でござんすねへ、よく又親御樣も手放してお出せなさいますねへ、私などの樣な意氣地無には、迚も手放しては出されませんわ、途中が心配で、

と頻りに感心せる如く話し居たるが、又余に向ひて、

お幾歳におなりです？

十三歳

十三歳？　まあ十三歳斗でねへ、よくねへ、

言ひながら余の風を珍らしさうに眺むる、是余の單身旅行が、慥に彼女の好奇心を驚かしたるに相違なし、何となれば彼女は左右の談話者を棄て、專ら余の方へ向いて其好奇心を滿足せしめんと始めたればゞ、

今迄も旅行を爲すッた事がありますの？

否有ません、一人では。

左樣、では是が始ですね、能くお寂しく有ませんねへ、

と問ふ、余は默して答へざりき、何となれば彼女が余に質問を始し時より、乘客一同の親線は、余と彼女とに向ひて落來りぬれば、余は何となく耻しくなりたればなり、耳の邊少し熱する樣に覺ゑて、貌はも自から向俯めり、答ゆるに聲も自由ならざりき、實に余は憶面したるなり、胸は何となく波打てり、

うよしてくれゝば宜と思へど、彼女は何の思ひやりもなく、何の遠慮もなく、小雀を見附し鷹の如く、一文字に余に向ひて雨のふる如く問をくりかけぬ、

少しは心細いでせう？　エ、心細くは有ませんの？ホンニ如何です？

其は少しは……

心細いの？

ホンニ左樣でせうね、

其なら私一所に往てあげませうねどうせ西京まで往のですから、

ハイ何卒、

彼女は余の答を聞くや否や、

左樣、では私其方側へ往ませう、

言ひながら傍の手提革包をとりて左右の男に向ひ、笑ひながら、

其では私は此お子樣の方へ、

と輕やかに會釋して余が隣へ坐をうつしぬ、

余が心は縮みあがれり、何故に縮みあがりし歟は余は知らず、然れども其は恐よりに非ず、又喜びよりにも非ず、又恥しさよりにも非ず、不可言なる一種の感情よりなり、此感情何と名附て宜き歟、余は今に至るまで適當の言葉を見出す能はず、唯一種の安からぬ感情よりなり、彼女は余が隣へ坐をうつした

るが、余を顧りみて、

貴君のお荷物は？

余は傍の旅行革袋を指して、

是です。

左樣、其では是れも一所に置て頂戴、

と言ひて手提革袋を余に渡しぬ、余は之を余の革袋と並べ置けり、彼女は莞爾々々微笑ながら、さも親しむが如く、

さあ御一所に參りませうね。

此時汽車國府津へ着く、前なる男は立擧りて

其では御機嫌よう、私は是で御免を、小田原ですから、

會釋して車を下り去りぬ。國府津とは如何なる所なる歟、と窓より貞を出して見るに、黑闇々たる闇の中に一山突兀として眼前に聳え、松籟冷氣を傳へ來りて。夏尙寒き心地せり。更に立て反對の窓を開て見れば、此方ハ國府津の町の一端より相摸灘の波打際にして、荒磯を洗ふ白波は澎湃として物凄く聞ゑぬ、今しも汽車より降りたる人々ハ相携へて停車場を出ゆきしが、其中にハ蘭燈の光まばゆき停車場前の氷店へ入る者もありき。既にして車長相圖の笛を吹けば、百足の大蜈蚣は前頭より黑煙を吐きて走り

出しぬ。余は元の坐へ直りて彼女に向ひ、

波の音は凄い樣ですねへ、

と言へば、彼女は微笑ながら點頭つゝ、

是からは又箱根へかゝるのですよ、箱根へかゝると隧道が幾個も有ますよ。

と言ひぬ余ハ再び窓より貌を出して見たるに、

此時汽車は兩山左右より逼り來る闇々たる黑幕の中を走りつゝありき。

彼女も余に向ひて質問を始めぬ、山科の鄕には余の爲めに如何なる人の住める歟？　余が其鄕に往くは何の爲めなる歟？　祖母の家は姓を何と云へる歟？　余が東京の家は何れの地にありて、其姓を何と云へる歟？　と此種の事を問ひ始めしが、是等の問答の間に余は全く彼女に馴て、自由に話をなし得る樣になりぬ、此に於て余自らも質問を爲し始めぬ、然して其質問に據りて、彼女の家の東京銀座にある事、彼女ハ幾度歟東西兩京の間を往來して旅行にハなれし身なる事、其西京へゆくは何の爲めなる歟といふ事、彼女は非常に小兒を愛するといふ事、故に余が單身旅行をもいとほしく思ふといふ事、彼女も家には今年十一歲になる少女のあるといふ事、其少女は何れの學校へゆきて、今何の書を讀む歟といふ事、何故に少女は家に留めて伴はざりし歟といふ事、總て是等の事を聞知りて、余は何となく愉快に思へり、余ハ彼女とは路上一片の知己に非ずして、古き幼時よりの知己の如く思へり、何となれば此の如き一家

の細事を、語り又問はるゝは、舊知の人に非れば、例なき事ならんと思ひたればなり、殊に有樣を言へば、余は幾分歟單身旅行を寂しく心細く思へりしが今此舊知の如き婦人に邂逅して、大に其心を慰められたれば、前の憶面は胸を洗て消去りたりき、今は懷しき迄に其人に親しくなりしこそおかしけれ。此間汽車は函嶺の麓を走りつゝありしなり、彼女は言ひぬ。

　晝間だとお富士山が見ゑるのですがね、生憎夜だものですから、見えなくて不可ませんねへ。

嗚呼大雪嶺大雪嶺、我汝の狀貌の見ゑざるを遺憾とす、汝が萬古の銀冠を戴きて雲表に屹立するの狀貌は、如何に壯且ッ大なるよ！　恨むらくは闇夜の黑幕、汝を隔て吾と語らしめざるを、余は幾度歟窓より顏を出して、大雪嶺の有といふなる天の一方を望み見たれど、雪嶺の影は見えずして空しく辰星の輝けるのみ。噫。汽車函嶺を越へて沼津へ着きぬ、此時乘客多くは疲勞したる歟、將談話に倦果たる歟、或はケットを敷て橫になるもあれば、或は後にもたれて睡るもありき、一人の農夫あり、後にもたれて睡り居たるが、彼此頃風邪でも引たるもの歟、鼻の空にて大小二ッの提灯を見事に吹分る事を怠らざりき、然も折々何等の物音に歟驚かされては、細々と目を開き、無心に左右を見廻はしては別に異狀のなきに安心せるものゝ如く、又うと〳〵睡りかくる事幾度歟、其有樣如何にもおかしければ、余は彼女に囁きて、

　一寸々々彼人を御覽なさいよ、あら、ね、鼻から灯燈を出して、今目を覺しますよ、そら、ね、又睡

る、前刻から幾度もあゝして居るのですよ。

と言へば、彼女も其有樣をしげ〳〵と眺め居たるが、やがて余の耳に囁きて、

眞成に馬鹿々々した貌です事ねへ。

と言ひ、聲をあげておさな子の如く笑ふ、其風如何にもあどけなし。

余等は尙暫く談話をなし居たるが、睡魔は何時歟我身をも襲ひ來りぬ、余は覺えず眠りかけたるに、彼女は余の肩に手をかけてゆすり、小聲にて、

灯燈を出しては厭ですよ。

と言ひて笑ひぬ、余も笑びながら、

あゝ如何も眠くなりました、堪られぬ程睡くなりました。

言へば彼女はやさしげに余を顧りみて、

ホヽヽ其樣に睡くなりまして？　左樣、其では此處へ横におなりなさい、私の肩懸を敷てあげますから、貴君のケットを枕にして。

余は彼女のいふまゝにして睡りぬ、然れども汽車の動搖の体に傳はれば、余が夢は幾度となく破ぶれて、熟睡する事は得ざりき。眼を開て見れば、不思儀なる哉、余は忽然として我家にあるなり、母は何事を歟余に言ひたりしが、其事の審かならざれば、尙聞直さんとなしける時、余は家にはあらで、唯一人と

ある山の巓に居るなり、兩足を投出して遙に前面なる大雪嶺を望み居たるに、忽然として小蛇一頭、千草を搖て足下に匍ひ來りぬ、あなや！　驚く間もあらばこそ、余が腰をしつかりと纏ひぬ、予れ！　力を込めて其首をつかみさけば、裂帛の如き音して兩段となりぬ、愕然として夢さむれば、冷汗背に徹して衣を潤せり。

驚きて目を開けば、余は彼女の膝を枕にして眠り、彼女は余の背に突伏して眠り、然して余が枕にしたる毛布は、彼女の背より余の体にかゝりてありき、奇怪！　彼女の双手ハ余が腰を蛇の如くまとへり、余が蛇頭と思ひてつかみしは、或は疑ふ、彼女が身の内の肉にあらさりし歟を、嗚呼何等の怪夢ぞ、彼女は余が爲めの小蛇なる歟、然れども一炊の夢何歟あらん、夢は煙りの如く霧の如く、元より取るに足るものに非ず、神夢、正夢、世に在といふと雖も、余豈之を信せんや、嗚呼幻々！誰歟幻の世の夢を信せんや、誰歟夢を信じて彼女を憎まんや。

斯思へる時彼女は細々と目を開きて余の貌を覗きながら莞爾して、

目が覺ました歟？

はい、

貴君私の二の腕を厭といふ程つねりましたね憎らしい、何の恨が有てゞすの？

余の手を引張ながら余の耳に囁きぬ、余は彼女の怒りし事歟と疑ひ惑ひながらも、斯る風体で臥て居る

所を他の人に見らるゝも耻しければ、幾度歟起上らんとなしたるを、彼女は兩手で緊縮と押へ附ながら、「何の恨が有てゞすのよ」と繰返しぬ、余は愈困じ果たるが、周章て、誠に失敬しました、夢中でしたのですから、何卒勘忍して下さいよ、僕大變怖い夢を見たものでしたから、其であの間違へて。

言ひて又起上らんとしたるを、彼女は尚押へ附て、

おや怖い夢を、如何樣夢でした、お話しなさいな、

と問ひぬ、其調子如何にも無心なれば、扨は怒りても居らざりしよ、と思ひて安心はしたれど、之に答ふる事は躊躇せり、暫くは默して答へざりき、何となれば實を語る事を好まざりし故、

如何樣夢を御覽なさつたの？

彼女は再び問ひぬ、疑もなく其好奇心を起して、余は僞りぬ、

如何樣と言て、僕姉樣と二人で何處歟の高い山へ登て遊んで居たのです、所が姉樣が蹶躓て、危ふく山から轉げかけたのです、で僕喫驚して援けやうと思ひ、一生懸命、其帶の所をつかまへたのです、多分帶と、間違へて……失敬しました、許して下さいよ。

言ひて又も起上らんとしたるを、彼女は尚も押へ附て許さず、余の貌を覗くやうにしてしげ〳〵と眺めながら、

貴君私が怒ッたと思ひまして。

と言ひて試むる如く余の貌を見る、其容貌の美しさ、目の中さえて言はん方なく清しく、口元に匂ふ愛敬は四下に溢るゝ斗なり、余は何とも附かぬ瞬昧の調子にて、エ？ エヽと言ひたれど、俄に耻しくなりたれば、周章て彼女の膝に突臥しぬ。何となれば此問答の間、彼女の双手ハ抱へるが如く余の体を締附、甘やかな香の香る彼女の聲は私語の如く余の耳に咡き、匂やかなる彼女の顔はうちけむる花の如く余の目にさへぎるに、然も親しさ、ゆかしさ、なつかしさ、慕はしさを契る如き一種の情は、花の露の解て流れて香る如く、彼女の全身より香り來りて、おさなき余の心を醉はしむる斗なれば、余は何となく耻しく、嬉しく、慕はしくなりて、何時迄も起もあがらず、此まゝにて居たき事よ、と心に思ひし程なればなり、其時彼女ハ笑ひながら、

眞成は少しも怒ッては居ませんの、唯怒た風をした斗、

と早語で咡きて立上り、聲をあげて稚子の如く高く笑ひしが、如何に其姿の愛らしかりしよ、誠の春の花の露にほころびて、曙の空に笑ふが如くなりき、余も微笑ながら起上りたるが、其心は尚夢の中にあるが如くなりき、其時彼女は袂をかい抉りて、一個の大なる梨を取出して、

お目覺に好物を上ませう、厭では有ますまい、有の實。

といふて差出すを、

有難う、大好。

と言ひて請取りぬ、ナイフを取出して皮を剝かくれば、彼女は余の手元を見て、

ホヽヽ危なッかしい手附ですことねへ、どらお出しなさい、剝て上るから。

此時余等の正面に坐して睡り居た男、ばッちり目を開て余等の様子を眺め、意味有氣に莞爾と微笑たるが、又うと〳〵睡りけり。

余は遠慮なく、むしや〳〵梨子を食ひながら、露のみ吸ひてかすは盡く床へ吐出せば、彼女は無氣味さうに、首をかしげて眺め居たるが、

貴君一々吐き出して、餘りお好ではないの？

否、大變好なのですか、之れ露が甘いのですから、其で後は吐出すの？　おゝ汚い、穢い人だ。

仰山らしく言ひながら、眉を顰めて袖うち拂ふ、其風如何にも若やかなりき、

さあ、喫て仕舞たら又お臥なさいよ、貴君位の中は夜寐ないと明日熱が出ますから。

如何して寐ませう？　革袋を枕にして寐ませう歟？　あゝ左様なさい、而して毛布を体へ巻くと宜でざんす……あれ無器用だこと、どら私が能して上ませう、

余は彼女の助に據りて、兎やら斯やらして横になりぬ、而して問ひぬ、

貴君は寐ないの？

私も眠ますよ、睡くなると。
暫時にして夢は又我と親しくなりぬ、余は眠るともなく、眠らぬともなく、うと〳〵として睡り居たるが、夢中に腰の邊の俄に重やかになりたる樣覺えて、寐心の何となく窮屈になりたるにぞ、覺るともなく夢は破れぬ、半醒半睡の間に目を開て見れば、彼女は何時歟睡くなりて、其儘余が上に倒れかゝりしもの歟、すや〳〵として睡り居たりき、其白やかなる腕の袖より洩出て、余が胸の邊に落かゝれる、玉をのべたる如き細指の如何に白やかに愛らしかりし歟、余は覺えず之に接吻したり、其時彼女は細やかに目を開きて、睡氣なる目附愛度氣なき稚子の如く、余の舉動を見て莞爾と打笑みしが、又うと〳〵と睡りき。
余も壓るべからざる睡魔にせまられて、再び蝶魂鄕の人となりぬ、
余は永き間眠りしと思ひしが、何人歟我をゆする者のあるに驚きて目は覺めぬ、
さあもう目をお覺しなさいよ、一寸〳〵さあ。
と彼女は言ひぬ、あいと言ひて余ハ起上りぬ。
此時汽車は何れ歟の停車場に着てありき、驛夫室の戶を開きて、名古屋〻〻〻と叫んで去りぬ、
貴君荷物を氣を着て居て下さいよ、私顏を洗てくるから、
余が未だ何等の答をもなさゞる中、彼女は既に車を下りぬ、余は呆然としてねぼけ目をこすりながら之

を見れば、此時俄然として非常の雜沓四圍に起りぬ、唯見る、乘客は皆先を爭ひて車を降り、殘るは余と二三人の人のみとなりしを、未だ事の理由を充分に解し得ざりし余は、驚きながら窓より貌を出して見れば、何れの車よりも無數の乘客、我先にと降立て彼方なる水鉢の邊に集り、大急にて貌を洗ふなりけり、須臾にして彼女は歸り來りぬ、手拭にて手をふきながら、

さあ郎君、早く往て貌を洗て往らッしやいよ、

余も急ぎて車を降り、急ぎて水鉢の元へゆき、急ぎてごし〳〵と貌を洗ひ、急ぎて又歸り來りぬ、此時又新入の乘客彼方なるマセの中より大海の潮の如く入り來りしが、東西に奔走して、一時は非常の混雜なりき、流石は東海第一の市府なり、と心に感じつゝ此有樣を眺めやりぬ。須臾にして混雜も鎭りて乘客の影も見えずなりぬ。其時役夫高く笛を吹きしが、汽車は轟然たる音を立て名古屋を後にせり、此日朝飯は清洲にて食ひしが、茶は一の宮にて呑みしこそれかしけれ（前に買ふべき暇なかりしを以てなり）茶は土瓶に一杯三錢なりしが、彼女は笑ひながら、

高いでは有ませんか、是一杯三錢では、尤も土瓶ぐるみですけれどもね、だッて貴君、誰が此樣土瓶を持てゆくものが有ますもの歟、ねッさらおッさら道中を、皆置て往のですわ、其を三錢取ッて、只取る樣なものだわ、殘してゆくと癖になる、破て仕舞ひませう歟、

冗談半分といふ調子にて言ひぬ、余も其調子にて、

えゝ面白い、割てお仕舞ひなさい、

えゝ割て仕舞ひませう、憎らしい！

恰も何事を歟憤るが如く言ひしが、又笑を含みて、

貴君割て下さいな、貴君ハ小兒ですから。

宜しい、

余は何の意味もなく、土瓶を採てぽんと窓より投出したるが、土瓶は空中にて二ツ三ツ廻りて、路傍の巖に落ちるや否、骨灰微塵に破れて飛びぬ、彼女は此有様を見て、さも愉快氣に聲を擧て、おさな兒の如く笑ひき、

少し狂人見た樣な女だ。

と余は思ひぬ、然れども彼女は此時ハ最早余を打棄て、隣席の男と何事を歟頻りに話し始めき、余は窓より顏を出して外面を打見やりしが、此時汽車は田野村落の間を疾風の如く走りつゝありき、四面の景色の瞬間に變化するに、涼風面を吹て、神氣頓に爽かになりたれば、余は愉快極りなく、旅革袋の中より双眼鏡を取出して四面の景色を樂しみ始めぬ。

然れども須臾にして風色は余の眼底より消失せき、余は偶然昨夜の事を想ひ起しぬ、昨夜彼女の指に接吻せし事を想ひ起して、如何に旅行には不思議の事のある者よ、然るにても彼女ハ如何なる感を抱ける

あらん歟と思ひて、静と彼女の方を顧りみたれば、此時彼女は前面なる三十七八の洋服の紳士、と何事を歟談話の緒を開きてありき、此紳士は我客車へ岐阜より乗込みし人なり、彼は色白く器量人にすぐれて、全身むく〳〵と肥わぶら附きたるが、宛然生る布袋の如く鼻下の鬚はナホレオン三世を忍ばしめぬ、其下膨なる頬の肉の今にもちぎれて落さうなるに、更に莞爾として微笑ふ時は、眦の邊に一種の可憐なる漣漲りて、誠に快然たる好男兒なりき。余は向き直りて彼等の談話に耳を貸しぬ。

其時彼女は莞爾やかにふりかくる情目の愛らしく、

あゝ左様でいらッしやいます歟、其でハ西京へは御保養でございますね、

言ひながら、更に得も言はれざる多情の愛敬を口元に溢しぬ、紳士は葉卷煙草の煙を客車の天井に向て吐ながら、

あゝ、左様です。東京も退屈おやから休暇中彼方に遊んで居やうと思ふて、

おや、左様で、其はまあ宜お樂しみでございますねへ、何と申しましてもれ遊びハ西京で御座ますよ、

あゝ左様ですかなあ、私も西京は餘り案内の方でもないが、此處に其先生が居るので

と巻煙草の先で同行の男を一寸示しながら、最も得意氣に打笑ひつゝ、

此人が其西京博士おやて、萬事此人の敎を請ふつもりで、

と言ひぬ、余は此時紳士の同行者の風を打見やりたるに、彼は默して唯微笑せるのみ、其風の紳士に對しては、何處となく扣目なるは、蓋し平生恩顧を被むるの人にやあるらん、彼女の愈莞爾やかに愛敬をふりまきつゝ、

あゝ左樣でございます歟、其ではもうお宿も何れへ歟お定りのでございませうね、

ホヽヽと愛敬笑を用なきになせば、紳士は悠然と腮の髯をかい撫ながら、

否宿はまだ何處とも定めんのぢやが、全体何處が宜でせうなあ、

言ひながら彼女の容貌を愛する如く、目も細やかに眺めつゝ打笑めり、彼女は尚一層莞爾やがに、例の婀娜めける原素の中甘き香の薫る調子にて、

おやまだお定になりませんので、其ならまあ如何でございませう、御滯留中は私の親戚方へお泊り下さいましては、精々氣を着させまするでございますが、

紳士は最早彼女に見惚つゝ、

左樣さなあ、其は何處へ泊ッても宜のぢやが、一体御身寄の家といふは何處ですな。

彼女は秋波にジッと紳士の貌を見て、

所は丸山でございますの、其にもう宿で温泉と料理とを致して居りますから、何事も御自由でございますよ其に他へお泊りになりましても、矢張お遊びは何道彼邊にお出になりませねばなりませぬが、

さう遊ばすと却て餘計の御散財です、其より敢手前方へお泊り下されば、精々勉强致させまする、其にお坐敷も見晴しの好所をわけさせますから、御保養には宜しうございますよ、西山から東山を見晴しまして、景色はもうそれは〳〵、京では手前方が一番でございます。

紳士の心は動けり、疑もなく其情目使のやさしかりし爲めに、

あゝ左樣歟。如何しやうのう君？

同伴者に相談したりき、同伴者は、

左樣でございますねへ、其は何れとも御隨意で、

紳士は暫時考へしが、

其では斯しやう歟、兎に角今日丈は此方のいふ所で遊ぶとして、氣に入たら其處へ逗留するし、若又氣に入らなかッたら晩まで〻歸るとして、兎に角案内を賴まう歟？

左樣ですね、其が上策でせうね、

と同伴者がいふ、紳士は滿足らしく彼女に向つて、

其では今日ハ兎に角、貴孃の談の家へ案内を願ふ事にしませう、

彼女ば斯と聞より愛敬の露ぼた〳〵と口元に溢しながら、

あゝ左樣でございます歟、其はまあ有難うございます、嘸喜ぶでございませう、其では貴君何卒御願

ひ申します、
と彼同伴者をもそらさず、やさしき愛敬で虜にしつゝ、扨又紳士に向ひて、
昨夜は貴君樣は岐阜のお泊りでございました歟、
紳士は煙草の灰をふるひ落しながら、
あゝ左樣です、長良川で鵜飼見物をやッたものぢやから、
おや鵜飼見物を、其はまあ好お樂しみでございましたねへ、あれも忽々お面白い遊びでございますよ、私も先年お客に伴られて參ッた事がありましたが、
と是より暫らくは鵜飼の談話のみなりしが、彼女は又、
西京は西京で又種々のお遊びがございます、祇園町邊には可愛らしい子供も大勢居ますから、ホゝゝ定めし御馴染もございませうねへ?
紳士は莞爾と打笑ひながら、
否、極めて野暮の方ぢやて、左樣いふ者は無方ぢやがね、
あら迂詐計り、お有のでございませうに、お隱になッて、ねへ貴君、お在のでございませう?
と笑ひながら同伴者に問ふ、同伴者も笑ひながら、
如何だ歟私も知りませんがね、

あら貴君迄お隱になッてホヽヽヽ、

愛敬笑をしながら一寸考へる風を見せたが、

また好のを見たてゝお取持致しませう、ホヽヽ、

と打笑ふ、紳士も輾然と磊落氣に笑ながら、

いや、其は是非賴まう、ねへ君、折角遊びに來たものぢやから、其方にも近附を拵へて置ねバ、全体誰が當時の流行子かね。

左樣でございますねへ、當時まあ評判の好のハ、花代樣、千歲樣、八重子樣等でございませう歟、皆好器量でございますよ、信度旦那樣の御氣ゞも入ますよホヽヽ

と打笑ひたるが總て此談話の間、彼女は例の親しむ樣な打解た言廻はし、と其得意の目使の妙術とに據りて、全く紳士の心を奪ひ去りしものと見えき、紳士も又打笑ひて、

否、藝子も左樣ぢやがの、貴孃に種々御世話になるで、今日は是非貴君にも一杯上ねば、のう田川君、

左樣ぢやあい歟?

左樣ですとも、是は是非お禮をせねば

と賛成すれば、紳士は愈滿足らしく、

其に我輩には藝子と呑むよりは、此方と飮んだ方が面白さうぢやから、アハ〱〱、

と磊落に言ひて大に笑ひき、此時彼女は多辯なる一瞥を紳士の方に送りしが、其瞥見の一矢は、思ふに空矢にてはあらざりしならん、余は總て此談話の間に於て、彼等の爲人を觀察したるが、紳士は疑もなく運命の愛子にして、其身の位置に滿足しつゝ愉快に世を送る人なるべく、然も胸襟洒落にして物に頓着せぬ風ありき彼女は又疑もなく自己が容貌の美を知り自己が交際術に妙を得たるを知り、常に場合の來る毎に其伎倆を現はして、之を幾分歟他人に誇り、又之を幾分歟我自愛心に誇りつゝ、以て幾分歟得意とするもの丶如く見えき、余は今彼女の爲人を仔細にするに及びて、其稼業の何なる歟想像したるが、終に待合若くは料理屋の女主人なるべしと思ひ至るに及びて、其懷しさも半を減じき、

此間汽車は一分時の猶豫もなく走りて、忽ち大垣の停車場へ着しぬ、窓を開て前面を見れば、大垣の城は百歩の間に巍然として雲に聳ゑつゝ立ちき、

嗚呼大垣城、大垣城！　此地是慶長の古戰場なり、東照公が一世の雄略を奮て、天下を一日に定めたるの關ヶ原は、實に此近傍に在るの一原野となす、而して大垣城は其戰鬪の實見者ならずや、曾て其名を史上に聞く、今吾來て是を見る、豈多少の感なからんや、抑大垣城、西に松の尾南宮山あり、北に岐阜赤坂あり、而して垂井其南を塞ぎ、清洲其東に逼る、西軍十七萬據て以て根據の地となしたるなり、此時に當りて東軍七萬五千赤坂に陣して相持して戰はず、互に其隙を伺ひき、已にして西軍出て關ヶ原に陣せり、是實に防禦の軍配なりとす、蓋し尾陽の地たる平野數十里、關ヶ原は、其西北平野の盡て、濃

州の山陵將に起らんとするの要地なり、其地勢已に東軍の西下を支ふ、西軍の出て關ヶ原に陣したるは、誠に天の約束の如し、此時に當りて西軍十二萬七千、東軍七萬五千、兵の多少を以てすれば、西多くして東少かりき、然れども東軍は常に進擊の位置に立ち、西軍は常に防禦の位置に立たるは何故ぞや、大將の器略同じからざればなるらん、然して地勢の又戰勢に從へりしも奇ならずや、慶長五年九月十五日兩軍關ヶ原の東に遭ふ、皷聲齊しく響て山河震動し、平野一面修羅の巷とありぬ、戰時を移して兩軍の勇士多くは屍を野に曝しぬれど、勝敗は未だ決せざりき、此時迄兩軍勝敗の運命を一手に握れる秀秋の一軍は、松の尾山頭皷を伏せ息を屛めて、此修羅塲を傍觀しつゝ敢て動ず、其樹間に隱見する旌旗は、恰も兩軍戰將の心をして寒からしめんが爲めに飜るものゝ如く翩々山風に飜りつゝありき、相圖の號砲は東軍の陣中にて放たれぬ・孺子義を忘れて德川に味方しぬ、勝敗は決しられたり、天下ハ德川氏の手に歸しぬ大垣の城は其譜代の郎等たる戸田重之に賜ハりぬ、爾來三百年、戸田家九曜の定紋は、威を大垣十万石の領内にふるひしも、今は世變り星遷りて、此城も無主人の一古城となり、尋ね來る好事の旅客をして、徒らに慶長の古を忍ばしむるのみ、

余は古の豪傑を思ふて坐ろに其英風を欽じつゝある中、汽車ハ早くも垂井の驛を過ぎて、關ヶ原の停車塲をさして走る、頭を四方に回らして秀秋の陣せる松の尾山は何處ぞ？　島津義弘の陣せる菩提山は何處ぞ？　正則が叱咤督戰の地は何處ぞ？　と尋ぬる中、忽ち車中の一人聲を放ていふ、彼處が家康の床几

塚なり、と余は之を聞くや直に窓より貌を出して見たれど、矢の如く走る汽車は、此時山の一角をめぐりて彼の指させる所を見せしめざるぞ遺恨なる、

此時に於て客車の中ハ囂々として談話の聲絶ゆる事なかりき、汽車は各所の停車場に於て舊乗客を送りては、更に新乗客を迎へつゝ西へ西へと走るなり　余は瞬間に變化する四方の風色に送り迎へられてゆく中、忽ち右方の山の一端、木の間の影よりきら〳〵として眼底に映じ來るものゝあるを認めぬ、是大なる池にして、汀の細波は靜に岸を洗ふて、水面恰も鏡の如く清らかなりき、余ハ彼女の臂を突て、

一寸々々御覧なさいよ、大きな池か有るから、

彼女は後を顧りみしが、忽ち高やかに打笑て、

あら池では有ません、湖水ですよ、琵琶の湖水ですよ、

余は驚きぬ、此處に湖水の在らんとは夢にも思ひ寄らざりければ、兩眼鏡を取出して其風色を見もてゆく中、忽ち眼前の山の巓に巍々として聳ゆる一の古城を見出しぬ、何といふ城なる歟と思ひて又彼女に向ひ、

一寸々々此城は何といふ城です、此城は

彼女は又ふりかへりみしが、

どの城、ホヽヽお城なぞはないでは有ません歟、

余は驚きぬ、今迄眼前にありし城の見えざれば、周章て四方を見廻はす時、忽ち遥なる山の巓に今見たる古城の影を見出しぬ、

あゝあの城ですよ、望遠鏡では餘り傍に見えたものだから一寸分らなかッたの、

あゝ彼お城、彼は彦根のお城です、好お城ですよ、どら一寸其遠目鏡を拜見、

余は彦根の城と聞きて心何となく波打ちぬ、是徳川の四天王赤鬼の古城歟と思へば百年の知己に遇ひたる心地したりき。

是よりは汽車湖水に添ふて走りゆく中、何時歟三四の停車塲をも後にして大津の驛へ着きぬ、彼女ハ窓より指して、彼ハ大津の町にして、彼處に見ゆるが平ケ嶽、近く見ゆるが比叡山、大津の町の町端の崖の半に見ゆる伽藍が、彼ぞ名題の三井寺なる、と敎ゆるにぞ、余が胸は踊る斗、辨慶の釣鐘、明智左馬助の湖水渡、栗生篠塚の勇戰怪力、種々の事胸中を往來して、往て見たくて見たくてならず、翼なき身を恨みたりき、既にして汽車ハ又湖水を後にして山間の村落に向て入ぬ、其時彼女は余に向ひて、

さあもう貴君とも御別れ申さなければなりませんねへ、此一ッ先が山科ですから。

と言ひぬ、余は此一言を聞て俄に總身水をかけられたるが如く、ぞッとして云ふべからざる寂しさを感じき、生れてより以來始て父母の膝下を離れて、身は遠く百里の外に來り、頭を回らせば千山万水故郷の空を隔てゝ見えず、我を圍繞する人を問へば、一人として知己なるはなく、皆是路上他鄕の客のみ、

幸にして舊知の如くやさしかりし彼女に遇ひたれば、是迄は大に心强かりしもの〻、今又此人にも別れねばならぬ歟、此人に別れて滊車を降りて後は、見し事もなき知らぬ土地、知らぬ鄉に來て、往し事なき伯父の家を尋ね〻ばならぬ事歟と思へば、流石に先の案じられて寂しさ心細さ言はん方もなし、斯思ひ來たれば彼女が余に對して傾けし情の、今更の樣に思はれて、坐ろに別れの惜しまる〻ぞ止み難なき。

默然としてさし俯向き居たれば、彼女はやさし氣に、

さあ、そろ〲仕度をなさいよ、帶を締直さなくても宜ござんす歟、何歟忘物の無樣に氣をお附なさいよ、さあ私が手傳て上ませう。

親切に注意をなしくれき、余は彼女の敎ゆるま〻に帶を締直し、身の邊を見廻はして取散らせる物を取まとめ、革袋に押入れて錠をおろし、仕度萬端整ふる內に、汽車は又大谷と乎云へる停車塲に止まり、其處にて若干の人をおろしつ又乘つして再び走せ出しぬ、其時彼女は、

さあ、今度こそは山科ですよ、愈もうお名殘だ、貴君東京へ歸ッたら私の家へ遊びに往らッしやいよ、佶度ですよ、忘れては厭ですよ。

ハイあがります。

と余は言ひたるが、寂しさに胸は押領せられ、悲しさに心は閉られて、物をいふさへ自由ならざりき、

唯心の中にて一分時も遲く汽車の着よかし、其走る事の牛の歩みよりもおそくあれよかしと願ひたれど、無情なる汽車は何の猶豫もなく走りて、忽ち山科の停車塲へ着しぬ、余は立上りて悄然として彼女に向ひつ、

其では御機嫌よう、いろ〳〵御世話になりました、

と言ふも口の內なりき、彼女は莞爾やかに笑ひながら、

左樣です歟、其では氣を附て往らッしやいよ、車を傭ふにも氣心のよさゝうな、貌のやさしさうな年寄が宜ござんすよ、馳るのは遲くつても間違がないから、其では御機嫌よう、

余は悄然として車を下りぬ、二三步步きて後背を顧みたるに、彼女は窓に凴りて余の後影を見送り居たるが、再び莞爾して、

左樣なら、

余も寂しき一笑を名殘に、

左樣なら、

其聲の未だ空中に消へざる中、汽車は黑煙を吐きて走出しぬ、嗚呼一瞬百里、惜しき名殘を如何にとやせん、余は惘然として走りゆく汽車の後影を見送りぬ。

見送りて汽車の影前頭の山影に消ゆるに及て、余は夢より覺たる人の如く、太き息をほッと吐きて、靜に停車場を出て、前なる茶店に入りて休みぬ、一碗の茶に喝ける喉を潤ほし、數個の菓子に餓たる腹を慰めて居たる所よ、彼方に客待し居たる四五人の車夫の中より、一人余の傍に進み寄りて、車へ召しませぬ歟とて勸めぬ、余は先づ左樣さねと言ひて、落附はらひし風を裝ひ、又此邊の地理にも明かなる風を裝ひつゝ、

乘ても宜が、私は醍醐の高林まで往のだから、高林へ往きつけの車があるなら其へ乘たいものだ。

あゝ高林樣迄、左樣だす歟、高林樣なら貴君、此邊で往きつけん者はおませんがな、もしおい與太よ、高林樣へ往きやはるお客が有るさかい、お主乘せて往にや惡からうわい。おい與太よ、

言ひかけしが後をふり向て、

何しくさるい。

と叫ぶ時彼方にて、

あゝ左樣かあ、

と言ふ聲聞えて、三十七八の元氣よき、然し正直さうな男走り來り。

貴君樣だす歟、高林樣へゆきやはりますのは、私與太といふて、高林樣へお出入しますさかい、何卒私車へお召しなすッて。

余は何事も思ひしよりは都合宜かりしと快く、

　左樣、其では恰度宜い、持てれ出で。

車夫は車を牽て來りぬ、余は此店の拂をすまして乘りうつれば、車は余を乘せたるまゝ村中の徑路をひた走りに走りぬ。

稻の穗の穰々とみのりて、風に波打つ蒼田の海を隔て、山陰に隱見する田家を右方に眺めつゝ、左方の片並樹の木の間影より、吹おろす風に面を吹せてゆくなれば、夏を忘るゝ涼しさに神氣の頓に爽やかなるを覺えぬ、斯りければ彼女に分れ來し憂の霧も、今は祖母一家の人を想像する爲めに消へゆき、彼等の慈顏を想像する每に、我を待つ前頭の喜笑は、曙の空の花の吾を照す如く思れぬれば、愉快の感ハ勃々として胸中に起り來りぬ、既にして車は醍醐なる祖母の家へ着きぬ、玄關に登りて賴のうむ！　余は高林一家の人より歡喜の聲を以て迎へられき、嗚呼旅行は憂い物面白いものなる哉。

余は祖母の家に在ること十日餘り、近江八景を始めとして、京大阪は申すに及ばず、住吉の社神戶の港より、須磨明石の邊をも見物して、其月の下旬に歸京したるが、先の日彼女に約したる言葉には反むきて、其家を訪ふ事ハ敢せざりき、然して此時より今に至る迄凡そ五年餘の星霜は經れども、都は廣し、東西南北の人ゆき來ふ途上彼女に遇ひたる事もなし、彼女は今も恙なきや否や、余は鐵路行を爲す每に未だ會て彼女を想ひ出さゞる事なし。

◉去年の雛　　　　漣山人

（一）

今日は彌生の三日なり。

京都染工會社長、越路鼎の次女小枝子は、まだ二八の少女盛りなれど、今日計りは主人役、兩親を初め親類の誰彼、さては仲好しの友達を招きて、手前料理の拙からぬに、世辭を餘所なる舌皷を打たして、甲斐々々しき働き振り、是ぞ正月に次いでの娯樂なりける。

小枝子の姉のお冬は、去年の夏の初めつ方、同じ會社の庶務を司どる、藤井保兵衛と云へる人の媒妁にて、今は東山大學の教授、理學士春日錠之助の妻と成れるが。去年の今日は同じく家に在りて、此處に娯樂を共にせしに。今年は小枝子一人の天下なれば、吾が爲に新たに購はれし、人形を初め調度の數々、姉に誇らんと思へばにや、お冬の許へは第一番に使をやりて、今日は朝からお出でをト招じぬ。さるに如何なる故障やありけん、正午過ぎても姿は見えず、待つに長き春の日も、はや暮近く成りけるにぞ、小子枝はや丶焦思初めて、罪も無き小間使を叱りつけ、車をもて迎ひにやらんと思ふ頃、漸くお冬は來たりしか。今は一家の妻たる身の、吾が家ながら他人なれば、まづ兩親の前に出で、此中打ち絶えて訪づれざりし、詫言など云ふ中も、小枝子は待ち兼ねて其塲へ驅け來り、其手を取て引立てるが如く、吾

が居間へと連れ行きぬ。

居間は六疊計りなれど、今日を晴れと飾り立てし雛段は、一間の床に溢るゝ計り。五人囃子三人上戸、銚子島臺持ちたる官女は、去年ありしに變らねど。內裏雛を初めとして、右大臣左大臣、左近の櫻右近の橘、さては花車曳く乙女など、皆新しく出來たるにぞ、姉は側近く進み寄りて、

(冬)まア大變好いのが出來たとねエ

と、褒むれば小枝子は得意顏に、

(小)好いでしやう。みんな今年買つて頂いたのよ。姉さん羨ましかなくッて?(冬)ほんとに羨ましいよ……もう一遍お前の樣に成て見たいネー。

と云ふ間に小枝子は、メレンス友染の座蒲團を、宣德の火鉢の側へ敷きながら、

(小)まア姉さんお座りなさいナ!ほんとに今日は晚かつたとねエ。妾はお迎ひに上やうと思つてた處よ。(冬)妾も早く來たいと思つたけど、生憎今日は旦那が、四時からお出ましに成る處があるもんだから、それ迄出る譯にも行かないで……(小)さう何處へ?(冬)何だか學校の方の送別會が、鳥居本であるんだとさ。(小)それぢやア姉さん、今日は、ゆつくり仕ても可いんでしやう。(冬)あんまり悠然も出來ないよ。(小)一晚位泊まつたッて可いぢやありませんか!(冬)どうも左樣は行かないよ。

(小)アラ何故エ?どうせ春日さんがお留守なんぢやありませんか。(冬)旦那がお留守だッて……阿母

樣も居らつしやれば、信ちやんも待てるから。（小）それぢやア信ちやんも連れて來れば可いのに。（冬）妾も左樣思つたけども、何だかお友達と面白さうに遊んで居たから、お土産を持て來ると約束して、妾丈出て來たのだよ。（小）左樣……ぢや仕方が無い……早く御馳走でもあげましやう。姉さんが早く來ないもんだから、皆殘り物に成てしまつたワ……ドレ待て居らつしやいよ。

小枝子の急いで次へ行きしは、膳部の用意と覺えたり。

後にお冬は、用なき儘に尙雛段を眺めてありしが、不圖其下に置きたる箱に目をつけ、やがて引き寄せて開き見れば、中には去年用ひし雛の、惜し氣も無く押し込めてあり。

思ひ出せば此雛こそまだ、東京に住ひし頃、自己が十四の折の節句に、十軒店へ乳母と共にゆきて、自ら好みて求めし物。それより去年廿才に成る迄、七年が程は年々に飾りて、いとも樂しく傅きしものを、今年は新しき物に見替られて、かく箱の中に入れられたる儘、塵さへ拂はれぬ疎ましさよ。雛もし心あるならば、嘸な吾をや恨むらん。其恨まるゝ吾が身さへ、今は汝にも似たる哉、實に恨めしきは浮世ぞと、お冬は坐ろに胸迫まり、人目無ければ襦袢の袖に、そと拭く涙ぞいぢらしき。

（二）

三五に近き月魂は、今しも寢姿山の春を越へて、拜殿の棟を照らせど、夕の煙靄立ち込めて、まだ枝計りの櫻の樹立、吉野紙もて掩ふへる如く。朧は癖の春の夜も、はや八時過ぎと覺しき頃、誰とも知らず

只一人、八坂神社の階段の下に、祈誓を凝らす者ありけり。

(甲)オイ乙倉！彼處に誰か居るぜ。(乙)ドレ……成る程誰か拜んで居る樣だネ……

と、拜殿の此方に佇みて、耳語き合ふ二人の男。一人の大縞の二重マントに、茶の山高帽子を頂き。今一人の大島紬の書生羽織に、白縮緬の襟卷をして黒の山高帽子を被りたるが、何れも手に笹折を下げたるは、鳥居本か中村樓の、宴會の歸途と見えたり。

(乙)甲村！もつと側へ行て見やうぢやないか、どうも婦人らしいぜ。(甲)婦人と云ふと直ぐそれだから困るよ。(乙)と云ふ御自分も、あんまり反對論者の方でもない癖に。

云ふ中に二人の男は、ブラ〳〵と堂の前まで來たりしかど、元より帽だに取らうともせず。尚一心に拜み居る女の、横顏をヂロ〳〵眺め居りしが。甲村は何思ひけん、急ぎ乙倉のマントを引きて、二三間行き過ぎつゝ。

(甲)君！あの婦人知つとるか。(乙)いゝや知らん。(甲)何うも見た樣な奴だと思つたが、あれはソレ春日の家の下婢だぜ。(乙)春日の？下婢？(甲)あゝ(乙)何うして知てる？(甲)春日の家へ尋ねて行くと、能く茶を持て來る奴だ。(乙)フーン、僕はまだ行つた事無いから知らんワ。(甲)然し何の爲に信心しとるんだらう。(乙)行て聞いて見るが好いや。(甲)馬鹿々々しい、其樣な事が尋ねられるものか。

(乙)春日と云へば……何うしたらう今夜は……まだ居つたかねエ？(甲)ナニ先刻僕が一所に歸らうと

云つたら、車が待てるから失敬するなんて、甘く逃げて仕舞ひよつた。(乙)妻か美麗だと云ふから、それも無理は無いな。(甲)處が大違ひなんだ。君はまだ彼の事件を知らんのか。(乙)彼の事件とは?(甲)春日の外妾事件。(乙)えッ、春日の外妾?其樣な者があるのか。(甲)あるのか處の騷ぎじやないさ。(乙)へー……此は聞きものだネ。あの偏人にして外妾ありとは。(甲)だから思案の外と云ふのだ。彼がまだ獨身で居つた頃、元より木石ならぬ身ので、月々何圓と約束を極めて、一週間に一度宛通つて來女があつたと思召せ。(乙)ウン〳〵(甲)其處で去年の夏、今の妻君を貰ふに着いて、一端緣は切つたものゝ、兎角男は未練なもので、元木に優る裏木無しと云ふ處から、此頃に成て又燒木杭に火が付いて、また以前の捻が戻つたのさ。(乙)で其の外妾は何處に居るんだ?(甲)直き此近所の新門前に小さな家を一軒借りて、婆さんを一人着けて、此が東京で云へば、船板塀に見越しの松と云ふ寸法なんだが。此處だから左樣意氣にや行かないが、兎に角味付海苔の樣に成て居るのだ。(乙)味付海苔とは?(甲)解らん男だな、圍ひ物に成つて居ると云ふ事だネ。(乙)成る程、然しそれは不思議だネ。いかにも不思議だネ。(甲)何も左う不思議がる事も無いぢやないか。(乙)だつて春日に限つてゝ、決して其樣な事は無いと信じて居たんだが……(甲)だから人は見掛けに依らないよ。君の樣な野暮な男が、先刻都々一を遣つたことを思へば。(乙)けしからん事を。——然し妻君が氣の毒ぢやないか。(甲)嫌に同感を起すネ。(乙)でも可愛さうぢや無いか。(甲)可愛さうを云ひ出した日には、中々此計りぢや

無いんだよ。(乙)まだ他にあるのか。(甲)まづ第一に彼處の姑と云ふのが、尋常一樣世間並仕入の姑ぢやァ無いんだから子。(乙)へー、彌々出でゝ彌々氣の毒だネ。

と、語り合ふ中二人の男は、はや隨身門より祇園町へ出でしが。乙倉が小石に跪きて下駄を飛ばし、急いで後を振り向く途端。只見れば二間程後より、歩行いて來る一人の女は、先刻八坂の神前にて、見掛し者に相違無きよ、乙倉は驚きて小聲に成り、

(乙)叱ッ！叱ッ！(甲)何だ？

甲村も見かへりて――南無三！首を縮めぬ。

(三)

故鄕は忘じ難しとかや。世界に名所は數あるとも、我が家ほど好き處あるまじ。お冬は上巳の祝に呼ばれて、今日は親里へ歸りけるが、慈悲に富みたる父母や、幼きより共に育ちて、交情の好かりし妹とも、かく一堂に集まりて、睦み語らふ其樂しさ、底意地惡き姑や、氣六かしき夫の間に在りて、嫁とは云へど其實ハ人質にでも取られし如き、面白からぬ日頃に比べてハ、是ぞ眞の極樂淨土。出來る事なら此儘に、歸りとも無く思へども、左うしてハ居られぬ身の上。夫の留守を幸ひに、家を明けるは不届と、また睨まれるが恐ろしさに、心ならずも暇を告げて、歸らんとすれば妹は又、其袂を確と捕へ

(小)アラ姉さん！まだ可いぢやありませんか！先刻八時打つた許りだワ……

と、執拗るが如く留むるも、姉が日頃の心勞を知れば、せめては斯る折にこそ、充分保養をさせんものと、思ふ心の眞實なれ。

其眞心は嬉しけれど、時刻移れば移るだけ、家の首尾の氣遣はしければ、今宵は兎も角も早く歸りて、重ねて機會を得たらん時、ゆる〳〵遊びに來るべしと、止められる丈悲しき袂を、思ひ切て振り拂ひはや次の間へ立出づれば、父も母も後に續きて、送り出さんと立上るを、お寒いのに入らぬ事ト、斷り云ふて座に直らせ、小枝子及び下婢と共に玄關へ出でゝ見れば、何時の間にやら用意の車、はや横樣に据ゑあるにぞ、お冬は小枝子を返り見て、

（冬）また車をさう云つてくれたの、ほんとにお氣の毒だネー。（小）何ですネー其樣な遠慮が入るもんですか。（冬）それでは何卒阿父樣にも阿母樣にも、宜敷申上げて頂戴よ。（小）どうか皆さんへもよろしく今度來る時は信ちやんも御一所に。（冬）信ちやんと云へば先刻のお土産は（小）もう皆車の中へ入れて置きました。（冬）それは憚りだつたネ。それでは左樣なら！（小）左樣なら！

下婢が持ちたる雪燈の火の、玄關の障子に消ゆる頃、お冬の車は門を出づれば。後は月のみ獨り澄て、軒に聳えし松の幹、敷臺の上に影面白く、大蛇の横はふ如くなり。

中立賣たる越路の家を出でゝ、途を走ると十分餘り、車はやがて河原町なる、春日の家の門に止まりぬ。今三條の通りにて家邊の時計臺を眺めし時、針は九時に間も無かりき。さては良人も歸りてやわらん、

甥の信三も待ち遠うさに、今頃はお巻を捕へて、無理計り云ふてや居らん。

そは兎も角も第一に、姑殿の機嫌の程ころ、心元無き限なれと、思へバ今更胸安からで、暫時逡巡ふ心も知らず。車夫は表より大聲に、

(車)奥樣のお歸りでムいます!

と、云へば内より戸を明けて、「オ、お歸り遊ばせ!と、辭儀する下婢のお巻の後に、「ヤア叔母さんが歸つて來たと、さも嬉しげに聲立つるは、まだ六才の信三なり。

お冬は見るより笑顔を作りて、

(冬)オヤ信ちやん、よくまア温順しく待て居ましたねエ。お土産を澤山貰つて來ましたよ。

と云へばお巻も傍より、

(巻)ほんとに温和でムいましたよ。何卒お土産を澤山お上げ遊ばして下さいまし。

と、打つ合槌に信三は、お冬の袖に縋りながら、甘ゆる樣に身を搖振りて、

(信)叔母さん、早くさアー(冬)ホヽヽヽまだ家へも這入らない中から……サ今出して上げますよ。巻や!車の中に風呂敷包があつたから。(巻)ハイ……此でムいましやう。オヽ〳〵大層重たうムいますと、何でムいましやう?妾も頂き度いものでムいますネ。(信)誰が遣るもんか!(巻)アラあんな憎らしい事。(冬)ホヽヽヽ、信ちやんも慾張だネー。

折から奥の一間にて、ヱヘンと聞ゆる咳の聲。さては阿母様も御目醒めかと、小聲で問へば點頭くれ卷——「シテ旦那様ハ？」「まだでムいます」。

（四）

お冬はやがて奥の間なる、姑お篠の許へ來て、「只今歸りました」と一禮すれば、今まで半身を炬燵に埋めて、用なきまゝに新聞の小說を、繰り返して讀み居しお篠は、鼈甲緣の目鏡越しに、此方をヂロリと見て、

（篠）オヤれ歸りかイ、大分御悠然だッたねエ。（冬）ハイ、もつと早く歸らうと思ひましたけども、つひ種々止められまして。（篠）然しまア……嘸面白い事だッたらう。

と云ひたるまゝにて又た新聞を見る。其の間にお冬ハ手速く風呂敷包を解き、中より小形の重箱を取り出して、

（冬）アノ此ハ殘り物で失禮ですけども、まだ手を付けないのでムいますから、阿母様にお上げ申して呉れと、妹が申しまして……

と云ひつゝお篠の前へ出すを、お篠ハ少しにぢり寄つて、重箱の蓋を取つて見れば、中は卷玉子に鯛の小串、さては蒲鉾に豆慈姑など、一杯に詰めてあるに、お篠はニッコリ笑ひながら、

（篠）まア此は結搆な御馳走だと。（冬）何でムいますか、妹が獨りで拵へたのでムいますから、どうせ

お口にも合ひますまいが。(篠)いゝえ大層好く出來て居るよ、まア明日の樂みにして置きましやう。ト、再び蓋をして傍へ押しやれば、信三はまたお冬の肩に取り着きて、

(信)叔母さん僕のお土產は未だア？(冬)ホヽヽ多忙い事！ドレそれぢやア信ちやんにも上げましやうか。

と、云ひつゝ次の間へ出で行けば、其後を見送りてお篠はそつと重箱を引き寄せ、中より豆慈姑を一個摘み出して、手早く口へ投げ込みぬ。

お冬はまた茶の間へ戾り、付き纏ふ信三には、土產にとて持ち歸りし、美しき雛菓子と、他に奇麗なる繪本二三冊、是れ小枝子からとて與ふれば、信三はさも嬉し氣にそれを受け取り、洋燈の下へ持ち行きて彼を捻り是を弄び、更に餘念も無き体に、お冬は思はず莞爾と笑みしが、お卷がお更衣をと云ふに心付き、やがて納戶の方へ來りぬ。

此時お冬はまたお卷に向ひ、

(冬)もう九時は過ぎたらうネ。(卷)ハイ只今打ちましてムいます。(冬)まだお歸宅は無いのかネー。

(卷)どうせお晚うムいましやう。(冬)旦那樣がお歸宅が無いと、阿母樣が何時までもお休寢にならないから……

ト呟く樣に云ひつゝも、黑縮緬の羽織を滑べらす樣に脫げば。お卷はそれを取て疊み掛け、一寸後を見

返つて小聲になり、「アノ奥樣！」と樣子あり氣に呼び掛るに。お冬は帶留の金物を外づしながら「何だエ？」と振り向く其顏、薄暗い行燈の火影に、一入窶れて見ゆるを、お巻は暫時打守りしが、

(巻)申しましやうか申しますまいか。(冬)何だねエをかしな！用があるならお云ひなね。(巻)でも又御心配遊ばすと……(冬)心配も此上に仕やうがないから、かまはない云ッて御覧な！(巻)先程 妾がネ、御隱居樣の御用で繩手まで參りましたから、ちよつくら八坂樣へお參詣をして歸り途に……(冬)其歸途に何うしたの？(巻)何でも矢張り旦那樣の學校の方に違ひ無いんで厶いますがネ、妙な事を聞いたんで厶いますよ。(冬)左樣……何樣な事を？(巻)アノ……申しても宜敷う厶いますか知ら。(冬)何だねエ、誰も居やしないから、早くお云ひな！

お冬は流石に心に懸れば、帶を解き掛けたるまゝ身を屈めて、樣子を聞かんと促す折から。次の間より例の信三、目を摺り乍ら走りよつて、

(信)叔母さん僕アもう寢るよ

と云ふに驚きてまた立上り、

(冬)それおやア少し待て頂戴！今着物を着更へて仕舞つたら、直ぐに寢かしてあげますよ。(信)早くよう、(巻)さうお急き遊ばしたつて、叔母樣はまだお更衣で厶いますもの。

と云ふ間も堪え兼ねてか、信三は其場へゴロリと平倒るに、お巻は摺り寄つてまた抱き起し、

(卷)信ちやま、如何遊ばしたんでムいますネ！叔母樣がお歸り遊ばしたら、急にお催眠にお成り遊ばしたんですか。

と、云へども答へず他愛も無き体。お卷はお冬と顏見合せて、

(卷)どうでムいます、此通り！(冬)ほんとに邪氣の無いものだねエ。

(五)

信三の正体無き体に、お冬は又お卷に向ひ、重ねて仔細を問はんとする時。生憎奥に手を鳴らす音して、れ篠が人を呼ぶ樣子に、代りて行くべき者もあらねば、れ卷は餘儀なく立上りて、奥の間へ馳せ行き見れば、れ篠は炬燵に取り付きたるまゝ、

(篠)お冬は何をして居る？との尋問。お卷は答へて(卷)ハイあの只今お更衣を………ト皆まで聞かず

(篠)衣服を着更へる位に、何時まで掛つて居るんだらう……それが濟んだら此處へ來て、肩を叩いて貰ひ度いと云つておくれ！(卷)ハイ……それにあの信ちやまが、只今れ休寢遊ばしますので、中々お離し遊ばしますまい。妾で宜ろしければ……。

トさも氣の毒さうに云へば、お篠は稍不興顏なりしが。常から叔母を太く慕ひて、其手枕にあらざれば、眠らぬと云ふ信三の事ゆゑ、憖じ其氣に逆ひて泣き立てられても五月蠅しと、澁々ながらお卷に向ひ。

(篠)そんなら信の寝付くまで、お前代りに叩いてお呉れ！

と、云ふにお卷も迷惑ながら、是も奥様の代理ならバト、覺束なくも進みより、年は寄れども骨太さ、お篠が肩を取らんとすれば、お篠は急ぎ見返りて、

(篠)お前、手は清潔かイ？

と、聞くも衣服を汚されまじと、庇護ふ根性の卑しさに、お卷は心中をかしけれど態と言葉に畏みて、「先程お風呂を頂きましたが」と云へば、「それなら宜敷いけれども」と、安心して揉ませるお篠。切り下げにせし胡摩塩頭の、はやゆら〳〵と動き初めぬ。

此方のお冬は只獨り、はや衣物を着更へ了りて、脱ぎ棄てたる小袖をも、自ら疊まんとなせしかど。信三がまた目を醒まして、傍より急き立つるに、本意無くも其儘にして、信三と共に寝間へ行く時、不圖奥の方を見れば、障紙に映る二人の影。さては阿母様の例のお癖、「肩を揉んで！」が初まりしか、早く行かねば又お小言、ドレ急いで此兒を寝かして、卷に代つてやりましよと、やがて信三を捕へて、引き剝ぐ様に寝衣と着更へさせ、寝床の中へ横様に抱へ込めば、今までさしも催眠がりたる信三、如何なる拍子か俄に吾に復りて、

(信)叔母さん、何かお話して頂戴な！(冬)そんな事云はずに、今夜は早くお休寝なさい！平常より餘程晩いんですよ。(信)だつてお話しなくツちやア眠られないもの。(冬)アラれかしな！先刻はあんな

に眠がつて居ながら、今に成たら又其様な事……(信)ウーン僕はもウ眠かァ無い……(冬)困つたとネー。今夜に限つて……其様な意地の悪い事。(信)だッてれ話が無くちやア……よう叔母さん！
と信三、いつかな聞かざれば、お冬は是非なく肱枕したるまゝにて、古きお伽話をば、語り聞かせいするものゝ、心にかゝるはれ巻の言葉、氣に成るは姑の機嫌、彼を思ひ是を案じて、流石に胸も安からず、咄す話も自から、身に染みて聞えぬを。それと悟らぬ頑是無さ、信三はお冬の手を取りて「それから叔母さん如何したの」と、途切れし話の催促されても、吾から話の筋を忘れて、又繰返せば彼方は焦思出し、焦思れば尚も眼は冴へて、今は中々寝入らぬ氣色に、常は可愛き信三も、今宵計りは手に餘りて、五月蠅く思ふも道理なり。
折から奥より彼のお巻は、急はしく馳け來たり、
(巻)奥様何卒れ出で遊ばして！
と、云へばさてこそ御催促と、はや胸を轟かせつゝれ冬は半ば身を起し、
(冬)何だイ？(巻)アノ只今までれ肩を揉んで居りましたが……妾では御氣に召しませんので……(冬)今妾が行くからいゝよ。
と、出でんとすれば信三は袂を攫んで
(信)行ちや　嫌ア！

（六）

はや强泣かる信三に、お冬もほと〳〵持て餘せば、お卷は見兼ねて進みより、（卷）信ちやま、まア御怜悧で厶いますと。叔母樣は今祖母樣の御召しで厶いますから、早く離してお上げ遊ばせ。其代りに卷が、面白いお話をしてあげましやう子……アレあの通り。信ちやまは御怜悧で厶いますから、直ぐお離し遊ばしますよ。ト詐せど賺せど聞かばこそ、はや自己も立上りて、抱くが如く取り縋り、（信）嫌だ嫌だ、行ちやア嫌だ、ト日頃に似合はぬ無理云も、催眠がさせる所業とは知れど、叱り懲す事もならず、暫時爭ふ聲を聞付け、はや奥の間を立出で丶、お篠は此場へ來たりしが。斯くと見るより眼を怒らし、

（篠）コレ信！何を云ひます……

ト、大喝一聲睨み付くれば、常からこわき祖母の一言に、さすがの信三も腰を折られ、澁々ながら袂を離せば。お卷は隙かさず摺り寄つて、（卷）さ、もう温和で厶いますよ。もうお强泣りは致しません。サ丶卷と一所にお休寢遊ばせ、ト甲斐々々しく介抱するに、信三はまだ膨脹ながらも、其儘元の寢床に入れば。お冬は尙心に掛るま丶、二度計り後を振り向きつ丶、お篠が後に從ひぬ。屠所の羊や是ならん。

お篠は自己が居間へ歸りて、お冬に肩を揉ませながらも、はや底に針ある言葉、

（篠）信があんなに無理を云ふのも、つまりお前が惡い癖を付たからだよ。寢る時には卷を付けて置けばい丶ものを、お前が……少しでも樂をしやうと思つて、信をダシに使つて早く寢る事ばつかり考へ

るもんだから、仕舞にや信があんなに成てしまふのだ。あれが眞實のお前の兒で、添乳をしなけりや寢られないと云ふなら知らんこと、もう信だッて六才ぢやないか、一人で寢られない事もあるまい。それをあんなに仕てしまつたのは、信も信だが……第一お前の躾が惡いからだよ。

さりとは飛んだ八ッ當りと、思へど冬はヂッと堪へて、（冬）妾が行き屆きませんからト、素直に詫るいぢらしさ！

* * * * * * * * * * * * *

新門前も繩手を入りて、はや知恩院近き處に、小やかなる二階作り。表は小豆色に塗りあげたる、お定まりの格子戸なるが。それに續きし板塀の中は、二坪計りの庭かと覺しく、見越しの柳の糸を垂れて、立寄る人の頰を撫づべし。

夜も九時に近き頃、此處に一臺の車を付けさせ、降り立ちたる一人の紳士。茶無地の二重マントに、角張りたる黑の高帽子、月光に確とは見わねど、年頃は廿八九、顏は稍々瘦形なるが、窪みたる目に金緣の目鏡を掛けて、鼻下には薄き髭さへ見ゐぬ。

車夫はやがて格子の邊へ進み寄りて、トン〳〵と二ッ計り叩き、內より明けるを待つ間に。紳士は懷中より小さき紙包を取り出し、

（紳）此を取て置け！

と車夫に渡せば、車夫は額の汗を拭きながら、

(車)又頂きますのでムいますか……先刻も飯料を頂きまして。(紳)あれはあれ、是は是だ。(車)へ、ゝ、どうも恐入りますナ。(紳)待てる間に一杯遣るがいゝ。(車)へイどうも難有うムいます。

と、問答半ばへ格子を明けて、中より手燭を差し出せしは、五十計りの太り肉の婆、

(婆)オヤ入らつしやいまし。(紳)端書は届いたか(婆)へイ届きましてムいますとも。お光さんも先刻から……ホヽヽ。それに今車の音が致しましたから、大方旦那様だらうと存じて居りました。(紳)そんなら戸でも開けて置けばよいに。(婆)處が此頃は物騒でムいましてネ、此間も貴郎、妾の庭履を取られましたんでムいますよ。(紳)ハヽヽそれは氣の毒だッたなア。

云ひつゝ紳士は奥へ通れば。婆は又車夫に向ひ、

(婆)千どん毎度御苦勞さま、此方へ這入て一服お遣んなさい!

(七)

此紳士を誰とかなす、是ぞ彼の理學士春日錠之助にして、今宵鳥居本の宴會の歸途、新門前なる妾宅を、そと訪づれ來りしなりける。

妾は其名をお光と云ひ、岡崎邊の植木屋の娘にて、以前は麩屋町の大黒屋(旅宿)に、給事女を勤めし者なるが。春日が此地へ來りし當座、獨り此處に身を置きて、三月計りを送りける中、三度の食の給事よ

り、朝夕寢床の揚卸し、さては衣服の縫ひ繕ひ、出勤の前に外套を着せ掛け、散歩の後の羽織を疊むなど、吾一人に引請けて、世話をなしたる甲斐々々しさに。元來物堅き春日なれど、いつか愛惜しと思ひ初めしが。吾に意あれば彼方も動き、桃花を誘ふ流水の、浮きたる戀にあらねども、不圖馴れ染しをそも〳〵にて、それより春日は國許より、例の養母お篠を迎へて、一家を搆ふる事となりし後も、兎角お光の懷しさに、忍びて互ひに逢ひたりしが。かくてハ心に任せねば、思ひ切て母にも打ち明け、さて私も獨身では、何かにつけて不自由勝、さりとて年寄られた母樣を、お使ひ申すも氣辛勞き故、似合はしき妻の見當るまで、彼の女を妾となし度し、それも我家に置ては、世間の口も五月蠅きゆゑ、日を定めて通はせなば、如何なものぞと相談せしに。母も一時は頭を振りしが、新地や島原へ現を拔かして、大切な金より生血まで、吸取られるよりは優であらう、殊に頑固な悴めが、其れ程迄に惚れた女、滅多に間違はあるまいと、漸うに得心して、後は一週間に一度宛、通ばせる事となりしが。元より如才無きお光のヿゆゑ、早くもお篠の氣を呑み込み、兎角は是から先に卷き込むが、味方將來の勝利なるべしと、

楠殿も及ばぬ軍畧。それより後は來る度に、お篠の口に合ひさうなものを、蝦で鯛釣る土産の餌。春日の方は次にしても、まづお篠にはチヤホヤと、優しく仕向ける胸の中、元より企謀のありとも知らず、慾深けれど淺墓な、お篠は見事其手に乘り、思ふたに似ぬいゝ、しほらしさよと、果は自己も惚れ込みて、或る時は悴に向ひ、なる程其方の眼鏡は感心、あれなら嫁にしたりとて、微塵恥かしい事は無いが、只身

元が今一ト息と、其一點に二の足を踏みて世は儘ならぬものじやなト、今更愚痴を飜すもをかし。

かくして半年餘は打ち過ぎ、去年の春となりけるに、同郷なる藤井保兵衛が、或る時態々尋ね來て、四方山の話の末、私が勤める染工會社の、社長に一人の娘があるが。容貌は美し氣質は好し、其上惣領の事なれバ、支度は充分にするとの話、何と貰ふ氣は無いかト、善い事づくめの縁談に、春日も稍々心動けば、お篠は何れ扨て置きても、其第三の支度の段が、滅法自分の氣に入りしより、丁度此方も探せし處、何分頼む頼みますると、掌を合はさぬ計りの喜悦に、保兵衛グッと呑み込みて、直樣先方へ走り行き。男は學士の肩書ありて、今東山大學でも、敎頭に次ぐ敎授の筆頭。月給は八十圓取り。只一人の母ハあれど、至て機嫌の取り好い女、其他に小舅は學士が兄の遺兒、其母が病氣にて、永らく東京の病院にある爲め、餘議なく此方に預れども、元より六才の男兒なれバ、少しは世話も燒けるならんが、邪魔に成程の者でも無と、是も不味からぬ仲人口。常から信切な保兵衛の事ゆゑ、よもや掛直はあるまいと、先方でも最早承諾なし、遂に其年の五月の初め、芽出度婚姻調ひて、迎へ取りしは今の妻君、越路の女のお冬なりけり。

されども春日は何思ひけん、包みて此事をお光に語らず、表向き手も切らで、体よく遠ざけんとなしけるより。お光はやがて之を知りて、太く腹を立てけれども荒ら立てゝは後の爲めならずと、態と殊勝氣に故障も云はず。只六尺に餘る書狀を寄せて、まづ初めに此度の結婚を、薄氣味惡く思はするまで、詞

を盡して賀びたる末、其芽出度さに引かへて妾ハ今ぞ捨小舟、思ひの淵に漂ひて、寄る邊無き身を喞つのみ、せめては君のお姿を、餘所ながら見參らせ度く、御住居近くさまよへば、叉生憎に彼の人と、戀しき君の睦まじく、語らひたまふ姿を見てはいとゞ思の増さるのみなど、筆に委せて怨じたるに。元より未練は男の常、心の駒はムラ〳〵と狂ひ出で、なさずもがあの返事をば、直ちに遣りて樣々に辨解なし尚は憤を解かんため、私かに餘所にて忍び逢ひたる後、遂に相談を調へて、わが月給の四分一を手當に、此處ゑ圍ひ置く事とはなりぬ。

さりながら初めの程は、珍らしきまゝにれ冬をも可愛がりて、流石に足繁くは通はざりしが。慣るゝにつれてお冬が心の、飽くまでも温和過ぎて、世辭も愛想も無きに比べては、痒い處に手の屆きて、言葉に味あるお光の方、遙に優りて面白ければ、遂にはお冬を餘所になし、機會さへあれバ此處へ來て、時にハ一夜を明して歸りぬ。

（八）

「オヤ入らつしやいまし」と、奥より立ち出でしハお光なり。年はまだ廿才を越えざるべし。今宵は春日の來ると云ふ事、兼て相圖のありしまゝに、化粧も心して施せしにや、さらでも白き膚の、更に雪を欺かん計りなるが。眼の端のみホンノリと、芙蓉色を帶びて一ト際美し。髮はやゝ薄けれども、東京風の婀娜なる島田に結ひ上げて、水も滴らん計りなり。身には半

襟の付きたる、赤縞の秩父の綿入に、更紗形の下着を重ね、上には利休茶の縮緬の羽織、是は京風に丈の短きを着たるが。さして美人と云ふにはあらねど、飽まで愛らしき其口元と、眷のスラリとして衣紋付きの好が、此女の身上と知られぬ。

お光は立ちたるまゝに一寸會釋し、進み寄つて春日の手より帽子を受け取れば、春日は尙外套を着たるまゝ、長火鉢の側へ蹲踞るを、追ひ付く樣に後へ來て、

(光)貴郞何ですネ、外套召したなりで。(春)待つて吳れ！今剝がれると寒い。(光)お寒ければ丹前を上げますはネ……

云ひつゝ次の間の簞笥の中より、以前はお光の衣服かと覺しき、大縞の糸織の丹前を取り出し、それを小脇に抱たるまゝ、春日の外套を後より脫がせ、

(光)序にお羽織もお取りなさいな！(春)まるで追剝だな。(光)其代り好い物を上げますは子。と、春日が羽織を脫ぎたる後へ、持ちたる丹前をフハリと着せかけ、橫から顏を覗き込みながら、

(光)何うです、これでも寒うムいますか。

と、ニツコリ笑つて肩を抱き占むれば、春日はその機勢にグナリと安樂を組んで、

(春)もう宜敷い……コレ重い、放さんかイ！(光)ホヽヽ恐い事！

其間に婆は表より這入り來り、改めて春日に一禮なしつゝ、

(婆)入らつしやいまし。今晩は大層御機嫌で厶いますネ。あの是を千吉どんが、お宅へ參るので厶いますか一寸伺つて見て呉れッて……

と、料理を入れたる笹折を出せば、お光は春日の答を待たず、

(光)何だネ！此樣な處へ持て來なくッても可いよ。お家へ持て入らつしやるんだネ。ネ！貴郎！

と、妙に力を入れて云へば、春日は辨解する樣に、

(春)イヤそんな物自家へ持つて行くには及ばん此處で開けて喰つちまへ！(光)其樣な事あさらずに、矢張りお家へ持ていらつしやいましよ。ネ貴郎……お家にお上げなさる方があるでしやう。(春)馬鹿云へ！(光)アラをかしく氣を廻はして！妾は阿母樣の事を申すんで厶いますよ。是でもれ家の阿母樣に上げて御覽なさい、何樣にお嬉び遊ばすか知れませんよ。

と、云へば婆も早呑込み、

(婆)ほんとにお年下の阿母樣にお上げ遊ばしましたら……(光)何だネ餘計な事。(婆)ホヽ、是は不調法。(光)何でもいゝからそれは車夫さんの方へ返して、早く二階をちやんとしてお呉れ！(婆)ヘイ・ヘイ。

婆はとつかわ出でゝ行く。其間にお光は火鉢の向ふに陣を搆へ、茶を入れて春日に進むれば、春日はそれを取つて一ト息に呑み干し、「もう一杯」と出すを、お光は持たしたまゝに酌きながら、

(光)大層今夜はいけたと見えますネ。(春)ウン吾も幹事の仲間だツたもんだから、ツイ後まで殘されて。(光)それにしちやアお早いぢやありませんか。(春)まだ他の奴は殘つて、是から万亭へ行くとか云ッて、頻りに騒いで居つたが、吾丈そつと拔けて來たのさ。(光)など丶甘くれつしやるよ。(春)ナニ嘘ぢや無いぞ。(光)そんな實のある貴郎なら好いけれども。(春)どうして吾が不實だ?(光)妾をだしぬいて御妻君なんぞ……(春)又あの事か、もう眞平だ。

此時婆は二階より下りて、

(婆)もう宜數う厶いますよ。

(九)

總して人の妻たる者の、其姑舅の邪見なると、其良人の無情と、何れか辛きと尋ぬるに、如何ほど姑舅の邪見なりとも、良人の無情には勝るべし。況して姑舅の邪見なる時は、良人は大方優しきものにて、隱になりてハ彼是と、其憂苦を慰むれば、却て嬉しき事もあれど、一生連れ添ふ良人に好かれで、何樂しみに日を送らんと、去る細君の語られき。

玆に春日の妻お冬は、如何なる不運の星の下に、生を此世にや得たりけん。邪見なる姑と、無情なる良人とを、二つ揃へて纖弱き身に、憂苦を蒐めたる不憫さよ。女子一通りの敎育は受けて、而も容量ハ人並勝れたるに、さりとては因果の身の上。思ふに無理は彼方にこそあれ、此方に微塵落度のあるべき。

只お冬は大家に育ちて、萬事に鷹揚なるが故に、元來吝嗇きお篠の氣に入らず、又生來の內氣なるが、良人の機嫌を取り損ひしのみ。

されども身は女に生れて、一端人に嫁きし上は、再び親の家へ歸るまじきものと、父にも母にも敎へられて、幼きより肝に銘じたれば、今更いかに辛しとて、此處を出でんと思ひもよらず。とてもかくても因果と諦らめ、只此上は何ともして、姑の氣に入るやう、良人の心の解るやうにと、朝夕勤めはするものゝ、兎角此方で思ふほど、彼方にては喜ばず。却て日々に疎まるゝのみ。人の機嫌を人が取るに、出來ぬ事は無き筈なるを、是も吾が身の腑甲斐無き故、思へば誰を恨まんと、涙に暮るも屢々なり。

今宵もお篠に呼び付けられて、其肩を揉む中も、お篠の小言は斷える隙無く、強く揉めば痛いと叱り、輕く打てば利かぬと呟き、それ程心に適はぬなら、最初から賴まねばよいに。次第に眠氣の催して、躰の幾度か倒れんとする迄も、廢せとは噯の序にも云はず。果はお冬の双の手は、關節より拔けん計りなるも、休めば又も怒らるゝに、悲しさ辛さの溢れ來て、頰に傳はる涙さへ、拭く事ならぬ其せつなさ！せめて良人の歸りなば、此用は許さるべきに、待つ其人は歸りもせで、待たぬ時のみ移りゆき、はや十二時も打たんとす。

此時やう／＼表の方に、車の止まる音の聞へしが、間も無くお卷は走り來て、「旦那樣のお歸宅」と云ふに、ヤレ嬉しやと立上り、お篠に一寸斷りて、立ち出んとする向ふより、入り來るは良人春日、れ篠に

向ひて「只今」と云へバ、お篠は悴の歸宅と見るより、態々巨燵をにぢり出で、大欠伸一ッして、
(篠)オヽお歸りか。(春)どうも誠に遲くなりまして。まだお目醒でムいましたか。(篠)何だか今夜は、(ト云ひながら一寸お冬を尻目にかけ、妙に言葉に力を入れて)宵からお留守番をしたせいか、目が妙に冴えてしまつて。(春)宵からお留守番とは?
と、春日が問ひ返すに、お冬は堪り兼ね、
(冬)アノ妾の歸宅が、つい晩く成りまして……誠に濟みませんでムいました。(春)さうか……老人を留守番に……好い加減に歸るが可いぢやないか。(冬)ハイ……(春)此から氣を付けるが可い!
ト、自己が歸宅の晩きは云はぞ、さりとは自分勝手な小言と、次の間に扣へし例のお卷は、恨めしさうに其顏を見詰めぬ。
春日はそれより納戸へ赴き、衣服を着替へて寢間に入るまで、遂に一言も口を開かず。
春日の先に枕に着きしに、お冬は此間に先刻の事をと、良人の衣服を疊みつゝ、お卷の話の續きを聞けば。お卷は途中で聞きし通り、春日に外妾のある事を、搔いつまんで物語れば。お冬は兼てかくあらんと、薄々感付き居りしかば、思ふた程には驚かず、其儘寢間へ這入り來れば、はや眠れりと思ひたる、春日は彼方を向きたるまゝにて、
(春)今迄何をして居た?

折も折とて胸にギックリ、
（冬）お衣服を疊んで居りました。
と、云ふさへ聲は震ひたり

（十）

今日ハ日曜日でもあり、かねては昨夕の瘦勞もあれば、春日ハ日高き頃やう〳〵起き出でやがて、朝餉を濟まして、新聞を一ト通眺めたる後、ツト立上りしと思ふ内に、奥なる隱居所へ赴きて、程經れども出で來らず。お卷が用ありて行く折のみ、絃の切れたる樣に話を途切らせ、其儘椽の外へ出づれば、又ピチャ〳〵と話す聲、猫の水呑む如くなり。

お冬は疾くよりそれと推して、態と遠くに離れ居れど。お卷は兎角氣に成るまゝに、二度目に茶碗を洗ふて持ち行きたる時、何氣なき体にて罷り出で、ろと二三間立戻りて、障紙の外に耳を側立つれば、今更さして驚くゝ足らねど、例のお冬が取り沙汰なり。又しても〳〵、暇さへあれば奥樣の讒訴ばつかり、御隱居樣も旦那樣も、是を毎日の課業の樣にして面白がつてのお復習か、さりとは聞えぬ方々と、根が正直者のお卷は、氣色惡さに立ち去らんとせし時。不圖小耳に這入りしは、お篠の口より「離緣」の一ト言。「しやう」と云ふのか「せまい」と云ふのか、其處迄は聞えざりしが、兎に角聞棄ならぬ言葉と尚も耳を引立つれば。又春日の口よりして「お光は」と云ふ聲も洩れぬ。お光——ほんに昨夜途中で聞い

た、それが妾の名ではないか。……事に依つたら奥樣を離緣して、其後へ光とか云ふ奴を直さうと云ふ御相談か、……コリヤひよんな事に成たゾエ、と思へば胸はゝやワク〳〵。
それにつけても奥樣の、此樣な事とは露御存じなく、あの罪の無い信樣を、せめてはお氣晴らしのお相手に、今も今とて御炬燵の側で、繪本の繪解をお聞せ遊ばす、其のお心を推量しては、他人の妾さへ涙がこぼれる、此間も此卷が、出過ぎた事とは知つたれど、所詮此樣なお家には、御辛抱の甲斐無ければ、寧そ今の間に此方から、緣を切つてお仕舞ひ遊ばせ。妾が奥樣であるならば、それこそお兩方への面當に、疾うに追ん出でやりますものを、貴女もあんまり此氣が弱いと、申し上げたら奥樣が、これ何を云ふ勿体ない、假にも姑と傅くからは、實の親より大切なもの。良人は元より云ふ迄も無い、それに此方から面當とは、人の道にあるまじき事、冗談にも程があると、却てお叱咤を受けたれど、……それも相手の品に依る。御隱居樣とは名ばかりで、眞は裏店小店の婆にも、いつかな劣らぬ下主根性。心の卑しいばッかりか、口汚い姑樣、あの素直な奥樣とは、雪の側へ炭團も同然、根が成り上りの其所爲か、奉公人を使ふ法も知らず、僅少計りの給金で、人を人とも思はぬ扱ひ。横面の一ッも張りたい事は、今迄何度あつたか知れぬ。あのお鍋どんが腹を立てゝ、出替り迄の辛抱が出來ず、とう〳〵宿へ下つた時、妾も一所に去んで退けて、婆奴を懲らしてとは思ふたれど、さうする時は奥樣一人が、妾達の分の苦勞まで、お引請遊ばすが痛はしさに、チッと我慢はして居たものゝ。あの奥樣さへ無いならば、誰が此樣

な家に居やうぞ。思へバ此身も因果なれど、それにも増た奥様のお不幸福、お察し申せば……アヽ堪らぬと、沸き返る涙堰きかねて、お卷は其場に居堪れず、勝手の方へと歸り來れば、何時か其處に車夫の千吉。上り端に腰打ちかけ、一人煙草を吹かせしが、お卷の足音に此方を見返り。

(千)お卷どん……何處に居たんだ?(卷)妾はお奥へ行てたんだよ。(千)オヤ……其眼は何うしたイ?(卷)何うもしやしないよ。(千)何うもしないッて……泣いてたな!。(卷)何も泣きやしないよ。(千)嘘つけ……またお極りの虫齒が起つたんだらう、吾が呪をしてやらうか。(卷)そう澤山だよ。(千)惡くツン〳〵するぢや無ねエか。(卷)妾の性分だから仕方が無いやネ。(千)人が折角……お鍋どんが居なく成て、一人で嘸忙がしからうと思つて、手傳ひに來てやれば……(卷)大きにお世話だアね。(千)コレサさう逃げるにも及ぶめエ。(卷)えヽもう五月蠅てばア

(十二)

今日の天氣、日曜にハ儲け物なり。梅にはまだ早しと聞けど、此儘に置くは勿体なし、せめては氣の速い鶯におど邂逅ふて、浩然の氣を養はんと、今しも御苑内を北へと志す、三人連の若者あり。何れも一樣の帽子洋服は、東山大學の生徒と知られぬ。

(一)今日の樣な天氣に成て見ると、矢張り春は春だねエ。(二)さうとも、何となく氣が長閑に成る、造化の配劑は不思議なものさ。(一)時に今日は何處へ行くんだ?(二)此處まで來た上は、吾が敵は北

野にわりと云はざるを得んぢやないか。(一)北野ハまだ早いと云ふ話だぜ。(二)此期に及んで其樣な贅澤を云ふ可らず、總じて梅と云ふ奴は、滿開よりは半開に妙がある、半開よりは寧ろ莟で見るのが、眞の風流と云ふものだ。されば未開紅と云ッて、女ならば十五六と云ふ處を賞玩するのだ。(一)其の女ならバ十五六で思ひ出したが。

ト、一瀬と云ふ若者は、五六歩先に立て、細きステキを振り廻はしながら、緘默て歩行いて居る男に向ひ。

(一)オイ藤井!何を君は默つてるんだ。

と、云へば藤井は立ち止りて、此方を向き、

(藤)何か用か。(一)左樣眞面目に出られると困るが、君彼の一件何うした?(藤)あの一件とハ?(一)ソレ……北座の淨瑠璃が賴もしいと云ッて、君が嬉しがつたと云ふ一件さ。

と云ハれて藤井は何故か、少し面を赤らめしが、何氣無き体にて、

(藤)どうも仕やせんさ。(一)濟ますない!僕ハ二見に聞いて知とるぞ。ナア二見!(二)さうさもう包んでも包み切れんぞ。(一)キリ〳〵白狀しやいのウ――如何だ越路に似てるだらう。

藤井は此時初めて笑ひ出し、

(藤)ハヽヽヽ、往來中で見樣無い、其樣な怪しい聲をするな、東山大學の体面を汚すぞ。(一)など、

嚴格な事を云ふ君にして、ハテ思案の……外ぢやなァ。（藤）コレ廢ツたら！是だから吾輩は。君等と歩行のは御免蒙ると云ッたんだ。

と、態とツンとしてまた先へ行き過れば、後なる二人は口々に、

（一）ョ情男！（二）越路太夫！

と、惡氣は微塵も無けれども面白がつて喧嘩ふは、親しき中の常と知られぬ。

折から下立賣門の方から、一散に走せ來る一臺の人力車あり。

上には十六七の娘一人。銀鼠に牡丹を染め出した襦袢の襟に、衣服は江戸納戸の大縞の糸織、上には黒縮緬の羽織を着、髮は高尙ある島田に結ひて、菊の花の針打を挿し、銀の平打の簪に、金蒔繪のれ初形の櫛、總じて上品なる扮裝なるが、面は鷄卵形の色白く、フックリと肉豊かに。眉はやゝ一の字に近けれど、釣りの好き重側眼、高からねども秀でたる鼻、口元はキリヽと〆まりて、愛嬌あれども何所やら凛々しく、素直に見ゑて而かも利發らしき、又是一個の美人なり。

一瀨は之を見るより、急ぎ二見の肩を叩きて、何やら一寸耳語きしが、近づくまゝにエヘンと一ツ咳拂をするに、藤井は思はず彼方を見やる時、思はず合はす顔と顔。今更逃るゝ事もあらず、極まり惡氣に一寸會釋すれば、彼方の女も答禮なせしが、其儘車は走り過て妙なる香氣の名殘りぞ殘りぬ。二人は忽ち走り寄り、

(一)如何だ藤井！噂をすれば影だらう。(二)どうして影處か本物を拜んだンだから、中々牛肉や鷄肉ぢや許されんぞ。(一)まづ今日一日の大藏大臣は、乍御苦勞藤井保雄君。(二)それは誠に濟まんねヱ。など、双方から愚弄らるゝに、藤井の面は燃るが如く、まだ春寒き頃なるに、何時か脇には汗の溜りぬ。

（十二）

小枝子は今日しも有樂館なる、琴の温習會に臨まんとて、此處をば通りかゝりしなり。温習會は午後一時よりと、番組には記しあれども、京都時間の掛直はあるに、號砲打ちて間も無き今頃、さりとては氣の速さと、先刻にも母に笑はれしなれど。小枝子が腹はさにあらず、途に姉をば訪づれて、其憂苦を慰めんと、思ふ心のあればなり。

小枝子は姉の素直なるに似ず、性來聞かぬ氣者にて、時にハ男々しき振舞もあり。兼てより吾が姉の姑に苛責められ、良人に嫌はるゝ事、早くも見もし聞きもしつ、心慨に堪ね難ければ、何時かは之を兩親に告げて、寧その事引き戻し、姉の苦艱を救はんものと、思ふ事は數々なれども。さる事の御兩方に知れては、御心配の種を蒔く而已ならず、吾と吾身の行屆かぬを告げて、お叱咤招く基となれば、何卒告てたもるなと、姉が達ての依賴なれば、據無く默しては居れど。彌々危急の場合とならば、何でう女々しき猶豫のあるべき、忽ちに躍り出でゝ、姉の爲に一臂の力を揮はんと、覺悟は常に定めける。實に此小枝子こそ卷と共に、彼の憫なるれ冬が爲には、いと賴もしき味方なりけれ。

小枝子はやがて河原町なる、春日の門前にて車を下り、潜り戸をガラ〳〵と明くれば、折柄庭に遊び居たる、彼の信三は早くも見付けて、

(信)やァお小枝ちやんが……

と、さも嬉れしげに駈け來り、小枝子の腰に抱きつけば、小枝子も莞爾に打ち笑みつゝ、信三の頭を輕く撫でゝ、

(小)信ちやん、今日はれ自家に遊んでるの?(信)今朋友ン處へ行かうと思つてたんだ。(小)叔母さんはれ自家?(信)アゝ……(小)叔父さまは?(信)れ留守!(小)お祖母様は?(信)居らッしやる。(小)何處に?(信)れ奥だらう……僕ア知らない。(小)さう。

咄しながら玄關の方へ進み來れば、此物音に例のお卷は、勝手の方より走り出でゝ、

(卷)オヤまアお小枝樣でムいましたか。まア好く入らつしやいました、サ何卒此方へ!

と、云ひながら禮をなすに、小枝子も輕く答禮なしつゝ、態と聲を低めて、

(小)姉ヱ樣はお茶の間かイ?

と聞けば、お卷も同じく小聞にて、

(卷)ハイ……只今れ裁縫を遊ばして居らつしやいます。(小)阿母樣は?(卷)今朝程からお奥で何かなすッて居らつしやいます。(小)昨夜は何うだッたイ?

と、云はれてお卷は氣の毒さうに、
(卷)へイ……
と云ふさへ言葉鈍れば。小枝子はゝやそれと推して、
(小)又何かお叱咤が出たのかイ?
と、重ねて問ふに、此方は態と紛らして、
(卷)イゝヱさうでも厶いませんが……(小)妾も後で案じて居たんだよ……少し晩く成たから。
と、二人が立ちながらひそ〳〵話、譯知らぬ信三はもどかしく成りて、
(信)れ小枝ちやん、サ叔母さん處へ行きましやう。
と、袂を引くに小枝子も餘議なく、茶の間の方へ來かゝる折しも、聲聞きつけて出迎へし、姉のお冬と顔見合せ、互ひに言葉を掛けんとする時。奥の間よりも姑のお篠が、何物ありてか此方へ來て、小枝子を見るより笑顔を作り、
(冬)まアお小枝さんですか、ようまア。昨夕は又見事なれ土産を誠に結搆で厶いました今日はまアよう尋ねて下さいました、サ何卒……
と、口に委しての付愛想、片腹痛やと思ひつゝ小枝子もよき程に挨拶して、ろと傍なるお冬を見れば、――顔を外向けて眉を顰めぬ。

敵役は赤ッ面と定まりたる、芝居道はいざ知らず、此世に混る善惡邪正、彼の淨玻璃の鏡ならぬ、人の眼には見分け難かり。

（十三）

されバ如何なる惡人なりとも、吾が惡に誇る者は、恐らく一人もあらざるべし。必ずや皮相を包みて、自己が惡を掩はんと勉め、さては善とも見せんと謀る、是ぞ浮世の人情なりける。

例へば彼のお篠の如きも、世にありと云ふ姑の、意地の惡さと憎らしさを、一身に集めたる程の女なれども、餘所の者に向ふ時は、虎の爪をば隱したる猫撫聲の追從口、心にもなき情を賣れば、初對面には鈍くも誑されて、さても愛想好き御隱居樣よ、優しげなる姑御よと、褒むる者さへなきにあらねど。漸く慣れて行くまゝに、其地金を見現はして、さてハ油斷のならぬ妖怪かと、身震ひして逃るもあれば、頭隱して尾を隱さぬ、さてとは淺墓なる古狸奴と、後指さして嗤ふもありけり。

されば彼の小枝子の、いかで此に誑さるべき、又例の空世辭かと、心の中には冷笑へど、左あらぬ体にて其儘に、お冬が居間へ通らんとすれば、

（篠）それよりは隱居所の方が、日當りが好うて暖い、此方へ來てゆる〳〵お咄し！

と、お篠の言葉に迷惑ながら、お冬も小枝子も伴はれて、奥の方へ通りしが。何となく居辛さまゝに何かの事は後にてと、眼もて小枝子に通はせつゝ、お冬は居間へ戻りゆけど。お篠は尚もチヤホヤして、

自ら茶を入れ勸むるなど、却て氣味惡きのみなるに。如何にもして此場をば、程好く免れんと思ふ折しも、彼の信三の走り來て、「お庭の梅が咲いたから、僕と一所に見に行きませんか」と、云ふこそ丁度幸なれと、小枝子は其儘信三と共に、何氣無き体にて庭へ下り立ち、其處此處を歩行くと見せて、漸くお篠の眼を竊み、お冬の居間の椽近く進みぬ。

お冬は一人裁縫してゐりけるが、障紙の硝子越しにかくと見て、ニッコリと打ち笑みつゝ、頤にて招けば眼にて答へ、小枝子はやがて居間へ通りぬ。

(小)やう〳〵逃げて來たの。

と、小枝子は其處へ坐らんとすれば、お冬は裁縫の手を休め、座蒲團を取て出しながら、

(冬)まアお敷き!(小)ハア難有う。――今巻に聞いたけれども、昨夜は何だッて?又遣られやしなくッて?(冬)ろれは知れて居るわ子。(小)矢張り晩くなッたから?(冬)それもゐるけれども……(小)それおやア春日さんは、もう歸つてらしッたの?(冬)なアに旦那は十一時過ぎにお歸宅だッたけども………

(小)では何だッて遣られたの?

小枝子がやゝ熱心に問ふに、お冬もやう〳〵思ひ切りて、昨夜の事の一伍一什、言葉短に物語る中も、はや時ならぬ村時雨、袖に露をぞ宿しける。

小枝子は殘らず聞きて、さも口惜しげに、

(小)自分でも晩く歸つて置きながら、姉さんばかり叱つて、老人を留守番させるなんて……其樣な馬鹿な……春日さんも春日さんだ……妾は姉さんの事を思ひ出す度毎に、あの藤井さんが憎らしくツて堪りませんよ。(冬)何故?(小)何故ッて……あの人が媒妁人ぢやありませんか、……姉さんが此樣なつまらない目に逢ふのも、みんなあの人のお蔭だと思ふと、妾は悔しくツて〳〵。(冬)ホヽ其樣な事云ても、藤井さんだッて、元々故意妾を窘める氣でした譯でもあるまいから。(小)故意で無いからッて……つまり彼の人が媒妁口を利いたもんだからでさアね。……今も妾は保雄さんに、御所の中で逢ッたけども、挨拶して遣らなきや好かつたと思ッたワ。(冬)ホヽ、何も保雄さんの知つた事ぢやあるまいし。(小)……でも……ほんとに憎らしくッて……

(十四)

鬼の來ぬ間に洗濯と、れ冬小枝子の姉妹は、互ひに心隔てなく、憂苦を語りつ慰めつ、暫らく時を移しける處へ、椽の外より彼の信三が、急はしく這入り來り、

(信)お小枝ちやん此處に來てたの?僕ア方々探しましたぜ。

と、云ふに小枝子は微笑ながら、

(小)ホヽヽそれハ惡う厶んしたネ、妾は先刻から此處に居たんですよ、サ、郎君も這入てお咄しなさいな!

と、云ふ間に信三ハ、無雜作に障紙を立て切て、其儘小枝子の傍へ、身を摺りつけて座り、手に携へし梅の小枝を出して、

(信)僕が今取て來たの。お小枝ちやんに上げましやう。(小)オヤまア好いのがありましたねヱ。

と、小枝子は其枝を取て、膝の上に眺め居れば。お冬は信三に向ひて、

(冬)信ちやん！昨夜のお土産のれ禮を云ッて？(信)アヽさうだッけ。……繪本を難有う。(小)何う致しまして、約らないものを、れ禮では却て痛み入りますネ。(信)だから其花は繪本のお償にあげます。(冬)ホヽヽヽお償なんて生意氣な事を知つてるのねヱ。(小)ホヽヽ、ほんとに信ちやんは可愛い事を云ふ人だと！

と、小枝子は信三の顏を打守りてありしが、稍々ありて少し聲を低め、自己の顏をズッと差し寄せて、

(小)信ちやん！(信)何イ？(小)郎君家中で誰が一番好き？(信)叔母さんさア。(小)其次ぎは？(信)お小枝ちやん。(小)それから？(信)それから……巻もちつとは好きだ。(小)それからは？(信)……もう無いや。(小)それぢや叔父さんは？(信)僕アあんまり好きおやないや、可愛がつてくれないもの……

(小)そんならお祖母樣は？(信)僕ア嫌ひだア。

小枝子はお冬と顏見合せて、妙にニッコと笑ひしが。また更めて信三に向ひ、

(小)何故郎君れ祖母さまが嫌ひ？

と、態と眞顔に問ひ返せバ、信三はさも無雑作に

(信)だッて……叔母さんを叱るもの……

と、云ふにれ冬は堪え兼ね、

(冬)其様な事、信ちやん、お祖母様の前で云ふんぢやありませんよ。(信)何故?(冬)何故でも!叔母さんの叱られるは、叔母さんが惡いのですから……(信)ナニ其様な事があるもんか、僕ア知てらア。

と、小兒心にも平常より、お篠の所業の非なるを知れば、小枝子が尋問に誘はれて、端無くも腕を扼せし、信三の心の頼もしさに。小枝子も可愛さ日頃に倍し、吾知らず抱きしめて、

(小)だから信ちやんはほんとに可愛いのよ、

と林檎の如き其頬へ、わが海棠の唇を接けたり。

折から彼のお巻は、障紙の外より

(巻)坊ちやまお朋友が入らつしやいましたよ。

と云ふに、信三も初めて心付きたる如く、急はしく立上り、椽へ出でゝ表の方へ走り行かんとする折しも。唐突に次の間の、半ば開けたる障紙の陰よりお篠は小聲に呼びとめて、

(篠)オイ信!一寸お出で!

と、云へども此方は振り向きたるのみ、答もなさで行き過るに。れ篠いやゝ聲鋭く、

（篠）コレ待ちと云へば！（信）だッて今お朋友が來たもの。（篠）何だネ大きな聲して！と、お冬の居間の方を見返る間に、彈丸を免れし兎の如く、はや信三の影も見ず。

（十五）

片腕に脈や通ひて、四分通り咲き初めし樹々の梢、時を得顔に香を放てば。其下に据ゑたる床几に、思ひ〳〵の陣を搆へて、吸筒の尻を撫でゝは、猪口と接吻の樂しさに、餘念もなき人の群。雅も俗も打ち混て、さしもに廣き北野の地內も、縁日の他なる賑ひは、是ぞ天神樣の御紋所、梅の功德と知れける。額堂の邊の茶店に腰打掛けて、五月蠅く勸める小原女に目も呉れず、行きかふ人の品評して、密柑を下物にビールの酒盛、睦ましげに語らふは、先に御苑內にて小枝子が行き逢ひし、藤井保雄を初めとして、一瀬二見の三人なり。

一瀬は手に持ちしコップを、二見に指して酌をしながら、藤井の方を顧みて、

（一）ナア藤井！先刻の事は忘れはすまいな。（藤）何だ先刻の事とは？（一）とぼけるなよ。ソレお歸途のお支度をさ……なんなら泥龜鍋でも可いぜ。（藤）馬鹿云へ！吾輩一人で驕る理由は無いさ。（一）理由が無いとは云はさんぞ。ナア二見！（二）さうとも、僕等が此處で通り掛りの婦人を評して、美だの醜だのと云ッたつて、畢竟雲煙過眼に過ぎない。何處の誰とも知れない奴に、彼是思つた處で、先では何とも思ひはせん、誠に果敢無い話じやないか。然るに藤井君の如きは……藤井君と越路孃の關係

の如きは、昨日や今日の事にあらず、そも振り分髮の其昔時より、互ひに思ひつ思はれつで、お安からざる交情に成て居るんだもの。……まして況や先刻御苑内に逢た時なんぞは、人目があるから只默禮をして居たもの丶。あの……君を一寸瞥見した、其眼中の容体と云つたら乃ち秋の波なるもので、千萬無量の意味を含んで居た事は、かく云ふ拙者が眼鏡越しに、グッと睨んで置いた處だ。是に依て之を見れば、今日の事たる……(一)オイ二見、さう饒舌り續けで、コップの取りッ放しはいかんぞ、ちつと此方へ廻はさんか！(二)まァ待て！是からが本論だ。

と、平常は無口の二見も、酒が云はせる串戲口、やゝ聲高に饒舌り立つれば。隣りの床几の客迄が怪訝な顏して此方を見るに、まだ不醉なる藤井も、最初は笑ふて聞き居たれど、果は堪え兼ねて立ち上らんとする折しも。彼方より來掛りしは、吾が學校にて敎を受け居る、助敎授乙倉丑造なるにぞ、藤井は急ぎ二見を制し、

(藤)叱！叱！敎師が來たぞ。

と、云へば二見は醉眼に、彼方をキッと見詰めしが、未だ乙倉を見付け得ず、

(二)噓吐け！來やせんぢやないか、其樣な事を云つて中止させやうと思つたッて、辨論の自由は妨げられんぞ。(藤)噓ぢやないさ。見ろ彼處を！

と、云へどもまだ解らぬ樣子に藤井は態と進み出で、帽を取て此方から聲を掛くれば、彼方も一人にて

友欲しき折から、直ぐ樣此方へ歩行み寄り、
(乙)君等も散歩ですか。(藤)ハイ……先刻から。(乙)それは御愉快ですネ。實は今日君のお宅へ一寸お尋ね申したんです。(藤)さうでしたか。然し阿爺ハ今日は……(乙)ですから何れ明日上る事に申して置きました。貴君もお歸宅でしたら、何卒其樣おつしやッて下さい、(藤)ハイさう申しませう。何の御用があるんですか。(乙)エヽ……ちと内々でお咄し申したい事が……
と、眞面目に成ての立話に。此方の二人ハ隙を得て漸う醜体を繕ひしが。一瀬はやがて進み出で、
(一)先生!どうです此方へお掛下さい!獨逸流にビールです。如何ですか一杯、(乙)ハヽヽそれハ結搆。(一)で、お一人ですか。(乙)エヽ、今日は用達しに行た歸途で……
二見は又吾が持ちしコップを、グッと呑み干して乙倉に指し、
(二)先生失禮ですが……(云ひつヽ茶店の女に向つて)コラ、ビールを今一本拔いて來い!

(十六)

藤井と乙倉とは、曩にある時こそ師弟なれ。其實は同郷の友にて、而も乙倉が東京の師範學校に修學の頃は、保兵衛の許より月々に、學資の幾分を助くるなど、少からぬ、恩誼もあれば、保雄に對しての言葉遣ひも、他の生徒を扱ふとは異りて、自づと丁寧に聞えしなり。
敎師の乙倉が混りてより、何と無くけむたき儘、一瀬二見の兩人は、兎角乙倉に別れんとすれど、藤井

が頻りに話しをなし居れば、振りすてゝ、行く譯にもゆかず。やがて茶店を立ち出でゝ、梅林を彼地此地と歩行く中、今は日も傾きて、興もはや盡きんとするに、餘儀無く歸途には就きしものゝ。乙倉の手前憚りて、兼て胸算に定め置きし、藤井を驕らせる原案も、遂に提出の機を失ひ、心にも無き犬の川端、スゴ〳〵家路を辿りけり。

斯くて其翌日、午後二時に學校を引きて、保雄が家に歸りし頃、はや乙倉は訪づれ居て、奥の座敷に保兵衞と、何やら語り合ふ氣配なるに。保雄も其場へ出でんとせしが、如何なる密事か知れぬものを、それも亦差し出がましと、自ら扣へて吾が居間へ入り、衣服を着替へんとする折しも、椽の外を通り掛りしは、今年十五の春を迎へし、吾妹のお樂なり。

お樂はかくと見て、用も無けれど立ち止り、

(樂)兄さん今歸つたの?(藤)ウン。……奥のお客は乙倉さんだらう。(樂)えゝ。(藤)何時頃から入らしつた?(樂)正午後でしたらう。(藤)フーン……

保雄は暫時く默つて居りしが、お樂の尚其場を去らぬに、また改めて言葉をかけ、

(藤)お前今日學校へ行つたか。

と問へば、お樂は知れた事をと云はぬ斗りに

(樂)えゝ行きましたワ。(藤)……小枝子さんに逢つたか。(樂)逢ひましたワ。(藤)昨日私に逢つたと

云ッてやしなかつたか。(樂)いゝゑ。……兄さん何處で逢つたの?(藤)御所の中で……(樂)さう。妾にはそんな事、ちつともおつしやらなかつてッよ。(藤)……左樣か……

と、少しく不興顔なり。

お樂も亦呟く樣に、

(樂)なんだか小枝子さんは、此頃變よ。(藤)變とは?(樂)なんだか變だワ。(藤)只變では解らんぢやないか……何うしたんだ?(樂)先時分あんなに交情好くしてたのに……(藤)此頃は交情が惡く成つたか。(樂)交情が惡いッて……妾は何とも思やしないんだけども……何だか妾に……變なのよ。

と、云ひ惡くさうなれ樂の言葉に、保雄は結びかけし羽織の紐を握りし儘にてヂッと首を垂れ、何やら思案に暮居しが、稍々ありて太息吐き、何の意味にやちよと點頭きて、机の側へグナリと坐りぬ。

此時用談も果しと見え、乙倉は奧の間より出で來たり、椽傳ひに保雄の部屋へ來れば。お樂は急ぎて逃るが如く、納戸の方へ姿を隱しぬ。乙倉は保雄を見て、

(乙)ヤ、昨日は失敬しました。

と云ひながら坐れば、保雄は火鉢を其前に押し遣り、一寸會釋して、

(藤)私こそ失禮致しました。もう御用は濟みましたか。(乙)へイ只今お目に掛て來ました。(藤)一体何の御用なんです?(乙)ゑゝ……少し秘密のお話で……(藤)さうですか……(乙)ナニ郎君ならお話し

ても搆はん事ですが。(藤)何う云ふ事です？(乙)少し他から聞き込だ事がありますから。(藤)誰の事です？(乙)ナニ春日の事で。(藤)春日先生ですか。(乙)あの妻君の事です。

と、云ふ時保雄は何思ひけん、吾知らず眼を見開き膝を進めて何やら聞かんとせしが。乙倉はそれに氣も付かず、やがて煙管を筒に收めて、

(乙)それでは失禮致します、いづれ又其中に、……

と、云ひ捨てゝはや立上りぬ

(十七)

今日乙倉の訪づれしは、春日の妻君の事につきてト、聞きし時の保雄の顔いはや土の如くなりき。さては兼て人の噂に、春日が家の風波絶ねず、お冬一人が憂苦を見ると、聞しは事實よてありけるか。殊にわが父保兵衛は、お冬を春日に配耦せし、媒妁にてあるなれば、さてこそ乙倉の之を告げて、私かに計る處ありしなるべし。吾も常より此事を、友人間の取沙汰を聞きて、苦々しくも面目なく、胸を打たるゝ心地なりしが、まだ眞僞の確とは知れぬに、わが父の耳に入れて、物思はするも益無しと、今日まで默して居たりしに。態々乙倉の尋ね來て、之を父に告ぐるに至りしは、よくよくのことと見えたり。されぱこう思ひぞ當る。——小枝子が此頃の擧動變りて兎角昔時の優しきに似ず、吾に强面く見ねたるも、かゝる事のあればなるべし。

彼は姉のお冬とは、性質大に異れども、又大の姉思ひなり。さればお冬が春日に嫁ぎで、今日の憂苦を見るに至りしも、元因を尋ぬれば吾が父の、媒妁口を逞くして、彼を誑せしものと思ひ僻め、坊主憎めば袈裟までと、果は吾をも疎むならん。——否吾をのみ疎むならぞ、常より眞の姉妹にも、劣らぬまでに親しかりし、吾が妹をも疎む事、今も聞きたる處なり。

實に禍の門とし云ふ、父が一時の辨口にて、お冬を陷れたりとすれは、そを恨むも無理ならず、そを憎むも無理ならねど。吾に何の罪かある？お樂に何の科かある？彼の一人の罪惡の爲めに、九族をも亡されしは、開けぬ世の法律にして、今は誰か其非を學ばん且つは其事を惡むとも、其人を惡まずてふ、聖人の敎さへあるものを、さりとては日頃よりの淡泊なる、小枝子にも似合はしからず、とは云ふものゝ是とても、假に彼我の位置を替へて、吾彼の小枝子の身に成りせバ、媒妁人を憎く思ひ、其眷族をも恨まんと、强ち無しとは保し難し。況いて其苦を身に受くる、彼のお冬には如何計り、吾等親子を恨みてや居らん。

とても角ても由なき事に、人の恨を受くるこそ、うたてき事の限りなれ。只何ともして此上は、お冬が身を救はでは、遂に兩家の不和を招きて、後日の大事も氣遣はしと、思ふて此處に至る時、——不圖或る事に心付けば、保雄が胸は潰れんとす。

今更云ふ迄もあらねども、保雄は誠に小枝子を慕ひぬ。彼等二人か總角の頃より、越路藤井の兩家の間

は、未だ血統の緣こそ結ばね、親族も及ばぬ交情なりき。されば年頃の釣合も好きに、其兩親の胸の中には、小枝子を保雄に許さん心の、はや芽出せしやも計られず。其を知るや知らずや、二人は幼きよりいと睦まじく、小枝子が活潑にして邪氣無き心と、保雄が沈着にして仁心深き性質とは、年と共に調和を堅うして、互ひに物心の付く頃には、彼の膠漆も啻ならぬまで、離れ難き間とはなりぬ。

さるに此比の小枝子の擧動、腑に落ちぬ事のみなるに、それさへ皆わが父の、彼が姉をば誤りて、憂苦の中に沈めし故と、今に至りて思ひ當れば、更に胸に安からず。若し此爲めに年來の、兩家の交情破れなば、幼きより樂みにせし、彼の一事もうたかたの、泡と消えなん悲しさよ。兎角は吾も力を盡して彼のれ冬の憂苦を拂ひ、小枝子が胸の意恨を晴らして、もて事の平和を計らんと、健氣にも思ひ立ちしが、さて何とせば可からんかと、又もや思案の腕を組みぬ。

（十八）

やゝありて保雄ハ、漸うに思案を定め、兎角は父に謀らんと、其居間へ行き見れバ、父も全じく火鉢の側に、腕駒拔きて茫然たり。

保雄はまづ進み寄りて、

（藤）阿父さん何をお案じでムいます？

と、何氣無く尋ぬれば、保兵衞は重たげに此方を見やり、半ば兀げたる額を、掌にて撫で上げながら、

(保)困つた事が出來てなア。

と、云ふも後は太息なり。保雄ハさこそと膝を進ませ、態と聲を低くして、

(藤)では只今乙倉さんが……(保)お前も聞いたか。(藤)ハイ……まだ善は聞きませんでしたが、兎に角容易ならん事でムいますな。(保)さア……如何したもんぢやらう?(藤)然し斯樣な事はあまり表立たぬ方が宜敷うムいましやう。(保)無論左樣ぢやテ。(藤)ですから大人が矢張り、先方へさうおつしやッたら如何です?(保)先方は?(藤)春日さんへ直接に……(保)左樣だ……私もまづ其處等と思つて居るんだが、ちと云ひ惡い事でもあるから……(藤)何も云ひ惡い事はないではありませんか。(保)全体斯樣な事は却て乙倉からでも云つた方が、物に角が立たんで好いのだが、何う云ふもので乙倉が云はなかつたか知んテ。(藤)それは其筈です。(保)其筈とは?(藤)乙倉さんと春日さんとは、一体交情が好くないんです。(保)交情が惡いのか。(藤)えヽ……ですから平常も一向往來をして居らん位です。(保)フーン……それでハ何も……

と、云放ちし其語氣は、以前にも似ず活々として、さしも顰めたる眉の間の、やヽ開きて見えしぞ訝かし。

保雄ハ又父の顏を、暫らく打守りてありけるが。今の言葉の樣子にては、誤解の程も氣遣はしと、此方

は更に膝を進ませ、

(藤)それでは何も……御心配には及ばぬとおつしやるので厶いますか。(保)イヤ左樣でもないが……總じて片言計りハ信じられんもんぢやから。

と、いよ〳〵落ち付きて見ゆるに、保雄ハ尚も急き込みて、

(藤)元より片言は信じられませんけれども、……それが爲に乙倉さんの云ふ事は、事實で無いとおつしやるので厶いますか。(保)左樣云ふ譯でもないが、斯云事は充分調べた上で無いと、却て間違を招く基となるから。(藤)それは御道理です。然し……然しあの事に就ては、實は私も他から聞き込んで居りましたが、まだ確實な話を存じませんから、迂濶に申上げて御心配を掛けても惡いと存じて、態と差し扣へて居りました。(保)それではお前も聞いて居たのか。(藤)えゝ。(保)ソノ……春日に外妾の在る事も……(藤)えッ、外妾が?

吾も聞きたりと云ひし甲斐無く、此最後の一言には、鈍くも胆を消さんとせり。誠に保雄は人の噂にて、春日が無情とれ篠が非道とは、兼て聞き得し處あれど、其外妾のある事は、未だ耳朶にも觸れざりし。されバ今父の言葉に、此事を初めて聞きて、太く驚き呆れしかど、元より春日は偏人にして、色を好まぬ男と知れば、此事のみは直ちに信じ難く、

(藤)其樣な事があるのですか……然しまさか……

と、云ふを皆まで聞かず、

(保)サヽそれぢやから片言は信じられぬと云ふのぢや。

と、父が疊みかけたる言葉に、保雄も今は腰を折られぬ。

されども又乙倉の、正直なるあの性質として、縦令ひ交情の惡しくとも、友を陷れんと思ひもよらず。から云ふ事ならあの時に、其袂を引留めて、仔細を委敷聞きしものを、乙倉が歸去を急しぎしと愍ひ吾も聞き居し爲め、好くも尋ねざりしぞ不覺なると、今更臍を噬ならぬ、身は分別の界に迷ひぬ。

此時取り次ぎの小女が、表の方より走り來て、

(女)あの只今春日樣が御入來で厶います。

と、聞くより二人は顏見合せ、霎時言葉も無かりけり。

(十九)

春日は平常三時には家に歸るに、何故か今日は晩れて、はや黃昏にも近ければ、お冬よりまづお卷は呟き、又あの新門前かと云へば、お冬はそれを打ち消して、

(冬)イヱ其樣な事はあるまいよ。此間から藤井さん許へ行くとおつしやつてたから、今日はお廻りに成たかも知れないよ。(卷)藤井樣とおつしやいますと、あのれ媒妁人で厶いますか。(冬)はア。(卷)アノお媒妁人の處へ……まア……

と、お卷は何やら思ひ當る事の、心の中にある如く太く驚ろきたる体なりしが、お冬は却つて可笑く思ひ、

（冬）藤井さんへ入らしつたのを、何で其樣に驚くんだ子？（卷）へイ……（冬）をかしな卷だよ！

と、云ふてもお卷の言葉無きに、お冬ハ用を思ひ出して、やがて其場を立ち去りぬ。

お卷ハ實に昨日の朝、お篠と春日が密談を、障紙越しに聞きたるに、離緣と云ふ聲端無くも、わが小耳に入りしかば、私に胸を痛めつゝ、もしや奥樣のお身の上と、案じ煩ひし其矢先へ、又もや春日が媒妁人の許へ、行きしならんと云ふを聞きて、さてハ矢張り其事かと、胸は潰るゝ計りなりしが。さて打ち明けて云ふ事もならず、云はねばお冬の知る由もなく、てもお痛はしやいぢらしやと、はや濕みたる双の眼に、チッとお冬を見送りぬ。

兎角する程に春日は歸り來りしかば、お冬ハ例の如く玄關へ出迎へ、まづ「お歸宅！」としとやかに禮して、それより共に納戸へ趣き、衣服を更へる世話などするに、常は捨言葉の二ッ三ッハ、云はぬ事もなき春日の、何としてか初めより無言にて、而も顔色常ならず、譬へば雲の充ちし夏の空の、雷電隠す如くなり。

元より此の半年ばかりは、遂に良人の笑顔に接せず、大方はかゝる不機嫌のみ、見慣れたるお冬の事なれば、今更さして恐れもせねど、又快くは思ふにもあらず。進まぬながら後に從きて、其居間へ這入

り行き、茶を入れて進むれば、春日はあらけなく湯呑を取りて、グッと一息に呑み、其儘クルリと机の方を向きて、

（春）アヽ約らん日だ！

と、初めて洩せし此一語は、不思議にもお冬の胸に一種異様の越歴を傳へて、いとも不快なる刺擊を與へぬ。

さては大分御機嫌悪し、お側に居ては御邪魔ならんと、お冬は立つて出でんとすれば、春日は急に振り向きて、

（春）冬！逃げるにや及ばん！

と、聲も鋭く呼び止めたり。

お冬はハッと思ひ乍ら、また元の座に蹲踞りしが、さわらぬ体にて物和かに、

（冬）何か御用でムいますか。

と、云ひつゝ額越しに見上げたる顔を、睨むが如く打ち守り、

（春）イヤ別に用では無いが、吾は今日から貴様には何も云はんぞ。阿母さんよりも貴様は大切だからもう決して小言は云はん。

と、思ひもよらぬ良人の言葉、お冬は呆れて答も得せず、只オヅ〳〵其顔を見詰むれば、春日は何語を

次ぎて、

(春)實に今までは吾が惡かつた。吾の心得違ひであつた。其段は貴樣に謝罪る……然し此方にも意恨がある※。よくも吾に恥辱をかゝせてくれたな。(冬)意恨……恥辱……を何うして其樣な事が……。(春)イヤ知らんとは云へまい。實は今日藤井を尋ねて、吾は酷く叱られて來た。(冬)何を藤井さんが……(春)何を叱られたか……其樣な事は今更云ふ丈恥だ。然し藤井があんな事を云のも、つまり貴樣が云はねば知れん事ッた。(冬)何で妾が其樣な事を。(春)貴樣が云はんで誰が云ふ? 内家の事を惡し樣に吹聽して………良人に恥辱をかゝせて………其樣な妻が何處にと、云ふ

(二十)

性來内氣なるお冬の事なれば、かく良人に云ひ放たれて、更に辨解する力も無く、取り付く島も涙川岸の柳の愁然と、雨に堪へ得ぬ風情なり。

斯る折から表の方にも、俄かに起る悲鳴の聲「お祖母樣堪忍して！」と、叫ぶは正しく信三なるに、只事ならじとお冬は立ち出で、とつかわ茶の間へ來て見れば、今しもお篠は煙管を片手に、いきまき荒く立ち掛りて、信三を打んとするを、お卷が間へ分け入りて、泣き叫ぶ信三を袖に庇護ひ、怒れるお篠を宥むる体に、お冬も急ぎ走り寄り、

(冬)まア一体何うしたので厶います？阿母樣もまアお靜まり遊ばして！

と、取り付かんとする袂をば、れ篠は態と振り拂ひ

(篠)お前の出て來る處ではない、お離し〳〵！妾が勝手に成敗します。(卷)サヽお腹も立ちましやうが、何卒御勘辨遊ばして！(卷)妾は今參つた計りで、何云ふ譯か存じませんが、信ちやんもあの通り、泣いて謝罪つて居る事ですから……(篠)譯も知らないものならば、尚更出るに及びません。お卷も臺所に御用があるでは無いか！もう關つて貰ひますまい！(卷)サヽ左樣でも厶いましやうが……(篠)ヱヽもう關ふなト云へば！

と、果は四人が縺れ合ふての騷擾に、聲も自然と高くなれば、流石の春日も聞き兼てや、書齋より走り來り、高が小兒を相手の爭論、近所へ聞えても見共無しと、種々に宥むるにぞ、お篠も今は我を折りて澁々隱居所へ戻り行きぬ。

後にお卷は信三を、尚も物和かに慰めたれど、甚しく恐怖を抱きしと見え、啜り泣きの止まざれば、暫時の間戸外へ出で、氣を紛らすがよからんと、お冬の勸誘に從ひて、其儘信三を背に負ひ、勝手の方へ行かんとするを、お冬は又そと呼び止めて、お篠が立腹の元因を問へば、――此日の正午後の事なりとぞ、れ篠が所用ありて他出せし時、春日の家の臺塀の外に、近所の頑童共五六人、打ち群れて遊び居りしが。其中の誰かは知らず、れ篠が出て行く後姿を見て「ヤア鬼婆が行きよる」と、小聲で嘲りしが生

憎に、まだ遙からぬれ篠の耳に、不圖這入りし故承知せず、小戻りして咎めんとするを、頑童共は捕はれまじと、齊しく迯出せしかど、やゝ半町程隔たりたる時、又もや此方を見返りて、「鬼婆やイ」と叫びたるに、お篠も今は追ふ事ならず、只恐しき眼ゝ睨めつけしが。其五六人の小兒の中に、彼の信三も混り居たるを、早くも認め置きたれば、後に叱り懲らさんと、虫を殺して其場は棄て置き。さて用事を濟まして歸宅せし後、信三の歸來を待つ處へ、遊び草臥れたる信三が、今しも戸外より這入り來るを、見るより引捕へて糺問せしに、男兒なれば情も強く、二言三言云ひ返せしより、果はお篠も腹に据へ兼ね、淺ましくもかくの始末と、お卷が言葉短に語るを、お冬は一々聞き取て、眉を顰むる計りなり。此騷擾に紛らされて、お冬は自己が憂苦も忘れ涙も何時か乾きしが、信三はさも悲しげに。噦り上げつゝ卷の背に、負はれて行く後姿、見る不憫さに忘れたる、吾が悲しさも催されて、俄に胸は迫り來るに、果は堪らず火鉢の側へ、身を投げ伏して泣き入りぬ。

やゝありて身を起せば、はや此日も暮れゆきて、硝子越しに見る庭の方も、只コンモリと薄暗きに、お卷も丁度不在なれば、こは斯うしては居られぬ處と、氣を取り直して勝手の方へ、出でんとすれば出合頭に、歸り來りし例の信三。何時の間にやら機嫌も直り、

（信）叔母さん何處へ行くの？

と、愛らしき聲を掛けて、はやお冬の手に取りつくに、さても小兒の罪の無さ、――と、思はず片手に

抱きしめたり。

(廿一)

やがて夕餉の膳部を調へ、例の如く茶の間へ並べしかど、春日ハ未に不興顔にて、僅に一杯を傾けしのみ、つと立ち上りて書齋の方へ行きしが、また出で來りてお篠に向ひ、

(春)阿母さん、一寸散步に出て參ります。

と、云ひ捨てゝゆかんとするに。ﾊ冬はそれを追ふ樣にして、

(冬)貴郎お衣服は……(春)此で可い。

菅無くも足速に玄關へ來たり、帽を取て冠るより早く、何所とも無く出で行きぬ。

其夜もはや九時近きに、お篠は隱居所へ籠りたる儘時々咳を洩らすのみ。信三もまた白晝の疲勞に、宵より枕に付きたれば、お冬は只一人り、洋燈を相手に裁縫を爲し居るに、家内は只靜まり返りて、梁を刻む鼠の齒音さへ、手に取る如く聞ゑたり。

靜まる儘に無限の感慨は、狹き胸に沸き立ちて、知らぞ〳〵熱き涙の、頰に傳ふて流るゝに、人目無ければ羽織の裏にて、ぢつと押へて霎時は放さず、漸くにして乾かせバ、またも目の中濕み來て、針の目の通り難きに、餘儀なく縫物は膝の上に置きて、傍から火鉢を引きよせ、落ちたる煙管を取り上げて、せめては憂愁を忘れ草、一二服吸ひ掛けし時、間の襖を靜に押し明け、忍ぶが如く入り來るを、誰かと

見ればれ巻なり。れ巻は尚も進み寄りて、

(巻)奥様！さう御精が出ましては、御目の毒で厶いますよ。

と、云ふ自己が目も赤ふなりて、涙の痕ぞ殘るなる

お冬もわが泣顔を、見咎みられじと思へばにや、面は尚仰向けたるまゝにて、

(冬)あんまり退屈したから、今一寸一服した處なのだよ。今夜は旦那様もお留守だし、信ちやんも早く寢てしまつたから、何だか淋しくッていけないネ。お前も御用が無いのなら、此處で咄してお出でな！

と、何氣なく云ひし心算なれど、聲は何時になく鼻に掛りて、是も今まで泣きたる證據ハ見せじとすれどはや知れたるに、お巻はヂッと其横顔を見詰めながら、

(巻)ほんとに何だか淋しい晩で厶いますから、奥様お一人で、鼠にでもお曳かれ遊ばすといけないと存じて、ホヽヽヽ、れ咄しに上りましたので厶いますよ。

と、態と串戯を云ひかければ。お冬はニッと片頬笑み、

(冬)さうかイ。好く來てれ呉れだッたねエ。(巻)へイ……(冬)それではお茶でも入れやうか。(巻)アレ奥様！欲しければ自分で入れますから、何卒お關ひ下さいますな！(冬)そんなら不精してお前に賴まう。(巻)何が不精で厶いますか。妾しにまで御遠慮遊ばす事は無いぢや厶いませんか(冬)何も遠慮

をするんでハないよ。(卷)それよりは妾が……今晩は……(ト云ひかけて四邊を見廻はし)御遠慮無しにとは、何樣な事を？(卷)妾も今日まで辛抱致して居りましたが、まう我慢が出來ませんから、今晩は思ひ切て申上るんでムいます。出過ぎた奴だと思召もムいましやうが、あんまりでムいますから、妾は申し上げますんですが。……奥樣！貴女早く此家を出てお仕舞ひ遊ばせ！よッ早く！(冬)またお前が其樣な事を。

(卷)サヽさうおつしやるのは覺悟でムいますが今度計りは向不見に申すのではムいません、妾も聞いた事がムいますから。(冬)お前も聞いたとは……何樣な事を？(卷)何樣な事をッて、貴女グツ〳〵して居らつしやいますと、却て先方から御離縁をお受け遊ばしますよ。(冬)先方から仕て下さればそれ迄の事さ……、(卷)アレ、そヽそれだから貴女は……あ……あんまり

と、最前より堪へ〳〵し、悲憤の涙堰き兼ねて、お卷は急ぎ片袖に、わが眼を掩ひながらも、震え聲を勵まして、

(卷)貴女は何故……何故其樣にお氣が弱いのでムいます……平常からあれ程に、御隱居樣なり旦那樣が、酷たらしくお扱ひ遊ばすのに、何所が好くッて御辛抱……遊ばすんでムいます！御辛抱強いも事によります。御辛抱遊ばして、其甲斐があれば宜敷うムいますが、迚も此比の御樣子でハ、御隱居樣も旦那樣も、お心の直る氣遣はムいません。それに昨日も——妾がそつと聞いて居りますと、御隱居

所でお二人が、奥樣を御離縁遊ばさうと云ふ御相談、それも確には聞きませんでしたが、今日旦那樣が藤井樣へ、お出で遊ばしたと云ふ事なら、屹度その事に違ひムいません。……でムいますから、憖じ先方から云はれるより、此方から奇麗に出てお仕舞ひ遊ばした方が、どんなに好いか知れません。

と、吾を忘れて膝を乘り出し、說き勸めたる赤心にお冬は嬉しさ胸に餘れど、元より吾にも分別あれば、容易に動く氣色も無く、伏したる頭を重たげにあげて、

(冬)お前がそれ程に云つてくれるのは、決して仇とは思はないが。妾はどうしても此家を、自分から出る事は出來ないのだよ。

と思ひ切つて云ひ放し、またもや涙に身を沈めぬ。

(廿二)

(冬)それは又、如何云ふ譯でムいます?

と、お卷は尙も急き込みて問へば、お冬は暫時答辭もなく、稍々ありて涙を呑み込み、

(冬)今更云ふ事もないけれど、常々噂をする通りの妾の阿父樣と云ふ方は昔氣質の一轍な方で一端斯うと定めた上は、決して後へは退かぬ御氣性、殊に妾が此處へ來る前などは、態々妾を呼び付けて、嫁付いてから後の心得を、一晩染々お話し下すつた位。總じて女子と云ふものは、一端自家の閾を跨いだ以上は、二度と再び歸られぬもの、姑が嚣しいの、良人の機嫌が取り惡いのと世間にはよくわる

事だが、苟にも人の妻となれば、それ位の辛抱は、元より覺悟せねばならぬ事。それを彼是小言を云ふのは、嫁の氣隨と云ふもの。お前も越路鼎の娘、其樣な氣隨者にしやうとて、幼稚い時から育てはせぬ。……かへすぐも辛抱が大切、此辛抱と云ふ事を忘れて、親の面を汚す事でもあつた時は、再び此家の疊は踏ませぬと、改まつての御說諭に……ハイ、決して其樣な事は致しませぬ、屹度辛抱致しますと、奇麗にお請合申したら、それで私も安心じやと、阿父樣も御機嫌よく、其笑顔までちやんと拜んで、やう〳〵此處へ嫁付いたが……まだ世間を見ぬ腹の中に、高をくゝつて居たのとは、一入增した姑樣……それにまた旦那樣までが、初の中こそ彼是と、お目を掛けて下されたものゝ、此頃では打て變つて、何を云ふても御不機嫌、お前が察してくれる通り、妾はつらくて……悲しくて……泣かぬ日は無いけれど、此處が阿父樣のおつやッた辛抱處と、おつと堪えて居るものゝ……此頃の樣に

………

云ひかけて胸迫まり、言葉が無くてお卷を見れば、彼方も今は聲さへ出ず、袂の中に顏を埋めぬ。

お冬は急ぎ鼻打ちかみ、

(冬)然し善く思ひ直して見れば、悲しいのつらいのと云ふのも、みんな妾が足はぬ故。此樣な事がもし實家へ知れて、阿父樣の耳にでも這入たなら、それこそ妾は何の樣に、お叱咤受るか知れやしない……又お前の云ふ通り、此方から離緣にでも……それが万一眞實であつたら……もうそれ迄と諦めも

するが……縱令ひ何樣な目に逢はうとも、妾から自家へ歸るとは……死んでも妾には出來ないよ。……それだから妹が、此間から逢ふ度毎に、妾の事を心配してくれて、姉さんからは云ひ惡くからうから、妾から阿父樣へ申上げて、自家へ歸るやうにしましやうと、幾度も云つては呉るけれども、そんな事が御兩方に知れては、入らぬ御心配を掛るばかりか、妾が申譯が無いから、決して云つてれ呉れであい。後生だから申上げないでト、昨日來た時も賴んで置いた位……だからお前もいろ〳〵と心配して呉る其の志は嬉しいけれども、斯う云ふ譯に成てるのだから……どうも聽く譯にはゆかないのだが、決して惡く取ては不可よ、

と、面には似ぬ強き覺悟に、お卷ハほと〳〵感心し今は凋れたる聲音にて、

(卷)左樣云ふ事でムいますなら、もう妾も何も申しますまい。是と申すも妾が、あんまりお可愛想だと思ひました故、我を忘れて申上げましたので、それをお聽きが無いからとて、何で惡く思ひましやう。それよりか妾が、悔しまぎれについ申し過ぎました處は、何卒御勘辨下さいまし(冬)なんの堪忍も何も入るものかネ、妾はお前の忠義な心よは、ほんとに感心して居たのだよ。(卷)なんのまア奥樣！忠義の忠の字も存じは致しません、鏡山のお初ではムいますまいし。(冬)鏡山と云へば……追付妾が氣樂な身に成つたら此お禮に芝居へ連れて行かうね。(卷)それはまア……今から樂に致して居りましやう。(冬)それも何時の事だか……目的にせずに待てお居で！(卷)なんの其樣な事が……もう直き

でムいますよ。妾が祈つて居りますもの。(冬)さぞ利く事だらうねー。(巻)それは利きます處ではムいません……ホヽヽと、果は笑に紛らして、二人の顔の眉も開けど、胸には殘る憂苦の種、容易に枯るゝ可うも見えず。

(廿三)

洛東岡崎と云ふ處も、村より町に變りて後は、年毎に人家建ち増て、今は此處にも紅塵の立たんとす。中にも東の方に寄りたる處に、後には立ち並ぶ家の棟を扣へ、前に茫々たる畑野を望みて、少さけれども汚からぬ、一軒の二階家あり。

百坪にも及ばんと覺しき庭、周圍は枳殼の生垣結び繞らしたれど、中はさまで取り繕ふてもあらず。丈高き松幹太き柏、櫻の若木桃の苗、さては名も知れぬ草木の、算を亂して植えられたる此方には、花壇とも思はるゝもの十坪あまりありて、それに續いて底き藁屋の見ゆるは、年の内にも春を立たすべき、温室と云ふものなるべし。其後には一本の梅樹ありて、太さ二抱に餘り、而も薄紅の色得も云はれぬは、往來の人も垣の外に佇みて、暫時去り敢へぬも道理なり。

家は大分に古びたれども、二階のみは新たに建て増したりと覺しく、屋根も瓦もて葺き、柱欄干も白木の儘にて、四季の眺望に備へんとにや、障紙に硝子さへ用ひたり。南の方には丸窓あれば、東は黒谷南禪寺、西は洛中の市街を越へて、愛宕鞍馬も手の中なるべし。さても此家の主人何者にやと、生垣の中

程に設けたる、古き衡門の柱を見れば、今日しも皇祖の祭を祝ふて、斜に揭げたる日の丸の國旗の蔭に、雨に曝らされたる表札一枚、蜒の匍ひし痕さへ添へて、植木職梅本七藏と、幽に影をぞ留めける。朝まだきより空晴れて、風さへ暖にそよ吹けば、梅には稍や晩けれど、眉を伸ばせし岸の柳、唇綻ぶ峰の櫻、まだ菜の花の黃色も見えねど、蝶は若草の眠を醒まして、坐ろに人の心も浮き立てば、春を占領たる東山も、笑ふて之を迎ふるに、四條五條の橋の上ならでも、老若男女貴賤都鄙、此邊まで溢れ來て、流石に今日は賑ひけり。

時は午後一時頃なるべし。北の方より畑道を辿りて、此の門前に來かゝりたる一人の男あり。年頃は廿前後なるべし。秩父縞の綿入に、銘仙の袷羽織、紺博多の角帶の〆めたる抔、町人らしくも見ゆれども、茶の鍔廣の帽子少し斜に被りて、手に細きステッキを突き、步行風の鷹揚なるは、矢張書生かとも思はる。

件の男は門の表札を一寸見て、獨り點頭きたる体なりしが、其儘つと這入り行き、勝手の方へ廻はりて、戶の外より慣々しく、

（男）七藏！七藏は在宅かイ？

と呼へは、內よりヘイと答へて出でたるは、此家の嬶とも思はるゝ、四十前後の女にて、男を見るより連忙しく禮をなし、

(女)オヤ若樣で厶いますか、よくまアれ入來下さいました。
男も帽を取りて輕く一禮し、
(男)七藏は居るかイ?、(女)へイ居りますで厶います。サ何卒お通り遊ばして!
男は別に案内も待たず、やがて座敷へ通りし處へ主人の植木屋七藏、戸外より手の土を拂ひながら急ぎ足にて入り來り女房を見るより小聲にて。
(七)誰樣が入らしつたんだ?
と問へば、女房は走り寄つて、甲斐々々しく盥に水を酌んで出しながら、
(女)藤井樣の若樣だよ。(七)藤井樣の?左樣か、それはれ珍らしい事ッた。で何處へお通し申した。
(女)御自分で奥へ入らしつたよ。(七)二階へれ通し申せばいゝに。
と、話す間に七藏は手を淸め、衣服の端折を卸ろして其儘座敷へ行かんとせしが、また小戻りして女房に耳折
(七)何か一口上げ度イな。(女)あの方は飮りやしないよ。(七)それぢやア鮓がよからう。(女)ハア、左樣しましやう。

(廿四)

讀者も旣に悟り玉はん、此處に訪れ來りし男は彼の藤井保雄ならんとは。

さても保雄は、わが戀人の小枝子が心の、頃日面白からぬ有樣と成りしも、偏へに春日の家の不和よりと知れば、何卒して其の調和を計り、吾が心をも休めんものと、頻りに念慮を碎きしかど、生憎春日の方にても、保兵衞が異見の効驗ありてか、後はさしたる苦情も聞えず、父も漸く安堵の体にて、空しく日を經る計りなるに、只小枝子のみは依然として、吾に强面く見ゆるにぞ、獨り快々として氣色優れず愁眉の開く間も無きに、持病の腦病さへ誘ひ出されて、果は學校へも出るとならねば、此上は身を閑靜な地に置きて、ゆる〳〵保養するが好しと、醫者の勸諭に父も許せしが、さりとて湯治と云ふ程にもわらねば、兼へ出入りの七藏が家の、市街を離れし處なるを幸ひ、其處に暫時下宿せんと、獨り思案を定め、兎も角も諾否を聞かんとて、さてこそ今日は訪づれしなれ。

七藏は軈て保雄を、二階へと案內すれば、此處は八疊一間なれど、上手に一間の床の間ありて、眞僞は知らねど吳春の一軸、紙雛とは舊曆に從ひてか。前には木蓮の盆栽一鉢、是はお手の物と知られぬ。七藏は押入の中より、まだ新しき綿郡內の座蒲團を出して、床の脇に坐を据へれば、保雄はそれを取て自ら丸窓の側に陣取り、障紙を明けて臂を掛け戸外の景色を眺めつゝ、

(保)何時來ても此前の家は、見晴しが好くつていゝ子

と云へば、七藏は茶を入れて出しながら、

(七)へイ、見晴しは一等でムいますが、此邊も段々開けて參りまして、家が近所に出來ますから、今

に代無しに成てしまひます。(保)左樣さ。夫に明後年ハ此邊がすつかり賑に成てしまふせ。(七)ヘッ、何故でムいます?(保)何故つて、博覽會が出來るもの。(七)それぢやア博覽會は、此處に出來るんでムいますか。(保)まうそれに極まつたサ。(七)オヤ〳〵、それぢやア今の中に何處かへ引越す事でムいますネ。(保)もう少し待つと地價が上るから、其の時分を見て賣るが一番だ。(七)ハヽー若樣も中々商法氣がムいますネ。

兎角する間に女房は、淸水燒の菓子皿に、到來合せと覺しき蒸菓子、八個ばかり盛りて持ち來り、(女)何もムいませんが、何卒お一ッお摘み遊ばしまして!それに今日はお休日でムいましやうから、どうぞ御ゆつくり遊ばして下さいまし。(保)もう關つて呉るな。さう心配されちや困る。(女)ナニ貴郞、此樣な田舍でムいますもの、御關ひ申し度くも何もありや致しません。

云ひ棄てゝ女房はまた下へ行けば。後に保雄は七藏に向ひ。

(保)ときに七藏!(七)へイ。(保)今日は少々依賴があつて來たんだが、どうだ聞いてくれるか。(七)へイ、何でムいますか私で叶ひます事なら。(保)叶ふとも……此の座敷を暫時貸して貰ひ度いんだ。(七)へイ〳〵、それはもう……何卒御ゆつくり遊ばしまして。(保)イエ今日計りではないよ、此の二階に住み度いんだが、何うだらう?(七)それぢやア永い事此處に居らつしやらうと云ふんでムいますネ。(保)永い事ッて、一月も居れば澤山なんだ。迷惑だらうが他に差支が無けれや置いてくれんか。

(七)それはもう他樣で厶いませんから、早速御受を致し度う厶いますが……

云ひかけて小鬢を掻き、さも云い惡くさうに、

(七)少々……どうも其……

(廿五)

(保)それでは他に差支があるのか。(七)へイ差支と申す譯でも厶いませんが……誠に折角で厶いますが……(保)そんなら強いてとは云はんが……一体何云ふ差支なんだ?(七)へイ……(保)云ひ惡い事なら聞き度くも無いが。(七)左樣おつしやいますと、私も誠に……申譯が厶いませんが、實は其の……娘が厶いますので。(保)お前の娘か。(七)へイ。(保)自家に居るのか。(七)否、他所に居りますので

(保)それが何うしたんだ?

と、疊みかけたる根問ひの言葉に、七藏今は包むに由なく、

(七)へイ貴郎で厶いますから、何も彼も申し上げますが、娘は實は、去る旦那樣の御贔負に成りまして、御妾に成て居りますので厶いますが、其旦那樣には、歷とした奥樣もお在り遊ばすのださうで、頃日其お實家の方から、何か苦情が起つた處から、娘ハ當分御暇と云ふ事に成るので厶いますが。見る影も無い娘も、不思議に旦那樣の御意に入りまして、表面暇を遣るが、其實ハ決して見棄る了簡は無い。只世間体を繕ふ斗りの事だから、暫時の間辛抱して、家へ歸つては呉れまいか!其中には又機

會を見て、舊の通り家に入る樣にもしやうし、又れ前が自家へ歸つたからとて、決して是切り逢はないと云ふでは無い、矢張今迄通りは尋ねて行き、また今迄通りの手當も仕やうと、斯樣なれ話で、誠に難有い事でムいますから、娘も得心致しまして、近々の中に今迄の處を引き拂ひ、丁度此二階が明いて居りますから、此處へ歸つて參ります都合に、實は成て居りますので……。へ……誠にどうも、申上惡くもあり、また申譯も無いれ話でムいますが、へ……どうか……折角でムいますが、此度の處は……

と、詫るが如くに語る言葉、どうやら思ひ當る事もあるにぞ、保雄ハ耳引立て聞き居しが、今しも膝を進ませて、更に何やら問ハんとする時、生憎下より階子を鳴らして、上り來りし例の女房かゝる、話の中途と知らねば、持ち來りし鮓の鉢を、兩人の間へ差し出し、

（女）どうも何もムいませんから、珍らしくも無いものでムいますが、何卒澤山召上りまして！

と云へば、七藏も一所に坐りて、

（七）どうも田舍でムいますから、とてもお宅樣で召上る程には參りませんが、如何でムいますお一個！

と、夫婦が交る〲勸めるに、保雄もあまり欲しくハ無けれど、手を着けぬは氣の毒と、一個取て喰ひ初むれば、私もお招伴をと、七藏も口をムグ付かして、――折角の話も此に途切れぬ。

さるにても今の話は、此間父より聞き込みし、春日が妾の身の上に、似たりと云ふも愚にて、どうやら其事らしければ、重ねて問はんとせしかども、女房の手前何とやら、心置かるゝ感ありて、云ひ出す勇氣も無く、邪魔と云ふにはあらねども、可成は女房の、早く此場を去れかしと、思ふ心は彼方に通せず今は御輿を此處に据ゑて、容易に動くべうも見えねば、いと本意なくも世間話に、暫時ハ時を移しけり。稍々ありて下の方に、人の來れる氣配しぬ。元より夫婦二人の家內、他に人の居るべき筈無ければ、女房は連忙しく坐を立ちて、下座敷へと降り行きしが、やがて高き調子にて、

（女）まア誰かと思つたら、お光なのかイ。

と、云ふ聲さへ聞えたり。

保雄は之を聞きて、

（保）誰が來たんだイ？

と小聲に問へバ、七藏は首を一寸傾け、

（七）大方娘で厶いましやう。（保）今話をした……？（七）へイ……旦那樣も御一所かも知れませんナ……

……（保）其旦那が……（七）一寸御免遊ばして…………

七藏も又下へ行きぬ。

（廿六）

七藏は急ぎ下座敷へ赴きしが、間も無く引返し來て、
（七）矢張り娘で厶ました。
と云ふに、保雄は氣遣はしく、
（保）では其旦那と云ふ人も一所なのか。
と問へバ、七藏は一寸頭を振りて、
（七）イヱ一人で厶いました。旦那は道寄をなすつて、後から御入來に成んださうで厶います。（保）然し後から來るとは來るんだ子。（七）へイ、何でも其、只今申しました事に就きましては下撿分旁 お入來に成るんださうで、不意で厶いますから私も驚きました。（保）それぢや私もう歸るとしやう。
（七）イヱそれでは恐入ります、決して關ひは致しません、何卒御ゆつくり遊ばしまして！
と口には云へど、今下座敷へ行きてより、何となくソワ〳〵して、狼狽へ居る氣色の見ゆれば、此方も亦用も無きに、（尤も聞き度事の無にあらねバ）永居するは却て氣の毒、且は今聞きし娘が事、もしわが想像の如くならバ、其旦那と云ふ人に、吾が面を合さんと、彼方も嘸かし迷惑なるべく、此方もあまり好ましからず。兎角は末の惡さ感せんより、今の間に立ち去るに如かずと、尚も種々に云ひ拵へ、はや其座を立ち上るに、七藏も今ハ強いて止めず、たま〳〵の御入來に、思ひ設けぬ妨害ありて、欵待さへ心に委せず、失禮の段眞平御用捨と、頻りに詫言を並べつゝ、門の外まで送り出しぬ。

かくて保雄は、七藏の家を立出でしが、さるにても先刻の話の、心に掛りて堪へ難さに、此儘歸るも本意ならず。幸ひ娘の旦那なる者も、後より此處へ來ると云へば、暫時此邊に徘徊して、私に其人を確めんと、故らに歩を緩めて、往來の人に目を注け居る中、遙かに川端の方よりして、走り來る一代の人力車あり。不圖其上の人を見れば、果せる哉其面は、己に胸の中に描き居たる、彼の春日錠之助なり。さてはと心に點頭くものから、見付けられては面倒と、帽子目深に面を外向け、首尾好く遣り過したる後、立ち止まりて其方を見れば、人力車は吾が出でし七藏の家の、門近くに進み行きて、やがて其處に梶棒を卸ろしぬ。

さてこそ彌々それなりけれ。こは思ひも寄らぬ事より、容易ならぬ事を發見せしものかな。誠に彼の七藏は、吾が十五六の頃よりして、吾が父の愛顧を受け、平常より出入る者なれども、彼に娘ありと云ふ事、今日が日まで聞きしとなく、況いてや其娘こそ、春日が魂魄を奪ひて、お冬に物を思はする（吾にも物を思はする）憎むべき彼の外妾なれとは實に夢にだも知らざりし。さりながら彼七藏は、元より腹黑き者にもあらぬに、何として其娘の、良からぬ事を行ふをば、咎めもせで棄て置くにや。娘の旦那なる者を、春日學士と知るならば、其が本妻の媒妁人は、わが父なりと云ふ事も、知らぬ筈はあるまじきに、さりとては合點行かず……

保雄が双の腕は、何時の間にやら胸の邊に組まれて、頭も自然と前に垂れ、足さへいとも重たげなり來

るとも無しに歩を運びて、保雄は何時か東丸太町へ來かゝりしが、折から後より勢よく駈け來りし、車夫の掛聲に驚かされて周章てゝ身を除けんとする時、車の上に聲ありて、

(乙)藤井君何處へ行たのです?

と、云ふに再び愕然して、其人の顔を見上れば、例の乙倉なるにぞ、保雄は急ぎ帽を取り、

(保)ャ乙倉君ですか。(乙)貴君病氣は如何です?。(保)ヱヽ有難う、何もまだ全快しませんから、今日は一寸散歩に出たんですが。貴郎は?(乙)私は一寸岡崎まで用達しに行きまして、今歸る處です。(保)左樣ですか……もう御用はありませんか。(乙)ヱヽもう家へ歸る斗りです。(保)途中で何ですが……實は一寸御話が……(乙)さうですか、では此處から御一所に行きませう。

云ひつゝ其儘車を下り、保雄と共に歩行きながら、

(乙)御話とは……何の事です?(保)例の春日さんの事で。(乙)フン。(保)實は今日不思議な事を發見したんです。(乙)へー……

(廿七)

寺町通に此頃新築して、軒に掛けたる看板に、ペンキの色も新しく、滋養亭と云ふ西洋料理屋あり。奥まりたる一室に、小さきテーブルを取りまきたる、四個の椅子の半を埋めて、差向へる二個の男。是ぞ乙倉と保雄とが、時刻も已に夕暮近く、且つは談話の便宜にとて、此處へは歩を枉しあるべし。

食事は已に了はりしと覺しく、前にはコーヒ碗と菓子皿のみ殘りて、花瓶の蔭に彳める、ストックビールの空罐の、キルクも失せていと淋しげなり。乙倉は斜めに椅子に憑れ、靜に楊枝を使ひながら、

(乙)成る程、其のれ話の樣子で見ると、春日と其外妾とは、なか〳〵離れる氣色は無いですな。(保)どうも左樣らしいです。世間体は手を切つたと見せて、內々其親の家で密會しやうと云ふ……(乙)然しそれなら全じ事ですな。(保)さうです……實は此間貴君が御入來の後、間もなく春日さんが見ヘましたから、阿父がそれとなく遠廻はしに意見したのです。すると其効驗があつたと見えて、其後は一向苦情も聞えませんし、また其外妾の方も、手を切るとか暇を出すとか云ふ事を、阿爺にも云ふて居たさうですが、今日聞いて見ますれば、全くそれも表面丈の事で、機會があつたら又引入れやうと云ふ……實ヌ怪しからんとです。(乙)それで其七藏と云ふ者の娘が、乃ち春日の外妾であると云ふ事は、大人も御存じないのですな。(保)無論知りはしません、私でさへ今日初めて聞いた位ですもの。(乙)成る程、然し彼の件は、餘程秘密を守つて居るものと見へて、私も此間甲村(第二回に甲野とせしは甲村の誤りなり)に聞くまでは、實に少しも知らなかつたのです。(保)甲村?幹事の甲村さんですか。(乙)エヽ。(保)は、ア……(と私に點頭く体なり、乙倉は見咎めて)(乙)何ですか。(保)何んでもありませんが、甲村さんなら思ひ當る事もあるんです。(乙)何う云ふ事ですか。(保)あの方なら、以前

七藏の家に下宿して居た事もありますから。(乙)成る程。それぢや此件ょは最初から關係しとるんですな。イヤ一体甲村と云ふ男ハ、其樣な事の周旋の大好きな奴で、實に幇間見た樣な奴ですからな。屹度彼奴與つて居るに相違ないです。(保)然し乙倉さん!現に此事は、春日さんが彼の家へ行く處迄私が目擊して來たのですから、もう確乎な話ですが。……是は却て事が仕易く成りましたな。(乙)いかにも左樣です、其外妾の親が、御宅へ出入る植木屋と云ふ事が解つた上は、頗る此方には便宜ですが……然し其事を——貴君が今日お出でに成つた事を、春日の方で知つたなら、また何か豫防の手段を遣りやしますまいか。(保)さア……それも請合はれませんな……成る程此奴は困まつたな……

と暫時思案の体なりしが、やゝあつて何か思ひ付きたる樣に、

(保)イヤ關ひません。もう此處まで解つた以上は、私が今日歸つてから、直ぐに阿爺にさう云ひつて篤と相談して見る積りです。其上で彼の七藏を呼び付けて、充分說諭して遣つたなら、七藏だつて自分の娘の事ですもの、何とでも云つて得心させて、此方から手を切らして仕舞ふに違ないです。(乙)左樣!それは氣遣ありません。其親父から說き付ければ、娘の方ハ譯も無い話で……。また其際春日がグヅ〳〵云つたら、其時こそ吾々友人が、嚴しく意見をしてやりましやうから。(保)サ何うか左樣願ひます。(乙)然し此件に就ては、貴君も大變御心配でしたな。肝腎の大人は、却て平氣で居らつしやるのに。

と、何氣無く云ひたる言葉、何故にや保雄の面は、又も染まりて紅なり。はや酒は醒めたるに。

（廿八）

此處ハ平安女學校の庭内なり。

年古りたる一株の彼岸櫻、柳の如く垂れたる枝ハ、昨夜の雨に色めきて、淡紅の絲を曝せば、其下の小高き芝生は、今日の日和に芽を伸ばして、綠の毛氈敷きしに似たり。

今しも其幹に憑れ、膝の上に一冊の本を開きて、餘念なく眺め居る一個の少女あり。容貌元より醜からず、衣の摸樣も宜を得たれば、宛然たる一幅の畫圖、あはれ名手の筆に成らば、幾多の人をや動かし得ん。

時は正午に近ければ、日の天の中程にありて、唐神髷に結ひたる少女の頭を、上より一直線に照らし、其が可愛らしき前髪を、膝に置きたる手の甲の、眞白き上に寫したるが。折々誘ひ來る風のまに〳〵、ほつれし髮の僅かに動く迄、影に見ゆるも風情あり。

少女は初めより右の手に、二枚計り葉の付きたる、小さき椿の枝を持ちたるが、靜かに口の邊に持ちゆきて、葉の尖を美しき唇に、ちよと甜つてはまた離し、二本の指にて振り動かすなど、凡て無心の動作にて、心は開きたる本の中に、全く奪はれたる如くなり。

されば今しも其傍に、人の進み來るも知らず、一心に眼を書上に注げば、何時とはなく幹の後に、又も

一人の少女現はれぬ。年は以前の者より、一ッ二ッ若かるべし。此は髮も束髮に結び、額にハ毛を切り下げて、肉豐なる丸顔の、美しからねど愛嬌あり。件の少女は尙も足音を忍び、櫻の幹近く彳みて、暫時此方を覗ひてありしが。かくても未だ心付かぬに、果は吾から聲を掛け、

(樂)小枝子さん、御勉强ねヱ！

と、云ひしに初めて心付き、此方の少女は急き振り向きて、

(小)お樂さんなの？まア愕然したワ。

さてこそ此二人は、彼の越路小枝子と、保雄の妹お樂なりけれ。

お樂は此時前の方へ廻はりて、

(樂)貴女先刻から此處に居らしつて？

と云へば、小枝子は尙俯視きたるまゝにて、

(小)ねヽ！(樂)さう。妾はちつとも知らなかつたもんだから、敎塲から扣所の方を、方々探してたのよ。(小)それはれ氣の毒だつたねヱ。……其樣に妾を探して……何か用があるの？(樂)何も用おや無いんですけども……氣に成つたから。(小)何が？(樂)貴女が見ゑないと……妾氣ゝ成つてならないワ。

と、やゝ甘へる如く云へバ。小枝子は却て、

(小)をかしい事ネ。何が氣に成るの?

と、さも冷淡なる挨拶に、お樂は不滿の面持にて、ぢつと小枝子が横面を見おろせしが。脇目も振らぬ書見の体に、此方も少し遠慮して、暫らく言葉を扣へ居りぬ。

稍々ありて小枝子は、何思ひけん急に本を伏せて、其儘前の方を見詰め、何に目を注けるともなく、ぢつと瞳を凝らし居るに。お樂ばもう好からうと、再び口を開きて、

(樂)小枝子さん!

と、呼べども聞ねぬか、更に返辭無し。尚重ねて、

(樂)ネー小枝子さん!

と、やゝ力を入れて云へば、小枝子は漸く此方を向きて、

(小)何です?

と云はしたれど、それさへ一向氣の乘らぬ返辭にて、何やら其胸の中には、他に案じ事のあるらし。此方より馴々しく言葉かけたるを、彼方にて菅無く受けらるゝほど、面白からぬものはあるまじ。お樂は幾度か小枝子を呼びて、話をせんと思へども、小枝子は何が氣に入らでや、更に打ち解たる樣子も無きに。果は此方は妙に照れて、頗る手持無沙汰なるに、又も默りて彳めば。小枝子はやがて身を起し、

衣の裾の土を拂ひ、やがて其場を去らんとする故。お樂は驚き走り寄つて、

(樂)アラ小枝子さん待て頂戴！

と、急ぎ袂に取り付きたり。

(廿九)

袂を取られたる小枝子は、流石にそれを拂ひもせず、只眞面目なる語氣にて、

(小)何の用なのよう？速くお云ひなさいな！

と、云ひしが更に答辭もなく、差し俯覗きたるのみ……何としけん急はしく、袂よりハンケチを取り出し、吾が面を掩ふよと見ねしが、こは如何に！はや涙を啜る體なり。

思ひもよらぬお樂の悲嘆に、小枝子は言葉を和らげて、

(小)オヤお樂さん、泣いてるの？まア如何したのよ？……ね？妾が返事しなかつたから？……そんなら堪忍して頂戴！何も泣なくッても解るぢやありませんか。

と、慰むれば慰むるほど、お樂は尙更咽び入るに、小枝子も頻りゐ氣を揉みて、持ちたる本を懷中に收め、背の方より抱く樣にして、お樂の顏を覗き込みながら、

(小)如何したのよう？譯も云はずに泣いちや解らないぢやありませんか……それとも何處か鹽梅が惡いの？(お樂は只頭を振る)……それぢや誰かに苛責められたの？(又頭を振る)……さうでも無い

？……では如何したの？妾になら云へない事無いでしやう。と、今は先の菅無きに似ず、いとも優しく問ひかくれば、お樂もやう〳〵面をあげ、まだ震ふ聲に覺束なくも、

(樂)さ、小枝子さん！(小)ハイ。(樂)あ……貴女……もう妾、妾を可愛がつて下さら……後は又堪え兼ねたる樣に、歔り上る斗りなり。

小枝子は此を聞きて、何か心に思ひ當る事のありしか、一寸點頭きながら又お樂に向ひ、左あらぬ体にて無造作に、

(小)まア何を云ふのかと思つたら、其樣な事！妾が何時貴女を、可愛がらないッて云ひました？(樂)でも……(小)でも……何うしたの？ア丶解つた。貴女は妾が、此頃あんまり口を利かないもんだから、それで變に思つてらつしやるんでしやう。それはほんとに餘計な心配だワ。妾が此頃あんまり口を利かないのは……此は他に少し理由があるからなのよ。それを貴女、邪推を廻はして……(樂)他に譯ッて何？(小)其譯ですか……それは云はなくッても可い事なの。(樂)そ、それぢや虛構……だワ。(小)アラ虛構なんぞ吐くもんですか！(樂)そんなら……云つたッて……(小)云つたッて關やしないけれども……

と私かに四邊を見廻はしぬ。

お樂は漸うに涙を呑み、眞面目に小枝子の顔を打守りて、其答辭を待つ体に、小枝子も今更包むに由なく、

(小)それぢやァ云ひますけども……貴女屹度默つて丶頂戴よ。お自家の御親父さんや、また御兄上さんに、さう仰つしやッちや嫌ですよ。(樂)誰にも云やしませんワ。(小)屹度ね?(樂)え丶。(小)そんなら咄しましやう。其譯と云ふのはね、貴女も御存じでしやう、妾の姉の事よ。(樂)それが何うしたの?(小)姉が今大變可愛さうなのよそれで如何かして樂にしてあげ度いと思つて、毎日そればつかり考へてるもんだから、ついお友達とも口を利かなく成たり、本を讀でもちつとも覺えられなくつて、ほんとに困るのよ。

初めて明す小枝子が心中、お樂も大方ハ推し居たれば、さして驚きたる氣色も無けれど、却て一層打ち凋れ、

(樂)さうなの。それで此頃妾と口を利かなかつたの?

と、尚も恨を含みて云へバ小枝子は周章て丶、

(小)だからさ。貴女ばかりぢや無のよ、誰とでも口を利かなかつたんだワ。(樂)さう……大方左樣だらうッて、此間も自家の兄と……(小)え御兄上樣と?(樂)え丶。兄も大變心配してるの……

(三十)

お樂が最後に告げたる言葉は、小枝子も聞棄難くやありけん、急はしく問ひかけたり。
(小)それでは保雄さんまで、わたしの姉の事で心配して居らつしやるんですか。(樂)えゝ……貴女の事も。(小)妾の事も? まア……
と、小枝子が胸の轟きははや面にも現はれたり。
お樂は四邊に人無きまゝ、尚も小枝子に向ひて、
(樂)貴女が打ち明けて下すつたら、妾もみんな咄しますが、實は自家の兄も——貴女が此頃大層腹を立てゝ居らつしやる樣だが、是は屹度お冬さんの事に違ひない。お冬さんが御苦勞なさるのも、元はと云へば自家の阿爺さんが、媒妁人をした故だから、屹度阿爺さんを恨んでらつしやるに違ひない。それで私やお前にまでも、以前の樣に親しくなさらないんだらうッて、此間も話をして居たんですよ。ですから兄は大變に心配をして此樣な事から越路さん許と、自家との間が惡くなつても、誠に約らない話しだから、何うかして此事は、圓く收結を付けたいと云ッて、頻りに氣を揉んで……其爲にまた腦病が起つて、此頃ぢや學校も休んで居るんですの(小)まアそれぢや此頃は御病氣なの? (樂)ねゝ。(小)まア、何うしやう?!
と言葉も無くて太息のみ。暫くしてさも面目無けに、
(小)アゝ妾が惡かつたと! 何卒堪忍して頂戴! ほんとに今氣が付いて見れば、妾が此間中から、貴女

ともあんまり口を利かなかつたり、また保雄さんにも……お手紙を下すつてもお返事をしなかつたりしたのハ、ほんとに妾が惡かつたので……今だから白狀しますけれども、一時は貴女の御親父樣を、恨んだともありましたし、また保雄さんも、何もね惡い事は無いのに、……少しは恨めしく……まア思つた事もありましたけれども、此間も姉にさう云はれたり、また自分でも段々考へて見ると、全く是は了簡違で、恨むのは此方が無理と、此頃では後悔してるんですよ。それに妾は、貴女も知てる通り、一酷な性分だもんですから、かうと思ひ込むと、つい腹が立つて、罪も無い者を憎んだり何かして、後であゝ濟まないと思つて、獨りで氣を揉む事が幾度もあるんですよ。——ですけどももう今では、貴女の事も御親父樣の事も、また保雄さんの事も、何とも思つてやしないんですから、貴女もけして氣にかけちやいけませんよ。また保雄さんにも、貴女から何卒宜敷云つて頂戴！

と、詫るが如く物語るに、お樂は嬉しさ面に浮べ、

(樂)それぢや一端は憎らしかつたけども、今ぢやもう何とも思はないのね？(小)今ぢや却て濟まないと思ふ位なのよ。それに保雄さんも此爲に、御病氣まで起して居らしやると聞いちや、お氣の毒でく妾は何うしやうと思つてるんだワ。(樂)そんなら妾も安心したワ。自家へ歸つたら兄にも左樣云ひましやう。(小)はア、どうか宜敷云つて頂戴！實は妾が一度お目に掛つてお詫をすると可いんですけども……(云ひかけて獨り點頭き)アヽそんなら妾れ手紙を上げましやう。後に書いて置きますから、

貴女歸期に持てッて頂戴な！(樂)えゝ、そんなら何卒左樣して！

と、今ハ互ひに心も解け、お樂が涙の全く乾けば、小枝子が胸の曇も晴れ、果ハ笑顔の春めきて、是や村雨の過ぎたる後、却て大地の堅う成るてふ、古き諺にも似たりけり。

此時校堂の方に時間を報ずる鐘の音聞ゑて、はや十二時になりたれば、小枝子れ樂の兩人ハ、睦まじげに手を繋ぎたるまゝ食堂の方へと辿りながらも

(小)お樂さん！(樂)何？(小)保雄さんの御病氣は矢張り腦病なの？(樂)さうだッて。(小)妾も何だか……(云つて一寸額を押へ)此頃は頭が痛くッて仕樣が無いのよ。(樂)それはいけない事ね！

(卅一)

(樂)兄上樣居らしつて！

と襖の外より聲を掛けて、連忙しく這入り來りしは、保雄が妹れ樂なり。

此方の窓に凭れて、其前に咲き亂れたる小米櫻を、餘念無く眺め居たる保雄は、靜に振り向きて、

(保)何だ？

と云へば、お樂ハイソ〳〵として其側へ駈け寄り、

(樂)今日ねヱ、あの學校でねヱ、小枝子さんにそう云つたらねヱ、小枝子さんが大變に謝罪つて、それから此手紙を兄上樣に上げて吳れッて……！

と、袂より洋紙の封筒を出し、兄に渡して其儘坐に付き、尚も其顔を見詰めたる樣、何かは知らずいと得意氣なり。

保雄は封筒を手に取りながら、

(保)小枝子さんが謝罪つたッて?(樂)はア(保)何を?(樂)矢張り兄上樣が此間云つてた通り、小枝子さんも初めの中は、自家の父上樣や、兄上樣や、又妾までも恨んでたんですとさ。ですけども、段々考へて見ると、何も惡氣で仕た譯ぢやないから、恨むのは此方の無理だと云つて、今ぢや後悔してるんですとさ。だから決して心配しちやいけない、兄上樣にもさう云つて吳れッて……それで此れ手紙をお書きなすつたの……

と、語るを聞いて保雄ハ、思はずニッと片頰笑み、

(保)左樣か。私が今朝敎へた樣に云つたか。(樂)あの通りは云ひませんでしたけども、妾…泣いたワ。(保)何だッて?(樂)だッて……妾が折角云はうとするのに、小枝子さんてばちつとも聞かないで、他へ行つちまはうとするから、妾は何だか悲しく成て、とう〳〵泣き出したの。そしたら小枝子さんが愕然して、急に優しく成て……それから今云つた樣に、謝罪つたり辨解したりしたの……矢張り泣いた方がよかつたのよ。(保)ハヽヽそれは過失の功名だッたね。

保雄は笑ひながら、此時初めて封筒を開き、中より小判の西洋紙に、鉛筆もて細々と認めたる、一通の

書狀を取り出し、口の中にて讀み居りしが。何やら獨り點頭きて、又元の如く四つに疊み、靜かに封筒の中に收むれば、お樂は傍より氣遣はしげに、

（樂）何が書いたつて？（保）ナニお前の云つた通りさ。然し私の病氣の事を知てるが……これはお前がさう云つたのかイ？（樂）えゝ左樣です。（保）道理で此處に見舞が書いてある。（樂）さう。お返事は？

（保）明日までに書いとかう。

と語り合ふ處へ、奥より小間使の小女が、お樂の行衛を尋ねて來て、

（女）オヤお孃樣！此處に居らしやたので厶いますか。（樂）アゝ先刻から此處だよ。用かイ？（女）ヘイ、あの奥樣が召して居らつしやいます。（樂）さう。今行くよ。

お樂はやがて小間使と共に、母の居間の方へ行きぬ。

後に保雄は、一端收めたる小枝子の書狀を、また封筒より取り出し、再び三たび眼を通して、獨り笑を浮べ居りしが、誰かは知らず庭の方に、人の來かゝる足音するに、驚きてまた元の如く收め、庭の方をキッと見遣れば、今しも折戸より入り來るは、例の植木屋七藏なり。

七藏は保雄を見るより、進み寄つて小腰をかゞめ、

（七）若樣！一昨日は失禮致しました。一向お愛想も厶いませんで。（保）イャ飛んだ御厄介だつたねエ。（七）何う仕りまして！……………時に今日お召に成ましたのは、何の御用で厶いましやう。（保）サア

私も知らんよ。
七藏は小首を傾け、
(七)お庭はつい此間手を入れましたし……ハテ……

(卅二)

今日は日和もいと長閑けく、殊に主人も留守なれば、此間より溜りたる、汚穢物の仕末を付けんとて、彼の七藏の女房お作は、正午後より井戸端に陣取りて、土に汚れたる夫の股引、垢に染みたる吾が襦袢など、彼を洗ひ、是を濯ぐ程に春の日の永きを覺えず、はや入相にも近づきぬ。乾きたる物は已に取り込みても、後ばせに洗ひたるものは、尚竹竿につり下げられて、濕氣を含む裙重たげに、入日を見送るも憐なり。
此時主人の七藏は、表の方より歸り來りしが、何とやしけん顏色常ならず、仔細らしく腕さへ組みて、深き思案に沈める体なり。
(作)お前さん如何か仕やしないか。大層顏の色が惡いよ。
と、お作が早くも見咎めたれど、七藏はそれに答へもせず。やがて火鉢の側に坐を搆へて煙艸二三服吸ひかけしが、それさへ吹き出す煙と共に、太息さへ洩れて聞えたり。
お作は頻りに氣を採みて、其側へ自己も坐はり、

(作)如何したんだネー。お前さん藤井樣で、又お叱咤でも受けて來たのかイ?

と、罵る樣に問掛くれば、七藏は漸う面を上げ、

(七)お作!どうも困つた事が出來てのゥ。

と、云へばお作は膝を進ませ、

(作)困つた事ッて、何が出來たんです?(七)まア聞いて呉れ!――今日藤井樣からお召があつたから、何事かと思つて行て見ると、お庭の手入や盆栽の事では無くッて……飛でも無ヱお話よ。まづ旦那樣がおつしやるには、七藏!今日貴樣を呼んだのは他の事でも無い、少し貴樣に依賴があるんだとおつしやるから。へイ、此七藏にれ依賴とは、一体何事で厶いますてヱと、イヤ他の事でもない、貴樣の娘の事だ。貴樣の娘を暫時家へ寄越して貰ひ度いのだと、おつしやるだらうぢや無ヱか。あの物堅ヱ旦那樣の事だから、何も妾に仕樣と云ふ譯ぢやアあるめヱが、兎に角お光はあゝ云ふ譯に成てるんだから、實は云々で厶いますと云つて、お斷りを申上ると。イヤそれを承知して居るから。尙の事此方へ寄越してもらいたいとれつしやるから、旦那もあんまり解らねヱ事を云ふ方だと思つて、吾ア正直だから少し勃然として、それは然し旦那樣、ちつと御無理で厶いましやうと申上ると。サヽそれだから依賴むのだが、實ハ此には理由のある事でと、それから段々お咄しに成るのを聞いて見ると、まア驚いたらうじやねヱか。お光の旦那の春日樣ハ、藤井樣とれんなじのお國の方ださうで、其御本妻の

お媒妁人も、藤井樣がなすつたんだとよ。——吾ア其樣な事たア夢にも知らねヱから、初めて聞いて愕然して、へー左樣でムヱましたかと、只呆れて聞いてると。又旦那樣のおつしるにや、——それは妾の一人や二人、男の甲斐性だから仕方が無いけれども、何を云ふにも其爲めに、春日の家が揉めて居て見れば、妻君が何より氣の毒だから、何卒此處は私の顏を立てゝ、お前の娘と春日の手を、奇麗さつぱりと切てくれんか。其代り後は私が引取つて、今迄通りの手當をしてやるからと、斯う事を分けてれつしやられて見ると、吾ア只もう面目無くつて、脇の下は汗ビツショリよ。……然し又考へて見れば、春日の旦那にも、御恩に成た事は大抵ぢや無し、……して見れば今更娘を、無理に引き離すと云ふ譯にもゆかねヱ。……と云つて藤井樣でも、あれ程おつしやるものを、それや出來ませんとお斷り申す譯にもゆかず、……吾アほんとに弱つちまつた。けれどもまア仕方が無ヱから、兎も角もお請合申しましたと云つて、やう〳〵お暇を頂いて來たが、どうも氣に成て〳〵、……折角頂いた酒も、何だか變な處へ這入つてしまふし、……吾もうほんとに、心配で成らねヱんだ。

と、泣くが如くに訴ふれば、お作は始終を聞き了りて、更に驚く氣色も無く、

(作)まア何だと思つたら其樣な事、それが何でそんなに心配なんだらう。お前さんもほんとうに、何と云ふ氣の小さな人だらうネ。だから世間でもお前さんの事を、七藏と云ふ人はわりやしないよ、皆愚痴藏〳〵ッて云てるよ。ほんとに確乎お仕なね！(七)確乎しろッたつて……まア此事ア如何したら

可いだらう？（作）云はずと知れてるぢや無いかネ！（七）何うして？（作）解らない人だネ。お前さんは此間春日の旦那に何とお云ひだ？此事は誰にも云ッて呉れるな！世間へ知れると困るからとおつしやッたら。ヘイそれはもう大丈夫で厶います、屹度誰にも申しませんと、奇麗に請合つて置きながら、其舌の根も乾かない中に、藤井樣の若樣に饒舌つちまつたもんだから、此樣な事に成るんだアね。お前さんが勝手で招いた事ッたから、妾ア彼是云ふ事ア無いけれども、……（七）お前に左樣云はれちや困るぢやねヱか。（作）そんなら何も案じる事ア無い。妾の云ふ通りにしてお置きな！

（卅二）

去る程に春日方にては、其後さしたる苦情も聞えず、是も皆彼の保兵衛が、春日を捕へて異見なせし、其效驗かと覺ゆるに、――蓋し大なる間違なり。春日は元來片意地者にて、自信の力も流石に強ければ、吾が平常の行爲に就きて、人に彼是云はるゝは、常より大嫌ひなる處なり。されば過る日藤井を訪づれて、端無くも吾が不品行と、妻に對する冷遇とに付き、眞綿で縊る異見を聞きしより、心中頗る面白からず、時としては自暴を起して、さほどに面倒なる妻ならば、寧ろ離縁することそよけれ、吾に微塵も氣に入らぬ女、去るに何の未練があるべきと、力味返る事もありしが。母のお篠は邪曲ながらも、春日よりは事に慣れて、所謂る如才無きと云ふ方なれば、角立ちたる事をして、後の誹を招かんも如何と、却て上面は何處までも、前非を悔ひたる体に見せかけ、今迄とは打て變つて、お冬に優しく仕向くれども、

心底からの慈悲ならぬは、初より見え透きて、氣味の惡さは一入なり。さるからに此家族は、兎角眞の和合を好まず、世に云ふ前世の敵同士が、假に一家に住めるが如く、水の中なる油一滴、其同一に混らんは、今時の世なりや覺束無し。

さればお冬が辛勞は、依然として根を斷たず。實に其袖は人こそ知らぬ、乾く間もなき沖の石の、重さ罪科に繋がれたる、身は囚人の如くなり。

かゝる中にも只二ツ、――姉思ひなる小枝子の方より、送り來れる書狀見る事と、彼の忠義なるお卷を相手に、心の憂苦を語り合ふが、涙の中の娯樂なりしに、何としやしけん此頃は、小枝子の方より音信無く。力に思ふ彼のお卷は、兎角お篠の氣に入らで、何時暇出されんも知れねば、從者を討れんとする落人の、心細さは云はん方無し。

今日の午後の事なり。越路方より突然使者來りて、私かに一通の書狀をば、お冬宛にて屆けたり。お冬はそれを取るより早く、急ぎ封を開きて見れば、中は母の手跡にて、時候の挨拶形の如く、其末に、少々お咄し申度事有レ之候へば、一寸御出可有レ之候とあり。

何用かは知らねども、態々使を寄越すからには、只事にはあるまじと、胸はまづ轟くものから、さわらぬ体にて暇を乞ひ、車を飛ばして實家へ來て見れば、折から父は會社へ出勤し、小枝子は又學校へ出で、只母のみ自己が居間の、火鉢の邊に座はり居たるが。今お冬の入り來るを見て、常ならばさも嬉し氣に、

笑傾けて迎ふべきなれど、何故にや今日はいと淋しげに、只默禮せし斗りなり。

れ冬はまづ進み寄りて、

(冬)阿母さま御無沙汰を致しました。先程ハ又お手紙を有難うムいました。

と云へば、母は沈みたる調子にて、

(母)よく直ぐに出られたねェ。

と、只それ丈の言葉なるに、お冬が耳には何と響きてか、

(冬)ハイ

と云ふ返辭も震へて、私かに眼を數瞬きぬ。

稍ありてお冬は俯視きたる儘、

(冬)あのお手紙は……何か御用でムいますか、

と、云へども何の答辭無きに、訝りて額越しに見上れば、こは如何に母の兩眼は、羽織の袖に閉ぢられぬ。

(卅四)

霎時は兩人共言葉無く、淚に暮れてのみ居たりしが、漸うにして母は口を開き、

(母)譯も云はずに泣いてしまつては、お前も嘸怪訝く思ふだらうが、妾はれ前の貌を見ると……何だ

か急に悲しく成つて……(云ひながら又涙を拭き)此様に涙が出て仕やうが無いんだよ。……年を取ると涙脆くなッていけない。……ほんとにお前堪忍しておくれよ。

と云へば冬はそれを打ち消し、

(冬)アレ阿母さま！何をおつしやるので厶います？妾の顔を御覧遊ばすのが、……何で其様に悲しいので厶います？

と、態と空とぼけて云へば、母は其顔をぢつと見て

(母)サアお前が左様云ふから、妾は猶の事泣き度く成る……お前は何も知るまいと思ふだらうが、妾は皆知つて居るのだよ。妾やまた阿父様に御心配を掛けまいと思つて、人にも云はずにぢつと辛抱して居る、其お前の心を察しると……わ、妾は悲しくッて……

と、後は又涙なり。

さてはわが日頃の有様を、阿母様には已に御存じかト、思へば急に胸閉がりて、涙は又もはふり落ちぬ。

母は漸々に氣を取り直し、

(母)だがお冬、お前も兼々知ての通り、阿父様はあゝ云ふ御氣性の人、假令ひ此事が聞れたとて、先方が悪いとは決しておつしやらず、何も彼もお前の落度にして……お前がお叱咤受るは知れた事だが……此妾に云はせて見ると、是は寧その事今の中に、縁を切てしまつた方が、遙にましだと思ふけれ

ど……それも當人の了簡にある事……一体お前ハ何う思ふ？……何樣につらい感をしても、決して家へは歸らない氣か。……それともまた、迚も辛抱が出來ないから、早く縁を切つてしまひたいのだが、阿父樣の手前を憚かつて、それで遠慮をして居るか……若し左樣云ふ事ならば、妾が何の樣にも申上げて、阿父樣の御得心の行く樣にしやうが……一体お前は如何云ふ了簡だイ？

と、意味あり氣なる尋問に、お冬は霎時首を垂れ、思案に沈む体なりしが、

（冬）阿母樣のお言葉は、嬉しうはムいますけれども、最初に彼處へ參ります時、阿父樣にも申上げました通り、妾は何樣に辛い目に逢ひますとも、二度と實家へは歸りませぬ心算でムいます（母）ソリヤあの時はあの時さ。何も昔の武士でハ無し、一度盟つた事だから、今更後へは引かれないと、頑固な事を云ふにも及ばない。迚も先の見込が付かないものなら、早く見切つてしまふ方が好いぢやないか。

（冬）それでは女の操と云ふものが……（母）サヽ其操も事による。人を見て法を說けと、古い諺にも云ふでは無いか、先方で何とも思はぬ者に、入らぬ操を立てたと云つて、何の役にも立たないでは無いか。（冬）阿母樣！そ、それはあんまりでムいましやう。何ぼ妾が意氣地が無いと云て、此辛抱の出來ない事はムいません。それに……操を破れなどヽ、阿母樣のお口から……それはあんまりなお輕蔑……

……妾はお恨めしくムいます。

と、思ひ込んだる一言に、流石の母も言葉詰りて、霎時は只默然と、お冬の顏を打ち守りしが。何故か

急に聲を潜め、首を少し差し伸べて、
（母）お冬！今云つたのはお前眞實か。
と問へばれ冬は面を擡げ、恨めし氣に母の貌を見て、
（冬）まだお疑ひで厶いますか。（母）イヤ疑ひはせぬけれど、それが眞實の事ならば、――何を隱さう
それを聞ひて、妾も實ハ安心したよ。

（卅五）

此日半日は實家に暮らして、漸う午後の四時頃、お冬は自己が家に歸りぬ。
待ち兼ねたるお卷は、遽忙しく出で來りて、
（卷）奥樣！御實家ハ何の御用で厶いました？
と、氣遣はしげに尋ぬれば、
（冬）ナニ大した用でも無かつたよ。
と、態と言葉を濁らすは、語るを好まぬ樣子なるにお卷は尚更案じ顔。
（卷）でもお面色は惡し……もしや又たあの一件では厶いませんか。妾も氣に成てなりませんから、何卒お咄し遊ばして下さいまし！
と、切なる尋問に包みもあらず、

(冬)左様氣にしては困るけれど、今日阿母様に呼ばれたのハ、矢張りあの一件なのさ。(卷)左様でムいましやうね。ではもう御離縁のお話が……(冬)ナニさうでは無いんだよ。譯を云はなけりや解らないが、初めは何でも阿母様が、妾の氣を惹いて見やうとお思ひなすッて、態と離縁のお話をなすッたけども。妾が何處迄も強情張つて、縱令ひ何樣な事があつても、實家へ歸る氣はムいませんと云つたら、それを聞いて妾も安心した。實は此間から噂を聞いて、いかにもお前が可愛さうだから、寧ろの事引取つてしまつた方が、後の爲にも好からうと、其事を阿父様に申上げたら。阿父様は大層御立腹遊ばして、馬鹿な！其樣な事が出來るものか。よしんば先方が何樣なに辛い家だと云ッて、それを辛抱する事が出來ず、實家へ歸り度いと云ふ了簡の娘なら、決して此處の家へは入れん。娘一人棄てたと思へば如何な事でも諦らめられる、それを可愛相だの不憫だのと、女々しい事を云ひ出せば、尚更娘の氣隨を增すワと、却て妾が叱られた位で、迚もお心の動く氣色は無い故。斯云ふ勢の處へ、もしお前が彼是と、苦情でも云ひ出した日には、何樣な事になるかも知れないと、それが第一案じられるし。又お前の心を察しると、可愛想で堪らないから、兎も角も一度逢つて、篤と了簡を聞き度いと思つて、それで態々呼んだのだが。お前が左様云ふ覺悟で居るなら、妾も大きに安心故、此上もとに辛抱して、時節の來るのを待て居ておくれ！さうすれば又其中に、樂しい月日が廻はつて來やうと、懇々も云つてお聞かせなさるから、イヱ其御心配には及びませぬ、屹度辛抱致しますと、お請合申し

て歸つて來たのさ。

と一伍一什を物語れば、お卷は聞いて眉を顰め、

（卷）さう云ふれ話で厶いましたか。……したが折角の其お話も、もう無駄で厶いましたねェ。……と、云ふをお冬は聞き咎め、

（冬）何とお云ひだ？もう無駄とは……それや何が……（卷）ハイ……（冬）アレ、泣き出してハ解らぬではないか！

と、稍々急き込みて問ひかくれば、お卷はさも力無氣に、

（卷）奥樣！……もう何うしても御離緣で厶います。（冬）何うしても離緣とは？（卷）サ其譯は……旦那樣はあのお光さんを、表面切れたと見せて、實はお光さんの親許へ、暫時の間隱して置き內證でれ通ひ遊ばす心算の處。それが藤井樣へ知れたとかで、もうかうなれや破れかぶれだと、先刻御隱居樣と御相談遊ばして、貴女樣を御離緣遊ばし、その跡へお光さんを、お入れ遊ばさうと云ふ事に、もう極まつて仕舞ひました。（冬）してそれハ何うして知れた。（卷）はい車夫の千吉どんに。（冬）其千吉は何處に居る？（卷）もう御隱居樣のお伴をして、先刻お光さんの處へ參りました。

（卅六）

お冬はかくと聞くよりも、あまりの事に胸潰れ、只茫然たる計りなるに、お卷はさこそと膝を進ませ、

(巻)サ丶もうから云ふ事に成て居るので厶いますから、貴女が何程御辛抱遊ばす御了簡でも、所詮此處には居らつしやれません。ですから此間も申上げた通り、早く此處を出てお仕舞ひ遊ばせ！奥様さへお出遊ばせば、誰が此様な處に居るもんで厶いますか、妾も直ぐに宿へ帰ります。……ね、もし、れ泣き遊ばす處で厶いません。早くれ支度遊ばして！

と、云へどもお冬は更に答へず、泣き崩折れて正体無し。

かゝる處へ甥の信三、終日遊び草臥れて、戸外の方より帰り來たりしが、かくと見るより走り寄て、

(信)アラ叔母さん、何泣てるの？またお祖母さんに叱られたの……だつてお祖母さんはお留守ぢやないか……よう、何を泣いてるの？

と、脊に取りつきて搖りつゝ、顔を覗き込で尋ねるに、お冬は尚更堪り兼ね、

(冬)オゝ信ちやん！

と首を擡げて、霎時其顔を打守りしが、涙を拂ひてニッコと打ち笑み、

(冬)叔母さんは泣いてるんぢやないの。(信)嘘ウ泣いてるんだ。……ソラ巻も眼を拭いてるぢやないか。

お巻は無理に笑を押し出して、

(巻)ホゝゝ誰が泣くもんで厶いますか。(冬)さうとも……あんまり二人が笑つたもんだから此様に

涙が出たんだワ。
信三は二人の顔を見較べ子供だと思て馬鹿にしてもちやんと樣子は知つるぞと、云はぬ計りの顔色にて、
（信）笑つて涙を出す奴が、何處の國にあるもんか。
と、不平さうに云ひ放ちしが、態と又氣を換へて、
（信）アヽ腹が減つた。卷早く御膳お吳くれ！（卷）オヤ〳〵、それは御氣の毒樣で厶いましたネ。そんなら直ぐに差し上げましやう。
と、云ひながら立上り、お卷は勝手の方へ行きぬ。後にお冬は信三の手を取て、膝近く引き寄せしが。氣遣はしげに見上げたる、信三の顔をぢつと眺め、何やら云はんとして云ひ得ぬに、信三は催促して、
（信）叔母さん何うするの？（冬）何でも無いけども……信ちやんの阿母さんはまだ塩梅が惡いの？（信）何時癒るか知れやしない。（冬）早く側へ行き度いでしやうネ。（信）行きたか無いさ。僕ア叔母さんさい居れや。（冬）もし叔母さんが居なく成つたら、信ちやん如何して？
此問題には太く驚きたる体にて、
（信）何時叔母さん居なく成るの？（冬）イヤサ、そんな事は無いけれども……もしか其樣な時には？
（信）もしか其樣な時につて……僕ア其樣な事アいやだア。（冬）嫌でも萬一さう成つたら。（信）嫌だ、嫌だア。

果は泣聲に成て膝に取りつくに、お冬も今は逆らはず、

(冬)ホヽヽそんなに騷ぐ事アありやしませんよ。妾が何も今居なく成るんでは無し。……妾は何時まで經ても、信ちやんの側を離れる事アありませんから、大丈夫！安心して居らツしやい！(信)そんなら何故彼樣な事云つたの？(冬)……あれは只串戲よ……

と、云ひ紛らして居る處へ、お卷は勝手の方より來て、

(卷)坊ちやま御飯が宜敷うムいますよ。

と、云ふに信三は、唯々と答て次の間へ出で行き、膳に向ひて箸を取りしが、先刻に空腹と呟きしにも似ず、一二杯急はしく掻き込みたるまゝ、再びれ冬の居間へ馳けゆきしが忽ち聲を張り上げて、

(信)叔母さん！叔母さん！何處へ行たの？

と、呼び立ても見當らぬ樣子に、お卷も續いて出で來たり、一所に成て探せしが、家の中には姿だに見ねず。やがて玄關へ來て見れば先に脫ぎ棄てたるお冬の履物、誰が持ち行きけん影だに無し。

(卅七)

扨も亦彼の保雄は、吾が妹より受取りし書狀に、小枝子が眞情の程を知りて、初めて胸の曇も晴るれば、腦の痛も何時しか癒えて此上は徒らに家に籠らんも要無しと、二三日前よりは學校へ出でゝ、授業を受くる事となりぬ。

今日も常の如く登校し、午後三時と云ふ定めの時刻に、吾が家へ戻りしが、暫くして父安兵衛が、遽忙しく入り來たり、これを見よとて示したる手紙は、正しく春日が手蹟にて、其本文ハ思ひも寄らぬ、お冬離縁の申込なり。

あまりの事に言葉も無く、父の顔のみ打守れば、父はいとも打凋れたる体にて、「最前此手紙が屆きしゆゑ、これは容易ならずと思ひ、直ちに車を走らせて、春日方へ訪づれ見れば、學校よりの歸るさ、何處へ立寄りしか未だ歸らず。母親はと問へばそれも留守、そんならお冬殿に逢ひ度いと云へば、それも今日ハ母御に呼ばれて、實家へ行きしと云ふ事故直ぐ其足で越路殿へ、赴かんとは思ひしかど。兎角今一度春日に逢ふて、篤と其仔細を糺さでは、媒介人の一分立たずと、思ひ直して歸りはしたれど、今にも此事越路殿の、耳に入りなバ一大事と、實は胸を痛めて居る」と、眉を顰めての物語に、保雄は聞いて面色も、變らん斗りに驚きしが。稍ありて心に頭點き、やがて父に打ち向ひて、

(保)それハ嘸御心配で厶いましやう。然し……私の口から斯樣な事を申上げては、誠に差し出がましい事で厶いますが、此事は何卒私に、お委かせ下さる譯には參りますまいか。(父)委かして呉れなら委かしもしやうが、それにハ何ぞよい分別があるのか。(保)よい分別と申してハ御座いませんが。春日さんが左樣云ふ事をおつしやるのも、元因ハ彼の妾の一件が、此方の耳へ這入つた處から、少し自棄に成られたのだらうと思ひます。(父)成る程其邊もあるらしい。(保)ですから私は此から行て、七

藏を連れて來て、何うでも斯うでもあの娘と、春日さんとの手を切らしてしまひましやう。(父)それがお前に出來るなら、一つ骨を折て貰ひ度い。(保)よろしう厶います、不及ながら遣つて見ましやう。(父)さうすれば私は又、春日の方を說得して、了簡違の無いやうにしやうから。(保)そんなら何卒左樣云ふ事に?

と、茲に父子は手筈を定めぬ。

かくて保雄は、直ちに車を走らせて、七藏方へ赴きしに、折惡しく不在にて、出先を問へば曖昧なる返事に、保雄は怪しと思ふものから、左あらぬ体にて其處を立去り、時刻を移して再び尋ね見んと、用は無けれど丸太町を、元來し方へ引返し、來るとも無しに鴨河を、西の方へと越え行けば。何時しか日さへ山の端に、沈み勝なるわが胸の、思に似たる空摸樣、雨を含てドンヨリと、壺を冠りし如くなり。御苑近く來る程に、はや博覽會の門を閉ぢて、仙洞御所の森の樹立、塒に騷ぐ群鴉の、聲も漸く鎭まれば、さしも賑ひし白晝の景色は、彼の山寺の花と共に、入相の鐘に散されて、彼方に一人此方に三人、歸途を急ぐ人の足の、忙しさを見るのみなりしが。——不意に後の方に當りて、あれエと叫ぶ人の聲、——而も女子の聲音なり。

保雄は忽ち立ち止り、キッと後の方を見れば、誰かわ知らず醉漢の、一人の女に戲れかゝりて、傍若無人の振舞なすにぞ、保雄は見るに堪えられず。ツカ〳〵と進みよりて、醉漢を引き放し、尚も狂ふて挑

まんとするを、手に持ちしステッキにて、二ツ斗り續けて打てバ、さしもの醉漢も避易して、其儘彼方へ逃げ行きけり。

後に女は、衣の塵を拂ひつゝ、しとやかに進みよりて、禮を云はんとせし時、初めて保雄の顔を見て

(女)ヤ貴郎は保雄さん。

と、云ふを見れば小枝子なるに、保雄も驚きて帽子を取り、

(保)オヽ小枝子さんでしたか。

と、云ふを皆まで聞きもせず、小枝子はさも周章てたる調子にて、

(小)保雄さん如何致しましやう。姉が何處へか行てしまひましたよ。

(卅八)

お冬の行衛知れずと聞くより、保雄は太く驚きて、

(保)それは又如何云ふ譯で?

と、連忙しく尋ぬれば、小枝子は尙も言葉忙しく、其概略を語るを聞けば、——今日しも小枝子は學校の歸途、無據用事ありて、友達の家に立ち寄り、夕暮近くに家に歸れば、先程お冬樣が御入來に成て、奥樣と何やらお咄しの末、貴孃をお待ちなされましたが、何時に無くお歸宅が晩かりし故、又重ねて來やうとて、其儘お歸りになりましたと、下女の話に小枝子も心元無く、今日に限つて途寄せしため、姉

に逢ふ事の出來ざりしは、返す〴〵も殘念と思へば氣に成りて堪えられず。夕飯もそこ〳〵に濟まして、急ぎ春日方へ行きて見れバ、こは如何に家はガラ明き。さりとは無用心なと訝かる處へ、お卷が表より歸り來りて、小枝子の顔を見るよりも「オヽよい處へお孃樣、實は斯樣云々にて、お新造樣は行衛知れず、又信ちやまもれ跡を追ふて、何處へか御出でなされましたゆゑ妾も心配致し、其處等を尋ねに參りましたが、何分お宅が其儘なれば、万一の事のあつては濟まずと、それも亦案じられるまゝ、只今歸つて參りましたが。貴女がお入來下されたを幸ひ乍憚御留守番をば、暫時お願ひ申しまする。其間にお兩方のお行衛をと、云ひ棄てゝ又行かんとするに。小枝子は一層肝を消し「こりや斯うしては居られぬ處、其方は信ちやんを尋ねてよ。妾は姉樣のれ所在を、直ぐに探しに行かう程にと、家は其儘棄て置きて、兩人兩手に別れつゝ、さてこそ此處へは來掛りしなれ。

始終を聞いて保雄は、あまりのことに暫らくは、夢見る人の如くにて、只茫然たる計りなりしが。小枝子ハ心の急くまゝに、

(小)それで妾は、直ぐに家へ歸つて見ましたけども、姉の參つた樣子もありませんから、餘所を尋ねて見やうと思つて、此處まで參りました處、丁度貴郎にお目に掛つて、誠に妾も氣強くなりましたが。もしや鈍な事でも出來はすまいかと、妾ハそれが案じられてなりません。ま……保雄さん、如何したものでムいましようねエ?

と、心細げに問ひ掛くるにぞ、保雄も吾と心を勵まし、

(保)サ、それが一番心配です。實は私も、先刻阿爺から冬さんの、御離縁に成ると云ふ事を聞きまして、それや大變だと思ひましたが、それと云ふのも春日さんに、あの妾があるからの事ですから、此上は其阿爺を捕へて、嚴しく談判して見やうと思つて、それで此處まで來たのです。(小)それではあの妾の親は、貴郎御存じなので厶いますか。(保)知つてますとも。岡崎に居る植木屋の七藏と云ふものです。(小)それでは貴郎は、此から其處へ御出でに成るんですか。(保)まア其心算で居ますけれども、お冬さんが左樣云ふ事でもあつて見ると、此方より其方が大切ですから、不及ながら私も御一所に、お行衛を探して見ましやう。で、何處らか心當りがあるのですか。(小)別に心當りと申してはありませんけども……姉はあゝ云ふ氣の少さい人ですから、一時取り逆上せでもしはせぬかと、それが何より氣に成りますから、……念の爲めに疎水の方へでも……(保)成る程それが宜う厶んしやう。そんなら一時も後れぬやうに、此處から車で……

と、保雄は急いで四辻へ來たり、

(保)コラ一人乘を二臺持て來い!

と呼べば、駐車場の杭の下に、客待ちしたる車夫一人、聲に應じて走り來しが、

(車)生憎一人乘は厶いませんが、お合乘ではいけませんか。(保)そいつは困つたなア……

と、保雄は其儘行き過ぎんとせしが。二歩ほど行きて立ち止まり、

(保)そんなら合乘でも可い、二臺持て來い！

と云ひしも彼方は早合點、只一臺のみ挽き來たりて、イザと計りに勸むるに。保雄は尙も他を呼ばんとせしが、其間さへ心の急くまゝ、まづ小枝子をば先へ乘せ、自己も續いて極まり惡げに、其側へ腰を掛くれば。折から通り掛りたる、職人風の一人の男、怪体な顏して此方を眺め、聞ねよがしに――ねちい事ちや。

(卅九)

話次變りて彼の七藏は、藤井方へ呼び付けられ、是非とも娘お光と、春日との手を切らせよと、種々に説き諭され、否と云はゞ大切の花客、しくじらんも計られずと、其塲は納得して歸りしが。途次も考ふれば、成る程藤井方にて云ふ事も、道理には相違なけれど、今其言葉に從ひて、お光に全く手を切らさんこと、元より容易なる事にはわらず。

元來此七藏、職には流石に長けたれど、世に云ふ意氣地の無き男にて、吾が女房や娘にも、常より輕侮られ勝ちなれば、家内は嬶天下となりて、牝鷄常に時を作り、自己が云ふ事は少しも通らで、萬事は女房が方寸にありけり。

されば此度の事なども、案の如く女房の、鋭き舌頭に云ひまくられて、心ならずも其議に隨ひ、折角藤

井が頼みし事も、只聞き流しにおし置きぬ。實に此時は藤井より、春日の方や大切なりけん。

かくて二日程經たるに、彼の車夫の千吉來りて、此間も咄せし如く、お光を當分親許へ歸す筈なりしが、其事已に媒介人なる、藤井方へ知れし上は、もはや破れかぶれなれば、お光を親許へ返す事ハ止め、却てお冬を離縁して、其面當にお光をば、本妻になす所存なり。就ては其前祝に、今日ハ新門前の宅に於て、一酒宴開く可ければ、夫婦諸共參るやうに、旦那樣からの御命ぢやト、云ふに七藏夫婦の者は、雀躍して嬉しがり、直ぐにも參上と勇み立ちしが。其折生憎女房お作ハ、血の道起りて腰の痛めると、留守居の者の無き爲めに、只七藏のみ行く事となりぬ。

七藏は急ぎ身支度をなし、嬉しまぎれに車賃さへ直切らず、早速新門前へ駈け付くれば、はや春日を初めとして、常にはあまり來らざる、彼のお篠も傍にあり、又最初お光の爲めに、肝を煎りたる彼の甲村も、後ればせに訪れ來て、それに七藏父娘を加ふれば、都合五人が車座の、廻ぐる盃數重なれば、果はお光が爪彈の、音色につるゝ七藏が、平常秘藏の藝盡し、それに敗けじと甲村も、兼て自慢の清元に、細き咽元絞るなど、八疊一間の二階座敷は、さながら天井も拔ける斗り。繩手新橋に土地足らで、此處にも青樓の出來しかと、表は人の山をなしける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜はまだ宵ながら、墨の如くに曇れる空は、星と云ふもの一ツも見せぬに、果はそれの黴れ來るか、二

ッ三ッ落る雫の、頬に當りて冷かなり。今しも黒谷の森の中より、鳴り出だせる鐘の音は、かゝる夜の常として、疏水の河面に響き渡り、殘りは中天に幽みゆきて、泣くが如く訴ふるに似たり。
見渡したる水の面、常ならば遊船の、一二艘はあるべきに、今宵は只寂寞として、只向岸の燈火の影の、波間にゆら〳〵と漂ひて、消えんとしては又明なる、人の命の果敢なきが如し。
只見れば此方の堤の下に、悄然として彳む人あり。闇夜に確とは見えねども、其形女に似たるが、何やら口の中に念じつゝ、力無げに歩み行きては立止まり、引かへしては立止まり、時々袂を面に當てゝ、悲嘆に沈める風情も見ゆ。
稍々ありて思ひ定めし如くツカ〳〵と水際に進み寄りて、あはや飛び込まんとする時、何時の間にや忍び寄りけん、四十計りの職人体の男、堤の上より飛んで下り、女の帯際確乎と取つて、
(男)どつこい待つた。(女)エゝ放して!(男)いゝや放さぬ……放されぬワ!

(四十)

此時此方の橋の上に、來かゝりし男女の二人は、彼の保雄と小枝子にて、此物音を聞くよりも、迅忙しく走り寄りしが、闇にもそれと見定めけん、保雄ハ男に聲を掛けて、
(保)オゝお前は七藏ぢやないか。
と云へバ小枝子も女を覗きて、

（小）ほんに貴女は姉様！

と、云れて女は面目無げに、言葉も無くてさし俯視けば、七藏はさも驚きたる体にて、

（七）これは若様、何うして此處へ？（保）此の方の行衛が知れないので、もしやと思つて先刻から、此處等を探して居た處だ。（七）シテ此のお女中は、貴郎前から御存じで？。（保）御存じ處か！此間もお前に話した、春日さんの奥様だ。（七）エッ！

春日の妻君と聞きし時の、七藏が心の驚愕。——誠に肝も潰れやしけん。先きにお光の宅に於て、前祝の馳走酒に、十二分まで醉ひたる酒も、頓に身内を脱け出でゝ、五体は恰も痲痺れし如く、只茫然たる計りなり。

小枝子はそれに目も呉れず、姉の袂を取りたる手を、尚も離さず確乎と握り、片手に吾が胸を撫でゝ、

（小）姉さま、よく死なずに居て下すつた。此上は一時も早く、實家へ歸つて下さい！

と、云へば保雄も傍より、

（保）それが好う厶います。サヽお冬さん、何卒御一所に來て下さいまし。種々お咄し申したい事も厶いますから。

と、左右より其手を取りて、共に連れて行かんとするにぞ、今までは石像の如く、身動きもせざりし七藏は、連忙しく其袖を控へて、

（七）マヽ少々お待ち下さいまし！何處へ御出でか存じませんが、思ひもよらぬ春日様の奥様、私が此處でお助け申したも、何ぞの御縁で厶いましやう。付いては種々申上げたい事や、お詫をしなければならんとが厶いますから、決して御手間は取らせません、つい此先で厶いますから、何卒手前共まで御入來下さいまして！

無理やりに先ゑ立ちて、三人の者を岡崎なる、自己が家へと導きしが。表口より入ると等しく、何の氣無しで出迎へんとする、吾が女房を引つ捕へ、常に似合ぬ立腹聲、

（七）ヤイお作此處へ來イ。自己ア手前のお蔭で、あぶなく殺人犯になる處だつだぞ。コこれ此の方の前へ來て、早くお詫を申さねヱか。此の御女中を知るめヱが、春日様の奥様だぞ。サ、兩手を突いて謝罪れヤイ！

と、言葉鋭く云ひ放せば、お作もキックリ胸に釘、面色さへも青ざめたり。

かゝる處へ表の方に、叉もや入り來る人の足音、何者ならんと出て見れば、思ひもよらず彼のお卷が、信三の手を引きつゝ、お冬の跡を慕ひ來しなり。信三は是より先き、お冬が出で行きし後を追ふて、何處ともなくわくがれ出でしが、間も無く日は暮れしにぞ、心細さに泣く〳〵も、路の傍に彳み居たるを、折巡行の巡査見咎めて、さては迷兒か可愛やと其儘派出所へ伴ひゆき、菓子など與へて慰め居たるを、よくお卷が尋ね當て、お家へお歸りと勸むれど、只否々とむづかるのみ、お冬を慕ふて止まざるに。さ

らば行衛を探り見んと、尙は其處彼處と彷徨ふ中、所謂虫の告知にや、來るとも無しに此門前を、通り掛りたるに其折から、春日樣の奥樣と、七藏が聲高に云ひたる聲の、不圖耳に入りしより、さては此處も縁ある家か、問ひなばそれも分るべしと、かくは尋ね來りしなれ。

* * * * *

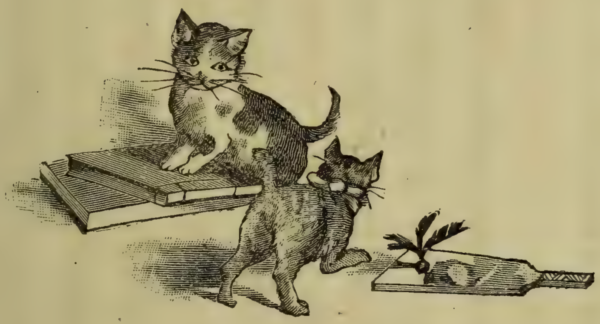
管々しきハ省かん。――總じて惡に強きものは、善にも亦強しとかや、意氣地無き夫の尻押して、非義の榮華を求めんとせし、彼の七藏の女房お作も、れ冬が一命を棄てんとまで、思ひ詰めたる心根に、深くも感激なせしよや、頓に前非を後悔して、貰ひ泣きの涙に沈めば、七藏は只面目無きに、汗は額に沸くが如し。

それより七藏は、急ぎ春日方へ取て返し、有無を云はさずお光をば、連れ歸つて再び歸さず。

又彼の越路方にても、春日が處置の無法なるを、太く憤りし處から、かくまで道理の解らぬ奴に、娘を委すと覺束無し。今は離縁になるとても、誰か吾を嗤ふべきと、遂に此方から云ひ込みて、お冬を取り戻す事とはなりぬ。

春日が名譽は此より地に墜ちぬ。數ある學生も爪彈きして、それに師事するを屑とせざれば、かくては職にも堪えられず、表面は辭職と云へど、實ハ校長の諭示によりて、心ならずも扶持を棄てゝ、母子忽ち天竺浪人。それも自業自得なれど、只いぢらしきは彼の信三、――嗚呼今頃は何してかと、お冬は

それを思ふ時のみ、春日が家を戀しがりぬ。



（完）

◉鐘の音

小倉山人

（上）

錦の衾重ぬる身も、寒やと喞つ冬の夜に、いかなる人の末路にかあらむ。芳紀尚若き艶麗なる女房の、見る影も無き繿縷衣を身に纏ひたるが、痩せたる稚兒の口に、萎みたる乳房含ませながら、潸然と涙に咽せびて、深雪積れる木の下路を辿り行く、鬢の縺に寒風の戰ぐもあはれなりけり。

幾度か右に折れ左に廻りて、やうやく辿り着きたるは、花の都と名にこそ負へれ、烏啼く谷中邊の裏坊に危く立てる白屋の表口、今しも歸り來る女房は、積る雪ども打拂ひて、さてこそ我身を待ち給はめと、入口の格子戸に近寄りて、裏面の樣子を窺へば、病みに病みて疲れに疲れし我夫は、影暗き燈火の光に、骨ばかりある我手の指を打瞶りて、涙ながらの獨語。

あゝ世も人も變れば變るものなりけりな。僅に四五年前までこそ、三角鑛山會社の社長何某とて、見ず識らずの人にさへも、旦那〳〵と尊敬はれ、うき世知らずに浮世の中に渡りしが、意外や今は徒らに昔物語の料とのみなりて、いかに淵瀬常ならぬ世の中とはいひながら、訪ひ來る人の影だに無き、斯る鬱陶き白屋に明日買ふ米の代も無く、その日を送る憂き切なさ、最早烟となりし財産は今更惜む可くもあらねど、切ては斯る病氣だに無からむには、土を喫ひ石を咬むとも、斯くまでは零落れまじきに、何を

云ふてもこの病体。ああ情無き身の上かなと、兩手を緊乎と拱きて、さも可苦氣に咳き沈れば、妻のお蝶は氣も狂亂、「えゝお道理樣。」と言はむとせしが、あれれ如何にか思へるあらむ、ふと佇みて「あゝいや〱。」この淺猿しき我姿を夫の見給ひたらむには、またも嘆かせ給ひなむ、病勢の募る事もやあらむと、此方は千々に心を配りて、そと裏口にぞ廻りける。

雪の光に女房は、今買ひ來る少量の白米を、膝蔽の中より出して、欠擂鉢に移す折しも、ふと以前の事を忍ばれて、斯くなりはてし今の身の、敢果無く憂く恨しく、竟には涙に掻暮れて、「あゝ何の因果か情無い」。

お蝶はまだ歸らぬか、あゝ苦しい、あゝ切ない、あゝ心細いと、悶ふる夫の聲に、此方は涙を押拭ひて、遽惶しく隔の襖押開き、「只今歸りまして御座りまする、御氣分は如何で御座りまするか。どれお胸でも撫りましやう」。と其方は輕く身を起して、何にも知らですや〱と、打眠りたる貞一を破蒲團にそと包みぬ。

「姑くお撫り申しましやう。」と近寄る妻の姿を瞶りて、夫は如何にも本意無氣に、「このまあ寒い雪の夜に、見れば其方は袷一枚、嘸かし寒い事であらう」。訊へば此方は笑顔作りて、「若い勢かは存じませねど、少しも寒くは御座りませぬ、決してお案じ下さりまするな」。言葉優しく慰むれば、夫は潸然と涙を流して、「貧しき上に斯る大病、賴み甲斐なき者なれども、一向夫と冊きて貞操を守る其方の心底、有り難い

ぞや、嬉しいぞや」。聞くより妻は夫に縋りて「おゝ勿体ない事仰有りまするな、貧富に心を變ふるのが、女の道と申されませうか、遠慮なき浮氣の上より、狃れ染めたる間ならばいざ知らず、親と親とが得心の上にて、生涯の苦樂は倶にと契りし夫婦、設ひ水火の中にても、夫の爲と聞きますれば、少しも厭ひは致しませぬ。たゞお体の御保養を、呉々もお願ひ申しまする」。と慰めながら女房は、夫の胸を撫り居たるに、更け行く夜半の嵐に連れて、募る寒威や障れるならむ、夫はまたも咳き沈りて、あゝ苦しやと悶ふれば、子は眼を覺してわゝと泣く。

これも大事、かれも不憫と、悶ふる妻を凝然視て、夫は聲も絶え〲に、「あれ貞一が眼を覺した、早く乳を呑ましてくれ」。斯く言ひながら、胸の邊を緊乎と壓へて、凹みたる眼を微に見開き、「設ひ其許が何樣に、心を盡し手を盡して、夜の眼を寐ずゝ介抱してたもつても、今宵の容体にてはの、到底今年の冬は越せまい。この身が野邊の烟と消ゆれば、今より其方の力となるは、たゞ其子ばかりである、蟲でも出ては倶難儀、早く乳を呑ましてたもれ」。

（下）

亡夫が紀念の貞一も、母一人の手風にて、最早今年は五歳と成りぬ。されば母は指折りて、後幾年せむには、この子も一人前になりて、運好く行かば其中には、また往昔の川島家となりうる事もあらむと思へば、身に逼れる貧苦も今までの樣には憂からず。たゞ憂からざるのみならず、夜々に針持つ指の疲る

ゝ時にも、我膝を大盤石の樣に賴みて、すや〳〵と打眠りたる愛らしき我子の顏を打瞻れバ、身の憂さ苦さも消ゑ失せて、枯木の吹き荒したる淋しき野邊に、早赤く膨らみたる梅の蕾を見る心地のして、覺ゑずほゝと打笑みき。●

早く死ぬる子は、秀けて敏捷きものなれば、到底彼兒は覺束なしなど、近邊の人は許し合へども、母は斯くとは夢にも知らで、實に此兒は末賴母しと、寐ても起きても其事ばかりを考へて、我漆の兩鬢に霜の降るには氣も附かで、切ては一年の中に二三度も、舊冬ハいろ〳〵と言ふ時の來れよかしと、他人にこそハ語らね、我心には何時も〳〵。

世の中の事が思ひ通りに行かむには、釋迦も三界ハ猶火宅の如しとは、說き給はぬ筈なれども、閻浮の事と云ふものは、都て心に任せずして、實に火宅の如きぞかし。

貞一は昨日の正午頃より、何と無く心地惡氣なる樣子なりしも、たゞ假初の事ならむと捨て置きたるに、日の暮れ行くに伴れて、いよ〳〵体温の高まり行けば、母は一方ならず愕きて、或は抱き或は脊負ひて、淚と倶に其夜は明しぬ。

翌朝早く醫者の許に連れ行きて、如何なる病ならむと訊へば、こは「ぢふてりや」なりと云ふ。容易く治るや如何にと聞けば、大人ならむには兎も角もなれど、斯る稚き小兒にてハと、鼻頭にてあしらひて、絹着物着たる人の方に向ひて、いと慇懃にぞ物言ひける。

母は泣く啼く泣く兒を抱いてあゝこれが、昔日の身分ならむには、何處までも金の力に任して、名醫に治療を賴まむには、終には治る事もあらむが、良き醫者などは思ひも寄らず、世の常の醫者にてすらも、貧しき今は心に任せで、あはれ素氣無き今日の仕儀。さても情無き身の上かなと、貧故に胸の思ひは一層なりけり。此日は斯くて過しゝが、夜半打過ぐる頃にやありけむ、亡夫の紀念の貞一は、病勢のいよ〳〵募り來て、あはれ漸々に危篤と成りぬ。こは如何にせましと、母は我をも打忘れて、涙混合の聲あはれに、「貞一や――あ、貞一や――あ。」と聲も限に哭き叫べば、不思議やごろりと起上がりて、兩手を膝に眼ぱッちり、可愛き聲にて「おッ母さん。」この一言を形見に遺して、脆くも梅の莟は散りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

悲哀の境遇に接せずしては、菩提の心を發する人稀なりとは、如何なる聖僧がの給ひけむ。實にいみじくも穿たれたり。

一本杉の影寂しき邊に、形ばかりなる庵あり。こゝにて朝夕行ひ澄ますは、いと淸げなる尼法師。心より閻浮を厭ひて、遁世したる身にしあれば、訪ふ人の影だに見えで、鐘の音のみ高うぞ澄める。

◉深山物語　　小倉山人

知らぬ山路の空にしあれば、日の暮れざる程に宿もとめばやと、ひたばしりに走りて、麓の方にと急ぎたるに、やがて斷崖の上にぞ出でける。こはいかにと佇めば、岩間に響く水の音のすさまじ。

いざ急がむと思ふものから、糸引くほどの逕だに見えねば、木立の下に茂り合ふ、小暗き荊棘を掻分けて、左の方にと下り行くに、いと物凄き谷川あり。

鬱々だる二株の老松、自在に蟠りて、吹き來る風に嘯きながら、九淵ともいふらむ如き岩間の淵に臨める形は、宛然双龍の深淵に跳りたらむ如く、近邊の奇岩怪石は、何れも幾千年の時代を帶びて、あるは駿馬の空を駈るが如く、あるは羆熊の洞窟に蹲踞るが如く、あるひ象の牙を磨くが如く、あるは猛虎の前足を伸して、山月に嘯きたらむが如し。

さらぬだに云はむ方無く心細きに、日全く暮れはてゝ、雨さへ淋しう降り出でぬれば、端なくはえ進までしばし躊躇ふ程に、雨いよ／＼降り荒びて、近邊もそれと分き難くぞなりぬる。

斯くて空しくあらむもさすがなれば、とも來し方にと分上りて、辛く斷崖の上に出れば、山颪の烈しきためにや、岩に怒る水の音、今度はいとゞしく、おそろ／＼し。こは彼谷川の流れ來て、瀧つ瀬となりたるにもやあらむ。われはこの斷崖の彼方よりして、この瀧つ瀬を見たらむには、天の川の水底破れて、

雲間より落ち來りたらむが如く見ゆめり。

左右するほどに、夜はいよ〳〵更け渡りぬ。颯々と小夜嵐の吹き來る毎に、萬木凄じう號びて、しばしは鳴りも止まざりけり。かゝる寂しき深山路なれば、宿もとめむ便も無くて、我は木蔭に微睡みつ。山郭公の血に泣く聲に、ふと眼を覺して見放れば、雨やみ風をさまりて、雨後の山月影いみじう淸らなり。そのさまの美しさは、美人の泣きたる後にて、ほゝと打笑みたらむがやうなり。

あな氣淸しと眺むる程に、俄に雲の浮び來て、嫉しやまたも烏羽玉の暗夜とぞなりける。尙佇み居たるに、遙彼方の邊、樹間洩る二つの燈火微なり。人里遠き深山路なれば、住む人も無きとこそ思ひしに、あはれ誰が家居にかあらむ。

幽に動く靑き二つの燈火を心ざして。あな嬉しやと辿り行くに、丸木の柱に笹葺の屋根したるが、細谷川の邊に立ちたり。いかなる人か住みつると、木立の蔭より覗へば、翁の君の眼の光いと烱きが、いみじう美しき少女に向ひて何をか頻に語りける。

塵寰の善惡を他所にして、かゝる山路の奥深く分入りて、月の光蟲の音を一念希求の友とする心の中の床しさに、こは如何なる人々にかあらむと、尙近く寄り添ひて、燈火の幽に洩るゝ破戸の邊に佇めば、まだ芳紀弱き少女子に、意を籠めし翁の君の物語。

、、、、、、、、、、、分きて其方は仕合せ惡き身にしあれば、浮世に出でも望みを斷ちて、我敢果無

く成りたる後も、尙この深山に止まりて、亡父母の菩提を弔ひ、其身の後世を祈るべし。あはれ世の常の人ならむには、善き聟がねもがなとこそ言ふべきに、まだ前途長き其方に向ひて、斯く言ふはいと情無きに似たれども、こは其方の行末を深く心に思へばなり。忍び難き所を忍ばで、言ひ難き事をえ言いで、あだし〳〵しく其方を浮世に出さむには、我罪如何に深かりなむ。斯く言ひても咳けば、少女は膝を前めて言ふ、浮世とは種々の人多く住みて、いと賑はしき所とこそうけたまはりしに、如何なればとて御身はさのみ止め給ふぞ。斯くなん訊へば、翁の君は涙を流して、少女の顏を瞶てありしが、如何にも其方が聞きたる如く、實にも浮世と云ふらむ所は、種々の人多く住みて、いと賑はしき所なり。さりながらと言ひさして、滅えなむとする燈火を搔立つれば、少女は可訝氣に翁の君の顏打瞶りて、物欲言氣に紅の唇をぞ動しける。あはれ如何なる事をか聞かむとすらむ。

うちつけに音なはむはさすがにて、尙も佇み居たる程に、今迄曇りし空の淸く凉しげに晴れ渡りて、血に泣く鳥の聲々に、如法の月の傾く折しも、翁の君は膝前めて、頰の邊を撫でながら、實に其方が如言、其處には種々の人こそ住め、現に恐ろしき處ぞかし。聞けや〳〵我孫よ。其方が近頃慕ふなる其浮世と云ふ處は、深山の此處とは異りて、黃金と云ふらむ物無き時は、賢き人も愚なる人とて輕蔑まれ、貴き人も卑しき人とて賤しまれ、心ざまの善き人も、惡き人とぞ惡まるゝ。其方は深山の奧に育ちて、浮世の嵐と云ふものに、未だ吹かれし事の無ければ、あるひは疑ふ節もあらむが、黃金と云ふらむ物すらあ

れば、愚なる人も賢き人ぞと尊敬はれ、卑しき人も貴き人ぞと貴はれ、心ざまの善からぬ人も善き人なりとぞ賞でらるる、然るのみならで、黄金と云ふらむ物すらあれは、やむごとなき大臣の君も、卑しき者の許訪ひ給へぞ、あはれ黄金の無からむには、訪ひ來る人の無きのみならで、親しき族の人々さへも、終には情無く過るぞかし。

浮世の人と云ふ人は、黄金の我手にある時こそ、いと懇切に言ふめれども、爰に黄金の盡きなむ日は、如何に親しくせし人も、見捨てゝ顧ぬぞかし。昔は斯くも無かりしが、今の世は分きて黄金の貴くなりて、黄金とだに見る時は、人を欺き人を貶して、我先にと爭ふ世なれば、黄金には親無く兄弟無く、君無く師無く友無ければ、泣くも笑ふも黄金故也。されば人の命を縮むると云ふ心配苦勞も、元の起源を糺さむには、皆是等しく黄金故也。靜なる深山の奥とは異りて、浮世と云ふ賑はしき處は、斯くも淺猿しき處にしあれば、草木のみを友として、深山の奥に成長ちたる其方の如き恍惚子女の、今更出で行きたらむには、情無き浮世の人の手に、果敢無く死することもやあらむ。さればこそ我は其方を止むるなれ、といひ懇切に説諭せば、少女は翁の顔打瞶りて、浮世と云ふ處は、いと樂しき處なりとこそ思ひしに、意外や、然る恐ろしき處にて候ふか、さらむには、妾は何時までも、この深山の奥に住みて、行かじ〳〵浮世には行くまじといふ。

二人の床しき物語は、爰にて全く途絶えぬれば、折こそ好けれと我は入口の戸に近寄りて、これは今度

西の京より東の京にと心ざす修業者にて候ふ。馴れぬ山路に分入りて、一向いそぎつる程に、何時しか道を踏み迷ひて、徒疲れたるのみならで、今宵の雨に打たれしためか、心地死すべく候へば、あはれ一夜の宿を許させ給へと、入口の戸を打叩けば、燈火はたと滅えて、吹き來る風に臭氣あり。あな可訝や。我は太くも打愕きて、いかゞせまじと思ふ程に、そは定めし御難儀にて候はむ。かゝるいぶせき茅屋にても、お厭ひなくばいざたまへ、と云ふは慥に翁の聲なり。あな嬉しやと息吐く程に、少女はいとも低き聲にて、今聲せしは浮世の人にて候はずや。宿りさせ給はむには、妾は彼人にや失はれなむ。あなうたてや、あな怖ろしや。いざ戸を閉し給はずといふ。

さては妖怪ならずして、浮世を憂しと見捨てたる床しき人にて候ひしか。さらむには、彼燈火の消えたるは、烈しく吹きし風の爲にて、頓に答へざりしは、突然に聲かけし我に驚きたるにもやあらむ。かくなむ思へば、我れ心の鎮まりて、怪しと思ふ節も無かりき。

やがて翁の出で來りて、御覽の通の茅屋にて候へば、鬱陶くは候へども、いざ此方へとありければ、御免候へと輕く答へて、笠の紐とく〳〵腰を打掛くれば、足濯ぎ給へとて、いと古びたる閼伽桶に翁は清水を汲み來りぬ。

足を濯ぎて座に通れば、翁の君に勵まされて、少女は澁茶を汲み來りぬ。影暗き燈火の光にふと其顔を打見れば、云はむ方無くいと美而艶也。

互に初對面の挨拶終れば、翁はほゝと打笑みながら、馴れぬ山路に迷ひ給ひて、定めし疲れ給ひしならむ。飯の仕度の出來なむには、起しまひらせん程に、暫く打臥し給へと言ふ。飯は欲しくも候はねば、たゞ打捨てゝ置かれむこそ、却々に願はしう候へと言へば、さあらむには夜も更けて候へば、いざ疾く打臥し給へといふ。

太く疲れたるまゝに、やがて打眠りて、翌朝旭日の高き程に、我はやうやく眠覺めたり、こは寢過してけりと、何心なく起出づれば、あな意外、近邊に人の影だに無くて、まだ生々しき二個の白骨、我枕邊に横たはりぬ。あはれ、誰が身の成れる末路にかあらむ。

◉一文字

中川青葉

一筆認殘候、追々暖和の時節と相成候處、御兩所樣尊兄樣姉上樣始御一統御揃益御機嫌能可被御座と奉恐悅候、然者私儀小倉表より申上候通り雨天續に候得共、日積通り今日大坂安治川へ着仕り、四ケ年以前師弟の契約仕候大坂天滿與力大鹽平八郎方へ着仕り、久々にて面會仕候處、如何なる天魔の見入候哉平八郎存外の企有之、明十九日大坂町奉行を討取り、其上市中に放火いたし、君を誅し、民を弔ふなど全く無謀の企にて、私荷擔可致旨強ひて申聞候間、種々諫言致候得共、申出候事返へさぬ氣性故承知仕間敷と存候、併此儘見捨私歸り候ては、武士道相立ち申候はぞ、其上如此大望を明し候上は、私不承知の上は生けては歸し申間布と存候、乍去私荷擔仕候はゞ、第一御家の御名を穢し、忠孝の道に背き可申、又師を見捨ては信義相立不申、無據一命を差出し、今夜平八郎徒黨の者へ篤と利害申聞かせ、忠孝仁義相立候樣仕度奉存候間、何共重々恐入候儀に御座候得共、御前萬端宜布御取繕奉願上候、是迄重々厚き御慈愛を蒙り、私歸國無程と御待も被下候儀と存候へども、惡き時節へ參り合はせ候は、全く私武運の盡候儀と被存候、且友助儀永々の旅中厚き世話いたし呉れ、其上私昨年不快の節抔、別けて厚き介抱致呉候一禮も不申、相

別申候、宜敷御傳可被下候、樣子共に申上度候へとも、何れ當日の樣子御地へも相知可申候間、別に不申候、大坂騷動と御承知下され候はゞ、相果候儀と思召可被下候、最早時刻に相成心急ぎ荒增申上候、餘者心底御賢察奉願候以上

二月十八日　　　　宇津木俵治

御一統樣

短き筆の命毛や哀れ、そゞろに天保の往事忍べは、まだ霧深き朝寒を突破つて、しんづ〳〵と同勢繰出し、斷ふる息も白む蘆毛の駒に靮を手繰り、大將平八郎悠然と打跨りし左右におしたてしは、澱の川風うけて翩飜たる旗二流、一つは神威を頭に戴きて天照太神とかきしるし、一つは銘うつ救民の二字、これや抑も騷亂の魂膽、もとより身を正義の犧牲となし、佞人輩の寐氣を攪破つて、身を殺して仁をなせし丈夫の魂、今日此頃に素志の匂ひて、啞蟬が老木と相撲ふ如きせゝり合ひも、笑草に似たれど、皆人が涙袋の底を敲かせ、これすら悲しき事なるに、無限年の生耻かいても惜しき生命を、穿古しの長刀草履捨てる程にも思はで、忠孝信義を引千切りし玉の緒に引擔ぎ、まこと勇壯の本色を見せて、健氣なる功は彥根に薰り、一朝夕の鏽と消失せし宇津木矩之亟(俵治)が俠骨、狗死と嗤ふものは言外の匹夫ぞかし、死を以て後素が亂を押さへしにはあらねど、日さへ僅かの師恩が爲めに生を打棄て、褒貶を人に任せてわれと進退を谷めし一名物、虫螻蛄一匹逃げられぬうちより、學僕友助に國許へ齎せし一封は、

讀むから胸ふたがる冒頭の手紙、うむと据りし大盤石の膽玉臍の下に動かで、當時の穀潰しは愚か、當今殺伐に唸る壯士とやいはむ下司下郎へも、腹の切樣身の捨時を敎へたる言行、今ここにさる筆記を借りてものせしは、豈徒らに筆硯を弄するものならんや。『明日ありと思ふこゝろの仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは』　一文字に惜氣もなく遣ッつけし腹の仔細掊れば、もと旅籠の老爺が素讀の旨さに岡惚れ、後素が薫陶と聞いて師弟の契を結びしは門松の四つ昔。それより四國九州遊歴して語を海内の名師に寄せ、今日しも其名にすら葦が散るてふ浪華へ立歸り、人間致るところ青山とはいへども、神ならぬ身の、痛腹割剖んとは、今弩にも知らずやありつらむ、嬉しげに友助參れと顧眄り、異鄕の空にも片時忘れぬ師の邸宅、喜悅の笑を頰面に嚙くだく玄關にて、賴む誰れと威つなる應答二つ三つ、宇津木氏いざまづとの案内に、草鞋の紐とく〳〵師を拜せんと躍り上りしは、惷頑の獵夫が懷に舞込みし窮鳥、こゝ運の極め、今日やそも天保八年更衣中旬八日

主人平八郎心易き客なれども、手離しならねば御面談は其方にてと取次の口上、首肯して先づあてがはれし一室に茗一口、いたましや、身に恩義の手錠腰縄をうたれ、青天白日を覗く奇怪の囹圄と露知らず、いざ去らば謦欬に接せんといそ〳〵して、脛蹈込むゝ一歩に死地を急ぐものなるを、屠らるゝまでも俎上に騷がぬ六尺の鯉かや、鞘は褫れど拔けバ玉散る秋水三尺、諾か、否か、一言に生命の交換せんと逸る隼人を追取圍ませ、奇しき一座に卯の毛でつきし臆病風も吹かさず、打通りし廣間の眞正央に三十餘

人をずらりと視亘し、平八郎を影諸共六尺下りし疊に身を圓め、つかへし兩手恭しく額をかさねて、『何時にかはらせ給はぬ御機嫌の体、矩之丞祝着に存じます、方々にも以前の健かさ、珍重のこと』目禮して兩三歩席を膝行り出で、徐に訊ねかけし不審の眉、『そもや先生、今日の團居如何の儀にわたるや、これまでに見受けぬ人も數多あるなれ、刀を控へて陽明學の御講釋や、かた〴〵もつて訝かしゝ、連なりしからは明し玉はれ、一生の面目大慶に過ませぬ』平八郎は歡喜の相好笑ましげに、列座へ向ふてしたり顔の聲品けく、『何れもこの威風骨柄を見せよ、得易きは番卒、得難きは一將とや、初見参の方々、これやわが門下にさるものありと知られし文武の達人、彦根の稀物宇津木矩之丞といふ俊才ぞや、旻天情あり、小鳥幾千萬に優る一羽の大鵬、さても網にかゝつたものかな、さて矩之丞、御身も健固で重疊、重疊、早速ながら談さでならぬ此一座は、これ、かういふわけ』『懸念であらぬ御詞のふし〴〵、筋は後の事、主義のところ伺ひ申さう』『む、何が高を括ればの、一搔を起す企ちやわ』豫想の範圍を頭抜けし意外に、ひたと駭く矩之丞が肝睢平八が眉間に閃き、眉毛は瞼に搖動きて、ぐる〳〵と眼は車座に光り、何氣なくさも輕便に、誓ふ金打、八幡二言と確めもせで、唐突に一搔を起さん企とは、徒黨するものと血判を連ねし如き輕卒に、己を信ずる師の眼力は辱なけれど、さりとはうらめしき御心根やと、湧き來る涙せはしくはふり落して、『こは御發狂か、そもまた御本心にや、矩之丞何が何やら、一圓以て合點が参らぬ』喚いたり、何匁に足らぬ舌一枚に、三十餘人百貫足らずの度胸を拶りと

ばし、矢聲高く荒膽つんぬかれしといはむ平八郎、吐き棄てたる無類の言語に片腕ぬかれたかの案外、「これは……」を大度の衣に推包んで毛も見せず、ポンと膝を拍つて胸をつき出す感稱一聲、『優奴』『ヱー』力なき語氣、さもさうず、ぐつと引絞りし氣の張弓、番へし心の矢竹も共に、腑効なや、ホツキと眞二つに挫けて、何となくぬけし矩之亟の面体見てとり、偵矢部駿河が推擧せし見識にたがはぬ活眼、將に將たる平八郎が胸の中はさて格別、そろ〳〵と說き出す規矩準縄、閻浮檀金へいきなり烈火に投げても溶けぬと知れば、性を悟つて義理の坩堝にかけし言葉の橐籥攻、緩急の程よさは眞綿にやは〳〵と引しぬる首骨もかくや、『………が、宇津木、平八郎信行ともいはるゝ武士が、われのみたらで一揺數百の生を貰ひ、無名の鬪戰起してならうか、聞きやれ、御身が發狂せしかと呼ばつたるは、師弟の間柄を思ふての赤心、慮外でなく、無禮でなく、まこと平八の腕と感じて寸斗見上げた、こゝに集る方々は妻子を棄て、百姓のために一身を抛ち、無慈悲強慾の宍喰破らん勇士達、殺氣を含む眞中にれし被せし不敵の一喝、血を見て喜ぶ中に凛と潔き一言、さても申した、一應知らでは發狂といふもよし、醉狂と罵るも厭はじ、淸き心へ八百萬の神々や照覽ある、今御身の豪膽に平八郎懇望を一倍高めた、十年も一日も師恩にかはりはあるまいの、が、かういふては圓いものに角をもち、かつは文武の刄を恩の炎にくさらして、理が非でも一味にせよに聞ゆるが、われとて誤解せぬでもない事、腑に墮らねば諫言聞かう、そも今般兵を舉げうといふ大概は、御身も知りやる天下の饑饉に、わけてこの大坂三郷すぢ

は、貧富の差別は見るも涙ぞ、均しく人生うけながら、貧なるものはます〳〵貧に、富なるものはます〳〵富むといふ傾向見ゑ、弱肉强食の有樣、この平八きつい心勞から、既に直諫して閉門とはなつたれど、指を啣へて國家の大事を餘所には見られぬ、さればにや、町奉行の跡部に嘆願なし、せめてはわが郷だけにも、この不良を見せまじと、鴻の池はじめ三百八十人の長者へ、五六千兩宛も申つけて貧民を救助せよと乞ひ、城代へも建白して利害得失を說き、再三再四の切望を、應せぬからは據ないなれども、見過されぬが難儀、事のこゝにもいたつれ仕末、もつとも身は一分つくさぬではない、從來に蓄へこみし和漢の書籍、家什重寶、あるとあらゆる賣却して米鹽の代にかへ、一人に一朱づゝ一萬人は施したが、いやはや九牛の一毛、燒石にうちつける水の雫ぢや、かくまでに散力をつくすも、上は知らぬ顏に眠り、下は相變らず飢ゑ、死人が無緣の塵塚こしらへても、見ぬ振しておし通す、骨あり血ある男子の、これが安閑優長に過されうことか、よしやこの上われ等式が家屋賣毀ちても、無限の窮民を救はんには、梵天薩埵の威德を借らんか、自力にては所詮勞して功ない無慘の境遇、飜然悟つた、身に餘る俵材を、犬猫の負ふは冗なこと、牛馬に負はせと……さ、思はぬではないが、そもや大千世界を白眼まはせば、宇津木、かうぢやわい、金鷄障に羅綾を重ねて寐仆れ、美形が軟かにふくだみし暖い肉に吸つき、プンと薫る痺藥に鼻を殺して、しこたま女の脂ぎつたる太股の味は嘗めても、大和膽は毛もないこと、天井ぬけに上氣きつてはしやぎ、下々の破衣に瘠腹擦る想像のないはいかな事、寒夜に恐多く

も萬乘の君、大御心を惱ませ給ひ、御衣をぬがせられて、さて民を顧み給ふ御仁惠もあらうでないか、何くらからぬ御身にすらあるものを、己れ、奸邪の奉行はじめ素町人めら、活計歡樂心のまゝに振舞ひ天の美祿と飮まずもがなの狂水に舌皷、神ぞ、神ぞ、忿懥神髓につき上げて、肝癪玉を蹈潰してくれた、かくも健かなる牛馬の沃土に寐るからは、骨の見え透く瘠犬弱猫とて、なんでう意地を見せで居れう、潰死に死なばもと／＼差引のないところ、まだしも皮ハ太皷や三味の役にも立たう、もしも背負て立たら雨夜の明星、空前絶後の大偉業と見て不足はなからう、さるからに明朝市中に放火し、奉行を誅し、鳩つて散こと知ぬ豪家へおしかけ、賑々しく民を施す了見、何のかけまくも賢き至尊へ敵しまつるでなく、外道づらを天に代て警腥するまで、矩之亟、仔細はざつとかうぢやが、御身の意中は何となるか』長物語いひ訖ると齊しく、手の皺に汗摑んだる數十の眼玉は、矩之亟が身邊に注ぎて吐露を待てば、これ始終を篤と聞濟し、投首に思案を見せて少焉は動かず、空に吹出す長大息深く、『事の已むを得ざるに出でしは、天なり、命なり、恐れながら御心底推察たてまつる、さりながら、昌平無事穩なる徳川に波風立たせ殺風景の血の雨降らさんと、御身自ら其任に中り玉はんなんどは、なぞや、御心得の違ひ玉ふか、竿頭十歩を進めしよりも鶍の御計略、三諫して用ゐされば去るとは義者の誡、先生かねて御口づから誦せられながら、伯叔が賢にも倣ひ玉はず、ましてや、君子其位にあらされば政を謀らずなる明敎もあるを、治平を騷がし、劍戟をまじへんとは、近頃もつてけしからぬ御勘考と存ずる、世の譬喩に

も、木乃伊とり木乃伊になりしとあるは、たゞ〳〵浩歎のいたり、人熾んなれば神祟さへなしとも申さずや、たとひ奉行城代の所置當を得で憎むべしとも、千金の御身大鹽信行ともいはるゝ英雄が、これ式に果て給はんとは、さて〳〵御安値き御生命の價踏ぞや、一層野山などへうち棄てゝ、禽獸の腹を肥やすことの功德かと存じます、例を唐土にひいての御諫言は異なもの、孔孟へ道德の講義する笑に似たれど、一年孟轉氏齋梁に客たりしとき、世饑に呻吟き、餓に悶絶え、萬民疾苦塗炭の危難におちいり、ながめはこの三卿にも似たりしや、餓莩日毎に道路をうづめければ、もとより仁慈の士見るにたへかね、救濟の策を上つて用ゐられず、飄然として去りしとや愚聞に及ぶ、既に正直の龜鑑あること、何ぞや、堆積の粟を施せしとは知らず、そもこたび先生の義擧、矩之亟に於ては千慮の一失かと難じますたゞに拙者ばかりか、先師陽明の亡靈を幽冥より迎へ奉り、この擧の善惡邪正を乞ひまつらば、こは出かしたれ、わが黨の士と感じ給ふか、良知をいたすの眞面目と賞し給ふか、百錬よりも淸き鏡にかけてありあり見ゆるは、はッたと睨み給ふ御像の勿体なや、なか〳〵のこと、御詞までもなく、身は仁人として、百姓の薄腹搔捞り、額に死の字をかいて蠢動くを、見遁すことの骨を削らるゝよりもつらけれど、あれ見よ、大鹽は陽明學の異端を學びし毒は、ならぬ事に天下を騒がせし笑止さよ、邪道邪說と譏られんには、これ先生御一名の御恥辱や、たゞに大鹽信行が御恥辱のみにとゞまりますか、御批判什麼承り

ませうや、拙者死を恐るゝにあらず、時宜によりては鴻毛よりも輕んずれど、胃の腑に御意の落着くまでは、御味方申すことと思ひもよらぬ、儒子とて淺瀬を導かぬかは、三思の御賢慮、駑鈍の胸中いくへにも御憫察下さらば、矩之丞七生までの本快に存じます』　傍ら人なきとやいふべし、歯に衣被せで誰忌憚なき武士が本領、くわッと怒り騷ぐ中にも、憤怒の青筋眉間を割り、ギリ〳〵と嚙碎く切歯の音色に、眼前の無念を耐へかねる諸士が拳に一刀躍り、鞘走る鯉口に扱身光りて、去來といはゞなだれて呉れむと、体ハ左足にもち上りて、たとへバ今にもあれや、吹暴んと口ひんむけし風袋の下、優しゆ咲ける荒野の寒菊、風吹かば吹け、雹降らば降れ、それまでの果敢なき命を、無心に笑ふや義者の膽勇、視もやらぬ矩之丞は涙の聲をふるわせて、『はや御裁決の下され、死といはれて全きよりは、玉と散つて碎くるとは申せども、今棄て給はん御壽命を、人は玉にして受取りませうか、我一代覺なき願ひ、平に武士の一分立てさせ下され』　今の今まで兩眼閉ぢ、思想の海に方寸の舟をたゞへし平八郎、佶と開きし眼中見詰むる矩之丞とつき合はせ、兩人無言に睨みあひしが、こゝなる宇津木は矩之丞といふ人ならで、赤誠赤實五体に迸り、髮膚はしばし赤心の假もの、まじろかぬ眼光、ゆるがぬ見構、返答まだかと待設くる姿は、運慶が鑿にも眞似のならぬ活人形、脳天は髷のハケ先より、土臺は足の指先まで、微塵一點正義の肺肝ならぬはなきに、れうろしや師の威巖にも冒しかねて、素志を一歩の下に譲りし平八郎、呑込顏に點頭て、『宇津木、平八悞つた、よくこそ直諫いたしたの、すんでのところ同志幾百を殺しか

ゝりし忘念、一炊の夢みなめざめたる心地ぞや、ひたすら肝銘して忘れは置かぬもつ可きものは語るへき好伴侶ぞ、一旦迷霧のからりと去れば、今より自然の萬物光風霽月の快さ、世涯世を避けて隱逸に過さう、列座の何れも、宇津木が詞に從ひ、無益の殺生する心を飜へし、世を大悟し給へや、さる程に今改めて酒を酌み、積日の欝を遣り、芳志に酬ひて一獻せうぞ、酒肴の用意』と手を拍ち鳴らせば整へてありしや、言葉の下に開けし酒宴の席、狂水と叫びし大鹽も、戴けぬ矩之亟も、この世の名殘と無理から飮むか、それか、あらぬか、獻酬數回に苦しげなる息をはづし、顏へむらなく猩臙脂を染み出して、醉眼うるんで輝く矩之亟は、『先生はじめ、いづれも、胸苦しければ、ご、御免』一禮して立上る、呂律あら、足踏なら、しどろの酩酊によろ〳〵して、切つて捨てんは今此時と、言合はさねど柄も摧けんまでに握りつめて、怨めし相に跡見送つて突立ちかゝる一統を、平八郎は肅然としておし靜め、『先づ早やまられな、宇津木矩之亟ゝ男子なるぞ、さりながら……』片手にはたと胸膈叩き、『雛棚に晝たてゝ置く繪蠟燭、何んと、わが胸中聞へたか』閑日月ある英士が洒落は、風雅によそへて決心示せば、恐入つてばた〳〵と左右につめかくるを視廻し、『何のその巖もとほす桑の弓、精神一到何事もならぬはない、聞かれよ、かよわい女の髮すら、束になれば大象も引摺り、箭竹もあつまりあふては折られぬ道理、宇津木がことは萬端身が腹にお任しあれ、いふまでもなく一命貰ひうけうが、これにつけても惡さも惡し奉行跡部、彼なかりせば百事憂目ゝ見まじものを、忍びかぬれど醉ひぞれしを奇貨今

宵の中に、滿身膽たる宇津木を切つて軍の血祭り、首途の祝事にして吳れう、いやとんと面白ふなつて來たわい』　何の面白ふてならうか、さりとはいへ、一人の命に數百人の士氣を勵まさんと思へば、平八郎本來理非に昏き猪武者ならねど、惜しみてもあまりある人品散らさん心中聞けば、これも可憐しくかれも可愛ゆし、小の虫を殺して大の虫を助くるとはいふものゝ、石が流れて木の葉が沈みもせぬ世に、曲直轉倒のさても〱味氣なや。

* * * * * * * * * * *

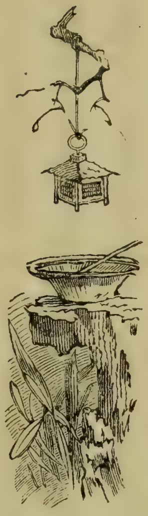
一封認めて友助に渡し、委細いはさで人知れず追拂ひし矩之丞が日本晴、今は心易しと行燈行寄せ眞搔立て、よしんば五体ハ熟柿の如く醉ふとて、棒絞りにかけて捻上るも不潔の酒氣點もなき精神、旅袱より紋服出して衣服を更め、袴正しく座を搆へて燈火に向ひ、はて何んとする、一刀スル〱と鞘を拂ふて、火影揉寄する刄の色を、小首捻つて鐵味よげに、鍔元より切尖までヂリ〱と覗上げ、切尖より鍔元までためつ視流し、につともの淋しく一笑くれて、引寄せたる袱四包にして砍離し、三つは繫ぎあはせて肌身につけ、背より胴へぐるりとまはして、一つにくる〱と切尖三寸ばかり餘して捲つけ、劍を右手に突き出す丹田、さては割腹、未練の唱名さへなき勇士の覺悟や目覺しく、涙一滴眼色に見せで、撫で擦る肌心徐かに、耦と一刺弓手の肋に切尖呑んで、右へ走るは拳の顫動、さしもに猛き矩之丞も、苦痛の眉は上下に震ひ、前歯に堅く唇嚙しめ、叩く毎に力の加はる右手は皮を引離つて、血を見せまじ

と体を折りしが、さて痛みに迂遠さは自害の容易がらぬに、熬つ眼血走らせ舌打鳴して、疵口きつと瞪りしが、唸聳尖く拳は見事、『うゝ、むゝッ』べり〳〵と性急に切破りし腹一文字、生々として温き血煙滴りかゝるを、刀投出しすかさぬ腹帶、以前の片に鑷んで固結にしめあげ、ため〴〵一息微かに吐いて、おし拭ひし血刀事ありともいはさず鞘へ納め、襟かき合はせて何氣なく粧へども、いかに此上なき猛者とても、仕て遣つたる深疵に顏色おのづと褪め、肩におし出す喘ぐ呼吸の根、まだしも無双の男子なれ、屠腹といへばとりわぐる刄を合圖に、後なる太刀取の介錯するか・たゞしい血を見て膝腰くだけ、吠死かくは萬人の常なるを、死の中なる僅かの生を常時につくつて、舌の鈍つて動かぬまでは、面と向つて平八郎を詰り、死ぬまでも直諫せんづ鯁骨の太とさ、四邊に血痕露だもとゞめねば、知らで見たらんには、矩之丞其儘なる上乘の侍品なれど、掻切し腹に熏ずるは壯士の鐵膓、遮に無に見上げたる武士の本尊。障子にすみきる影を的に、一重越しより薄紙破つて繰出す鎗尖、あはれ矩之亟、累卵の急間一髮、としや、遲し、轡に目覺す勇士もかくや、体を撚つて汐首摑み、ぐつと彼方へ突戻しさま、『な、な、名告れッ』刀を杖に呼はり出でしが、答はなくてまた突かくる、穗尖は流るゝ星か電光石火、リユと風をしごいて鐵壁も突ぬかん拳の冴、脇腹外て横切る蛭卷むんづと捉へ、鎗ごと力に任せて引つくれば、懸命よ柄を握つて引かれじと踏張り、斜にせし顏を覗きし矩之丞、ヤーッと騷ぎもせず、『大井氏、御役目大儀、し、師命に刺客、御苦勞に存ずる、宇津木は武門、逃げもせぬ、か、か、匿れもせぬ、

死は覺悟、屠らるゝは承知、たゞ、し、暫らくの猶豫を』千切れたる聲張上げ、鎗摑んだるゝま奥の室目懸けて、進む行手の紙盾引明け、討漏しやせんと大井が影に添ひし平八郎、雪洞翳して立現ハれつ、『大井侍たれよ、さて矩之丞、恩を辨へて健氣なる身の捨態、出かしたよな、ゆ、許して呉れ』數叩く眼に涙の堤切崩せバ、圖星さゝれてハッと打駭しが、師の姿見るよりピタリと伏して、『矩之亟は、さ、狂人で御座らぬ、まだ身を捨つる、老耄もいたさぬ』『いはれな宇津木、平八不肖ながら、武士の腹中知らいでならうか、かつは御身を敎へし師なるぞよ、剋限迫つて心急けば、いふべき禮も何れ未來で』そは〱とする裳をとゞめ、矩之亟向上ぐる眼の中涙を張りて、つゝみかねし地金苦しげなる言語、『其先見なる御眼力にて、な、な、何とて叛逆の諦め給はぬ、成程最前、一旦拙者が諫言を、口頭の御承引は下されしが、が、い、僞とは、御無念の眼にて知つたれ、結句遂げ難きこと、成り難きこと、な、れ、ば、まだとつて返しのつかぬでなし、宇津木が首を、奉行とも、城代とも、數百の刄に切りさいなみ、鱠の樣にも、刺身の樣にも、一搔の嫉刄を血に染めて、はや、はや、御不性の下さりませ、じ、じ、慈悲御情に存する、先生の御心にてハ、事敗るゝとも、仁をもとめて仁を得、御遺憾はあるまじけれど、成敗にて人を論ずるもの、狂と呼びて、歸するところ咎を、陽明學といはるゝは必然、殘念、心外、な、不面目、死すとも亡魂、う、浮瀨の御座いませぬ、假令ひ、良知をいたすの本分にもせよ、この外御手段なきことか、拙者今生の願事、ひ、ひ、偏……に、ひ、偏……に』片手を額に拜まして足下に蹲踞

り、思ひ凝つたる心底眼の前なる姿に、さしも鐵作の生膽蹴込んだる平八郎も、意見臟腑にめりこんで、腰骨動いて撞乎と座し、呑込む涙は胸へ瀧津瀬。適候武士が情を汲みもやらず、このまゝに自滅させんこと、この腹數十百割剖くよりも、憂さ辛さは言行にはして見せられず、神以て今涙の耳からなりとも溢れなば、納れたる心だけにてもあらはすべきを、怺へ、忍べ、大鹽信行既に妻子を白刄ゑ血塗り、臍を堅めし上の今ハ自暴自棄、普留那の辨才にてもいかなこと、暴虎馮河せんと存念深く烙印したれ、堪忍せよも男泣に嗚咽び、千萬言の愚痴いはふよりと心強く、上着脫捨つれば紺糸威の腹卷よろひ、鐵心不變の樣を一目見し矩之亟、朱を注ぐ眼筋ハら〳〵涙、拳に空を封してぶる〳〵とふるわせ、五音はづれし音律上枯れ息もきれ〴〵、とりつく嶋もなき体いたはしく、『か、かく申しても、はやこれまで、人三に生じ、三に死すとか、父生け、君養ひ、師敎ゆ、お、恩義は一つ、聞くならく、以上三つには、身を捨てゝも報ゆるとや、拙者今日、師のために君父を見かゆ、諫めまじ、い、諫めませ。ここに死するハ、報恩他言せぬ潔白、それ人は、定業不定業、非業不非業の動物とやら、いざ……大井氏、ご、御存分、先生……お、お懷かしう存じます』襟推開いて身を反らせば、一文字が疵より腹帶貫く玉血のろ〳〵として黑く、胸先斑に染むる纐纈の血糊は、これぞ武士の紅葉とも謂つ可き散紅葉、花の錦か心のあかさ、『御免』の聲に大井がさし向けし大笹穗、ここと矩之亟が指さす喉三寸、狙さだめし腕に氣蓋ひし穗尖は、ビリ〳〵と音して身柱に突つけ、一思に抉つて引拔けば、紫喰む唇を咬切

り、眉に寄する八文字の皺を土産に、瞳孔を据ゑて首骨縮め、血塗になつて合掌備はる未聞の寂滅、平八郎が手向けし六字に、震天動地の節義やみし二十九歳の一期、惜しや、又となき伽羅男も、南無阿彌陀佛一夜に失せ、大和心の朝日をも待たで山櫻、魔風に散らうが、やたら芳しき名は今もかはらぬ花の司。



短篇小說 明治文庫第拾八編 終

明治廿六年八月三十日內務省認可
明治廿七年十一月五日印刷發行

明治文庫定價	
一册(二百頁)	金拾五錢
六　册　前金	八拾五錢
十二册　前金	壹圓六拾錢
廿四册　前金	三圓拾錢

郵稅一册六錢

版權所有

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　野村宗十郎
京橋區築地一丁目二十番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
京橋區築地二丁目十七番地

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目

日本昔噺第四編

松山鏡

母の遺物の鏡に對ひて、うつる面影こそ亡き母の遺物なれ、かくて朝夕鏡に照してつかの間も母を慕ひし越後松山の孝女、是れ人の子たるの鏡さて語り傳へたりし美談を、漣山人の靈筆もて磨き上げたる此の松山鏡、明光昔にいやまして幾多の子女の何らの鑑さぞなれり

饗庭篁村先生序文　落合直文先生唱歌

巖谷漣山人編　武内桂舟君畫

十月廿八日發兌

全一冊洋裝　正價金五錢　郵稅二錢

日本昔噺第一編

桃太郎

文學士坪内雄藏先生序文　大和田建樹先生唱歌
巖谷漣山人編　富岡永洗君畫

昔しく或處に爺さ婆がありました、爺は山に柴刈にの桃太郎一代記も餘りに古びすぎたれば、婆にあらぬ漣山人が硯の海の洗濯して、いさ面白くも分り易く綴り直せし改良昔噺は是なりけり

全一冊洋裝　正價金五錢　郵稅二錢

日本昔噺第二編

玉の井

尾崎紅葉山人序文　佐々木信綱君唱歌
巖谷漣山人編　小林永興君畫

昔々の大昔神代てありし時なりけり、兄の君弟の君さ海さ山さを取替へたまひ慣れぬ業をしたまひしより思はず起りし禍の末は變して福の神、いさもめてたき瑞相にこそ、

全一冊洋裝　正價金五錢　郵稅二錢

日本昔噺第三編

猿蟹仇討

野口寧齋先生序文　戸川殘花先生唱歌
巖谷漣山人編　村田丹陵君畫

柿さ握り飯の爭より猿さ蟹の開戰公布も、邪なりし猿の方は牙山の一戰脆くも亡びて、正義の蟹の榮えける昔噺の古きを厭ひて、日清ならぬ日新の幼年兒童に益せんため、漣山人が例に依て書改められける

全一冊洋裝　正價金五錢　郵稅二錢

帝國文庫第三十編發刊廣告

人情本傑作集

全部二冊洋裝背皮上製　正價一冊五拾錢郵税十四錢

上巻目次

假名文章娘節用……曲山人
清談和歌翠……全
女今川……南仙笑杣人
春秋二季草……三亭春馬
孝女兩葉錦……梅暮里谷峨
所縁の藤涙……二代目一九
由縁の梅……爲永春水
春色戀白浪……全

下巻目次

遊子方言……多田の爺
當世虎之巻……田螺金魚
梅の春……爲永春水
娘太平記……曲山人
今様櫛……紀山人
柳の横櫛……梅亭金鵞
春曉八幡鐘……春水

上巻（既刊）　下巻（十一月近刊）

渡部乙羽君校訂

其磧自笑傑作集

（製本既成）

全二册洋裝上製　正價一册五拾錢　郵税拾四錢

其磧自笑は元祿文學の繼續者なり其文は西鶴より出でゝ西鶴より艷に趣向は奇拔奔放別に一家を爲せり瀧澤馬琴の評に曰く西鶴の文は物を賦するに止まりて一篇の趣向無く其磧自笑に至てありさ以て其聲價を知るべし本書は其著書中の華を蒐めたるものなり乃ち上巻は高潔月の如く下巻は艷麗花の如し其目次は

上巻目次

浮世親仁形氣。世間子息氣質。諸國物語。世間娘氣質。世間手代氣質。風流軍配團。風流要海硯。渡世身持談義。國姓爺明朝太平記。御伽名代紙衣。

下巻目次

商人軍配團。風流曲三味線。鬼一法眼虎の巻。傾城歌三味線。咲分五人媳。傾城禁短氣。傾城情の手枕。自笑樂日記。

以上十八種なり讀者試に上下二巻を通讀せは花月兩全の娛樂を得べし請ふ愛着を賜へ

春夏秋冬三編

はつ雁

鈴木華村。武内桂舟。富岡永洗。水野年方四君密畫入

全一册洋裝 正價拾五錢 郵稅四錢

世に大喝采を得たる『春夏秋冬』の第三編也、絶妙の讀切小說六編、各種各色、錦繡を織して碓氷、日光、御室の紅葉より尙ほ美、その目次如左

本書目次

●娘淨瑠璃……石橋思案
●鬼薊小六……はしかみ
●不具者……小杉草秀
●十人斬……江見水蔭
●若菜つみ……田山花袋
●落葉……川上眉山

●競馬 正價拾五錢 郵稅四錢

●夕すゞみ 正價拾五錢 郵稅四錢

江見水蔭君著 武内桂舟君畫

少年文學

加藤清正

全一册和裝 正價拾二錢 郵稅四錢

俗傳を排し、正史を取り、勇壯なる快筆を走らして、清正の一代を記實し、以て日本武士の摸範を示せり。故に未聞の奇談多からねども、亦未知の逸話少しとせず。清正の孝なる、忠なる、智なる、勇なる、誠心の發する處、熱情の溢るゝ處、其人に接するの感あるべし。更に筆轉じて清正の人物を、解剖し、論評す「秀吉生前の清正」と「秀吉死後の清正」の二大篇に區別し、又分類して數十餘章。中に最も壯快なるは「遠征の清正」てふ一章なり。鬼上官が朝鮮八道を蹂躙したる事蹟を見んと欲せば、必ず一本を求めて坐右に備へざる可らず

阪田霧山人著 小林永興君畫

幼年玉手函

帆前船

全一册和裝 正價拾錢 稅郵四錢

自ら進んで帆前船に乘り、茫々たる大洋を航し、或は鯨を釣り、或は龍卷を射、果ては暴風雨に遇ひ、激浪怒濤の中をボートに托して、九死を出て一生を得、其精神の勇猛にして、其事の大膽なる、實に將來神州の軍人たるに恥ぢざる二少年の冒險談、四方の御小供衆一本を需めて讀み給はば豐島黃海の戰爭記より面白味深かるべし

従四位錦鶏間祗候金井之恭先生題辭

百足登君著

琴曲之栞

全一册和裝
正價拾錢
郵税四錢

琴曲の栞出づ、從來音樂の著書其數尠なからずと雖ども、獨り琴曲の書に至りては、歌のみの本にして、未だ琴を彈ずる手法あるを見ず、本書は著者が苦辛して、箏曲の調子合せ方より、使用法及琴曲の彈き方まで、一も漏らす事なく一見以て初學者にも誰にも、彈琴し得らるゝ樣説明したれば、師に就くの必要なき獨稽古の書なり、編中には組歌、六段、八千代、獅子、越後獅子を始め、數へ歌、黑髮等數十曲ありて、古來唯一の珍書なり

百足登君著

尺八之栞

全一册和裝
正價拾錢
郵税四錢

本書は尺八の吹方より音の長短及拍子等より懇ろに説明を下し誰人にても本書を開けは數日ならずして自由自在に吹き得べき世間無絶の珍書なり又書中には數へ歌、大祭祝日唱歌、春雨、こすの戸、夕ぐれ、つるの聲、くろかみ、あしかり、六段、菅搔六段、越後獅子、八千代獅子、大津繪、今樣、詩、九連環、滿板流水、西皮調等其外數十曲あり

百足登君著

横笛之栞

全一册和裝
正價拾錢
郵税四錢

横笛は我邦固有の樂器にして、上は宮廷より下は民間に至るまで、雅俗諸般の音樂に用ゐざるはなく、殊に三絃と合奏するに、横笛なければ音樂曲を成さゞる程なり、本書は雅樂の越天樂太平樂を始め、神樂の囃子民間の數へ唄、秋の七草、勸進帳、越後獅子等に至るまで、細大漏らさず最も丁寧詳細に説き明かしたる者なれば世間絶無の獨習書なり

百足登君著

明清樂之栞

全一册和裝
正價拾錢
郵税四錢

近來明清樂非常に流行し、都鄙の論なく月琴清笛胡琵等の音調を聞く、然りと雖も始終教師に就かざれば研究習得するを得ざるは大に憂ふべきの一端なり百足登君之に着眼せられ教師に就かざるも明清樂の樂器何れにても研究獨習し得らるゝ樣反覆丁寧に説き示し本書を坐右に置けば明清樂の教師に接するより便なり殊に圖解の如きは尤も鮮明詳細にして曲は明清樂の秘曲に至る迄百有餘曲又本邦俗樂をも附記したり古今絶無の獨習書也

百足登君著

胡弓之栞

全一册和裝
正價拾錢
郵税四錢

音樂全書第五編として出てたるは胡弓の栞なり元來胡弓及三味線等には一定の音符なく、また感所を示すことなし、是れ著者が多年その一大欠點なるを嘆ぜられし所なりしが、今や此音符感所を發明せられ、此書を公にせられぬ、一たび卷を開かば直に胡弓の獨習をなし得べく、從來胡弓を習へる者は之に因て大に其蘊奥に至ることを得ん、書中に流行曲、俗曲、本曲等を音符もて丁寧に記載せること他の諸篇に同じ

百足登君著

洋樂之栞

全一册和裝
正價拾錢
郵税四錢

洋樂の我邦に入りてより都鄙の論なく流行盛にして大中小の諸學校皆之を用ゐざるはなし隨て之に關する著書も種々あれども概ね一方に偏して大躰に通ずる者を見ず本書は風琴、バイオリン手風琴等の彈奏法より移調法、音符、記載法、洋樂々理、教授法に至る迄を説明して獨習に便ならしめ又日本俗曲中の高雅なるもの、清樂中の妙曲、その他諸種の歌曲百餘種の曲譜の音符を挿入し尤も明瞭に説明せり

繪畫主任　武內桂舟君　編纂主任　江見水蔭君

征清畫談

毎月一回發兌
紙數一册百頁
毎巻密畫數十個挿入
洋装

毎巻に小川一眞氏製版の寫眞彫刻銅版畫を口繪とす

正價一册金八錢●六册前金四拾五錢●十二册前金八拾五錢●郵税一册壹錢五厘宛　代金は幼年雑誌の外に別途御送金を要す

征清の大戰は振古未曾有の大盛事也、日本歴史上の一大光輝也、世界歴史上の大壯觀也、之を傳ふる啻だ千秋の大史筆を要するのみならんや、又實に卓拔雄偉の畫なかる可らず。此の征清畫談は軍事畫美人畫の二技を以て當代無双の名手と稱せらるゝ武內桂舟氏獨力之に當り、丹精を凝らして加ふるに快奇勇壯の筆を以て世に知られし江見水蔭氏の記事を以てし、出師百端の準備、海陸の大戰、清韓兩國の光景等を描し、一幅の內千里懸軍の狀を收めて遺漏なし、實に當世得易からざるもの、又家々千秋の珍寶たるべし、

第壹巻

十月廿九日發兌

寫眞彫刻銅版目次

大日本皇帝陛下。朝鮮國王。清國皇帝。

第一軍司令長官陸軍大將　山縣有朋伯。　征清師團長陸軍中將　野津道貫君。

海軍々令部長海軍中將　樺山資紀君。　聯合艦隊司令長官海軍中將　伊東祐亨君。

大島少將平壤の役奮戰之圖（寫眞大判）

萬里の長城之圖。清國北京城之圖

（本編に十月改正の博文館圖書總目録七十頁を附載す）

◉本邦出版業空前の發刊高――第壹編(十六版)ヶ第七編迄印刷總高百廿八萬部

日清戰爭實記

第七編

十月廿九日發兌

我が征清の貔貅、第一軍は**鴨綠江**に迫り、第二軍は**旅順口**を壓す、此際內には帝國議會の大纛の下に集りて、戰功を頌し軍費を供するあり、外には井上伯の波渡し朝鮮世子の來朝し、韓廷の改革始めて成らんとするあり、局面は歩一步壯絕快絕の境に入る、這裡の眞相總て本編中に收む、殊に口繪に掲げたる**松島艦**卅二珊の**大砲**は、實に東洋第一の壯觀たり

本編寫眞銅版口繪目次

朝鮮派遣勅使文部大臣 **西園寺公望侯**

北京代理公使 **小村壽太郎君**

松島艦副艦長海軍少佐 **向山愼吉君**

法制局長官 **末松謙澄君**

外務省參事官 **本野一郎君**

清國**芝罘港之眞景**

東洋第一**松島艦大砲眞圖**並乘組將校之肖像(寫眞大判)

朝鮮仁川港全景並日本領事館、外國居留地月尾島遠望之景

◉**第八編**(十一月七日發兌)には奧陸軍少將、乃木陸軍少將、川村陸軍少將、壚屋陸軍少將及戰死將校の松崎陸軍大尉、永田海軍大尉、志摩海軍大尉、瀨ノ口海軍大尉、細井陸軍中尉、淺尾海軍少尉之肖像、**日本六鎭臺**(東京城、大坂城、名古屋城、仙臺城、廣島城、熊本城)**眞圖**、朝鮮釜山港之眞景を口繪に掲載すべし

定價 一冊八錢◉十二冊前金八十五錢◉廿四冊前金壹圓六拾錢◉三十六冊前金二圓三拾錢◉郵稅一冊一錢五厘但第一編に限り四錢

◉第六編は初版廿一萬部を賣盡し再版三萬部を增刷す。第七編廿三萬部印刷す

◉第一編ヨリ增刷出來取揃ヒ御注文ニ應スベシ◉

新案玩具

支那征伐雙六

博文館編輯局立案　富岡永洗君密畫

支那征伐雙六

石版極彩色摺
鮮明美麗
正價金貳拾五錢
豫約前金二拾錢　郵税四錢

●豫約期限十一月十五日迄（期限後は正價に復す）　十一月十日出版

支那征討は文明と野蠻との衝突にして、由來歐米の蔑視したりし東洋に一大生面を開き、大日本帝國富强の實勢を示し、國威を海外に宣揚し、朝鮮の獨立を鞏固にし、支那の頑夢を醒まして亞細亞大陸をして優に歐米と對峙せしむるに至るの一大關門なり、而して戰鬪中に於ける我が將士の忠勇智仁は萬世の下尚士氣を振興せしむるに足るべし、今その最後の大凱旋に至るまでの間特に重大なる事項を選び新奇妙案を凝して此雙六を製しぬ、之を家庭の戲玩に供しなば其の忠愛勇武の氣尚を皷舞して兒童を裨益せんこと至大なるべし

支那征伐雙六

圖書出版
東京博文館

1-18號
3720.
1861